士幌のあゆみ 開町100年

士幌町

町の木／カシワ

町の花／スズラン

町の鳥／カッコウ

町　民　憲　章

昭和46年７月31日
告示第34号
改正　昭和62年12月22日　告示第86号

澄みわたった空、秀麗なヌプカの山なみ、緑の牧場、
豊かな自然に恵まれた、わたしたちのまち、士幌
風雪百年、たくましい先人の開拓魂が、
きづきあげた　わたしたちのまち士幌
わたしたちは
美しい自然と先人の偉業をうけつぎ　しあわせと
愛の心に満ちた士幌町の輝く未来を開くために
この憲章を定めます

1　先人の開拓魂に学び　たくましく前進する町をつくりましょう
1　たがいに助けあい　心をあわせて愛にみちた町をつくりましょう
1　健康で生産にはげみ　豊かな町をつくりましょう
1　教養を高め　文化の創造につとめ　うるおいのある町をつくりましょう
1　美しい自然を愛し　きまりを守り　住みよい町をつくりましょう

令和４年３月刊行

SHIHORO

100th Anniversary

100周年　夢拓き　大地と生きる　士幌町

士幌町役場

2021(令和3)年11月30日　開町100年記念碑

SHIHORO
100th Anniversary

士幌市街

SHIHORO

NAKASHIHORO

中士幌市街

1921(大正10)年11月
川上村第一期村議会議員と役場職員

1903(明治36)年
中士幌簡易教育所(現在の中士幌小学校)

1916(大正5)年　居辺駅逓所

1925(大正14)年建築
川上村(士幌村)役場

1925(大正14)年頃の士幌市街

1933(昭和８) 年
忠魂碑の建立

1931(昭和６) 年頃　消防出初式

1939(昭和14) 年
士幌小学校運動会

1938(昭和13) 年頃
出征兵士見送り街頭行

1936(昭和11) 年　集乳所の落成

1950(昭和25) 年
川西中学校

1944(昭和19) 年頃
援農学生のえん麦脱穀

1950(昭和25) 年
士幌村役場

1945(昭和20) 年頃
馬鈴しょの収穫作業

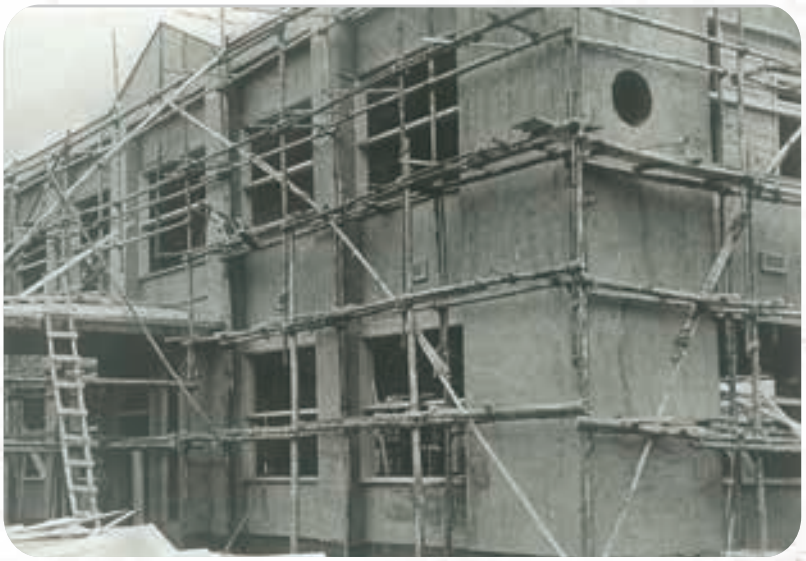
1951(昭和26) 年　士幌村に初のダンプカー導入

1958(昭和33) 年　皇太子殿下(現　上皇陛下) でん粉工場ご見学

1960(昭和35) 年
消防会館建設期成会

1953(昭和28) 年　士幌新橋

1960(昭和35) 年頃　新田地区の開拓(機械伐根)



1953(昭和28) 年　士幌村役場新築

1962(昭和37) 年
町制施行祝賀パレード

1969(昭和44) 年
町立病院、初の通院バス

1965(昭和40) 年
士幌小学校プール開き

1964(昭和39) 年6月
集中豪雨　更正橋の消失

1936(昭和11) 年頃から1975(昭和50) 年頃まで
使用されていた手動計算機

1980(昭和55) 年
工事中の役場庁舎とコミュニティーセンター

1971(昭和46) 年　全道青年大会

1971(昭和46) 年
町有バスの運行開始

1971(昭和46) 年８月
開基 (町)50周年記念式典

1981(昭和56)年
開基(町)60周年記念アーチ

1989(平成元)年　ピア21しほろオープン

1987(昭和62)年3月23日
国鉄士幌線廃止

1981(昭和56)年
町民文芸誌ぬぷか創刊

1981(昭和56)11月
町民憲章碑の建立

1985(昭和60)年
コンピューター導入

1981(昭和56)年11月
開基(町)60周年記念式典

1991(平成３)年５月　士幌物語クランクイン

1991(平成３)年４月
しほろのイメージキャラクター決定

1994(平成６)年４月30日
岐阜県美濃市と姉妹都市提携調印式

1991(平成３)年11月15日　タイムカプセル埋設式

1991(平成３)年頃
士幌小学校のしだれ柳

1993(平成５)年７月
市街発祥の地記念碑

1991(平成３)年７月
開基(町)70周年記念24時間町民ソフトボール大会

1996(平成８)年４月
士幌で初めての４階建てタウンプラザオープン

2004(平成16)年2月
士幌町中央中学校女子スケート部
全国制覇

2009(平成21)年8月
マイマイガが全町的に異常発生

2005(平成17)年7月
よしもとお笑いライブ
in shihoro

2008(平成20)年11月
北中音更小学校開校100年記念
祝賀会

2020(令和２) 年４月
士幌町中央中学校入学式

2014(平成26) 年４月
コミュニティバス運行開始

2018(平成30) 年８月
士幌町開拓120周年記念
平昌オリンピックメダリスト
高木美帆トークショー

2020(令和２) 年９月
子育て世代包括支援センター
「マミールーム Yosuga」オープン
(愛称命名者の小野寺早央里さん、写真中央)

2017(平成29) 年４月　新道の駅「ピア21しほろ」グランドオープン

2014(平成26) 年５月25日
第１回士幌町100年の
森づくり町民植樹祭

2021(令和3)年8月14日
タイムカプセル開缶式

2021(令和3)年10月17日
士幌町100年の森づくり看板除幕式

2021(令和3)年8月9日
開町100周年記念パークゴルフ大会

2021(令和3)年4月
下水終末処理場稼働開始

2021(令和3)年7月27日　北海道日本ハムファイターズ
「北海道179市町村応援大使事業」野球教室

開町100周年記念式典 2021（令和３）年 11月30日

オープニング映像

力強い太鼓演奏を披露した士幌高原太鼓愛好会

名誉町民表彰（鈴木洋一さん）

名誉町民表彰（中島康夫さん）

開町100年記念碑除幕式 2021（令和３）年 11月30日

ご寄付をいただいた
小椋卓さん

春

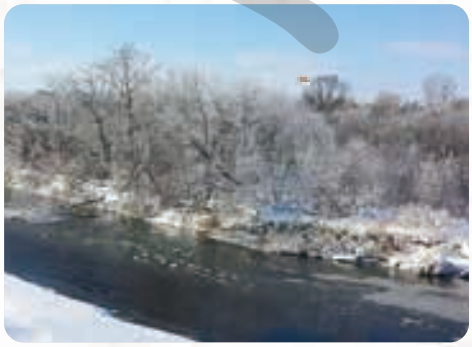
夏

2021 秋・冬

100th Anniversary

秋

冬



1921 大正10年
▸2021 令和3年

発刊のことば

士幌町長 髙木康弘

このたび開町１００周年を記念して「士幌のあゆみ　開町１００年」を発刊することとなりました。

士幌町の歴史は、明治31年岐阜県美濃開墾合資会社の移民団43戸により、初めて開拓の鍬が下ろされました。その後、大正10年音更村から分村し川上村となり、大正15年士幌村に改称、昭和６年上士幌村と分村、昭和37年の町制施行を経て、現在に至っております。

士幌町では、これまでに「士幌村史」、「士幌のあゆみ」、「続　士幌のあゆみ」の３冊の記念誌を発刊しており、今回は平成４年以来30年ぶりの発刊となります。

この開町１００周年を機にこれまでの歴史を顧みながら、先人のフロンティア精神を継承しつつ、全ての町民の英知を結集して開町２世紀に向けた新しい町づくりを推進するため、町民の貴重な共有財産となるよう思いを込めて制作したものであります。

記念誌の完成を目前にした令和４年１月27日、小林康雄町長がご逝去されました。６期24年の長きにわたり、本町の町づくりにご貢献を賜り深く感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

本書の発刊にご尽力いただきました関係各位に、深い感謝とお礼を申し上げ、発刊のことばといたします。

小林 康雄（こばやし やすお） さん

2022年（令和４年）１月27日㈭ 死去　（満71歳）

1950年、士幌町生まれ。上士幌高校、自治大学校修了。
1969年に町役場入りし、農林課や企画課などを経て94年から企画調整室長。98年、新人同士の一騎打ちを制し初当選を果たした。2002年、06年、10年、14年はいずれも無投票で当選。
09年からは十勝町村会副会長も務める。

100周年 夢拓き 大地と生きる 士幌町

士幌のあゆみ　発刊のごあいさつ

士幌町議会議長　秋　間　紘　一

このたび士幌町　開町１００周年を記念して「士幌のあゆみ　開町１００年」が発刊されますことを心からお祝い申し上げます。

町史の発刊は、開町70周年を記念して作成された「続士幌のあゆみ」以来のことです。

かえりみますと、この30年間は、少子高齢化が急速に進む社会情勢のなか、町民の皆さまが一丸となって「まちづくり」にとりくまれ、基軸である農業を中心とした産業や経済、そして、教育や福祉、文化など様々な分野で士幌町が大きな躍進を遂げた期間でした。

この度、作成された本誌を読み進めると、あらためて郷土の歴史の重みを感じ、先人達の心意気がひしひしと伝わってまいります。

また、士幌町の大地に、ユートピアの実現を志した歴史は、私たちが未来へ向けて飛躍するための指南書となるものと確信しております。

最後になりますが「士幌のあゆみ　開町１００年」の資料収集や編さんにご協力をいただいた委員の皆さま、ご意見や資料をお寄せいただいた方々に感謝を申し上げますとともに、本書が、広く町民の皆さまに愛読されますことを期待いたしまして発刊のごあいさつといたします。

【士幌町100周年記念】

目 次

グラビア
発刊のことば『士幌町長 髙木 康弘 』『士幌町議会議長 秋間 紘一』
目　次

第一編　前　史 …… 1

第一章　自然環境…… 2
第二章　入植者たち…… 4
第三章　入植始まる…… 8
第四章　新村誕生…… 14
第五章　非常時から戦後まで…… 24
第六章　新しい町…… 40

第二編　社会と生活 …… 49

第一章　行　政…… 50
第二章　保健と医療…… 72
第三章　福　祉…… 82
第四章　生活環境…… 100
第五章　住民生活…… 106

第三編　農林業 …… 125

第一章　農　業…… 126
第二章　農協と団体…… 144
第三章　林業と内水面漁業…… 152

第四編　商工と建設 …… 155

第一章　商工業…… 156
第二章　観　光…… 164
第三章　建設と交通…… 176

第五編　教育と文化 …… 185

第一章　教　育…… 186
第二章　社会教育…… 210
第三章　文　化…… 226

第六編　地域余話 …… 239

第一章　地区の 30 年 …… 240
第二章　町の話題・こぼれ話…… 252

第七編　資　料 …… 263

第八編　年　表 …… 271

編集後記…… 306

INDEX

SHIHORO 100th ANNIVERSARY

第一編　前史

SHIHORO

100th Anniversary

第一章　自然環境

1、地理

位置と地勢

十勝平野の北に美しい姿を見せる東ヌプカウシヌプリを西北に据え、遠く大雪山系に源を発する音更川と多くの支流、居辺川、士幌川などの清流によって何万年もの昔から培われて来た大地、それが私たちの士幌町である。

士幌町の面積の内約80パーセントが標高４００メートル以下、傾斜０度から３度以内の土地で占め、十勝管内各町村の中では更別、幕別、音更に次いで平たん地率が大きく、耕地率の高い代表的な畑作農村が形成されている。

東ヌプカウシと豆ニオ積み

地質と土壌

士幌町の地質は主に中央部は上士幌礫層、東部は北居辺礫層と居辺山層、西部は然別熱雲および泥流堆積物、光地園礫層からなっている。

また、土壌は火山性土が主で、一部沖積土、泥炭となっている。

※続士幌のあゆみには、下居辺地区での温泉試掘、士幌地区での水耕栽培熱源用試掘の泉源掘削土層図、１９８１年(昭和56年)北大地学部松井教授が中心となって編集した十勝平野地質図、１９７０年(昭和45年)北海道立中央農業試験場によって地力保全基本調査成績が報告され、それを基礎として士幌町土壌型区分図が掲載されている。

2、自然

気象

十勝の春は日照時間が多く、気温上昇と乾燥、強風の季節であり播種・移植後の農作物に被害をもたらすことも多い。夏には平均気温が20度前後で、最高気温が30度を超える日もある。秋には一般に晴天が多く、早霜は農作物への影響も多く、収穫の秋の関心事となる。冬型の気圧配置になると晴天(通称十勝晴れ)が続き、日照時間も長い。このため、厳寒期の冷え込みは厳しく、所によってはマイナス30度以下まで下がる日もある。降雪量は一般的に少ない。

士幌町の中でも新田地区は士幌地区との標高差が１００メートルあり気象の差が肌で実感でき、特に真夏の暑い時期には士幌高原ヌプカの里でその気温の差を感じる。桜の開花も中士幌地区で帯広よりも３日程度遅く、士幌地区では更に１日程度遅い。

植物

町の木であるカシワは町内全域にわたって開拓当時から最も多く繁茂し、郷土

の代表的な樹木で昭和52年には、町の木をカシワ、花をスズラン、鳥はカッコウと決めた。

開墾前の当時の自然については、1891年(明治24年)に北海道庁が調べた「北海道植民地選定報文」に詳しく記されている。

〈植物〉

高丘はカシワの純林で密なところは一反歩(10アール)15株、まばらなところは僅かに4～5株の比例である。そして密な所は高台の両端にあり、まばらなところはその中央にある。下草は一般に、カヤ・ハギ・ワラビ・ヨモギ・カラマツソウなどで他の高台地と変りはない。

町の木　カシワ林

樹林地はすなわち雑林で、ヤチダモ・アカダモ・ヤナギ・ドロ・ハンノキ類が生長し中でも多いのは、ドロ・ハンノキ・ヤナギである。一反歩当り大小およそ30～40株の割合で巨樹は少ない。樹下にはナナツバ・ヨモギ・小アザミ・フキが雑生しているがその生長はよくない。草原地はカヤ・ハギ・ワラビ・カラマツソウ・ヨモギの類で生長が大変よろしい。ただ高丘の草原地ではカヤ・ハギの生長が甚だ悪い。(一部抜粋)

古老たちの談話を総合すると開墾前の土幌の姿は、音更川、居辺川をはじめ小河川などと、居辺沢は樹林地で大木に覆われ、一方高台地にはカシワの大木が生えており、上居辺、実勝、南土幌などでは、カシワが密生しているところが多かった。竹腰昇の手記によれば今の土幌市街付近はとくに密生し、百間(180メートル)先を見通すことが困難であった。

当時5町歩で500本から700本カシワが立っていると150間くらいしか見通しがきかなかったという。その他の高台乾燥地では立木がまばらで草原をなしているところが多かった。佐倉・上居辺・中音更などの湿地帯は「ヤチ功主」原でハンノキなどが繁り、スゲヨシ・ハギ・トリカブト・ヤチゼンマイなどが生長していた。

町の花として親しまれたスズランは高台乾燥地など一面を埋めているところもあったが、近年では植生の変化で見かけることが少なくなった。

動物類

時おり出没して人里を騒がせていたヒグマは1988年(昭和63年)10月新田第一、1989年(平成元年)上居辺で各1頭捕獲した。開拓期によく見られたキタキツネがいつの間にか繁殖して、ごく普通に路上や市街地の中でも姿を見せることがある。絶滅したと思われていたエゾリスがゴヨウマツの林などで時々見かけられる。

新田で熊を捕獲

エゾシカが農作物を荒すことが増え、ビート苗、小麦、豆畑などの被害に悩まされている。

庭先や林地で確認される小鳥には、ニュウナイスズメ・ヒバリ・シジュウカラ・ゴジュウカラ・ハシボソカラス・ドバト・ハシブトカラス・ヤマバト・ハクセキレイ・セグロセキレイ・ノゴマ・ノビタキ・アカハラ・エゾセンニュウ・コヨシキリ・キビタキ・エナガ・ホシロ・ヒヨドリ・シメ・クロツグミ・コムクドリ・ムクドリ・キレンジャク・アカゲラ・アオジ・カワラヒワ・コゲラ・トビ・ミヤマカケス・カッコウ・ウグイス・マガモ・フクロウ・イワツバメ・モズなどがあり夏の草原を騒々しくかけめぐったオオジシギは、少なくなった。アオサギが養魚池におり立つこともある。

川魚ではサケ・マスが音更川をはじめ居辺川各支流までにも群がって遡上し、我れ先にと獲った話はよく古老に聞かされたが、1935年(昭和10年)十勝川に千代田土功組合えん堤が造られ遡上が阻まれて以来めっきり減り、戦後は全く見られなくなった。大小の河川ではヤマベが四季を通して釣り人を楽しませたが、糠平ダム、河川の改修でまれにしか見られず、昔の子どもたちの思い出に残ったカジカ・ドジョウ・ザリガニも奥地の小河川にわずか生息が認められるだけとなった。

第二章　入植者たち

1、先住民

古遺跡とアイヌの人たち

１９６７年(昭和42年)に発見された上士幌市街東高台の嶋木遺跡と、１９８３年(昭和58年)緊急発掘調査が行われた居辺川上流の居辺遺跡は、大がかりな学術調査により一万数千年も前の住居跡との報告がなされ、嶋木遺跡については今も調査が続けられている。両遺跡とも当町域とは2、3キロをへだてているだけなので一帯には縄文時代当時から、古代人の文化が開けていたものと考えられる。

ソ連学者と共に上士幌嶋木遺跡調査

十勝に和人入植が始まる前の１８５５年(安政2年)の調べで、音更川沿に13戸74人が住んでいた。１８９８年(明治31年)美濃開墾合資会社が始めて入植した当時、中士幌幹線15号付近にアイヌのコタン(集落)があり、しゅう長はコワイヌといい、イタツキ、イベリ、キキアシという人びとがいた(小椋国蔵談)、１９０７年(明治40年)奥田儀平は中音更の下台のアイヌの給与地を買って入地し住居もアイヌの小屋へ入った。当時近くにアイヌが4～5戸あって子どもが一緒に学校へ通っていたが2、3年で音更のコタンに移った(北川さくえ談)。

東泉園で復元した丸木船

１９０５年(明治38年)頃、居辺川のふちにアイヌの入った拝み小屋(三角小屋)がところどころにあった(下居辺小学校記念誌)、以上のようにアイヌは音更川や居辺川沿に点々と住居し、あるいはコタンを形成していたが魚や食物を求めて移動していたものと思われる。北海道庁はアイヌの人たちに農業の知識を与え、生活の困窮を救うとともに将来独立自営の道を見い出させようという計画で、１８８７年、１８８８年(明治20、21年)にかけ下音更(現よつ葉乳業南付近)約１００町歩に各地に散在していた人たちを集め、宮崎濁卑、渡辺勝らをして本格的な農耕指導に当らせた。移住した人の多くは河東郡各地、なかでも上士幌方面からであったといわれる。

アイヌの人たちの生活を保護し農業を勧め、教育をするため１８９９年(明治32年)北海道旧土人保護法が施行になり給与地が与え

られた。
　前記のように当町域中音更にも給与地があったものと思われる。音更川ぶち西岸上音更45号付近(上士幌町域)に古くからコタンがあり、給与地となった大正初期には10戸程度が居住していたこともあり、現在ウタリ文化を大切に伝承し復興に務めている東泉園(川上英幸)がある。

地名と伝説

　士幌町内のアイヌ語による多くの古地名の語源については、学者によっていろいろに解釈されており、意味不詳とされているものもあるが、主なものを探ってみよう。
▽ヌプカウシヌプリ＝草原にいつもいる山の意(更科)
　伝説＝昔、阿寒の山は女山で幌尻岳と夫婦であった。夫婦げんかをして釧路へ帰りがけにヌプカウシヌプリが仲裁をしようと話をしていると幌尻岳がやきもちをやいて、2人をめがけて槍(やり)を投げつけた。それがオプシタテシケ山をかすって飛んできてヌプカウシヌプリに当りそうになった。ヌプカウシが逃げ出したが片方の耳を槍でとばされてしまった。士幌や然別にある大石はヌプカウシヌプリの耳が壊れてとんだものだ。ヌプカウシが元々立っていたところが然別湖になった。この山は阿寒の山を助けた偉い山だから音更では、酒をあげてあがめている。(音更竹内老伝)(アイヌ)
▽シュウホロ(士幌)＝鍋(なべ)川の意があるという。(永田)
　伝説＝ある年、現在の佐倉地区付近の士幌川のふちに切り取り無頼の徒が住みついて、住民の生活がおびやかされていた。その年は凶作で山の木や草の実が稔らず、川魚もとれなかった。飢えに耐えかねて無頼の徒たちは「シュウウォロー」と叫んで、煮るものもない鍋を川の中に投げ捨てどこかへ立ち去った。飢えながら死んでいくことを悲しんで「オルベレレー・オルベレレー」と声を上げて泣いた。「士幌」と「居辺」の地名の由来である。(十勝)
　サックシュオリベツ川は、サックシュウウオロベツ(川)で同じ語源から出たものと思われる。
(別にシ・ホルカ・ベツ＝あと戻りする川の本流と解釈している本(更科)もあるが、吉田東伍大日本地名辞典では朱於留(シュオル)をなまって士幌となったと書いてある)
▽オトプケ(音更)川＝髪の毛が風に吹き乱される様子ということで支流の多いさまをいう。
▽ウオップ川＝〝やり〟または〝もり〟の柄の意味
▽オルベ＝丘の処と解されるがよく判らない(永田)
▽パンケチン川＝下の獣皮を乾かす処の意・ベンケチンは上の獣皮を乾かす処。
▽ワッカクンネップ川(下居辺地区)＝水の黒い川(更科)
▽イショッポ(下居辺地区)＝うさぎと解される(更科)
▽アマラ川(中士幌地区を流れて上音更川へ入る小川)＝低地を寝そべっている川の意といわれている。
▽タンネヌップ(百戸方面の音更川に沿った地区)＝細長い草原
▽パラメム川(西上音更地域の小川)＝広いうず巻のある川(山本)
▽オピチャペツ川(中音更地域の小川)＝川尻の口が数条に分かれている川。
▽シュルクウニペツ＝シュルクニ川。トリカブト(矢じりに塗る毒草)のある所・川(山本)
▽メメム原野(音更川東岸に沿った広い原野)＝メムム川(中士幌下台の小川)コッタメム(音更川西下台の小川)メムは泉の湧く小池(山本)
▽タプコプ＝小さい丘
▽チャシコツ＝チャシ(とりで)のあと
▽ポロビバウシ・ポンビバウシ＝ビバウシはカラス貝のたくさんある所(更科)
▽シペオチ ▽イコッポ
▽チライオツナイ＝イトウ(魚)川
▽ラウンペツ＝深い川
▽イッパラマナイ川
▽ケナシケソマナイ＝ケナシは、ばけものなどが住んでいる川渕をいうことが多い(更科)
▽アンシュウペツ ▽オコシュペツホ
※注(永田)永田芳正「北海道地名解」・(更科)更科源蔵「アイヌ語地名解」・(山本)山本多助「オッパイ山」・(アイヌ)アイヌ伝説日本・(十勝)十勝のアイヌ伝説

2、探検者

十勝日誌とシホロ

　いま十勝の銘菓として売られている「十勝日誌」は幕末の北方探検家松浦武四郎が十勝内陸を探検して出版した本の表紙をそのまま外箱にデザインしたものである。1858年(安政5年)武四郎は幕府御雇として6回目の蝦夷地内陸の探検を行った。
　石狩から山越えて十勝に入り、十勝川を下り3月16日オベリペレフ(帯広)に泊り川を下って大津・厚内・白糠を経て常呂・石狩を廻り日高に至り、歴舟川口を通り7月15日再び音更川河口の惣乙名(そうおとな～土地の長老)シラサリヤの

家に1泊した。もしいつの日かこの川筋の開拓が進んだとき、この場所は舟運・馬道などに便利で中心地となるであろうと思い、家の柱に〝このあたり馬の車のみつぎもの御蔵を立ててつまままほしけれ〟との歌を書き残した。果して後日この地は帯広市として十勝の中心を成し発展を遂げた。探検家のすぐれた先見性に敬服のほかはない。この歌は帯広市を見下ろす音更町鈴蘭公園の碑石に刻まれている。

武四郎はアイヌの長老たちを集め奥地の地名川筋などを聞きとり克明に図面に記録し、その中に「オトフケ川」「アマラ川」「シホロ川」の名も見える。「十勝」「河東郡」「北海道」などの地名はすべて武四郎の意見によってつけられた。シホロが漢字で表記されたのは、1871年(明治4年)河東郡ほか3つの郡が静岡県の管轄であったとき勤務を命ぜられていた白野夏雲が、アイヌ語の地名を調べ穏当な文字を付するということで多くの地名に漢字を当て、報告した中にあるもので(シュホロ川筋)シュホロブト(士幌)と書かれたのが初めてであった。

ライマン・松本大判官の踏査

開拓使雇教師で採鉱技術者のアメリカ人ベンジャミン・スミス・ライマンは、1874年(明治7年)未開の北海道内陸調査の中で石狩地方から十勝川上流に出るつもりが、誤って音更川の上流に姿を現したのは同年7月であった。一行50人による全日程75日の探査の経過が日誌に詳しく記され、音更川筋について学者の観察が残された。

旧長沢温泉ユーナイに一戸の住家があり、びょうぶ岩付近と思われる地で野営しスルコナイ(勢多付近)で3軒の家があり、野営し翌日難行疲労し、ようやく十勝川畔サツナイブトに達した。音更川筋では13戸ほどの人家を見ている。

ライマンが通ってから2年後の1876年(明治9年)6月末、開拓使大判官松本十郎が同じようなコースで石狩川の水源をきわめ、音更川の上流へ出て三股付近から川筋を下り滝の激流をマスが躍って登るのを見て、上音更コタンの辺りと思われるところに1泊・現士幌町域に入りオビチャベツ村乙名(おとな・長老)フシアンテの家で休憩・湿地を横切りパンケチン川(ウリマク付近と思われる)に到着・猟師の小屋に1泊し翌日は十勝川に出て屈足に到着した。現在の士幌町域を通るとき数百、数十頭の鹿が走り去るのを見た。松本十郎は硬骨の熱血漢で文章の各所にアイヌの生活に同情を寄せている。普段アイヌの着衣アツシを着たのでアツシ判官と呼ばれた快男児であった。

ライマン・松本両名の記録は士幌町域の姿を描いたものとして興味深い。

3、十勝・音更の入植

鹿とトノサマバッタ

アイヌの人たちが自由に魚獲や狩猟で駆け巡っていた広い十勝内陸の山野は、石狩、空知方面に和人入植が進んでもしばらく手がつけられなかった。1880年(明治13年)十勝で大発生したトノサマバッタの大群が、日高山脈を越え日高、石狩、胆振地方を襲い農作物に大被害をもたらし1885年(明治18年)までの6年間続いた。

事の重大さに政府は十勝の原野を調査し、バッタの産卵地を発見、アイヌなど150人を動員しサナギを掘り取り産卵地を掘り返す作業を行った。掘り出した卵塊や成虫や幼虫を捕殺し積み上げ土を盛った塚が、バッタ塚として十勝川沿い、豊田、上士幌の北門にも近年まで残されていた。1884年(明治17年)「蝗(イナゴ)捕獲表・志保路出張」という野帳が残されている。図らずもトノサマバッタの駆除により無人に近い十勝平野の広大な開拓適地が役人の報告により明らかになり、開拓使では直ちに東部北海道一帯の開発調査を命じたのであった。

石狩方面の開拓が進むと、えさを失った鹿が十勝へ集まるようになり前記、1876年(明治9年)松本十郎の探検で現上士幌・士幌町域通過のとき何百という鹿の大群に出会っている。1880年(明治13年)に、それまで十勝の権利を独占していた十勝組合が解散して自由になると鹿を追った猟師、アイヌ、鹿皮と日用品を交易する商人がドッと入って来てその数1000人ともいわれた。1880年(明治13年)、十勝から出荷したのが鹿の皮1万枚、鹿の角1万2000キログラムというからその量の多さに驚く。ところが1882年(明治15年)、十勝は大雪に見舞われ、鹿は行動ができず、えさも採れず絶滅に近くなり、さしもの猟師、鹿商人たちは一挙に仕事がなくなり四散したが、中には利別川あたりの地の利を見て農耕を始めるものがいた。士幌町で最も早く開墾をしたといわれる坂本八重作がその内の一人であった。

鹿を追って十勝の隅ずみにまでもかけ巡った人たちによって、十勝が注目され全国に宣伝された。

音更最初の入植となった大川宇八郎がアイヌを相手に行商し定住したのが、1879年(明治12年)であった。十勝開拓の礎を築いた晩成社(副社長　依田勉三)一行が下帯広に入地したのは、1883年(明治16年)5月である。

植民地選定

前記、バッタ駆除によって有望な開拓適地が発見され、1881年(明治14年)開拓使御用係、田内捨六、内田瀞、両名が派遣され、道東一帯の開発調査が行われ、「日高、十勝、釧路、北見、根室巡回報告書」が提出された。そのなかで「総シテ十勝全国ハ林野草野、彼此相半バシ、恰(あたか)も天造ノ大ナル牧場ノ如シ」。「西北ニ高山アリテ北風ヲ防ギ雨雪ヲ減ズルヲ以テ土地高燥、気候温和、牧草甘味ニシテ最モ水利ニ富ム。ケダシ本道十一州中、最も牧畜ニ適シタル所ナラン」とし農耕適地13億坪、牧草にして120万頭の牛が飼えるとし開拓には石狩原野よりもはるかに、十勝地方が上位であると訴え道路開設の要を力説した。報告書の中に現在の士幌地域については、「ビリベツ川と音更川の間に一大広原をなし、冬期温暖積雪少なく冬は鹿が群集するのでかつては十勝、釧路のアイヌが此地を争って血を流したこともある地味肥えて牧畜に最良の土地だ」と書いている。

十勝では43原野、29万町歩の植民地が選定され、各原野について地理、利用目的別面積、土壌、植物、交通について詳述された。

報文の中で現在の士幌町域に関係する原野各区分は上シホロ原野(上居辺、佐倉、上士幌分)アマラ原野(南士幌、瑞穂、豊進、音更分)下シホロ原野(佐倉南部、あと音更分)、ウヲップ原野(川西地区)、メメム原野(士幌北、南、上士幌分・音更分にまたがる)で下居辺地域はまだ選定されていなかった。

植民地区画

植民地選定に引き続いて道庁は、1892年(明治25年)6月から帯広を起点として順次、十勝原野の植民区画に着手した。区画は150間(272・7メートル)100間、1万5100坪(5町歩)～約4・96ヘクタールの小区画をもって1戸分とし、これの6戸分即ち300間4方、30町歩をもって中区画となし、さらに中区画6区画で大区画とし、中区画ごとに6間幅(基線、幹線は8間)の予定道路を存置した。区画が終わって一般に貸付を開始するときは、北海道殖民地広報に公示し支庁に図面を備え付け殖民区画図として印刷し市販もされた。植民地は順次区画され、増画が行われた。現在の士幌町域可耕地の土地区画の大部分が、1908年(明治41年)頃までにほぼ形つくられた。

音更村役場の設置

蝦夷(えぞ)が「北海道」と改められ11国86郡の行政区画が定められたのは、1869年(明治2年)8月であった。そのとき十勝国、河東郡といった命名は松浦武四郎の案によったといわれる。1886年(明治19年)1月、北海道庁が置かれ、翌年十勝は釧路郡役所の所轄となり、1893年(明治26年)6月、下帯広村に河西外2郡(河東・上川)の各村戸長役場が置かれた。1897年(明治30年)4月、河西外6郡役所が釧路から分離して十勝一国を管轄することになり、同年11月支庁制となり河西支庁が誕生し、帯広が行政の中心地となった。河西支庁が十勝支庁と改称されたのは1932年(昭和7年)8月であった。

戸長役場は、町村役場が置かれるまでの間置かれた制度で統治の末端行政を扱った。1900年(明治33年)7月、河西外2郡各村戸長役場から河西郡7村が分離し、河東郡3村は翌年10月独立、音更村外2村戸長役場が音更に開庁した。士幌は音更村の区域内に含まれ、外2村とは然別、東士狩である。最初の役場仮庁舎位置は、現在国道241号音更市街南の入口付近に史蹟として標示されている。

音更が然別、東士狩の両村と凋寒村、蝶多村の一部を合わせて村名を「音更村」とし二級村制を施工したのは、1906年(明治39年)4月1日、初代村長和知金次郎、役場吏員4人、発足時村の人口3445人であった。その頃の東の村界はサックシュオリベツ川でそれ以東は中川郡凋寒村(大正2年から川合村)であった。

河西支庁(明治30年)

第三章　入植始まる

1、開墾の初め

未開地の処分

道庁は１８９２年（明治25年）から、十勝地方の植民区画に着手し、一方、大津、広尾街道など主要道路の整備、函館、大津間航路の開通、十勝測候所、北海道集治監十勝分監、十勝農業試作場そして河西支庁の開設など、入植者の受入準備を進めてきた。道庁は秩序のある拓殖事業を進めるため、一般には十勝地方の植民地貸付を停止しており、それまでの開拓は無願開墾とされていた。１８９６年（明治29年）を迎えるといよいよ十勝地方の植民地貸付を解除した。時あたかも、日清戦争直後で国民の意気が上がっていて、北海道の富源はようやく世に知らされてきた。人々は争って土地貸付を願い、10万町歩に及ぶ予定地はたちまち処分し尽くされた。植民地選定区域計画は、毎年行われたが、翌年３月からは従来の土地払い下げ規則に代わって新しく、国有未開地処分法が制定になり成功後無償付与とし、資本家の大農場経営を容易にし一般独立移民の土地取得の負担をも軽減しようとした。

移住民の函館上陸

一方、府県からの移民奨励策として、30名以上の団体を結成すれば貸付停止中の区画でも予定地として存置することとし、移住民の汽車賃、舟賃５割引などの恩典もあった。

植民地貸付解除と新制度によって各地に大農場ができ、移民たちは川づたいに貸付地に入り十勝の大地は千古の密林を伐り倒す音がこだまし、樹木を集め笹を刈って焼き払う炎は、昼夜を分かたず燃え続けた。

美濃開墾合資会社

十勝の植民地貸付が開始になると各地で集団入植が始まり、音更川沿に１８９７年（明治30年）木野村農場（木野）、武儀団体（武儀）が入った。本町入植のさきがけとなった美濃開墾合資会社は、１８９６年（明治29年）岐阜県本巣郡、堀口庸五郎ほか15人の資本家によって組織された。全国的に北海道開拓への投資熱が燃え上がっていたといえよう。

岐阜県では大震災と水害の頻発に加えて零細農家が多く、北海道へ行って広い

小椋忠左衛門

土地を求め、ひと旗上げようという気慨が盛り上がっていた。また河西支庁ができる前の１８９４年(明治27年)新設の道庁殖民課十勝派出所主任に岐阜県出身の鷲見邦司が着任し、郷里からの入植を勧誘していたので初期岐阜県からの入植が多かったといわれる。当時北海道へ移住するのに旅費だけでもひとり7円50銭かかり、支度賃と初年度の食糧など相当の費用を用意しなければならず、一般の零細の家庭では自ら賄いできなかったので資本家による農場経営の小作が多かった。

美濃開墾合資会社では、１８９６年(明治29年)会社代表と小作人代表、小椋忠左衛門ら４人が現地調査のため渡道し、十勝の各所を２か月にわたって視察、中士幌幹線９号以北21号までの約３７５町歩を開墾適地と選定して帰国した。会社は揖斐、本巣両郡から移民希望者を募集し、結局63戸約２６０人が集まった。移民団一行は、１８９８年(明治31年)３月郷里を出発、横浜港から海路函館に至り船を乗り代えて十勝の入口に当る大津港に上陸したのはまだ雪のある季節であった。馬そりに荷物や女・子どもを乗せあとのものは徒歩で途中２泊し、帯広に着いたのは3月3日であった。南広でケネ中島(芽室)へ入植する20戸と別れ、男たちだけで中士幌の現地へ入ったのは3月18日であった。

入植する現地には浦幌の下野松太郎によって着手小屋が、20戸ほど用意されていたのでそこに入り、居小屋の準備をして帯広へ預けていた女・子どもたちが現地入りしたのは十数日後であった。１８９８年(明治31年)道庁の河野常吉の「十勝国調査材料」によれば、一行の中には函館で引率者が金を持って逃げたこともあり、大津で散乱するものも多く、また現地が不便で募集したときと話が違うといって逃亡するものが出て、中士幌に残っているのはおよそ30戸であった。

入植地は樹林地帯で大木が生い繁り、入植者は鍬や斧を振って立木に向い荒地を耕し、最初の蒔付はイナキビ、馬鈴しょを主としそれに菜豆(テナシ中長)、大豆、蔬菜などであった。

入植初年の１８９８年(明治31年)全道的な大洪水で中士幌下台は一面湖となってせっかくの作物が大きな被害を受けたが入植者はよく耐えて出来秋を迎えた。

美濃開墾合資会社の小作開墾約定では、①明治31年から2年間は地料を徴収しない②小作人は明治35年までの5年間に引受地を開墾すること、開墾できなかった土地は会社で処置する③5年後に墾成した土地を測ってその2割を小作人の所有とし8割を会社の所有とする(実際には半分分けの開き分けとなった)④会社の所有となった土地については一反歩につき樹林地2円、草原地1円以内の開懇料を小作人に支払う⑤小作料は3年目から一反歩につき50銭を徴する(明治44年の書類では大豆で納入することになっている)⑥その他品行について罰則などが決められていた。

入植初年度だけは主食として麦、イナキビ、ソバ、馬鈴しょなどが会社から支給された。米は産婦と病人だけで、産婦は米1升(1・8リットル)であった。南に隣接していた武儀団体は1年早く入植していたが何も食べるものがなく困っていたので、小椋忠左衛門はこっそりと会社から支給された麦やみそなどを持って行って分け合って生きつないだこともあった。

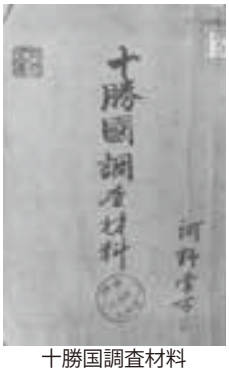
美濃開墾合資会社が入植する以前、帯広に出来た十勝分監の囚人たちが音更川奥地の元小屋で木材伐採作業を開始しており、川沿には馬や囚人たちの刈り分け道路がついており、明治末期には百戸分方面にも入植が増えると合資会社は寺を中心として日用品店、宿、食堂などが出来て小さな街を形づくり寺町といわれた。

中士幌地区では、１９１０年頃(明治末期)になると、下台が先進地域として完成し高台へと開墾が拡大していった。

川上村の分村は、鉄道中士幌駅の高台移転によって、中士幌下台の音更川中流地域の中核的機能は士幌市街と高台の中士幌市街へ移し去った。

士幌で初めての開墾、下居辺

中士幌下台への美濃開墾合資会社入植よりも４年前の１８９４年(明治27年)頃、下居辺で開墾が行われていた。北海道庁事業手河野常吉の「十勝国調査材料」には１８９４年(明治27年)居辺村に１戸１人が入地、１８９６年(明治29年)３月現在で戸数１戸人口１人が７５００坪(2町5反)を耕し、雑穀45俵、馬鈴しょ30俵の収穫が記録されており、これは池田町町史編さん室の調査により佐野玉治郎と推定されている。下居辺原



十勝国調査材料

野は１９００年(明治33年)に区画され翌年から貸付されたので佐野は無願開墾である。佐野は１８９５年(明治28年)12月愛知県から中川郡居辺村へ本籍を移しているので、当士幌区域で最初の本籍者となる。玉治郎は１８９８年(明治31年)家督を長男に譲っている。佐野が拓いたと思われる土地は１８９９年(明治32年)６月、坂本八重作が出願し、翌年許可になり１９０８年(明治41年)７月、畑16町１反余が坂本に付与になっている。坂本は１９０１年(明治34年)４月本籍を凋寒村南６線から下居辺の現地へ移している。以上から推測するに佐野が開墾した土地を１８９８年(明治31年)頃、坂本が譲り受け佐野は転出し、坂本が利別太から通作し、１９００年(明治33年)５月に定住したものと思われる。(昭和33年、柴山栄太郎が坂本の縁故者から聞き開取調査したのを参考にして判断)

下居辺地区の本格的な入植開始は１９０２年(明治35年)からで貸付開始と同時に、小池吉蔵ら５戸が坂本の近くに入植または通作し、翌年には飯島和吉ら４戸が入り急速に居辺川沿両岸に入地開墾が進んだ。

坂本は開墾作業について豊富な経験から馬をたくさん飼い、アイヌを使って大がかりに開墾を進めた。他の農家も高島、利別などからの経験者の移転入植者が多かった。居辺川の上流では、１９０３年(明治36年)および１９０９年(明治42年)にわたり前谷トセが30号～34号間８７０町を買受け、１９１０年(明治43年)春、馬２００頭を連れ28号に住居を構え、牧場経営を始めた。

飯島和吉(初代)は裸一貫から努力、産をなし若くして人望を集め、１９１６年(大正５年)には官設居辺駅逓所を開設、郵便局長、池田町議員のほか地域を代表するあらゆる公職を引き受け下居辺の発展に尽くして、住民の敬慕を集め死後頌徳碑が建てられた。下居辺は池田の区域であったが地域住民の要望によって１９３３年(昭和８年)６月士幌村に編入された。

百戸分・中音更下台

北海道国有未墾地処分法１８９７年(明治30年)の制定により全国の資本家や高級官僚が、北海道開拓に意欲を燃やし競って適地を探して申請した。１９０３年(明治36年)音更川を挟んで川東(字中士幌)は23号付近川西(字中音更)26号付近から北へ、両岸合せて約１００戸分(５００町歩)を熊本県の大資本家松本清三郎が貸付を受けた。個人貸付の最高限度の面積である。貸付許可は受けたが手を付けないまま権利を中田宮五郎、西部民太郎が引き受けた。

中田、西部は武儀団体開拓成功の勢いをかって小作人を入れ自らも開墾を進めた。音更仁礼農場へ来ていた宮城県黒川郡の高橋栄三郎、横田貞太郎などが１９０５年(明治38年)、中音更の小作地あるいは土地の権利を買って入地し、同郷の人らが次々と入植して来た。川東の区域については、鈴木農場へ来ていた星屋理助が郷里岐阜県武儀郡から親戚知人を誘い、１９０６年(明治39年)５月、長瀬金弥、波多野小三郎、藤村要助、長屋貞助が中田から分譲を受けて入植した。同年山本善太郎も入植しており翌年から縁故を頼って内地からの入植が相次ぎ、集落を形成していった。この地区の入植は個人移住であったが手持資金のあるものは少なく入植初期は、食糧に事欠き中士幌下台へ出面稼ぎして麦を１升２升と買ったとか、フキの中にわずかの麦を入れて食事にした話が伝えられている。

中音更下台地区は、武儀団体や仁礼農場から転住して来て中田宮五郎の小作地に入植するものが多く、中でも縁故を頼って宮城県黒川郡出身者が多く見られた。水害がたびたびあり土地が削られ、自作地を求め、中音更高台あるいは川東への移動する者が出て拡がって行った。

特定地制度で全域に開拓広がる

北海道の未墾地処分が大資本家に占有され、仲介業者による悪弊が出てきた。

１９０８年(明治41年)４月に法律改正が行われ、大地積処分が有償となったほか新たに自作農を志し、その土地に居住する個人に対し特定地を定め、10町歩を限度に貸付し５か年以内に８割以上の面積を開墾した時、無償付与されることになった。当地方で開墾に意欲を燃やしてきた小作農や小規模農家にとって、大きなはずみとなって士幌町内の高台方面の開墾が急速に進み、士幌南方面では鈴木農場や武儀団体から森本芳兵衛、加納吉三郎などがつ

ウオップ川のマッチ軸木工場

ぎつぎと貸付を受け移って来て一斉に拡がっていった。

上音更方面では中河牧場などが経営されていたが、1914年(大正3年)ウオップ川畔に安井義太郎によるドロ材によるマッチ軸木工場が出来て、大勢の人が働き未墾地が急に賑やかになった。原木がなくなり1918年(大正7年)には閉鎖になったが、上音更方面の開拓のきっかけになった。上音更地区は1917年(大正6年)に貸付が告示になって、散発的に入植が始まった。気象条件、土地条件に恵まれなかったこの地方の初期入植者は、冬は炭焼きで生計を維持しながら困苦と戦って墾地を広げていった。

1907年(明治40年)頃、士幌南地区に入植し数年で成功した加納吉三郎は、郷里へ行って十勝開拓の有望性を説き親戚を誘い、また二男、三男の若者を呼びよせ、どんどんと規模を拡大し、それぞれに特定地を取得し独立させた。先住者は後からの新移住者の面倒を見て移住者たちは「わらじ脱ぎ宿」として永く親戚以上のつきあいを続けた。

音更に鈴木農場を開設した岐阜県鈴木有三は士幌の現在の南旭地区方面にも、土地の払い下げを受け1925年(大正14年)頃から鎌田源二郎、井尾九一など小作人が入植した。

鈴木牧場

上居辺・佐倉の開墾

士幌の開墾は川沿地帯から広がり、大地積処分が行われる一方、自立農家に対する特定地貸付により、全面に開拓が進んだ。大正初期には現在の士幌北から上居辺地区では、1911年(明治44年)長島治吉が東6・7線付近80町歩の貸付を受け、開墾を始めたのが最初となり、1915年(大正4年)には、人舞村(現在の新得町)から仁科金之助ら7戸の佐幌団体が移転してきた。前住地の地形が悪く耕地が狭いので、将来を考え適地を物色、たまたま売りに出ていた東10線付近、本郷兵吉の牧場320町を1500円ほどで購入し分けた。東10線付近の現地は乾燥地でカシワの疎林、川沿はヤチダモの密林であった。同年秋には石狩国沼田町から現在の柏、柏野付近、羽柴政吉を団長とする石狩団体十数戸が特定地貸付制度により移住して来た。一面カシワの密林と草原地で各地からの移転入植が続き既に前住地での開墾体験者が多く、困苦の中にも開墾ははかどった。1919年(大正8年)には政府高官松室致の松室農場260余町が開設になり、近在から小作人が入植し急速に開拓が進んだ。

佐倉農場事務所

27号以南では、千葉県旧佐倉藩主、堀田正恒伯爵が時の皇太子殿下が自邸に行啓された光栄を記念して居辺原野(現在の佐倉地区)に1920町歩の貸付を受け、1913年(大正2年)佐倉農場を開設、事務所、倉庫などを建て小作人を募集、音更仁礼農場から赤間平治ら9戸が入植、1914年(大正3年)から開墾が始められた。農場では漸進的に毎年10戸から15戸を入植し、戸数はしだいに増え開墾地は広がった。

農場の小作条件として、居小屋建築用原木無償交付、小屋掛補助15円、井戸掘補助5円、開墾補助反当畑2円、田20円、耕馬購入補助20円、農機具購入補助15円、小作契約・鍬下3年無年貢4年目、反当大豆15斤(100斤で60キログラム)5年目25斤、6年目35斤、最高は40斤と決めていたが凶作などの減免で最高を出したものはほとんどなかった。このように他の農場や個人地主では見られない、恵まれた条件であった。

1921年(大正10年)から始まった士幌土功組合の造田事業に、農場は深く参入したのが失敗に終わり、小作人は湿地と凶作によって苦悩することとなり成功検査後、自給自足を建て前とした農場はしだいに経営が苦境に立った。農場は小作人自立のため、1933年(昭和8年)から翌年で160町歩を小作人に解放売渡し、自作農66戸が創設された。

2、学校の始まり

簡易教育所と特別教授場

北海道の新開地においては、義務教育を完全に実施することは不可能であった。1898年(明治31年)、簡易教育規定が制定され翌年に一部改正された。移住後間もないところで戸数が少なく、尋常小学校を設置できない場合は簡易教育所で代えることができるというもので、特別教育所(通常特別教授所といった)を設け、

毎月10日間以上、本校から教師を派遣するというものと、その町村居住の民間人で相当の資格を備え、かつ設備がある場合その人に教育を嘱託するという2つの方法がとられた。

士幌町域内で最初の教育が行われたのは、中士幌下台に開拓僧松浪楞範によって寺小屋式教育をしたのが、一説に１９００年(明治33年)といわれているが年代はつまびらかではない。開拓草創期は建物、教材、それに先生も開拓者で用意すれば、教員の給料だけは、村が負担するというのが実情であった。

下居辺小の前身特別教授所(大正８年)

中士幌下台に公立の教育施設として１９０４年(明治37年)、中士幌奥簡易教育所が開設され寺小屋をしていた松浪が初代教員となった。美濃開墾合資会社の事務所を仮教室にし、机はドロの木の皮を伸ばし板にして土間に座って授業をした。

１９０７年(明治40年)には学制が変って義務教育はそれまで4年間であったのが、6年となり教科に地理、歴史、理科、唱歌などを教えるようになった。中士幌奥簡易教育所の名称は、１９０６年(明治39年)に音更第七簡易教育所、翌年に音更第七教育所と改められた。

士幌百戸分では入植が始まってから3年目の１９０８年(明治41年)5月に住民が、材料を持ち寄って草ぶき土壁の小屋を造り、上居辺へ牧場開設に来ていた長島治吉を教師に委嘱して、中士幌の第七教育所付属の東部教授場として開設した。音更川対岸の中音更からも丸木橋を渡って来ることにしていたが危険なので、要請運動をし急きょ中音更にも空小屋を借り東部より10日遅れで西部教授場として開設した。教員は東部と西部をかけ持ちで1週間おきに授業をし、先生のいない間は授業も休みで熱心な子どもは先生と共に丸木橋を渡って、向いの教授場へ通った。中音更へ専属の教員、大畑昌太郎が配置になったのは翌年2月であった。両方の教授場は付属ということで紀元節や卒業式というような大きな行事には、中士幌の教育所まで行って一緒に行った。

１９１１年(明治44年)には中士幌が音更第七尋常小学校に昇格し、東特別教授場が音更第十教育所に、翌１９１２年(大正元年)西特別教授場が音更第十一教育所に格上げになった。

両教授場が尋常小学校に昇格したのは北中士幌(のちの士幌小)が１９１６年(大正5年)、北中音更が翌年であった。開拓の進行と共に校舎の改築にもいくらか公費が配分されるようになった。

下居辺地区では、入植開始5年後の１９０７年(明治40年)2月ようやく居辺教育所付属の特別教授場として許可になり、１９１２年(明治45年)には下居辺教育所となり１９１９年(大正８年)下居辺尋常小学校となった。

佐倉地区では１９１４年(大正3年)、農場開設以来子どもたちは東7線11号の特別教授場まで通っていた。

１９１６年(大正5年)、学校新築の許可を受け農場は用地を提供、建築費、設備費３８０円余を寄付、新築完成、翌年7月佐倉尋常小学校が開校した。士幌町内で最初から正規の尋常小学校が開校したのは当校だけであったし、校舎も当時の開拓地としては完備したものであった。

佐倉尋常小学校

西上音更方面では中音更の特別教授場まで通わなければならなかったが部落民が西1線38号に仮校舎を建て１９１９年(大正8年)12月、西上音更特別教授場を開設した。児童数は20名であった。１９２２年(大正11年)には西2線40号に移転したが、翌年尋常小学校に昇格、上士幌との分村により通学区域が両村にまたがることになったため、１９３３年(昭和8年)に現在地へ移転した。

昭和初期、民有未墾地開放による新開地の現在の朝陽地区に旭特別教授場が１９３１年(昭和6年)に開設、新田地区では１９３２年(昭和7年)新田特別教授場が開設になった。

3、開拓者たち

自給のくらし

下居辺開拓者飯島つぎの昔話によると、１９０８年(明治41年)、15歳で飯島家へ嫁いで来た時は土間に乾草を敷いた小屋で、むしろ

開拓当時（明治45年）の飯島家

を下げた入口から熊がのぞくので内からしんばり棒をして防いだ。箸も茶わんもなかった。馬を高島の実家から持ってきて馬耕をした。

１９１３年(大正２年)に佐倉へ入った文屋七三郎の妻ふよは、食べるものは畑と山からとれるものの外、川魚と野うさぎがなんぼでもとれたので心配はなかったが一番困ったのは、ボロのつくろいものをする針と糸を買うことができなかったことだと語っていた。

美濃開墾合資会社入植直後の１８９８年(明治31年)に生まれた五十川重義は、母乳が出ないためソバ粉を溶かして育てられたという。百戸へ入植した土屋フキはカンテラの石油を買いに、中士幌下台へ四合ビンを下げて出掛け日暮れになり草原に迷って夜露に腰まで濡れ、さまよっている内に家人が探しに来て助かったと語った。西上へ１９１８年(大正７年)に入った松浦襲吉は、馬を使わず夜も腰にカンテラを下げて手起こしで畑を拓いた。

１９１９年(大正８年)に音更から入った伊藤豊蔵は小学校６年生を終えるとすぐに、蜂屋太三郎に奉公に入り新墾起こしについて歩き近隣村を回って４頭引きプラオ扱いを覚え、その稼ぎで父の新墾を３年間に８町拓くことができた。馬が１頭しかいない家では賃耕するのに、１反歩起し賃２円、ハロー４回で１円60銭かかり現金収入のない開拓者は、その金を都合することが非常に難儀であった。

どこの家でも入植して来た初年は、新墾起こしで準備に手間取り食料のまき付けが遅くなったが、イナキビ、ソバ、野菜類をまいた。百戸分入植の４戸は食う物がなく越年(おつねん)には全部死ぬだろうといわれたが、その年豊作で生きのびることができた。下台の場合12～13年は無肥料でもとれた。販売作物として、菜豆のビルマが新墾に合い中長ウズラ、手なし(長ウズラ)がよく作られのちに大豆は作りやすいので、急速に広がって十勝の代表作物になった。

凶作と好不況

入植直後の開拓者に思いがけない災害がしばしば襲いかかり、定着をおびやかした。美濃開墾合資会社が入植した１８９８年(明治31年)８月に、全道を襲った大水害で下台は一面の大海となり命からがら背負われて、高台へ逃げたと思い出が語られていた。１９０２年(明治35年)、冷害暴風の凶作、１９０７年(明治40年)豪雨冠水、１９０８年、１９０９年(明治41、42年)虫害で豆作大被害、１９１１年(明治44年)大雨と災害が続き入植者は悲惨な生活に陥る者が相次いだ。

河西橋を渡って帯広へ入る馬車の列

開拓当時３年に１回は凶作があるものといわれて戒められた。

開拓が進むと共に農家は販売作物の雑穀類を多作し価格の上下、作況の豊凶によって生活経営が浮沈激動を繰り返し、作物によって運、不運が分かれた。

１９１４年(大正３年)に始まった第一次世界大戦は、十勝農村に思いがけない好況をもたらし大農、粗放経営指向をもたらした。

大正３、４年の雑穀の低値と大正７、８年の天井値を比較すると次のようになる。

青えん豆～３円30銭→25円
大手亡～３円30銭→23円30銭
金時～３円30銭→23円
長ウズラ～３円→19円

当時、白米１俵12、13円であったから豆１俵をもって行って米１俵としょう油８升樽１本、石油２缶入り１箱買ってもまだ釣りが来たのであるから農家の鼻息は荒く、投機欲に燃え開墾は大いに進み豆類の作付が急に伸び、帯広の雑穀商の活躍、商店街、花柳界の好況は数々の珍談を残している。土幌方面からの農作物は馬車で帯広へ搬入され途中、雑穀仲買人が活躍し途中にある農作物検査所で先を争って列をなし、帯広入口の河西橋付近では馬車の列と雑穀商で混雑を極めた。

しかし、大戦好況は永く続かなかった。戦争が終わると不況に陥り、１９２０年(大正９年)には凶作に襲われ、豆の価格が暴落すると借金して土地投機をしたり、高い肥料代を前借りして増産を夢見た農家はたちまち借金地獄に墜ちた。現金貸借は1か月2・5パーセントから3パーセントくらいであったから、3年で倍になった。貧富の差が大きくなり脱落するもの、小作農に転落するものが続出した。

第四章　新村誕生

1、分村成る

分村の機運

特定地貸付制度と第一次世界大戦の好況は、十勝開拓熱をあおり大正中期には音更村の人口は10年間に3倍にもなり、士幌の原野各地で開墾が急速に拡がって奥地へ奥地へと入植が続いた。入植者にとって音更の役場はあまりにも遠すぎた。子どもが生まれても期限内に届け出する者は少なく、土地の有志に頼んでおいたら年を越して半年も遅れて籍がつけられていたという例もある。勢多の奥地に入った学校の先生は毎月の給料を受取りに2日がかりで、乗馬で出かけなければならなかった。役場当局も20キロ以上に及ぶ道なき奥地への行政には手が廻りかねた。南北70キロ、1600平方キロメートル、河東郡1村という音更で分村の声が具体的になってきたのは、1918年(大正7年)頃であった。1920年(大正9年)着任した竹内村長は、分村を自分の地域に有利に導こうとして、連日押しかける陳情に嫌気をさしたのか数か月で札幌へ帰ってしまった。

当時一部では、時期尚早の声もあったが士幌から村会議員に出ていた内木文兵衛、波多腰円一、それに部長中川吉三郎らが代表となり熱心に運動して道庁を動かしたということで、大勢から考えて分村は必至であった。

1920年(大正9年)12月には、字上音更、上士幌、士幌、それに中士幌、中音更の一部などを含めた地域を一か村とし、クテクウシ、瓜幕、美蔓、上幌内、それに上然別の一部を含めた区域を一か村とする分割を内定した。前者は音更川の川上に当るということで川上村を称し、後者を鹿追村とすることとして、正式に分村を申請した結果、北海道庁告示で1921年(大正10年)4月1日付で両村を分村することが認められた。

これより先、村界をどうするかということが問題であった。川上村の場合、最も早くから開けた中士幌地域が中核をなしていたが、中士幌の東の方は湿地帯が多く、住民の反対もあって分村を拒み、また川西方面でも種馬場用地を分割することはできなかった。結局中士幌だけが突出した形で分村の境界が決まった。

新村川上村の発足

秋田　浅吉

1921年(大正10年)4月、川上村が分村独立し住民は新村誕生の喜びに包まれた。

川上村の区域の東の境界は中川郡との郡境となっており、川合村と隣接している。図面上によればサックシュオリベツ川になっているが、それでは佐倉小学校や佐倉農場などの過半が川合村となることになるが、当時の戸籍簿などによれば

佐倉農場区域内は川上村字中士幌となっており、事実上川上村の行政区域として取扱われていた。

役場は一時西2線27号西北角、中川吉三郎宅に置いたのち、西2線167番地の9、山田銀七所有住宅(現むらはし歯科医院の敷地)を改修し仮庁舎とし、大正14年6月西2線162番地の9に新庁舎が落成移庁した。

川上村初代村長には幕別役場勧業主任の秋田浅吉が赴任し、首席書記小野寺喜三郎、書記舟橋弥三郎、高橋慶造、野曽原直隷、吏員藤森国治、遠藤三郎、宮脇可一、高橋一が発令されやがて収入役に尾形栄治が就任した。

開拓初期の財政力が弱い町村は北海道二級町村制が適用され、二級町村では町村長、書記の給料が道庁から支給され任命、異動は道庁(支庁長)が発令した。なお開拓途上の川上、鹿追両村を分離した音更村は同日付をもって一級村に昇格し、村長は村会で推せんして決め昇格を記念して同年2階建ての庁舎を新築した。

初めての村会議員の選挙は1921年(大正10年)6月に行われ、定員10人、任期2年であった。有権者は直接国税年額3円以上を納入している男という制限選挙であった。

分村にともなう部長区域(行政区)が村会で決められ、第1部から第14部まで置かれ部長は村長が村会の議決を経て任命した。

1925年(大正14年)境界変更で、上居辺、朝陽方面の区域が編入になると、行政区は24部となった。

獣医師と装蹄所

馬が開墾の主役であった頃から獣医と、馬の蹄を削り蹄鉄を装着する装蹄師が大事な存在で、初期には同居して開業することが多かった。

大正初期中士幌下台の寺町に川辺勝二が蹄鉄所を開き、同じ場所で佐々木獣医が開業しており、後に中士幌市街へ移った。中士幌では佐々木が転出したあと斉藤実が1931年(昭和6年)に獣医を開業した。

士幌市街草創期の1919年(大正8年)5月、平田欽逸が現在の睦地区に家畜医院を開業し獣医と装蹄を兼ねていた。1924年(大正13年)11月現在の高徳地区の小森金助装蹄所に沢口清喜が獣医を開業し、その後、現在の神苑地区に家畜医院を新築して移った。沢口は北海道庁馬匹去勢技術員を拝命していた。士幌市街の装蹄所では棚田某、小森金助、瀬戸栄雄らが初期の開設であった。下居辺では大正の末頃鈴木久治が蹄鉄工場を開いた。

沢口清喜家畜医院

平田欽逸家畜医院

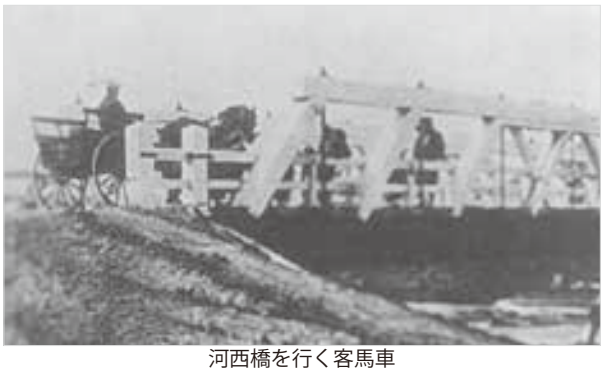
士幌市街の獣医は前記のほか1934年(昭和9年)に秋間勇、島田寛、鈴木清、1936年(昭和11年)には西部宮松が開業した。獣医は家畜の診療に当たるとともに農業技術農政のよき指導者でもあった。1949年(昭和24年)農業共済組合発足後、獣医師は組合家畜診療所に所属する者が多かった。

2、鉄道開通と村名改称

客馬車と自転車

開墾が士幌原野の全地に広がり、雑穀の生産地として活気がみなぎり、上士幌、士幌、中士幌方面からの唯一の交通路として音更川沿道路は、馬車で賑わうようになった。

農産物は1日か2日がかりで12～13俵を積み帯広で売って、日用品や肥料、縄、かますなどを仕入れて来るのであった。遠く東居辺の奥地から悪路を帯広へ出る人たちは難渋した。また馬車運送を稼業とする者もいた。1922年(大正11年)5月、新聞広告で中士幌―士幌間客馬車の広告が出ている(勝毎七十年史による)間もなく、松山京市、井川治兵衛が士幌、帯広間の運行を始め、松山京市はその後自動車の定期運行に切り換えた。1919年(大正8年)上居辺の教員、前田春吾は近隣では初めて自転車を買って乗った。価格40円と記録している。同じ年森本芳兵衛、山田銀七が自転車を買い古川銀市は帯広まで2時間で行ったという。


河西橋を行く客馬車

念願の鉄道工事

人々は鉄道の開通を熱望した。1909年(明治42年)人家稀れな原野に鉄道調査の役人が来るということが、安村治高丸の日記に書かれている。分村と同時に最大の懸案は鉄道敷設の促進であった。1921年(大正10年)6月、新村の村長秋田浅吉、村議小椋国蔵、鈴木泰助の3人で旭川の建設事務所へ鉄道促進の陳情に行った時、先方では「よく来てくれた」といった調子で話は予想外にはかどった。政府は沿線の開拓進度が早く資源が豊富なことに加えて、本道を縦貫して旭川へ通ずる軍事面の有用性もあったのでないかといわれており、また中央で佐倉農場主堀田正恒伯爵が大いに尽力したともいわれ、広尾線に比べ意外に順調に進んだのであった。工事は1924年(大正13年)までに完成予定とされたが、尚予断を許さず一刻も早く完成を望む熱望から1921年(大正10年)12月6日、上士幌線達成村民大会が開かれ川合村区域の上居辺、下居辺村民も加え、全戸請願の陳情と陳情費用を各戸から寄付金を募り、592名の署名を添え1921年(大正10年)12月、貴族院議長宛請願書を提出した。

住民や投機家たちの熱い期待の内に1921年(大正10年)比較線実測、翌年10月帯広駅から着工第三工区桔梗ヶ丘(駒場駅)～上士幌間は、1925年(大正14年)6月着工したが住民の強い要望で上士幌までの完成を待たず、士幌までの完成で列車運行を開始することになった。

歓喜の開通式

1925年(大正14年)12月10日、帯広～士幌間に鉄道が開通した。各駅では歓迎門を建て花火を打ち上げ、歓声を上げて迎え、中士幌駅では住民が仮装行列で歓迎、士幌では小学校児童が梅野校長作詞の祝い歌を歌い、日の丸の旗を振って旗行列をした。祝賀式が帯広小学校を会場にして、帯広市、音更両村で開催出席者全員で沿線を視察した。

列車は士幌駅から帯広駅間3往復、片道料金48銭であった。

士幌―上士幌間の工事は引き続き行われ翌年7月、開通した。今まで音更川を流送していた木材は上士幌駅から輸送されることになり、上士幌も目ざましい発展を遂げることになった。

開駅間もない士幌駅

上居辺地区の編入

河東郡川上村と中川郡川合村(現在の池田町)との境界は、サックシュオリベツ川であったがサックシュ川以東の上居辺地区住民は、川合村役場へは40キロメートル余も離れており川上村誕生の前から川上村区域への編入を希望していた。

川上村分村が誕生した1921年(大正10年)10月には陳情書が、道庁長官に提出された。(道庁文書館保管)文書には当時の住民97戸が署名している。これに対し一部住民(代表福沢豊三)からの反対陳情が行われている。その趣旨は川上村は分村後日浅く、税金が高くなるのでないかとの危ぐがあった。両者の陳情を受けた川合村役場では分割は至極当然のこととして、27号以北を川上村に編入するよう上申した。

1925年(大正14年)には士幌駅が誕生し事実上、川上村が生活の中心となっていたから道庁では川合村と川上村の境界変更の告示をして、4年目に初めて実現を見たのであった。

近藤村長就任・士幌村となる

近藤　義郎

開村以来5か年にわたって村の基礎を築くために努力を重ねた秋田村長は、1926年(大正15年)3月鹿追村長に発令され後任には、入れ替わりで鹿追から近藤義郎が第2代村長に赴任した。それまでに弁辺(豊浦)、鵡川、真狩の各村長を歴任したベテラン村長であった。

村長着任後の1926年(大正15年)6月1日、かねて懸案の村名改称が行われ「川上村」が「士幌村」になった。道内には漆別村に川上の地名があり、上川郡という名称が十勝、石狩、天塩の三か国にありまぎらわしかったのと、川上村という名称が帯広方面であまり通用せず中士幌とか士幌という地名で用事を足すことが

多かったので、当然の措置であった。

市街地の発展

役場の設置と鉄道の開通によって士幌村は、目ざましい発展を遂げた。開村当時戸数770戸であったのが5年後の1926年(大正15年・昭和元年)には、1315戸となり、中でも商業戸数は1923年(大正12年)38戸が、1926年(大正15年)145戸と4年間に4倍近くになる躍進を見せた。従来小集落ごとに日用雑貨を扱っていた農家兼業の店は、しだいに姿を消し士幌、中士幌、上士幌各駅を中心とし商店街を形成し雑穀商や、林産関係、かんがい溝工事関係者などによって飲食店、料理店が繁盛して街に一層活気を与えていた。分村当時40戸にしか過ぎなかった士幌市街は大正14年頃には、200戸を越える街を形成するようになり市街地としての組織がしだいに整備されていった。

大正15年7月　士幌市街

3、かんがい溝

稲作熱

第1次世界大戦後、十勝の各地に水田熱が高まり大がかりなかんがい溝工事が行われるようになり、士幌方面へ造田熱が押し寄せた。移住農民たちにとって米食への郷愁は根強いものがあり、下居辺では早くから居辺米が産出されており佐倉のサックシュ川では文屋要、赤間平治が大正初期から水田で一応の収穫を上げていた。また上居辺原野で長瀬金弥、土屋孝次郎などが試作し中士幌下台でも小規模ながら水田が造られていた。水田熱をあおった原因の一つは土地投機の思惑からで水田にすれば、土地の値段が畑の数倍になり、土1升金1升というような声がささやかれ夢をふくらませた。

かんがい溝工事(大正13年)

士幌土功組合

土功組合設立の動きは1920年(大正9年)に始まった。音更川の上士幌原野40号から引水しようとする森口茂吉らの申請と、中士幌原野30号から引水しようとする両計画が競合し、河西支庁長が調停に入り道庁の実地踏査の結果両者が合併して東は士幌川、西を音更川で画し北は上士幌原野から南、下士幌土功組合区域へ至る南北14キロ、東西6キロ3600町歩に及ぶ一望千里の広い区域について士幌土功組合が1921年(大正10年)6月設置許可された。発起人代表岡部金吾、森本芳兵衛、組合長には河西支庁長が指定された。

かんがい溝工事

工事の調査は国費で行われ、かんがい溝工事は2割程度の補助があり残りは資金貸付され、造田補助があった。国は1918年(大正7年)の米騒動以来主食の米の国内自給政策に力を注いでいた。士幌土功組合の調査は1920年(大正9年)に始まり、1921年、1922年(大正10年、11年)にかけて行われ当初30号以南であったのが26号以南に下げられ、以北は区域除外された。

かんがい溝工事は1923年、1924年(大正12年、13年)両年継続事業で行われ、同年12月に完工した。

かんがい溝中央幹線第1階段(昭和3年)

稲作の失敗

十勝連合地主組合は水田移住者を招くために、宣伝に努め、本村の中士幌東方面、西堀田、瑞穂、旭野方面へは道内各地から稲作にあこがれて続々と入植した。平地のヤチ坊主地帯が容易に造田され、南士幌、旭野方面の畑作を水田に転換す

中士幌の水田(昭和18年頃)

るものも見られ、士幌村内の水田は１９２９年(昭和４年)の統計で最高の５９０町歩を超えた。

稲作は2年か3年に凶作が訪れ、また乾燥地では水もれがひどく水田耕作を不可能にし、冷害を受けやすく水田除外面積が続出した。１９３１年(昭和６年)以降は冷害凶作が重なり農家は土功組合費の滞納と利子の重圧に苦しんだ。水田を放棄、離農が相次ぎ畑作への還元が広がり１９３２年(昭和７年)から本村の稲作面積が急速に減り続けた。１９３６年(昭和11年)には１４０町歩台となり戦時下、１９４４年(昭和19年)には88町歩までになりその後も減少を続け、１９７１年(昭和46年)には国の生産調整政策を機に町内から水田が全く姿を消した。１９２８年(昭和３年)から１９４０年(昭和15年)まで13年間で見ると、士幌村水稲１反歩当り収穫平均は１・９俵でこの間、１俵未満の年が５回あった。夢を抱いた稲作は完全に消え去ったのである。

4、上士幌分村

士幌市街と石原村長

石原　重方

２代目村長、近藤義郎は１年半の短い在任で清水村長に転任し、後任に浦幌村長石原重方が１９２８年(昭和３年)４月着任した。士幌市街商店街の経済活動が盛んとなり電話を引く要望が高まり、村長は小椋国蔵村議と共に苫小牧の王子製紙へ寄付金の要請に出かけ、１９３０年(昭和５年)５月開通した。21番までが限度でそれ以上は当分つけることができなかった。この頃百戸分に市川修の養狐場ができていた。高い望楼を設け道内でも異色の存在であった。市街地から１２００メートルも離れていたが特別に負担して養狐場へ電話を架設した。

養狐場

１９２５年(大正14年)にできた市川の養狐場は数十頭から数百頭の、輸出向け高級種銀黒狐を飼い村内でも習って飼育する人が増えていたが日本が戦争に突入すると、販路を失い１９４１年(昭和16年)閉鎖になった。

士幌村成立後村民の経済力が向上し、村勢が伸びたことから一級村に格上げする請願を１９２９年(昭和４年)３月、村会で議決したが上士幌分村問題が起きて遂に実現しなかった。

民有未墾地による土地解放と大型農業

道内には資本家や会社などが大地積払い下げを受けた民有の農耕可能地が、40万ヘクタールも未利用のまま残されていた。１９２７年(昭和２年)８月、政府は民有未墾地開発資金貸付規程を制定し、１９２９年(昭和４年)３月には北海道自作農移住補助規程が発足し、未利用の未墾地を整理分割して質実剛健な自作農民を創出することに力を注いだ。

士幌村区域で現在の朝陽地区、上徳善七所有地が１９２９年(昭和４年)民有未墾地として解放一斉に入植が始まり、１９３１年(昭和６年)には新田帯革㈱が原野の一部１４００町歩を同制度によって解放、比較的上等地は小作人を入れ、新田地区の開墾が進んだ。大地積牧場の多かった上士幌居辺方面は、本制度によって一斉に原野が解放になり大量の移住者が入り、上士幌地域独立の気運をつくり出していった。

上居辺の未墾地開墾(大正８年頃)

上士幌分村問題

鉄道が上士幌まで開通したのは士幌駅開通の翌年、１９２６年(大正15年)であった。上士幌駅を中核として上士幌市街が急速に形成され、木材の集散地となると共に大量の入植者が各地から移住して来てたちまち上士幌全地域が活況にあふれ、奥地に豊富な資源をもつ上士幌に分村独立の気運が高まり、１９２９年(昭和４年)３月、分村期成会が発足した。分村問題の背景には人口の増加、豊富な資源のほかに①士幌村に一級村昇格の動きがあり、昇格してから分村することは

分村を決めた村会議員

問題が起きるので早く分村した方がよい。②士幌では稲作が失敗し水田農家の税減収分が畑作農家の負担増になるのではないかとの、懸念などが伏在していたといわれている。以上のようなことから分村問題は当初順調に進み、同年4月の村議会で上士幌分村を請願する議決がなされた。このとき議決の境界は川西37号、川東は東3線まで34号、東3線以東36号という案であった。

上士幌分村す

波乱を越え上士幌住民の念願かなって1931年(昭和6年)4月上士幌村が誕生し、上士幌では歓喜一色に包まれ、祝賀行事がくり広げられた。

境界が1929年(昭和4年)4月の議決よりも北に上って決められたのには次の事情があった。

この頃奥地山林で伐採された大量の木材が音更川によって流送され、士幌37号付近の王子製紙の土場で陸上げされ上士幌駅へ、トロッコ輸送しており木材流送税が村の大事な財源となっていた。土場を挟んで川東

音更川流送土場

36号、川西41号とすることによって流送税を両村で折半するという考えであったというが、分村成立後土場は44号地先に移動したので、士幌側の思惑は外れてしまった。

下居辺の編入

池田町の下居辺地区は士幌線鉄道の開通と、27号道路の整備によって距離の近い士幌村の方へ出る方が至って便利なため、1925年(大正14年)の上居辺地区の士幌編入以来下居辺についても、編入要望の声が強く、1929年(昭和4年)3月の村会に対し、村長から編入の諮問を提出、可とする答申がなされたが、時期を同じくして上士幌分村の問題が発生し、一時保留の形となっていた。

分村問題が落ちついた1931年(昭和6年)、下居辺住民からまた編入要望が出された。これに対し翌年3月には居辺分村反対町民大会が開催されているから賛成、反対両意見の対立があったものと思われる。

初代　飯島　和吉

下居辺地区の編入については、当時池田町町会議員であった初代飯島和吉が中心になって熱心に運動をして実現の運びとなった。飯島は開拓以来、地域の発展に挺身努力し士幌村への編入後も多くの役職をもって奔走し、1939年(昭和14年)60歳で病没した。1950年(昭和25年)13回忌にあたり柴山栄太郎らが中心となり、住民一同によって飯島翁の頌徳碑が建立された。

編入後の士幌村
面積～15方里6(246平方キロメートル)
戸数～1226戸
人口～7327人

拓殖鉄道と北十勝線

道東開発の夢をかけて新得から足寄までの私設鉄道北海道拓殖鉄道株式会社が創立、1928年(昭和3年)暮れに第1期工事新得、鹿追間が開通、第2期工事は鹿追からウリマクを経て士幌村内に入り西3線31号、32号間に設置した中音更駅まで23・7キロメートルが1929年(昭和4年)11月開通、ウオップ川、音更川の鉄橋工事を終えて上士幌駅まで開通したのが、1931年(昭和6年)11月であった。

十勝北部の未開発地域を横断し上士幌から足寄に至る区間は、計画だけで実現を見なかった。列車は1日3往復で客車は二等席と三等席に区切られていた。

上士幌から中音更を経て鹿追に至る区間は当初から乗客はあまり見られず、創業早々農村不況に遭遇し営業は不振であった。三股の風倒木処理で木材輸送がふくそうした時と、終戦直後の食糧不足の時のヤミ買い出しの時、短期間活況を見せたことがあった。1932年(昭和7年)から軽量化

拓鉄開通（昭和３年）

ガソリンカー

拓殖鉄道図

を図って小さなガソリンカーが走っていたこともあった。赤字続きで１９４９年（昭和24年）東瓜幕～上士幌間を廃業、１９６８年（昭和43年）には全線廃業した。士幌にとっては利用度の低い鉄道であった。

おおむねこのルートを通って新得～足寄間を結ぶ国鉄北十勝線鉄道建設を、関係６町によって、１９５７年（昭和32年）に運動を始め、士幌町は町民の利用しやすい鉄道ということで、士幌駅に乗り入れ士幌線を複合利用し、上士幌駅に至るルートが採用された。１９７４年（昭和49年）に着工認可になり事業費が計上されていたが、１９８０年（昭和55年）以降国鉄合理化の風が吹き荒れ関係住民の熱望もあえなくついえ去った。

下居辺の殖民軌道

根室本線高島駅を起点として下居辺市街に至る、20キロメートルに北海道殖民軌道居辺線が敷かれた。１９２７年（昭和２年）の第２期拓殖計画の中で予定されていた事業を、１９３１年（昭和６年）大凶作の救済工事として沿線の被災農家の出役により、１９３２年（昭和７年）９月着工、翌年度軌道を敷設して、運行を開始した。池田の町議会議員であった飯島和吉、米山将が住民の協力を得て、殖民軌道誘致期成会を結成、完成後は運行組合を組織し、飯島が会長になった。

運用は地元に任され、76・２センチメートルのレールの幅にトロッコ（台車）を乗せ、馬によって引くもので、木材・雑穀・木炭などを高島まで輸送し、肥料や日用品などを積んで来るのであった。軌道開通と時を同じくして、下居辺が池田町から士幌村に編入になり27号によって士幌へ出ることが多くなったため、利用が減り軌道は１９４１年（昭和16年）４月、池田町界までが撤去になった。軌道には連絡用の電話が架設されており、士幌の役場から下居辺に緊急連絡する時は高島経由で利用したこともあった。

殖民軌道図

5、不況と産業組合

好況から不況のどん底へ

第１次世界大戦後、農村は好況不況、豊作凶作を操り返しながら畑作地帯として発展してきた。１９２８年（昭和３年）12月の十勝毎日新聞記事によると、この年は不作であったが品薄から年の暮れの雑穀相場が高騰し、１俵３～４円の大手亡が20円の最高値を現出し、その年の秋７円20銭の大振袖大豆が12月には10円になるなど波乱相場で、米１俵12円程度よりも小豆１俵の方が13円と高くなり不景気風はどこを吹くかといった奇現象を呈していると書いている。こうした相場の高下が農家の投機意欲をそそり豆類の過作、金肥の多用、収穫期払いのつけ買いに走らせた。こうした時、未曾有の困難が有頂天になっていた農村を襲った。

凶作対策文書

１９２９年（昭和４年）にはじまった世界恐慌で我が国は不況に陥り、翌年当地畑作は豊作であったが雑穀相場が暴落し、１俵10円の大手亡が２、３円にも下落、農家は肥料代、商店の掛け買代の返済に窮した。ところが翌１９３１年（昭和６年）は多雨と異常気象で大凶作となり、引き続き１９３２年（昭和７年）が冷害、雪害、虫害で半作以下の大凶作であった。１９３３年（昭和８年）は大豊作に恵まれたがまたも価格大暴落で不景気となり、翌年、翌々年がまたまた冷害大凶作の

年となった。
　天明の大飢饉(ききん)にも比べられる大凶作の連続は、地球的な周期によるものといわれ東北北海道は深刻な打撃を受け、日中戦争への引き金にもなった。

農事実行組合

　農業の指導奨励に当った村農会では、技手池本初が着任し指導普及のため農事実行組合の組織を奨励し、1927年(昭和2年)には西上音更をはじめ12組合が設立された。上士幌が分村した後、下居辺の編入が終わった1933年(昭和8年)には全村にわたって農事実行組合の組織が完了した。当時の組合名は次のとおり。

　中士幌・共進・勝和・豊進・実勝・瑞穂・西堀田・共豊・豊年・協益・旭・南士幌・東雲・常盤・西士幌・百戸・東百戸・協進・相互・平和・共成・柏・柏野・西居辺・開運・北上居辺・更生・吉野・共益・新田・栄進・日進・上音更・西上音更・下居辺・高砂以上組合数36でその後若干の分割が行われたが、現在の部落組織の原型がこの時に形成されたのである。

農業会事務所新築(昭和15年)

第1回堆肥増産共励会

　村農会は農事実行組合を通し品種改良、立毛品評会、各種共励会などを行い実際指導面の拠点として成果を挙げた。
　村農会は1944年(昭和19年)2月、産業組合と統合して士幌村農業会となり村農会事務所は移設して農業会事務所の一部となった。

産業組合設立

高橋　長七

　産業組合法が制定されたのは1900年(明治33年)であったが、士幌における産業組合としては1916年(大正5年)に設立した「中士幌大正信用購買販売組合」(組合長岡部金吾)があったが、組合員が最多の時でも50名にも満たず単なる貯金組合、肥料共同組合といった域を出ず資金力に乏しいため事業はしだいに不振となり、終わりには事実上機能停止の状態となっていた。
　これより先、1914年(大正3年)には武儀団体中田宮五郎らが「中士幌信用購買販売利用組合」を組織し、百戸方面からも加入する者があり肥料の仕入れ雑穀の販売、米の購入などを行っていたが、ごく一部の加入に止まり大正9年の凶作で肥料代償還に窮し、経営に行き詰まり後藤貞吉が組合長となり整理を済ませ昭和3年に解散してしまった。
　全村的な産業組合をつくろうという動きが出たのは、1931年(昭和6年)春からであった。昭和2年、3年の凶作のあと昭和5年の不況によって農家経済はひっ迫の度を超えていた。村農会ではさし迫った肥料の購入をはじめ農家経済を苦境から救うためには、強力な産業組合の結成によるほかはないと決意した。当時農村救済対策としてとられていた種モミ、肥料資金の貸し付け、政府米の払い下げ取り扱いは産業組合が対象になった。組合をもたない町村では手続き上の面倒さに加えて、農民自体不利の立場に置かれたこともあり、既に鹿追や分村前の上士幌にも組合が設立され、中層以下の農民には産業組合の必要性はある程度理解されていた。村農会では1931年(昭和6年)春の部落懇談会の重要な議題として産業組合設立を取り上げ、農会の幹部が各部落に出向き理を尽くし言を極めて組合づくりを説いた。
　1931年(昭和6年)は惨たんたる凶作で農民の間にしだいに関心が高まり、

産業組合事務所(昭和8年)

農会幹部らの準備が進み同年12月、士幌村産業組合創立総会が開かれ加入同意者82名のうち50名が出席した。翌年2月設立認可、同年6月第1回臨時総会を開催し事業運営の細部を決め、西2線162番地の民家を借りて業務を開始した。組合長高橋長七は農会長も兼ね基礎固めに献身的に活動、組合加入を勧め初年度事業はナワ、カマスの取り扱い資金の貸付、精米委託、雑穀の販売取り扱いをしたが専任職員は置かず事務は吉田市太郎監事、小川勝之丞の留守番役によって運営した。

活動開始2年目の1933年(昭和8年)2月、西2線160番地の民家を借り翌年1月には職員4人となり、執行体制が整った。

1937年(昭和12年)7月、日中戦争が突発するといよいよ戦時体制に入り、農村経済の中核体として、産業組合の活動に期待されるものはいよいよ大きくなった。組合の全機能を動員して、国家目的達成にまい進すべきであるとの全道大会の論議を受け、新たに産業組合拡充3か年計画を樹立

1．全戸組合加入
2．出資増口
3．貯蓄増強

をあげ、全村運動を進めた。

組合は事業拡大にともない、1940年(昭和15年)9月、駅前に事務所を新設し移った。この年の組合員572名、総農家数に対し約7割の加入数であった。職員数は35名に達していた。

経済更生運動と野沢村長

野沢　文治

石原村長転出の後任として1930年(昭和5年)8月、野沢文治が着任した。野沢は道庁土地改良課出身で道庁支庁に信頼があり、在任中多くの仕事を果した。質素で誠実、身を粉にして村内をくまなく歩く村長の姿は村民の深い尊敬と信頼を集めた。

野沢村長赴任は上士幌分村間題の最中で、よく困難の中、円満解決を図り、不況・凶作が襲ってきた時、村民と共に耐え努力して再建の道を開いたのであった。士幌新橋の架橋、中音更ウリマク道路の開削、中音更大排水、サックシュ川の改修などの大事業を成し遂げたのもこの時代であった。民有未墾地入植で朝陽地区の道路開削、学校建設に親身になって面倒を見たということで、朝陽開拓永遠の恩人として今もその徳が慕われている。野沢村長は村の最も困難な時期に5年8か月在任した。1936年(昭和11年)4月、浦幌村長に転任発令されると、がく然とした村民は翌日士幌小学校で村民大会を開き数百人が集まり、留任運動を行ったが当時の制度では止むを得なかった。

士幌新橋(昭和14年頃)

昭和初期の全国的な不況により農村の疲弊は甚だしく、国運の消長にもかかわることとして農林省は、1932年(昭和7年)全国に「農山漁村経済更生計画」を5か年で立てさせ、補助制度によって指導援助することにし、士幌村は初年度の1932年(昭和7年)の指定村となった。

村では「士幌村経済更生計画樹立委員会」を発足、計画の樹立と実行の指導督励に当たることとなった。

計画大綱に基づきそれぞれ実行細目を設定し、農事実行組合を中核として男女青年団、小学校など全村的な協力体制のもとに事業が進められた。

士幌村経済更生計画大綱

イ　農業経営改善に関する事項
a．長期輪作の奨励
b．自給肥料の増産奨励
c．深耕の奨励
d．品種改良の奨励
e．家畜家禽(かきん)の増殖奨励
f．風防林設置計画

ロ　農家経済の改善に関する事項
a．農家簿記の使用奨励
b．自家用品の生産加工奨励(自家用醤油の醸造・豚肉加工・羊毛加工・共同作業場の設置)
c．産業組合の改善拡充

ハ　農村社会改善に関する事項
a．農村精神作興計画(青年学校設置、精神修養講習会開催)
b．道路排水溝の愛護
c．社交儀礼経費節約
d．備荒貯蓄の奨励(一般農家の蓄積・水田農家の種籾貯蔵・士幌村備荒貯蓄の増殖)
e．屋敷林の設置奨励

農村疲へい対策の一環として公益質屋が役場に接続して、１９３２年(昭和７年)12月開業した。鉄筋コンクリートの頑丈な質屋倉庫と駅前にトタン囲いの大きな雑穀倉庫が建った。

馬の配合検査(昭和13年頃)

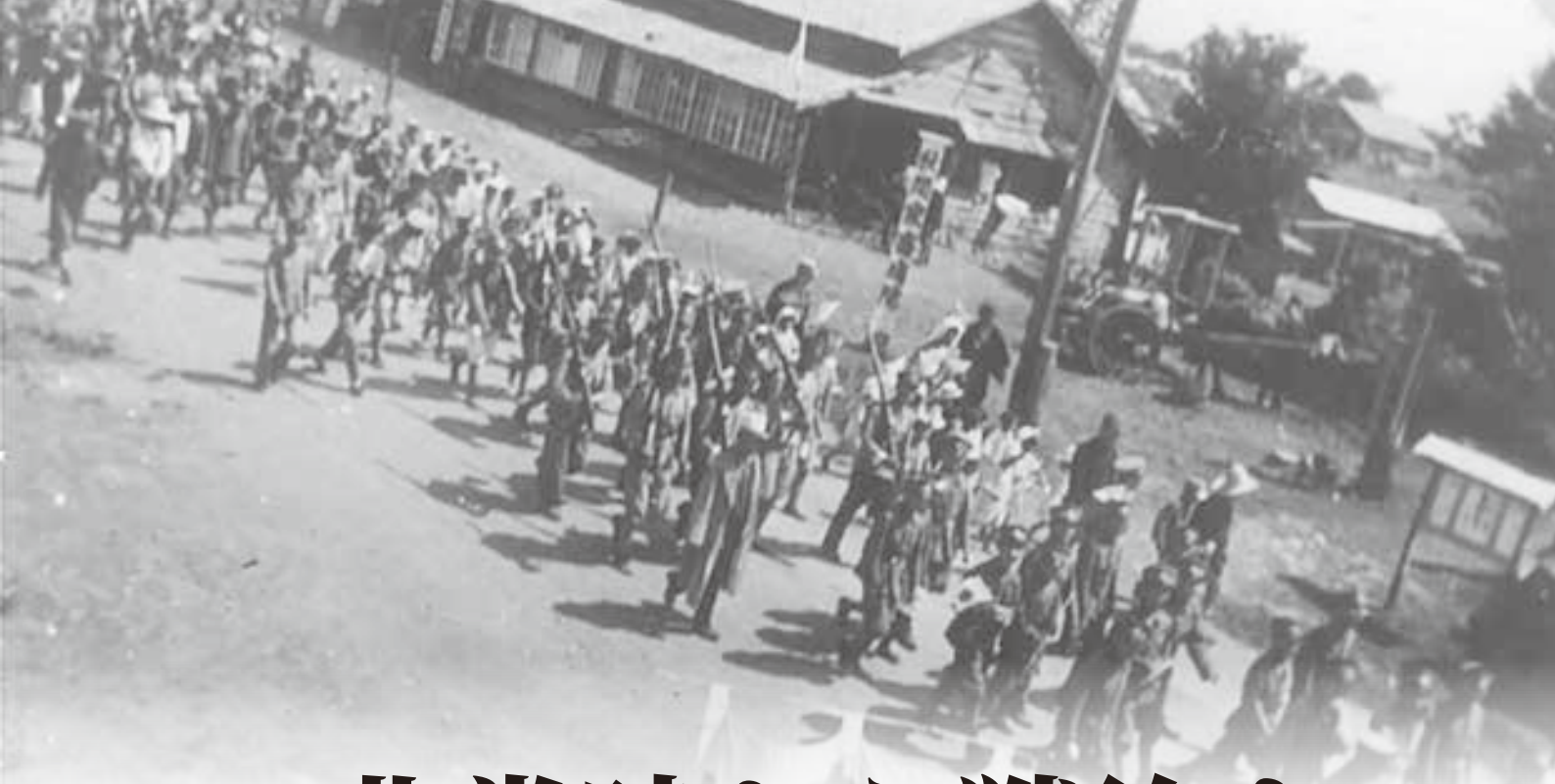
馬産と酪農中小家畜

十勝の畑作は開墾期以来、馬によって成し遂げられ馬産は農業の進展と併行して改良増殖が行われてきた。当村の馬産は１９２２年(大正11年)、産馬改良組合設立、１９２３年(大正12年)には十勝種馬所川上出張所を現在の若葉団地に設置、１９２６年(大正15年)第１回家畜市場を開設、開拓初期には１戸１～２頭の飼育であったのがしだいに増加、１９３３年(昭和８年)には飼育農家１戸当たり２～４頭になり熱心な馬産家が先頭に立ち、馬産地として名を上げるようになった。農家にとって耕馬としての重要さに加えて子馬の販売が毎年の貴重な収入源となって、１９６５年(昭和40年)頃、機械化で姿を消すまで馬産は隆盛を続けた。

代表的な畑作地帯であった士幌では、馬に比べ畜牛の導入は遅々としていた。１９２１年(大正10年)頃池本柳平が池田から乳牛３、４頭を連れて来て市乳をはじめ、１９２４年(大正13年)藤内秀吉が幼児のミルク代りに平田獣医から乳牛１頭を購入したことなどがある。

村農会では混同農業として乳代による年間を通しての収入源、てん菜、赤クローバー堆肥の増産と組み合わせて乳牛の導入を奨励し、昭和４年には村の補助牝牛の制度を発足させた。

１９３３年(昭和８年)には47戸、１０９頭を数え２年後の１９３５年(昭和10年)には１０１戸、２３３頭までに増えた。１９３６年(昭和11年)、産業組合が集乳所を建て酪農は着実に発展するかに見えたが、戦時体制下に入り人手不足と食糧増産命令のため乳牛数は一時激減し、昭和30年代になって農家経済再建対策としてようやく酪農に対する農家の関心が高まった。



第五章　非常時から戦後まで

1、非常時

非常時突入と上達村長

上達　小二郎

名村長と慕われた野沢文治の後任として1936年（昭和11年）4月、大樹村初代村長を勤めた上達小二郎が着任した。上達は永く道庁勤務をしたこともあり、重厚誠実家肌で健脚な「わらじ村長」であった。在任期間は3年と短かった。この時期おおむね村政は安定期であったが、日本は戦時色がしだいに濃くなり村長は激励、慰問といったことに忙殺された。

1932年（昭和7年）6月に起きた満州事変、それに引き続き翌年1月上海事変、同年3月満州国独立、1933年（昭和8年）3月に日本は国際連盟を脱退、翌年10月ワシントン条約破棄、1936年（昭和11年）には軍縮会議も脱退して国際的に孤立する一方、満洲大陸に兵力を増強、国内では重大時局に処し、緊張が高まっていった。

村会議員と役場職員（昭和12年）

こうした中に1936年（昭和11年）秋、北海道で陸軍特別大演習が催され天皇陛下が初めて十勝に行幸、大樹の拓殖演習場などの御視察があり帯広市緑ヶ丘の帯広飛行場において、御親閲が行われた。

十勝、釧路国、根室、網走の各地から在郷軍人、中等学校青年学校、青年団1万6000人の分列行進、女子中学校、女子青年学校、女子青年団5300人による奉唱部隊が参加、2万人が行事を拝観した。このとき士幌村から265人が参加した。

北海道での特別大演習は大陸戦争の予行演習だったともいえよう。

出征兵士と徴用馬

日中戦争がぼっ発して20日を経た1937年（昭和12年）7月28日夜、大量の動員令召集令状が役場へ到着。村民を驚かせ戦争の現実に極度の緊張感に包まれた。現役の兵役を終えた予備役、後備役にあるもの20人、軍隊経験のない補充役にあった者28人であった。いずれも20代、30代の若者

出征兵士車窓の別れ（昭和13年頃）

で既に中年に達したものもあり、一家を支えている者が多かった。5日後には連隊に入隊し短期の教育を受けたのち戦地へ向かった。召集令状は矢継ぎ早やに届き、軍籍にある者はいつ召集が来るかと緊張の日々を送った。本籍が府県にある者には電報で通知が入り、原隊へ入隊するためには翌日にも出発しなければならないことがあった。

戦火が広がり、1941年(昭和16年)12月大東亜戦争に突入し1945年(昭和20年)8月悲惨な終戦を迎えるまで、出征兵士は増える一方で1943年(昭和18年)12月には、徴兵年齢が1年引き下げ19歳となり村内の中年青年男子の大半が、召集あるいは徴用され終戦時にはその数250名から300名に達していたものと推定される。戦争には兵士と共に軍用馬が従軍し、馬産地の当地では大量の馬が徴用または購買された。1937年(昭和12年)頃、第1回の大量徴用では飼育馬全部が引きつけられその場で購買が決まり、出征兵士に準じて日の丸で愛馬の見送りがなされた。市場価格よりも高い値段であったが最も主力の耕馬がとられたあとの補充がつかず、農作業に難渋することが多かった。戦時中は軍用保護馬に指定された馬は、毎月1回指導員がついて鍛錬会が行われたこともあった。

軍馬徴用勢ぞろい　東2条通り(昭和12年頃)

青年たち

青年はつねに国家や郷土の原動力であった。ことに戦前は早くから軍事力の予備生として、男子青年教育が重要視された。開拓初期向学心に燃える青年たちは、尋常科6年を卒業すると家業のかたわら夜学に通い、へき地の教師は真剣に補習教育に当った。1926年(大正15年)各小学校単位に青年訓練所が置かれた。訓練所では陸軍軍服に似た訓練服を着て、一般教養学科とともに軍事教練を受けた。各通学区域保護者会では、寄付を集め教練用の銃や剣を調達、指導員には各地区の在郷軍人が村長から任命された。教練の単位修了者には軍隊の在営を半年短縮する特典が与えられた。

女子青年については、各小学校単位に冬季間裁縫教室を開設、和裁手芸教養講座を開き士幌では女子実科女学校に昇格していた。

1935年(昭和10年)青年学校令により、訓練所、裁縫教室は青年学校に統一になった。青年学校では男・女とも公民教養学科、職業科があり男子ではやはり教練科が重視され、教練科について毎年釧路連隊区の将校が来て訓練の査閲をして受閲者の手帳に記入された。戦争が激烈を加えた1943年(昭和18年)には、村内8つの青年学校を士幌1校に統合したのであった。

青年学校査閲記念(昭和13年頃)

青年学校軍事教練

古山村長と常会組織

上達村長は満3年在任し、1939年(昭和14年)4月尻岸内村長に転任、後任には西足寄村長の古山佐作が着任した。この頃から戦火は中国全域に広がり、青壮年が次々と戦線へと送り出され戦死者の村葬がたびたび行われ、1938年(昭和13年)5月には、国家総動員法が一部施行になり国民生活は、しだいに統制が強化されていった。食糧増産と戦死者遺族や、出征遺家族の援護は銃後の務めであった。銃後奉公会が組織されて慰問袋、慰問文の発送、援農が頻繁に行われた。1940年(昭和15年)11月銃後奉公会によって出征兵士家庭の全戸を廻って、留守家族の写真を撮り小冊子

役場職員と古山村長(昭和14年9月)

「つわものの郷」として前線兵士へ送った。２４６家族分が掲載されたこの本が郷土出身兵士を勇気づけ、肌身離さず愛用された。他村には例の少ない好企画であったといえよう。

国は臨戦体制にともない国家総動員法の一部発動により、あらゆる国内法に優先して国家目的のため国民を徴用したり、物資を徴発、収用できることとし村内でも農業者以外の業者の整備が進められ、徴用令で軍需産業に向けられ、やがて労働に耐えるものはすべて生徒や児童も含めて、勤労報国隊を組織して食糧増産や重要産業の増強に従事し、国民精神総動員運動によって遂行を図った。

大東亜共栄圏確立、世界新秩序建設の目標のもと大政翼賛会が１９４０年(昭和15年)12月結成された。村内では行政区を廃止し部落会、町内会を単位として隣組の常会に姿を改め村の既設の組織を再編成し、翼賛体制の細胞として利用し、「新体制」に入った。

2、大戦そして敗戦

太平洋戦争と生活

昭和12年以降の日中戦争は宣戦布告がないままの戦争であった。中国全土に戦線が拡大する一方、日本は国際的に孤立しアメリカをはじめとする諸国包囲の封鎖態勢により、国内経済は破滅に向って追いやられ、日米交渉は全く進展を見ず窮地に立った。ついに日本は１９４１年(昭和16年)12月、アメリカおよびイギリスへ宣戦を布告し同時にハワイおよび太平洋各地において、奇襲作戦を行い第２次世界大戦へ突入し、国民は驚きと緊張に包まれた。

防空演習(昭和17年頃)

太平洋全域にわたり激戦が展開、戦果ニュースに一喜一憂する一方、国民生活はかつて経験したことのない耐乏と統制下に置かれた。

戦時下から終戦直後にかけて住民生活は日を追って深刻を加えた。男の働き手はほとんどが戦場へかり出され、婦女子、失業同様の事業主、児童生徒は勤労報国隊を編成し、援農と食糧増産に追われ、または軍需工場へと徴用され終戦近くには、ガス用原料木炭生産、あるいは航空燃料のため三股国有林で松根油採取も行われた。兵器材料不足のため家庭の金属製品はナベ、カマに至るまで回収された。十勝および府県から中等学校生徒が報国隊を編成して、村内に宿泊し援農に当たり婦人会が動員されて炊事に当った。

婦人組織としては、１９３６年(昭和11年)発足した国防婦人会支部が各地区ごとに分会を設け、１９４２年(昭和17年)には愛国婦人会と統合、大日本婦人会支部として、全婦人が参加した。白いカッポウ前掛けにたすきをかけた制服で、出征兵士の歓送迎、戦没者村葬の参加、慰問袋、出征家族の援農、防空演習、国土防衛隊、援農学徒の炊き出しにと日夜をついで目ざましい活躍を続け銃後の主役を担った。

昭和13年頃の士幌市街中央(軍馬の出征)

国民ひとしく国土防衛にあたるとして、１９３９年(昭和14年)６月には青年学校、青年団、軍友会、火防組合、衛生組合、婦人会などを網らして士幌村防護団を結成、１９４１年(昭和16年)には消防団と防護団が合併し士幌警防団として発足した。各家庭は空襲に備えて燈火が外にもれないように遮光し、防空訓練を繰り返し各戸に防空用具を備え、戦争末期には米軍上陸に備え竹ヤリで防衛訓練し戦意を昂揚した。

農家では重要作物の作付が割当てになり、労働力不足で畑が荒れるのに加えて肥料が欠乏し、草を刈って堆肥を増し、ヤチ坊主を焼いたり灰をつくったりしても、減収を免れなかった。地下タビや軍手がなくなりハダシで畑仕事をしたり、子どももゾーリで登校した。

中士幌空襲さる

戦争が末期症状を呈した１９４５年(昭和20年)６月下旬には、しばしば敵米軍機が本道上空に現れ、警戒警報、空襲警報が鳴り響いた。７月14日はＢ52爆撃機および艦載機約３００機が本道主要都市を空襲、翌15日ほぼ同数の敵機が各都市を爆撃および艦砲射撃をも加えた。午前８時頃、本別市街上空に艦載機47機が現われ空襲警報も出ないうちに、攻撃が開始され大混乱

に陥り56分もの間集中的に、機銃弾を打ち込み爆弾を落し本別市街に壊滅的打撃を与え、その轟音は士幌の空までゆるがせた。

その日午後2時頃、敵機の大群が士幌市街の西方を北に向い、1時間ほどして反転南下、やがて25機が音更の亜麻工場、変電所などに銃爆撃を加え、火災、死傷者を出した。編隊は中士幌上空に現れ、その内の3機が急降下の姿勢をとったと見た瞬間バリバリと銃撃を始めた。住民は防空壕にあるいは、押入れに入って息をひそめた。このとき機銃弾の一発が防空壕入口にかがみこんでいた、田中ミサヲの太股に命中した。村内唯一の空襲負傷者であった。

被弾家屋は十余戸を数え、重森十一の住宅から出火したが大事には至らなかった。

政府は20年3月、国民義勇隊の結成を決定したが本村では結成されずに終わった。4月皇土決戦訓が布告になり、6月に国民義勇兵役法が成立、15歳から55歳までの男子と17歳から40歳までの女子は義勇戦闘隊要員とされていたが、幸いこの1億総玉砕作戦は、実施されるには至らなかった。

村長更てつと敗戦

諸戸　大三郎

国民服にゲートルばきで戦時体制下の激務に奔走していた古山村長が、1944年(昭和19年)11月退職した。先に1942年(昭和17年)9月、下居辺28番地の共同放牧地235町歩の払い下げを受けた際、道庁係官にポケットマネー若干を贈ったのが贈賄の罪に問われたことによるものであった。道庁係官が別にいくつかの収賄犯罪を犯していて、証拠調べに関連して出て来たもので、村長は犯意がなかったと主張した。古山は罰金500円の判決を受けたことにより辞任し、村内では同情と退職を惜しむ声があった。

その頃隣村の鹿追村長も全く同様事件で同年5月に退職した。鹿追村長の場合、士幌村内吉野地区にあった国有未開地200町歩の払い下げを受けた際、同じ道庁係官に対する贈賄の疑いで身柄留置取調を受けたことによるもので、士幌村民は村内の土地を隣村にとられ驚いた。

古山村長の後任には浦幌村吏員、諸戸大三郎が着任した。諸戸は35歳の青年村長で抜てき人事であった。国内は決戦体制に入り満18歳以上を兵役に編入、少年兵、産業戦士、青年学校の馬事訓練などが行われ、家庭の日常生活はいよいよ窮屈となり配給だけでは足りず食糧の買出しに出なければならなかった。

役場吏員も教員も一般の住民も男は巻きゲートル、女はモンペが日常の姿であった。

防空演習がしばしば行われ、各戸で防空壕が作られ小学校では空襲警報があると防空壕に入りきれず、風防林に待避して不安な時間を過ごした。

敵軍がいつ本土に上陸してくるか本土決戦に備えている時、1945年(昭和20年)7月最後通牒の、ポツダム宣言が出され8月6日に広島、9日長崎が相次いで世界最初の原子爆弾で潰滅、同8日にソ連が参戦、絶対絶命の切迫した空気に悲壮感がみなぎる内、突如終戦の詔書が天皇陛下のラジオ放送によって告げられた。1945年(昭和20年)8月15日正午、重大放送の予告にどこでもみなラジオの前に耳をすました。聞き馴れない天皇陛下のお声に瞬間何が起きたか判断できなかった。やがてそれが戦争に敗れたと判った時、号泣から昂奮、呆然自失とさまざまで容易に衝撃から立ち直ることができなかった。農家では亜麻引きの最中であったがしばらくは亜麻に手をつける気力も失っていた。

痛恨無言の帰還

士幌駅へ降り立った戦死者の遺骨(昭和14年9月)

満州事変から始まり太平洋戦争終結に至るまでの14年間、村からはおびただしい数の若者たちが次々と戦場へ送り出され、その中には多くの兵士が敵弾に倒れ海戦で沈み、あるいは病に命を奪われていった。1938年(昭和13年)8月、村で初の戦死者が出て村葬が粛然と営まれ、以来戦況が拡大するとともに次々と悲報が届き、親や妻子は家門の名誉と涙をこらえても明日からの途方に暮れ悲嘆はつのるばかりであった。戦況が不利になり南海の島々で玉砕、爆沈が続き遺骨のない空箱の骨箱を迎えてや

りきれない思いの葬儀が営まれた。

終戦となり復員してくるものと待っているところへ次々と戦死の公報が届き、二重、三重の悲しみにひっそりとした公葬が行われひとしお会葬者の涙を誘った。村史によれば村から出征して行って戦没した者および、その後遺族が他から転入して来た者も加えると町戦没者数は176名を数える。

戦後の混乱

あらゆるものを戦争遂行のために集中し、苦難に耐えてきた国民は敗戦によって一挙に目標を失い、権威としてきたものがついえ去り不安と窮乏が国を覆って、社会秩序が混乱した。終戦の1945年(昭和20年)秋はひどい冷害で土幌村の水稲、大小豆は反当り0・3俵という皆無作に近い凶作であった。全国的に肥料、労力不足に加えた冷害によってこの年の米の生産は戦前の66パーセントに過ぎず、国内は深刻な食糧不足に陥った。終戦直後大都市1人当りの配給量は1日297グラム(二合一勺)で、それも代用食のいも、大豆、豆かすなどを入れて計算し、食糧全体で1200キロカロリーにしかならなかった。餓死寸前の人たちは必死になって買い出しに殺到し、主産地の土幌線は都会からリュックサックを背負った人たちで混乱し、えん麦、でん粉カスまでが日用物資と交換取引された。村内非農家も同じく農家へ買い出しに日参した。

列車乗降

農家は常会ごとに割り当てられた過大な食糧供出割当てが消化できず紛糾し、地力の差の不公平を不満として実行組合の分裂を生じた。あまりの強行に自家保有食糧から種子までさいて供出してしまうものがある半面、たくさんの雑穀をかくしてヤミ取引でボロもうけをするものもあった。

1946年(昭和21年)2月政府は食糧緊急措置令を公布し、供出割当てを完納しないものには差押え、強制買上げを強行することにした。村では官憲による強権発動により供出未納農家の家宅捜索がされるということで、異様な緊張に包まれた。

衣料品をはじめ生活必需物資の窮乏は戦時中よりも更に深刻化し、異常な物価暴騰を来し、政府は食糧緊急措置令と同じ日に金融緊急措置令を出し、新円を発行、旧紙幣を封鎖し1か月の引き出しを世帯主300円、その他世帯員1人につき100円に制限し、インフレ鎮静に効を奏したがやがて元通りインフレは昂進した。封鎖した預金は1948年(昭和23年)7月には解除になった。

1947年(昭和22年)末には、食糧事情の危機状態を脱した。配給事情が好転し始めたのは翌年11月のことであった。戦争が終わると同時に国内にいた兵士の復員がはじまり、海外からの復員船、引揚船が到着し村内は若者で活気を取り戻し復興の気運がみなぎった。

商工業者と配給

戦中戦後の物資の欠乏期には国内の流通組織はほとんど機能を停止し、村内の商店は潰滅状態となり商工業者の多くが転廃業をした。

政府の小売業者整備要綱(企業整備)が実施され、土幌小売業整備委員会を設け戦時体制に即応し、整備統合を進めた。

十勝農学校食糧報国隊と受入奉仕(昭和18年)

主食の配給は、1943年(昭和18年)5月北海道食糧営団土幌出張所を設立し、次の代配給所で配給することになった。

第1配給所　真井　一三(士幌)
第2配給所　士幌産業組合
第3配給所　居城兼二郎(中士幌)
第4配給所　清水辰雄(下居辺)

統制経済は1937年(昭和12年)から鋼材、1938年(昭和13年)綿製品、石油、ゴム、米、砂糖、衣料、木炭などが統制品となり自由に取引きができなくなった。1942年(昭和17年)2月から衣料品が切符制となり、1943年(昭和18年)には物資の大部分が重要物資になりすべて切符制としたが、極度に品不足のため配給品は少なくヤミ取引が盛んになっていった。

1946年(昭和21年)は最も欠乏時期で主食は各種代用を合わせ、酒は5か月、

焼酎5か月、砂糖1か月、食用油2か月しか配給がなかった。

狂乱を見せた国内経済は、1949年(昭和24年)頃になるとかなり落ち着きを見せ、公定価と闇物価の差が縮まり物資が出回り商店街もしだいに活気を取り戻して行った。

疎開者と戦後開拓

東京都が空襲によって焦土と化していった戦争末期の1945年(昭和20年)5月、政府は都民の疎開と食糧増産をねらって北海道開拓移民を募集した。士幌村への集団帰農者42世帯は8月7日上野駅を出て青森で空襲のため7日間滞在、青函連絡船の中で終戦を聞き士幌駅へ下り立ったのは8月16日であった。一同は士幌市街で分宿し翌日村内各常会へ配置され、常会場、空家などが仮住居となった。村内にある防風保安林100間幅の内75間を開拓地に解放し、1戸当たり300間、7町5反が配分された。入植地の大木は伐採され小柏が密生していた。一同は中小企業者などで戦災を逃れて来村したものの農業経験も農道具とて、一切無く、鍬で1本の小柏の根を堀るのに半日もかかることもあり、開墾は容易に進まなかった。近くの農家を手伝って食糧を分けてもらい翌年は既墾地を借りて食糧などをわずかまいた(星田幸三郎談)。近隣農家の手助けや指導を受けて開墾を進めたが、資金難と馴れない労働によって生活は困窮を極め、やがて東京都が復興に向うと離農して行く者が相次いだ。

終戦による大量の復員者、海外引揚者および食糧を求めて都会から来住した人々、あるいは農家二男、三男に対し戦後開拓者として集団帰農者と同様開拓地が配分された。これらは土地に縁故があり農業経験者が多く本家や縁故者からの応援が得られ開墾が順調に進んだ。政府は開拓者に対し補助金、融資を行い開拓営農指導員を配置し営農の促進を図った。1948年(昭和23年)5月には、士幌村開拓農業協同組合(組合長　勇富五郎)が創立されたが経営不振に陥り、1950年(昭和25年)以降士幌農協の支援によって再建し1956年(昭和31年)3月には組合は解散し、関係業務は士幌農協が吸収した。のちの新田地区を除く戦後開拓者による開墾実績は1961年(昭和36年)末調べで、入植者延123戸、開墾508町歩であった。

カシワ林に挑む開拓者

3、農協と農地改革

農業会のでん粉工場とブトウ糖工場

士幌でのでん粉工場の始まりは西上工場で、1929年(昭和4年)頃西上地区民有未墾地開放の時、支庁の補助でウォップ川西3線に小さな工場を建てたが、操業に馴れた者がいなかったため休止していたところ、1931年(昭和6年)に入植してきた倶知安団体によって操業された。1935年(昭和10年)には株式組織としたが小規模で近隣の者の利用に止まった。1933年(昭和8年)頃、音更川、川西30号で士別の林某による林第三工場が水車利用で操業を開始した。1934年(昭和9年)居辺川朝陽小学校付近で士別から来た渡部礼次が、タービン水車によるでん粉工場を建て、馬鈴しょの作付をすすめ、秋から操業を開始し、いままで自家食糧用にとどまっていた馬鈴しょはこの頃から経済作物として作付が増えていった。渡部工場が堀作太郎、山内観二郎に譲渡された後、1943年(昭和18年)には下居辺地区に移譲され下居辺共同でん粉工場として操業され、組合員の馬鈴しょを処理して大きな成果を挙げた。でん粉工場の有利性が着目され村内各地に工場の建設が相次いだ。

林でん粉工場(昭和14年)

各工場では増毛から漁師を集団で招いて原料馬鈴しょの掘取を行って農家の労力緩和を図った。

こうして馬鈴しょは、1933年(昭和8年)の作付が75町歩に過ぎなかったのが、でん粉原料の作付が増え、戦争中の軍需作物としての奨励もあって、1946年(昭和21年)には1000町歩を超えるまでになった。

士幌村農業会太田寛一専務らはかねてから、農産物は耕作農民の手によって加工販売しなければならない

との信念を抱き、飯島房芳による下居辺工場の成功によって確信を得ていたところ、中音更工場（当時杉原工場）売却の意向を受け、１９４６年（昭和21年）６月役員会に諮って45万円で購入することになった。これに対し会員の間から、給料取りに工場を任せたら赤字になるなどとの強硬な反対意見が沸騰し、７月の総代会総会はもめにもめた。結局太田らの強い意思と説得により買い受けが決定し、昭和21年（１９４６年）９月総責任者藤咲敬のもと、操業開始となった。この年、馬鈴しょは豊作であった。工場の成否は農業会の将来がかかっていた。与望を担って工場主任の衝に当たった安村志朗は昼夜不休精魂を打ち込んで研究改善を重ね、また一部トラック輸送を取り入れた結果、初年度工場事業は、従来常識とされていた歩留りをはるかに超え、でん粉価格の値上りと相まって１シーズンで実に２００万円という驚異的な利益となり、この内１５０万円を生産者に還元し農民の不安はいっぺんに解消し、農民による加工事業への認識を深くした。翌年度は工場設備に改善を加え操業し、買収前の工場最大能力製品４０００袋に対し、その年は７５００袋を製造、歩留りもさらに向上前年にまさる好成績を収めた。かくして士幌村農村工業飛躍発展の礎が固められた。

中士幌ブドウ糖工場（昭和26年頃）

１９４６年（昭和21年）、北井利照と共に中士幌でん粉工場を創業した洞田逸治は、ブドウ糖工場設立の計画を農業会に持ち込んだ。洞田の熱意に同調した農業会では役員会で出資を決め、１９４７年（昭和22年）５月の農業会総会に提案された。総会では前途を心配する反対意見が強く出され賛否両論が対立したが、出資を決定、同年６月北東産業株式会社（社長洞田逸治・専務太田寛一・常務居島治男）が設立された。中士幌市街（現在の北団地）に工場建設が始まった。翌年２月工場操業直前に工場が全焼する災厄にあったが３か月で再建、同年５月には試運転し感動の初製品ができた。原料は生でん粉を使用するためでん粉工場と連動し、乾燥が省け二番粉も使用できる利点があった。ブドウ糖のブームが１・２年で去って同じ工程で水アメ製造を行い、全道隋一といわれる製品を出すまでになった。

農地委員会（昭和23年）

水アメ部門は原料難、価格の大暴落という業界の情勢の変化から１９６０年（昭和35年）には、工場を閉鎖した。農村工業の華として中士幌に繁盛をもたらした工場の火は十数年で消えた。

農地改革成る

北海道開拓は資本家の地主制度に依存したところが大きく、士幌村内でも小作農家が半分を占めていた。政府は戦前から安定農家育成のため１９２６年（大正15年）、自作農創設維持制度を発足させ士幌村では自作農資金の貸付を奨励し、１９３３年（昭和８年）堀田農場（小作１３０人）、１９４１年（昭和16年）松室農場（19人）、１９４２年（昭和17年）田辺農場（６人）、１９４３年（昭和18年）士幌農場（80人）、１９４４年（昭和19年）鈴木初太郎農場（８人）、１９４６年（昭和21年）鈴木有三農場（21人）、新田農場（64人）の大農場が解放された。１９３４年（昭和９年）から１９４３年（昭和18年）までの自作農事業による創設維持は２３４戸、２３７８町歩にのぼっていた。

また１９３８年（昭和13年）には農地調整法が施行され、農地委員会が置かれ適正小作料の設定、小作料の減免調停などを行った。それまでほとんどが小作料は物納であったのが、１９４１年（昭和16年）からは畑は適正小作料が定められ金納とされた。この決定で畑は14等級に分かれ、平均１反歩１円88銭、田は物納で平均１斗７升であった。この年は凶作のため減免も決め畑は２割から５割、田は全免とした。

終戦と共に進駐軍占領政策の農業民主化のうち、農地解放が大きな課題とされた。戦前の農地改革ではまだ多くの小作地が残されていた。

１９４６年（昭和21年）４月調査によれば、自作地６３００町歩小作地２９００町歩となっていた。

１９４６年（昭和21年）10月第２次農地改革関係法律が制定され不在地主の全所有小作地および在村地主の

所有小作地のうち4町歩を超える土地の耕作者への強制譲渡、農地価格の公定が定められ新しい農地委員10人が公選で選ばれた。

地主からの農地買収は1947年(昭和22年)3月から同年12月まで7回にわたって行われ、耕作者に対する売渡しは1952年(昭和27年)10月で終わった。

◇士幌村での実績　買収　4754町歩(付帯採草地を含む)
売渡　4658町7反歩(付帯採草地を含む)

食糧供出割当の適正を期するため1947年(昭和22年)8月農業調整委員会が生まれ、農業技術改良普及の農業委員会(1949年(昭和24年)農業改良委員会と改称)が1948年(昭和23年)12月に組織されていたが、1951年(昭和26年)7月農地委員会と共に3委員会が解散し、同月新らしい農業委員会(会長岡部錦三)が発足した。

農協の設立

士幌村農業協同組合事務所

戦時中統合発足した農業会は、終戦により1945年(昭和20年)10月、法律を改正し戦時統制団体としての色彩を取り去り民主化が図られた。

農村新生の気運に乗じ農業会は前記でん粉工場の経営をはじめ、病院の経営、紡毛工場、農村電化着手、下居辺支所開設など農村再建への意欲を燃やした。

占領軍総司令部は農地改革の成果の上に更に、農村民主化を進めるため指示を発し、1947年(昭和22年)12月農業協同組合法の公布を見た。同法は民主的協同組合の諸原則を取り入れ、1、設立・地区・加入脱退の自由の原則　2、農民主体制の確立　3、農業生産協同体の趣旨に基づく生産事業の強化　4、行政官庁監督権の制限に要約され、農地改革の成果の上に農業生産力の増強と勤労農民の経済的、社会的地位の向上を図ることとしたものである。

士幌村農業会は1948年(昭和23年)2月解散し、同月引き続き農業協同組合が設立された。

農協は15名の発起人の届出があれば自由に設立できることから一部小組合併立の形となった。

中士幌農業協同組合

▽士幌村農業協同組合
1948年(昭和23年)2月20日設立総会
正組合員827人
組合長＝岡部金吾
専務理事＝長瀬健市

▽中士幌農業協同組合
1948年(昭和23年)2月5日創立
組合長＝脇原清輔
士幌村18号以南の農家70数戸と音更町中士幌区域の農家で構成、その後1村1組合が好ましいという動きから1956年(昭和31年)士幌村の大半が士幌農協に移り、残りも1964年(昭和39年)に移り組合は音更町農協に合併した。

▽士幌第一農業協同組合
1948年(昭和23年)春創立
組合長＝横山浅吉
生産協同体的な小組合という考えで結成したが、参加者がごく少数で士幌農協との二重加入が大半で、1956年(昭和31年)4月解散した。

▽士幌村開拓農業協同組合
1948年(昭和23年)5月3日創立
組合長＝勇富五郎
戦後開拓者によって結成したが組合員は、士院農協へ二重加入しており1956年(昭和31年)3月解散した。

4、民主化・復興

公選村長登場

吉田　市太郎

終戦と共にマッカーサー司令部は戦時中、戦争指導に当たった者たちを、民主国家を再建するためにふさわしくないとして一切の公職に就くことを禁止した。村内では大政翼賛会支部長(村長)、在郷軍人分会長、翼賛壮年団長などが該当し、諸戸村長は1946年(昭和21年)11月職を退いた。終戦前後の最も困難な時期2年6か月の任期であった。諸戸村長退職のあとしばらくは助役の坂本睦雄が村長代理を勤めた。この間1946年(昭和21年)9月の地方制度改革で今までの北海道二級町村制の流れを汲む指定町村制度が廃止され、士幌村は初めて全国各町村

と同格に自治権をもつことになった。また選挙は新憲法下で婦人の参政権が認められた。

１９４７年(昭和22年)４月、初の民選村長の選挙が行われ元農業会長現農業会理事・藤咲敬、産業組合理事・村議会議員・吉田市太郎、農業・横山浅吉が立候補した。開票の結果は大方の予想に反し吉田が藤咲を２９３票もの差をつけて当選した。選挙民は知名度よりも新鮮さと吉田のもつ雄弁で革新的傾向を新時代にふさわしいものとして選んだのであろう。

同年同月末には新制度による村議会議員選挙が行われた新議員は、定数が４名ふえて22名としこの内９名が新人であった。

吉田村政の頃はすべてが民主化のかけ声のもと新生、再建に活況あふれた時代であった。

十勝農村部へき地を結ぶ省営(国鉄)バス誘致運動が実を結び、１９４８年(昭和23年)士幌に営業所が開設され、新田線・下居辺線・佐倉・帯広線・本別・高島線と路線を拡大、１９６１年(昭和36年)頃は士幌営業所で６線18往復を運行していた。

村内隅ずみをマキ・石炭のガスエンジンで砂利道をガタガタと走る姿は戦後の復興を象徴し、住民は平和と文明を実感した。

１９５０年(昭和25年)７月には皇族としては初めて、三笠宮崇仁殿下御夫妻が全国レクリエーション大会に来勝され、本村にもお立ち寄りになり村長が村勢を説明した。

吉田村長は食糧供出問題をはじめ、新制中学校校舎の新築、高校分校誘致など重大な案件をこなし、官選村長とはひと味異った日常活動が住民に詳価され、１９５１年(昭和26年)４月の改選には強敵と見られた農協組合長・村議会副議長の岡部金吾を大差で破り再選を果した。

当選　吉田市太郎　２３９７票
　　岡部金吾　５６３票

国鉄自動車営業所(昭和37年)

三笠宮殿下夫妻御来村

吉田村長は圧倒的な票を得たがその頃村内には次のような難問題がくすぶっており、これらが結びついて村長不信にと発展し苦境に立った。

①新田牧場問題
②ウオップ川水力発電の失敗
③村税滞納の累積

以上のほかにもいくつかの批判も出て、村議会できびしく取り上げられついには、村民大会が開かれて辞職を勧告するまでに事態は進展し、村内は騒然とした。吉田は責任を痛感し村民に不明を詫び、１９５２年(昭和27年)２月再選後わずか10か月で自ら村長の席を退いた。

民主教育の創造

戦争終結後の１９４５年(昭和20年)９月、文部省は「新日本建設の教育」を発表、軍国主義教育から人間尊重の教育への大転換が行われ、学校現場では御真影の撤去「墨ぬり教科書」の出現から始まって、教育内容の大きな変革がなされた。

１９４７年(昭和22年)３月、教育基本法および学校教育法が公布され同年４月から、国民学校は元の小学校に改称、６・３・３・４の新学制によって中学校が一斉に開設された。

村では中学校の新設が大きな重荷であった。高等科が併置されていた士幌、中士幌、上居辺、下居辺、佐倉の５校は取り敢えず小学校に併置し、川西地区は北中音更小学校に併置し北中音更中学校として、各校とも５月１日に開校した。

中士幌中学校が新しい土地を求め同年11月新築移転、士幌中学校が翌年11月に新築移転した。１９４９年(昭和24年)秋には下居辺・上居辺が小学校敷地内に校舎

川西中学校(昭和26年)

昭和28年完成した士幌高等学校

を新築、佐倉は１９５０年(昭和25年)に小学校に併置新築した。

川西３地区の中学校を１校とした北中音更中学校は１９４８年(昭和23年)２月、北中音更小学校の近くに仮校舎を建て移転し、翌年３月川西中学校と改称、１９５０年(昭和25年)３月には新校舎を落成移転したが、西上地区住民が強く独立を要求し、１９５２年(昭和27年)９月には西上音更中学校として裁縫所、常会場を仮教室として独立、同年12月には校舎を新築した。

中学校校舎の建設は村財政を圧迫し、物資不足の折から構造も充分とはいえなかったが、各中学校は新しい学制の中で、のびやかに学習が続けられた。

１９４８年(昭和23年)７月には「教育委員会法」が制定されたが猶予期間があり、村教育委員会が発足したのは１９５２年(昭和27年)９月であった。

委員は公選により選出されるものであったが村では無投票当選４人と、村議会選出の洞田逸治が加わり委員長には洞田が選ばれ教育長は助役の八巻国夫が兼務した。その後教育委員の公選制は１９５６年(昭和31年)、法改正により首長が議会の同意を得て任命することになった。

戦後の教育熱の高まりにより地元に高校誘致をしたいとの住民の運動が実り、１９５０年(昭和25年)５月、川西農業高等学校の士幌分校が士幌中学校の廊下を仕切り仮教室として開設された。

１９５２年(昭和27年)11月には悲願がかなって、第二種高校として村立北海道士幌高等学校が誕生した。西２線１６０番地(現在の中央公園)に農協から用地を取得し、１９５３年(昭和28年)７月白亜の独立校舎が完成した。農耕期は自家営農に従事しながら学習し、冬期通学するという修業年限４年間の昼間定時制高校働きながら学び、村を担う農村青年を養成する学校として、村民の熱い期待を集め、また女子教育のための別科も開設した。

農業改良普及員

戦時中、農業会に置かれた農業技術指導員は農協に引き継がれたが、国は農業技術指導の総合性を図るため農業改良助長法を制定し、１９４９年(昭和24年)各市町村に農業改良相談所(後に普及所と改称)を設置し普及員(初め食糧増産指導員)を配置した。

この時、農業技術員の多くが資格を取得し道職員の普及員になった。

農業改良普及員の改良風呂指導

古山村長と新農村

古山　左作

吉田村長退職後の村長候補については、村議会をはじめ有志らが村政紛糾の苦い経験から手堅く村を建て直し得る人物を物色し、元村長古山佐作を推した。

古山は１９４４年(昭和19年)退職後も村内に住み、十勝農協連の嘱託となり通勤していた。前任期中の手腕と円満な人格が村民の期待を集め、選挙は無投票で１９５２年(昭和27年)古山が再び村長の席に就いた。

古山は就任後直ちに村民に呼びかけ、税滞納を処理して村民の信頼を取りもどし、新田地区未墾地買収、士幌高校の創立など村づくりの基礎を固めた。ところが就任翌年の１９５３年(昭和28年)５月役場全焼の災厄が発生し村民を驚かせた。取り敢えず劇場に使用していた通称公民館を仮庁舎として新庁舎建設に当り、同年11月には落成、役場内綱紀の粛正を図り明るい村づくりを目ざした。

１９５４年(昭和29年)７月には農林省から道内で３番目の「新農村建設計画」の

火災前の士幌村役場(昭和26年３月)

指定を受け、約1年を費して村づくりの基本計画を樹立した。計画は村民のアンケート調査をはじめ、多方面からの分析により新田地区未墾地および広大な未利用地を開発し交通、治山および農業経営の改良を進め10か年間で耕地を31パーセント、1戸当り粗収益53パーセントの増加を達成しようとするものであった。1954年(昭和29年)12月には十勝川上流地域開発計画が発表され、本村の開発が総合的に取り上げられた。また、1955年(昭和30年)8月には積雪寒冷単作地帯特別助成村に指定され、村づくりへ力強く前進を始めた。

国鉄士幌線では1955年(昭和30年)10月からディーゼルカーの運行が始まった。翌年7月3日午前7時、士幌駅を出発上士幌方面へ向っていたディーゼルカーが32号付近に差しかかった時、突然正面から猛スピードで逸走して来た丸太積貨車に激突、乗客の内死者3名、重軽傷52名という大惨事となった。本村にとっても士幌線鉄道にとっても未曾有の事故であった。

診療所の経営と古山の再選

士幌村の医療施設は開拓初期からの滝口医院と、1946年(昭和21年)村農業会が北海道農業会に委嘱開設し、北海道厚生農協連に引継がれた士幌厚生病院があった。士幌農協では施設の老朽化の状況から、村に対し施設の移管を求めた。村では住民の要望に応え公的医療機関の必要性から、国民健康保険事業の直営として運営することになり、診療棟を全面改築し、1956年(昭和31年)2月、19床の直営診療所を開設した。

国保診療所

1963年(昭和38年)には老朽化が甚しい病棟を全面改築し、ブロック造りとし24床の病院とした。

公選第1期の終わりに診療所移管を果した古山村長は実績をふまえて、1956年(昭和31年)2月の村長選挙に再出馬した。吉田前村長が雪辱を期して立候補、両者大接戦の末、古山が再選を果した。

当選　古山佐作2210票
　　吉田市太郎1946票

演習地を拒否

秋間　勇

丸谷　金保

新田地区の原野で1951年(昭和26年)8月警察予備隊(昭和29年からは自衛隊)の演習が行われ、翌年の2月東ヌプカウシ山麓約1000ヘクタールを買収したい旨の申し入れがあった。予定地内には農協牧野があり村の夢を託す新田開拓地が含まれることから、村は強硬な反対要請を行い一旦は買収が断念された。

予備隊では1953年(昭和28年)村界を隔てた鹿追村然別地区の買収に成功した上、1954年(昭和29年)7月に再び士幌村に対し正式買収の申し入れがあった。この地区は村内で最も自然条件が劣るとされており、地元住民および開拓地の旧地主、また不況をかこつ商工業者など買収賛成者が根強く、村づくりのため欠かせないとする農協をはじめ多くの反対派と強く対立し、村内は騒然とした。

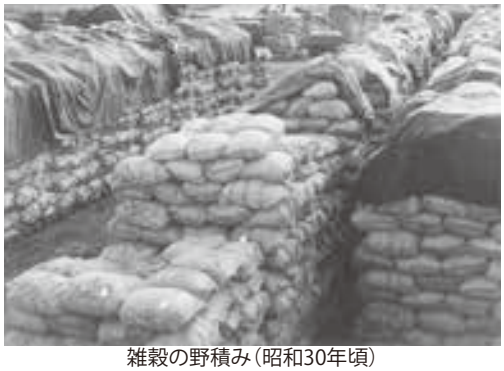
村内の団体機関を網らした士幌村新田地区演習地設置反対期成会(会長古山村長)が、1954年(昭和29年)8月結成され同日村議会で反対決議を行い期成会は精力的に反対の実際行動に移った、全村署名運動、大挙陳情、賛成派農民との懇談など枚挙にいとまない運動が行われ、同月末には事実上買収は断念され、ついに演習場問題は終止符を打った。この時反対期成会の事務局長として運動の中核となったのは、農民同盟事務局長丸谷金保であった。丸谷はこの後1957年(昭和32年)退職し池田町長となり、1977年(昭和52年)には参議院議員に当選、1989年(平成元年)まで2期12年議員に在職した。

また農業共済組合共済課長であった秋間勇は、陰にあって反対運動を成功に導いたひとりであった。秋間は戦前1939年(昭和14年)頃から太田寛一、飯島房芳と肝胆相照し蜜と乳の流れるユートピアを築こうと誓い合って有志青年たちを奮い立たせ、士幌の牛馬の改良に貢献したばかりでなく、農村工業のきっかけ、新田地区開発の推進、地力回復問題など村づくりに大きく画策し、太田、飯島ら

の実践の原点となったといわれる。

5、自由化と高度成長

農作物の自由化


雑穀の野積み（昭和30年頃）

士幌町農業協同組合旧店舗（昭和37年）

混乱から復興が進み長い間の統制経済が緩和され、1950年（昭和25年）3月馬鈴しょの価格統制が解除になり、翌年3月には米麦を除く農産物統制が撤廃された。1950年（昭和25年）9月には衣料切符制度が8年ぶりに廃止され自由経済時代に戻った。1950年（昭和25年）6月には朝鮮半島に動乱が起り国内は特需景気となり、豆類の価格が上昇し農家は好況を迎えた。1951年（昭和26年）秋から1952年（昭和27年）にかけ小豆が1俵5000円から7000円になり、凶作の29年には1万円を超えた。サラリーマンの1か月の給料よりも小豆1俵の方が高いといって農家の青年から冷やかされる時代であった。小豆作付1949年（昭和24年）が180町、1953年（昭和28年）が760町歩にもなり大正時代の豆景気が再来した。

家畜と農業共済事業

統制撤廃後の活況は農家の経営意欲を刺激し、馬産振興をもたらした。1949年（昭和24年）当時、2000頭の馬が1953年（昭和28年）には3000頭を突破し、1962年（昭和37年）頃まで3000頭台を維持した。1953年（昭和28年）農協の人工授精所にフランス産の種雄馬を輸入し、1957年（昭和32年）にも2頭輸入し本村の馬産改良が大きく進んだ。士幌産馬の名声は十勝先進地をしのぐ勢いとなり、十勝共進会において1957年（昭和32年）以来連続5年間団体優勝し、1960年（昭和35年）には各種目の1等を独占するという好記録をつくった。この年2歳馬共進会では坂本為吉所有馬が、201万円というそれまでの最高値で売却された。

酪農は戦時中食糧生産重点と人手不足のためほとんど潰滅状態で、1941年（昭和16年）には92頭であった乳牛は、冷害対策の上から戦後しだいに増加をたどり、特に1954年（昭和29年）前後の凶作不況の体験から積極的に貸付牛・融資牛の導入を図った結果、1955年（昭和30年）、1956年（昭和31年）両年で頭数が戸数とともに2・5倍となり33年には1260頭、351戸にまで達し、この年だけで173基のサイロが建てられた。一方牛乳については1953年（昭和28年）頃から集乳合戦が始まり村内では雪印と明治の他、宝乳業も入って競り合い、村内に不協和音を生じた。1956年（昭和31年）9月酪農民大会が開かれ、村酪農振興協議会（会長竹腰昇）を結成し集乳を農協で一元集荷し、農協が乳価交渉をして雪印・明治両会社に配分販売するという全道でも初めての方式をとり、1957年（昭和32年）9月には農協集乳所を落成した。牛飼育農家は1958年（昭和33年）以降減少し、畑作専業に戻る者が多かったが残る酪農家は頭数規模を拡大し、昭和40年代以降には酪農専業化が進んだ。

家畜市場（昭和31年）

水稲麦類および家畜に保険をかけ災害から守る農業共済事業（農業災害補償法・昭和22年制定）により、1948年（昭和23年）3月農業共済組合（組長　長瀬健市）が発足した。1949年（昭

家畜品評会（昭和37年）

和24年）6月からは開業獣医を採用して家畜診療所を開設、1953年（昭和28年）には中士幌にも分院を設けた。1970年（昭和45年）頃から家畜共済について加入率が低く、低額加入で診療の多元化など、組合の運営が困難な事態に立ち至った。1972年（昭和47年）から地区別懇談会で運営改善が求められ、業務を町に移管するという意見が出た。全国的にも例の少ないことなので町議会では特別委員会で慎重に調査検討を進め、町移管やむなしとの結論になり、組合は1974年（昭和49年）3月解散し、町が共済事業を行い、家畜診療業務は農協が行うことになった。

皇太子殿下でん粉工場を御見学（昭和33年）

農村工業の発展

1946年（昭和21年）に始まった農協のでん粉工場経営は設備の改良運営の合理化によって、成果を挙げ生産者へ還元したので、既存工場は太刀打ちができなくなり次々農協に吸収、さん下に入り、1954年（昭和29年）頃には村内生産原料いも30万俵のうち24万俵処理の体制を整えた。この間農協は、従来の工程が技術的に低い段階にありコストが高く製品品質が粗悪であることから、原始的方法を脱した合理的な方法を探究してきた。たまたま北大工学部大塚博教授の抱いていた構想と一致し、1951年（昭和26年）産から連続工程式の大規模工場の実験研究にかかり、確信を得るに至り1955年（昭和30年）4月、従来の概念を破った工場の建設にとりかかり8月試運転に入った。工場処理能力原料いも1シーズン60万俵、建設費1億2000万円という規模は、国内に例がなく東洋一とも世界第2位ともいわれた。ドイツ製の高率でん粉分離機4台を備え、1日5000俵の芋を処理しでん粉回収率94パーセント（従来77パーセント）でこれまでにどこにも見られなかった良質の製品が得られ、初年度は39万俵のいもを処理し、初年度の事業成果を従来の生産方式と比較すると490万円に相当する効果を生じた。士幌農協の合理化工場の出現は、馬鈴しょ作を基幹作物にし、村農業生産基盤を不動のものとし、全国でん粉業界に革命をもたらした。

爆発炎上した乾燥工場（昭和33年）

1958年（昭和33年）6月、時の皇太子明仁殿下には本道御視察に当たり、本村にお立寄りになり村民多数お出迎えの中、でん粉工場を御見学熱心に説明に耳を傾けられ村民は感激と喜びを覚えた。

皇太子御来村の年10月16日午後4時でん粉工場乾燥機が突然爆発、従業員1名死亡、8名重軽傷、乾燥室など1000平方メートル全焼という事件がおき、村民に衝撃を与えた。農協は直ちに復旧に着手し12月中には改良した方式の乾燥工場を完成させた。

農協では雪印乳業株式会社がマッシュポテト工場建設の意図があることを知り、確かめた上、1961年（昭和36年）3月太田組合長は村と協議の上、古山村長、安村参事と雪印を訪れ工場誘致が決まった。村は工場誘致条例を適用、同年12月には工場が完成した。原料処理1日1000俵、高い煙突が立ち多くの工員住宅を建設、近代的な工場の進出に村民は喜び合った。馬鈴しょの総合処理と村産業振興に大きな役割を果したが、工場は輸入品との競合などにより製品が滞貨し1975年（昭和50年）には閉鎖されるに至った。

開拓前の新田地区（昭和34年）

新田地区開拓

新田地区の開拓は新農村建設計画の大きな柱で、村は自衛隊演習場要求を拒否すると共に事業促進に努めた。開発建設部は1951年（昭和26年）未墾地買収に引き続き、1955年（昭和30年）に第2次買収をし

て総面積１３００ヘクタールについて開拓計画を立てた。地区は気象土壌条件に恵まれず無水地帯であった。開拓計画には農協も参画し、国の農業構造改善パイロット事業を重ね、独自の営農設計が立てられた。中核に大規模な近代的設備の１００頭牛舎を建て、開拓者の個別経営による牧草生産と、集団乳牛飼育に分業した新方式であった。

入植が始まる2年前に防風林のカラマツを植え１９５９年(昭和34年)から国営の開墾と道路水道など建設工業を施行、翌年から開拓の入植営農が始まった。

新しい営農方式と劣悪な土地条件下に若い開拓者たちは、強い意志と団結、努力によって開拓営農は予想以上の好成績を挙げた。

新田共同畜舎(昭和36年)

建設進む

10年余にわたる戦中戦後の荒廃から復興期に入り、村内には建設気運がみなぎり新しい建設が進んだ。主な動きを見よう。

◇商店街の活気

終戦後2、3年すると商店街に賑わいが戻り１９５０年(昭和25年)までには、主食を除き統制がなくなり店頭に物が出回るようになった。原動機付自転車、バイク、三輪車、四輪車が馬車、自転車を追い抜いて爆音をとどろかせるようになり、１９６１年(昭和36年)には士幌市街内国道が掘り返されて舗装道路が出来た。

１９６４年(昭和39年)には中士幌市街国道拡幅によって街並みが見違えるように整備された。商工会が１９５０年(昭和25年)設立、役場の一隅から１９６４年(昭和39年)には仲通池田方へ独立事務所を構え、１９６８年(昭和43年)には待望の商工会館が建った。

仮住居商工会

金融機関の招致運動により、１９５８年(昭和33年)には帯広信用金庫士幌出張所が開設され、１９６４年(昭和39年)支店に昇格、１９６６年(昭和41年)には新しい店舗が建設された。

１９２５年(大正14年)頃建てた芝居小屋が戦時中、倒壊取りこわしになったままになっていたが、１９４８年(昭和23年)に士幌公民館という名称で中央地区に建てられ、集会劇場、裁縫場などに使われ士幌劇場と名称を変えていたが役場仮庁舎として、使用したのち老朽建物となり取りこわしになった。

◇消防団

戦時下の警防団は１９４７年(昭和22年)改組されて自治体消防団として、整備が進み１９５８年(昭和33年)から常備消防員を置き翌年に、多くの住民の協力によって消防会館が建てられポンプ車を増強した。１９６７年(昭和42年)には中士幌消防会館が建った。43年には水槽式消防車を初めて配置した。消防体制の広域化のため、１９７０年(昭和45年)には河東郡4町をもって北十勝消防事務組合を組織し、士幌消防署が置かれた。

消防会館建設期成会(昭和35年)

◇かんがい溝の廃溝

国営中士幌かんがい排水事業により１９６３年(昭和38年)士幌新橋下流に十勝頭首工が完成した。新用水路はコンクリート舗装で漏水を防いだ。長い間住民に親しまれた旧かんがい溝は廃溝になった。

◇火葬場

開拓以来火葬は野焼きにされていたが１９５３年(昭和28年)、士幌火葬場がつくられ１９５６年(昭和31年)中士幌、１９５９年(昭和34年)下居辺と建設された。

共同墓地は１９５７年(昭和32年)士幌墓地を改葬、中士幌が１９７８年(昭和53年)整備を終り士幌墓地については１９８０年(昭和55年)に改良を終えた。

火葬炉は旧式となったため１９７５年(昭和50年)には士幌西2線に新設して、他

の火葬炉は廃止した。

◇上水道

士幌では１９３１年(昭和６年)に新田民有未墾地開拓により、木管の水道が敷設されたのが上水道の始まりであった。新田地区では１９５９年(昭和34年)国営開拓事業で専用水道が設置された。開拓地の給水が及ばなかった新田部落は、１９６４年(昭和39年)自家用水道を完成した。

士幌市街の地下水の汚染濁水がひどくなり、１９６８年(昭和43年)水道設置期成会(会長川崎繁康)が発足、

士幌市街の舗装工事(昭和36年)

１９７１年(昭和46年)12月感激の通水を行った。

中士幌市街では１９６５年(昭和40年)頃から防火用水を非公式に配管使用していたが、１９７４年(昭和49年)から3か年をかけて農村部も含めて簡易水道が完成した。

士幌中央地区でも１９７６年(昭和51年)に農業用水の完成を見た。国営開拓パイロット事業により西掘田地区および西士幌地区で、１９７３年(昭和48年)雑用水として給水が開始された。地下水が乏しく開拓以来難渋していた朝陽高砂地区は、本別町の一部を加え１９７０年(昭和45年)に道営事業で給水が開始された。残る下居辺市街が１９７９年(昭和54年)給水が行われ、これで町内ほぼ全域に給水設備が完了したのであった。

◇農村電化

散居型の農村にとって電化は長い間の夢であった。終戦後は小河川を利用して数戸の小水力発電があちらこちらで行われ、下居辺では住民大会の決議により１９４９年(昭和24年)、農協により水力発電が行われた。最も早く電気導入を行ったのは１９４５年(昭和20年)、共進地区で、１９４７年(昭和22年)には中士幌が資材を見つけて来て農村電化のはしりとなった。１９４８年(昭和23年)以降施設を自分達で行い電力を買う方式で、農村電化が地域ごとに進み、１９６４年(昭和39年)には全町の電化がほぼ終了を見るに至った。

道路と住宅、中間駅

道路は産業の動脈である。戦時中、土木工事は中断の状態であったが、経済復興

音和橋(昭和28年８月竣工)

とともに整備が急がれた。国道の改良が進み１９６１年(昭和36年)には士幌市街路が舗装されて、町制施行の面目を施した。

士幌市街東にバイパスが完成し１９６８年(昭和43年)には士幌町内の国道舗装が完了した。道道本別新得線では１９６７年(昭和42年)士幌市街、１９７３年(昭和48年)には町内の舗装を終えた。１９５３年(昭和28年)には士幌新橋橋脚がコンクリート化し同年中士幌音和橋の永久橋が完成した。

村道では１９５２年(昭和27年)居辺川の下居辺大橋が初めてのコンクリート橋で、その後木橋が順次永久橋にかけかえられ大型車両や農機具の往来に耐えられるようになった。１９７９年(昭和54年)には町内から木橋が姿を消した。

村道の改良は１９５１年(昭和26年)初めて村にダンプカーを入れ砂利敷きが急速に進んだ。

１９７２年(昭和47年)町道では初めて西2線道路に舗装が行われた。農業構造改善事業と国営開拓パイロット事業により道路の改良が行われ、原野内を縦横に改良道路が延長してへき地帯は、変ぼうを遂げ、１９８０年(昭和55年)、国道、町道の改良および舗装延長は３０５キロメートルに達した。

中学校統合による通学バスと酪農大型化による集乳車は1日も欠行することが許されないため除雪態勢が整備され、１９６６年(昭和41年)からは除雪車3台を動員し、朝から主要道路の交通はほぼ確保できるまでになった。

住宅については時代の生活様式に即応し、快適な住居環境を望む若い者や老人の要求を満たし住民の定住性を確保するため、公営住宅が建てられるようになった。本村では１９５５年(昭和30年)駅の東にブロック造2階建2棟で、10戸の公営住宅を建てた後しばらくは建設が停滞していた。住宅不足から入居者の希望増加により１９６１年(昭和

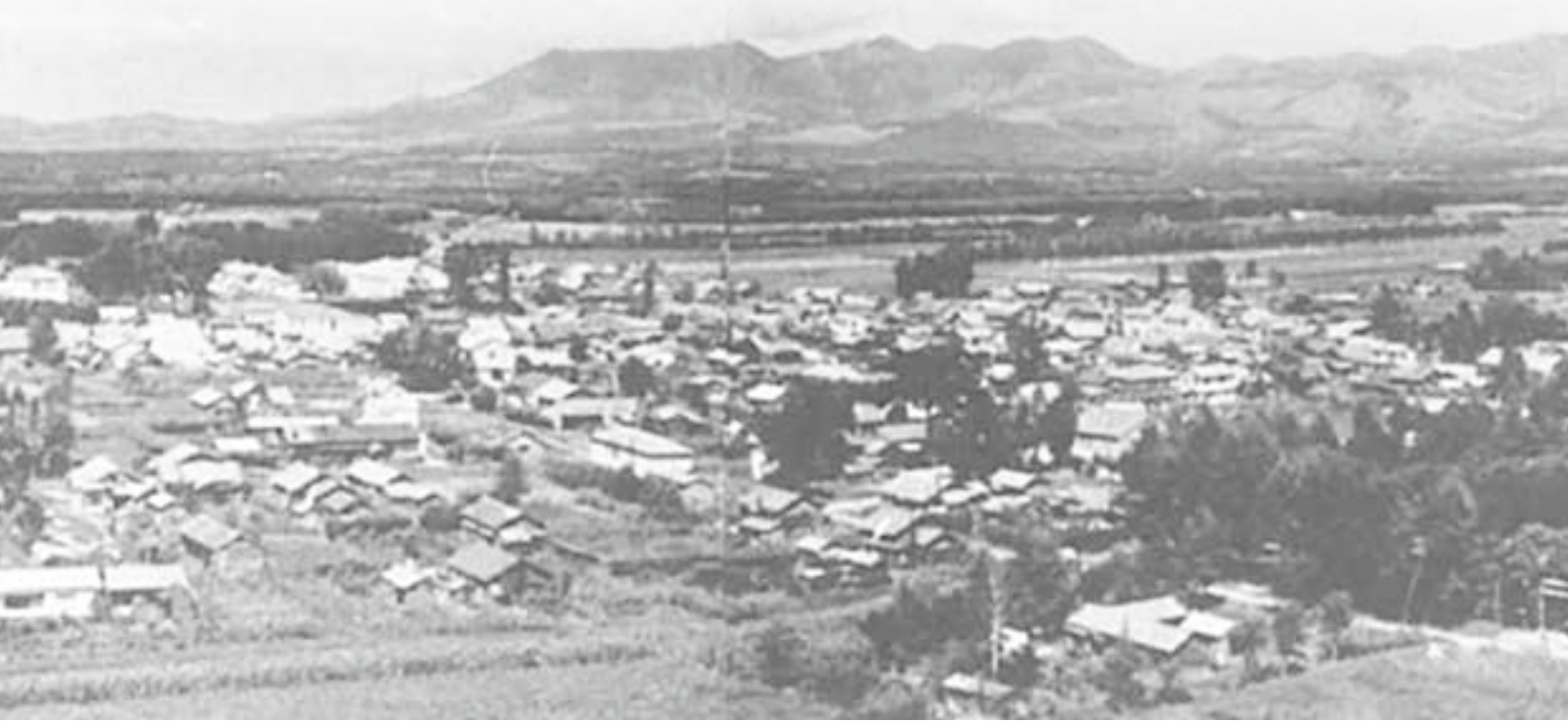
初の公営住宅（昭和30年建設）

36年）大通西に用地を確保して、建設を進め中士幌、南百戸、若葉の3団地を増やし、1981年（昭和56年）までに、10団地374戸を建設しほぼ満員の状況であった。

一方持ち家を希望する者に対し、町は町制施行と同時に1963年（昭和38年）みどり団地を造成分譲を始め、たちまち売り切れとなった。好評に応え中士幌地区に2団地を設け、1966年（昭和41年）南百戸、1975年（昭和50年）いこい、1976年（昭和51年）中士幌東団地を造成した。1976年（昭和51年）までに造成した分譲地は6団地245区画となり、カラフルな団地風景をつくり出し、文化的な生活と人口定着に大きな役割を果してきた。

戦後鉄道利用客は増加をたどっていた。上居辺・士幌北方面から帯広への通学生などの利便のため住民が寄付を募り、1961年（昭和36年）12月無人停車駅「北平和駅」ができた。建設費は全額地元負担で期成会に対し、村費補助を行った。

中士幌、士幌間にも簡易乗降場設置の声が上り期成会（会長　中山幸一）が発足し、運動の結果1966年（昭和41年）10月、19号に「新士幌駅」が設置された。開設間もない1970年（昭和45年）には合理化で廃止されることになり、地元で廃止反対期成会（会長　立山正成）が結束し運動して存置された。



第六章　新しい町

1、町制施行

町制の施行

新農村建設計画、新田地区開拓事業の進行、合理化でん粉工場の成功、それに雪印工場の進出によって、村勢がとみに進展の途をたどり、すっかり平和を取り戻していた。開基40周年にあたる１９６２年(昭和37年)1月の臨時議会において、村長は町制施行の申請することを提案し、満場一致で可決され村内は一層明るい希望にあふれた。既に十勝管内では、19町村の内、村として残っていたのは士幌のほか5村で、遅きに失するくらいであった。

村はかねて懸案の公民館を同時に建てることにした。町制は連たん戸数７００戸以上が大きな要素であった。申請書には飛躍しつつある現状と未来への輝きしい展望が書かれた。道議会から調査に来村し、８月の道議会で無事議決を見ることができた。

１９６２年(昭和37年)11月1日をもって町政施行が告示され、同日開催の式典において朗読された。

発祥の地記念碑除幕式(昭和37年)

町制施行祝賀仮装行列(昭和37年)

飯島町政と中学校統合

飯島　房芳

古山村長の１９６０年(昭和35年)2月からの2期は、任期満了にあたって実績が認められ、他に立候補者がなく、無投票で当選した。3期目は町制施行をはじめ多くの仕事を達成し、町政に平和を取り戻し納税率を１００パーセント近くにするなど町勢進展を果し任期を迎えた。

１９６４年(昭和39年)2月の町長選挙は教育委員長飯島房芳、獣医師島田寛、2名の新人が出て白熱した選挙戦を展開した。

古山村長も立候補したが既に77歳の高齢で支援する組織もなかった。

当選　飯島房芳２３２０票
　　島田　寛２１９９票
　　古山佐作　１０１票

古山前町長は帯広に去り、１９７１年(昭和46年)病没し、町は町民葬をもってその死を悼んだ。

飯島は戦時中から太田寛一、秋間勇らとともに農村運動に携わり、革新系や農村部の地区的組織を固めて、初当選を果たしたもので、45歳という働き盛りであった。

飯島が当選した１９６４年(昭和39年)は春以来災害

が続き集中豪雨、冷害により近年にない凶作となり、好調であった農村に打撃を与え、町は救農、中小企業対策に努めた。１９６５年(昭和40年)は平年作であったが１９６６年(昭和41年)も冷害に見舞われ救農工事などが行われた。

町内の人口は１９５６年(昭和31年)１万２１５人をピークにして１９６０年(昭和35年)頃から減少傾向をたどった。農業と他産業との格差に凶作が追いうちをかけ、１９６５年(昭和40年)には20戸、１９７１年(昭和46年)には36戸と毎年10戸以上の離農が出て商工業をはじめ各方面で深刻な問題となっていった。離農は

士幌町中央中学校(昭和43年)

１９７４年(昭和49年)頃からやや下火になり、人口は１９８０年(昭和55年)最低の６９７９人を示しその後ようやく横ばいからやや上昇に向った。

１９６３年(昭和38年)、教育委員会は生徒数の減少から全町７つの中学校を１校に統合する方針を決め、１９６５年(昭和40年)３月には議会の議決を見て士幌町中央中学校の統合校舎建設にかかり、同年４月川西、士幌を統合し、順次各校の統合を進めた。中士幌地区では存続期成会が発足し、し烈な運動が行われたが１９６７年(昭和42年)４月には全部の学校が新しい学校に通学することになった。町は全町スクールバスを運行するとともに、学校施設の充実に務め、思い切った統合は全道の注目を浴びた。

町では新しい政策として老人医療費負担の軽減のため１９６７年(昭和42年)度から、国保加入の80歳以上老人医療費の２割を助成し、９割給付とし、引き続き１９６８年(昭和43年)には年齢を75歳に引き下げ、１９７１年(昭和46年)には１歳未満児の医療費の無料化を行い、町民に好評を得、安心して老人、幼児が受診した。医療費を公費で助成するのは道内でも例が少なく反響を呼んで、近隣町村から全道全国に波及した。

飯島町政は第１期を終え１９６８年(昭和43年)１月選挙には、平山前助役が早くから立起の準備を進めて来た。古山村長時代から引続き11年半助役を務めた平山に対し、飯島町長が任期途中の１９６７年(昭和42年)３月異例の解職をし両者は対立感情を残していた。

当選　飯島房芳２９３７票
　　平山繁男１４７４票

飯島は１期目のはなばなしい実績が評価され予想を上回る差をつけて再選を果した。

２期目に入って飯島は激しい選挙戦による町民間のしこりを取り除くことに意を用い、２期目の終わりには、精力的な活動が町民の一致した信頼を得て、１９７２年(昭和47年)２月の町長選挙は無投票で飯島の３選が成った。

統合中学校校地内に町は１９６７年(昭和42年)度以来、町営グラウンドの造成を行い１９７１年(昭和46年)に完成、同年８月道内では初めての第三種競技場の認定を受けた。認定と前後して同年８月には完成したグラウンドで全道青年大会が催された。１９７０年(昭和45年)以来、青年団が日夜準備を進め、開催には町、町民をあげて協力、選手団の民宿を行い、総勢３５６５人参加という３日間にわたる開町以来の大事業は無事成功をおさめ、青年活動の上に金字塔を建てた。

士幌が音更から分村してから１９７１年(昭和46年)は50周年に当たり、同年８月町は記念式典を催し町勢の発展を祝った。記念事業として全道青年大会の他、植樹祭、記念論文募集を行い、また小委員会を設けアンケートをとった上「町民憲章」を制定した。町民憲章は記念として卓上のついたてにして町民全戸に配った。

然別道路の改良

然別道路の着手

東ヌプカウシ山麓に展開する新田牧場一帯の景観は、早くから関係者の間で知られていた。開拓当時然別湖へ原野を踏み分けイワナ漁や自然探訪をした同好者も多かった。こうした人たちによって士幌の観光資源として、然別湖へ通ずる最短路線を開削し山麓一帯の開発をしたいという意見が高まり、１９５８年(昭和33年)には村議会が白雲山に登り道路の可能性を探った。

然別道路の開削が町の懸案事項のひとつに数えられ、飯島町長は古山前町長からの重要事項として引継ぎを受け実現に真剣に取り組ん

だ。

道路予定地が国立公園保護区域に当たるため、着手について、厚生省、建設省、林野庁に対し精力的に運動を続け、さしもの難関を突破、１９６５年(昭和40年)には道路開削の許可をとり、翌年国庫補助を取りつけ山岳地帯の工事に着手した。さらに昭和44年には未開通のまま道道に昇格するという手際のよさに人々を驚かせた。

山麓一帯を「士幌高原」と名づけ町民の期待は高まり、町は１９６８年(昭和43年)観光診断を受け観光価値に自信をつけた。

１９７０年(昭和45年)には上士幌、鹿追、士幌３町が合同で士幌高原然別湖を中心にした国立「老人と子供の国」を計画し、誘致を図ったが国の財政上の困難から立ち消えとなり、道路開削は自然保護の立場から前進を阻まれ１９７２年(昭和47年)以降しばらく停滞した。

町民和楽、町有バスなど

村内は昭和30年代に入り国内の経済成長とともに合理化でん粉工場の設立など、新興の気運が見えてきた。村民の融和を図り活気ある町づくりのため体育連盟主催の村民運動会が１９５５年(昭和30年)頃から催され、１９５８年(昭和33年)からは町が主催した。

高齢化社会の到来に伴い１９６３年(昭和38年)には町内各地区に老人クラブが組織され、年寄りは若返って行事を楽しむ姿が見られ、１９７０年(昭和45年)には第１回高齢者学級が開かれた。

村民運動会

地域活動の拠点として１９６１年、１９６２年(昭和36年、37年)には各小学校区域単位に地区公民館活動推進委員会が組織され、まず北中音更、上居辺地区に公民館が建てられ、その小学校屋内体操場と組み合わせたへき地集会施設が住民会合施設として整備され、中央公民館の建設と併せて活動が盛んになった。

１９４８年(昭和23年)以来、村内へき地を運行していた国鉄バスは乗客の減少で赤字運営が続き、１９７０年(昭和45年)には全面廃止したい旨の申し入れがあり、町議会特別委員会で検討を続け、町は国鉄バス路線を継承し施設の移譲を受けて１９７１年(昭和46年)８月から、町有バスを運行した。西上方面を走っていた十勝バスも１９７３年(昭和48年)には廃止し、町有バスが代り、町有バスは５路線となった。

町では１９６７年(昭和42年)から中学校スクールバスを運行していたので町有バスはスクールバスに混乗することにした。

2、愛のまちと構造改善

開拓パイロットと構造改善

日本経済は１９５５年(昭和30年)以来、神武景気から岩戸景気へと好況が続いた。１９５５年(昭和30年)から１９６１年(昭和36年)の間に国内工業生産は年平均22パーセント、輸出は同じく46パーセントの驚異的な割合で伸びた。高度経済成長の陰にあって農業の比重は年ごとに低下し、農民の階層分離が進んだ。

政府は農業の生産性を高め、他産業からの遅れを取り戻すために「農業基本法」を制定、翌年「農業構造改善事業」が発足した。

村は本事業に大きく期待を寄せ、村民にわかりやすく趣旨を説明して関心を呼びかけた。(１９６１年(昭和36年)10月広報)

○農業経営の規模を大きくしよう。
○農地の集団化をしよう。
○家畜をたくさん導入しよう。
○機械化をしよう。

昭和45年　開拓パイロット明渠事業
(東10線29号付近)

村はいち早く働きかけ、一般地区指定に先立ち、初年度の農業構造改善パイロット事業に新田地区の指定を受け、共同畜舎、トラクター、農道牧野改良などを１９６２年(昭和37年)から１９６７年(昭和42年)度までに事業を実施し、新田開拓を成功に導いた。農業構造改善事業一般地区は１９６６年(昭和41年)から順次指定を受け、１９６９年(昭和44年)からは第２次農業構造改善事業が始まり、引続き地区指定を受けた。農業構造改善事業によってトラクターの大量導入が行われ機械化が進み、農耕馬が急速に姿を消して農舎、サイロ、農道整備、農地等交換分合事業が行われ、酪農

生産団地造成、馬鈴しょコンビナート、肉牛センターなど画期的事業が進み、士幌町内の農業は本事業の進行によって新しい時代を迎えた。

町内には広い原野が湿地のため、開拓から取り残され馬草刈場にされていた。湿地改良のため、小河川の床下げが国営事業で行われた。

町は既存農家との話し合いを進め西堀田地区(佐倉・瑞穂・上居辺全般)、西士幌地区(中音更・上音更・および上士幌・音更の一部を含む)の両地区について1964年(昭和39年)申請書を提出、1968年、1969年(昭和43、44年)着工した。事業の中には後から全戸雑用水(水道)でん粉工場廃液畑地かんがいを加え、西堀田1977年(昭和52年)、西士幌1980年(昭和55年)度に完成を見た。西堀田・西士幌両地区と併せて道営開拓事業として相互地区、1968年～1971年(昭和43年～46年)、朝陽地区1968年～1972年(昭和43年～47年)が施行された。

4地区の事業により道路造成95キロメートル、明きょ排水70キロメートル、雑用水319戸、暗きょ排水2874ヘクタール、農地造成3463ヘクタール、畑地かんがい791ヘクタール、4地区の総事業費は98億円に達した。

士幌にとって第3次の開拓事業の完成によって原野はすべて姿を消し、改良道路網が全町に行き渡り、農家の経営規模が拡大し大きく変ぼうを遂げたのであった。

農業の進展

農業構造改善と一連の開発事業の進行によって町内の農業は、1965年(昭和40年)頃から急速に変化を遂げた。

農業機械の大型化によって労力が省かれ、離農と未墾地開発によって1戸当りの経営規模が拡大し、機械化は畑作と酪農を分離専業化した。

冷害と価格変動の激しい豆作偏重から、馬鈴しょとてん菜の作付に重点が置かれ、1968年(昭和43年)からは秋まき小麦が導入され、輪作上からも重要作物に加わり、麦作業団ごとに大型コンバインが畑に活況を与えた。でん粉が中心であった馬鈴しょが1970年(昭和45年)食用へ向けられ、専用掘取機ウイセントが各地区に入り、1972年(昭和47年)埼玉県熊谷市に農協の食用いも貯蔵庫が建った。農協は放射線照射による食用いもの発芽抑制について、6年間にわたり研究を重ねた結果、安全性の確認を得て1973年(昭和48年)12月全国で初めての放射線照射施設をはじめ、貯蔵施設、ポテトチップスおよび冷凍食品製造など一連の総合加工処理施設、馬鈴しょコンビナートを同時に完成し、次つぎと施設を増やして行き、1981年(昭和56年)までに86億円の建設費を投入し、全国唯一の施設となり寒地農業の安定に大きな役割を果たした。

乳牛の多頭飼育、施設の近代化が進み、1967年(昭和42年)には初めての農民資本による北海道協同乳業株式会社を創立、士幌農協太田組合長が社長に就任、音更に工場が建ち、1976年(昭和51年)には乳質改善のため全戸にバルククーラーが設備された。

農協は乳牛の雄子牛の肥育センターを1970年(昭和45年)日の出に設置し、その後町内各地区に配置して畑作専業農家への有機質還元を図り、肉牛飼育が飛躍的に増加した。

西士幌地区開拓パイロット事業により開発した農地を利用し、1973年(昭和48年)以降1戸50頭規模の大規模近代的な酪農施設を造成、1978年(昭和53年)までに10戸の団地ができ偉観を見せた。

酪農団地(昭和49年)

士幌農協は全国に例のない数々の新しい事業を成功させ組合員の生活を安定させ、貯金の額、農協の資産などから全国の注目を浴び、1979年(昭和54年)レポーター立花隆によって「週刊朝日」に「寒村から日本一豊かになった北海道士幌農協」として、大きく紹介された。

組合長太田寛一は1969年(昭和44年)ホクレン農業協同組合組合連合会会長に選ばれ、1977年(昭和52年)には全国農業協同組合連合会会長に就任し、我が国農政の場で目ざましい活躍をした。

昭和47年に完成したＪＡ士幌町農業会館

愛のまち・病院老人ホーム

町内の医療施設は中士幌の診療所をも担当していた滝口南天堂が、１９２４年(大正13年)以来３代にわたる医院を１９６７年(昭和42年)閉鎖し、住民に惜しまれた。

１９５４年(昭和29年)９月開設した下居辺の道立診療所でも医師が欠員で、町立病院高山院長が出張診療していたがついに１９６９年(昭和44年)７月をもって廃止された。道では代替として通院バスを町に配置し、町は同年９月から全町に患者通院バスを走らせ、１９６９年(昭和44年)からは町有バスの運行と共に無料乗車券の交付によってへき地通院の足を確保した。

国民健康保険病院の増築

新田地区に１９６０年(昭和35年)開拓診療所ができて町立病院から出張診療していたが、利用が少なくなり１９６７年(昭和42年)に廃止した。町立病院は町内唯一の医療機関となり、町政の中で重要な位置を占め、医師の確保をはじめ運営についてますます住民の関心が強まった。

老人患者の増加と家族数の減少によって寝たきり患者の付添いが深刻な問題となり、１９６９年(昭和44年)病院独自のサービスとして付添婦を設置し、好評を得て１９７３年(昭和48年)には４名に増員した。病院は患者数の増加と施設の老朽が進み、町は町議会特別委員会が調査を進め、病院・母子健康センター、特別養護老人ホームを併せて建てることになり、中学校移転後の用地に38床の病院を新築、１９７１年(昭和46年)12月に移転開設し、母子健康センターも同時開設となった。翌年には50床の特別養護老人ホームが満床で開設になった。３つの医療福祉施設を廊下でつなぎ総合運営するのは他に例がなく、全国的に大きな反響を呼び、周辺に建設した保育所・老人用公営住宅も含め「愛のまち」と呼称し、「母胎から楽土まで」を合言葉として全国的に大きな反響を呼んだ。

特別養護老人ホーム

１９７２年(昭和47年)６月総合落成式に当たり前古山町長遺族の寄付に、飯島町長がポケットマネーを足して、愛のまちシンボル像が建てられ高い理想がうたわれた。町立病院は医師の充実に努め、新しい病院では４名を確保し、患者は隣接町からも訪れ、１９７３年(昭和48年)には増築して76床とした。

老人ホームの運営について町長は愛をもって接するよう職員を強く指導し、初めから好評を得た。老人ホームもまた入所者が殺到し１９７４年(昭和49年)４月、増築が完成して、入所定員を増員して１００床とした。

3、町づくり進む

飯島町長の死去と高校移転

農業構造改善事業をはじめ愛のまち建設に、１９６４年(昭和39年)就任以来、精力的な活動を続け、独想的な発想と天性の説得力をもって町の興隆を成し遂げてきた飯島房芳町長は、町民のみならずその行動力、指導力が広く認められ十勝町村会長・十勝総合開発促進期成会長に就任。１９７１年(昭和46年)には請われて北海道農業構造改善対策協議会長、同全国協議会理事となり寝るひまもない活動を続けてきた。１９７４年(昭和49年)暮頃から歯痛を覚え１９７５年(昭和50年)２月、札幌医大病院へ入院。右下あごの放射線治療を受けたが、全治に至らず札幌、東京方面で治療を続けてきたが、腫瘍が悪化８月に帰宅し町民は憂慮に包まれた。９月中旬士幌町国保病院に入院したが、既に言葉も不能となり筆談で町政の指示を与えていた。11月下旬、東京女子医大病院に入院したがついに12月４日永眠した。町議会は即日名誉町民の称号を贈り、町葬が行われ農業会館の広い会場が会葬者で溢れ、不世出の英傑を偲んでどうこくが続いた。

飯島房芳町長の葬儀

飯島町長死去による町長選挙には１９６７年(昭和42年)以来助役を勤めてきた後藤辰雄が推され立候補した。町内には農村青年の間から擁立の動きもあったが期が熟さなかったのか、

１９７６年(昭和51年)１月無投票で後藤の当選が確定した。後藤町長は飯島の遺業を継承し町政の進展に努めることとなった。

士幌高校では施設の遅れが目立ち、１９７３年(昭和48年)５月には町内18の機関団体を網らした「高校校舎建設推進委員会」が発足、実学実習のためには広い校地を必要とし、移転先が町内の大きな問題であった。士幌農協では１９７３年(昭和48年)10月の総代会において士幌高校の振興のため１億円を寄付し大きな力となり、推進委員会で30数回の会議を重ね、新田地区に26ヘクタールの土地を取得して移転することになった。新築工事は１９７３年(昭和48年)暮に着手。１９７５年(昭和50年)３月には新校舎に移転した。東ヌプカウシを背景にした２階建ての堂々たる偉観は人びとを驚嘆させた。

士幌高校移転整備に情熱をかけてきた飯島町長は11月の落成式には病既に篤く念願の校舎を見ることがなかった。

士幌高校では１９７４年(昭和49年)度から農業特別専攻科が設置され、新校舎でユニークな活動が展開された。

愛と緑のまちづくり

先に「町民の手による町政」をスローガンとして登場した飯島町長は、就任３年目の１９６６年(昭和41年)に町づくり企画委員会を設け、１９６９年(昭和44年)２月には１９６８年(昭和43年)から１９７５年(昭和50年)までの８年を期間とし、人口規模１万人を目標とした第１期士幌町町づくり計画書が成立した。その後、社会情勢の進展、町内事情の急速な変化発展によって計画は大幅な見直しが必要になった。

町では１９７３年(昭和48年)８月、町づくり企画委員会を発足し、第２期計画の策定に入った。途中、洞田逸治委員長、飯島町長の死去などによって作業が遅れ１９７６年(昭和51年)11月、１９７６年(昭和51年)から１９８５年(昭和60年)までの10年間の第２期町づくり計画が、町議会で議決された。計画の策定に当たっては事務局長に元早稲田大学助教授結城清吾が就任し取りまとめをした。結城は飯島町長在世の頃、町長の町づくりにかける情熱に魅了され、職をなげうって士幌へ来たのであった。その時既に飯島町長は重病の床にあり結城は町の幼稚園長に就き、公務の傍ら講演や文筆活動をし都市との交流をとりもち、地域の若者たちと政策グループをつくり活躍をひろげた。

7000人のまつり

第２期まちづくり計画は「愛と緑の町建設を目ざして」とサブタイトルをつけ、結城の広い視野から斬新な提言が行われ、その後における、町攻に数々の新風を起した。７０００人のまつり、町づくり町民大会、愛と緑の町民会議が翌々年から発足し、「コミュニティセンター」「士幌の森」「士幌遊水」「緑の空間」の構想などが町民に夢を与えた。

町では町民体育館建設を望む声に応え１９７５年(昭和50年)農林関係補助事業によってトレーニングセンターを建設した。体育保健、入浴施設を兼ねたもので日夜大いに活用された。また特別養護老人ホームに接続して集会施設や幼児施設を兼ね備えた環境改善センターと、中央公園施設を１９８１年(昭和56年)に建設するなどいろいろな制度利用によって文化的環境の整備を進めた。

後藤町政と近代化

後藤　辰雄

後藤町長は飯島の構想実現のため努力を傾注すると共に、商店街・文化・生活面の充実に力を注いだ。下居辺の泉源開発は飯島町長が手がけたものであったが、没後の１９７７年(昭和52年)３月地下１０００メートルで４１・５度の温泉湧出に成功し、町は１９７７年(昭和52年)12月農林補助事業で農民健康増進施設、緑風荘をオープンした。隣接各町村に比べ温泉施設の乏しかったところなので町民は大喜びした。

町商工業は国内の高度成長下にあっても過疎の進行によって苦闘が続けられた。１９６７年(昭和42年)の商工診断に次いで１９７８年(昭和53年)には第２次商店街診断が行われ、かなり厳

しい現状分析の指摘があった。商工会は診断の提言に基づき部会を設け提言の具体的実現を図った。

町の経済活動を活発にするため町土地開発公社は1976年(昭和51年)士幌市街北東に接して用地を取得し、軽工業団地を造成し分譲をはじめ同年オオハシ木工が入地し、翌年から多くの業種の入地が続いた。

商店街の美化整頓を図るため1981年(昭和56年)には町内新生地区に資材置場団地を造成し、また同年商工従業員の安定のため商工業住宅を建設分譲し、好評で売り切れ商工業近代化の一助となった。

下居辺温泉試掘(昭和51年10月)

第1期行政を手堅く進めた後藤町長は2期目に出馬を表明し対立候補として、士幌農協参事佐藤正が立起し、両者は町内を隅ずみまで駆けめぐり白熱した選挙戦を繰り広げた。1980年(昭和55年)1月投票率96・6パーセントという高い投票率で町民の関心の高さを示した。

当選　後藤辰雄2648票

佐藤　正2045票

で後藤が再選を果した。

後藤はスローガン「愛と緑のまちづくり」総仕上げに全力を注ぎ、懸案のコミュニティセンター建設をはじめ大型建設事業に取り組んだ。

開基(町)60周年

1981年(昭和56年)士幌町は、音更村(当時)から分村独立して満60年を迎えた。

町はこの年を目標に庁舎および多目的研修集会施設(コミュニティセンター)の建設を進めてきた。同年11月新築した同施設を会場に開基(町)60周年と併せて新庁舎、多目的研修集会施設落成式典を挙行した。当日は新施設のテープカットにはじまり、名誉町民(故)洞田逸治・(故)飯島房芳両名の胸像除幕式があり、大ホールでは430人が出席した式典で、町の花・木・鳥の発表、士幌町農業協同組合長太田寛一に名誉町民章を贈り、続いて開拓功労者・行政功労者の表彰が行われた。

開基60周年コミュニティセンターオープン

○開基(町)60周年記念と主な関連事業

▽公園造成

・愛の町公園(環境改善センター附帯公園)

・農村公園(中士幌地区)

・町民広場(役場庁舎前・昭和57年度)

▽町史発行

・町制20年史「士幌のあゆみ」(町民全戸配布)

▽町勢要覧発行(町民全戸配布)

▽名誉町民胸像作成

・(故)洞田逸治・(故)飯島房芳両名

▽名誉町民推挙

・太田寛一

▽記念行事

・郷土芸能　美濃神楽の発表

・士幌音頭・士幌行進曲の発表

・十勝管内芸能祭

・模擬議会

・一日町長・課長

・樋口選手野球教室～王子製紙野球部主戦投手(士幌町出身)樋口博美招待

・町民憲章碑の建立～ライオンズクラブ寄贈

・町民ホール壁画～士幌町建設協会寄贈

役場汚職事件と後藤町長退任

積極的な事業執行により進展著しい町政に、1982年(昭和57年)7月突如汚職容疑で町職員1名と建設業者1名が逮捕され、庁舎など家宅捜査が行われ町民に衝撃を与えた。

直接の容疑は町道改良工事に関し、町担当課長がわいろを受け取り、便宜を図ったというものであった。

取り調べは町職員をはじめ広範囲にわたり、事前から噂がとび怪文書が流布されるなど町内は騒然とした。

町議会は「町建設課及び

後藤町長退任式(昭和58年11月)

水道課の行政事務執行に関する調査特別委員会」を設置、地方自治法第98条の調査権を与えて調査を行った。また、町監査委員も独自に随時監査を行って町長および議会に報告した。

町長は、関係職員のうち2名を懲戒免職、12名を減給処分、自らも町長および助役の減給を行った。町長は、翌年4月の統一選挙を機会に任期を縮めて退職することを表明していたが、町民有力者の一部に更に厳しく糾弾する声があったことから、混乱を避けるため、2期目の任期を1年2か月縮めて1982年(昭和57年)11月末をもって辞任した。退任にあたり「任期半ばにして退任することは申し訳なく思っている。41年間の足跡は走馬灯のようだ。町の発展を祈る」と淡々として述べ庁舎を去った。

これより先、町は事件発生の要因を完全に防ぐため、職員の綱紀粛正を求め、契約事務の公正明朗化のため、契約事務、関係諸規則の整備を図った。

飯島町政誕生

飯島　和吉

後藤町長が任期半ばで退任すると町内では当初、町民の対立を生む選挙戦を回避、話し合いによる次期候補擁立の動きがあったが、調整工作が失敗に終わり、前町議会議長の飯島和吉、全十勝地区農民連盟副委員長の今田鉄郎、町農業委員の鈴木広三の3人が無所属で立起を表明、短期決戦に突入した。選挙戦は熱気を帯び3か所の立会演説会場は満員になり、1982年(昭和57年)12月5日行われた投票では、投票率95パーセントの高率であった。

当選　飯島和吉2406票
今田鉄郎2136票
鈴木広三　250票

飯島は選挙戦で「豊かな愛のマチづくり」をスローガンに融和による町政を訴え、当選と共に汚職事件で失墜した役場の信頼回復が第一の仕事とし、心配される選挙後のしこりについては話し合いによる融和町政を強調、「弟(元町長飯島房方)のやり残したことを完成させ、若者に夢と希望の持てる町としたい」と語った。

就任後飯島町長は引き続き小川寅之助助役を再任すると共に、人事刷新を行い、綱紀の粛正、意欲の喚起につとめ、またとかく対立意識の強かった農業関係と商業関係の融和などに寝食を忘れ精魂を注いだ。飯島の任期中の努力によって町政への信頼の回復、町民各層への融和は見るべきものがあった。

小川町政の誕生と再選

小川　寅之助

飯島和吉町長は、就任以来町民の和を説き、町長選挙によって潜在する町民感情のもつれの解消に意を用い町政の振興に情熱を燃やした。4年の任期中に町民間の融和を取り戻し、各小学校屋内体育館の整備、畜肉処理場の設置をはじめ建設事業の進行、道営畑総事業など国営費事業の導入に成果を挙げて順調な町政の進展をもたらした。町民の町政への信頼も厚く1986年(昭和61年)12月の任期が到来する前に、早くから農協・商工会・主要団体の幹部有志を中心に再出馬を求める動きが強かった。

飯島町長は「前町長辞任後の町政を軌道に乗せ、次の人につなぐ私の使命は達した」と退任の意向をもらし、町議会で公式に表明した。

後任の町長候補には、これまで教育長、助役を通年17年余手堅く勤め内外の信頼を得ていた小川寅之助を推す声があがった。飯島町長の推挙もあって、小川は告示をあと2週間余に迫った11月、地区後援会固めを終え出馬を表明した。

小川は「対話と協調」を基本姿勢とし、活力ある町づくりのため努力したいと、数々の具体的な政策を掲げ選挙戦に臨んだ。

当初、町内一部には反発の動きも見られたが、過去の厳しい選挙戦を繰り返して来ただけに「町を割っての選挙戦は避けたい」という空気が見られ対立候補の擁立もなく11月25日無投票をもって小川の初当選が確定した。

小川町政は、永年の行政経験を活かし精力的に町づくりを進め、ことに士幌高原の整備、高校の生活科新設、士幌小学校・幼稚園の改築、遊水公園・市街地街並み改造に着手、ふる里創生に新企画をつぎつぎ展開して町の躍進と夢のある郷土づくりに実績を挙げた。

1990年(平成2年)1期の任期満了を前にして、9月定例議会で質問に答える形で次期選挙に出馬を表明した。

選挙は、小川の4年間の実績と、進行中の街並み改

造・ケアハウス計画実現への期待から表立った対立候補擁立の動きは出ず、2期続けて無投票当選となった。2期目選挙に当たり小川は「いきいきと活力のある町づくりなど5つの指標を念願に今後4年間全力を尽くしたい」と訴えたのであった。

開基(町)70周年を祝う

1991年(平成3年)士幌町が川上村として音更村から分村独立後満70年になり、町は前年度早々から準備に入り、多くの記念行事を企画して全町を挙げての祝賀に溢れた年となった。

開基(町)70周年記念式典をコミュニティセンターにおいて開催、式典に先立ち役場前にタイムカプセルの埋設式を行った。カプセルには開基(町)100周年へ向けてのメッセージと児童生徒の絵画など、開基(町)70周年を記念する品々62種をおさめ銘板の除幕を行った。

コミセンでの記念式典には来賓をはじめ約400名が参加、この日のために作られた士幌賛歌がコーラス同好会会員などによって披露され、町民憲章を朗唱後開拓の先人に黙とうを捧げ、特別功労者・行政功労者・開拓功労者へ表彰が行われた。

開基70周年横断幕

○開基(町)70周年記念と主な関連事業

▽記録映画「士幌物語」制作

▽町史発行

・町史「続士幌のあゆみ」

▽NHK公開番組

・「あなたの町で夢芝居」

▽記念行事

・イチイの森植樹祭

・十勝管内少年野球大会

・十勝管内オールドボーイズ野球大会

・24時間ソフトボール大会

・かぼちゃらんどinしほろ

・NHKふれあい広場じゃがいもフェス

・野外ロックフェスティバル

・十勝郷土芸術祭詩吟民謡、民舞発表会

7000人のまつり

第2期町づくり計画の提唱で第1回7000人のまつりが1979年(昭和54年)8月に開催された。

毎回新しい企画などが加えられ、町の最大の行事として住民の間に定着し期待されている。

お盆の時期に合わせ、前夜祭・本祭・仮装盆踊りを一連のものとし、町内各機関・団体が分担し、自主的な手作りのお祭りに盛り上げてきた。

7000人のまつり　周防猿まわし(昭和61年8月)

多くの行事が企画され、一時期には、西2線商店街から車を締め出し、1日歩行者天国の会場として心行くまで町民が楽しんでいた。

また、地区公民館・団体など11台の「あんどん」が美を競い一層の人気を盛り上げていた時期もあった。

町のイメージキャラクター「大地くん」

開基(町)70周年を機会に町のイメージアップを図る一環として、イメージキャラクターとロゴを広く募集した。審査の結果士幌町出身札幌市在住・後藤尚司の作品が採用となり、封筒や各種ポスターなどに広く使用されている。

イメージキャラクターとロゴ

第二編　社会と生活

SHIHORO

100th Anniversary

第一章 行　政

1、移りゆく町政

開町100年

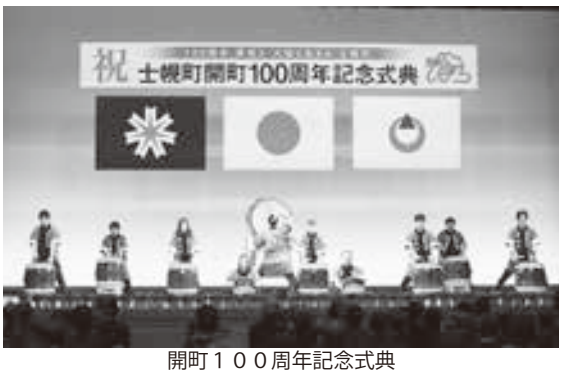
２０２１年(令和３年)士幌町は、音更村(当時)から分村独立して満１００年を迎えた。

開拓以来幾多の苦難と激動を乗り越え士幌町の礎となった先人の偉業を受け継いだ住民の英知と努力で郷土建設が進められた結果、近年では農業を基幹として町勢がめざましく進展し産業、経済、教育、福祉など多岐にわたって道内でも先進的な農村となった。

町はコロナ禍ではあったが、開町１００周年を祝う記念式典をはじめ多くの記念事業、行事を行い、町民ともども郷土への誇りと、更なる未来に向かって躍進する郷土づくりを確認しあった。

○開町１００周年記念式典と主な関連事業

▽開町１００周年記念式典(名誉町民称号の贈呈、功労者の表彰、高齢者顕彰他)



開町１００周年記念式典

令和３年11月30日　総合研修センターふれあいホールにおいて開催

▽開町１００年記念碑設置

▽１００周年記念ロゴ・キャッチフレーズ募集

▽１００年新聞作成・町勢要覧作成

▽観光ＰＲ用映像制作・士幌物語の映像資料デジタル化

▽北海道日本ハムファイターズ応援大使事業

そのほか冠を施して開催した行事として

・８月９日　パークゴルフ大会

・８月14日　タイムカプセル開缶式

・10月17日　１００年の森づくり看板除幕式

・11月１～30日　開町１００周年・ＪＡ士幌町創立90周年記念しほろ収穫祭ｉｎどこフェス

・11月25日　開町１００年記念　中澤佑二　トークショー&サッカー教室

町は、開町を祝う節目ごとに記念式典、記念事業を行っており、開基(開町)70周年以降の事業は次のとおりである。

○開町80周年記念式典と主な関連事業

▽開町80周年記念式典(功労者の表彰、高齢者顕彰他)

平成13年11月15日　総合研修センターふれあいホールにおいて開催

▽ＮＨＫ公開録音　ＦＭラジオ「フレッシュサウンド北海道」(11月29日録音)

▽町勢要覧作成

▽エコーはがき作成

そのほか冠を施して開催した行事として

・６月13日　公演「虹の立つ海」

・7月4日　道東町村議会議員パークゴルフ大会
・7月5日　道東町村議会議員研修会
・7月14日　パークゴルフ大会
・7月15日　下居辺競馬まつり
・7月19日　映画「郡上一揆」上映
・8月16日　しほろ7000人のまつり（ステージショー他）
・8月18～20日　十勝管内町村役場対抗軟式野球大会
・10月20日　12時間耐久町民ソフトボール大会
・11月24日　シホロおとわの祭り

ほかに芸能文化公演等が行われた。

○開町90周年記念式典と主な関連事業

▽開町90周年記念式典（功労者の表彰、高齢者顕彰他）

平成23年11月15日　総合研修センターふれあいホールにおいて開催

▽町勢要覧作成

▽町PRビデオ作成

そのほか冠を施して開催した行事として

・4月30日　北海道日本ハムファイターズ野球教室
・6月26日　全十勝少年柔道大会兼女子柔道選手権大会（大会誘致）
・7月9日　第31回しほろ夏祭り・花火大会
・8月20日　しほろ7000人のまつり（自衛隊音楽隊演奏会）
・10月10日　体育の日タイムトライアル2011走り方教室
・10月16日　第12回しほろ収穫祭
・11月1日～3日　第54回士幌町文化祭
・12月4日　女性まつり（講演）
・12月14日　屋内コート開設20周年記念ゲートボール大会
・12月17日　第36回北十勝剣道大会・町民剣道大会
・1月9日　第28回全十勝スピードスケート士幌大会
・1月28日　第35回町民スケート大会
・1月29日　第25回町民卓球大会
・2月3日　記念コンサート（ワンダードラムパフォーマンス）
・2月26日　文化協会40周年記念祝賀会・芸能発表会
・3月11日　みんなで教育を考える集い（講演）

事業所の統廃合

国の行政改革による政府出先機関の合理化で1981年（昭和56年）、それまで町村単位にあった食糧事務所の出張所が十勝管内3支所として再編され、帯広、池田、士幌に支所が置かれた。

士幌支所は上士幌、鹿追、士幌3町の区域を管轄し新しい事務所や住宅を整備し職員18名で食糧検査業務を行ってきたが、1997年（平成9年）3月31日をもって帯広支所に統合された。事務所、住宅は町が払い下げを受け、事務所は十勝支庁北部耕地出張所士幌監督員詰所として道へ貸し出し、2007年（平成19年）3月まで使用された。住宅2棟8戸は町の公共賃貸住宅として活用している。

同じ1996年（平成8年）度末で士幌、上士幌両町と音更町の一部を区域とした北電士幌営業所も営業の効率化を図るという理由で閉鎖されたが事務所はそのまま置き、故障の修理サービス等は地元の電気業者に委託、職員は引き上げた。

農業の指導機関として設置されている農業改良普及所が1994年（平成6年）から農業改良普及センターと名称を変更した。十勝管内には6センターが設置され士幌は十勝北部地区農業改良普及センター（本所音更町）の駐在所として士幌町農協内に置かれ業務を行ってきた。

道はより高度な農業指導など機能アップを図る目的で駐在所の本部統合を進めてきたが、これに伴う庁舎の新築整備とあわせセンター予定地の見直しが図られた。十勝北部は音更町に本所（12人）士幌、上士幌に駐在所（各4人）が置かれていたが、3町それぞれ誘致運動を進めてきたところ、整備予定地は過疎地に配慮するという道の方針と3町の地理的条件などの観点から士幌町にセンター設置が決まり1998年（平成10年）に庁舎整備（バスセンター南）1999年（平成11年）4月から十勝北部地区農業改良普及センターとして北部3町の農業指導にあたっている。（職員定数20人）

同センターが士幌町へ移転されたことに伴い、職員住宅も整備され、1998年（平成10年）度で町内高徳の士幌町農協所有地を道が取得して1棟8戸2階建ての職員共同住宅を建設した。

2000年（平成12年）7月、道は駐在所の本部統合を行ったばかりの、農業改良普及センターの次の再編策を検討し、2001年（平成13年）以降、広域指導体制の強化を図り、2006年（平成18年）度から本所1支所体制に移行、2010年（平成22年）度からは地域班体制の強化、2016年

（平成28年）度に地域係の大くくり化と活動区域の見直しを行った。

現在十勝には中札内村にある本所と士幌にある支所を含め支所5か所、計6か所の農業改良普及センターが設置されている。

小川町政の続投

小川　寅之助

1986年（昭和61年）飯島和吉町長の任期満了による退任でその後継として無投票当選で就任した小川寅之助町長は1990年（平成2年）の選挙でも再び無投票当選を果たした。

1、2期にわたる小川町政は第3期町づくり総合計画にそって精力的な町づくりを進め、総合研修センター、ケアハウス、デイサービスセンターの建設をはじめ学校整備、都市交流、商店街近代化事業の着手、高原開発など多くの施策遂行に敏腕を振るった。

1994年（平成6年）2期の任期満了を前にして、9月定例議会で小川町長は議員の質問に答える形で3選出馬を表明した。選挙は当初、これまで政策協定を結んでいた政党と今回は交渉決裂となったため対立候補擁立の動きもあったが最終的には見送られ2期8年の実績と新たな4年間への期待から3期連続無投票当選となった。この選挙にあたり小川は「住んでよい町、訪ねてよい町、緑豊かな田園農村づくり」をスローガンに、①病院の改築など医療、福祉施策の充実　②生活基盤整備　③農業、商業の振興　④文化交流事業の展開　⑤協調と融和の町づくり等を公約に掲げ無投票3選を果たした。

当選した小川町長は任期満了となる助役に浪内一洋、収入役に安村順七を再起用することとし、12月定例議会の同意を経て1995年（平成7年）1月1日付けで任命した。

小林町政の誕生

小林　康雄

士幌町はじめての3期無投票当選を果たした小川寅之助町長は12年の任期中、飯島房芳町長が掲げ歴代町長が継承した「母胎から楽土まで」を基調とした愛のまち建設を発展させ、福祉、教育、文化、産業など多くの分野で町政に進展をもたらしたが、とりわけ3期目は30年来の町民悲願であった道道士幌然別湖線道路の開通促進に精力をつぎこんだ。

1998年（平成10年）の任期満了の前にこれら実績を高く評価して後援会を中心に4選出馬の要請が続けられたが「首長として3期は一つの区切り、年齢的にも限界」とし、同年9月の定例町議会で勇退を表明、12月4日退任した。

小川町長の勇退表明後、ポスト小川をめぐる動きが活発化した。小川は、後継者指名はしなかったが町内有力者による小川町政を継承できる人として浪内一洋助役擁立の動きが起き出馬要請がなされた。はじめ固辞していた浪内も役に立つなら、と要請を受け入れ出馬の意向を固め後援会発足に向け準備を進めた。

一方こうした長老的な人の声で首長を選ぶことに反発する町内の若手らは有志による会（21会）をつくり、新町長像を論議する中から候補者を選考しようと数回にわたり会合を開いて最終的に「若くて行動力のある人」として町企画調整室長の小林康雄を擁立する方針を決め小林に再三の出馬要請を行った。熟慮の結果、小林も民主的な町づくりをしたいという若手グループの熱意に押され出馬を決意した。

また新たに士幌南地区の有志を中心とした「鈴木洋一と20世紀の士幌を考える会」が鈴木洋一町議会議員の擁立に向け準備を進め、一時は三つ巴の戦いが予想された。

しかし選挙告示が1か月後に迫った頃、小林、鈴木両陣営で候補一本化に向けた調整が続けられた結果、小林を候補とすることで合意し鈴木陣営は小林支援で動くことになった。

浪内擁立を目指す陣営は、後援会発足に向けて準備会を発足させ設立総会の日程をすでに決めていたが、浪内は総会開催直前になって突如出馬取りやめを表明した。

不出馬を決意した理由として、小林と政策上大きな違いが無いのに町内を二分する争いで安定している町内融和をこわしたくない、若い人に町政を委ねたいということであった。浪内は10月31日付で助役を辞していた。

共産党士幌町委員会は当初複数候補が予想されている段階では政策協定を探る一方で独自候補擁立も視野に検討していた。しかし予

定候補者が小林ひとりとなった時点で無投票阻止の立場から独自候補擁立の方針を固め、元町議会議員の新庄晴也を党推せん候補とすることを決定した。

16年振りに行われる町長の選挙戦は、士幌高原道路反対の立場で住民投票を主張していた共産党の推す新庄と同道路の推進を積極的に進める小林の一騎打ちとなったが、自民、民主両党と士幌地区連合などの推薦を受けた小林が新庄に３２００票の大差をつけ圧勝した。

小林は選挙戦で基本理念として「公平、公正でわかりやすい町政」「ふれあいと支え合いを大切に、心がかよう町政」「町民参画によるみんなで創る町政」を掲げ、士幌高原道路の促進、福祉村建設構想の推進、行政機構活性化への取り組みなどを重点施策とする一方、５つに分けた公約『①「拓きます」希望のある21世紀、②「広げます」ふれ愛と幸せ、③「伸ばします」たくましい産業、④「育てます」人と文化、⑤「創ります」快適で安全な生活』の中で具体的な政策をとりあげ、更に小川町政の継承も訴えて初当選した。

一方新庄は、士幌高原道路に対する住民の是非を問うバロメーターの意味も持つと位置付けて「高原道路建設中止」を前面に出し、更に「老人医療費の負担軽減」や「ゼロ歳児保育の実現など福祉の充実」などを公約としたほか、消費税や、年金・医療・社会保障の切り捨て反対などを訴え対抗したが出遅れもひびき大きくおよばなかった。

１９９８年(平成10年)11月29日行われた町長選挙の投票率は84・03％だった。

▽開票結果

小林康雄　３７８１票

新庄晴也　５７２票

12月５日に就任した小林町長は空席となった助役に収入役の安村順七を起用することとし初議会で同意を経て議決の翌日12月18日付で任命した。

また収入役については年度末まで空席とし１９９９年(平成11年)３月定例議会において大場英機建設課長を選任することを提案し同意を経て４月１日付で任命した。大場は１９６６年(昭和41年)に役場に入り水道課長を経て建設課長の職にあった。

小林町政の続投

小林　康雄

１９９８年(平成10年)小川寅之助町長の任期満了による退任でその後継として16年ぶりに町長選挙で圧勝した小林康雄町長は、２００２年(平成14年)２期目の出馬に当たっては、公平、公正でわかりやすい町政・安心と生きがいを広げる心がかよう町政・町民参画によるみんなで創る町政を基本理念に臨んだ。高原道路建設中止による代替振興策、町村合併問題、福祉村建設など重要行政課題が山積みするなか、対抗馬が現れることはなく、無投票当選となり、以後の３回の選挙でも無投票当選を果たした。

６期目の２０１８年(平成30年)では、続投との声もあった中、体調不良から不出馬を表明、一転して後継選びとなったが、突然のことで声を上げる者もなく、町内５団体が水面下で候補者に声掛けを行うも固辞され、断念。告示日が近づく中、町政を混乱させることはできないと病を押しての出馬となり、結果、連続しての無投票当選を果たした。

小林町政は第４・５・６期町づくり総合計画にそって精力的な町づくりを進め、福祉村整備事業(病院改築含む)、特別養護老人ホーム「ほほえみ」、バイオガスプラント、食品加工研修センター、下居辺交流施設、管内初の認定こども園の建設、かみおりベエコ交流館、移住体験住宅、中士幌太陽光発電所、子ども交流センター、新道の駅(ピア21しほろ)をはじめ学校整備、都市交流事業など多くの施策遂行に敏腕を振るった。

この間助役には１９９８年(平成10年)12月、安村順七(平成14年公務中の交通事故により急逝)、２００２年(平成14年)12月には、建設課長であった高井秀美(平成19年から副町長)を、２０１０年(平成22年)12月には、総務企画課の主幹であった柴田敏之を、２０２０年(令和２年)４月には、保健医療福祉センター長であった高木康弘を副町長に起用、収入役については、大場英機収入役の任期満了により２００３年(平成15年)で廃止とした。

広報と広聴

広報広聴活動は町民に情報を提供するばかりでなく町民の声を町政に反映させる手段として重視されている。

町づくり懇談会は毎年春と秋の２回地区別に開催して町長と町民の直接対話を通じ町政執行への指針の一環としている。

また１９９９年(平成11年)度からは地区懇談会の

町づくり懇談会

ほか団体等を対象に町長とのふれあいトークが設定され初年度は青年、女性、文化、スポーツ、福祉等18団体を対象に行った。

１９５２年(昭和27年)４月に広報第１号が発行されてから２０２０年(令和２年)で68年の歴史を誇る「広報しほろ」は１９９４年(平成６年)３月号で４００号に達し、１９９５年(平成７年)４月号からサイズをＡ４版に改め紙面の充実を図り、２０１９年(平成31年)３月号で７００号に達した。

１９９９年(平成11年)からは町民の声を町政に生かす広聴活動をさらに充実させるため、広報しほろにユートピアメール(意見提出用紙)を年４回挟み込み、意見、提言、要望の受付を開始。町長が直接目を通すことになっていることから多くの意見、提言が寄せられている。２０２０年(令和２年)４月から、広報しほろ等を手に取ってもらう機会を増やし、親しみをもってもらうためにコンビニ等９か所に配置した。

１９９５年(平成７年)度には士幌町のイメージアップを図る「エコーはがき(広告付はがき)」を６万枚発行し、５万枚を道内各郵便局で販売、残る１万枚の中から全戸へ２枚ずつを全国の親戚、知人へ士幌町を紹介する目的で配布された。

過去に北海道の広報コンクールのカレンダー部門で連続７回の入選を果たした町民カレンダーは、郷土文化人の写真、絵画等を題材としたシリーズ物で毎年各戸配布しているが、ごみ収集に伴う地区別日程もひと目で分かるようになっており重宝がられている。11年からは、ごみの地区別収集日の変更に対応するためこれまでの年カレンダー(１月～12月)から年度カレンダー(４月～翌年３月)に改められ、現在は「ごみ収集カレンダー」として発行されている。

１９７３年(昭和48年)から発行している役場だよりは、町民への事務連絡事項など、お知らせ広報として毎月２回手作りで発行していたが、２０２１年(令和３年)４月より月１回の発行に変更、２０２１年(令和３年)12月末で１２００号の発行となっている。

インターネットの普及が急速に広まり、情報受発信の主流となってきているが、町は１９９７年(平成９年)６月にインターネット利用によるホームページを開設、町の紹介のほか「広報しほろ」「役場だより」「分譲地」および「観光案内」など多くの情報を提供してきた。２０１２年(平成24年)３月には、全面更新し、内容の充実を図っている。

令和２年度のアクセス数12万９４５３件

また、平成27年７月には、ＳＮＳ(ソーシャルネットワークサービス)の一つであるフェイスブックによる情報発信を始め、広報紙では紹介しきれない話題やイベント情報をタイムリーに発信し、投稿記事に対する閲覧利用者は一つの投稿記事につき約５００件～２万件となっている。

そのほか「町勢要覧」を随時作成して、視察来町者への配布や町のＰＲ用として広く活用している。

情報公開と個人情報保護

情報化時代の進展で国民の知る権利の主張が一層強まっている中、行政の情報公開を条例化する地方自治体が増えてきているが、士幌町においても開かれた町政を推進するため２０００年(平成12年)６月の定例町議会で情報公開条例の制定を議決し、同年10月１日から情報の開示をはじめた。

情報公開の対象となるのは、町長、町議会、教育委員会、選挙管理委員会、監査委員、農業委員会、固定資産評価審査委員会、公平委員会の各機関で、公開請求のできる情報は次に該当する情報を除き、原則として開示されることとなる。

①個人のプライバシーに関する情報

②法人などの事業活動が不当に損なわれると認められる情報

③公共の安全と秩序の維持に支障が生ずるおそれのある情報

④町の事務事業で、公開することによりその目的が失われたり、公正または円滑な実施を困難にすると認められる情報

⑤法律等により非公開とされている情報

情報開示の方法は、閲覧または写しの交付で行うことになっており、写しの交付の場合のみ有料となる。

また、２００５年(平成17年)３月には、個人情報保護条例が制定された。この条例では、個人情報の適正な取扱い(収集の制限・利用の制限等)の確保に関し、必要な事項を定めるととも

に、保有する個人情報の開示、訂正および利用停止を請求する権利を明らかにしている。

地方分権と地方創生

国の権限の一部を地方に移し、国と地方公共団体の役割分担を明確にするという目的で「地方分権一括法」が成立し、２０００年（平成12年）４月１日から施行された。これは、国に集中している権限や財源を道や市町村に移し、地域の行政は地域の住民が自分たちで決め責任をもって執行するというもので、機関委任事務が廃止され、国家と地方自治体が名目上では対等な関係とされる。この地方分権改革は、１９９３年（平成５年）６月、衆議院・参議院で「地方分権の推進に関する決議」がなされ、地方分権推進委員会が最終報告を出した２００１年（平成13年）６月までを第一次分権改革とし、２００６年（平成18年）地方分権改革推進法が制定され、２００７年（平成19年）４月に地方分権改革推進委員会が設置されてからの期間を第２次地方分権改革と位置づけされ、２０２０年（令和２年）６月までに第10次にわたる地方分権一括法が制定されている。この第１次、第２次の間は２００１年（平成13年）７月に地方分権改革推進会議が発足し、小泉内閣による三位一体改革（国庫補助負担金改革、税源移譲、交付税改革）がなされた。

小規模自治体に移譲される権限や事務は限られているが、将来的には地方自治体ごとの発想による町づくりが今までよりも更に幅広く可能となることも考えられ、町職員はもとより住民一人ひとりの創造性が問われることとなった。

第１次分権改革の中で『平成の大合併』、第２次分権改革の中で、少子高齢化等に伴う『限界集落』『地方消滅』『消滅自治体』といった衝撃的な言葉が巷に現れた。

これらの言葉は、人口減少が拡大し、地方において財政難や働き手不足が起き、地方という存在が消滅するということから現れたものであり、これらを受けた形で、地方創生といった政策が展開されている。

２０１４年（平成26年）に「まち・ひと・しごと創生法」が施行され、人口減少・高齢化、地方衰退などの課題に対して、日本全体が持続可能な社会形成を目指し取り組む事とされ、町でも、２０１６年（平成28年）からの第６期町づくり総合計画の中で「士幌町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を重点施策として位置づけ数々の施策が展開されている。

市町村合併問題から自主・自立へ

地方分権一括法には市町村の合併に関する特例法も含まれている。これは、交通基盤・情報通信の発達により日常生活における活動範囲が市町村の行政区域を超えて拡大していることや、高度で多様化する住民ニーズに応えるためには自治体独自の判断と運営が必要となり、そのためには、財政基盤の強化・行政運営の効率化・専門職員の確保や人材の育成が必要であり、財政基盤の弱い市町村では、保健や福祉の対応が困難な状況になることも考えられたためである。

国は、合併推進に際し、合併特例法のタイムリミットは、２００５年（平成17年）３月として地方交付税の特例措置・合併に関する財政支援による「アメ」と地方交付税の削減による「ムチ」を用意した。

道は、市町村合併推進要綱を策定して、人口規模や、生活圏などを基準とした道内98の合併パターンを提示した。これによると十勝は８通りの合併案で、士幌町は音更、上士幌、鹿追と一つになる人口５万８千人規模の市制施行型合併案のみとなっていた。

これらの状況から、２００２年（平成14年）に十勝町村行政のあり方検討会議、北部ブロック首長検討会議、北十勝４町市町村合併問題研究会が設置、検討が開始され、町民に対しては、町民会議、市町村合併講演会、町づくり懇談会での説明や広報によるシリーズ「市町村合併を考える」として適時情報提供等を行った。

また、北十勝４町では、同年12月に、同一内容で20歳以上の町民１０００人に市町村合併に関するアンケートが実施され、本町では、４町の中で唯一半数を超える53・１％の回収率となった。この段階での合併についての考え方は、どちらかといえば、を含めると「合併した方が良い」35・４％、「合併しない方が良い」が42・０％と、合併しないほうが良いが６・６ポイント上回っていた。検討が続けられた結果、２００３年（平成15年）６月に開かれた「北部ブロック首長・議長検討会議」において『北十勝４町による枠組みは白紙にもどし、今後は各町がそれぞれの方向性を模索していく』という結論となった。

同年７月、上士幌町、８月には、音更町より２町による任意合併協議会創設の申し入れがあった。当時、国の地方制度調査会の最終

報告(11月)で基礎的自治体の人口要件として1万人と明記される場合が想定されたことから、いずれか早期に任意合併協議会を立ち上げるべく検討を行い、町議会市町村合併調査特別委員会に町の方針「音更町では、実質吸収される。地域の特性を維持し、農村として発展できる方向」との総合判断が了承され、同年9月、上士幌町との任意合併協議会創設に至った。合併協議会の下、幹事会・専門部会・分科会を開催し精力的に検討を行い、２００４年(平成16年)5月、任意合併協議会から法定合併協議会への移行を上士幌町に申し入れを行ったが、上士幌町の「広域行政の推進を図り自主自立を目指す」との立場により任意合併協議会は解散となり、結果として法定協議会への移行は出来なかった。

これにより、同年7月、町は自主・自立検討会議を設置し、２００７年(平成17年)3月、『職員定数・給与の削減』『保育所のあり方検討』『民間委託の拡大』『広域消防の検討』『団体運営補助金の一律カット』『住民負担の見直し』などを含む、自主・自立プランを策定した。

なお、２００４年(平成16年)全国に３１００あった市町村数は、現在１７１８(北方領土の6村を含めると１７２４)となっている。

役場の動き

町の行政事務を担う役場は、社会の動きや新しい制度などにあわせ、組織機構の改編を図ってきた。

１９９２年(平成4年)度以降に機構改革した主なものとして、１９９４年(平成6年)4月、今まで産業振興課の1係であった商工労働係を課に昇格、商工労働観光課とし商工労働係と観光振興係の2係を置いたほか、民生課を住民福祉課に産業振興課を農業振興課(林務係新設)に、また、車両課を車両センターにそれぞれ課名を変更、加えて企画課に企画調整室を新設したのをはじめ係の統廃合、係名の変更を行った。同時に総合研修施設のオープンで教育委員会事務局が同施設に移ったため、農業振興課を多目的研修施設(コミセン)社会教育課跡に、農業共済課を旧図書室跡に移し新設の商工労働観光課は教育委員会管理課の跡に配置された。

１９９９年(平成11年)4月には、２０００年(平成12年)からはじまる介護保険をにらんで住民福祉課内の係と保健センターの係を再編整備したほか、士幌高原道路の中止に伴い企画課の企画調整室を廃止した。

２００１年(平成13年)4月、町民保健センターに設置していた保健・介護部門を保健課に、住民福祉課から住民年金係・環境衛生係と税務課を併せ町民課へ、総合福祉センターオープンで地域福祉係・保険係と総合調整係を福祉課へ、へき地保育所を士幌保育所と併せ保育課へ名称変更。

２００２年(平成14年)には車両センターを建設課に統合。

２００３年(平成15年)には管財水道課の水道係・下水道係を建設課へ、管財係を総務課へ、農業振興課と農業共済課を併せ農政課に、農業振興課の林務係と商工労働観光課を併せ商工緑地課へ名称変更。病院改革を担当するため、部長相当職の保健医療福祉センター長(元道職員)を配置(平成19年まで)。

２００４年(平成16年)には福祉課と保健課を併せ保健福祉課へ名称変更しグループ制を試行。

２００６年(平成18年)には、グループ制導入に伴い、農政課と商工緑地課を併せ産業振興課へ、教育委員会の管理課と社会教育課を併せ教育課へ、２００７年(平成19年)には総務課と企画課を併せ総務企画課へ統合した。

２００８年(平成20年)には十勝管内で始めて保育所と幼稚園を併せ認定こども園を設置、保育課を子ども課へ名称変更した。

２０１１年(平成23年)4月、保健福祉課・病院・特別養護老人ホーム・子ども課を所管とする保健医療福祉センター長職を配置(平成25年4月より部長相当職)

２０１６年(平成28年)度には、とかち広域消防局の発足に合わせ消防課を設置、中士幌消防会館を士幌町役場中士幌出張所と位置づけ、戸籍事務の一部と中士幌地区住民が役場へ提出する文書の取次業務を行うこととした。(職員は併任)

２０１７年(平成29年)度は、農業共済事業を十勝農業共済組合へ引き継ぎを行ったことから、産業振興課内の畜産農済グループを廃止し産業振興グループに再編した。

１９８５年(昭和60年)度にはじめて行われた道庁との職員交流は、その後中断されていたが、１９９５年(平成7年)に再開され、翌年からは毎年1～2名が道庁・中央省庁を含む他官庁との交流も始まり、行政能力を高めるのに役立てている。

わが国では女性の社会進出、地位向上についての理

解はまだ不十分ではあるが、専門職は別として町がはじめて女性の係長を登用したのは1989年(平成元年)度であった。2000年(平成12年)4月1日現在では6人の女性職員が係長ポストについており専門職を含めると15のポストに、2010年(平成22年)4月1日現在では課長職1名、補佐職2名、係長職11名の女性職員がおり専門職を含めると25のポストに、2021年(令和3年)4月現在では課長職3名、補佐職2名、係長職14名の女性職員がおり専門職を含めると33のポストに登用されている。

労働時間の短縮を図るため国家公務員の完全週休二日制が1992年(平成4年)5月から、また道も同年8月から導入され土曜日を閉庁することになった。

士幌町においても4週5休、4週6休の制度を経て1994年(平成6年)4月から一部事業所等の変則実施を除き、土曜日閉庁の完全週休2日制が実施された。

2、町の財政

財政規模

町の財政規模は年々増え続け1995年(平成7年)には決算金額が100億円を超え、2001年(平成13年)に、140億円をピークとし、2008年(平成20年)には決算金額が64億と減少、その後60億円、70億円台を経て再び、2017年(平成29年)に100億を超えたが以後、70億円台で推移し、2020年(令和2年)度決算では、79億4000万円の歳出額となっている。

決算額の大きな減少は、地方分権に伴う国庫補助金・負担金改革や交付税改革に伴うものであり、また、他の増減は、町内施設の整備を重点に町づくりを進めてきたあらわれと見ることができる。

(図－1　表－1・2参照)

近年行われた重要な事業としては次のようなものがある。(平成2年～令和2年の主なもの1千万円以上)

◎昭和63～平成6／佐倉地区土地改良総合整備事業

◎平成元～3／西士幌地区土地改良総合整備事業

◎平成2／公営住宅昭和南団地建設・西上地区集落センター新築・車両センター新築(事務所)

◎平成2～3／士幌33号線道路改良舗装・林道ワッカクンネップ線開設

◎平成3／下居辺小学校校舎改築・ケアハウス　デイサービスセンター建設・士幌バスタッチ改築

◎平成3～6／総合研修施設建設

◎平成4／士幌リサイクルセンター建設

◎平成4～5／上居辺小学校校舎改築

◎平成5～6／コミュニティ広場整備

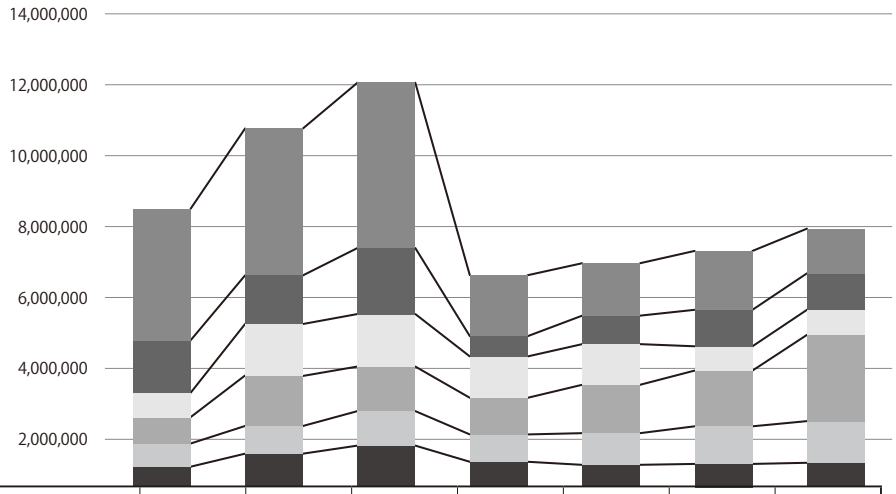
◎平成6／国産材展示施設建設・西上へき地保育所改築事業

◎平成6～7／中央中学校校舎改築事業・河川敷パークゴルフ場整備

◎平成6～8／創造の森整備事業・タウンプラザ建設事業

◎平成7／西上音更小学校

図－1　町財政支出の性質別構成(年度別)



	1990 H 2年度	1995 H 7年度	2000 H12 年度	2005 H17 年度	2010 H22 年度	2015 H27 年度	2020 R 2年度
■建設事業	3,706,107	4,124,560	4,634,667	1,725,154	1,473,432	1,653,146	1,248,270
■その他	1,485,154	1,382,587	1,862,308	563,899	806,535	1,014,638	1,013,914
■公債費	690,482	1,433,561	1,471,582	1,179,485	1,141,970	680,500	720, 679
■補助費・扶助費	741,420	1,433,834	1,281,085	1,014,229	1,357,887	1,573,790	2,424,023
■物件費・維持補修費	642,903	787,617	973,714	767,994	886,527	1,064,918	1,188,396
■人件費	1,250,041,	1,598,116	1,826,580	1,388,869	1,296,973	1,320,122	1,344,368

一般会計決算額の推移（年度別）

表－1　　（単位：百万円）

歳入	1990（H2）	1995（H7）	2000（H12）	2005（H17）	2010（H22）	2015（H27）	2020（R2）	歳出	1990（H2）	1995（H7）	2000（H12）	2005（H17）	2010（H22）	2015（H27）	2020（R2）
町税	643	768	797	914	915	1,046	1,219	議会費	50	89	97	76	71	84	74
地方譲与税	185	225	215	274	211	183	182	総務費	657	1,436	766	616	926	1,367	1,985
利子割交付金	25	18	30	5	3	2	1	民生費	465	1,148	1,620	869	1,122	1,348	1,337
配当割交付金				1	1	3	3	衛生費	289	591	1,975	563	714	619	731
株式等譲渡所得割交付金				2		3	3	労働費	186	28	31	45	95	35	18
自動車取得税交付金	107	108	85	76	42	27		農林業費	1,886	2,062	1,975	1,112	861	710	937
地方消費税交付金			71	72	67	129	146	商工費	72	464	936	181	118	323	276
環境性能割交付金							12	土木費	937	1,547	1,838	849	620	783	599
地方特例交付金			26	31	21	1	7	消防費	170	296	196	194	211	261	192
地方交付税	3,428	3,973	4,510	3,195	3,590	3,202	2,990	教育費	832	1,652	1,078	927	1,038	1,075	1,059
交通安全対策特別交付金	3	3	3	3	2	2	2	災害復旧費	52	3	39	20	8	18	11
分担金及び負担金	408	620	320	137	181	104	72	公債費	691	1,434	1,472	1,180	1,142	681	721
使用料及び手数料	167	214	202	152	108	125	130	諸支出金	795	10	18	8	37	3	
国庫支出金	509	890	658	362	612	419	1,515	職員費	1,242						
道支出金	1,456	876	468	280	314	482	588								
財産収入	290	274	145	119	158	201	162								
寄附金	61	48	25	38	16	108	411								
繰入金	291	447	300	81	91	188	164								
繰越金	59	86	316	113	261	185	186								
諸収入	357	672	1,959	144	149	155	137								
町債	587	1,630	2,197	775	582	968	576								
法人事業税交付金							6								
計	8,576	10,852	12,327	6,774	7,324	7,533	8,512	計	8,324	10,760	12,041	6,640	6,963	7,307	7,940

人口１人当たりの町財政比較

表－2　　（一般会計決算　単位：千円）

区　分	士　幌　町				十勝町村平均	比　較	説　明
	H 元年度	H10 年度	H20 年度	H30 年度（A）	H30 年度（B）	A/B	
町村税の額	83	114	134	195	139	140.3%	
決算総額	1,132	1,597	966	1,192	910	131.0%	
人件費	159	245	188	218	123	177.2%	
建設事業費	483	628	159	254	185	137.3%	
積立金	67	63	77	113	135	83.7%	財政調整基金
負債	976	1,318	1,406	1,173	1,031	113.8%	町債＋債務負担行為

校舎改築
◎平成7～8／単身者用公営住宅整備
◎平成8～10／火葬場改築・総合運動公園整備事業
◎平成9／新田へき地保育所新築工事
◎平成10～11／佐倉小学校校舎改築・中士幌リサイクルセンター建設
◎平成10～12／福祉村整備事業（病院改築含む）・公営住宅建設
◎平成11～13／下居辺交流施設建設
◎平成13／公営住宅建設
◎平成13～14／特別養護老人ホーム「ほほえみ」建設
◎平成14／公営住宅建設
◎平成15／バイオガスプラント建設・食品加工センター建設
◎平成16／バイオガスプラント建設
◎平成17／公営住宅建設
◎平成19／認定こども園建設
◎平成20／小学校屋体耐震補強工事（上居辺小・北中音更小）・川西へき地保育所新築工事・佐倉地区バイオガスプラント発電設備工事
◎平成21／中士幌小学校校舎棟耐震改修工事・士幌町民プール改修工事・役場庁舎非常用電源設備設置工事・総合研修センター設備改修工事
◎平成22／士幌小学校太陽光発電設備設置工事・士幌中央中学校太陽光発電設備設置工事
◎平成23／士幌高等学校校舎耐震改修工事・かみおりべ木と太陽の香るエコ交流館建設
◎平成24／中士幌公民館太陽光発電設備設置工事
◎平成25／移住体験住宅新築工事
◎平成26／道の駅しほろ温泉施設改修工事・役場庁舎およびコミセン耐震改修工事・公営住宅若葉団地新築工事
◎平成27／役場庁舎耐震改修工事第2期・公営住宅若葉団地新築工事第2期・屋体施設吊物落下防止工事・子ども交流センター新築工事
◎平成28／士幌小および学校給食センターボイラー改修工事・士幌町地域創造発信拠点施設新築工事・士幌町中央中校舎天井改修工事
◎平成29／公営住宅南百戸団地新築工事・公営住宅睦団地新築工事・煙突用断熱材アスベスト対策工事（学校）・校内無線ＬＡＮ環境整備工事・農園付き住宅新築工事
◎平成30／公営住宅南百戸団地新築工事・公営住宅睦団地新築工事・農畜産加工研修施設改築工事
◎令和元／国保病院給排水衛生設備改修工事・士幌小エレベーター設置工事・公営住宅若葉団地新築工事・特養ホームナースコール設備改修工事
◎令和2／公営住宅若葉団地新築工事・学校施設屋上防水改修工事・校内通信ネットワーク等整備工事・冷房設備設置工事（小中高）・終末処理場建替工事・防災無線整備

財産と負債

町が将来の財政運営に備えた積立金は、２０２０年（令和2年）度末では一般会計分17件、56億１３００万円が基金として積み立てられている。

１９９０年（平成2年）度末と２０２０年（令和2年）度末の積立状況を比較すると、すでに目的を果たして廃止したものが3件、新たな目的で創設した基金が5件で積立総額では約14億９０００万円増えている。

２０２０年（令和2年）度末における各基金の状況は次のとおりである。

▽財政調整基金
8億４８４０万円

開村以来の基本財産の流れを継承したもので町財政基礎を強化し、不時の支出に備える

▽減債基金
9億１７９１万円

１９８８年（昭和63年）創設。財政事情により町債の償還が困難になったときの財源に充てる

▽農業振興基金
15億４２１７万円

１９７３年（昭和48年）農協の寄付により設置。毎年度元金から生じる利子をもって農業振興に関する独自の事業を行うもので、創設以来毎年農業者が海外視察を行ってきたほか、各年度ごとに運営委員が事業を決めている。この中には、１９９１年（平成3年）度の農協60周年記念を期して寄付された、特別農業振興基金1億円（１００年間積立て し将来の農業振興に充てる目的）とその後団体、個人からこの基金に寄付された額の積増し分、更に利息が含まれており、特別農業振興基金は、現在10億４２５３万円となっている。

▽肉用牛生産安定事業基金
２８３２万円

１９７６年（昭和51年）創設。基金から生じる収益を肉牛の生産安定事業に支出するもの

▽土地開発基金
2億１０００万円

１９７１年（昭和46年）度創設。公共用地の先行取得のための基金

▽飯島賞贈呈基金
３２５万円

故飯島房芳町長の功績をたたえ事績を永く伝えるた

め、住民の寄付金を基に設置したもので特に功績のあった青少年婦人層に主に賞を贈呈するもの。

▽太田寛一人材育成基金
1億4068万円
1985年(昭和60年)、名誉町民故太田寛一の遺志により遺族からの寄付金を積立設置したもので農業振興のための人材を育成する事業を行っている。

▽国鉄士幌線代替輸送確保基金
1億2080万円
1987年(昭和62年)国鉄士幌線廃止にともない、代替輸送を確保するため国からの交付金を基に代替バス運転事業者に対する欠損額補助、バス更新補助、関連施設の保守管理経費に充てている。

▽愛のまち建設基金
7億6668万円
1988年(昭和63年)創設。町民等の善意による寄付金等を積立、公共施設の建設や施設の整備等に充てるもの。

▽農地利用集積円滑化事業基金
3億932万円
1989年(平成元年)、町と農協が出資して設置したもので、農用地の合理的な利用増進のため農協が農地を取得および貸付管理を行うための資金運用に対し、基金から生じる収益をもって利子補給するもの。

▽酪農振興基金
3億2559万円
1989年(平成元年)創設。酪農ヘルパー設置事業に対し基金から生じる収益をもって助成するもの。

▽ふるさと創生事業基金
1億1000万円
1991年(平成3年)創設。地域づくり推進事業資金の一部を原資として積立、地域活性化事業の促進を図るもの。

▽地域福祉基金
1億5877万円
1992年(平成4年)創設。地域福祉の推進のため民間団体が行う事業に対し、基金から生じる収益をもって充てるもの。

▽農業災害対策基金
1億72万円
2012年(平成14年)創設。農業災害が発生した際の支援に要する経費および農業災害を未然に防止するための経費として充てるもの。

▽活き生きまちづくり基金
1996万円
2013年(平成15年)創設。住みよい豊かなまちづくりを推進するための経費に充てるもの。

▽学校教育施設整備基金
375万円
2016年(平成28年)創設。学校教育施設の整備に必要な資金を積み立てるもの。

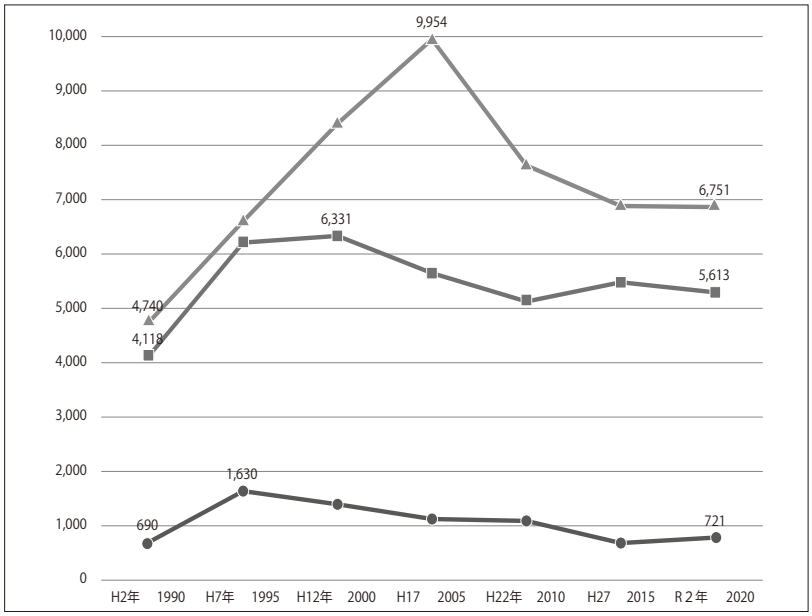
▽森林環境譲与税基金
627万円
2019年(令和元年)創設。町における間伐や人材育成、担い手の確保、木材利用の促進や普及啓発等の森林整備およびその促進に必要な事業に要する経費の財源に充てるもの。

◎町債と債務負担行為
大型事業の導入に伴い、町債の発行額も増加しており町債総額は1990年(平成2年)度の47億円に対し2000年(平成12年)度末では、84億円と37億円増の約1・8倍となったが、2020年(令和2年)度末では、67億5000万円に減少(図－2参照)。

また、町が将来的に責任をもつ債務負担行為の額は、1999年(平成11年)度末では16億円あったが、2020年(令和2年)度末では1915万円となった。

◎土地その他
町が所有している行政財産と普通財産は、2020年(令和2年)度末、土地約2285万平方㍍で、普通財産が行政財産の約1・3倍となっている。所有面積は1991年(平成3年)度末に比べ420万平方㍍の増となったが多くは、山林・排水溝・雑種地取得による

図－2 町債と基金



(単位：百万円)

	1990 H2年度	1995 H7年度	2000 H12年度	2005 H17年度	2010 H22年度	2015 H27年度	2020 R2年度
公債費	690	1,630	1,386	1,118	1,088	679	721
基金総額	4,118	6,212	6,331	5,645	5,116	5,477	5,613
町債総額	4,740	6,593	8,401	9,954	7,620	6,886	6,751

ものである。

また建物では、２０２０年(令和2年)度末の延面積で１９９１年(平成3年)度末に比べ、約5万８０００平方メートル増の約14万６０００平方メートルとなっているが、総合研修施設・病院・特養の大型建設事業に加え、公営住宅の増改築、へき地保育所の新築が行われ、増加に結びついている。(表－３参照)ちなみに木造は2万１３８８平方メートル、非木造が12万５５９７平方メートルの延面積となっている。

町税の状況

２０２０年(令和2年)町財政全体からみた税収入の割合は14・３％と１９９０年(平成2年)より６・８％上昇している。

税の徴収率は現年度賦課分で依然99％台を維持しているが、過年度滞納繰越金が増加の傾向にある。このため、２００７年(平成19年)より収納率の向上や税の公平性を確保するため、十勝市町村税滞納整理機構に加盟し、悪質な滞納者に対し徴収を強化している。更に納税者の利便性の向上のため、２０１４年(平成26年)度よりコンビニ収納を開始した。

１９８９年(平成元年)度における住民一人当たりの税額は、８万3千円であったが、２０１８年(平成30年)度における住民一人当たりの税額は、19万5千円で、約2・3倍に伸びている。十勝町村平均より5万6千円高い。

２０２０年(令和2年)町税の構成比は、町民税48％、固定資産税45％、市町村たばこ税ほかが7％となっている。(表－２　図－３参照)

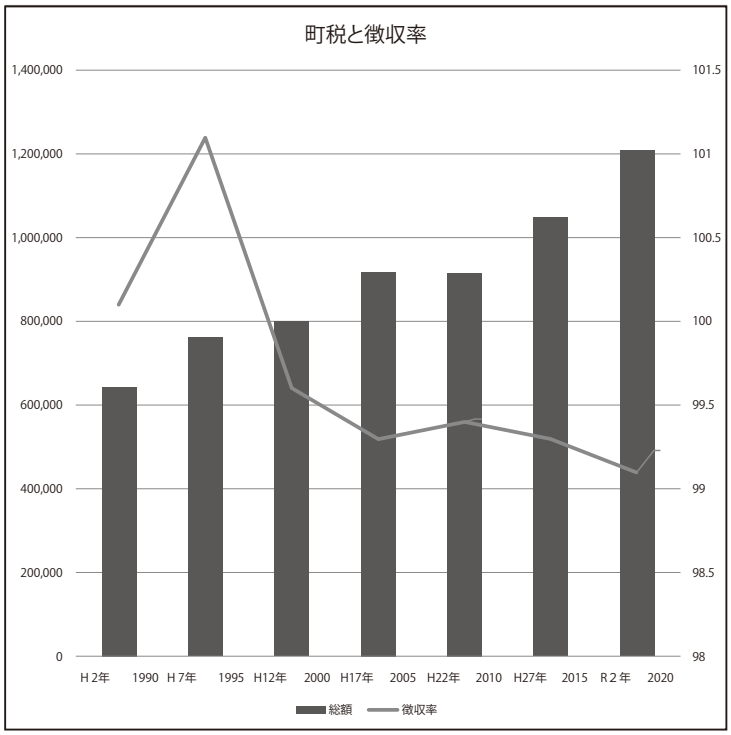
特別会計

町には一般会計のほかに特別会計を設けているが２０００年(平成12年)度から介護保険事業、２００４年(平成16年)度から介護サービス事業、２００９年(平成21年)度から後期高齢者医療事業が特別会計で運営され、２０１０年(平成22年)度に老人保健事業、２０１７年(平成29年)度に、農業共済事業が廃止され、現在

表－3　町有財産土地と建物（一般会計所属）

		1990 H2 年度末	2000 H12 年度末	2010 H22 年度末	2020 R 2 年度末
土地（千平方メートル）	庁舎	34	34	23	23
	消防その他施設	24	28	47	47
	学校	793	801	588	446
	公営住宅	163	163	106	106
	公園その他	158	202	482	477
	宅地	56	92	36	36
	墳墓地	55	55	28	29
	耕地	72	142	381	321
	雑種地	280	283	661	845
	排水溝	97	147	755	762
	山林	16,048	18,456	18,808	18,983
	採草放牧地	874	874	779	779
	合計	18,654	21,277	22,694	22,854
建物（平方メートル）	本庁舎	3,662	3,662	3,556	3,556
	その他	3,303	3,200	6,044	6,044
	学校	39,953	46,808	42,606	32,854
	公営住宅	20,958	24,310	23,998	24,946
	その他施設	20,983	43,970	43,058	79,585
	合計	88,859	121,950	119,262	146,985

図－3



（単位：千円）

	1990 H ２年度	1995 H ７年度	2000 H12 年度	2005 H17 年度	2010 H22 年度	2015 H27 年度	2020 R ２年度
総　額	642,257	760,521	798,934	918,035	915,061	1,049,702	1,211,682
徴収率	100.1	101.1	99.6	99.3	99.4	99.3	99.5

7つの事業が独立した会計で財政運営を行っている。

各会計決算状況は表－4のとおりである。

表－4　特別会計決算状況　（上段：歳入　下段：歳出　単位：百万円）

特別会計		1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020
		（H 2年度）	（H 7年度）	（H12年度）	（H17年度）	（H22年度）	（H27年度）	（R2年度）
国民健康保険事業特別会計		547	636	696	954	1,050	1,180	1,006
		515	624	694	910	986	1,144	1,004
国民健康保険病院事業会計	収益的収支	779	907	950	796	875	837	834
		777	906	949	844	888	918	839
	資本的収支	32	66	1,554	83	60	62	99
		32	66	1,585	112	86	89	120
老人保健事業特別会計		446	627	762	879	3		
		445	626	750	863	3		
後期高齢者医療事業特別会計						82	96	105
						79	94	103
介護保険事業特別会計				374	452	497	638	716
				342	446	496	626	694
介護サービス事業特別会計					442	492	493	514
					427	481	485	503
簡易水道事業特別会計		114	162	139	247	353	313	290
		112	160	137	232	333	278	264
下水道事業特別会計		476	134	231	159	141	161	937
		474	131	226	153	131	149	930
農業共済事業特別会計	農作物共済勘定	177	375	218	241	536	104	
		96	334	129	169	509	23	
	家畜共済勘定	598	807	619	665	538	553	
		598	807	596	638	510	540	
	畑作共済勘定	303	283	424	199	587	174	
		276	255	415	147	559	119	
	業務勘定	179	188	153	195	173	156	
			137	142	138	130	123	

3、町議会と行政機関

町議会の活動

町議会は、町政の重要な意思決定を行う機関として年4回の定例会のほか、必要の都度臨時会が開かれ、町の条例、予算決算、一般議案等について審議している。（表－1参照）

議員定数については、これまで16人で推移してきたが、行政改革・自主自立の流れの中で、２００３年（平成15年）に14人、２００７年（平成19年）に13人、２０１１年（平成23年）には12人と削減された。

議会は内部組織として常任委員会を設置しており、総務常任委員会、建設厚生常任委員会、産業常任委員会、議会運営委員会が本会議審議の予備的審査の役割を果たしている。この常任委員会構成も２００１年（平成13年）に、より実態に即した内容となるよう総務常

表－1　町議会本会議の開催状況

年度	区分	回数	日数	審議件数								
				条例	予算決算	事件議案	専決処分	決議意見書	諸願陳情	選挙選任	報告調査	計
１９９０ H２年度	定例会	4	17	15	34	27	3	4	16	6	33	138
	臨時会	6	6	3	5	10	7	0	1	1	1	28
	計	10	23	18	39	37	10	4	17	7	34	166
２０００ H12年度	定例会	4	11	38	37	20	1	7	8	8	21	140
	臨時会	7	7	9	11	6	4	2	0	0	0	32
	計	11	18	47	48	26	5	9	8	8	21	172
２０１０ H12年度	定例会	4	16	22	44	17	3	15	3	6	12	122
	臨時会	6	6	7	8	1	6	2	0	0	0	24
	計	10	22	29	52	18	9	17	3	6	12	146
２０２０ R２年度	定例会	4	12	36	41	7	1	10	0	8	9	112
	臨時会	5	5	5	11	2	4	0	0	0	0	22
	計	9	17	41	52	9	5	10	0	8	9	134

任委員会を総務文教常任委員会・建設厚生常任委員会を厚生常任委員会・産業常任委員会を産業建設常任委員会に改めた。２００３年（平成15年）には、議員定数の削減により総務文教・厚生・産業建設常任委員会の三常任委員会を総務常任委員会・産業常任委員会の二つの常任委員会に改めた。２００７年（平成19年）には、委員会活動の均衡を図るため、総務常任委員会を総務文教常任委員会、産業常任委員会を産業厚生常任委員会と所管事項・委員会の名称を改め現在の常任委員会体制となっている。

　また議会広報特別委員会、予算決算審査特別委員会ほか、重要な案件が発生した場合は特別委員会を設置して調査、審議にあたっている。近年では、第６期町づくり総合計画・地方創生策定および新拠点「道の駅」検討特別委員会が２０１５年（平成27年）度に設置され計画等の審議がなされている。（表－２参照）

▽歴代正副議長（平成３年度以降）

議　長

加納一郎
　平成３年５月～７年４月

今田鉄郎
　平成７年５月～11年４月

鈴木洋一

鈴木　洋一

今田　鉄郎

加納　一郎

秋間　紘一

加納　三司

佐古　準一

表－２

士幌町議会特別委員会の設置状況（Ｈ３～現在）（決算・予算特別委員会を除く）

期　間	委員会名及び調査事項
Ｈ６年度 (1994.11.11～1995.3.9)	病院運営調査・改築特別委員会 病院運営の健全化のための実態調査と将来の病院改築等に関する視察調査等（18回　18日開催）
Ｈ７年度～ Ｈ10年度 (1995.9.27～1999.3.31)	活性化促進対策特別委員会 活力あるまちづくりを創造し、活性化を図るための研究・調査 ・第４期町づくり総合計画の審査・士幌高原の周辺整備調査・河川敷パークゴルフ場の整備状況調査・平成８年12月に士幌　高原道路促進対策部会と医療・保健・福祉対策部会を設置し福祉村整備計画、高原開発の推進についての調査・研究Ｈ７年度（３回４日開催）／Ｈ８年度（１回１日開催）／Ｈ９年度（16日20日開催）／H10年度（６日10日開催）
Ｈ11年度 (1999.6.18～2003.4.30)	地域振興特別委員会 士幌高原道路に代わる地域の振興図るための調査・研究　（５回７日開催）
Ｈ11年度 (1999.6.18～2003.4.30)	福祉村対策特別委員会 地域福祉の充実を図るための研究調　（６回　７日開催）
Ｈ12年度 (2000.5.8)	福祉対策特別委員会 病院運営のあり方、課題等の研究調査　（１回　１日開催）
Ｈ12年度 (2000.7.31)	地域振興特別委員会 士幌高原道路建設中止に伴う町の振興策を図るための研究調査　（１回　１日開催）
Ｈ13～ 14年度 (2001.9.17～2003.4.30)	市町村合併問題特別委員会 地域の分析と将来予測、合併の必要性、メリット、デメリット、合併後の姿の調査研究 Ｈ13年度　（２回　２日開催）／Ｈ14年度　（８回　10日開催）
Ｈ13年度 (2001.12.7～2002.2.13)	職員の再任用条例及び関連条例審査特別委員会 職員の再任用に関する条例案ほか関連６条例案について審査 （４回　４日開催）
Ｈ15～ 16年度 (2003.5.8～2004.7.14)	市町村合併調査特別委員会 市町村合併についての研究・調査 Ｈ15年度　（12回　12日開催）／Ｈ16年度　（２回　２日開催）
Ｈ16年度 (2004.7.14～12.10)	議会議員定数検討特別委員会 議会議員定数について検討　（４回　４日開催）
Ｈ16年度 (2004.7.14～2005.4.28)	まちづくり構想検討特別委員会 自主自立のまちづくりを検討 （７回　７日開催）
Ｈ17年度 (2005.12.13～2006.1.30)	第５期町づくり総合計画策定検討特別委員会 第５期町づくり総合計画についての基本構想、基本計画の検討　（４回　４日開催）
Ｈ20年度 (2008.6.18～2009.3.30)	自治基本条例案策定検討特別委員会 自治基本条例に盛り込む議会関係条項の策定について検討　（３回　３日開催）
Ｈ20年度 (2008.9.30～2009.5.8)	議会議員定数等検討特別委員会 議会議員定数について検討　（４回　４日開催）
Ｈ27年度 (2015.6.24～2016.3.30)	第６期町づくり総合計画・地方創生策定及び新拠点「道の駅」検討特別委員会 町づくり総合計画及び新拠点「道の駅」に係る基本構想、基本計画、実施計画の検討 （８回　８日開催）

平成11年5月～19年4月　佐古準一
平成19年5月～23年4月　加納三司
平成23年5月～31年4月　秋間紘一
令和元年5月～現在　副議長

鈴木洋一　平成3年5月～7年4月
山中芳美　平成7年5月～11年4月
志村光一　平成11年5月～15年4月
大西米明　平成15年5月～23年4月

秋間紘一　平成23年5月～27年4月
細井文次　平成27年5月～31年4月
加藤宏一　令和元年5月～現在

委員会審議会など

町が設置している法律に基づく行政委員会や、諮問機関としての審議会などは次表のとおりとなっている。（表－3参照）

表－3　**町の各種委員会審議会等の設置状況**　（令和3年4月現在）

名　称	根　拠	設置年月	委員の選任	委員数	年間の会議数	委員長・会長・代表者
教育委員会	法律	昭27	議会同意	5	12	土屋仁志
選挙管理委員会	同	昭21	議会で選挙	4	定4・随時	河江信一
監査委員	同	昭26	議会同意	2	4	佐藤宣光
公平委員会	同	昭26	同	3	随時	井上恵一
農業委員会	法・条例	昭26	同	14	12	渡邊睦実
固定資産評価審査委員会	法律	昭26	議会同意	3	1・随時	土生明美
社会教育委員会	法・条例	昭24	教委委嘱	11人以内	3	吉田静二
国民健康保険運営協議会	同	昭34・3	町長任命	9	随時	谷本仁志
公民館運営審議会	同	昭57・9	教委委嘱	18人以内	2	中村貢
防災会議	同	昭37・12	町長任命	30人以内	随時	町長
行政不服審査会	同	平28・6	町長委嘱	5人以内	随時	未選出
国民保護協議会	同	平18・3	町長任命	30人以内	随時	町長
懲戒審査委員会	同	昭28・8	同	3	随時	松浦護
社会福祉委員会	条例	昭44・4	町長委嘱	20人以内	随時	樋口正寛
民生委員推薦会	法	昭44・4	同	14	随時	大野准弐
子ども・子育て会議	法・条例	平25・10	町長任命	10人以内	1	松浪浩之
予防接種健康被害調査委員会	同	平21・4	町長委嘱	4人以内	随時	未選任
地域包括支援センター運営協議会	同	平18・1	同	9人以内	随時	鎌田弘美
教育支援委員会	同	平27・4	教委委嘱	16人以内	2	清水弘
学校運営協議会	同	平29・12	教委任命	12人以内	各12人以内	吉田邦彦
特別職報酬等審議会	条例	昭46・3	町長委嘱	5	随時	未選任
農業振興基金運用委員会	同	昭48・3	同	10	1	町長
功労者選考委員会	同	昭51・9	同	7人以内	1	秋間紘一
町民会議	同	昭61・6	同	40人以内	随時	東村達夫
建設工事請負業者資格審査会及び建設工事請負業者指名委員会	同	平12・4	同	5	随時	町長
農業振興人材育成基金運用委員会	同	昭60・1	同	6	1	町長
公共料金等審議会	同	昭62・3	同	5	随時	未選出
農地利用集積円滑化事業基金管理協議会	同	平22・7	同	9	1	町長
酪農振興基金運用委員会	同	平元・6	同	9	1	町長
行政改革推進委員会	同	昭60・6	同	10人以内	1	七條光寛
情報公開・個人情報保護審査会	同	平18・4	町長任命	5人以内	随時	未選出
男女共同参画審議会	同	平17・4	町長委嘱	10人以内	随時	大西廉子
環境審議会	法・条例	平19・4	同	10人以内	随時	東村達夫
給食センター運営委員会	条例	昭44・8	教委委嘱	7人以内	1	清水弘
保健医療福祉総合推進協議会	同	平14・4	町長委嘱	15人以内	随時	力石憲二
地方創生推進会議	条例	令3・4	同	20人以内	1～2	町長
都市交流推進委員会	規約	昭62・6	他機関推薦	9	2	町長
空家対策協議会	条例	令3・4	町長委嘱	10人以内	随時	町長
開町記念事業検討委員会	条例	令3・4	同	15人以内	随時	町長

4、町づくり

町づくり計画

1970年(昭和45年)飯島房芳町長が町過疎振興計画に信条をこめ「愛のまち」建設計画とサブタイトルをつけて以来「愛」を主題として進められている。町づくり計画は第2期の「愛と緑の町」建設に続き、1986年(昭和61年)度から1995年(平成7年)度までの10年間に対応する第3期町づくり総合計画では、「〝愛とふれあいのある町〟建設をめざして」がテーマとなり、10年間の町づくりの基本方針、施策を樹立したもので、第1期、第2期計画までの生産基盤や生活環境の拡充に加え、生涯学習や地域間交流、更に農村環境の改善など精神的な分野の充実にも重点がおかれた計画が組まれ、その実現を果たした。

第6期町づくり総合計画

快適環境づくりのための住環境や景観の整備事業をスタートさせたのをはじめ、ケアハウス、デイサービスセンターや文化の拠点ともいえる総合研修施設の建設、上居辺、西上音更両小学校校舎の改築など、3か年ごとに実施計画を見直す中で多くの施策の実現をみた。

1996年(平成8年)度からの第4期計画では「ふれ愛ユートピア」をスローガンに掲げ、

①快適な暮らしづくり
②新士幌産業づくり
③特色ある拠点づくり
④士幌イメージづくり
⑤士幌の人づくりを5つの重点事業群(リーディングプロジェクト)として推進し、「福祉村」建設や快適環境づくり事業の推進、観光や交流と連動する農業の構築、生涯学習事業と町づくりの連携強化などを盛り込み、21世紀に向けた新しい町づくりをめざした。

2006年(平成18年)度からの第5期町づくり総合計画(ユートピアプラン21)では「協働でつくる活き生きしほろ」をスローガンに掲げ、

①文化を高め知性とゆとりを育むまちづくり
②健康でだれもが暮らしやすいまちづくり
③自然と共生し安心して暮らせるまちづくり
④賑わいや活力を創りだすまちづくり
⑤みんなで考えみんなで行動する町づくりを基本目標に事業の実現を図り、子育て支援や環境・防災等に係る事業を進めた。

2016年(平成28年)度からの第6期町づくり総合計画では、日本の人口減少を抑制するため、国が「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定したことを受けて、「士幌町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を重点施策として位置づけ、一体的に展開することとし、スローガンを「輝く未来へ　しほろ創生」とし、

①地域産業の活性化により、多様な雇用を創出する
②人の流れを増やし、住環境を充実させ、移住・定住を促す
③結婚・出産・子育てへの支援を充実させる
④安心して住み続けることができる地域をつくるを重点プランとして2025年(令和7年)度までの町づくりを進めることとしている。

まつりとイベント

本町の一大イベントとして定着した7000人のまつりは、2018年(平成30年)度で40回を数えた。士幌町開拓120周年を記念したこの年は、お笑い芸人によるステージイベント、士幌のグルメなど大勢の参加者に笑いが絶えないものとなった。まつりの後には、ロックバンドによる野外フェス「シホロック」が初めて開催され、士幌の夜が音楽で盛り上がった。

しほろ7000人のまつり

士幌高原まつり

現在は、本まつり、仮装盆踊りと2日で開催しているが、以前は、地区、団体によるあんどんパレードが、前夜祭で行われていた。

1994年(平成6年)からは、姉妹都市提携を記念して美濃市から贈られた「花みこし」が町の若者、子どもたちによって会場内を練り歩くなどの盛り上がりを見せている。美濃市からは、毎年このまつりに行政、民間グループが参加され、美濃和紙太鼓、仁輪加など伝統文化が披露されることなどもあり、交流を深めている。

町がかかわるその他のまつり、イベントとして、1976年(昭和51年)から行われた「やまべ祭り」、収穫感謝のつどいから発展した「産業まつり(のちのしほろ収穫祭)」、士幌高原道路の促進を図る一環として企画された「しほろ高原まつり」、冬まつりとして人気のあった「雪ん子まつり」をはじめ多くのまつり、イベントがそれぞれのいわれと歴史の中、発展を続けてきたが、中には住民ニーズや時代のすう勢の変化によりその開催目的・効果が薄れてきたものがあるため見直すこととした。見直しに当たっては、公民館・関係団体から推薦された委員による「まつり・イベント見直し検討チーム」を組織し、検討案を町長に建議、町長は町民会議に諮問し、答申を受け方針を決定し、

①春まつり「(仮称)しほろ高原まつり」
②夏まつり「(仮称)しほろ7000人のまつり」
③秋まつり「(仮称)しほろ収穫祭」

④冬まつり「(仮称)しほろ雪ん子まつり」の4つに集約し、数年間実施後、見直しの必要性が生じた場合は、再度検討することとした。

多くのまつり、イベントがそれぞれのいわれと歴史の中、発展を続けてきたが、「やまべ祭り」は1999年(平成11年)第23回で終了、士幌高原道路の促進を図る「しほろ高原まつり」、「雪ん子まつり」は2005年(平成17年)で終了し、現在、町のかかわるまつりは次のとおりとなった。

◇夏まつり　(しほろ700人のまつり)
◇秋まつり　(しほろ収穫祭)

みんなで教育を考える集い

1978年(昭和53年)2月の第1回以降、2006年(平成18年)までは、「町民のつどい」として開催された。町功労者および文化、スポーツ関係表彰、町づくりの提言と主張の発表があり、記念講演では、毎年著名な文化人、芸能人を講師に招いたほか、健康づくり推進員によるミニ劇場、ミニ健康まつり、健康を考えたわが家自慢の家庭料理展示会、ふる里づくり懇話会による試食試飲会、士幌高校特産物即売会などが総合研修センターを会場に行われ、毎年賑わいをみせていたが、2007年(平成19年)より「みんなで教育を考える集い」に変更となり、著名な文化人、芸能人を講師とした記念講演、士幌町文化賞・スポーツ賞の表彰も行われ、多くの町民が参加して実施されている。

町づくり討論会基調講演(平成13年度アグネス・チャン)

◇町づくり討論会

町民の意見交換を通じ、町づくり推進を考えようとして1987年(昭和62年)3月に初めて町づくり討論会が開かれた。毎年テーマを変え、基調講演、提言のあと全体討論が行われ、活発な意見交換がくり広げられていたが、2003年(平成15年)2月の第17回で終了した。

1991年(平成3年)度以降のテーマは次のとおり。

第6回　平成4年1月19日
私の地域づくり
第7回　平成5年1月24日
住んで楽しい町づくり
第8回　平成6年1月22日
今の農業危機をどう打開するか
第9回　平成7年1月22日
21世紀に向けたまちづくり
第10回　平成8年1月20日
ゴミ問題を考える
第11回　平成9年1月18日
高齢化社会とまちづくり
第12回　平成10年1月17日
21世紀の豊かな農村生活の創造をめざして
第13回　平成11年1月30日
新しい農村環境の創造
第14回 平成12年2月26日
21世紀に向けた士幌の未来と人づくり
第15回　平成13年2月24日
豊かな地域の創造と人づくり
第16回　平成14年2月23日
21世紀の地域の創造と人づくり
第17回　平成15年2月22日
個性あふれる地域の創造と人づくり

町民会議

町づくり事業に広く町民の意見を反映させるとともに、住民運動の促進をはかって、全町民参加による町づくりを進めるため、1977年(昭和52年)「愛と緑」の町民会議が発足し、1986年(昭和61年)には町条例で「士幌町町民会議」とされた。

町民会議は、町づくり総合計画をはじめ多くの案件について町長の諮問に応ずるほか、計画実施推進に大きな役割をはたしている。

委員は40人以内とし、地区公民館、青年、女性、各機関団体から選ばれた者のほか学識経験者および町民公募者で構成され2020年(令和2年)現在の議長は、吉田静二で委員数は31人となっている。

▽1992年(平成4年)10月以降の議長
森本清一／佐藤庄一郎／小松繁雄／東村達夫

しほろ発祥の地

美濃開墾合資会社が中士幌下台へ集団入植したのが士幌のはじまりで、同地区が「発祥の地」となる。町では中士幌幹線13号の一角に「発祥の地記念公園」を設け、入植者の子孫となる洞田和夫から寄付された美濃地方の古い様式を模して建てられた住宅を同公園内に移設改修し「美濃の家」の名称で保存する一方、町民はじめ多くの人たちの見学に供している。

1997年(平成9年)には、同公園に隣接して「伝統農業体存伝承館」を建設し、10月19日に開催された開拓まつりにあわせてオープンセレモニーと施設見学会を行った。

「美濃の家」は、入植が始まった明治時代後期美濃地方から移住した農家が大正時代に建てたもので、内部にはいろりを切った居間や当時をしのぶ生活様式がそのまま残されている。

伝承館は開拓の歴史をたどり、先人の苦労を体験、学習することにより郷土愛を育み、農業や文化を伝承するため建設したもので、都市からの訪問者等にも広く伝えていくために現在は、5月から10月まで管理人を置いて開館している。

これまで美濃の家に保管していた開拓当時の生活用具、馬耕時代の農機具等は伝承館に移した。

開拓まつり

地元住民の協力により、公園の整備推進が図られている。1989年(平成元年)から毎年秋に開催されていた「開拓まつり」は1999年(平成11年)度を最後に休止された。

姉妹都市提携

本町の開拓と大変ゆかりの深い岐阜県美濃市とは、1988年(昭和63年)以来、民間、行政レベルによる相互交流や、児童、生徒の体験交流が活発に行われていたが、親交の輪が広まる中、姉妹都市提携の機運が高まり1993年(平成5年)度に入って正式協議がされ、双方の議会の同意を経て、姉妹都市提携を結ぶことになった。

1994年(平成6年)2月11日新装の士幌町総合研修センターで開かれた「まちづくり町民のつどい」の中で、美濃市の西部晃彦市長と小川町長が多くの町民の見守る中、姉妹都市提携の仮調印を行った。

また同年4月30日には、士幌町から町長以下関係者が美濃市を訪れ、両市町長による正式調印が交わされ5月1日の市制40周年記念式典で披露された。

美濃市の歴史は古く卯建(うだつ)の町並と手すき和紙の町として知られているが、今でも市の中心地に卯建のある屋根が多く残っている。卯建とは、屋根の両側を高く上げ火災のときに類焼を防ぐためにつくられたもので、金持ちでないと卯建はつくれず「うだつがあがらない」の語源となっている。

提携を記念して、市旗、町旗の交換、記念品の交換が行われたが、本町からは柏野の石水幸治が制作したカシワの木の根による巨大テーブルを贈り、美濃市からは花みこしが贈られ、毎年7000人のまつりに登場し、まつりを盛りあげている。本町が贈った巨大テーブルは美濃市役所ロビーに置かれている。

美濃市内のうだつの上がる町並み(姉妹都市)

美濃市との交流が始まって間もなく発足した士幌町岐阜会は、姉妹都市提携後、更に活動が活発になり、毎年美濃市の花まつり(4月上旬)に多くの会員が参加して交流を深めているが、そのほか小学生による相互訪問、物産展などでの両市町の特産物販売でも多くの人達による交流が進んでいる。

2014年(平成26年)度に姉妹都市提携20周年となり、11月に美濃市から提灯が贈呈された。町からは、2015年(平成27年)1月に20周年記念と本美濃紙が「和紙・日本の手漉和紙技術」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録されたことを記念して、士幌石工クラブの瀬口健一郎が制作した十勝石に「美濃市」の文字と「市章」を加工した記念品を贈呈した。

他地域等との交流

美濃市との姉妹都市提携による交流のほかにも多くの交流事業が展開されている。

◇ふるさと会との交流

1987年(昭和62年)に設立した「東京士幌会」は300人近い会員数となり毎年情報交換、地場産品の斡旋、物産展等への協力が行われたほか、7000人のまつりにあわせたふるさと訪問も実施されていたが、2009年(平成21年)度総会において解散され、有志での活動となった。(解散時会員数174人)

東京に続く札幌でのふるさと会の設立が関係者によって進められていたが、1993年(平成5年)11月札幌市と近郊に住む士幌町出身者やゆかりのある人たちが「札幌士幌会」を結成するための設立総会と交流パーティーを開いた。

総会には会員112人(加入者205人)が出席。士

幌町からは小川町長以下、農協、商工会関係者8人が来賓として、東京士幌会代表、札幌新得会会長、札幌清水会会長も出席して盛大に行われた。

札幌士幌会は2019年（令和元年）度現在会員数120人で活動しており、町からは情報の交換で広報の送付や、7月には総会が開かれ、会員27人と町から5人の出席で行われた。その他、幹事会3回、家族交流会が30人の出席で行われ、10月に本町で行われた「しほろ収穫祭」に9人の会員が参加した。

2010年(平成22年)に設立された十勝士幌ふる里会との交流は、2014年(平成26年)11月に開催された総会において、町より広報誌の送付・情報交換を行うなどのスタートとなったが、2018年(平成30年)11月に開催された臨時総会において、会則を廃止し、今後は任意の親睦組織としての活動となった。(当時の会員状況は1都4県97人)

◇長野県辰野町との交流

戦時中に援農隊として本町に入った人たちが1991年(平成3年)に47年ぶり来町したのをきっかけに辰野町に「士幌会」、士幌町に「辰野会」が組織され交流が続けられていた。

辰野町は、日本一のホタルの里を売りものにしているが、士幌町でもホタルの養殖に取りくみはじめたところで、ホタル交流へと進んだ。1992年(平成4年)に辰野町では「北海道士幌町に蛍を飛ばす会」を結成し、7月に2000頭(匹)ものホタルを採って、同会の役員など一行4名が持参来町し、遊水公園にネットを張って放虫したが、美しい輝きに連日多くの町民に感動を与えた。

町では担当者、ふる里づくり懇話会(平成13年度解散)のスタッフが辰野町関係者の指導を受け、朝陽を中心に養殖活動を続け、1996年(平成8年)には、環境庁の補助事業(ホタルの里整備事業)により水路・遊歩道・休憩施設等を整備し自前のホタル観賞会を毎年開けるようになった。

◇国際交流

本町の国際交流は、昭和40年代以来、海外視察研修を中心に取り組まれてきたが、その後英語指導助手の配置、士幌高校の文化交流事業が活発に行われるようになり、また1993年(平成5年)には、東京連絡事務所の若杉勝利連絡員の仲介でポーランド大使館の通商代表部商務参事官スタニスラウ・フィリペック氏が来町し農業や産業などを視察したのをきっかけに交流提起があり、同国大使館と協議の結果、ポーランドニポロミッツェ市との交流でまとまり、翌年度士幌町から町長以下10名と東京士幌会から11名の総勢21名で視察団を編成し6月30日から7月11日にかけてポーランドを中心にヨーロッパ訪問を行った。

1995年(平成7年)には、ニポロミッツェ市より、市長、副市長、市議会議員ら一行5名が来町し、町内視察や町民との交流が行われ今後の交流展開を確認しあった。

その後も本町からは議会議員等が同市訪問を行っているほか、ポーランドからは文化交流団が来町している。

1997年(平成9年)9月5日付で今後の交流推進に向けた覚書の交換を行ったが翌年度以降の交流はない。

士幌町農協関係を中心に中国華西村との交流が進められているが、1996年(平成8年)と1997年(平成9年)に友好視察団が来町し、本町からも1996年(平成8年)に農業訪中団が、1998年(平成10年)には民間交流団(篠原昇好団長)22名が同村を訪れた。

2012年(平成24年)パラグアイ駐日大使および北海道パラグアイ協会からパラグアイイグアス市との国際交流の紹介を受け、7月11日から21日に小林町長、加納町議会議長、髙橋JA士幌町代表理事組合長ほか5名により現地事情調査を含む南米訪問を実施した。翌年2月4日には、イグアス市からの訪問団としてロベルト・ラミレス市長、河野敏明市議会議長、福井一朗日本人会会長、山下卓一農協総務担当理事が来町し、情報交換・住民相互の訪問など今後の交流促進向けた覚書を取交わした。

◇子供たちの交流

長い歴史を誇る新田小学校と神奈川県川崎市の下河原小学校をはじめ、佐倉小学校と千葉県佐倉市、上居辺小学校と千葉県鎌ケ谷市、都市交流事業として実施している士幌町・美濃市児童

新田小学校と下河原小学校の交流

交流事業は、２００９年（平成21年）で7回目を迎え、士幌小学校・中士幌小学校・北中音更小学校・下居辺小学校・西上音更小学校5校の6年生44人が美濃市を訪れた。美濃市では、士幌町とは異なる自然や町並み、そして文化や歴史を体験することができた。

また、美濃市児童１５８人が本町を訪れ士幌町の産業や開拓の歴史等を学ぶことができ、有意義な体験活動となった。

２０１９年（令和元年）に17回目を迎え、士幌小学校・中士幌小学校2校の6年生43人が美濃市を訪問し、美濃市児童99人が本町を訪れた。

そのほか毎年多くの府県の高校、大学等からも農業実習などのため本町を訪れ、長い交流の歴史が重ねられている。

◇物産展など

毎年、関東、関西方面の都市を中心に5か所程度（札幌・東京・川崎・大阪・美濃）で都市物産展を開催し本町物産の試食・販売・PRを通じ、現地関係者、住民との交流を図っていたが、現在は、美濃市産業祭において、士幌町の特産品の販売・試食・PRとともに現地関係者および住民と交流を行っている。

１９９２年（平成4年）度からは、ふるさと会員制度「おいしさ直行便」事業を開始し、士幌町と町の特産物を広く紹介するために、都市住民を会員とする特産品の直送事業を行ってきたが、一定の成果をあげ１９９９年（平成11年）をもって中止した。

▽物産展の主な出展品

美濃市　美濃市産業祭・主な出展品

馬鈴しょ、豆類、片栗粉、レトルトカレー、ジャム他

チセ・フレップ（山小屋）

１９７５年（昭和50年）に「士幌自由大学」が開かれ、北大の恵迪寮生が参加し、地元の青年たちと語った夢が、町・農協・地元業者の協力で、１９７８年（昭和53年）に実現した。当時の町広報の表紙（11月号）にもなっている。２０１８年（平成30年）9月には、士幌小屋チセ・フレップ設立40周年記念式典が町総合研修センターふれあいホールで開催され、町民や、設立時の関係者、北大恵迪寮生など約１００名が参加した。北大恵迪寮生は２０１３年（平成25年）から教育委員会と協力して学習サポート塾を開催し、長期休業（春・夏・冬）中の小中学生に、宿題などの勉強を教えたり、科学実験やドッヂボールなどのレクリエーション、読書などを通してワイワイと楽しく交流が図られ、子どもたちから大好評を得ている。

チセ・フレップ

ふる里づくり活動

１９８７年（昭和62年）に発足した「ふる里づくり懇話会」は、消滅しつつある身近な動植物を保護育成するとともに、地域の資源を活用した新しい産品等の開発を考え、心豊かなふる里づくりを進める目的で町民有志による民間組織として活動し、これまでアイスクリーム、果実酒等の試作、高山植物の増殖、探鳥会、ホタルの増殖などを続け成果をあげた。その他、キムチ、手打ちそばの講習、野菜等の栽培実験、水生生物調査、アウトドアネイチャースクールの開催等活動の巾を広げたふる里づくりの実践をしていたが、２００２年（平成14年）3月で解散となった。

株式会社Ｃｈｅｅｒｓの設立

町では、２０１６年（平成28年）から国の地方創生推進交付金を活用し、「しほろ創生賑わい創出事業」として観光振興活性化事業を２０１８年（平成30年）度までの3か年事業として実施し、その中で２０１７年（平成29年）4月にオープンした新「道の駅ピア21しほろ」と連動させ、〝ものづくり・ひとづくり・まち発信〟をテーマに若手人材の育成や新商品（特産品）の開発・販売を担う新会社を２０１８年（平成30年）4月に設立した。

この会社では、次の事業を行う。

①ものづくり／・特産品の企画・開発・農畜産物加工研修施設の運営・特産品の製造・販売

②ひとづくり／・若手人材の支援・育成・各種認証取得支援・町内労働力確保の推進

③まち発信／・士幌町ＰＲ活動・特産品の販売促進

▽代表取締役　加納　舜

農畜産物加工研修施設「しほろキッチン」

「しほろキッチン」（町内の小学生による公募で名称が決定）は、旧「道の駅ピア21しほろ」の建物を改修し、２０１９（令和元年）4月に

しほろキッチン（農産物加工研修施設）

完成。士幌高校に併設している食品加工研修センターの研修部門を移行し、「手軽に」「多目的に」「より便利に」利用できる施設として同年6月にオープンした。

農畜産品、乳加工品を製造する3つの加工室のほか、最大45名利用可能なパーティールームがあり、大型スクリーンとプロジェクターが設置され、講演会やイベントに利用できる。

女性団体や女性農業者の利用が多く、あんこを使ったスイーツやパン、ソーセージなどを作っている。また、小学生が町産野菜を使ってピザやスープを調理するなど、食農体験学習「大地くんと学ぼう」にも使われている。

施設は、町づくり会社の㈱CheerSが指定管理者として運営し、研修の受付や指導などを行っている。

士幌町食と観光大使

町では、2014年（平成26年）7月に本町出身で演歌歌手の中村仁美（当時芸名　戸川よし乃）を「士幌町食と観光大使」に任命した。歌手活動を通じて全国に士幌町の食と観光の魅力発信が期待されている。

食と観光大使　中村　仁美

2015年（平成27年）10月には、十勝の魅力を国内外に発信する「とかち観光大使」にも任命された。

地域おこし協力隊

地域おこし協力隊は、都市地域から過疎地域等の条件不利地域に移住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組で、任期は1年～3年となっている。

初代地域おこし協力隊

本町でも2016年（平成28年）の3人をスタートとして現在までに12人の隊員が、特産品開発・移住促進・観光促進・情報発信・ふるさと納税・地域イベントでの活動など、町の活性化に尽力している。

また、退任後に本町で就業され、協力隊OBとして活動されている方もおり、今後の町づくりの人材として期待される。

ふるさと寄付（ふるさと納税感謝特典贈呈事業）

都道府県・市区町村に対してふるさと納税（寄付）をすると、ふるさと納税（寄付）額のうち、一定の上限まで、原則として所得税・個人住民税から2000円を超える部分について控除される。

ふるさと納税返礼品

本町においても2015年（平成27年）6月から開始し、多くの寄付をいただき、町づくり事業に活用している。

第二章　保健と医療

1、保健

人口の自然増減の変化

1990年(平成2年)から1999年(平成11年)までの10年間における本町の平均人口は7101人で、それ以前の10年間(昭和55年～平成元年)の平均7130人とほとんど変わっていないが、2010年(平成22年)から2019年(令和元年)までの10年間の平均人口は6328人で、それ以前の10年間(平成12年～平成21年)の平均6828人と比べ、500人減っている。これは死亡が出生を上回る自然減と、転出者が多い、社会減が原因となっている。

全国的な少子化の進行は本町の出生数の減少にもみられ、ここ10年間の平均出生数は45人(年間)でその前の10年平均(62人)より17人減少した。

一方死亡数では、2010年(平成22年)から2019年(令和元年)までの10年間における平均は、86人と、前の10年間で平均より20人増加した。その結果、ここ10年間の平均で41人まで減少する自然減の増加となった。(表－1、図－1参照)

保健センター

町民保健センターは、町民の健康の維持増進と保健衛生の向上に職員スタッフ一同が相談・訪問指導業務などにつとめる一方、健康づくり推進員と連携し、毎年行ってきた総合検診のほか新規事業として1993年(平成5年)からは大腸がん検診を始めた。また、1995年(平成7年)からは北斗病院との連携による脳ドック検診事業を開始した。脳ドック検診では常に定員(当初200人～現在50人)いっぱいの100%受診となり「MRI」「MRA」等の検査で脳動脈瘤と診断され手術する人も多く1997年(平成9年)では10人が手術を受けているほか毎年多くの方が再検、精検後に治療、指導等を受けている。

1998年(平成10年)度からは、帯広厚生病院の協力を得て骨粗しょう症検診

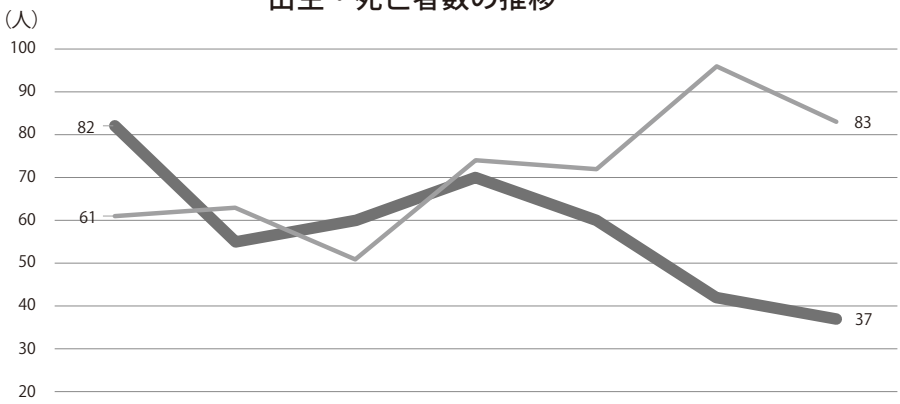
人口の自然増減

表－1　　(単位：人)

	人　口	出　生		死　亡		自然増減	
		人　数	1万人当り	人　数	1万人当り	人　数	1万人当り
H 2年～11年までの10年平均	7,101	64	90	62	87	2	3
H12年～21年までの10年平均	6,828	62	91	66	97	△4	△6
H22年～R元年までの10年平均	6,328	45	71	86	136	△41	△64

図－1

出生・死亡者数の推移



（単位：人）

	1990 H２年度	1995 H７年度	2000 H12年度	2005 H17年度	2010 H22年度	2015 H27年度	2020 R２年度
出生数	82	55	60	70	60	42	37
死亡者	61	63	51	74	72	96	83

を始めた。

健康を守るための予防教室等も多く取り入れているが高脂血症予防教室を１９９２年(平成４年)度から、また、健康啓蒙活動として健康まつりでの健康づくり推進員による寝たきり予防および痴呆(現・認知症)予防をテーマとしたミニ劇の開催など積極的な活動が繰り広げられた。

道の事業として実施されていた母子保健事業が１９９７年(平成９年)より町に移管され、１歳６か月検診および３歳児検診等が新しく保健センターで開始された。町では内容を充実して同事業を行っている。

町民保健センター

１９９８年(平成10年)度から、心身障害者のための、心のデイケアとして「ぬくもりデイケア」を新しい事業として始めた。

保健婦は１９９５年(平成７年)度で１名増員し４名、１９９９年(平成11年)度、保健センター内に在宅介護支援センターが設置され、更に介護保険の開始に向けて対応するため新たに２名増員して６名とし、栄養士も１名から２名体制とした。

介護支援センターにはケアマネージャーの資格をもつ介護福祉士１名と、保健婦２名が配置され、介護相談の窓口として活動していた。

総合検診は１９９９年(平成11年)度から今までの方式を変更して日帰り人間ドック方式と成人病検診方式に切り替え町立国保病院で実施することになった。

これまで、がん検診を、対がん協会に委託して実施してきたが人数制限もあり、また、町立病院の運営収益の向上を図る目的もあって、結核検診なども含め病院に一元化した。

２００６年(平成18年)からはＰＥＴがん検診を北斗病院との連携により始めた。

１９８９年(平成元年)に建設された保健センターは、福祉村建設の核として建設中の国保病院、総合福祉施設と接合させるため２０００年(平成12年)度で曳家(ひきや)工事が行われた。

(※「保健師助産師看護師法」が改正され、２００２年(平成14年)３月から看護婦・看護士が「看護師」に、保健婦・保健士が「保健師」に統一された。)

健康づくり

総合福祉センターの完成により、それまで、保健センターで行われていた保健行政部門について、保健課を２００１年(平成13年)に立ち上げ総合福祉センター内で実施している。

町民の健康の維持増進と保健衛生の向上に向けては、保健師・栄養士を中心として地域から推薦された「健

女性健康まつり

康づくり推進員」と連携し、相談・訪問指導業務などを、２００５年(平成17年)まで実施してきたが、国は増え続ける医療費の抑制を目的として、日本人の死亡原因の約６割を占める生活習慣病に着目した、「特定健康診査・特定保健指導」いわゆる『メタボ健診』を２００８年(平成20年)４月より導入、各健康保険の保険者に定めた数値目標を達成し、メタボの該当者および予備群を減少させることを求めた。

国は、健診の受診率やメタボの改善度という目標達成状況により、プラス・マイナス10％の範囲内で各保険者の後期高齢者医療支援金を調整(加算・減算)するというインセンティブを与え、自助努力を行えば支援金を減らせるとの施策を導入したことから、それらに即した対策を計画し、健康づくりを行っている。

▽現在行っている主な事業

・健康教育(地区健康講座・ウォーキング教室・こども料理教室など)
・病態別健康講座
・女性健康まつり
・ミニ健康まつり
・健康マイレージ事業
・健康づくり講演会

各種健(検)診

特定健康診査は、町で「特定健診」として実施しているが、対象者は士幌町国民健康保険に加入する40歳～74歳までを対象としているため、それ以外を対象とした、人間ドック、健診等も実施している。

▽現在行っている主な事業

・特定健診(30歳～74歳士幌町国保加入者)・後期高齢者健診(後期高齢者医療被保険者)
・日帰り人間ドック(30歳以上の町民)
・ＰＥＴ検診(40歳以上の町民)
・脳ドック(30歳～64歳の町民)
・各種がん検診(胃がん・肺がん・乳がん・子宮がんなど)

母子保健事業

安心して子どもを育てられる環境づくりの一環として乳幼児健診など各種事業を実施している。２０２０年(令和２年)８月に子育て世代包括支援センター(母子包括支援センター)を開設し妊娠期から乳幼児期における切れ目のない支援を目指している。

この子育て世代包括支援センターの一般開放にあたり、愛称を公募したところ、計13件の応募があり、その中から「マミールーム Yosuga－よすが－」(身や心を寄せて頼りとする所)として同年９月25日にオープンした。

▽現在行っている主な事業

・乳児健診(生後４か月～５か月児・10か月～11か月児)・幼児健診(１歳６か月児・３歳児)
・フッ素塗布歯科検診(１歳７か月～４歳未満)・もぐもぐ教室(生後７か月前後)
・赤ちゃん相談(１歳まで)・頑張りママの運動教室(子育て中のママ)、パパママ教室

新たな感染症

全世界で４千万人もの死者を出した、１９１８年のスペイン・インフルエンザ(通称「スペインかぜ」)以降、被害の大きな感染症の流行は見られなかったが、近年、２００２年に重症急性呼吸器症候群(ＳＡＲＳ)ではアジアやカナダを中心に感染が拡大、２０１２年に中東呼吸器症候群(ＭＥＲＳ)では、アラビア半島の国々、ヨーロッパ地域などに感染が拡大し、いずれもまだ、治療法が確立されておらず、対症療法での対応となっている。幸いにもＳＡＲＳ、ＭＥＲＳとも日本には入ってこなかったが、２００９年(平成21年)新型インフルエンザ(Ａ／Ｈ１Ｎ１)が国内でも発生し、本町でも新型インフルエンザ対策本部を設置し「新型インフルエンザ対策行動計画」を策定、感染拡大防止のために、各公共機関に手指消毒薬やマスク等の配置および広報や新聞折り込みによる町民への情報提供並びに予防接種等の対策を行った。

この新型インフルエンザは、スペインかぜと同じ弱毒型鳥インフルエンザウイルスによるものであり、現在では、季節性のインフルエンザの一つとして対策が取られており、インフルエンザワクチンでの予防も可能となっているが、Ｈ５Ｎ１型鳥インフルエンザウイルス(強毒型)では、致死率が５～15％と想定されている。

２０１９年(令和元年)末には、新型コロナウイルス(ＣＯＶＩＤ－19)が中国を中心に感染拡大し、スペインかぜ当時とは違い、交通機関が発達していることから、あっという間に、世界中に拡大し、世界保健機関

（WHO）では、２０２０年（令和２年）３月11日パンデミック宣言を行った。

日本でも３月26日に政府が対策本部を設置し、４月７日には、７都府県に緊急事態宣言、４月16日には13都道府県、５月４日には感染拡大を受け、全国に緊急事態宣言が出された。

北海道では、１月28日に中国武漢からの旅行者の感染が確認されて以降、感染者が全道の広い地域で確認され、北見市内では集団感染の例もあり、北海道独自で鈴木知事による緊急事態宣言が２月28日になされた。

この事態により、学校の休校、公共施設の閉鎖、テレワーク（在宅勤務）の推奨、飲食店等への外出自粛、往来自粛、マスクの着用など、社会生活の制限がなされ、経済活動の萎縮など、社会生活全般にわたっての影響が大きくみられている。

本町においても、北海道における緊急事態宣言を受けて、３月２日付で対策本部を設置し、感染対策を図ると共に、広報等により感染拡大防止に向けた情報、町の対応（イベントの中止、公共施設の閉鎖）などの周知を図った。５月25日には緊急事態宣言が全国で解除されたが、感染は世界的にも広がり、死者も増えている状況にある。

２０２１年（令和３年）１月には、東京・千葉・神奈川などの１都３県に緊急事態宣言が２月７日まで再度発出され、同13日には、大阪・京都を含む１都２府８県に拡大され、同２月７日には、１都２府７県に３月７日まで期間の延長がなされた。２月26日には、区域の変更がなされ１都３県に変更、３月５日には期間を３月21日まで延長とし、21日で緊急事態の終了となった。２月現在累計で40万人以上の感染が確認され、死者も累計で６千人を超えている。また、医療施設・福祉施設・障がい者施設等での集団感染も起こっている状況にある。

４月に入り、感染者が再度首都圏等で増えて来たことから、同月23日、１都２府１県に対し新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を発出。区域の拡大と期間の延長がなされ、５月14日には、同月16日より１都２府１道５県と北海道にも拡大されたが、６月21日には、沖縄県を除き解除となった。

７月８日沖縄県への期間の延長と東京都に対し、第４次となる緊急事態宣言が７月12日から８月22日まで宣言されたことにより、１年延長された東京オリンピックでのほぼ無観客開催が決定するなど異常な事態と言わざるを得ない。

７月30日には、８月31日までとする、期間の延長と１都１府４県への区域変更がなされた。同月17日には９月12日までとする期間の延長と１都１府９県への区域変更がなされた。同月25日には、北海道を含む１都２府１道17県への区域変更がなされた。９月９日には、同月30日までとする期間の延長と、１都２府１道15県への区域の変更がなされ、同月28日に９月30日をもって緊急事態が終了することとなった。

町では、緊急事態宣言下は勿論、まん延防止等重点措置期間においても、ワクチン接種、感染防止対策の徹底、住民周知等を図ってきたが、町内での感染者が発生した。幸い少数の感染者で済んだが、新型コロナウイルス感染症に限らず、気候変動等に伴い新たな感染症の危険も潜んでいる。また、新型コロナウイルス感染症がなくなったわけでもなく、ウィズコロナ（新型コロナウイルスとの共存・共生）に向けた生活様式や体制などをワクチン、特効薬の開発とともに進めていかなければならない。

ちなみに日本国内における２０２１年（令和３年）９月末の新型コロナウイルス感染症の累計感染者数は１６９万人以上、死亡者は１万７０００人以上となっている。

2、医療

町内唯一の医療施設

農協から移管し、公立医療施設として65年を迎える士幌町立国民健康保険病院は、医師確保や事業経営で苦労を繰り返しながら歯科以外では、町内唯一の医療

士幌町国民健康保険病院

機関として大きな役割を果たしている。

医師体制は、病院規模などから考えると常勤3人体制でも良と考えるが、減員になった場合の診療体制・当直体制を考えると常勤4人体制(内科中心)を維持していく必要があることから、札幌医大からの派遣と嘱託医などを加えほぼ4～5人を確保してきた。しかし、整形外科医・外科医の不在、更に内科医も交代、加えて帯広・音更方面での大型病院の開業、近代化にともない町立病院離れが進み、専門医、総合病院等の多い帯広・音更への患者流出が続いている。

医療技術の向上に並行して精度の高い医療機器の開発が進んでいるが、町立病院においても計画的設備整備を行い、1993年(平成5年)にはCTスキャナを導入、その後も超音波診断装置の配備とX線テレビ装置の更新など高度な医療提供をはかるため順次整備を図っている。

1995年(平成7年)から訪問看護を開始し、2000年(平成12年)4月からスタートする介護保険制度に合わせるため、1999年(平成11年)10月から、訪問看護ステーションとして独立し保健センターで業務を開始した。しかし、当時の病院での看護師不足などから、2006年(平成18年)3月に訪問看護ステーションを廃止し、病院内での訪問看護事業として再開した。

1986年(昭和61年)6月から高山俊一の後任として病院長に就任した照山卓爾は1998年(平成10年)3月定年退職し帯広市へ転出した。後任の院長には、道東勤医協桜ヶ岡病院(釧路市)に勤務していた奥山敬内科医が同年4月に就任した。

2000年(平成12年)4月には、はじめて理学療法士を採用配置し、機能訓練部門の強化をはかった。

福祉村計画により1999年(平成11年)8月に着工した病院の改築は、翌年12月に竣工し、2001年(平成13年)2月に落成記念式典を挙行後、供用を開始した。

国保病院医療機器

2001年(平成13年)3月より病床数60床により新病院で診療が開始されたが、同年4月からの院長は、副院長であった整形外科の石橋医師が就任、また、北大医学部の眼科学講座より医師の派遣を受け週1度の眼科診療もスタートとなった。

2003年(平成15年)3月には病床を一般病床40床・療養病床20床へと変更、2004年(平成16年)4月には、道を退職した岡田克良が保健医療福祉センター長として着任、病院改革を推進させようとしたが、石橋院長との確執が生じ、一時は岡田センター長に対し、病院内への立ち入りを禁止する騒動も起こった。同年10月には、国方針に基づき医薬分業がスタートし、病院における外来投薬については、院外の薬局により行われることとなった。同年11月末には、石橋院長が退任、後任には、当時副院長であった池田医師が、院長代理として院長業務を引き継いだ。

2005年(平成17年)5月、道立寿都病院の院長であった安達医師が道からの派遣により院長として着任、当時医師住宅が足りなかったことから、中士幌地区の一軒家を借用し居住することとなり、そのことが縁で、2006年(平成18年)12月に国保病院中士幌応援団が設立された。

2007年(平成19年)3月には、3人の医師が1度に退職、年休の消化により診療体制が安達院長1人では対応しきれないことから、管内の自治体病院などの応援を受けるなど、混乱が生じたが、医師給与の見直しなどにより、4月からは道南の町立豊浦病院の副院長であった大川医師を含む3人の医師を招聘し、常勤医4人体制を確保することができた。

2008年(平成20年)3月には、安達院長が定年により退職、4月より副院長の大川医師が院長に就任、同年5月には、国保病院士幌応援団が設立され、当時、道より唐突に示された自治体病院の再編案に対し、中士幌・士幌両応援団より「国保病院の存続に関する要望書」が町に提出された。

2009年(平成21年)4月に、北海道社会事業協会帯広病院の協力により泌尿器科の診療が月1回スタートした。

2014年(平成26年)6月に大川院長が懲戒免職処分(のち和解)となり当時、士幌に復帰して副院長だった池田医師が、院長代理に就任、2015年(平成27年)1月には院長に正式に就任することとなった。池田院長も定年を3度延長し、2020年(令和2年)3月に退任、4月からは宮西内科医師が院長に就任し、診療

にあたっている。（図－1参照）

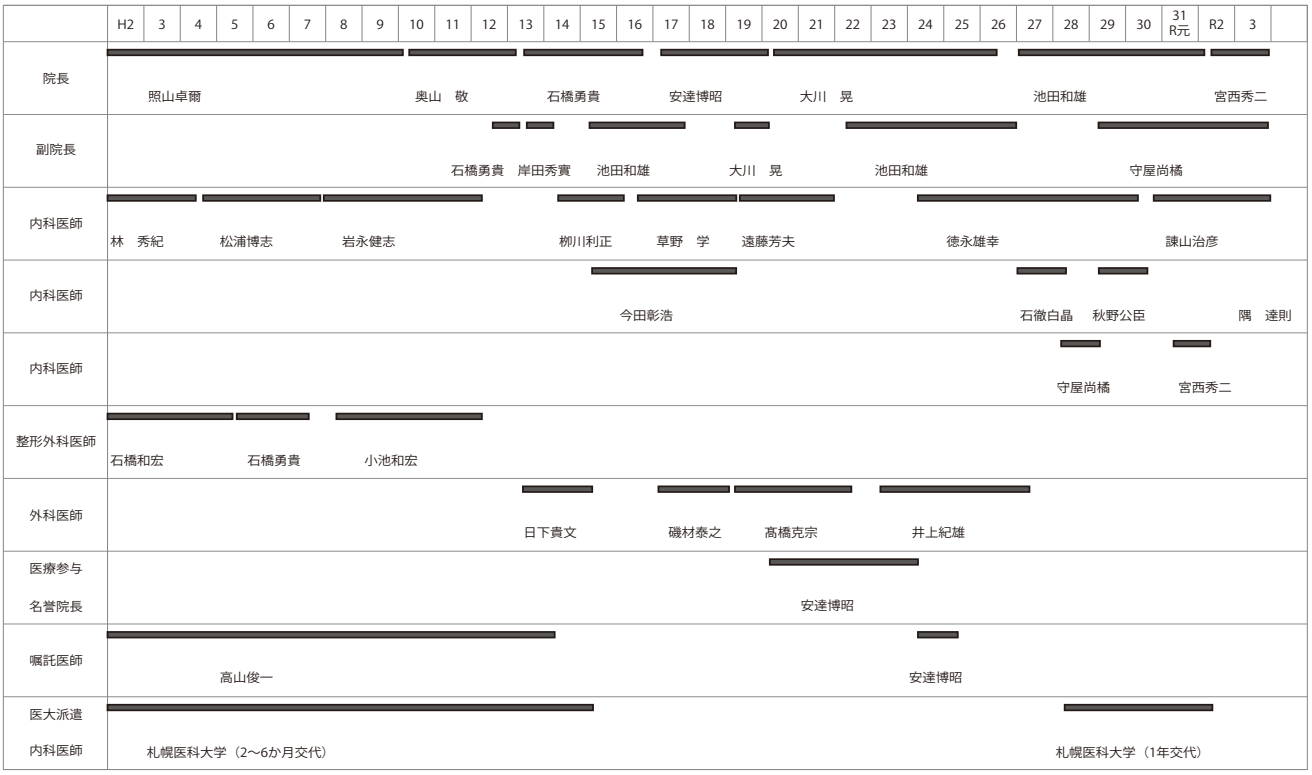
2018年（平成30年）7月、病床数を60床から10床減床し、一般病床のみの50床に変更した。

2012年（平成24年）10月に社会医療法人即仁会医業経営研究所の竹内所長と医療等アドバイザー契約を締結、病院経営問題と医師確保対策についてアドバイス等を受け、今までも当直医などの派遣を受けていた、札幌医科大学の呼吸器・アレルギー内科学講座より医師1名（1年交代）の派遣を2016年（平成28年）4月から受けることができることとなった。

しかし、当時の高橋教授が令和元年度で退官となり、また、医師派遣制度の関係で2020年（令和2年）3月末をもって、一旦医師の派遣が終了することとなったが、竹内医療等アドバイザーが所属する社会医療法人即仁会が経営する北広島病院および札幌医科大学呼吸器・アレルギー内科学講座より短期医師の派遣等を

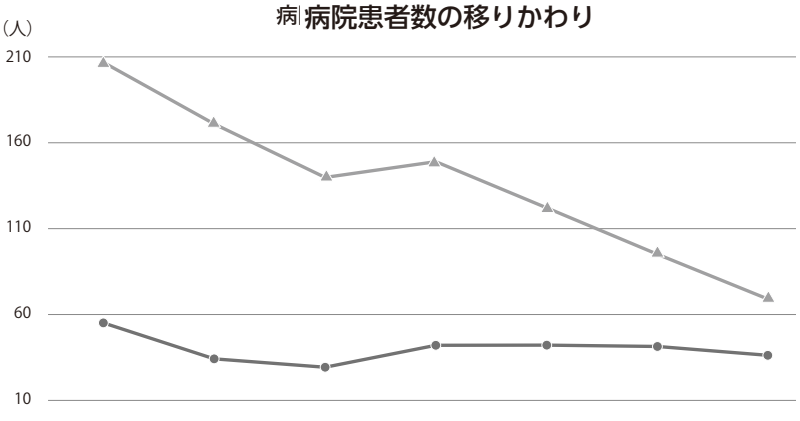
図－1

病院医師在勤一覧（平成2年以降）



図－2

病院患者数の移りかわり



（単位：人）

	1990 H 2年度	1995 H 7年度	2000 H12年度	2005 H17年度	2010 H22年度	2015 H27年度	2020 R 2年度
●一日あたり入院患者数	55	34	29	42	42	41	36
▲一日あたり外来患者数	207	171	140	149	122	95	69

表－1

士幌町国保病院（町村別・年齢別）入院患者の内訳

入院患者数（3月末）　（単位：人）

	士幌町	上士幌町	音更町	その他	計
1990（平成2年）	48	12	0	2	62
2000（平成12年）	31	1	1	0	33
2010（平成22年）	42	3	0	0	45
2020（令和2年）	27	2	0	2	31

年齢別（3月末）　（単位：人）

	65歳未満	65～70	71～80	81以上	計
1990（平成2年）	12	5	26	19	62
2000（平成12年）	3	3	6	21	33
2010（平成22年）	0	3	7	35	45
2020（令和2年）	2	1	5	23	31

受けており、できるだけ早い時期に固定医師の派遣が望まれる。

２０２０年(令和２年)３月末現在の入院数は31人で病床数50床に対し62％、30年前、１９９０年(平成2年)の同時期に比べて31人の減と半減している。なお、当時の病床数は76床に対し43％であった。(表－１参照)

一日あたりの患者数は、１９９０年(平成２年)と２０２０年(令和２年)と比較すると入院で19人の減、外来で１３８人の大幅な減となっている。(図－２、表－２参照)

病院事業会計は、町民福祉のための公共サービスを優先するという町の一貫した姿勢から、経営努力によって収支の改善を図ると共に、一般会計から毎年多額の繰入をして経営の安定を図ってきたが、国の医療政策、医師の異動などが、患者数・収支に直接影響することが多い。(表－３参照)

経営コストの低減をはかるため業務の一部を民間委託とし、現在、医事業務、給食業務の一部のほか清掃業務、警備業務などを民間委託するなど随時改善が進められているが今後も委託できる業務がないか検討している。

２０１９年(令和元年)度末の職員数は医師を含め71人で10年前より10人の増となっているが、患者の直接処遇職員の増加が主なものであり、医師で３人、看護部門で４人、医療スタッフで２人の計９人の増加、管理部門では１人の増となっている。(表－４参照)

表－３　近年における病院会計決算の状況　(単位：百万円)

	収益的収支			資本的収支	
	診療収入	一般会計繰入	収支差引残	建設改良費支出	一般会計繰入
2000（平成12年）	６３８	３０９	０.５	1,582	0
2010（平成22年）	５３１	３４０	△１３	３６	0
2020（令和２年）	４０１	４０４	△１２	４６	0

表－４　町国保病院職員の状況　(単位：人)

	平成２年３月末	平成12年３月末	平成22年３月末	令和２年３月末
医師	5	5	3	6
薬剤師	3	2	1	1
臨床検査技師	2	2	2	2
放射線技師	2	2	3	3
理学療法士	0	0	1	1
臨床工学技士	0	0	1	2
看護師	7	9	２３	２８
准看護師	１４	１７	１３	１０
栄養士	2	1	1	2
事務員	7	5	4	5
柔道整復師	1	1	－	－
公務補	1	－	－	－
看護補助員	4	9	8	１０
理療助手	1	1	1	－
調理員	5	6	－	－
薬剤助手	1	1	0	1
清掃員	3	－	－	－
合　　計	５８	６１	６１	７１

病院訴訟問題

２０１４年(平成26年)６月23日、当時の院長である大川医師を懲戒免職処分とした直接的な原因は、職務遂行において、上司との協議や決裁を受けずに独断で文書を発する行為を成し、その中には、不適切・不穏当な表現が含まれていたこと、女子職員に対する不適切な行為(セクハラ)であったが、釧路地方裁判所に処分の取り消しを求めて提訴がなされ、約３年間の審議等を経て２０１７年(平成29年)５月25日に釧路地方裁判所において和解が成立した。

結果として和解ではあるが、裁判所は、原因は大川元院長側にあるが、町の処分である懲戒免職は処分が重すぎるとの判断に基づくものであった。

町としては、本人の行動等により、病院職員、町議会からも対処することを要請され、医師として町国保病院で診療を続けてもらうことは出来ないとの判断で本人に対し、自主的退職を促してもその意思がなく拒否されたことによる処分であったため、懲戒処分の日付で依願退職するとの内容で和解を判断した。

このような状況になった要因などを考えていくと、大川院長は、病院の現状を把握しようとしたアンケートや、経営会議でのアドバイザーとのやり取り、町議会での質疑内容へのいら立ち、例年行っていた、町議会の産業厚生常任委員会の所管事務調査への拒否、町長との話し合い、議長・常任委員長との話し合い等を経て、最後には、町理事者の面談要請にも弁護士を通せなど、常識を疑わせる現状があったことの末による懲戒免職処分であった。

徳永医師からは２件の提訴がなされた。

１件目は、２０１７年(平成29年)３月に提訴された、「減額処分取消請求事件」であり、内容は医師研究研修手当の支給要件変更に伴うもので、主に専門医資格に支給すると変更したものであり、説明当初は本人も資

格を持っているとのことであったのが、途中から説明も無く一方的に実施されたと主張し、提訴となったもの。

釧路地裁、札幌高裁と却下され、最高裁に上告されたが上告を棄却され、町の勝訴となった。

2件目は、2017年(平成29年)10月に提訴された「損害賠償請求事件」であり、内容は「減額処分取消請求事件」と同じであり、減額されたことにより損害が生じたので賠償しろというもの、この事件も地裁・高裁と却下され、最高裁にも上告されたが2020年(令和2年)2月に棄却されている。

なお、いずれの事件も大川元院長がかかわった札幌の弁護士事務所が代理人を務めていた。

歯科医院

町内における歯科医院は、神山歯科医院(神山裕充)と1991年(平成3年)に開業したむらはし歯科医院(村橋政洋)の2医院だけであったが、2008年(平成20年)に旧商工会館跡に、しほろ歯科クリニック(小椋克裕)が開業し、3医院で歯科治療が受けられることとなった。

増えつづける国民医療費

国民健康保険制度は、国民皆保険を支える重要な基盤を担い、地域医療の確保と住民の健康増進に貢献してきた。

しかしながら、高齢者や低所得者の占める割合が高いなど構造的な問題もあり、加えて急速に進展する高齢社会と医療技術の進歩などにより医療費は増加傾向にある。

国民の医療にかかる費用は年々増加しており国民健康保険で見た全国の1人当たりの療養諸費の平均は、1990年(平成2年)の22万6千円に対し1995年(平成7年)では31万2千円と8万6千円増加した。中でも北海道は高く常に全国のワースト1の位置におり1990年(平成2年)より12万5千円増の43万5千円となっている。

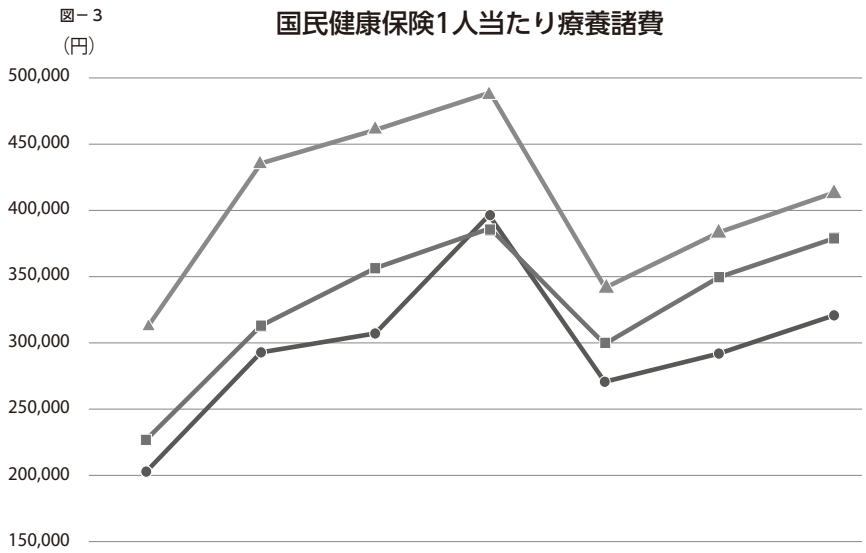
一方、士幌町の国保では1990年(平成2年)の20万2千円に対し同7年では29万2千円と8万9千円の増で全国、全道と比べ低く、1995年(平成7年)の療養諸費の額1人当たりで、全国比2万円、全道比では実に14万3千円も低くなっている。

国は国民医療費の増高を抑えるため、1994年(平成6年)医療関連法を改正し、入院時食事代の患者負担、外来薬剤一部負担など新たな一部負担の導入を行う一方、2000年(平成12年)度新たに介護保険を創設したが、2005年(平成17年)の1人当たりの療養諸費の額は、士幌町で39万6千円と全国平均より1万円高く、全道平均より9万2千円低くなった。

かねてより、市街地区住民を中心に税の分納回数を増やしてほしいという要望があったが、介護保険の開始を契機に町は、同保険料を上乗せした国保税について、従来の10月と12月の2回の納期を7・8月と10・12月、翌年1・2月の6回分納に改正し2000年(平成12年)より適用した。なお、住民税、固定資産税は2009年(平成21年)から年2回の納期を年4回の納期と変更した。

国の医療制度改革大綱に基づき2008年(平成20年)より75歳以上と65歳以上で障害認定を受けた者が加入し都道府県単位で運営する後期高齢者医療制度が始まったことに加え、2015年(平成27年)医療保険制度改革法が成立し、国民健康保険への財政支援の拡充、入院時の食事代の段階的引き上げ、紹介状なしの大病院受診時の定額負担の

図－3



	1990 H 2年度	1995 H 7年度	2000 H12 年度	2005 H17 年度	2010 H22 年度	2015 H27 年度	2019 R 元年度
士幌町	202,973	292,276	307,160	396,409	270,292	291,936	320,794
全道平均	310,620	435,647	460,644	489,057	341,885	383,551	413,568
全国平均	226,462	312,806	356,239	386,444	299,333	349,697	378,939

導入などが盛り込まれた。

２０１５年(平成27年)の１人当たりの療養諸費の額は、士幌町で29万2千円と全国平均より5万7千円、全道平均より9万1千円低くなっている。(図－３参照)

２０１８年(平成30年)４月から国民健康保険の財政運営の責任主体は都道府県となり、安定的な財政運営や効率的な事業の確保など中心的な役割を担うこととなった。

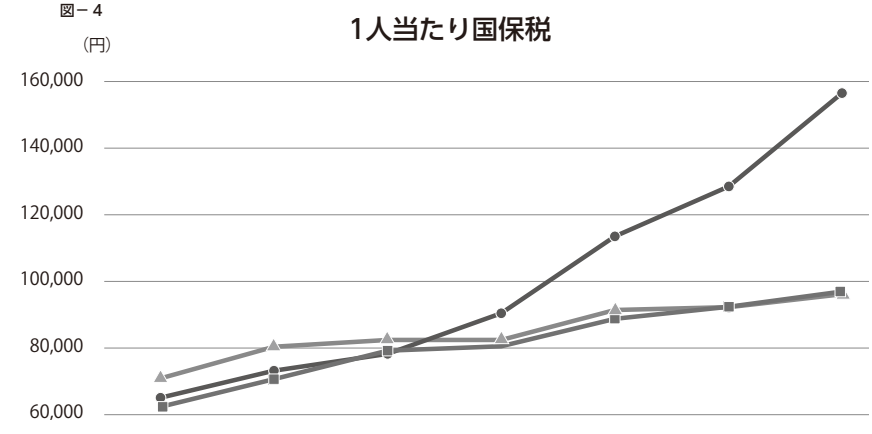
市町村単位で行っている限りできなかった保険税の公平化、医療費の公平な負担を実現するため、市町村との連携を推進していくこととされており、今後の状況に注視する必要がある。

国民健康保険税は、２０１５年(平成27年)度で被保険者一人当たり12万8千円、全国、全道平均より高く、２０１９年(令和元年)度においても被保険者一人当たり15万6千円と全道平均より6万円高くなっている。これは、税率、税額が高いのではなく、町民所得が高いため1人当たりが高くなっている。(図－４参照)

なお、財政運営の責任主体が都道府県化されたことに伴い、本町における国保税の賦課方式を４方式(所得割・資産割・被保険者均等割・世帯平等割)から３方式(所得割・被保険者均等割・世帯平等割)に変更した。

これは、道が国のガイドラインで示された算定方式を基準としたことにより、平準化を目指すうえで、他市町村との比較を行いやすくしたものである。

図－４



	1990 H２年度	1995 H７年度	2000 H12年度	2005 H17年度	2010 H22年度	2015 H27年度	2019 R元年度
士幌町	64,785	72,972	78,026	90,195	113,486	128,433	156,479
全道平均	70,814	80,296	82,355	82,241	91,510	92,244	95,841
全国平均	62,092	70,620	79,123	80,352	88,578	92,124	96,829

士幌町国民健康保険における士幌町国保病院利用率

表－２　　※平成20年度から老人保健が除かれたため減少

	診療日数の内、士幌町国保病院利用者		
	入　院	外　来	計
1990 (平成２年)	４４%	５４%	４９%
2000 (平成12年)	３５%	４１%	３９%
2010 (平成22年)	１１%	２３%	２０%
2020 (令和２年)	5%	１４%	１３%

後期高齢者分

参考

	入　院	外　来	計
2010 (平成22年)	５９%	５７%	５８%
2020 (令和２年)	５７%	４２%	４９%

第三章　福　祉

1、地域福祉

「支え合いで、安心安全を共感するまち」をめざして

少子高齢化が一段と進む中、本町の65歳以上の高齢者は、1990年(平成2年)で1102人、高齢化率15・4%であったのが、毎年増え続け、2000年(平成12年)には1567人、高齢化率も22・5%、2020年(令和2年)には2001人、高齢化率も33・4%と、1990年(平成2年)と比べ65歳以上の高齢者は、約2倍に、高齢化率も約2倍となっている。75歳以上の後期高齢者も2020年(令和2年)1017人、高齢化率17・0%と超高齢化社会へと急激に進んでいる。(表－1参照)

ちなみに2019年(平成31年)1月1日現在の住民基本台帳人口における全国の平均高齢化率は、28・1%、同全道平均は31・1%となっており、管内において最も高い高齢化率は池田町の42・2%、最も低いのは、音更町の28・0%、この時点での士幌町の高齢化率は32・2%となっている。

町では高齢化対策と地域福祉の体制強化を図るため、「ふれ愛ユートピアプラン」と題した平成8年～平成17年度間、第4期町づくり総合計画に「健康でしあわせな地域づくり」を、「ユートピアプラン21」と題した平成18年～平成27年度間、第5期町づくり総合計画に「健康でだれもが暮らしやすいまちづくり」を2016年(平成28年)からの第6期町づくり総合計画では、スローガンを「輝く未来へ　しほろ創生」とし、基本目標の一つを「支え合いで、安心安全を共感するまち」を目指した諸施策を掲げ、多くの事業を展開している。

表－1　高齢人口および高齢化率

年度		1990 (H 2年度)	1995 (H 7年度)	2000 (H 12年度)	2005 (H 17年度)	2010 (H 22年度)	2015 (H 27年度)	2020 (R 2年度)
総世帯数	(戸)	2,218	2,307	2,443	2,571	2,589	2,705	2,774
総人口	(人)	7,260	7,072	6,970	6,864	6,579	6,289	5,992
65歳以上人口	(人)	1,102	1,348	1,567	1,710	1,743	1,872	2,001
率	(%)	15.4	19.7	22.5	24.9	26.5	29.8	33.4
75歳以上人口	(人)	454	551	739	897	1,032	1,047	1,017
率	(%)	6.3	7.8	10.6	13.1	15.7	16.6	17.0

現在行っている主な事業

▽安心安全地域づくり事業(社協委託事業)

災害や万が一の事故に備えて、高齢者や障がい者等が地域で安心、安全に生活できるように、災害時避難行動要支援者の把握と高齢者等の安否確認を行う事業

①安心安全福祉台帳

65歳以上の高齢者単身世帯、75歳以上の高齢者世帯や障がい者等を災害等の発生時に地域で協力する体制づくりを目的に、対象者の情報等の台帳を整備する事

業
令和2年度登録件数　49
8件
②独居高齢者等安否確認訪問事業
　65歳以上の単身もしくは高齢者のみの世帯等に安否確認や福祉相談で訪問し、地域社会において安心して日常生活を営むことができるように配慮する事業
令和2年度訪問世帯数　10世帯
③若葉公営住宅安否確認事業
　高齢者等専用公営住宅での日常の見守り事業
令和2年度延べ訪問件数
781件
（①②の事業は平成22年度、③の事業は平成26年度から開始）

▽高齢者等生活費扶助事業（平成5年開始）
　当初、高齢者のみを対象としていたが、平成13年度より歳末扶助事業を統合し、現在の形とした。70歳以上の高齢者単身世帯、70歳以上の高齢者世帯、障がい者およびひとり親家庭等の低所得世帯等に対し、積極的な社会参加と自立を助長する目的に生活費の一部を助成する事業
　令和2年度　46万円（11件）

▽介護手当支給事業
　寝たきり重度心身障害・特定疾患の65歳未満（要介護認定者を除く）の在宅者の介助者（一定の所得制限あり）に対し、労をねぎらう目的で介護手当を支給する事業
　なお、障害基礎年金および特別児童扶養手当を支給されている者には支給しない
　また、重度心身障害者介護手当および特定疾患患者介護手当は重複支給しない
　令和2年度　実績なし

▽福祉バス
　1976年（昭和51年）に中古車でスタートした福祉バスの運行も数度のバス更新を経て、多くの福祉団体等に利用されて来たが、維持経費節減等の流れの中、2007年（平成19年）度で終了し、福祉団体のバス利用に当たっては経費助成に切り替わった。

変化する障がい者施策

　社会の中に「ノーマライゼーション」の理念（障がいのある人が障がいのない人と同等に生活し、共にいきいきと活動できる社会を目指す理念）が徐々に浸透する中、2003年（平成15年）に利用者がサービスを選択できる仕組みである支援費制度が施行され、それまで措置（行政命令）であった対応が、サービスの提供へと変化し、市町村の責任へと権限移譲がなされた。
　2006年（平成18年）には、3障がい（身体障がい・知的障がい・精神障がい）共通の制度で地域生活を支援する「障害者自立支援法」が施行、2013年（平成25年）には、地域社会における共生の実現、難病等を対象に含んだ、「障害者総合支援法」が施行、2016年（平成28年）には、障がいを理由とする差別の解消を図るため「障害者差別解消法」が施行されるなど、障がい者をとりまく環境が大きく変化する中、本町においても、2003年（平成15年）に「第1期士幌町障がい者福祉計画」、2006年（平成18年）に「士幌町障がい福祉計画」を策定し、町の中になかった障がい者の居場所づくり等に多くの町民・障がい者団体などが参画して、2007年（平成19年）にスタートした日中一時支援事業「すずらんの家」、2010年（平成22年）にスタートした地域活動支援センター「しほろほのぼのホーム」、翌年には就労継続支援事業B型「しほろほのぼのホーム共同作業所」そして障がい者の居住の場所である、混合型グループホーム「笑顔」へと繋がった。

障がい者総合施設

　特に、日中一時支援事業「すずらんの家」を立ち上げるのに、試行事業から関わった手をつなぐ親の会を中心として、2006年（平成18年）すずらん親子交流会を創設。役員・関係者の努力が事業の安定実施に資して今に繋がり、2009年（平成21年）に設立されたNPO法人士幌町障がい者支援の会と設立に尽力された各福祉関係団体の願いが一つとなり、地域活動支援センターを創設。2010年（平成22年）には、両者が合併、しほろほのぼのホーム共同作業所へと連なる活動に繋がっていく中で、NPO法人士幌町障がい者支援の会初代理事長の遠藤弘美（故人）の「今ここで何とかしなかったら死んでも死にきれない」との強い思いと行動力により2014年（平成26年）に障がい者総合施設が完成した。

▽町内における障がい福祉サービス等
①何らかの支援が必要な児童等の一時的な預かりをす

る日中一時支援事業
②障がい者が創作・生産活動や地域交流を行う地域活動支援センター事業
③障がい者へ就労に必要な知識および訓練の場を提供する就労継続支援Ｂ型
④障がい者が居住し生活を支援する共同生活援助（グループホーム）～４床
⑤障がい者の食事や排泄等の介護をする居宅介護、重度訪問介護
⑥障がい者が余暇活動等で外出する際、同行して介護する移動支援
⑦在宅の重度身体障がい者に対し、訪問による入浴サービスを提供する訪問入浴サービス事業
⑧身体障害者手帳を所持していない軽度難聴児に対し、補聴器費の一部を支給する事業
⑨障がい者等に対し、施設等の通所に要する経費等の一部を助成する障がい者等訓練通所費等助成事業
⑩在宅の障がい者が町内で就労訓練や体験等を行うための費用を一部助成する地域就労支援事業
⑪障がい者が自ら運転または搭乗出来るように自動車を改造する費用の一部を助成する事業
⑫在宅の重度障がい者に対して紙おむつ等の購入費用を助成する事業
⑬手話通訳者または要約筆記者を派遣し、聴覚障がい者の意思疎通を支援する事業

国民年金

国民年金制度は、１９５９年（昭和34年）に発足して以来着実に発展しており、１９８５年（昭和60年）の公的年金制度の大改正による基礎年金の導入を経て国民皆年金が実現した。高齢化社会の進行とともに年金制度が老後の所得保障の一翼を担う役割をはたし、制度を更に発展させるためには、より一層の定着した運営が重要であり、１９９７年（平成９年）１月から基礎年金番号制が導入された。

１９９９年（平成11年）までは、国の機関委任事務、２００１年（平成13年）度までは国の法定受託事務として保険料徴収にも携わっていたが２００２年（平成14年）度からは、法定受託事務として資格の取得・喪失・申請書などの窓口業務や相談業務が市町村の業務となっている。

人口の減少で被保険者数は年々減っているが、高齢化により給付人口、給付額は増加している。（表－２参照）

表－２　**国民年金概況**　（単位：名・万円）

事　　項	1995（H７年度）		2005（H17年度）		2015（H27年度）		2020（R２年度）	
被保険者数	２，１９５		２，０８６		１，４８４		１，１９８	
内）強制加入	１，７３０		１，６５５		１，１３５		９０９	
内）任意加入	１７		９		１５		１１	
保険料納入額	２０，６９９		－		－		－	
給付状況	人　数	金　額	人　数	金　額	人　数	金　額	人　数	金　額
老齢年金（含通産・基礎）	1,172	62,692	1,592	101,852	1,836	125,056	1,963	137,872
障害年金・障害基礎年金	106	9,563	115	10,247	113	9,688	101	8,585
母子年金・遺族基礎年金	8	535	14	985	8	580	7	503
寡婦年金	23	1,101	14	606	6	260	3	126
小　　計	1,309	73,891	1,735	113,690	1,963	135,584	2,074	147,086
福祉年金	47	1,643	3	72	0	0	0	0
合　　計	1,356	75,534	1,738	113,762	1,963	135,584	2,074	147,086

ボランティア活動

地域におけるボランティア活動が活発に行われるようになり、施設ふれあいボランティアとして特養ホームでのおむつたたみなど、一時は、20の女性団体等３００人が交代で参加していた。現在でも10の団体・個人で延べ３００以上が活動している。１９９７年（平成９年）２月からはデイサービスでの虚弱高齢者に対する介助補助を行うグループ「デイ友の会」ができ会員15名が活動していたこともあるが、団体等の高齢化などにより会員等が減少した。

１９９７年（平成９年）５月から町の助成を受け、社会福祉協議会が実施している配食サービス事業では、配食ボランティアが発足し、２人１組で夕食を届けながら高齢者等への声かけ運動がはじめられた。

町は介護保険の施行開始に向け、１９９９年（平成11年）度から２年間、計３回の住民ホームヘルパー２級養成講座を開設して有資格者の養成を行い、これまでに81人の町民がこの資格を取得した。養成講座ごとの修了者が自主的にグループを結成し、イベント等でのボランティア活動を行っていた。

ボランティア連絡協議会は、女性団体、福祉団体、老人クラブ、学童生徒も含め45団体で組織し、情報交換、ふれあい研修旅行（身障者を対象）の実施、会員

研修、広報の発行を行いボランティアの輪を広げていたが、２００１年(平成13年)３月に解散した。

《士幌ライオンズクラブ》

毎年、特別養護老人ホーム慰問、独居老人昼食会支援など社会奉仕を積極的に行い、５年ごとの節目の年には町内施設等への記念物寄贈行為を続けていたが、２０１６年(平成28年)３月に50年５か月にわたる歴史に幕を引くこととなった。

(ライオンズクラブ解散時会員数12名、会長　堀江博文)

近年における寄贈品

１９９５年(平成７年)30周年時、総合研修センターにオープン記念として「母子像」(１５０万円)

２００１年(平成13年)35周年時、絵画４点を町立病院に寄贈(２００万円)

２００６年(平成18年)40周年時、福祉車両(ムーブスローバ)(１５０万円)

福祉団体

《社会福祉協議会》

社会福祉法人として設置されている町社会福祉協議会は、地域福祉増進のため、各種事業を展開しているが１９９２年(平成４年)頃から啓蒙活動をつづけていた小地域ネットワーク事業を１９９４年(平成６年)からスタートさせ、中士幌地区を皮切りに、北町、中町、西町へと広げそれぞれに福祉推進員を置いて地域の支え合い運動として活動をはじめた。

１９９５年(平成７年)度には一般介護講座、福祉教育懇談会等を開催、１９９７年(平成９年)５月から老人等給食配達サービス事業が開始されたほか、１９９９年(平成11年)４月にホームヘルプサービス事業を町からの受託によりはじめたが、介護保険の導入により２０００年(平成12年)から事業者指定を受け「訪問介護事業所」として事業を開始した。８月からは、ふれあい・いきいきサロン普及事業を開始し、タウンプラザを会場にふれあいサロンを月１回開催。その後２００１年(平成13年)４月から毎週開催、２００６年(平成18年)４月にはマージャンサロン(いきいき遊びクラブ)を開設、２００７年(平成19年)に農村部初の上居辺サロンが開設された。このことにより、それまで５か所で運営されていたサロンが２０１０年(平成22年)には町内すべての地区において開設されることになった。

地域ふれあいひろば「段ボール迷路」

士幌町社会福祉大会は１９９８年(平成10年)に第７回として11月に開催したが、こどもお祭り広場を同時にセットし世代を超えたふれあいの場として好評であった。１９９９年(平成11年)からは「地域ふれあいひろば」と名称を変更し、子どもたちからお年寄りまでの交流を中心とした催しに切りかえ、毎年２千枚のダンボールが使用される「段ボール迷路」がふれあいひろばを代表する催しとなっている。

２００２年(平成14年)からはボランティアセンターの広報紙「ボランティア情報」を毎月発行、２００３年(平成15年)災害ボランティア講座を毎年開催、２００５年(平成17年)地域福祉権利擁護事業(日常生活自立支援事業)開始、２００６年(平成18年)福祉有償運送事業開始(現在は無償運行)、２００８年(平成20年)見守りネットワーク事業開始、２００９年(平成21年)介護予防事業(ふまねっと運動教室)の開始、２０１０年(平成22年)救急医療情報キットの設置事業開始、２０１２年(平成24年)そば打ち同好会結成、２０１３年(平成25年)入学祝い品「漢字の字典」贈呈事業開始、２０１６年(平成28年)社協ホームページの開設、同年法人後見事業開始、２０１７年(平成29年)カラオケサロン開設、２０１９年(令和元年)日常生活「たすけ愛」事業開始などを行ってきた。

介護保険施行当初より、訪問介護事業に取り組み在宅福祉の一翼を担ってきたが、介護サービスの効率化などを背景に、２０１０年(平成22年)３月に社会福祉法人・士幌愛風会に事業を移管した。

１９９３年(平成５年)11月東京で開催された全国社会福祉大会において、日頃の社会福祉事業活動の実績が認められ、全国協議会会長から優良社協表彰を受けた。

１９７８年(昭和53年)の設立以来、会長の職にあった有澤武一は１９９７年(平成９年)３月31日で勇退し、その後同協議会の顧問となったが、20年近い福祉活動の功績が評価され、１９９９(平成11年)12月、社会福祉功労者として厚生大臣表彰を受けた。

▽町の地域福祉活動実践事業補助を受けて実施している事業
・配食サービス事業・福祉運送事業・サロン推進事業・ボランティア活動推進事業・見守りネットワーク事業・お楽しみ昼食会開催事業・送迎用車両管理事業

士幌町社会福祉協議会歴代会長(平成3年以降)
有澤武一(昭53～平9・3)
森本辰蔵(平9・4～19・3)
吉田　勝(平19・4～25・3)
鎌田弘美(平25・4～令2・9)
佐藤弘夫(令2・10～現在)

《高齢者生きがい事業団》
1985年(昭和60年)6月2日に設立し、事業を開始した高齢者生きがい事業団も発足後36年が経過した。受注件数は、2020年(令和2年)度では421件の受注で決算額は2400万円となった。
会員登録数は41人で平均年齢は73・8歳となっている。
理事長　佐藤弘夫

《士幌町共同募金委員会》
1947年(昭和22年)、全国的に展開した第1回目の共同募金運動(赤い羽根)がはじまり、2020年(令和2年)度、74回目を迎えた。当初は戦後復興の一助として戦争の打撃を受けた福祉施設を中心に資金支援する活動としての機能を果たしてきたが、その後、「社会福祉事業法(平成12年社会福祉法に改正)」をもとに「民間の社会福祉の推進」に向け、社会福祉事業の推進のため活用されてきた。
社会が大きく変化する中でさまざまな地域福祉の問題解決に取り組む民間団体を支援する仕組みとして、また、住民のやさしさや思いやりを届ける運動として、共同募金は住民主体の運動を進めている。
募金運動期間は10月から12月までの3か月間で、10月より各戸募金、11月から特別募金(個人・法人)、12月は歳末たすけあい募金を受け付けている。毎年目標額に対しほぼ100%の実績を上げ、善意により集められた募金は審査委員会で審査された後、町内福祉団体等へ助成される。
2010年(平成22年)には北海道共同募金会士幌分会から士幌町共同募金委員会へ名称を変更し、2020年(令和2年)10月に佐藤弘夫が会長に就任、現在に至っている。

《日本赤十字社士幌分区》
分区長は、町長が委嘱されている。
2020年(令和2年)度
社員数　379人
社費の実績　48万2千円
・赤十字奉仕団
1997年(平成9年)度に士幌町赤十字奉仕団が結成された。
奉仕団は、主として地域で起こる災害時の救助、救護等の後方支援活動を行うほか、赤十字普及活動、地域ボランティアへの参加を活動目標としている。発足後本町での災害救護活動はない。
2021年(令和3年)4月現在の団員数9人
委員長
矢野政凱(平9～13)
金森三重子(平14～現在)

《老人クラブ》
はじめて町内で老人クラブが設立されたのが1953年(昭和28年)の朝陽老人クラブで、発足時18名の会員で活動していた。
昭和30年代には各地で設立され、それぞれ独自に活動が行われていた。その後クラブの統合、分離等があり現在は、士幌市街が2クラブのほか各公民館単位のクラブとなり全町で11の単位クラブとなっていたが、2020年(令和2年)上居辺楽友会が活動を休止、現在10の単位クラブでの活動となった。
1966年(昭和41年)4月に老人クラブ連合会が設立され、以降クラブ間の交流をはじめ、研修旅行、交歓会等が活発に行われているほか、士幌高原銅像周辺環境整備奉仕活動等にも積極的に取り組んでいる。1994年(平成6年)にはダンス部、カラオケ部が設けられ、以来女性部も含めた部活動に力を入れている。
1996年(平成8年)に連合会創立30周年を迎え、同年11月14日総合研修センターを会場に記念式典を開催し歴代会長等に対する功労者表彰とクラブ交歓会を盛大に行った。また、あわせて記念誌「三十年の軌跡」を発行した。
2016年(平成28年)創立50周年記念誌「延年寿」発刊
2021年(令和3年)4月現在の会員数283人
連合会長(平成3年以降)
鈴木清孝(平3～4)
森本武次郎(平5～8)
加納一郎(平9～14)
出村一介(平15～20)
鈴木俊道(平21～26)
篠原昇好(平27～30)
大野准弋(平31～現在)

《十勝地区身体障害者福祉協会士幌町分会》
分会は、1954年(昭和29年)6月に設立され、現在の会員は約45人。
1997年(平成9年)11月には、大阪で開かれた全国身障者スポーツ大会水泳

の部に池本進が北海道代表として出場した。

町内8地区から選出された役員8名、監事2名で構成されている。

主な事業は、各種情報の提供、会員の健康増進や交流を図るための活動として会員研修旅行、在宅重度障がい者交流会があり、社会参加促進事業として、地域ふれあいひろば、北海道障害者スポーツ大会、士幌町老人・障がい者合同運動会、北十勝身障者分会研修会に参加している。そのほか、聴覚相談会や、会員の歳末激励等も実施。

1994年(平成6年)11月創立40周年記念式典および記念誌「40年のあゆみ」発刊

2004年(平成16年)11月創立50周年記念誌「50年のあゆみ」発刊

分会長(平成3年以降)

尾形一郎(昭55・1～平5・3)
高土貞吉(平5・4～13・3)
堀江徳雄(平13・4～25・2)
藤内　昇(平25・2～現在)

《士幌町遺族会》

戦没者遺族で組織し毎年旭川護国神社団体参拝、合同慰霊祭の実施、会員研修等を行っているが戦後75年が経過し会員数が減少、現在会員は28人となっている。

2003年(平成15年)3月に創立50周年を記念して記念誌「みたま永久に安かれ　－士幌の戦争外史－」を発行配布した。この中には、昭和15年に士幌村が発刊した慰問写真集「つわものの郷」が全ページ復刻されている。

会長(平成3年以降)

森本辰蔵(昭50～平6)
平野春雄(平7～12年)
大野准弋(平13～現在)

《カトレアの会》

7000人のまつり行事参加のほか、会員研修旅行を実施していた。1994年(平成6年)総合研修センター内、コミュニティセンター内に自動販売機を設置、収益を母子福祉事業にあてている。

2001年(平成13年)に士幌町母子福祉会から士幌町カトレアの会に名称を変更。年々会員が減少しているが、花壇花植えボランティアや各研修会参加の他、子どもを含めた忘年会を実施している。(会員数11人)

会長(平成3年以降)

高野紘子(昭59・3～平17)
小枝千恵子(平18～現在)

《士幌町手をつなぐ親の会》

知的障がい者の家族で構成される会で、1979年(昭和54年)の結成以来24年間会長を務めた遠藤弘美に替わり、2003年(平成15年)に(故)菊池敏子、2005年(平成17年)からは小川潤が会長に就任。(会員13名)

毎年会員交流、会員研修等を行っていた。2004年(平成16年)から士幌町内の障がい児のための事業を行う目的で、同会が事務局となり町内の各関係機関に呼びかけ「すずらん親子交流会」を結成、2006年(平成18年)度までの3年間障がい児の長期休暇中や放課後の預かり事業、学習会の開催などを行った。事業は2007年(平成19年)に開所された日中一時支援事業所「すずらんの家」へ引き継がれ、同会会員からも役員やボランティアとして参加。その後2009年(平成21年)に設立されたNPO法人士幌町障がい者支援の会にも同会会員から役員や会員として参画し、町内の障がい者福祉向上に努めていたが、2014年(平成26年)3月をもって解散した。

《社会福祉法人士幌愛風会》

ケアハウス(軽費老人ホーム)創設のため設立準備委員会を経て1991年(平成3年)12月に社会福祉法人「士幌愛風会」として認可され、以降ケアハウスしほろ愛風苑と介護保険制度で士幌デイサービスセンター・小規模多機能型居宅介護事業所「なごみ」・ヘルパーステーションしほろ・士幌愛風会居宅介護支援事業所の4事業所を運営している。

2012年(平成24年)3月愛風会創立20周年・小規模多機能型居宅介護施設及び地域共生型交流施設(なごみ)新築落成記念式典挙行。同年5月創立20周年記念誌「20年のあゆみ」発刊

(事業内容は高齢者福祉の項参照)

理事長

有沢武一(平4～7)
森本辰蔵(平8～21)
鈴木洋一(平22～現在)

《NPO法人　士幌町障がい者支援の会》

2009年(平成21年)に設立されたNPO法人。障がい者の居場所づくりを模索する中で、関係福祉団体、関係家族の協力により設立された。障がい者総合施設「ほのぼのホーム」と「すずらんの家」を運営し、事業として地域活動支援センター、日中一時支援事業、就労継続支援B型事業所を行っている。

理事長

遠藤弘美(平21・8～26・2)
藤内　昇(平26・4～現在)

善意の寄付金

毎年多くの住民、団体等から、町の施設整備のためや、文化振興、福祉事業、愛の町建設等に役立てて欲しいと多額の浄財がよせら

れているが、１９９２年（平成４年）以降の主な寄付者名を記録した。（1件10万円以上とする）

広報の掲載を希望されない方、匿名を希望された方は除いてある。

◎平成４年

・清水定雄 他・佐藤庄一郎・相沢はなみ・北斗産業㈱・矢坂賢哉・栗山吉輝・北海道民謡協会十勝支部・長瀬民男・吉川久美子・鈴木二三・㈱つつみ・土屋高道・堀江 裕・宮崎賢太郎・後藤 豊・小坂司馬夫・㈱安井測量設計事務所・末永敏子・滝口一夫他22名・石川浪子

◎平成５年

・纐纈富子・緑川良夫・須田三重子・士幌町歌謡同好会・中山竹千代・西部寛・今野幸夫・古川一夫・堀田一男・北斗運輸㈱・上士幌生コンクリート㈱・士幌町農業協同組合・遠藤正人・高橋一三・成田 清・矢野ハナ・松山幸道・杉井隆志・瀬口義一・宮保 清・仙石ちか子・小山内貞・西部 守・加納トメ・丸尾文子・高橋道夫・高橋富雄・今田まさよ・佐藤二美・川瀬忠夫・矢野アヤノ・小坂司馬夫・菅野清子・㈱安井測量設計事務所・溝口一夫他一名・手島 忠・和田晴男他19名

◎平成６年

・勝矢良平・朝井敏美・遠藤定雄・斉藤健市・後藤辰雄・㈱北海道フーズ・高田隆夫・細野初美・荒木昇平・士幌町農業協同組合・山澤源蔵・三浦タミ子・森山久夫・加納春美・小緑ボーリングセンター・後藤喜一・野曽原富久子・金子恭則・吉田志津枝・窪田浩一・安村志朗・船戸真知子・足立有康・緑川良夫・仲島ツタ子・中原喜哉・川瀬 猛・大野憲光・加藤 隆・岡本静子・椰野欣治・宮野雅彦・小坂司馬夫・山口勝雄・森本晃永・㈱安井測量設計事務所・梅本吉伸他５名・和田晴男他24名

◎平成７年

・池本 進・及川昭一・森本義三・遠藤久雄・小椋誠志・後藤美枝子・今野貞夫・安村志朗・菊地カズエ・飯島和吉・平田美江子・船戸真知子・㈱北海道フーズ・士幌町農業協同組合・鈴木照光・塩谷欣司・伊藤 登・長平敏彦・西方しげ子・㈱つつみ堤基・加納きみ・臼井 清・曽我トヨ子・大野 斎・野原ちよ子・安達菊雄・丸谷深代・谷本幸枝・棚橋和枝・河村千代子・安村志朗・小椋 卓・野村正行・小坂司馬夫・田中とし・㈱安井測量設計事務所・富澤俊夫・和田晴男他８名・石垣牧子他18名・森本勝他70名

◎平成８年

・仙石 貢・恩田 寛・今木節子・佐藤昌子・西部進・桑原一敏・㈱岩佐・㈱北海道フーズ・高橋正光・大西住子・高士茂造・帯広信用金庫・成田吉信・山中登美子・白木千代・森本毅・林 信雄・士幌中央中ＰＴＡ・荒 勇・安村志朗・小坂司馬夫・山内豊満・早坂孝夫・菊池欣一・㈱安井測量設計事務所・丸次須美子

◎平成９年

・渋谷保雄・清野要之進・河田幸夫・小坂浅一・長瀬みさ子・掛水定男・平田孝広・荒 弘・小椋 卓・士幌町農業協同組合・森本順二・松井時恵・中原栄子・堀江一仁・遠藤弘美・森本勇雄・後藤 侃・河太利夫・恩田勝夫・矢野一雄・後藤 豊・三島竹子・伊藤 登・岡田はな・斉藤登美枝・高橋貞夫・熊谷トシ・伊賀ふゆ・森本義三・小坂司馬夫・磯角静司・㈱安井測量設計事務所

◎平成10年

・安村志朗・波多野邦夫・前野武司・前野フサ・田守ふみ子・宇佐見誠・士幌歌謡同好会・堀江輝次・山口昭・荒井 覚・後藤金蔵・洞田長作・長屋友喜・三上明子・武井徳松・士幌交通㈱・国枝俊彦・井尾由一・小見山政規・服部幸子・長屋義晴・片山為平・佐藤幸子・丹野 章・斉藤弘康・平井順子・㈲山口建設・高橋チカ・武藤増太郎・森本清一・加藤民雄・遠藤和雄・石水祐治・掛水トキ・森本賢次・吉川武子・中井健次・加納拾・安村志朗・牧野繁・山本安徳・瀬口繁子・森本貞子・須田茂雄・品田高根・小川寅之助・浪内一洋・上屋敷昭子・㈱安井測量設計事務所・高橋幸子

◎平成11年

・加納勝美・坪井功一・石田正幸・石水照子・沖館慶一・服部高雄・西部 寛・丹野恵子・河村富美子・今田忠夫・波多野まさ子・小坂司馬夫・神野春夫・古川一枝・川口 清・目黒恵子・稲葉結香・松倉 翠・金森百合子・中鉢利春・福田高美・栗田孝一・横山和将・安村志朗・矢野明信・細野 武・竹腰春子・波多野候憲・飯島コウ・島 芳美・田中 護・河江ツル子・溝口一夫・山西輝美・サカエ農機㈱・岡部芳子・荒木昇平・㈱安井測量設計事務所

◎平成12年

・古川幸郎・田中ユキエ・部田菊子・北嶋一栄・堀江英雄・森本慶一・富田 澄・山田チサ・波多野ミサヲ・松山志ず・茂木松雄・森本マツ子・増田トシヨ・矢野成則・纐纈政由・安村志朗・坂本道枝・瀬口健一郎・所

澄子・横山和将・山口悦子・松崎しづ子・村瀬　隆・名波一男・安村志朗氏銅像建立期成会・㈱安井測量設計事務所

◎平成13年

・池本文昭・柴田喜美夫・三本善則・坪井　健・大野憲光・神山裕充・鈴木俊道・佐藤輝美・士幌町酪農振興協会・香川紀子・野田　亮・窪田宜嗣・篠原智子・士幌町農業協同組合・葛西弘子・和田登志男・北川てる子・山根克己・丹野信行・新庄定義・遠藤征旺・近藤和三・岡崎誠次・森本ふじ・安村志朗・武藤絹子・林　義博・西部　斌・小阪司馬夫・仁科一男・沓澤君代・宗原徳雄・㈱安井測量設計事務所・金田美世子

◎平成14年

・布谷スエ子・梅本晴紀・大野祐史・上田マツ・森本美津子・浅野晴夫・千葉勝男・岡林菊雄・二瓶勝善・三木信彦・上杉真由美・藤田信夫・門真藤雄・村瀬　隆・酒井　豊・遠藤綾子・武井洋右・岡本静子・藤村英次・加藤キヨノ・森本英敬・佐藤陽一・所ミトリ・佐藤とよ・沓澤君代・河村敏彦・安村志朗・河野昭二郎・菊池節子・角田冨夫・安村節子・長瀬知之・吉田　勲・大友初男・山田正治・和田登志男・荒木昇平・宇佐見保・土屋シズ・斉藤あき・㈱安井測量設計事務所・神田　均

◎平成15年

・吉川久美子・加藤破魔男・早坂要次郎・中島フミ子・寺田　清・森本正博・士幌歌謡同好会・竹部きよ・大熊　肇・成瀬貞子・立花幸子・加納　博・足立順司・堀田寅男・有坂弘治・高橋富江・宗像節子・山澤　功・板垣明彦・国枝清由・神戸敬子・伊藤　武・椎橋政夫・佐藤英民・鷲見トシ子・吉田敏子・船戸智恵子・西部秀樹・宮崎信一・上野孝子・足立順司・岡崎春子・森本正博・中島みさ子・山口泰正・山口ミサ・佐藤　勉・安村志朗・寺町隆男・佐藤敏美・㈱安井測量設計事務所・荒木昇平

◎平成16年

・武藤敏美・宮野雅彦・北嶋一榮・多田　博・鈴木慶記・津田多香子・加納道夫・堀　醇・㈱トーシン・山口利江・柳井正一・樋口正寛・今田忠幸・保坂　勇・森本明彦・山下征夫・朝陽地区水道利用組合・田中ミサヲ・荻　静江・増田博和・安村志朗・小林　隆・名波忠男・勝矢久枝・塩谷善七・三本美幸・ラリージャパン２００４実行委員会・横山食品㈱・吉田清子・重森善之助・中道機械㈱・荒木昇平・横山克己・中島増す子・土生正吉

◎平成17年

・谷口正典・萱森愛子・西部竹男・熊谷賢一・田中秀行・宮崎信一・篠原金治・佐藤　久・湯澤秀夫・㈱平田建設・北嶋　孝・及川正義・成田哲也・遠藤定雄・藤原一夫・尾形美津子・㈲士幌ハイヤー・鈴木俊道・市川一浩・柴田梅子・矢野文子・瀬戸俊男・安村志朗・小林アヤ子・ラリージャパン２００５実行委員会・今田平子・㈱アルムシステム・㈲ひまわり・中井たみ子・野曽原隆・山口健一

◎平成18年

・加藤楯彦・田中　端・渡邊睦実・藤谷辰雄・㈱平田建設・山川秀男・鈴木淳子・兼山喜市・遠藤定雄・志村光一・石王ユリ子・早坂順子・阿部きみ子・坂井正次・高橋勝司・山本孝司・鴨川繁雄・横山食品㈱・野々村啓子・㈱安井測量設計事務所・重森榮子・木幡利則・竹迫真樹

◎平成19年

・長瀬弘子・井上義孝・佐藤澄子・㈱平田建設・早坂孝夫・桑原一敏・永森ミワ・朝井康子・土屋喜恵子・神屋静江・北村捷満・荒井　覚・原尾　進・山田章夫・足立好弘・今田鉄郎・有澤武一・武藤みき子・小原玉・村瀬峰男・波多野義美・西部君子・森　弘志・斉藤和子・栗山吉博・高橋美千子・吉田　孝・㈱安井測量設計事務所・岡部睦男

◎平成20年

・鈴木　博・朝井康子・加納一郎・小林ちよ・近藤タケ・能登　茂・神野なつ子・㈱平田建設・武井志津子・今井光仁・山川孝一郎・丹野　恵子・篠原安夫・三井　勉・辻　宜義・川上ユキ子・斉藤雅之・長田直幸・佐藤　勉・飯沼千恵子・加藤洋一・㈱安井測量設計事務所・加納利男

◎平成21年

・土生美智子・土屋一郎・船戸敬二・西部俊正・木幡利則・士幌小学校開校百周年記念協賛会・堀江一仁・安村艶子・土生美智子・㈱平田建設・飯島　勝・山岸　馨・波多野弘幸・谷田清蔵・篠原一廣・市原照義・森本　勝・大西孝子・山内徳彦・富田　実・塩谷　力・坪井功一・吉田　勝・野中栄忠・大野准弐・古田常雄・重森初美・㈱安井測量設計事務所

◎平成22年

・加藤治雄・水上良明・小松繁雄・山田高広・庄司光恵・後藤国昭・野村　晃・庄司光恵・小川清美・㈱平田建設・中尾　有・西堀田地区営農用水事業促進期成会・加納みよ子・佐藤正博・伊藤和一・高橋勝司・三田正眞・堀江輝次・加納幸夫・平野重信・荒井茂雄・河野

徳昭・木澤人武・浅野春雄・㈱安井測量設計事務所・清水章宏

◎平成23年

・松本正明・伊賀静雄・羽藤　勲・後藤きよみ・堀江　信・栗山吉博・岡部睦男・瀬戸敏美・樋口正寛・㈱平田建設・大井春広・森本英伸・河村博道・小川キヨ・野田勅子・加納　清・服部茂徳・横山食品㈱・品田タツ・堀部　薫・横山美治・高橋康宏・小椋タツ子・日下米子・北嶋雅子・白木美恵子・㈱安井測量設計事務所

◎平成24年

・佐藤節子・植田廣幸・臼井文雄・伊藤　博・月田ケイ子・沓澤　求・小川清・柴山幸夫・山本シズエ・茂木トシ・㈱平田建設・亀村東子・吉川民義・㈲士幌ハイヤー・鈴木　敏・宮崎喜久子・長平和子・川原祥嗣・増田秀則・原　幸雄・牧田光雄・河口武一・荒井茂雄・山田真人・鈴木年秋・小椋　卓・牧田光雄・㈱安井測量設計事務所

◎平成25年

・国井ユリ子・加納文一・大場未叔・森本寿徳・林幸三・中原　弘・森本耕二・河野富彦・高橋正文・士幌歌謡同好会・石垣順作・三井舞子・坂本為吉・鴨川正寛・三島久子・服部日出夫・伊藤クニコ・川崎敏彦・田中純子・冨山俊郎・㈱平田建設・伊賀文雄・輔田　等・高橋広樹・曽我部志子・牧野　繁・ふとし会・飯澤勇一・山中峰義・川村信子・藤井淳一・㈱安井測量設計事務所・藤澤隆夫・宮本弘幸

◎平成26年

・宮本弘幸・石垣銀次郎・遠藤文江・成瀬英二・庄司キヱ子・池田健一・菊地友恵・船戸　稔・中野雅隆・河合春江・成田有人・中島みさ子・㈱平田建設・高士眞吉・柴田喜美夫・佐野修二・洞田範明・金森百合子・荻　静江・古田常雄・室本敏行・北村保廣・篠原安夫・佐古法代・山岸利明・㈱安井測量設計事務所

◎平成27年

・遠藤行雄・加藤　守・山岸　均・後藤尚司・㈲士幌ハイヤー・井上二三夫・酒井栄津子・鈴木　博・清水　充・松山雅則・纐纈利美・能登ヒナ子・㈱平田建設・鷲見詔幸・吉田　勲・堀田隆浩・小松淳子・吉田志津枝他2名・三島重浩・加納　博・平田里惠・士幌歌舞愛友会・伊藤ヒロ子・堀江徳仁・㈱安井測量設計事務所・木原セイ子・土橋義清

◎平成28年

・加藤友子・東井忠彦・鈴木邦子・佐藤秀勝・高士昌弘・和田政市・川瀬喜代子・古川フサ子・樋口豊司・佐藤敏明・永森ノブ子・士幌町中央中学校開校50周年記念事業協賛会・山本雅晴・㈱平田建設・吉田　久・帯広信用金庫・加藤悦子・丸毛清孝・井上　司・杉山誠・野田勅子・辻　修・勝野サエ子・山根静江・㈱共成・丸尾英芳・瀬口隆宏・宍戸拓治・滝　紀好・ファイターズ台風災害義援金募金活動会・士幌歌舞愛友会・河合幹夫・篠原真人・白木幹男・㈱安井測量設計事務所・吉田　均

◎平成29年

・高橋正文・小椋　卓・池本文昭・北斗産業㈱・士幌電設㈱・山根一則・森本英子・㈱平田建設・山口昌也・加藤道夫・中山武次・堀田敬子・平田定之・飯沼　実・中田金敏・成田哲也・堀　光生、節子・須藤梅吉・士幌歌舞愛友会・横山食品㈱・佐藤春三・㈱安井測量設計事務所・瀬口健一郎・小野寺保

◎平成30年

・高橋正文・片山てる子・八木森洋子・岡田祥一・士幌歌謡同好会・長屋牧場・山口クニ子・柴山恵美子・㈱平田建設・瀬戸榮作・加納美好・大口静夫・棚橋隆行・長瀬直道・藤村　延・長瀬明子・高山　宏・辻本喜弘・服部髙雄・平井昌直・㈱安井測量設計事務所

◎平成31年・令和元年

・石水茂幸・赤間敏博・所　浩司・太田ひさ・河江信一・河村博道・及川邦子・士幌歌謡同好会・北川昌盛・長屋牧場・後藤晴久・加納康司・田辺　豊・㈱平田建設・國枝俊彦・鎌田吉博・三浦ゆう子・高橋寛彰・士幌歌舞愛友会・斉藤雅之・山本雅晴・長瀬則行・原勝・片山茂男・㈱安井測量設計事務所

◎令和2年

・河江智恵子・太田義則・飯沼　実・河口ひとみ・兼山栄治・㈲富田牧場・赤間敏博・長屋牧場・加納　博・㈱佐藤塗装工業・㈱平田建設・堀　光生他一名・平田定之・西部良子・小坂正志・大野　斎・森本龍太・三洋興熱㈱・細野芳春・松山一美

◎令和3年

・㈱安井測量設計事務所・平田昌克・士幌町農業協同組合・北斗運輸㈱・佐藤敏実・長屋牧場・㈱佐藤塗装工業・寺田スマ子・土橋年春・阿部一巳・齊藤達也・赤間敏博・竹腰一康・㈱平田建設・高橋節子・小椋卓・㈱奥原商会・出村信之・大野裕一・信太勢子・二川政義・國井克己・横山食品㈱・士幌歌舞愛友会・三本伸二・山田敏明・山下博司・大野祐史・㈱トーエン・川崎　康

2、高齢者福祉

老人福祉から高齢者福祉へ

老人福祉法が制定される以前の高齢者福祉施策は、生活保護法に基づく養老施設への収容保護が中心だったが、高齢者の増加、高齢者の就労機会の減少など高齢者を取り巻く環境が変化したことを受け、１９６３年(昭和38年)、高齢者の心身の健康の保持や生活の安定を目的として老人福祉法が制定された。１９７０年代半ばまでは施設の整備に重点が置かれたが、以降、在宅福祉への認識が高まり、在宅福祉施策の充実が図られるようになった。

１９９０年(平成２年)には、老人福祉法の一部が改正され、福祉サービスは住民に身近な市区町村において実施することを基本とする体制が整備された。また、急速に高齢化が進展するとともに、認知症の高齢者が増加する一方、核家族化により、家族の介護機能が低下し、高齢者の介護が社会的な問題となってきたことから、高齢者介護を社会全体で支える仕組みとして、１９９７年(平成９年)、介護保険法が制定され、２０００年(平成12年)４月から施行された。

このような中、本町においても高齢者を取り巻く問題に対して多方面からの施策が実施されてきた。

▽主な事業の変遷

・高齢者交通費助成事業(平成５年開始)

町有バス運行地域を除く国道２４１号線士幌23号バス停以南、または、士幌28号バス停以北の停留所付近に住所を有する70歳以上の高齢者に対し、公的交通機関を利用する場合の交通費を助成することにより、積極的な社会参加を促し、福祉増進を目的に助成する事業

平成11年度の利用実績は、次のとおり

町営バス無料証明書交付数　４４３人

民間バス無料乗車券延べ使用　２１６０枚(助成額64万６千円)

令和２年度実績では、次のとおりとなっている。

町営以外の路線バス乗車券延べ利用者の状況

令和2年度　５１７枚(助成額16万５千円)

事業開始当初から平成17年度までは、町営バスの利用に際し無料証明書を交付していたが、平成18年度より全路線無料化に伴い、無料証明書の交付は終了した。

・高齢者緊急通報装置設置事業

65歳以上の要介護認定を受けている世帯等の在宅者に対し、日常生活における急病や災害等の緊急時に対応するための緊急通報装置を設置する事業

令和２年度　31件(扶助額66万８千円)

この事業は、１９８６年(昭和61年)老人福祉電話「シルバーホーンあんしん」としてスタートし、より利用者などの利便性を高めながら、２００３年(平成15年)度より高齢者緊急通報装置設置事業として行われている。

・在宅介護用品等扶助事業(平成８年開始)

寝たきりや認知症のため日常的に介護用品等を必要とする老人を介護する世帯に対し、その費用負担を軽減するため一部助成を行う。対象者は町内に居住するおおむね65歳以上の者で紙おむつ、尿とりパットの購入に必要な経費の一部補助。

平成11年度　１１２万６千円(23人)

介護保険制度の導入に伴い、支給要件を要介護３以上の在宅高齢者等、市町村民税非課税などの所得制限を導入した。

令和２年度　支給実績なし

・敬老会の開催

多年にわたり本町の発展に尽くされた高齢者の労苦をねぎらうことを目的として、77歳および88歳の高齢者を招待し、祝賀会を開催する事業

敬老会

令和元年度　対象者　77歳　55名　88歳　35名

出席者　77歳　28名　88歳　10名

※令和２年度は新型コロナウイルス感染症予防のため中止

敬老会事業も75歳以上の方を招き実施してきたが、人数が増え１か所で実施することが困難となったことから、平成12年度より地区公民館の協力を得て、市街地・中士幌地区・東部・西部の４か所に分け平成14年度まで実施、平成15年度からは、75歳・77歳・80歳・88歳・90歳・99歳・１００歳の節目の年齢を対象に１か所で実施、平成20年度からは、77歳と88歳に限定し実施している。

・敬老祝い金等支給事業

社会に貢献した多年の労をねぎらうとともに町民の敬老思想の高揚を図ることを目的として、高齢の町民

に対しお祝い金等を支給する事業
令和2年度
お祝い金等　112人
292万円(77・88・100歳)
プラザ緑風入湯券(利用実績)　2035枚(75歳以上のお祝い金対象者外)81万4千円
※100歳を迎えた高齢者(右記112人の内数)3人
30万円
敬老祝い金も75歳以上の方に1人一律2万円を支給していたが、平成15年度には、75歳(1万5千円)・77歳(2万円)・80歳(2万5千円)・88歳(3万円)・90歳(3万5千円)・99歳(5万円)・100歳(10万円)の支給に変更、平成20年度から、77歳(2万円)・88歳(3万円)・100歳(10万円)に変更した。(一部商品券)
・在宅寝たきり老人介護手当支給(平成5年開始)平成11年度実績　94万4千円(11件)および、在宅痴呆性老人介護手当支給(平成7年開始)平成11年度実績　124万円(16件)については、介護保険制度の導入により、平成12年度より継続者のみの支給となり、平成14年度で終了した。

特別養護老人ホーム

1972年(昭和47年)に開所した町特別養護老人ホームは、老朽化も進んだことから、2002年(平成14年)11月に改築され、12月に新特別養護老人ホーム「ほほえみ」として落成式が挙行された。
入所定員の107床は、ほぼ満床で推移し入所待機をしている者も数多くなっている。入所者の約7割は女性で推移しており、平均年齢は87歳と高齢化も進んでいる。また、町内から入所している人は約7割で推移している。年々介護度の重度化が進み、おむつの常用者も多くなっている。施設ふれあいボランティアが行われる一方、多くの団体の訪問、住民善意の寄付等入所者の物心の支えとなっている。(表－1参照)
短期受入のショートステイも10床に対し令和2年度で1日平均4・2人利用となっている。職員は2000年(平成12年)4月1日現在施設長以下49名、2021年(令和3年)4月1日現在施設長以下パート等含め69名となっているが、介護職員は45名。
2000年(平成12年)度から介護保険制度の開始で、これまでの措置制度から介護認定を受けての契約制度にかわり、入所者全員の介護認定を制度開始前に行ったが5名が自立と判定された。制度では自立の者の入所は認めていないが制度開始前に既に入所していた者に限り5年間の経過措置として入所が継続できることになった。
2020年(令和2年)の新型コロナウイルス流行により、入所者と家族の面会を制限しなければならない状況が続いており、対応に苦慮しているところであったが、5月に家族会よりタブレット端末の寄贈があり、オンライン面会が可能となり、画面越しではあるが利用者に喜ばれている。

特別養護老人ホーム

表－1　**要介護度別入所者数**　(年度末数：人)

年度	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	計
2005(H17年度)	2	7	25	40	33	107
2010(H22年度)	0	3	27	46	31	107
2015(H27年度)	1	7	38	36	22	104
2020(R 2年度)	0	1	39	36	28	104

ケアハウスと介護保険事業

道内で2番目の施設となる新型の軽費老人ホーム「ケアハウス」が1992年(平成4年)4月1日オープンした。社会福祉法人士幌愛風会を設立し準備していたもので、家庭環境や、住宅事情に恵まれない高齢者にケアを配慮しつつ自立した生きがいのある豊かな生活の拠点として、一人用居室26、夫婦用居室2、あわせて30人定員で建設されたがすぐに待機者がでるほどの人気であった。
60歳以上の者で自炊ができない程度の身体機能の低下等があり、また、高齢等のため独立して生活するには不安が認められる人で、

ケアハウスしほろ　愛風苑

家族による援助を受けることが困難な人に居室を提供し、食事3食のほか、モール系温泉への入浴と、職員、相談員による生活助言が気軽に受けられるようになっており、全道的な注目をあつめ開設当初は、道内多くの市町村関係者の視察対応に追われる状況であった。

オープン直後の7月には、当時の横路北海道知事もふるさと訪問で来町し同施設へ立寄り見学と入居者との懇談を行っている。

待機者が多く、増築の要望が強まってきたことから、道へ増築の働きかけをしていたところ、1996年(平成8年)に補助採択され、20人分の増築を1996年と97年(平成8年と9年)の2年継続事業で行い増築分を三階建てとした定員50人の新しい施設として1997年(平成9年)11月に再スタートした。

現在の入所者の出身地別では士幌町の31人に続き十勝管内17人となっている。(表－2参照)

ケアハウスと併設して造られたデイサービスセンターも同時にオープンした。

この施設の利用は、町内に居住する概ね65歳以上の者で身体の虚弱等で日常生活を営むのに支障があり、かつ通所が可能な者を対象に、入浴サービス、給食サービス、送迎サービス、健康チェック、生活指導、日常動作訓練等を行っており、1日の定員を15人として週5日間開設してきたが利用者も多くなり、1996年(平成8年)5月からは土曜日も開設し対応した。(表－3参照)

2000年(平成12年)度からは介護保険制度へ移行、通所介護事業所の指定を受け要支援・要介護認定を受けた方が利用する事業所となり、一日利用定員を30人として介護サービスを提供している。2020年(令和2年)実通所者数73名年間延べ4435名を数える。

2005年(平成17年)4月からは居宅介護支援事業所指定を受けて、士幌愛風会居宅介護支援事業所を開設。2010年(平成22年)4月からは、指定訪問介護事業所指定を受け、ヘルパーステーションしほろとして士幌町社会福祉協議会から事業を引き継いで訪問介護事業所を開所した。(表－4参照)

2012年(平成24年)4月、小規模多機能型居宅介護事業所「なごみ」を開所、翌年6月、登録定員を15名から18名に増員、2015年(平成27年)4月には、登録定員を18名から25名に増員した。

2019年(平成31年)4月、士幌愛風会居宅介護支援事業所事業休止、令和元年12月には、非常用発電設備を設置した。

職員は2021年(令和3年)4月現在、ケアハウス・デイサービスセンター・小規模多機能居宅介護・訪問介護事業全体で施設長・事務員・生活相談員・介護員・看護師兼機能訓練指導員・介護支援専門員・訪問介護員等で34名(非常勤含む)が在職している。

表－2 **ケアハウス入居者状況** (単位：人)

年度	入居者数			出身地別		
	定員	男	女	町内	管内	管外
1994(H6年度)	30	7	23	11	9	10
1999(H11年度)	50	14	36	18	22	10
2005(H17年度)	50	14	36	25	19	6
2010(H22年度)	50	15	35	28	16	6
2015(H27年度)	50	12	38	32	16	2
2020(R2年度)	50	12	38	31	17	2

表－3 **デイサービス利用状況** (単位：人)

年度	実通所者			年間延べ利用者数
	要支援要介護認定者	自立者	計	
2000(H12年度)	103	13	116	5,709
2005(H17年度)	88	3	91	6,155
2010(H22年度)	106	0	106	7,975
2015(H27年度)	100	0	100	6,698
2020(R2年度)	73	0	73	4,435

※平成28年度以降の自立者は、介護予防・日常生活支援総合事業の対象者

表－4 **ホームヘルパー活動状況**

年度	ヘルパー人員	派遣実世帯数	訪問活動状況	
			延べ回数	1日当世帯数
2010(H22年度)	7	523(17)	5,052(650)	13.9(1.8)
2012(H24年度)	8	513(12)	5,008(188)	13.9(1.0)
2014(H26年度)	6	385(15)	3,510(208)	9.7(2.0)
2016(H28年度)	5	360(43)	2,980(441)	8.8(2.3)
2018(H30年度)	4	369(45)	2,193(368)	7.1(2.0)
2020(R2年度)	5	396(38)	2,231(290)	7.5(2.1)

※下段( )内は障害福祉サービス

託老所

町は、1999年(平成11年)度で、将来のグループホーム設置を想定した託老所を試行的に開設した。

在宅の痴呆性老人(2004年12月以降「痴呆」を『認知症』へと呼称変更)等の介護者に代わって、対象者を一定期間通所させ、家族の介護負担の軽減と通所者の痴呆進行を防ぐ目的で当面1999年(平成11年)10月1日から2000年(平成

12年)3月31日までの期間試みた。

施設は、神苑(フレンドハウス東)にある町有住宅を内部改造して「ふれあいの家アカシヤ」と名付け、事業の実施を社会福祉法人士幌愛風会に委託した。

事業内容等は、要綱で定め、利用者の生活状況の見守り、日常生活動作訓練のほか給食提供を行い、利用時間は、原則として午前9時から午後5時までとし、必要な人には、前後2時間までの延長を認めた。試行期間中は利用者負担を徴さないが、給食代とおやつ代が必要であった。(実費)

要綱で定員は定めていないが、施設規模、介助担当者等の状況からみて一日6～7人が限度で期間中おおむね、その人数が利用した。

モデル事業の成果をみた町は、事業の必要性を認め、2000年(平成12年)度以降は本実施とすることとし、条例を制定して、4月1日から事業を開始した。

試行期と事業内容等で違うのは、利用対象者を介護保険事業に準じて認定された者とし、利用料金も同様に算定された額を納めることとしたほかは、大きな変更はない。2000年(平成12年)度で実利用者9人、延べ638人の利用があったが、介護保険制度の浸透により翌年度から利用者がいなくなったことから、2003年(平成15年)度で廃止とした。

3、児童福祉

幼児の保育

児童福祉施設として認可を受けている保育所が町立士幌保育所と法人運営の中士幌保育園の2か所あるほか、町内各小学校校下単位にへき地保育所を6か所設置していたが出生数の減少による少子化現象が進み、各施設入所(園)児童数も定員を大幅に下回る状況が続いた。特に平成に入ってからの減少が大きく、士幌保育所では昭和60年代後半に比べ半数近くになっているほか、へき地保育所でも地区によって差はあるものの今後の推移によっては統合再編の検討に迫られる状態にあった。

施設整備では、今まで児童館を利用していた西上へき地保育所が1994年(平成6年)に、また地区集会施設内で併設していた新田保育所が1997年(平成9年)にそれぞれ新築され近代的な保育施設に生まれかわり、他のへき地保育所もトイレの水洗化が図られるなど保育環境の整備を進めた。

中士幌保育園では、町の「チャイルドプラン」に則り当時老朽化していた施設を取り壊し、保育園・児童館・子育て支援センターを含む児童センターとして2001年(平成13年)新たにオープンし、中士幌地域の子育て拠点として重要な働きを担っている。

1998年(平成10年)には士幌、中士幌両認可保育所で国庫補助による障害児保育促進事業を実施して設備等の強化をはかり、同年10月から障害児保育の指定保育所として受入れ体制をとった。

多様な保育ニーズに対応するため、乳児保育実施保育園の拡充および2002年(平成14年)より保育時間の延長、一時保育事業を開始し保育サービスの充実を図ってきた。

町の幼保連携型認定こども園は、2008年(平成20年)に士幌保育所と幼稚園を併せ互いの施設を廊下等でつなぎ合わせ、管理棟など一部を増築して設置された。当時はそれぞれに保育所は厚生労働省、幼稚園は文部科学省と許認可が分かれていたが、2014年(平成26年)の法改正により内閣府に一本化された。(表－1参照)

士幌町認定こども園「なかよし」

表－1　認定こども園・認可保育所の状況　(単位：人)

年度	名称		児童		職員			
			定員	月平均在籍	所長・園長	保育士・保育教諭	調理員	公務補
1990(H2年度)	士幌保育所		120	89	1	7	2	1
	中士幌保育園		45	35	1	3	1	—
2000(H12年度)	士幌保育所		90	63	1	6	1	1
	中士幌保育園		45	26	1	3	1	—
2010(H22年度)	認定こども園	長	90	82	1	25	—	—
		短	70	44				
	中士幌保育園		45	32	1	4	1	—
2020(R2年度)	認定こども園	長	135	119	1	27	—	—
		短	25	10				
	中士幌保育園		45	22	1	6	管理栄養士1・調理員1	—

※認定こども園の定員については、平成31年4月1日より受入児の動向に合わせ変更、総数では変更なし

へき地保育所でも児童の減少から、２００８年(平成20年)度、地域運営で下居辺地区へき地保育所、ＮＰＯ法人運営で上居辺地区へき地保育所に町から移行され開所、２００９年(平成21年)には、川西地区の新田・西上・北中音更へき地保育所を統合し川西へき地保育所「あおば」、ＮＰＯ法人運営による佐倉地区へき地保育所が開所された。

地域が運営に深くかかわって努力してきたが、出生数の減少による少子化が進んだことにより、また小学校の統廃合時期とも絡み、２０１５年(平成27年)３月で下居辺地区へき地保育所が閉所、２０１９年(平成31年)３月でＮＰＯ佐倉地区へき地保育所が閉所された。

２０１２年(平成24年)２月に上居辺へき地保育所が高齢者交流館を併設して「かみおりべ木と太陽の香るエコ交流館」として落成、へき地保育所としては現在、ＮＰＯ上居辺地区へき地保育所と川西へき地保育所の２か所となっている。(表－２参照)

表－２　**へき地保育所の状況**　(単位：人)

保育所	定員	1990（H２年度）		2000（H 12 年度）		2010（H 22 年度）		2020（R２年度）	
		平均在籍数	保育士	平均在籍数	保育士	平均在籍数	保育士	平均在籍数	保育士
下居辺	30	24	2	6	2	11	3		
上居辺	45	31	3	13	2	21	4	15	4
佐倉	30	20	2	15	2	18	5		
新田	30	16	2	9	2				
西上	30	8	2	13	2				
北中	20	12	2	13	2				
川西	45					36	6	20	5
計		111	13	69	12	86	18	35	9

※平成21年　新田・西上・北中のへき地保育所が統合、川西へき地保育所となる
※平成26年３月　下居辺へき地保育所閉所　※平成31年３月　佐倉へき地保育所閉所

子育て支援

１９９０年(平成２年)の1・57ショック(出生率が2・07を下回った場合は総人口を保つことが不可能になる)を経て、国の少子化対策として、１９９４年(平成６年)「エンゼルプラン」、２００３年(平成15年)少子化対策基本法・次世代育成支援対策基本法、２０１２年(平成24年)の子ども・子育て関連３法と数々の施策を推進している。

町も１９９９年(平成11年)３月に安心して子どもを産み、育てられる環境づくりを推進するため、効果的な施策を計画的に実施できるよう「士幌町チャイルドプラン」(児童環境づくり行動計画：計画期間平成11年度～平成20年度)、２００５年(平成17年)３月に「士幌町次世代育成支援対策行動計画」(計画期間平成17年度～平成26年度)、２０１５年(平成27年)３月に「子ども・子育て支援事業計画」(計画期間平成27年度～平成31年度、第１期)・２０２０年(令和２年)３月に「第２期子ども・子育て支援事業計画」(計画期間令和２年度～令和６年度)を作成し、子育て支援センター事業、中士幌保育園の改築、認定こども園事業の充実など、子育て支援環境の整備に努めた。

１９９９年(平成11年)度から地域子育て支援センター事業を中士幌保育園に委託しスタートさせた。

子育て支援センターでは、未就園の子どもたちを対象にした一時預かり事業や、これら未就園児を持つ親たちへのアドバイスや相談など、子育てに関する支援を目的にした事業のほか、国の少子化対策臨時特例交付金で導入した子育て支援カー(移動保育車＝かぼちゃバス)を活用して地域巡回による支援活動を行っている。

保育料の徴収にあたっては、国・町の少子化対策として２００８年(平成20年)度、多子軽減による第２子半額や非課税世帯のひとり親等が無料など、２００９年(平成21年)度では、保育料に上限を設け、第３子以降無料、２０１６年(平成28年)度ではひとり親世帯等全て無償化、２０１７年(平成29年)度、第２子以降完全無償化、非課税世帯全て無償化、を経て、２０１９年(令和元年)10月以降３歳以上完全無償化となっている。

２０２０年(令和２年)８月には、母子保健型の「子育て世代包括支援センター」を総合福祉センター内に開設、保健師等の専門職が妊娠期から子育て期にわたるまでの母子保健や育児に関

する妊産婦等からの様々な相談に応じ、その状況を継続的に把握し、支援を必要とする者が利用できるサービス等の情報提供、関係機関との協力による支援プランの策定など一貫してサービスの提供を行う。この子育て世代包括支援センターの名称を募集したところ、「マミールームＹｏｓｕｇａ‐よすが‐」と命名された。この「よすが」とは、身や心のよりどころとすること、頼りとすることを表す、としている。

▽現在行っている主な事業

・子育て支援センター事業（社会福祉法人温真会委託）（平成11年度開始）
　子育て家庭の育児相談・指導・育児サークルの支援・育成、育児に関する情報提供など
・キッズ・クラブ（乳幼児学級）
・不妊治療費助成　（平成16年度開始）
　令和2年度実績　申請5人　30万円
・産後デイケア事業（慶愛病院産後ケアセンター委託）（平成30年度開始）
　令和2年度実績　4人7回利用　10万5千円
・電子母子手帳アプリ（しほろＭｏｍｏｂｙ母子モ）（平成30年度開始）
　令和2年度実績　登録者数１１９人
・高等学校等修学支援金給付事業（平成21年度開始）
　高等学校に在学する児童の保護者等に対し、学費を支援することにより修学上の経済的負担の軽減を図る事業
　令和2年度実績　25人　２５０万円
・子育て支援祝い金（平成19年度開始）
　令和2年度実績　６２３万円（入学祝17人・出産祝37人）
※平成11年度にスタートしたチャイルドシート購入費補助事業は、スタート当初は24台、翌年には30台、次の年は7台へ減、平成14年には1台への補助、翌年から、平成17年度まで利用がなく廃止となった。
・こどもの育ち応援特別給付金（令和2年度）
　新型コロナウイルスの影響等を踏まえ、町としてひとり親世帯等の子育て世帯の生活を応援
　令和2年度実績　対象世帯１２６世帯　６３０万円

子育て世代包括支援センター「マミールーム Yosuga　－よすが－」

4、福祉村建設

福祉村構想

　士幌町は以前から国保病院を中核とした一帯を福祉ゾーンとして、特別養護老人ホーム、保健センター、ケアハウス、デイサービスセンター、保育所、幼稚園、ことばの教室を配置したほか、若葉公営住宅を高齢者向けとし、ゲートボール場、更に中央公園も隣接する医療、保健、福祉等の施設環境整備を図ってきた。
　しかし、病院、特養ホームの改築も計画の時期を迎えていることや、医療、保健、福祉の三つの機能がそれぞれ縦割のため十分な福祉サービスに支障を生ずることもあって、第４期町づくり総合計画に「福祉村」建設計画を盛り込み総合福祉政策の見直しを図ることにした。
　１９９６年（平成８年）５月「士幌町医療保健福祉対策検討委員会」を設置、行政、医療、福祉関係者のほか町民を含む13名の委員を委嘱し「士幌町における医療、保健、福祉の総合対策はどうあるべきか」について諮問した。
　諮問事項の医療、保健、福祉の有機的総合対策や、病院および附属施設の建設計画、特養ホームの改築構想など5項目について検討した委員会は、翌年3月まで7回開かれ、この間住民アンケート調査の実施、専門家を講師とした講演、研修会の開催、先進地視察などの実施を経て、最終的な意見集約を行い、１９９７年（平成９年）３月町長に答申した。
　答申では、急激に進む高齢化で厳しい社会環境を迎える中、国の施策変化で医療制度が変わり、新しく介護保険の導入等で医療と保健、福祉の基盤が大きく変革することを想定して、町民の健康な生活を支える医療、保健、福祉のシステム（ソフト）と施設（ハード）の見直しが提案された。

福祉村の施設

　総合福祉対策について検討委員会の答申を受けた町

は、具体的施策を検討するため、１９９７年(平成９年)４月に総合福祉対策室を設け専任職員２名を配置、庁内に「総合福祉検討委員会」を設置、道・保健所との協議、先進地視察等を経て、１９９８年(平成10年)11月に福祉村整備計画を策定した。

１９９９年(平成11年)８月に病院改築・総合福祉センター新築・町民保健センター移設改修に着手、２０００年(平成12年)12月には竣工し、２００１年(平成13年)２月に落成記念式典が挙行された。

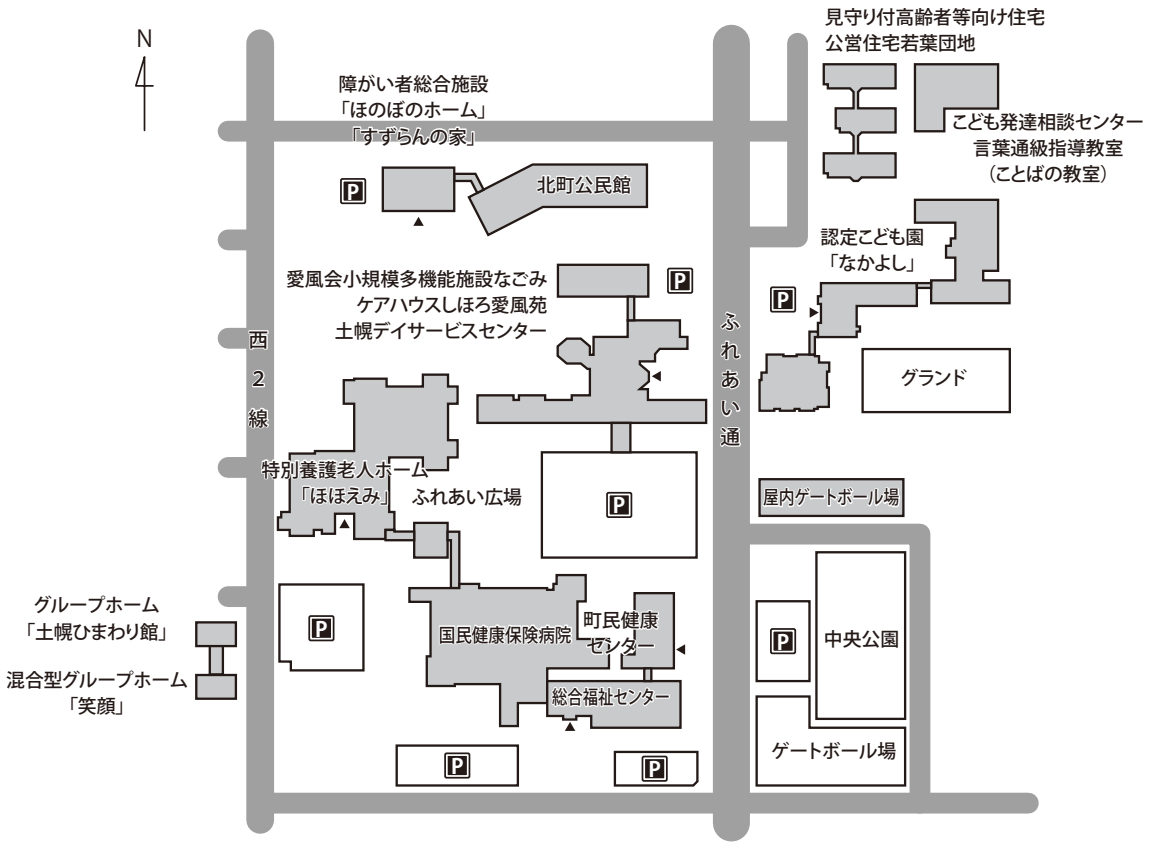
同年８月には、特別養護老人ホームの改築に着手、２００２年(平成14年)11月に竣工、12月から供用が開始された。その後、民間による、２００３年(平成15年)認知症対応型共同生活介護事業所「グループホーム土幌ひまわり館」、２００７年(平成19年)日中一時支援事業「すずらんの家」、２０１１年(平成23年)混合型グループホーム「笑顔」、２０１２年(平成24年)社会福祉法人士幌愛風会による小規模多機能型居宅介護事業所「なごみ」、２０１４年(平成26年)には、ＮＰＯ法人士幌障がい者支援の会による障がい者総合施設、見守り付き高齢者等向け公営住宅が設置された。(図－１参照)

この福祉村整備中に、計画時の想定以上に社会環境は大きく変化し、２０００年(平成12年)の介護保険制度スタート、２００３年(平成15年)の障がい者に対する支援費制度の導入、医療保険制度、子育て支援制度の変遷など、益々業務の専門性も求められるなか、小林町長は、「これらハード面の整備は一応達成した。今後は、これらのハードを生かしたソフト面の充実を目指す」とした。

総合福祉センター

図－１

“ふれ愛ユートピア”実現をめざして　士幌町『福祉村』配置図



5、公的介護保険

地域で支える介護

我が国の高齢化は、世界に類をみない早さで進行しており、特に75歳以上の後期高齢者人口の比率が高まって、寝たきり高齢者や認知症高齢者など要介護者が急増している。(表－1参照)

一方、核家族化、女性の社会進出の拡大、扶養意識の変化などにより、家庭における介護力は次第に低下し、家庭外へ求める介護ニーズへと変化してきた。

このような状況の中、国では新たな介護システム構築の必要性を指摘し1994年(平成6年)頃から社会保険方式に基礎をおいたシステムの創設の検討をはじめた。

国の老人保健福祉審議会で数年にわたり検討された介護保険制度案大綱を基に法案が作成され、1996年(平成8年)11月29日第139回臨時国会に「介護保険関連3法案」が提出された。同制度に対する世論も賛否両論あり、また、この制度の事業主体が予定される地方自治体の中に抵抗も強く衆参両院の法案審議に長期間を費やし臨時国会と1997年(平成9年)の通常国会では、継続審議となって、その後法案の修正、再修正がはかられ、同年12月9日3法案は可決成立した。

なお法施行は、準備期間をとって2000年(平成12年)4月1日からとなった。

表－1　**人口と高齢化率の将来推計**

	士幌町総人口（人）			全国総人口（万人）	士幌町高齢化率（%）	全国高齢化率（%）
		40～64歳（人）	65歳以上（人）			
1990年（平成2年）	7,149	2,345	1,102	12,361	15.4	12.1
1995年（平成7年）	7,010	2,415	1,331	12,557	19.0	14.6
2000年（平成12年）	6,839	2,393	1,541	12,693	22.7	17.3
2005年（平成17年）	6,755	2,361	1,696	12,776	25.1	21.0
2010年（平成22年）	6,416	2,272	1,731	12,805	27.0	23.0
2015年（平成27年）	6,132	2,103	1,794	12,709	29.3	26.6
推計						
2020年（令和2年）	5,824	1,871	1,938	12,532	33.3	28.8
2025年（令和7年）	5,514	1,713	1,972	12,254	35.8	30.0
2030年（令和12年）	5,217	1,597	1,930	11,912	37.0	31.1
2035年（令和17年）	4,946	1,486	1,865	11,521	37.7	32.8
2040年（令和22年）	4,659	1,372	1,801	11,091	38.7	35.3
2045年（令和27年）	4,362	1,261	1,719	10,642	39.4	36.8

※国勢調査および人口問題研究所統計より

介護保険制度のしくみ

社会全体で支える新しいしくみ「介護保険制度」が2000年(平成12年)4月1日からスタートした。

この制度のしくみは、公費(国、都道府県、市町村)と40歳以上の国民の負担で運営されるもので事業の運営主体は市町村となる。65歳以上の人を第1号被保険者と定め、日常生活に介護が必要となった場合に認定をうけて必要な介護サービスが利用できることになっているほか、40歳以上65歳未満の医療保険に加入している人を第2号被保険者として初老期認知症、脳血管障害などの老化によって介護や支援が必要と認定されたときにサービス利用が可能となるものである。

サービスは在宅サービスと施設サービスに分かれ、介護認定審査会が行う認定を受け、要支援1、2と要介護度1から5までの区分のいずれかに認定された人が区分ごとの毎月の給付限度額にそった介護サービス計画(ケアプラン)により在宅、施設いずれかのサービスを受けることができる。

サービスの種類としては、介護給付として在宅での訪問サービスである、ホームヘルパーによる訪問介護をはじめ、訪問入浴介護、訪問看護など、通所サービスとして通所介護(デイサービス)、通所リハビリテーション、短期入所サービスとして短期入所生活介護(ショートステイ)、地域密着型介護サービスとして認知症対応型共同生活介護(グループホーム)、小規模多機能型居宅介護のほか福祉用具貸与など、多くのメニューとなっており、施設サービスとしては、介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)、介護老人保健施設などへの入所によるサービスとなっている。

サービスを受けたときは、費用の1割(一定所得以上2割または3割)と施設入所サービスの場合は更に食費・居住費が利用者の負担として必要となる。

介護保険の保険料は第1号被保険者と第2号被保険者では異なり、第1号(65歳以上の人)の保険料の額は住んでいる市町村のサービスの水準に応じて市町村が独自に決めることになっているが、低所得者の負担が重くならないよう前年の所得を基準に現行12段階で決められる。また、第2号(40歳～64歳の人)の保険料は、各医療保険ごとに決められ、それぞれの健康保険の保険料に上乗せした額が給料から差し引かれる。また、保険料の半分は事業主

の負担となる。
　国民健康保険の加入者は国保税(料)と同様、市町村が定める方法によって計算され国保税(料)と同時に納入する。
　なお、第1号被保険者の保険料は原則的に年金から天引きされることになるが、年金が少額の人は直接市町村への個別納入となっている。
　町は、この制度に対応するため、3年ごとに介護保険事業計画を策定し、高齢者の現状、サービス提供の現状と問題点、高齢者人口と要介護者等の将来推計を立てる中で当面のサービス見込量・供給量を割出し、介護事業費の額を見込んでいる。その結果、士幌町の2000年から2002年(平成12年から14年)の3年間に適用する第1号被保険者の保険料の月額が3360円と算出された。2021年からの第8期介護保険事業計画では、月額保険料は6100円と第7期の計画と同額に維持されたが、上昇傾向となっている。(表－2参照)
　第8期における北海道平均の保険料は、5693円、十勝平均では、5617円で、士幌町の保険料はそれぞれと比べ高くなっているが施設規模が人口割合から見て大きく、サービス見込量・供給量が多いためである。(特別養護老人ホーム107床)十勝の月額保険料の最高額は芽室町の6300円、最低額は、広尾町の4400円である。ちなみに全国平均は6014円となっている。

表－2　介護保険料の変遷（基準額）

第1期介護保険事業計画	H12年4月～H15年3月	3,360円
第2期介護保険事業計画	H15年4月～H18年3月	3,600円
第3期介護保険事業計画	H18年4月～H21年3月	3,800円
第4期介護保険事業計画	H21年4月～H24年3月	4,000円
第5期介護保険事業計画	H24年4月～H27年3月	4,800円
第6期介護保険事業計画	H27年4月～H30年3月	5,100円
第7期介護保険事業計画	H30年4月～R3年3月	6,100円
第8期介護保険事業計画	R3年4月～	6,100円

地域包括支援センター

　本町では、介護保険制度がスタートする前の1999年(平成11年)4月より町民保健センター内に士幌町在宅介護支援センターを設置し、介護相談や制度改正に向けたケアシステムの整備などを行ってきたが、2005年(平成17年)の介護保険法改正に伴い、2006年(平成18年)地域包括支援センターに改編し運営している。
　地域包括支援センターは、要介護にならないように介護予防支援を行う「介護予防ケアマネジメント」、必要なサービスや制度を紹介する「総合相談」、成年後見制度活用や虐待防止への取り組みを行う「権利擁護」、地域ケア会議の開催やケアマネ支援などを行う「包括的・継続的ケアマネジメント」など主に4つの業務を行っており、高齢化社会の中で重要な役割を担っている。

地域包括ケアシステムの推進

　団塊の世代が75歳以上となる2025年(令和7年)以降は医療や介護の需要が、さらに増加することが見込まれている。
　高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的で、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制(地域包括ケアシステム)の構築に向けて生活支援コーディネーター(社協委託)を配置し、地域課題・地域資源の洗い出しなどの取り組みを強め、しほろ日常生活支援「たすけ愛」を実施している。

▽現在行っている主な事業

○町内における介護保険事業サービス等
①介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)～107床
②通所介護(デイサービス)～定員30名
③訪問介護(ホームヘルパー)
④小規模多機能型居宅介護～定員25名
⑤認知症対応型共同生活介護(グループホーム)～15床
⑥短期入所生活介護(ショートステイ)～10床(特別養護老人ホーム併設)
⑦訪問看護～士幌町国保病院
⑧居宅サービス利用者助成

○地域支援事業
・まる元運動教室(NPOソーシャルビジネス推進センター委託)
　令和2年度参加延べ人数
　1013人　事業実績額
　225万4千円(個人負担含む)
・いきいき運動教室(㈱オカモト委託)
　令和2年度参加延べ人数
　119人
　事業実績額　51万6千円
・ふまねっと運動教室(ふまねっとしほろへの助成)
　令和2年度助成額
　18万円
・権利擁護業務(成年後見申立)
　令和2年度　申立　なし
・認知症総合支援事業(大江病院委託)
　令和2年度実績
　41万2千円

第四章　生活環境

1、環境衛生と上・下水道

ごみとリサイクル

「人の集まるところ必ず、ごみあり」近年社会構造の変化や生活水準の向上に伴い、各家庭、事業所から排出されるごみは、年々増加し種類も多様化している。一般廃棄物の処理は行政の重要な責務となっているが、士幌町と上士幌町は1974年(昭和49年)に2町の構成による組合を設立し、ごみ焼却施設を建設して処分を行ってきた。

建設後20年間稼働し続けた同施設もごみ処理量の増加やごみ質の変化等から老朽化による能力低下も著しく、また毒性物質ダイオキシンに対する規制も厳しくなったことから施設の改築を行うことになり1995年と1996年(平成7年と8年)の2年事業で同施設敷地内に最先端の技術を導入したごみ焼却施設を建設し1997年(平成9年)2月から新施設での受け入れを開始した。

また不燃物処理のための最終埋立処分場も容量が限界となり新たに二重の遮水シートを張り浸出水処理設備を備えた施設を造成、5万4千立方㍍の容量で1998年(平成10年)10月から2012年(平成24年)の15年間に対応する予定で供用を開始した。

町は、可燃物、不燃物と大型ごみに分けた分別収集を行ってきたが、1993年(平成5年)度でリサイクルセンターを国道241号沿い27号角に設置して、子ども会、公民館等団体を対象に、新聞紙、空き缶、空きビン、その他を有価物として回収、業者への売り払い代金を団体等へ交付してきた。

「容器包装リサイクル法」が制定され、1997年(平成9年)4月から本格施行となり、消費者、市町村、事業者の責任分担が明示され、町は資源ごみの分別回収を行うことになった。これまでのリサイクルセンターでは規模が小さくこの事業に対応しきれないため新たに中士幌地区に倉庫を改造したリサイクルセンターと回収資源を保管するストックヤードを設置するとともに町民に対する分別排出徹底の協力依頼と専用回収車を配備して収集にあたっている。2000年(平成12年)度からは、上士幌町の資源ゴミも対象に受け入れている。(上士幌はリサイクルセンターなし)

2005年(平成17年)10月より町民の理解と協力によりごみ処理費の有料化が導入された。これにより可燃物、不燃物の大幅な減量をすることができた。

2020年(令和2年)度におけるごみの収集量は、可燃物で996㌧、1995年(平成7年)の948㌧と比べ48㌧の増、不燃物は290㌧で平成7年の775㌧より485㌧も減少し、リサイクル運動の成果の現れと見ることができる。(表－1参照)

資源ごみの対象となるのは、紙類(ダンボール含む)、空き缶、空きビンのほか、ペットボトル類、プラスチ

ごみ処理状況

表－1　　（単位：kg）

年度	士幌町		上士幌町		計	
	可燃物	不燃物	可燃物	不燃物	可燃物	不燃物
1995（H 7年度）	948,420	775,420	1,284,880	884,060	2,233,300	1,659,480
2000（H12 年度）	1,161,900	829,610	1,203,840	646,880	2,365,740	1,476,490
2005（H17 年度）	1,132,770	393,700	1,173,360	500,850	2,306,130	894,550
2010（H22 年度）	813,680	186,420	779,900	202,270	1,593,580	388,690
2015（H27 年度）	893,150	216,550	926,310	312,660	1,819,460	529,210
2020（R 2年度）	995,910	289,530	996,090	330,920	1,992,000	620,450

リサイクルセンター資源物受入状況

表－2　　（単位：kg）

区分	2005（H17 年度）	2010（H22 年度）	2015（H27 年度）	2020（R 2年度）
新聞紙	235,057	190,520	147,510	102,780
雑誌	218,987	96,840	100,540	89,250
ダンボール	219,750	142,680	117,710	121,054
プラスチック	113,708	97,238	92,765	85,165
ペットボトル	27,754	28,100	23,756	25,010
ガラス瓶	98,646	75,407	73,202	60,509
紙パック	6,198	5,181	4,360	3,280
アルミ缶	13,923	12,120	14,986	13,210
スチール缶	37,883	30,860	18,920	14,820
発泡スチロール	6,754	5,788	4,554	3,680
その他紙	49,664	43,136	40,256	40,814
古紙	0	64,704	60,384	49,021
小型家電	－	－	1,720	2,856

ック製容器包装、発泡スチロール類等となっている。また、２０１３年(平成25年)から小型家電の収集も行っている。(表－２参照)

今後も、可燃・不燃ごみとの一層の分別を図り、ごみの減量と資源としての活用を推進していく必要がある。

し尿処理

下水道の普及により、し尿の汲み取り量は減少し、１９９７年(平成９年)度に２３００キロリットルあった量が１９９９年(平成11年)度では１６５０キロリットルとなった。一方農村地区の浄化槽の普及により浄化槽汚泥の汲み取り量が増加し１９９９年(平成11年)度で６００キロリットルの量が処理場に搬入された。

２００９年(平成21年)度で１２０６キロリットルとなり、し尿、汚泥合わせて２３２９キロリットルが処理場に搬入された。２０２０年(令和２年)には、２３７０キロリットルが搬入処理されている。

し尿の処理は帯広市にある旧中島処理場に搬入処理していたが、経年による施設の著しい老朽化により整備が進められていた、十勝川流域下水道浄化センターが完成し、２０１８年(平成30年)４月から供用が開始された。汲み取り収集については許可業者が行っている。

火葬場と墓地

本町の火葬場は１９７５年(昭和50年)に建設され、これまで多くの遺体を荼毘(だび)に付してきたが年数の経過に伴い老朽化が進み、故障と葬儀が重なるたびに隣町(主に上士幌町)の世話になっていた。

火葬場改築の要望が多くなっていたが町は１９９７年(平成９年)度で現施設敷地内に改築する方針で地元住民と協議し了解を得て１９９６年(平成８年)に地質調査、測量、設計を実施、１９９７年(平成９年)度で本体工事、翌年度に外構工事を行って１９９８年(平成10年)１月から供用開始した。

新しい施設は「士幌聖苑」と名付け鉄筋コンクリート一部２階建てとし、建築面積５０６平方メートル、大型炉２基を備え、告別式ホール、収骨室のほか待合和室２室36畳、待合ロビー等が付設されている。

改築後火葬場の業務は民間委託とした。

町営の共同墓地は、士幌、中士幌、下居辺の３か所にあり、毎年除草剤の散布、草刈り、花壇の造成等周辺環境の整備を行ってきているが、１９９６年(平成８年)に中士幌、１９９７年(平成９年)には士幌とそれぞれの共同墓地内の通路および駐車場について舗装整備をはかった。

マイマイガ

ドクガ科に分類されるガの一種で、日本を始め、アジア、北アフリカ、ヨーロッパ、北アメリカ東部などに広く分布している。

約10年周期で大発生を繰り返すとされているが、２００８年(平成20年)と２００９年(平成21年)士幌町においても大発生した。当時の役場だより、広報には、卵塊の対処方法や、消防署が街灯や公共施設でふ化した幼虫を水圧で駆除する様子が掲載された。

実際、夜間、街灯の近くを歩くこともできない状況や、壁や道路一面にへばりつく状態となり、「身の毛もよだつ」とはこのこと、L

ED電球であればあまりガが近寄らないため電球の交換なども行われた。現在のところ、再度の大発生の報告はない。

上水道・下水道

水道は住民の快適な日常生活を営む上で、なくてはならない施設として重要な役割を果たしている。本町は、農村地域としては早くから施設整備に取り組み、1980年(昭和55年)までに全町地域で上水道施設を完了した。普及率の上昇とともに使用量も増加し1989年(平成元年)の全町の給水量95万6千㌧に対し1999年(平成11年)では146万3千㌧と1・5倍に、2009年(平成21年)では178万8千㌧と1・87倍に達し、2020年(令和2年)では192万3千㌧となっている。

士幌終末処理場

2020年(令和2年)度の士幌簡易水道区域内の普及率は99・9%であった。

施設の整備としては、上士幌町のゴルフ場造成に伴う士幌簡水水源地の移転を1995年(平成7年)9月にかけ行ったほか1998年(平成10年)度からは、西士幌地区、雑用水施設の全面改修を行うため道営営農用水事業と新田地区簡易水道の区域拡張事業とのアロケーション事業(注)が開始され2005年(平成17年)度に完成した。西堀田地区雑用水施設も朝陽地区簡易水道に移行し町内の飲用水供給施設は士幌町簡易水道・新田地区簡易水道と朝陽地区簡易水道の3か所となった。(表－3参照)

2015年(平成27年)度から2020年(令和2年)度まで、道営事業を活用し士幌町簡易水道の施設・設備および管路の更新を図った。

【(注)アロケーション事業とは、二つの異なった事業を共同で行う事業のことを云い、別々に事業を実施するより事業コストが低くなる。】

十勝管内の町村トップを切ってはじめた本町の下水道事業も供用開始以来40年以上となりこの間普及率も上昇してトイレの水洗化による地域の環境改善と保健衛生面からも大きな成果となっている。

水洗化率は、1989年(平成元年)度で士幌55・5%、中士幌で47・2%であったのが2020年(令和2年)度では、士幌99・6%、中士幌97・3%とそれぞれ大きく伸びている。

士幌終末処理場は、供用開始後40年を超え、機械、電気関係の機器類の老朽化が激しく、今後の維持管理に支障をきたすことから、2017年(平成29年)全面改築に向け実施設計を実施、2018年(平成30年)改築工事に着手し、2021年(令和3年)4月から供用開始した。

◇下水道普及状況(令和3年3月現在)

・士幌地区

処理面積　171㌶、利用3103人、水洗化率99・6%

・中士幌地区

処理面積　49㌶、利用652人、水洗化率97・3%

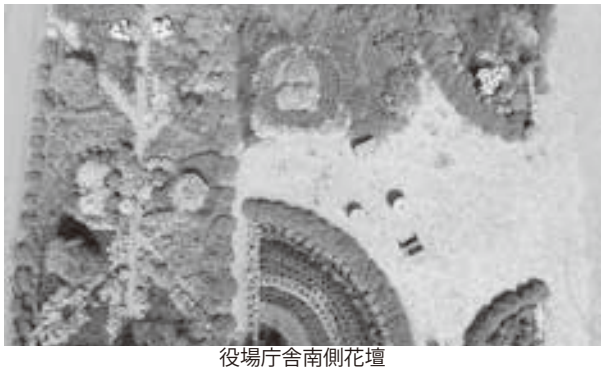
表－3　**士幌町内飲用水供給施設**　(令和2年度現在)

施設名	士幌町簡易水道	新田地区簡易水道	朝陽地区簡易水道	合計
区域	士幌市街 士幌南 士幌北 中士幌農村部 中士幌市街 (音更2件)	新田 西上 中音更 (上士幌1件)	朝陽 下居辺 上居辺 佐倉 士幌南の一部 (本別56件) (上士幌2件) (池田2件)	
開始年度	昭和46年	昭和51年	昭和60年	
給水人口(人)	4,327	569	1,308	6,204
給水量(千トン)	601	668	654	1,923
区域内普及率(%)	99.9	98.4	100	

2、快適環境づくり

全町公園化に向かって

町は、第3期町づくり総合計画「愛とふれあいのある町」(昭和61年～平成7年)の中の「安心して住める町づくり」「安全で緑豊かな環境づくり」などに基づき、1992年(平成4年)に快適環境づくり構想を立てるため検討委員会を設置、住民アンケート調査の意見を参考にしながら、1993年(平成5年)度から具体的な事業を進めた。当時の小川町長は、平成5年度の町政方針で重点項目の一つとして、快適環境づくりを通して「潤い」と「ゆとり」の生活実感を上げている。


役場庁舎南側花壇

1993年(平成5年)6月の広報では中士幌地区の桜並木(みどりのネットワーク事業)が広報の表紙に、また、住まいの環境整備の広報記事で「モデル農家と奨励地区」の中で『環境を整備し町全体が公園のようになる』との記載があり、多くの事業が取り組まれ、今の町づくりに引き継がれている。

しほろ花遊びの会で植樹した花壇

快適環境づくり検討委員会は、2006年(平成18年)に環境審議会に統合した。

◎取り組まれた主な事業

◇農村地区トイレの水洗化事業(平成5年度開始)

下水道供用区域外の主に農村地区においてトイレの水洗化をはかる場合、一戸につき20万円の助成と50万円の融資に対する利子補給を行う事業で、2000年(平成12年)度からは合併浄化槽となり、補助額を30～75万円に引き上げた。2008年(平成20年)には補助額を30万円に固定、2019年(令和元年)度までに458基の浄化槽が設置され、町が補助した金額は、1億2525万円、利子補給金は207万円となっている。

なお、利子補給は、平成24年度で終了した。

◇みどりのネットワークづくり事業(平成5年度～平成14年度)

人間と自然が共生する地域をつくるため、住宅周辺や公園など身近な緑から道路、河川、耕地防風林へとつなぎ、さらに大自然の緑につなぐための樹木等の植栽を行う事業で、第2期町づくり総合計画の「緑と十字の星」、第3期計画の「南北縦の線、東西横の線」計画を補強するもので国道、道道のほか、町道主要幹線の並木整備と公園のグリーン化を計画的に進めた。

◇住環境整備地区奨励事業(平成5年度～平成18年度)

5戸以上の農家がまとまって住環境整備を行う場合、奨励金を交付する事業で毎年3地区程度を対象に農家の統一看板設置、大型ごみ処理事業などを実施。

◇モデル農家イメージ画作成事業(平成5年度～平成8年度)

将来あるべき、快適でうるおいのある住環境の「姿」をイメージ画として作成し、これを家族全員の目標として、楽しみながら改善していく事業で、住環境整備に特に関心のある農家をモデルとして指定し、ふさわしい整備方法の助言を行いながら将来イメージとして図化。1996年(平成8年)度までに27戸が指定を受け、楽しみながら目標達成に取り組んだ。

◇花を利用した豊かな地域づくり事業(平成5年度開始)

道路沿いに様々な花を植えたり、また住宅周辺や畑には土壌の有機化と低農薬に効果的なマリーゴールド、ひまわり、菜種などの花を植えるなど、景観を演出するための事業で、国道沿いにフラワーロードを造成したり、花壇コンクール(平成12年～平成14年)の実施したり、花いっぱい運動、花のある町づくりを推進した。

中士幌地区では、バスタッチの空地に環境整備の一還として、平成17年に花壇を作成。平成18年より毎年花が植えられ、通行人の目を楽しませている。

現在は、shihoroフラワーマスターの会(現・しほろ花遊びの会)による、ガーデニング講習会(平成

16年度開始)、役場花壇の植栽(平成18年度開始)などに引き継がれている。

◇そのほか士幌市街では商店街近代化事業として街灯、街路樹の整備と併せ電柱の移設など景観整備を進めた。

環境マネジメントシステム

２００５年(平成17年)７月から地球規模に拡大した環境問題に対して、環境負荷軽減に取り組み、政策やあらゆる分野に環境への配慮を取り入れた環境自治体を目指して、環境マネジメントシステムとしてＮＰＯ法人環境自治体会議環境政策研究所が開発したＬＡＳ－Ｅ(ラス・イー：ローカル・オーソリティズ・スタンダード・イン・エンバイロメント)の運用を行っており、庁内に町長を本部長とした環境政策推進本部を立ち上げ、環境マネージャー会議・目標設定チームを設置し、士幌町独自の目標(温室効果ガスの削減を目標：電気使用量・水道使用量・燃料・廃棄物排出量)を設定し活動している。

当初の目標は、ＬＡＳ－Ｅ第１ステージ(役場庁内の事務活動)であったが、２０１３年(平成25年)からは、ＬＡＳ－Ｅ第２ステージ(地域全体の環境政策の実施等)にステップアップしている。

年末には、全ての職場において、外部監査を実施しており、運用の評価を受けている。

２０１７年(平成29年)５月には、『第25回環境自治体会議しほろ会議』が本町の総合研修センターほかで開催され、全国各地の自治体関係者や環境団体、学識経験者、事業者、町民など延べ約６２０人が集い、環境に関する様々なテーマについて、事例発表や情報交換が行われた。

開会式では、東村達夫実行委員長による開会宣言の後小林町長の挨拶、また分科会では、第１分科会で、士幌高等学校環境専攻班のカシワ林の貴重性についての話題提供、第２分科会で、エネルギーの地産地消について、第３分科会で、ＪＡ士幌町西田康一畜産部長(当時)がバイオガスプラントを核とした再生可能エネルギーの取り組みを紹介後、町内農家のバイオガスプラントなどを視察した。

士幌町環境基本条例

２００７年(平成19年)３月、士幌町の環境保全および創造について、基本的な考え方や、施策の基本となることを定め、町民が健康で文化的な生活を営む上で必要とする良好な環境を保全することを目的とした「士幌町環境基本条例」が制定された。

中央公園

この条例で定めた基本理念を実現するため、２００８(平成20年)３月に「士幌町環境基本計画」(平成20年～平成29年)を策定した。２０１８年(平成30年)２月には第２期士幌町環境基本計画も策定されている。

公園整備

士幌町の公園は自然体験型として、士幌高原ヌプカの里、朝陽公園、下居辺運動公園と水防広場があり、市街地型公園としては中央公園、遊水公園、柏公園、さくら公園、当時の駅の様子が残っている交通公園、のほか、各公民館(団地)に併設して公園を整備している。また歴史保存の公園として発祥の地記念公園が中士幌に、地区開拓１００年記念公園が下居辺に造成されているほか、旧役場庁舎跡をコミュニティ広場としてイベントなどに活用している。(表－１参照)

町は既存公園の維持管理に努めているが、特に市街地区公園で一部利用者のマナーの悪さからごみや空き缶等の散乱、設備の破損などが目立ちせっかくの町民いこいと安らぎの場所が犯されていることから、ごみの持ち帰りの徹底とモラルの高揚をはかるため、家庭、地域に呼びかける一方、監視、巡回を実施して防止につとめている。

表－１　町が管理している公園

名　称	面積（㎡）	名　称	面積（㎡）
中央公園	16,759	中士幌東団地公園	1,923
さくら公園	3,058	緑光団地公園	2,236
遊水公園	15,000	平原団地公園	1,080
みどり公園	300	コミュニティ広場	2,150
朝陽公園	13,631	交通公園	24,454
柏公園	12,396	発祥の地記念公園	19,624
下居辺運動公園	21,402	みのりの団地公園	1,836
下居辺開拓 100 年記念公園	2,793	いこい団地公園	1,580
睦南団地公園	3,196	計	143,418

脱スパイクタイヤ

昭和50年代からスパイクタイヤを使用することによる粉じん(車粉)が人体への悪影響や健康被害など大きな社会問題となり、国は「スパイクタイヤ粉じんの発生の防止に関する法律」を制定。道も北海道脱スパイクタイヤ推進条例で、スパイクタイヤの使用を禁止する地域を指定することになった。

１９９１年(平成３年)４月から道内市町村を順次指定地域とし現在は道内すべての地域でスパイクタイヤは使用できない。その結果スパイクタイヤによる車粉公害はなくなったが、スタッドレスタイヤへの切り替え当時は各地で冬の交通事故が多発した。

現在はスタッドレスタイヤへの運転者の慣れと同タイヤの改良も進み脱スパイクタイヤによる交通事故も減少している。

衛生組合

市街地の環境衛生の推進組織として、士幌、中士幌、下居辺に市街地住民を組合員とした衛生組合があり、それぞれの独自の活動を行ってきた。

１９９７年(平成９年)に連合会を組織し共通事業を試みたが、不調に終わっている。

士幌市街衛生組合は町の委託を受けビニールハウスで花苗づくり事業に取り組み、町の花いっぱい運動に貢献してきたが、10年度をもって他の組織に事業を移した。

下居辺市街衛生組合は平成16年度で休止した。中士幌市街衛生組合は、平成15年度で解散したが、翌年度中士幌地域衛生組合として再結成された。

士幌市街衛生組合は、２００５年(平成17年)12月に一定の役割を終えたとして解散した。

◇各衛生組合長(解散時)

士幌市街衛生組合長　後藤忠雄(連合会長)

中士幌市街衛生組合長　三上洋幸

下居辺市街衛生組合長　磯角静司

公害対策

本町における公害対策は主として士幌農協でん粉工場から排出される廃液を原因とする悪臭対策だったといってよい。

事業主体の士幌農協は早くから種々研究を進め対策を講じ改善に向けた努力をしているが、１９９５年(平成７年)度には道営畑総事業を行う中で廃液中の悪臭の元となる蛋白質をとる装置(ＣＦＳ)を導入、水処理によるにおいの除去に努め一定の成果をあげているが完全無臭にはいたっていなかった。

国の方針によるでん粉工場の再編整備計画による統合が進められ、２００１年(平成13年)には澱粉工場を新設、廃液無臭化のためデカンタ排水処理施設・フリューム排水処理施設を設置した。

町は毎年機器測定と官能試験による悪臭物質測定を行う一方、公害モニターによる独自の官能法調査を実施して公害対策協議会で分析、事業主体への改善指導を行っていたが、悪臭発生源の地道な諸対策効果が着実に発揮され、２００４年(平成16年)には臭気度合いもかなり低くなり、臭気を感じない状況下の測定となったため中止となった。また、悪臭に係わる公害モニターの報告からも澱粉工場によるものよりも、畜産に起因する悪臭の報告が多くなり、このことからも澱粉関連の悪臭がかなり低減されたことを裏付けるものとなったため臭気モニターも中止した。

なお、この澱粉に起因する悪臭対策等を目的に設置された士幌町公害対策協議会も、本来の目的を概ね達成する状況になったため行政改革の推進に基づき発展的に関係機関の整理統廃合に併せ、士幌町環境審議会にその業務を統合し廃止した。

近年、河川の水質汚染が問題となっており、士幌町では音更川、士幌川、居辺川の町内を流れる主要河川について水質調査を行っている。

調査は、河川ごとに調査地点を設け年２回、水素イオン濃度、生物科学的酸素要求量、浮遊物質量、溶存酸素量と大腸菌群数について実施しており、調査結果は、平均でおおむね環境基準内となっているが、年度、調査時期によって基準をクリアしていない項目もあり特に大腸菌群数の数値が環境基準値を一部超える検査結果となっている。要因として、生活・農業排水も憂慮されるが季節的な河川等の変動による自然的要因の影響があるため原因を特定しにくい。しかし、調査位置間において何らかの汚濁物質の流入が考慮されるため、各地域に存在する施設等からの適切な排水管理が望まれるとともに今後も監視が必要となる。

第五章　住民生活

1、生活、政治

人口の横ばいから減少へ

士幌町の人口は、1980年(昭和55年)の国勢調査で6979人と昭和に入って以降はじめて7千人を下回ったが、次回の同調査で7044人となり、以来7千人台を維持し、1995年(平成7年)の国勢調査では7010人と辛うじて7千人台を守ったが、2000年(平成12年)の国勢調査で6839人と6千人台に落ち、2020年(令和2年)の国勢調査で5848人と、ついに6千人を割り、人口の減少が続いている。(主要統計の戸数と人口参照)

ちなみに2015年(平成27年)3月末現在の住民基本台帳による本町の人口は6289人、2021年(令和3年)3月末現在では5992人と6千人台を下回った。

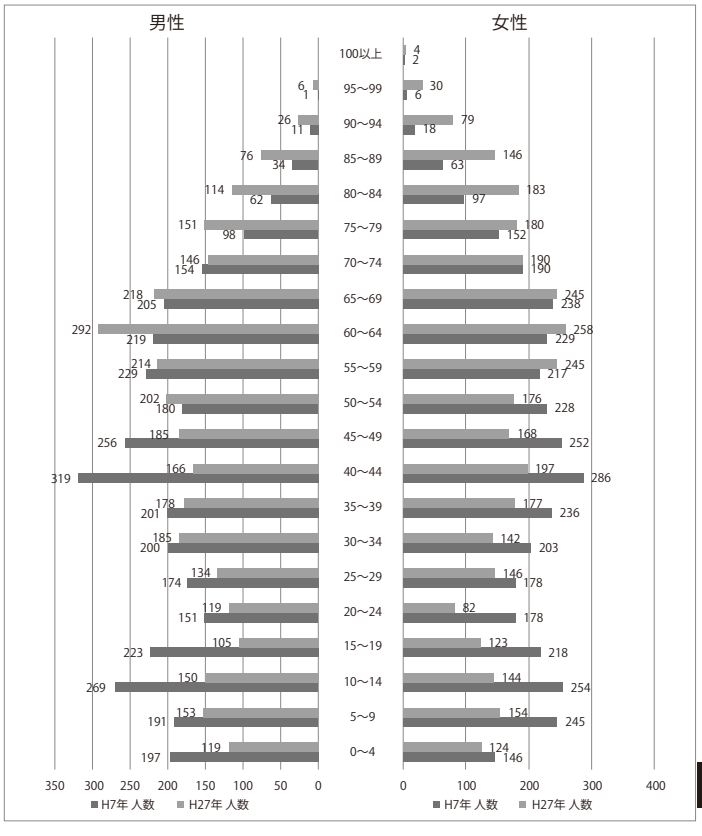
少子、高齢化が進み2015年(平成27年)の国勢調査でみる本町の高齢化率(町総人口に対する65歳以上の人口の割合)は29・3%で、全国平均の26・6%を上回っている。(図－1・2参照)

また、人口のうち就業者を産業別に分類すると、農業を中心とした第1次産業の比率が43%で前回調査と変わらず、小売業、サービス産業等の第3次産業が45%で前回を1%上回った。(表－1、図－3参照)

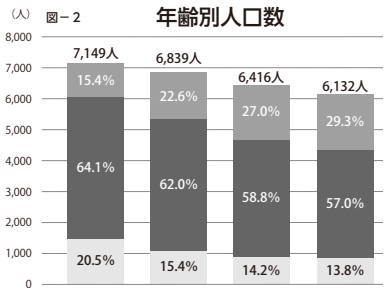
物価と消費者

1990年代初頭のバブル崩壊を直接の発端として、

図－1　年齢別人口　(単位：人)



図－2　年齢別人口数



	1990 H 2年度	2000 H12 年度	2010 H22 年度	2015 H27 年度
老年人口（65 歳以上）	1,102	1,541	1,731	1,794
生産人口（15 ～ 64 歳）	4,579	4,231	3,774	3,494
年少人口（0 ～ 14 歳）	1,468	1,054	911	844

停滞した日本経済は、「失われた10年」さらには「失われた20年」を経験し、20世紀以降の先進国において、20年以上もの長期にわたって年率1％以下の低成長が続き、日本銀行による金融緩和政策によっても民間投資は回復せず、流動性の罠から脱しきれなかった。

２０１３年の時点で、日本の名目ＧＤＰは１９９１年とほぼ同水準で、日経平均株価指数はピーク時の３分の１であった。このような中、安倍内閣のアベノミクスによる経済政策が進められてきた。

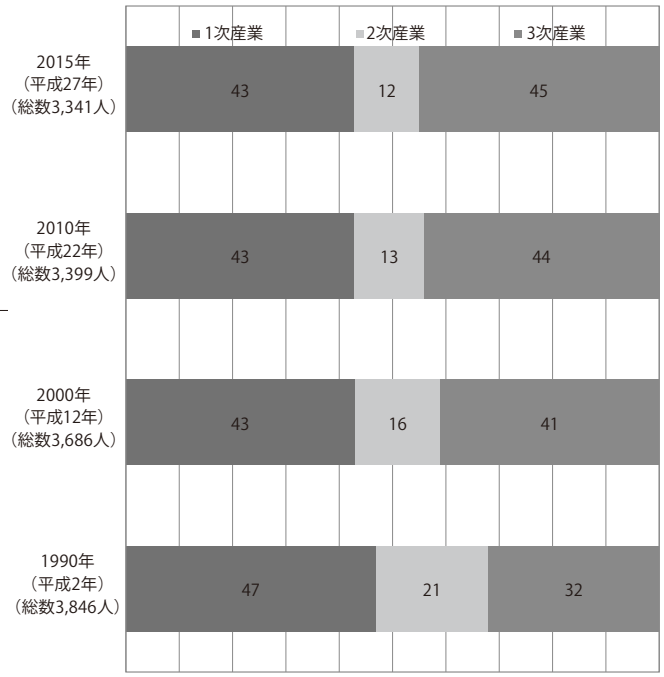
高齢化社会への対応、社会保障への財源との理由により消費税が導入され、１９８９年（平成元年）４月から３％、１９９７年（平成９年）４月から５％、２０１４年（平成26年）４月から８％、そして２０１９年（令和元年）10月から標準税率10％（軽減税率８％）となった。

近年の物価水準は安定を保っており、北海道の消費者総合物価指数の動きを対

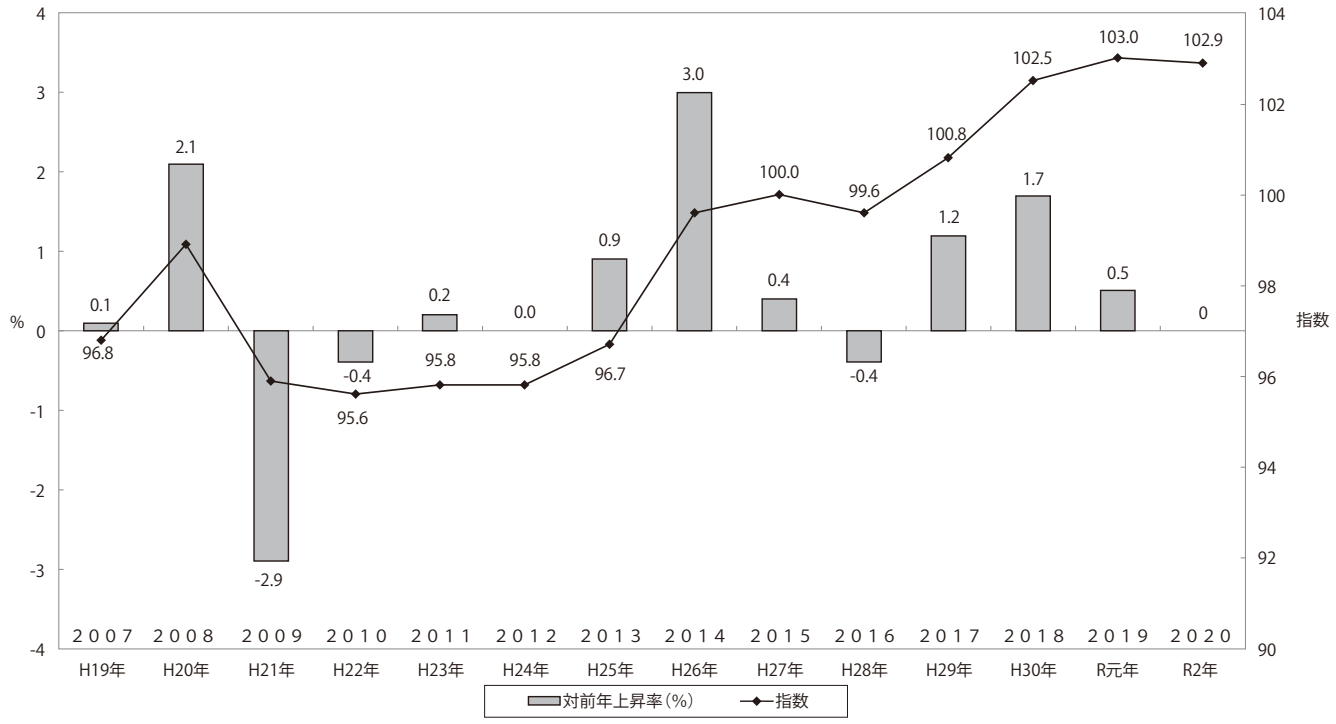
表－１　産業分類別１５歳以上就業人口の推移（国勢調査）

産業分類		1990（平成２年）			2000（平成12年）			2010（平成22年）	2015（平成27年）
		男	女	計	男	女	計		
第一次産業	農業	940	840	1,780	835	733	1,568	1,459	1,417
	林業	19	5	24	11	2	13	17	13
	漁業	4	2	6	3	1	4	1	0
第二次産業	鉱業	1	1	2	5	2	7	0	2
	建設業	257	53	310	205	35	240	170	152
	製造業	173	109	282	181	148	329	261	256
第三次産業	電気・ガス・熱供給・水道業	8	2	10	5	1	6	1	9
	情報通信業							4	3
	運輸業・郵便業	164	23	187	152	19	171	144	145
	卸売業・小売業	142	218	360	142	229	371	242	240
	金融業・保険業	10	12	22	5	19	24	12	17
	不動産業				2	0	2	9	9
	学術研究、専門・技術サービス業							30	54
	宿泊業、飲食サービス業							117	112
	生活関連サービス業、娯楽業							52	43
	医療・福祉							259	273
	教育・学習支援業							96	107
	複合サービス業							180	186
	サービス業（他に分類されないもの）	375	359	734	369	416	785	157	139
	公務							148	156
	分類不能の産業	107	27	134	122	44	166	40	8
総数		2,200	1,651	3,851	2,037	1,649	3,686	3,399	3,341

図－３　産業分数別就業人口比率の変化（国勢調査）



図－４　北海道消費者物価指数の推移（平成27=100）



表－2

諸物価の動き

区分 品名	規格・単位	平成２年	平成11年	平成21年	令和元年	令和２年	令２と平11の比率
自主流通米	水晶米ゴールド10kg	4,820	—	—	—	—	—
自主流通米	きらら397 10kg	—	3,444	—	—	—	—
自主流通米	ほしのゆめ 10kg	—	—	3,629	—	—	—
米	ななつぼし 10kg	—	—	—	4,129	3,961	—
米	コシヒカリ 10kg	—	—	—	4,381	4,338	—
豚肉	100ｇ	200	207	189	220	217	1.05
牛肉	100ｇ	—	208	445	364	340	1.63
鶏肉	100ｇ	—	102	112	130	123	1.21
牛乳	1,000㎖	199	197	200	226	231	1.17
鶏卵	M玉10個	—	201	178	189	182	0.91
味噌	1kg	346	386	337	—	—	—
味噌	750g程度	—	—	—	283	284	—
醤油	濃口1ℓ	489	344	324	315	308	0.90
砂糖	上白糖1kg	343	239	189	222	214	0.90
プロパンガス	5㎥	2,398	3,690	5,432	6,106	6,102	1.65
灯油	1ℓ	52	40	66.5	92.1	77.3	1.93
ガソリン	1ℓ	—	97	123	140	130	1.34
トイレットペーパー	１２ロール	569	512	408	384	387	0.76
クリーニング	ワイシャツ1枚	—	126	170	180	171	1.36

※Ｈ２～H21は十勝生活圏小売価格調査より（10月10日調査分）　牛肉は平成19年から企画変更（ももスライスからローススライス）※令和元・２年は北海道物価情報　（令和元・２年10月分、生活圏別平均価格十勝分）

前年上昇率でみると、１９９１年(平成３年)以降６年まで連続上昇していたが、７年、８年は教養娯楽、家具・家事用品、被服、履物などの値下がりにより下落となった。

１９９７年(平成９年)では消費税率の引き上げの影響などにより再び上昇したが、それ以降は同水準で推移していたが、２００９年(平成21年)リーマンショックにより下落、２０１４年(平成26年)には消費税増税により上昇した。(図－４参照)

諸物価の動きは、１９９９年(平成11年)と２０２０年(令和２年)と比べると、あまり大きな変動は見られないが、灯油・プロパンガスなどの燃料系が倍近くに増えている。(表－２参照)

１９９１年(平成３年)に会員59名で発足した士幌消費者協会は、１９９９年(平成11年度)では会員数も１４６名となり、これまで会員研修や愛町購買運動のほか、牛乳パック、空き缶回収などリサイクル運動の展開、廃油による石けん作りなど幅広く活動してきた。

また１９９４年(平成６年)度では、オリジナルの買い物袋を作成し会員に配布。

１９９６年(平成８年)７月には十勝消費者大会を士幌町で開催し総合研修センターを会場に管内から２８６名の代表が集まり、記念講演のあと、リサイクル運動の推進や消費税率引き上げ反対など活発な意見交換を行った。その後、消費者協会だより、各種啓発活動、消費者相談などの対応を行ってきたが、２００６年(平成18年)度で会員の高齢化などにより解散となった。

町消費者協会が解散したこと、また、訪問販売やオレオレ詐欺などの消費生活における金銭トラブルが増加していることから、２００７年(平成19年)４月から帯広市に在住している消費生活専門相談員と予約による専門相談のできる体制を整備、２０１１年(平成23年)４月からは、音更町の協力により音更町消費生活センターの専門相談員が対応することとなり、増えている振り込め詐欺・送り付け商法などの悪徳商法の相談体制の強化が図られている。

表－3

世帯数の推移（国勢調査）

	核家族世帯			単独世帯	その他の世帯	合計
	夫婦のみ	夫婦と子	ひとり親			
1990（H２年）	464	644	84	388	541	2,121
2000（H12年）	570	595	108	498	491	2,262

	一般世帯			施設等の世帯		総数	
	世帯数	世帯人員	1世帯当たり人員	世帯数	世帯人員	世帯数	世帯人員
2010（H22年）	2,453	6,233	2.54	5	183	2,458	6,416
2015（H27年）	2,474	5,939	2.40	5	193	2,479	6,132

生活

少子、高齢化とともに核家族化が進み、独居老人、高齢夫婦世帯の増加で人口は増えないが、世帯数は年々増加している。(表－３参照)

女性の社会進出、共働きの増加で生活水準は向上し

ているが、となり近所との付き合いは薄れ、カギっ子の出現も多くなった。２世代、３世代の同居生活を送る世帯も減少し、情報化時代の到来で都市文化の浸透も早く生活慣習も大きく様変わりしてきた。

冠婚葬祭などの儀式は簡素化されてきている反面、ハロウィン、クリスマスパーティーやバレンタインデー、ホワイトデーといった新たな形の催しや慣習が広がっている。

結婚式に対する若者の考えも変化し、仲人なしの結婚式、友人だけで祝う会、できちゃった結婚で入籍だけで済ませる方法など古いしきたりから合理的な考え、行動にと移行している。

車、電化製品の普及で家庭の文化生活の水準を押し上げてきたが、近年は、インターネット、携帯電話等が普及し更に便利な生活をする家庭が増えているとともに、ＳＮＳ（ソーシャルネットワークサービス）の普及により情報過多や犯罪に巻き込まれるなどの状況も見られる。

今後はこれら物質的水準に加え余暇を利用したレジャー等、心のゆとりに向けた生活向上が望まれる。

全体的な生活水準が向上している中で、ひとり親世帯、高齢者世帯、年金生活者、季節労働者などまだ生活レベルの低い世帯も多く、行政、地域で支え合いながら、これらの階層の人たちの生活を向上させ、全体が幸せとなる町づくりができるよう期待される。

2、宗教

宗教法人

戦後は、神社、仏閣など宗教活動の組織は宗教法人として登記されることになった。現在町内にある主な宗教法人の現況等について略記する。

〈神社〉

○士幌神社　字士幌東４条２丁目１番地
・祭神　大国魂神・大己貴神・小名彦名神
・現況
　令和３年　６代宮司　原田要　名誉宮司　小林隆
・昭和11年当社へ奉納された曙吟社奉納額は文化価値の高いものとして平成元年ＮＨＫ俳句の講座テキスト登載

○中士幌神社　字中士幌西２線84番地
・祭神　天照大神
・現況
　（現）兼務宮司　原田要
・秋に奉納する浦安の舞は昭和15年に皇紀２６００年記念として全国の各神社で舞が奉納されそれ以来続けられている。

○各地域における神社
・下居辺神社（下居辺）・白山神社（百戸）・佐倉神社（佐倉）・第八部落稲荷神社（北一区）・出雲神社（南旭区）・太田神社（西上）・中音更神社（中音更）・柏野神社（柏）・上居辺神社（西居辺）・中士幌神社（実勝）・新田神社（新田）・平和神社（平和）・朝陽神社（朝陽）・士幌五社大明神社（士幌南）

〈仏教〉

○松濤山真徳寺　字中士幌西２線80番地
・浄土真宗本願寺派
・現況
　三代住職　松浪浩之
・寺は北十勝最古のお寺
・本堂は北十勝最古の木造建築として、文化財的価値が非常に高い。

○白雲山聖教寺　字士幌西２線１６７番地
・真宗大谷派
・現況
　第４世住職　岩田広大
・境内のイチョウの木は、大正元年当時町内で播種、その後当寺へ移植されたもので町内の名木である。その他、桐の木、菩提樹、白の下がり藤がある。

○正眼山實相寺　字士幌西２線１６１番地
・臨済宗妙心寺派
・現況
　仲島信隆住職

○放光山報恩寺　字下居辺西２線１３２番地
・真宗大谷派
・現況
　３代住職　田辺　豊
・境内に樹齢１００年余の赤松があり、容姿端麗町保存木。

○瑞雲山全龍寺　字士幌西２線１５８番地
・曹洞宗
・現況
　６代住職　齋藤祥貴
・境内地に大正12年建立、地上５・５メートルの子安弘法大師石像あり、町内最大の石仏である。

○立正山本光寺　字士幌西２線１６０番地
・日蓮宗身延派
・現況
　第２世住職　本田光一
・記念物件
　北海道随一の六尺木像鬼子母神
　思親桜～１００年桜の古木
　石碑～御宝塔

○慈光山弘勝寺　字中士幌西２線74番地
・真言宗東寺派
・現況

6代住職　野川真瑞
・記念物件
十勝八十八ヵ所霊場仏体二体安置
身代わり地蔵尊

○紫雲山照圓寺　字士幌33番地1
・浄土真宗本願寺派
・記念物
黒松～盆栽を地上に下ろし60年幹周1・5㍍

〈天理教〉
○天理教十陽分教会　字士幌東2条2丁目1番地
・現況
4代会長　池本文昭

○天理教昇記分教会　字士幌東3条1丁目2番地
・現況
3代会長　福田　功

3、公安

火災の発生

1990年(平成2年)から2019年(令和元年)までの30年間に本町で発生した火災の発生件数は121件で年平均4件となっている。

損害額が大きな火災としては1992年(平成4年)に牛舎等の施設が焼損したのが2件あり約6千万円の損害となった。林野火災は、7件、年平均0.2件となっているが、1998年(平成10年)4月西上地区で発生した、一部国有林を含む林野16㌶が焼け、推定500万円の損害を被った。火入れ後の残火処理が不完全で、おりからの強風であおられ延焼したもので消火作業は困難を極めたが、林道が火防線の役割を果たし更なる延焼はくい止め鎮火させた。この火災でカラマツ等推定5400本が消失した。

火災による負傷者は年平均で0.3人、死者は年平均で0.1人となっており、平成6年・12年・17年に各1名が亡くなられている。2020年(令和2年)度は6件の火災件数となっている。(表－1参照)

救急業務

本町の救急業務は、1983年(昭和58年)7月から消防署において救急隊員9名を配置して業務を開始した。

高齢化社会の進展や疾病構造の変化に加え交通事故の多発等を背景に救急需要はますます増加傾向にあり、救急業務に対する住民のニーズは一層高度化、多様化している。

従来救急隊員の教育訓練は、135時間とされていたが、1991年(平成3年)より応急処置範囲が拡大され、教育訓練も250時間に拡大された。更に同年、救急救命士法が制定され、医師の指示のもとに3つの特定行為(除細動・静脈路確保のための輸液・器具による気道確保)を行うことができることとなった。

士幌消防署では、1998年(平成10年)3月に、これまでの救急自動車を更新し高規格救急自動車を導入、併せて高度救命処置用資機材を装備し、2010年(平成22年)3月に高規格救急自動車1台を増車するとともに、救急救命士を養成および採用し、2021年(令

表－1　**火災発生状況**

年度	火災件数					焼損面積		焼損棟数	損害額(千円)	罹災		負傷者	死者
	建物	林野	車両	その他	小計	建物(㎡)	林野(a)			世帯数	人員		
H2～11年度	20	2	2	5	29	5,170	1,611	30	140,924	24	65	2	1
H12～21年度	26	2	14	7	49	3,204	124	28	136,013	16	28	7	2
H22～R元年度	13	3	10	17	43	3,405	367	13	102,958	0	0	0	0
合計	59	7	26	29	121	11,779	2,102	71	379,895	40	93	9	3
年平均	2.0	0.2	0.9	1.0	4.0	392.6	70.1	2.4	12,663	1.3	3.1	0.3	0.1
R 2年度	3	0	0	3	6	276	0	3	8,503	0	0	0	0

和３年）３月現在14名の救急救命士資格者と気管挿管７名、薬剤投与13名、ビデオ硬性喉頭鏡４名、処置拡大２行為８名など救急業務の資格を得ており、一層の体制の強化および高度化に努めている。

救急患者の搬送先病院は、救急指定病院である町国保病院、患者の、かかりつけ医、帯広市の二次・三次救急病院との連携を取り対応している。

士幌消防署では、重篤傷病者の救命効果を高めるため、心肺蘇生法など応急手当の普及啓発活動を積極的に実施し、これまで消防団員はじめ一般住民など多くの町民が普通救命講習を受講して修了証を受けている。

１９９０年（平成２年）以降の年平均出動件数は２２２件となっており、救急出動状況は増加傾向にあり、急病と広域化に伴い近隣町村への出動が増えている。２０２０年（令和２年）度の出動件数は、２４７件となっている。（表－２参照）

消防団活動

自衛警防組織としてスタートした本町の消防団は２０２０年（令和２年）で創立95周年となる。この間多くの人々が団活動を引き継ぎ火災や災害の守り手としてその役割を果たしてきた。

消防署ができたことと火災等の減少から、かつて山火事の多かった時代と比べ出動回数は減ってきているが万が一に備え、消防演習など訓練は定期的に行っているほか予防活動も消防署員と連携し行っている。

現在団員数は47人であるが、市街地区の団員が減少してきたことから、農村地区からの入団を働きかけ多くの方に入団いただくとともに、２０１５年（平成27年）には、士幌消防団として初めて女性団員も入団することとなった。

士幌消防団

日頃の訓練成果を確かめ合うため、毎年全道各地より選抜された消防団の消防操法訓練大会が江別にある北海道消防学校で開催され、本町も過去３回出場（昭和53年、平成６年、22年）し、２０１０年（平成22年）には優秀な成績を収め優良賞を受賞した。

◇１９９１年（平成３年）以降の団幹部

▽団長

平井康也（平３・４～７・３）／杉原憲司（平７・４～11・３）／金森史公（平11・４～27・３）／大西米明（平27・４～現在）

▽副団長

杉原憲司（平３・４～７・３）／大口静夫（平７・４～９・３）／重森善之助（平９・４～11・３）／守屋英男（平

表－２

救急出動状況

年度		交通事故	労災	運動	負傷	急病	その他	計
H２～11年度	件数	294	45	12	133	659	505	1,648
	人員	482	44	12	126	644	476	1,784
H 12～21年度	件数	279	51	14	212	1,158	578	2,292
	人員	355	51	14	202	1,119	548	2,289
H 22～R元年度	件数	209	67	22	328	1,484	612	2,722
	人員	226	67	22	317	1,415	561	2,608
合計	件数	782	163	48	673	3,301	1,695	6,662
	人員	1,063	162	48	645	3,178	1,585	6,681
年平均	件数	26.1	5.4	1.6	22.4	110.0	56.5	222.1
	人員	35.4	5.4	1.6	21.5	105.9	52.8	222.7
R２年度	件数	19	8	2	36	158	24	247
	人員	22	8	2	34	154	23	243

11・4～12・10）／大西米明（平12・11～27・3）／佐藤秀勝（平27・4～31・3）／末永秀雄（平31・4～現在）

▽第一分団長

大口静夫（平3・4～7・3）／金森史公（平7・4～11・3）／佐藤秀勝（平11・4～27・3）／末永秀雄（平27・4～31・3）／谷本仁志（平31・4～現在）

▽第二分団長

重森善之助（昭62・4～平9・3）／守屋英男（平9・4～11・3）／大西米明（平11・4～12・10）／高士昌弘（平12・11～現）

▽団員定数　55名（令和3年3月現在）

団員数　本部～7名、第一分団～27名、第二分団～13名　計47名

《団員殉職》

1994年（平成6年）6月14日、町内北地区の倉庫から出火した火災で消防団員船戸勝美（当時第一分団庶務部長）が殉職した。当日故人は消防署が吹鳴したサイレンを聴くとすぐに消防署に駆けつけ消防車で火災現場に出動。燃え盛る火災標的を相手に懸命な消火作業を行っていたが、化学物質を多く含んだ農業用資材の燃焼で発生する有毒ガスを多量に吸い込み急激な身体の変調を訴えた。急きょ救急車で町立病院に搬送され入院、手当を施したが、治療の甲斐なく同日午後11時頃逝去した。死因は気道熱傷、急性心筋梗塞と診断された。

故人は、1965年（昭和40年）から両親が経営している理髪館に従事していたが、1966年（昭和41年）に士幌消防団へ入団、父親に次いで2代目の消防団員となった。温厚誠実な人柄で団員の信望も厚く1991年（平成3年）には第一分団庶務部長に推挙され、団幹部として活躍中であった。28年間に亘る団活動中多くの表彰の栄を受けてきたが、年間出動率90％以上の団員に贈られる「精勤表彰」を20回受けるという北十勝消防事務組合所属の4町消防団ではじめての快挙をなしとげた。

士幌消防団では職務で殉ぜられた労苦に報いるため副分団長特進と団葬を執行して霊を慰めた。

殉職団員に対し、日本消防協会会長および北海道消防協会会長より、特別功労章、特別功績章が、また北十勝消防事務組合管理者から功労章、士幌町長からは感謝状が贈られた。

この殉職は、公務災害と認定され、弔慰金、年金等が遺族に支給された。

本町で消防団員の火災による殉職ははじめてである。

《消防後援会》

消防団活動に対する市街地住民の後援組織として消防後援会が結成されている。市街地全戸が加入して会費を集め、災害出動の際、消防活動を円滑にするための警備後方支援活動を行っている。

▽士幌消防後援会長

島田　淳（昭63～平7）／中島光男（平8～10）／横山吉雄（平11～14）／滝　千冬（平15～20年）／杉原憲司（平21年～現在）

▽中士幌消防後援会長

田中　登（昭63～平5）

※1993年（平成5年）から統合により士幌消防後援会となる。

消防施設と消防署

1970年（昭和45年）に北十勝消防事務組合設立と共に設置した士幌消防署も2020年（令和2年）で50年が経過した。

この間庁舎の移転改築、消防装備、施設等の充実に加え消防署員の増員と計画的な消防学校への派遣教育による資質の向上で体制強化をはかっている。

消防施設等も充実され、消防水利として1998年（平成10年）度で防火水槽3基、11年度で1基新設したのをはじめ、老朽化したものは順次規格にあった防火水槽に造り替え、現在町内に47基の防火水槽と消火栓74基が設置されている。また化学消防車（署）と水槽付消防ポンプ自動車（団）の更新をはかっている。（表－3参照）

中士幌消防会館は、1995年（平成7年）に中士幌

士幌消防署

表－3　**消防車両等の状況**　（令和3年3月現在）

消防車両	水槽付消防ポンプ自動車	化学消防ポンプ自動車	小型動力ポンプ付水槽車	林野火災工作車	資材運搬車	高規格救急車	指揮車	広報車	合計
消防署		1	1	1		2	1		6
第1分団	2				2			1	5
第2分団	1							1	2
計	3	1	1	1	2	2	1	2	13

分遣所の改築として行われ、鉄筋コンクリート造り一部二階建てとし建築延面積は398平方㍍、梯子(はしご)をあしらったサイレン塔、ホースをかたどったひさしや、時計など斬新な外観となっている。無線遠隔サイレン吹鳴装置をつけた施設は、中士幌地区消防活動の拠点として位置づけされている。

2016年(平成28年)4月から、オール十勝で、とかち広域消防事務組合が設立され、今まで北十勝消防事務組合士幌消防署としての活動が、とかち広域消防事務組合士幌消防署としての活動となった。

変わった点といえば、119番通報は今まで市町村ごとの地元消防署で受け付けていたが、帯広市内に配置された指令センターで一括受付され、最も近い消防署へ出動指令が出されることとなった。

ちなみに、町内では、字上音更38号・字士幌33号以北については、上士幌消防署が近いため、上士幌消防署からの出動となる。(大きな事故・火災は士幌消防署も出動する。)

2021年(令和3年)4月現在の士幌消防署の署員数は、署長以下20人(局派遣1名含む)となっている。

中士幌消防会館

警察

町内の警察体制は、士幌と中士幌に駐在所が置かれ、士幌2名、中士幌1名の警察官が常駐して治安維持・交通事故防止につとめている。

士幌駐在所は、市街大通りに面して設置されていたが、築後30年になり老朽化が進んだことから、1996年(平成8年)に表通りから外れた近くへ移転改築した。

駐在所はミニ広報紙を発行して住民に配付し、犯罪防止や交通事故防止に対する住民啓発を行っているが、この中で地域安全ニュースとして帯広署管内の事件発生状況やその手口を公表し、町内での事件発生防止を呼びかけている。

中士幌駐在所に勤務していた園部和廣巡査長は、1997年(平成9年)、警察庁が実施した第3回全国交番・駐在所広報活動コンクールで同巡査長がパソコンで制作した広報紙が「ミニ広報紙の部」で警察庁長官賞を受賞した。

駐在所発行の「ミニ広報紙」

地下鉄サリン事件をはじめとする一連のオウム関連事件や和歌山のカレー殺人事件など国内では凶悪な犯罪が多く発生し殊に、近年は少年による殺人事件等凶悪犯罪が多発し、しかも極悪化している。

本町においても過去に少年による傷害事件が発生し、驚かされたこともあったが、それ以外は凶悪犯と思われる事件はほとんどない、ただ窃盗事件の発生は後を絶たない。

◇警察官(令和3年4月現在)

◎士幌駐在所

所長　高野英樹

巡査部長　伊藤和将

◎中士幌駐在所

巡査部長　海田卓弥

防犯と交通安全運動

町の防犯協会は、犯罪を未然に防止し、犯罪のない明るい町づくりを推進するため警察と連携しながら活動し、協会組織は各種団体、各公民館の代表等で構成してきた。

また、町の交通安全対策は、「交通安全推進委員会」とタイアップし、事故のない町をめざして交通安全施設等の整備や住民の交通安全意識の高揚につとめてきた。

1993年(平成5年)6月20日から続いた交通死亡事故「ゼロ」の日は、1996年(平成8年)3月16日で1000日を達成し、次は1500日を目指していたが、1996年(平成8年)12月10日、町内の若者が尊い生命を失う死亡事故で、これまで十勝管内1位、全道第7位を誇った記録も1269日で消滅した。残念ながら、その後も毎年1～2名の死亡事故が発生しており、特に2000年(平成12年)には、10月5日から11月16日までの40日間で4件、4名の死亡事故発生という異常事態となった。(表－4参照)

表－4　町内交通事故発生状況

年度	物損事故件数	人身事故件数	負傷者	死亡者
平2～11年度	1,708	175	281	18
平12～21年度	1,682	214	309	14
平22～令元年度	1,346	86	118	5
合計	4,736	475	708	37
年平均	157.9	15.8	23.6	1.2
令2年度	107	7	7	0

シートベルトの着用が死亡事故防止に大きな役割を占めているが、乳幼児の安全対策として、チャイルドシートの着用が義務付けられ2000年(平成12年)4月から法施行となった。町では当時、6歳未満の子どもを対象として、購入費の一部助成を行って完全着用を呼びかけた。

犯罪のない安全で安心な住みよい町づくりのため、犯罪被害等を未然に防止する対策や青少年の健全な育成を目的に活動を続けていた士幌町防犯協会と関係機関・団体との連携のもと、町民総ぐるみによる交通事故死ゼロの日伸展を目標に活動してきた士幌町交通安全推進委員会は、役員選出母体が公民館などと重なっており、また、業務の類似性なども有ることから、2012年(平成24年)4月5日に組織を統合するため解散し、同日設立総会において「士幌町生活安全推進協議会」と組織名を改め、両事業を継承して活動している。

「交通事故死ゼロの日」は2021年(令和3年)3月末現在で1991日を達成することができ、今後も更なる伸展を目標に、町民総ぐるみによる事故防止、交通安全運動の啓発対策が必要である。

▽歴代防犯協会長

加納一郎(平3～6)／今田鉄郎(平7～10)／鈴木洋一(平11～14)／太田　助(平15)／力石憲二(平16～23)

▽交通安全推進委員会会長

河江　力(解散時)

▽士幌町生活安全推進協議会会長

加納利春(平24～現在)

◇交通安全指導員

町では交通安全指導員会を設置して14名の指導員が活動している。指導員は毎月2回定例出勤し、児童、生徒の登下校時に合わせて街頭指導にあたっているほか、期別、特別の交通安全期間中や町のイベント、学校行事等にも要請に応じ街頭指導を行っており、年間出動延人数は、一時期500人程度に及んだ時期もあったが、年々減少し、2019年(令和元年)で255人となっている。

▽交通指導員会会長

木下邦男(現在)

青少年の健全育成

青少年の健全育成と非行防止を図るため町は法律に基づき青少年問題協議会を設置して青少年の育成、指導、保護および矯正など総合的な対策にあたっており、街頭補導、子ども映画会、講演会や少年団の助長など関係行政機関と連携しながら健全育成に取り組んでいたが、2019年(令和元年)度で廃止とし、コミュニティスクール等で事業を継続することとされた。

青少年健全育成事業の一環として、町は学童保育所を開設し、現在、士幌、中士幌、上居辺、の3校で実施している。

4、労働

労働組織

本町の就業人口は約3300人程度で近年大きな変化はない。

町内労働団体の協議体として組織していた士幌地区労働組合協議会(略称～士幌地区労)は、1993年(平成5年)10月から士幌地区連合会(略称～士幌地区連合)と名称を変更した。これは中央の労働組織の統合等によるもので総評、同盟等の統合で新しくできた日本労働組合総連合、北海道連合会の傘下に入り地区労の発展的継承組織として活動を続けている。

士幌地区連合の加盟組合は、地区労当時の単組をそのまま引き継いだが行政改革による行政機関の撤退(全農林等)などで減少し1999年(平成11年)当時は3単産、298組合員であったが、2020年(令和2年)12月現在4単産、187組合員で活動を行い、約100名程度の減少となっている。

連合は毎年総会を開き運動の総括と、新しい運動方針を決め活動しているが、組織強化拡大のとりくみとして未加盟組合の加入促進や未組織労働者の組織化の運動を行っている。

士幌町農協労組は士幌地区連合には加盟せず独自の活動を行っている。

2020年(令和2年)士幌地区連合の主な事業

・雇用労働条件改善の取り組み・労働者福祉運動・地区集会の開催(メーデー等)・国民運動の取り組み・各種事業の支援

▽歴代連合会長(士幌地区連合となった以降)

川本征三(平2～5※5年9月までは地区労議長)／佐藤行雄(平6～7)／佐々木利勝(平8～9)／赤根信彦(平10)／佐藤弘一(平11～13)／里見哲世(平14)／山口　進(平15～16)／鈴木博之(平17)／鈴木　修(平18)／羽賀正典(平19)／市川　徹(平20)／入江　広(平21)／赤根和美(平22)／木村　雅(平23)／赤根和美(平24)／山中洋子(平25)／岡田めぐみ(平26)／山中明裕(平27)／佐藤詩緒(平28)／菊地志津子(平29)／植松秀樹(平30)／山中洋子(令元)

／入江　広(令2)

◇加盟組合
・北教組、ＪＰ労連、自治労(全道庁・士幌町職)

季節労働者対策

夏の仕事を主な生活財源としている労働者の大半は、冬期失業状態となるが、国の季節労働者冬期雇用援護制度により、積雪寒冷地冬季講習の受講で一定額の支給を得ることができ、士幌町でも2つの組合が受け皿となって講習が開かれた。

同制度は一定期間だけの時限立法制度であったが、期限切れの都度、若干の条件手直しをはかりながら更新されてきたが、２００７年(平成19年)3月末をもって冬季技能講習助成給付金制度が廃止となり、雇用保険の特例一時金も平成19年度より支給日数が50日から40日に縮小された。季節労働者を取り巻く環境が一段と厳しい状況となり、町ではこれに変わる支援策として、２００７年(平成19年)度以降、季節労働者冬季雇用対策事業を行い、２００９年(平成21年)度以降については、近年の雇用情勢の悪化等に伴い、対象者の範囲を拡大し、雇用保険特例受給資格者以外の失業者も対象とし実施してきたが、２０１２年(平成24年)季節労働者冬季雇用対策としての事業は終了した。

なお、季節労働者の通年雇用の促進を目的に、十勝北西部通年雇用促進協議会(音更町、士幌町、上士幌町、鹿追町、新得町、清水町、芽室町、幕別町の８町で構成)が２００７年(平成19年)10月に設立され、関係機関と連携し、季節労働者の雇用の確保や就職促進に向けたスキルアップのためのセミナーの開催、雇用相談窓口の開設などに取り組んでいる。

緊急雇用対策事業

勤労青少年アパート

１９９０年(平成2年)に改築された定員30人の勤労青少年アパート「フレンドハウス」は改築当初、民間のアパートや下宿屋の少ない本町で、独身青少年が結婚するまでの生活拠点として常に満室の状況となった。低料金で食事の心配もいらないという魅力の反面、居室以外は共同でシャワーはあるが風呂はない、また居室での自炊は認められていないなど若干の不満もある。

近年では民間のアパート等も多く建設され、空きがみられることおよび士幌高校の「高原寮」が閉寮されるのに伴い、２００８年(平成20年)に、通学困難な高校生を受け入れるための改修を行った。

△入居状況
１９９１年(平成3年)商工業5人、町・農協関係他24人　計29人
１９９９年(平成11年)商工業8人、町・農協関係他22人　計30人
２００９年(平成21年)商工業6人、町・農協職員9人、農業1人、高校生7人の計23人
２０２０年(令和2年)商工業3人、町・農協職員3人、農業8人、高校生10人の計24人

フレンドハウス

農業労働力対策

安定的な農業労働力供給を目指して対策協議会が設置され、労働力確保と需要調整を図っているが、食品加工を中心とした農業関連産業に労働力が集中し、農作業に従事する人員確保が容易ではない。特に除草時期と収穫時期は需要が集中するためより困難を極めている。

現在町内では、農民協議会による援農調整のほか民間援農組織、高齢者生きがい事業団が労働力を配給し、年によって差はあるが、年間延べで3千人に近い労働力を提供しているものの需要に対しては80％前後にしか達していない。

また、畜産農家は独自にアルバイトニュース等で労働力の確保を図っている。

高齢者生きがい事業団定期総会

5、栄誉

名誉町民

町の発展に大きな功績があり町民の範とするものを永くたたえるために名誉町民制度が1971年(昭和46年)に設けられ、1975年(昭和50年)に洞田逸治、飯島房芳、1981年(昭和56年)に太田寛一の3名が称号の栄誉に輝いている。

1994年(平成6年)度で新たに飯島和吉、安村志朗の2人に名誉町民の称号が贈られた。

飯島和吉は、下居辺地区で農畜産業を営む傍ら、地区発展に情熱を注ぎ、その振興策に日夜を分かたず奔走し、私財をなげうってまでもその意思を貫いた。

それらは、やがて地区住民の信望を一身に集めるところとなり、推されて農業共済組合、農業委員会、町議会など相次いで多くの役職を歴任することとなったが、旺盛な責任感と政治感覚から、農業共済組合では、最後の組合長理事として、当時低迷を続けていた運営の刷新を提唱、これを町に移管することによって全戸加入の目標達成を図るなど、その後の事業発展に寄与したのをはじめ、町議会には5期19年間在職、この間産業常任委員長、総務常任委員長を歴任し、昭和54年には議会議長に就任して円滑な議会運営に尽力した。

公正無私の人柄は、町長推挙へとつながり、就任後は、「融和と福祉」を町政の柱として懸案解決に挺身、町政推進の基礎をつくるなど多くの功績が評価された。

安村は、士幌町産業組合に奉職以来、農業会、農業協同組合と通算55年余にわたり、農業の経営、生活安定のため心血を注ぎ、基幹産業である農業を通じ農家、農業経済の充実強化に果たした功績はきわめて大きく、特に近代的農村工業の発祥の源流でもある馬鈴しょでん粉工場創業に従事し、合理化でん粉工場、馬鈴しょ総合処理施設をはじめ画期的諸事業で大成功を農民にもたらした。爾来、農協の参事、専務、組合長、会長を歴任、特に前組合長の太田寛一がホクレン会長、全農会長に就任していた間、専務の職にあったが、実質的な士幌農協のトップとして卓越した経済運営の眼を持してその力量と指導力を発揮し、付加価値農業の集大成ともいわれる全国に誇る士幌農業、士幌農協の確立に限りなく貢献した。

また、多くの系統機関の役員として業界をリードしてきたほか、町の多くの審議会等の委員も重任し町づくりに多大な功績を残した。

両人は1994年(平成6年)12月の定例町議会で名誉町民に推挙され、1995年(平成7年)2月の町

飯島　房芳

洞田　逸治

安村　志朗

飯島　和吉

太田　寛一

中島　康夫

鈴木　洋一

小川　寅之助

加納　一郎

民のつどいの席上名誉町民称号の贈呈が行われた。

２００６年(平成18年)度で新たに加納一郎、小川寅之助の２人に名誉町民の称号が贈られた。

加納は、昭和19年士幌村西上地区に入植、農業経営の将来展望として機械化による効率的農業を目指し耕地面積の拡大に取組み、今日の大規模モデル農業としての本町農業経済発展に寄与、寒地農業経営の先駆者として斯界をリードし近代農業の確立に貢献した。

地域住民に推されて町議会議員、農業委員会委員、全士幌農民連盟委員長など相次いで多くの役職を歴任、卓越した経済感覚と持前の行動力により、多くの懸案解決に挺身、本町農業の振興、町政の発展に多大な貢献をした。

小川は、士幌村役場に奉職以来、若くして教育長、助役に選任され、それぞれに大きな足跡を残した。豊かな識見と実践力は、町民の全幅の信頼を集め町長へと推挙され、就任されるや持前の手腕を発揮、町政全般にわたり懸案解決に挺身、連続３期無投票当選を果たされ「緑豊かな田園農村づくり」を基本に町づくりを展開、将来の財政状況を見据えた大型事業の推進を図るとともに、町民との対話と協調を心がけ町民参加による町づくりの基盤を作られた功績は高く評価された。

両人は２００５年(平成17年)12月の定例町議会で名誉町民に推挙され、２００６年(平成18年)３月の町民のつどいの席上名誉町民称号の贈呈が行われた。

２０２１年(令和３年)度、新たに鈴木洋一、中島康夫の２人に名誉町民の称号が贈られた。

鈴木は、昭和38年４月、元町農協組合長で日本農業の発展に大きな功績を残した太田寛一氏の後押しにより、米国イリノイ州に渡り最先端の米国酪農を学んだ。約20か月の研修を終え、帰国後は家業の酪農を受け継ぎ、新牛舎を建て、搾乳や給餌などを機械化し、北海道酪農の近代化に多大な影響を与えた。

また、町議会議員、農業委員会委員、社会福祉法人士幌愛風会理事長など多くの役職を歴任、町政の発展、本町農業の振興、地域福祉に多大な貢献をした。

中島は、昭和52年から平成19年までの長きにわたり町森林組合理事として林業の振興に寄与し、特に平成18年の音更町・士幌町・上士幌町の各森林組合広域合併にあっては合併推進協議会長として奔走した。

また、町議会議員、農業委員会委員、町土地開発公社理事、社会福祉法人士幌町社会福祉協議会副会長など多くの役職を歴任、町政の発展、本町農業の振興、地域福祉に多大な貢献をした。

両人は２０２１年(令和３年)９月の定例町議会で名誉町民に推挙され、同年11月の開町１００周年記念式典の席上名誉町民称号の贈呈が行われた。

晴れの叙位・叙勲者たち

平成13年　(自治)
(故)上田一男・特旨叙位「従六位」

平成21年　(自治)
(故)飯島和吉・特旨叙位「正六位」

平成23年　(自治)
(故)小川寅之助・特旨叙位「従六位」

平成28年　(地域医療)
(故)高山俊一・特旨叙位「正六位」

平成29年　(農業)
(故)森本　勝・特旨叙位「従六位」

１９９２年(平成４年)以降に士幌町各界で叙勲を受けたものは次のとおりである。

平成５年　(自治)飯島和吉・勲五等双光旭日章

平成７年　(教育)(故)岩橋清海・勲五等瑞宝章／(消防)淡中輝愛・勲六等単光旭日章

平成８年　(消防)有澤武一・勲六等瑞宝章

平成９年　(教育)池田茂一・勲五等双光旭日章

平成10年　(自治)(故)三上昌博・勲六等瑞宝章／(消防)(故)平井康也・勲六等瑞宝章／(消防)(故)中島光男・勲六等単光旭日章

平成11年　(高齢者)北嶋一栄・勲六等単光旭日章

平成12年　(自治)小川寅之助・勲五等双光旭日章／(教育)中島敏夫・勲五等瑞宝章

平成13年　(自治)沓澤　清・勲五等瑞宝章／(自治)平野春雄・勲六等単光旭日章／(医療)高山俊一・勲五等双光旭日章

平成14年　(自治)(故)安村順七・勲五等瑞宝章／(教育)鈴木清孝・勲五等瑞宝章

平成15年　(自治)中島正一・勲六等単光旭日章／(自治)吉田喬一・旭日双光章／(自治)中島康夫・旭日双光章

平成16年　(消防)重森善之助・瑞宝単光章

平成17年　(自治)和田善吾・旭日単光章／(統計)河野富剛・瑞宝単光章

平成19年　(自治)(故)朝井　剛・旭日単光章／(自治)遠藤定雄・旭日単光章

平成22年　(自治)(故)加納

一郎・旭日単光章／（消防）佐藤東吾・瑞宝双光章／（観測）星屋好男・瑞宝単光章／（消防）高田信悦・瑞宝単光章

平成23年　（自治）山中芳美・旭日単光章

平成24年　（自治）（故）清野要之進・旭日単光章／（自治）三井　勉・旭日単光章／（福祉）野々村勝子・瑞宝単光章

平成25年　（自治）（故）森本民夫・旭日単光章

平成26年　（福祉）佐藤末子・瑞宝単光章

平成27年　（自治）（故）佐古準一・旭日単光章／（自治）（故）森本辰藏・旭日単光章

平成28年　（自治）（故）鎌田貞次郎・旭日単光章／（消防）金森史公・瑞宝双光章

平成29年　（自治）（故）寺町隆男・旭日単光章

平成30年　（学校保健）大口静夫・瑞宝双光章／（自治）鈴木洋一・旭日双光章

平成31年　（自治）（故）矢坂希一・旭日単光章

令和2年　（援護）大野准弐・旭日単光章

令和3年　（自治）（故）今田鉄郎・旭日単光章

町の功労者表彰

町条例に基づく功労者表彰の1992年（平成4年）以降の受賞者は次のとおり。

毎年2月に開催される町民のつどいにおいて表彰された。

▽産業貢献賞

平成4年／出村一介・斉藤敏夫　平成5年／森本清一

平成6年／板垣邦宏・（故）成田忠一　平成7年／（故）宮野　博・森本賢次　平成8年／吉田喬一・山口　昭

平成9年／矢坂希一・石水幸治　平成10年／加藤英雄・太田　助　平成11年／土屋一郎・平田　坦　平成12年／鈴木廣三・（故）国枝初夫

▽教育文化功労賞

平成4年／岩橋清海　平成5年／神山　翁　平成6年／鈴木晃一　平成7年／谷本コスミ　平成8年／三浦康夫　平成9年／古田雪次・紺野光男　平成10年／野久一郎・松倉滋　平成11年／小川辰廣

▽社会貢献賞

平成4年／荒井清太郎・尾形一郎　平成5年／淡中輝愛・川上てい　平成6年／中島光男　平成7年／栗山吉輝　平成8年／平井康也・谷本幸枝　平成9年／澤田勉・猪飼幸太郎　平成10年／松井茂雄・福見定吉

平成11年／伊藤芳伊・高士イツ子　平成12年／重森善之助・大西住子

▽自治貢献賞

平成5年／和田善吾・中島正一　平成6年／清野要之進　平成7年／丹野正行・河野富剛　平成8年／中島康史・加納一郎　平成9年／新庄晴也・鎌田貞次郎

平成10年／朝井　剛　平成11年／小川寅之助　平成12年／今田鉄郎・山中芳美・山田登美雄・山本政行

▽飯島賞

平成4年／士幌高等学校農業クラブ　平成5年／今田司郎・板東真一　平成6年／田中端　平成7年／成田吉信　平成8年／（故）今木勝徳　平成9年／（故）丸次博司　平成10年／士幌高校乳牛改良研究会・和田良子

平成11年／（故）高橋瑛三郎　平成12年／宮部正彦

▽善行賞

平成4年／纐纈富子　平成5年／洞田長作　平成6年／士幌町商工会婦人部・中士幌ひまわり婦人会　平成7年／荒木昇平　平成8年／施設ふれあいボランティア　平成11年／佐藤勘八

平成12年／酒井力・宇佐見誠治

▽特別表彰

平成9年／小坂司馬夫

2000年（平成12年）度に町表彰条例が全部改正されたことにより表彰の種類等が変更された。

2001年（平成13年）以降の受賞者は次のとおり。

毎年2月に開催された町民のつどいにおいて表彰されたが、2007年（平成19年）以降は、新年交礼会に併せ表彰されている。

▽産業功労賞

平成13年／谷本　榮　平成15年／森本慶一　平成18年／（故）今田司朗　平成19年／鴨川繁雄　平成25年／長瀬直道・兼山喜市　平成28年／早坂孝夫・小林雅明・松山一美　平成30年／鹿島憲夫　平成31年／高橋正道・飯沼　実　令和3年／渡邊睦美

▽教育文化功労賞

平成22年／小松繁雄

▽社会功労賞

平成15年／森本マツ子　平成16年／津田範之　平成19年／大槻フサ子　平成21年／土生富夫・平松茂子・白木美恵子　平成22年／浅野一男　平成27年／菱沼美和子　平成28年／金森史公

平成29年／河江　力　令和3年／稲葉サチ子

▽自治功労賞

平成13年／大口静夫　平成14年／坂本為吉　平成16年／志村光一・國井興治　平成18年／寺町隆男・三井勉　平成20年／鈴木洋一・森本民夫　平成21年／井原力也　平成24年／佐古準一・富田忠雄・杉原憲司　平成28年／服部悦朗・力石憲二

令和2年／加納三司・細井文次・和田鶴三・出村寛

▽飯島賞

平成16年／下居辺小学校熟

年農園講師団　平成20年／谷本幸枝　平成22年／士幌ソーランの会

▽善行賞

平成13年／篠原隆雄　平成14年／永田　豊　平成15年／白木　登・(故)酒井　豊　平成16年／磯角静司・前寺英延　平成17年／神山ツヤ子・士幌消防団第2分団　平成19年／大野憲光　平成21年／坂本道枝　平成22年／士幌交通㈱　平成24年／木谷文彦　平成31年／お茶の間中町・中士幌ふれあいサロン　令和3年／足立良子

▽特別表彰

平成17年／仁科有加那

大臣表彰

1992年(平成4年)以降町民、団体が各部門で関係大臣から表彰を受けたのは次のとおり。(判明しているもののみ)

2001年(平成13年)1月、省庁の再編が行われ名称が変更となっている。

▽農林水産大臣表彰

畜産・平成4年／渡辺一元　研究・平成6年／JA士幌町家畜診療課　畜産・平成6年／加納英章　統計・平成7年／河野富剛　畜産・平成12年／加納昇　畜産・平成16年／古田常雄　統計・平成17年／河合哲二　統計・平成22年／藤内享一

▽法務大臣表彰

保護司・平成5年／酒井信一　保護司・平成6年／玉田禮子　保護司・平成19年／矢野政凱　保護司・平成21年／白木裕一　人権擁護・平成27年／嶋田美代子

▽科学技術庁長官表彰のち文部科学大臣表彰

放射線安全管理・平成6年／亀山研二　教育・平成25年／神野光男　教育・平成26年／力石憲二

▽自治大臣表彰のち総務大臣表彰

統計・平成7年／河野富剛(総務庁長官)　公平委員・平成9年／中尾　有　公平委員・平成13年／大野憲光　統計・平成18年／河合哲二　統計・平成23年／藤内享一　消防・平成26年／金森史公　統計・平成28年／大野准弋　公平委員・平成28年／横山正弘

▽通商産業大臣表彰のち経済産業大臣表彰

工業統計・平成10年／JA士幌町(食品加工)　統計・平成23年／髙下慎一

▽厚生大臣表彰のち厚生労働大臣表彰

民生委員・平成11年／谷本幸枝　民生委員・平成11年／伊藤芳伊　社会福祉・平成11年／有澤武一　国保事業・平成12年／平野春雄　ボランティア・平成13年／真徳寺仏教婦人会　民生委員・平成20年／浅野一男／土生富夫／白木美恵子／平松茂子　国保事業・平成20年／森本辰蔵　民生委員・平成26年／菱沼美和子　援護事業・平成26年／大野准弋　現代の名工・平成27年／北井和雄　民生委員・令和2年／稲葉サチ子

北海道知事表彰

1991年(平成3年)以降で北海道知事表彰を受けたのは次のとおり。(判明しているもののみ)

▽社会貢献賞

平成3年／(納税)堀江嘉照、(統計)藤内亨一、(林野)中島昌昭　平成6年／(統計)土屋高道　平成8年／(福祉)有澤武一、(統計)遠藤弘美　平成9年／(納税)吉田喬一、(統計)中鉢徳司・吉川民義、(農業)加納一郎　平成10年／(統計)嘉藤　稔　平成11年／(国保)森本辰蔵、(自治)小川寅之助、(農業)鈴木広三　平成12年／(国保)大口静夫、(統計)小椋卓・森本晃永・宇佐見輝男　平成13年／(統計)吉田勝　平成17年／(自治)志村光一、(交通安全)篠原昇好　平成19年／(青少年問題)原尾進　平成20年／(自治)鈴木洋一　平成22年／(福祉)千葉公雄　平成23年／(国保)朝井康子　平成26年／(統計)髙下慎一　平成28年／(自治)士生明美　平成30年／(自治)大西米明　平成31年／(自治)清水秀雄　令和元年／(社会)樋口正寛(社会)稲葉サチ子　令和2年／(社会)松浪浩之　(自治)加納三司

▽産業貢献賞

平成12年／(自治)板垣邦宏、(畜産)多田政行、(畜産)士幌町酪農振興協議会　平成14年／(自治)森本慶一、

（農業機械）岡部睦男　平成24年／（林業）中島康夫　平成25年／（技能）北井和雄　平成26年／（農業）秋間紘一　令和2年／（農業）塚越毅

▽善行賞

平成8年／（交通安全）大西佳子・白木美恵子　平成10年／（交通安全）篠原昇好・重森善之助・津田範之・森本マツ子　平成11年／（自立更生援護）高士真吉　平成12年／（交通安全）大槻フサ子　平成16年／（交通安全）木下邦夫・岩舘マサ、（福祉）遠藤弘美　平成17年／（福祉）尾形一郎　平成18年／（福祉）小椋喜美子　平成19年／（福祉）多田孝雄・堀江徳雄　平成21年／（福祉）星屋睦子　平成23年／（福祉）片山實　平成28年／（交通安全）吉田　均・品田勝子

黄綬褒章

他の規範となるような技術や事績を有する方

平成29年／北井和雄

藍綬褒賞

平成12年／（保護司）酒井信一　平成22年／（統計）河合哲二　平成25年／（統計）藤内亨一　令和元年／（統計）髙下慎一

紺綬褒賞

公共に対し多額の私財を寄付したものに贈られる紺綬褒賞、近年町内で受賞したものは次のとおり。

平成7年／北海道フーズ㈱、安村志朗　平成9年／北海道フーズ㈱　平成11年／森本清一　平成18年／遠藤定雄　平成20年／加納一郎　平成21年／安村艶子　平成23年／加納みよ子　平成29年／北斗産業㈱　令和2年／加納　舜

開町80周年式典の表彰

町の開町80周年式典が2001年（平成13年）11月総合研修センターで挙行され、町政進展に功績があった人びとに表彰状が贈られた。

■功労者表彰

▽特別功労

安村忠朗（土幌町名誉町民・土幌町農業協同組合名誉会長）

▽自治功労

・町長、町議会議長の職にあり退任された方

町長　小川寅之助

議長　坂本為吉　加納一郎　今田鉄郎

・町議会議員、行政委員会委員で12年以上在職並びに前回表彰を受けられ20年以上在職された方

○30年以上

農業委員　鈴木廣三

○20年以上

町議会議員　中島康夫　鈴木洋一

教育委員　大口静夫　小川辰廣

開町８０周年記念式典

選挙管理委員　三井　勉

農業委員　板垣邦宏　加納一郎

固定資産評価審査委員　石水幸治

○12年以上

議会議員　山田登美雄　鎌田貞次郎　矢坂希一　山中芳美　清水秀雄

教育委員　尾形文夫　鈴木俊道　篠原育子

選挙管理委員　樋口孝夫

公平委員　中尾　有　大野憲光

農業委員　森本慶一　加藤英雄　森本　勝

固定資産評価審査委員　小坂淺一　島田　淳

・法令および町条例に規定する各種委員で20年以上在職並びに前回表彰を受けられ30年または40年以上在職された方

○50年以上

統計調査員　河野富剛

○40年以上

国民健康保険運営協議会委員　平野春雄

統計調査員　山本政行　河合哲二　大野准弋

○30年以上

国民健康保険運営協議会委員　大口静夫

統計調査員　土屋髙道　遠藤弘美　吉川民義　中鉢徳司　嘉藤　稔　小椋　卓　森本晃永　宇佐見輝男

納税貯蓄組合連合会理事

○20年以上

吉田喬一　堀江嘉照

国民健康保険運営協議会委員　森本辰蔵

社会福祉委員　谷本幸枝　伊藤芳伊

農業共済事業運営協議会委員（故）國枝初夫

青少年問題協議会委員　有澤武一

統計調査員　荒井茂雄　森本慶一　久保田勇

納税貯蓄組合連合会理事（故）真柳光雄

▽社会福祉功労

・社会福祉事業に係わる各種役職者等に20年以上在職並びに前回表彰を受けられ30年以上在職された方

○30年以上

保護司　酒井信一

○20年以上

社会福祉協議会会長　有澤武一

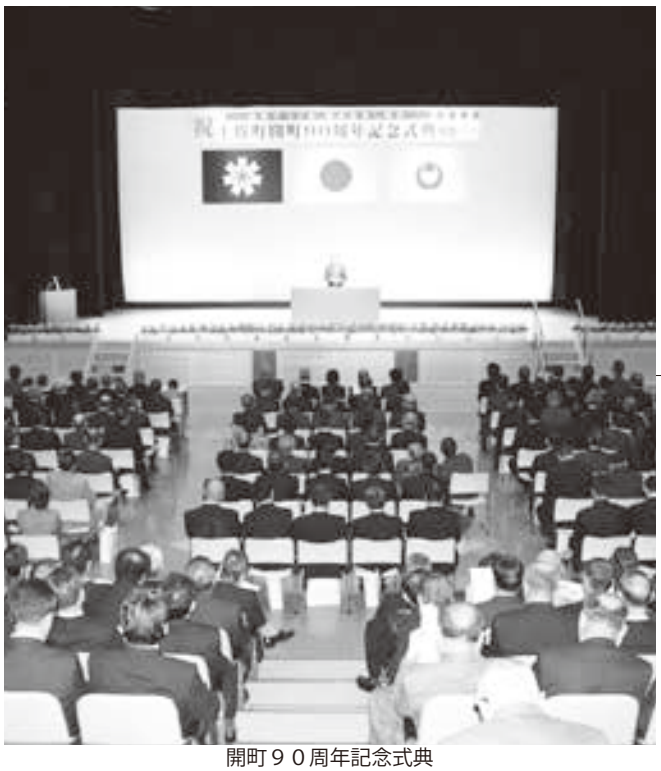
共同募金士幌分会長　有澤武一

▽防災功労
・防災事業に係わる各種役職者等および消防団員として20年以上在職並びに前回表彰を受けられ30年または40年以上在職された方
○40年以上
消防団員　重森善之助
○30年以上
交通安全指導員　髙士イツ子　大西住子　白木美恵子　津田範之　森本マツ子
消防団員　金森史公　原尾　進　佐藤秀勝　北出淳一　牧田光雄　大西米明　杉原憲司　國光政博　大口静夫　西部秀樹　北嶋　孝
○20年以上
交通安全推進委員　篠原昇好
交通安全指導員　松井茂雄　重森善之助　大槻フサ子　木下邦男　岩舘マサ
消防団員　髙士昌弘　有澤忠男　末永秀雄　古屋芳夫　谷本仁志　(故)守屋英男　川崎和範　加藤富雄　酒井信明　尾形憲一　三浦明雄　白木裕一
▽産業功労
・農畜産業、林業、商工業事業に係わる役職者等に20年以上在職された方
農協理事　森本　勝
商工会理事　杉原憲司
■高齢者顕彰(順不同)
80歳以上で、本町に80年以上在住
三浦正作　平野春雄　大野トキ子　栗田孝一　洞田長作　赤間佐智子　佐古實　坪井藤子　中鉢富士雄　瀬口さだを　塩谷　勝　堀江嘉人　大友とりよ　足立まきゑ　市原哲治　加納美佐保　森本武次郎　髙橋三代治　髙橋ヱナヨ　大野保　井尾はなゑ　三島みつ子　三島吉一　加藤好明　土橋治太郎　木原はえ　波多野實　波多野かづゑ　吉田ナミ子　國井與平　國井雪子　山口勝雄　竹迫キミ　服部ゆき　北村ヨネ　安村ちよ子　鎌田　豊　佐々木松太郎　鎌田スイ　成田フジエ　髙橋ハル　岡本クラ　山本　昇　斉藤　渡　佐藤藏治　河村藤市　早坂長吉　河村すへの　堀江嘉照　髙橋與一　髙橋止子　永森俊雄　吉田さわ　佐藤孝一　篠原定義　伊賀志ずゑ　六車實子　林　一郎　鈴木トシエ　伊藤兵太郎　西部きくゑ　瀬戸福治　荒井梅吉　伊藤篤次　足立理三　足立英子　瀬戸　榮　遠藤定雄　船戸銀市　窪田みつ子　佐藤とよ　服部幸子　河合松夫　上杉米市　足立まつ　安藤としゑ　部田菊子　藤原芳之助　杉原はぎよ　(故)西部たけの　佐藤なみ　立山ハツ子　三輪徳市　森嵜　巖　森嵜節子　髙橋　茂　髙橋榮之助　小谷津たつ　松居ふさ　船戸つぎ子　星屋善藏　後藤秋子　仙石ちか子　加藤鶴枝　纐纈富子　大野とき　髙橋武男　守屋さだゑ　沓澤君代　市原信夫　瀬戸幸男　臼井進一　飯島和吉　堀田寅一　田中ミサヲ　田中すへ　樋口よしゑ　波多野ミサヲ　宇佐見武夫　小椋かねよ　長瀬ますゑ　今田まさよ　早坂きよ子　藤村留八　赤間初男　鈴木清孝　大西ヨネ　後藤はきの　宮崎はなゑ　井上まつの　長尾なつ子　黒田すゞ枝　加納きみ　宇佐見誠　後藤ツウ　小川トメ　水上はね子　以上127名

開町90周年式典の表彰

町の開町90周年式典が2011年(平成23年)11月総合研修センターで挙行され、郷土の発展に功績があった人びとに表彰状が贈られた。

■功労者表彰
▽特別功労
鈴木洋一(元士幌町議会議長)
森本　勝(前士幌町農業協同組合代表理事組合長)
▽自治功労
・町議会議長の職にあり退任された方
議長　鈴木洋一　佐古準一
・町議会議員、行政委員会委員で12年以上在職並びに前回表彰を受けられ20年以上在職された方
○20年以上
町議会議員　清水秀雄　大西米明
○12年以上
町議会議員　佐古準一　富田忠雄　志村光一　國井興治　寺町隆男　森本民夫　井原力也　杉原憲司　教育委員　力石憲二　農業委員　二川政義　髙橋正道　大野一郎　千葉公雄　加納康司　平田定之


開町90周年記念式典

選挙管理委員　浅野一男
公平委員　野久一郎
・法令および町条例に規定する各種委員で20年以上在職並びに前回表彰を受けられ30年または40年以上在職された方
○40年以上
統計調査員　藤内享一
国民健康保険運営協議会委員　大口静夫
○30年以上
統計調査員　吉田　勝
農業共済事業損害評価会委員　秋間紘一　飯島眞房
国民健康保険運営協議会委員　森本辰蔵
○20年以上
統計調査員　髙下慎一
農業共済事業損害評価会委員　稲葉正志　高村典久
宮本弘幸　塚越　毅　七條光寛
農業振興基金運用委員会委員　森本　勝
農地保有合理化促進事業基金管理協議会委員　森本勝
農業振興人材育成基金運用委員会委員　森本　勝
太田登美江
国民健康保険運営協議会委員　朝井康子
社会福祉委員　平松茂子
土生富夫　浅野一男　本田光一
社会教育委員　鈴木晃一
大西廉子
体育指導委員　細井文次
吉田　均
▽社会福祉功労
・社会福祉事業に係わる各種役職者等に20年以上在職された方
○20年以上
保護司　白木裕一　玉田禮子　野川真瑞
遺族会　森本辰蔵
カトレアの会　高野紘子
手をつなぐ親の会　星屋睦子　遠藤弘美
▽防災功労
・防災事業に係わる各種役職者等および消防団員として20年以上在職並びに前回表彰を受けられ30年または40年以上在職された方
○40年以上
消防団員　金森史公　大西米明　佐藤秀勝　北出淳一　牧田光雄　西部秀樹
○30年以上
消防団員　髙士昌弘　古屋芳夫　末永秀雄　谷本仁志　酒井信明　尾形憲一
交通安全指導員　木下邦男　岩舘マサ
○20年以上
消防団員　本田光一　田村誠悟　馬場基範　雄塚宏之　吉田　均　中川　敏
寺町雅人　寺田典之
交通安全指導員　本田光一
▽防犯協会理事　白木　登
産業功労
・農畜産業、林業、商工業事業に係わる役職者等に20年以上在職された方並びに前回表彰を受けられ30年以上在職された方
○30年以上
農協理事　森本　勝
○20年以上
森林組合理事　中島康夫
■高齢者顕彰(順不同)
本町に90年以上在住し、90歳以上の方
大野トキ子　洞田長作
堀江嘉人　木原はえ　波多野かづゑ　鎌田スイ　髙橋止子　佐藤孝一　遠藤定雄
瀬口さだを　後藤秋子
纐纈富子　市原信夫　加藤好明　加納きみ　國井雪子
山本　昇　(故)小谷津たつ　黒田すゞ枝　瀬戸　榮
赤間佐智子　(故)三島みつ子　波多野實　吉田ナミ子　成田フジエ　吉田さわ
六車實子　河合松夫　立山ハツ子　加藤鶴枝　沓澤君代　瀬戸幸男　小川トメ
加納美佐保　(故)髙橋ハル　佐藤とよ　船戸つぎ子
服部ゆき

開町100周年式典の表彰

町の開町100周年式典が2021年(令和3年)11月総合研修センターで挙行され、郷土の発展に功績があった人びとに表彰状が贈られた。

■功労者表彰
▽特別功労
・多年にわたり町内外の各種公職をはじめ多くの要職にあって、地域社会の振興並びに町政進展に貢献された者
(故)髙橋正道(元士幌町農業協同組合代表理事組合長)
杉原憲司(元士幌町商工会会長・元士幌消防団長)
・現在、全道全国の機関団体で大きな役職を担っている者
池本柳次(北海道議会議員)
篠原末治(ホクレン農業協同組合連合会代表理事会長)
松山幸雄(一般社団法人日本家畜商協会会長)
▽自治功労
・町議会議長の職にあり退任された方
議長　加納三司
・町議会議員、行政委員会委員で12年以上在職並びに前回表彰を受けられ20年以上在職された方
○20年以上
町議会議員　清水秀雄
大西米明
○12年以上
町議会議員　和田鶴三
加納三司　秋間紘一　加藤宏一　細井文次　服部悦朗
出村　寛
教育委員　宮本勢津子
選挙管理委員　河江信一
佐藤秀勝　白木裕一
公平委員　横山正弘　加藤弘子
農業委員　渡邊睦実
固定資産評価審査委員
吉田孝章　杉山　誠

・法令および町条例に規定する各種委員で20年以上在職並びに前回表彰を受けられ30年以上在職された方
○30年以上
社会教育委員　大西廉子
国民健康保険運営協議会委員　大口靜夫
社会福祉委員　本田光一
スポーツ推進委員　吉田均
統計調査員　大野准弐
髙下慎一
○20年以上
社会教育委員（故）國井美佐子　加納利春
国民健康保険運営協議会委員　神山裕充
社会福祉委員　樋口正寛
菱沼美和子　稲葉サチ子
損害評価会委員　久保武美
町民会議委員　金森史公
スポーツ推進委員　古川幸郎　時光宏三　名波香代子　宇佐見豊文
▽社会福祉功労
・社会福祉事業に係わる各種役職者等に20年以上在職並びに前回表彰を受けられ30年以上在職された方
○30年以上
保護司　白木裕一　野川真瑞
○20年以上
遺族会　大野准弐　浪内一洋
温真会　松浪浩之
▽防災功労
・防災事業に係わる各種役職者等及び消防団員として20年以上在職並びに前回表彰を受けられ30年以上在職された方
○30年以上
消防団員　大西米明　佐藤秀勝　髙士昌弘　末永秀雄　谷本仁志　古屋芳夫　遊塚宏之　馬場基範　田村誠悟　寺町雅人　吉田均
本田光一　中川敏
交通安全指導員　木下邦男　本田光一
○20年以上
消防団員　井上始　森本悦淑　矢野雅樹　渡部雅晴　森本耕二　小川秀樹　中波俊一　今木教雄　朝井宏嗣　船戸勝博　力石和彦　加藤和宏　中川豊　杉原勝人　伊賀和弘　久保田裕一　兼山和浩　三島敦
交通安全指導員　吉田均　長平和子　品田勝子

■高齢者顕彰
本町に１００年以上在住し、１００歳以上の方
赤間佐智子　髙橋止子

しめやかに公葬

町の公葬規定（規準）により或いはこれに準じて行われた公葬は次のとおりである。（平成４年以降）

◇後藤辰雄
町民葬（平成７年２月）
昭和16年士幌村役場に奉職、以来、産業、総務、税務、企画の各課長、教育委員会次長など経て昭和42年に助役に就任、更に昭和51年には推されて士幌町長に当選、約７年間町のトップリーダーとして町の発展振興に尽力された。

◇佐藤国夫
町議会議員会上居辺地区合同葬（平成８年１月）
１９９５年（平成７年）５月町議会議員となり、建設厚生常任委員会委員として地方自治の進展に活躍中、任期半ばにして病に倒れ急逝された。地域でも多くの役職を歴任その死が悼まれた。

◇伊藤豊蔵
町民葬（平成９年９月）
昭和30年から５期20年間、村、町議会議員（内副議長５年）の職にあり、また社会教育委員として24年（内委員長16年）、農業委員、国保運営協議会委員等の要職を重ね地方自治に多大な貢献、その他社会福祉協議会役員、老人クラブ連合会では、士幌、十勝の会長、道連の副会長をつとめ幅広い活動で多大の尽力をつくした。

◇井尾一男
町民葬（平成10年４月）
１９５１年（昭和26年）から１期４年間村議会議員をつとめ終戦直後の混迷した時代背景の中、村政の振興、発展に寄与、また民生委員として27年間（内10年副総務）、選挙管理委員会委員12年（旧委員長職務代理８年）、更に社会福祉協議会、老人クラブ連合会、農業共済組合の各役員、納税貯蓄組合長として地域社会の福祉増進に献身的な活動を果たした。

◇安村順七
士幌町行政機関合同葬（平成14年10月）
昭和28年士幌村役場に奉職、以来、農林、農業共済、建設、企画の各課長、収入役など経て平成10年助役に就任、町長の良き女房役として活躍された。特に農政関係に手腕を発揮され、全国に誇る本町農業の近代化に尽力された。

◇成田吉信
町関係機関・団体合同葬（平成17年４月）
平成11年５月町議会議員となり地方自治の進展に活躍、農業委員会会長、士幌高校振興会会長など地域でも多くの役職を歴任、任期半ばにして病に倒れ急逝された。

◇高橋寿顕
士幌町議会議員会・清澄常会合同葬（平成19年９月）
平成19年５月町議会議員

となり、産業厚生常任委員会副委員長として地方自治の進展に活躍中、任期半ばにして不慮の事故により亡くなられた。

◇安村志朗

士幌町・士幌町農業協同組合合同葬(平成21年2月)

昭和13年士幌産業組合に奉職、以来、士幌村農協参事、専務理事に就任。故太田寛一組合長のもとで澱粉工場や食品工場建設を手掛け、付加価値農業による農家経済の安定に寄与された。昭和57年から組合長、会長理事、名誉会長を務められた。平成7年には士幌町名誉町民に推挙された。

◇飯島和吉

町葬(平成21年5月)

昭和34年士幌村議会議員に当選、以来、5期19年間議員として在職、その間昭和54年議長に就任。昭和57年には士幌町長に当選、1期4年を全うされた。平成5年には勲五等双光旭日章を授与、平成7年には士幌町名誉町民に推挙された。

◇加納一郎

町葬(平成22年5月)

昭和47年から農業委員会委員として22年10か月農業行政に参画、この間会長職務代理者、会長に就任、昭和54年5月には士幌町議会議員に当選、以来4期16年の長きに亘り議会議員として活躍、平成3年には議長にも就任した。平成17年には士幌町名誉町民に推挙された。

◇小川寅之助

町葬(平成23年8月)

昭和26年士幌村役場に奉職、若くして産業課長・総務課長などの要職を歴任、昭和44年に教育長に就任、昭和51年2月には助役に就任、昭和61年12月には、第13代士幌町長に就任、以来、平成10年12月までの3期12年の長きに亘り在職し、「緑豊かな田園農村づくり」を基本理念に、日夜分かたぬ町づくりを展開された。平成17年には士幌町名誉町民に推挙された。

第三編　農林業

SHIHORO

100th Anniversary

第一章 農　業

1、農業経営

拡大する経営規模

農家数が年々減少し、1990年(平成2年)には517戸あった農家戸数も2015年(平成27年)には361戸となった。特に兼業農家が少なくなったことから専業化率が上昇し専業農家の割合は、93%になった。(表－1、図－1参照)

2020年(令和2年)度における農家戸数は360戸(町産業振興課調べ)となっている。

一戸平均の経営面積も2015年(平成27年)度で42・3ヘクタールとなり、1990年(平成2年)度より12・7ヘクタール増加、91%の農家が20ヘクタール以上の経営面積となってい

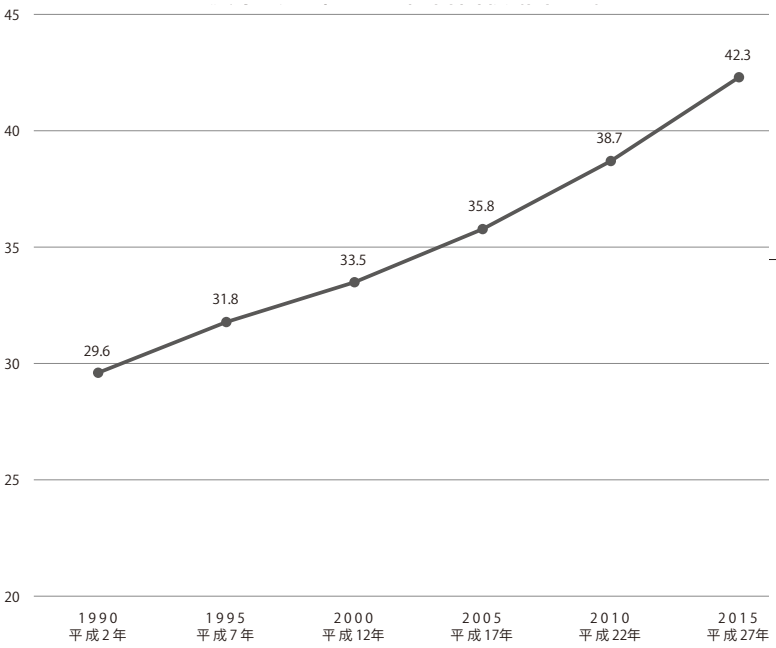
表－1　経営耕地規模別農家戸数の変化

区分＼年度		1990(平成2年)	1995(平成7年)	2000(平成12年)	2005(平成17年)	2010(平成22年)	2015(平成27年)
総農家戸数		517	496	441	414	394	361
専業		(83%) 429	(81%) 404	(77%) 338	(86%) 356	(88%) 346	(91%) 329
1種兼業		76	77	100	55	32	27
2種兼業		12	15	3	3	16	5
経営耕地規模別	1ha未満	9	32	20	13	9	11
	1～5ha未満	18	14	6	10	7	5
	5～10ha未満	15	15	7	5	7	3
	10～20ha未満	51	29	20	12	12	12
	20ha以上	(82%) 424	(82%) 406	(88%) 388	(90%) 374	(91%) 359	(91%) 330
離農戸数		S61～H2 14	H3～7 21	H8～12 55	H13～17 27	H18～22 20	H23～27 33

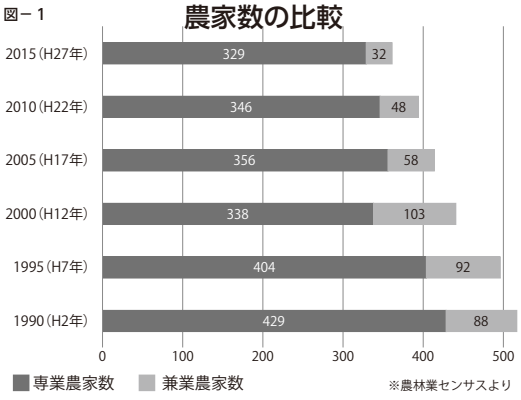
※農林業センサスより

図－2　農家1戸当たりの経営面積　(単位：ha)

※農林業センサスからより



図－1　農家数の比較



※農林業センサスより

る。（図－２参照）

経営規模の拡大に伴い、農業産出額も増えており、１９９０年（平成２年）には耕畜併せて１６５億円が２０１９年（令和元年）には約１・６倍の２６７億円となっている。（図－３参照）

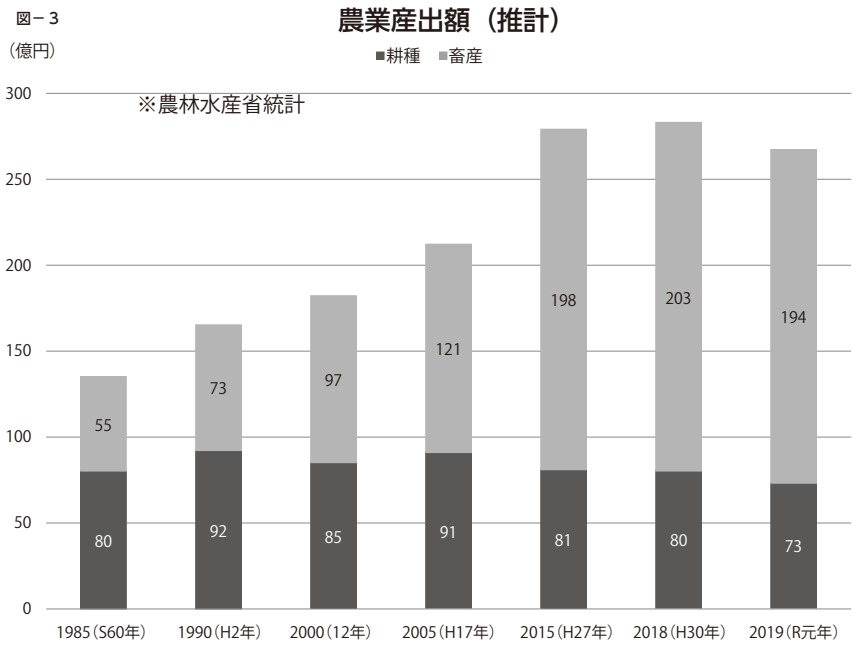
健闘する農家経済

主要農産物の価格は、国の施策や国際的環境によって大きく左右される。本町畑作農家の主要作物となっている、小麦、馬鈴しょ、てん菜や、酪農家に影響をおよぼす乳価などに大きく影響を受けている。

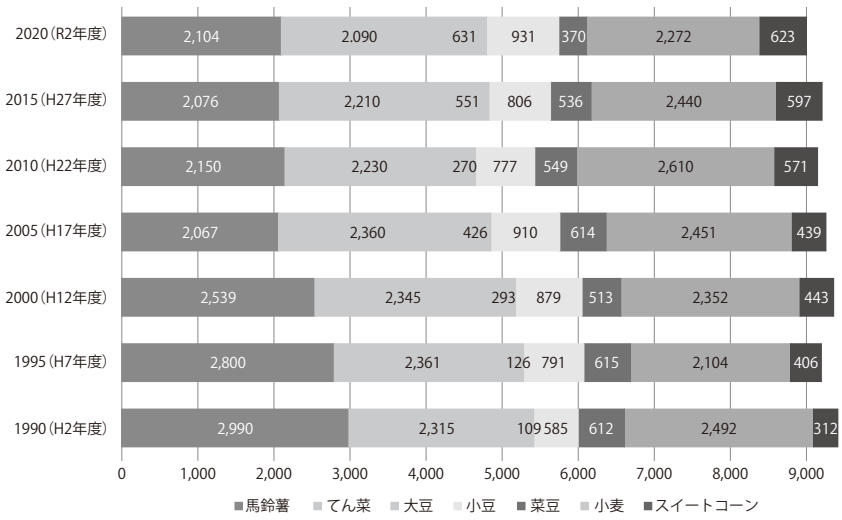
近年では、日豪ＥＰＡ（平成27年）・ＴＰＰ11（平成30年）、日欧ＥＰＡ（令和元年）などの経済協定や２０１０年（平成22年）農業者個別所得補償制度、２０１３年（平成25年）経営所得安定対策制度など農業を取り巻く環境は厳しさが増す中、農家は規模拡大、コストの引き下げ、技術の向上を図りながら経営の防衛に努めた。（表－２参照）

農家経済の動向を見ると、農業産出額（図－３参照）は

図－３



図－５



表－２

主要農産物の行政価格の推移

（単位：円）

区分		単位	適用期間	S 60	H 2	H 7	H 12	H 17	H 22	H 27	H 28	H 29	H 30	R 1
小麦	政府買入価格	60 kg	年産	11,092	9,223	9,110	8,824	7,197	・平成 19 年から水田・畑作経営所得安定対策に移行					
	麦作経営安定資金						6,463	6,650	・平成 23 年から農業者戸別所得補償制度に移行					
	関連対策①								・平成 25 年産から経営所得安定対策に移行					
	〃 ②													
大豆	基準価格	60 kg	年産	17,210	14,397	14,218			・平成 7 年産までは「大豆なたね交付金暫定措置法」に基づく価格					
	交付金単価						8,350	8,020	・平成 12 年産から「大豆交付金暫定措置法」に基づく交付金単価					
	関連対策①						150		・平成 19 年から水田・畑作経営所得安定対策に移行					
	〃 ②								・平成 23 年から農業者戸別所得補償制度に移行					
	〃 ③							300	・平成 25 年産から経営所得安定対策に移行					
	〃 ④							1,000						
馬鈴しょ	原料基準価格	1 t	年産	17,480	14,600	14,410	13,960	13,640	・平成 19 年から原料基準価格は廃止					
	関連対策						110	450	・平成 19 年から水田・畑作経営所得安定対策に移行					
									・平成 23 年から農業者戸別所得補償制度に移行					
									・平成 25 年産から経営所得安定対策に移行					
てん菜	最低生産者価格	1 t	年産	20,260	17,530	17,310	17,040	16,640	・平成 19 年から水田・畑作経営所得安定対策に移行					
	奨励金			760					・平成 23 年から農業者戸別所得補償制度に移行					
	関連対策				190	190	130	550	・平成 25 年産から経営所得安定対策に移行					
食用馬鈴しょ	保証基準価格	1 kg	10～12月	84.00	75.50	75.50	75.50	79.50	79.50	79.50	87.00	87.00	83.00	83.00
			1～3月										93.50	93.50
加工原料乳	保証価格	1 kg	会計年度	90.07	77.75	75.75	72.13							
	（安定基準価格）			70.17	65.98	64.26	61.83							
	加工原料乳補給金単価											10.56	8.23	8.31
	脱脂粉乳・バター							10.40	11.85	12.90	12.69			
	生クリーム等													
	チーズ									15.53	15.28			
									・平成 13 年度から、新たに加工原料乳生産者補給金制度に移行、補給金単価のみ決定					
									・平成 29 年度から、生クリーム等液状乳製品向けを追加、単価を一本化					
									・平成 30 年度から、「加工原料乳生産者補給金等暫定措置法」を廃止、恒久法として					
									「畜産経営の安定に関する法律」を改正、生産者交付金を交付					
乳用雄子牛	保証基準価格	1 頭	改定時以降	134,000	165,000	157,000								
	交雑種						175,000	175,000	181,000	199,000	205,000	210,000	216,000	274,000
	乳用種						131,000	110,000	116,000	130,000	133,000	136,000	141,000	164,000

大きく伸びてきており、2018年(平成30年)の農業産出額は283億7千万円(2020十勝の農業資料編　令和3年1月北海道十勝総合振興局)で帯広市を含めた十勝管内の市町村で上位3番目の額(耕種・畜産)となっており、生産者、指導者の努力の結果と見ることができる。(図－4参考)

本町の畑作は主要4作目(小麦、馬鈴しょ、てん菜、豆類)の輪作体型で経営されてきたが、1985年(昭和60年)にスイートコーンを導入したのをはじめ、1990年(平成2年)には、一部の農家ではあるが、ながいも、にんじん、玉ねぎを、1992年(平成4年)には、キャベツ、長ねぎが、また、2003年(平成15年)にはブロッコリーが導入され第5の作目として注目されているが、キャベツについては2016年(平成28年)以降、作付けは行われていない。価格の変動等も多く作付け戸数はスイートコーンを除き多くはない。(表－3、図－5参照)

麦作集団

地力維持作物として秋まき小麦が大々的に導入され集団共同化による運営が実施されてから50数年が経過した。町内全地区で11の麦作組合が結成され、集団ごとに3～5台のコンバインを所有し、全町で2500ヘクタール以上の小麦生産に取り組んでいたが、2014年(平成26年)からは2500ヘクタールを下回り、2020年(令和2年)度では、2200ヘクタールとなっている。

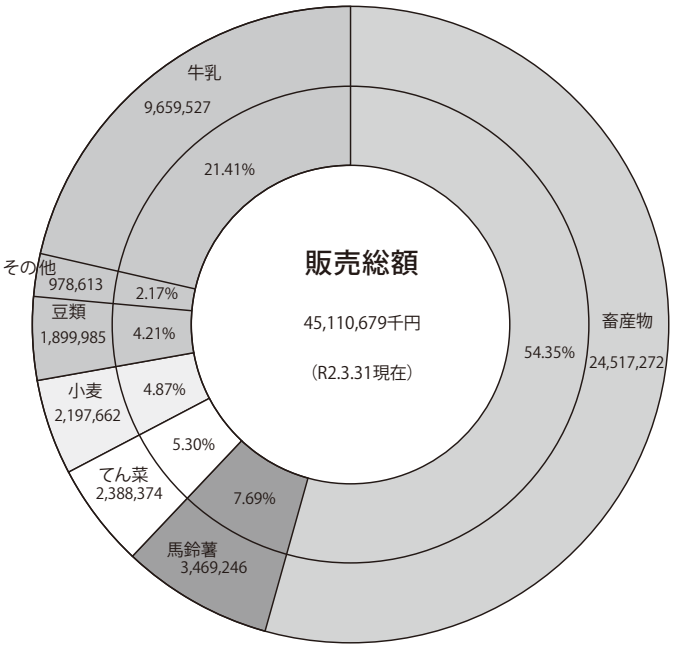
全組合参加による士幌町麦作連絡協議会(麦連協)を組織して組合間の事業や運営の推進調整を図る一方、品種の更新2009年(平成21年)から「ホクシン」に替えて「きたほなみ」を導入、2011年(平成23年)から全面積「きたほなみ」に移行したが、2013年(平成25年)に一部の地域で「ゆめちから」を導入したものの、2019年(令和元年)全面積「きたほなみ」となった。(表－4参照)

また、収穫物の受入基準を定めるほか、農協の乾燥施設での受入作業にも従事している。

小麦の収穫(刈取り)は短期間に集中するため、刈取り時に長雨が続くと穂発芽が発生し多くの量が規格外品となって商品価値がなくなるが、集団ごとのプール計算で平等の取り扱いとしている。

図－4

種目別販売額



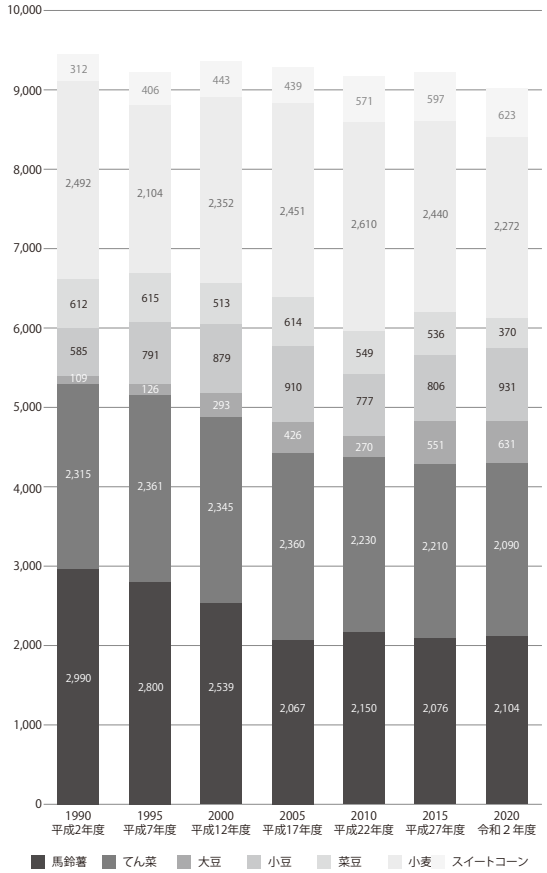
表－3

新しい作目の導入

作物名	導入年度	平成11年度実績	平成21年度実績	令和元年度実績
		作付面積（ha）		
スイートコーン	昭60	468.7	554.9	662.6
ながいも	平2	34.9	47.8	36.3
にんじん	平2	129.5	93.1	46.4
玉ねぎ	平2	24.1	25.7	25.6
キャベツ	平4	43.1	9.6	－
長ねぎ	平4	24.1	2.2	2.1
ブロッコリー	平15	－	9.1	6.6

図－5

主要畑作物作付の変遷　(単位：ha、kg/10a)



表－4

面積と総収量の推移

年度		1990（H 2年）	1995（H 7年）		2000（H 12年）	2005（H 17年）		2010（H 22年）			2015（H 27年）			2020（R 2年）	
品種等		チホク	チホク	タクネ	ホクシン	ホクシン		ホクシン	きたほなみ		ゆめちから	きたほなみ		きたほなみ	
					一般	種子	一般	一般	一般	種子	一般	一般	種子	一般	種子
町内	総反収（kg）	495	404	252	465	593	603	356	415	472	668	755	773	599	631
	規格内反収	7.22	4.61	3.19	7.14	8.12	8.30	4.26	5.11	5.95	9.83	11.98	12.43	9.05	9.79
	規格外反収	1.02	2.12	1.01	0.61	1.77	1.75	1.67	1.80	1.92	1.31	0.60	0.45	0.94	0.74
	歩留	87.50	68.50	76.00	92.10	82.00	82.60	71.82	73.98	75.58	88.24	95.25	96.52	90.57	93.01
	面積（ha）	2,444	2,071		2,331	2,372		2,546			2,391			2,204	

過去に何回も穂発芽被害で大きな損害がでているが、各組合とも、処理能力の高いコンバインへの切換えと、予備乾燥施設の設置を図り、被害を最小限に食い止める努力をしている。

麦連協は２０００年（平成12年）2月創立30周年を迎え、記念誌「麦心」を発行し、記念行事を行った。２０２０年（令和2年）2月には、創立50周年記念式典を開催し、同年6月に記念誌「麦輝」を発行している。

▽歴代麦作連絡協議会会長（平成3年以降）

平成3年～6年／清水秀雄
平成7年～9年／大野准弋
平成10年～11年／神野春夫
平成12年～13年／三木信彦
平成14年～15年／横山克己
平成16年～18年／川上明伸
平成19年～21年／市原照義
平成22年～23年／中島邦康
平成24年～25年／三島孝二
平成26年～27年／中山康博
平成28年～30年／加納利男
令和元年～現在／中島直行

豊作と凶作

毎年の出来秋をみて、農家は「一喜一憂」をくり返しているが、冷害に強い安定作物の導入や農業技術の向上などにより、過去にあったような全作物が全滅に近い被害を受ける状況は激減した。

しかし、年によっては異常気象に見舞われ、大きな被害を受けることもあり、近年では１９９３年（平成5年）に春先からの低温、多雨、日照不足と秋の降霜で特に豆類を中心に大きな被害となった。町は、「冷害対策本部」を設置し、①救農土木工事、②天災資金融資、③共済金前払利子補給、④再生産種子購入助成、⑤飼料購入助成、⑥営農資金利子補給等の諸対策を、講じた。

平成５年冷夏（８月１０日、まだ開花しない小豆）

１９９６年（平成8年）には、5月の2度にわたる降雪と、それ以降の低温続きで生育期の作物に障害がでて、その後の多雨と極端な日照不足が重なるなど各作物に異常な冷湿害をもたらした。

この年は、4月から低温で推移し、5月の降雪後月末に30度を超える日もあったがその後は平年以下の気温で推移、日照時間も「ゼロ」の日が多く平年の40％という状況であった。町は、「異常気象対策協議会」を設置して諸対策を講じた。

２００３年（平成15年）豆類は春先からの低温、日照不足の影響で生育が遅れているところに降霜により大豆・小豆の収量減、品質の低下をもたらし、金時類についても色流れの被害が著しい年となった。

２００４年（平成16年）春先から比較的高めの気温と好天に恵まれ、干ばつ傾向ながらも周期的な降雨もあり、各農作物で平年以上の収量が確保され、3年連続の豊作となり、農業産出額は過去最高を記録した。

２００９年（平成21年）には小麦が6月中旬以降の降雨、低温、日照不足により生育が停滞し、7月も降雨量が多く収穫前から穂発芽などの品質低下が見られ、最終的には収量、品質ともに平年を大きく下回った。この年は、畑作物も同様な天候に悩まされ、全品種に大きな被害が出た。

さらに、２０１０年（平成22年）は春先からの低温多雨、6月中旬以降は記録的な高温・多湿、局地的な集中豪雨など天候不順の影響を受け2年連続の被害の多い年となった。

２０１５年（平成27年）は、部分的な被害はあったが、甚大な被害もなく過去最高の収穫となった。

２０１６年（平成28年）は、6月からの降雨、曇天、低温により生育の停滞、台風の上陸による倒伏、大雨の影響による停滞水により作業の遅延や品質低下を誘発した。11月には観測史上

最も早い積雪に見舞われ、町では「士幌町異常気象農業災害対策本部」を設置し、関係職員による馬鈴しょ収穫支援緊急対策(手拾い収穫)をはじめ支援対策を講じた。

２０１７年(平成29年)は２０１５年(平成27年)の大豊作に肉薄する豊穣の出来秋になった。

災害に対する農業共済事業の対応は、１９９３年(平成５年)で畑作物共済金、４億９千万円、１９９６年(平成８年)では小麦の穂発芽を中心とした被害に３億５千万円、畑作物では２億２千万円、２００３年(平成15年)で畑作物共済金３億１千万円、２００９年(平成21年)には小麦の被害に５億３千万円、畑作物では２億３千万円、２０１０年(平成22年)では小麦の被害に５億円、畑作物は、４億９千万円、２０１６年(平成28年)では小麦で６億５千万円、畑作物で２億７千万円の共済金支払額となったが、それぞれ年内支払を行い、農家経済を大きく支えた。

2、基盤整備

更に進む農村近代化

本町は早くから国、道の直轄事業や農業構造改善事業などの補助事業を多く取り入れ農村近代化を図ってきたが、ここ30年更に多くの事業に公共投資を行い農村近代化を進行させた。

１９９９年(平成11年)度における町決算額の中で、農林業費支出は、30億９千万円にのぼり、全体の27％を占め、１９８９年(平成元年)の農林業費支出額17億円に比べ13億円増加(１・８倍)しており、農業投資に重点が置かれていることが伺える。しかし、２００９年(平成21年)度における町決算額の中の農林業費支出は、20億８千万円で、全体の24％。２０２０年(令和２年)度における町決算額の中での、農林業費支出は、９億３７００万円、全体の12％を占めているが10年間単位で比較すると一時期10億円ずつ減少していた。これは、地方分権に伴う補助金・負担金改革等に伴うものであり、町の財政規模などにより変動するものである。

近代的な農作業風景

１９９０年(平成２年)から１９９９年(平成11年)までの10年間の農林業費決算累計額は、２２１億円となっており、更に同じ10年間に士幌町内で国および道が実施した農林業関係事業費は２１２億円に達し、合わせると年平均43億円強の額が農林業関係の事業に使われている。２０００年(平成12年)から２００９年(平成21年)までの10年間の農林業費決算累計額は、１７７億円で、更に同じ10年間に士幌町内で国および道が実施した農林業関係事業費は１４１億円に達し、合わせると年平均32億円弱の額が農林業関係の事業に使われている。また、２０１０年(平成22年)から２０１９年(令和元年)までの10年間の農林業費決算累計額は、１２０億円となっており、更に同じ10年間に士幌町内で国および道が実施した農林業関係事業費は68億円で、合わせると年平均18億円強の額が農林業関係の事業に使われている。ただし、過去10年と比較すると、年平均10億円強減少している。

◎１９９１年(平成３年)以降に行われた補助事業の主なものは次のとおり。

○農業生産体質強化総合推進対策事業(平成３年で終了)

事業最終年として浅層排水、心土破砕事業のほか、いも類産地再編整備特別対策事業として、フレンチフライ用、ブロック用、チップ用の色彩選別機６台を設置。事業費総額は２億５千万円。

○農業農村活性化農業構造改善モデル事業(士幌西部地区)

このモデル事業では１９９０年(平成２年)度で組合員全戸にファクシミリ設備を導入した他、１９９１年(平成３年)にバラ栽培用水耕ハウス一棟を建設、同４年には北中地区に農村広場建設として管理棟、木道の整備をはかった。

この事業は１９９２年(平成４年)で終わったがこの間の事業費は約３億円となった。

○先進的農業生産総合推進対策事業

１９９２年(平成４年)から６年までの事業で、馬鈴しょ貯蔵庫一棟(７億２千万円)、熟成堆肥製造施設二棟(上居辺　２億１千万円)を１９９２年(平成４年)に建設したのをはじめ、１９９３年(平成５年)にはサラダ製造ライン一式(東松山

市　8億8千万円)、同6年では、コロッケ製造ライン一棟一式を建設した。

○農業農村活性化農業構造改善事業(士幌中央地区)

1990年(平成2年)に指定を受け1995年(平成7年)まで事業が行われた。主な事業として、1991年(平成3年)に農産物加工冷凍食品貯蔵庫(7億9千万円)、1993年(平成5年)度でコロッケ製造施設と同加工設備整備で12億3千万円、マッシュルーム栽培施設を1億6千万円で、更に農林漁業体験実習館(士幌農協記念館)を7億5千万円の事業費により建設した。

○山村振興等農林漁業特別対策事業

1996年(平成8年)からの事業で、8年には、伝統農業保存伝承館(7千万円)を「発祥の地」に建設したほか、佐倉交流センター(5千万円)も完成させた。

10年度事業として、小麦受入乾燥施設を7億1千万円で、また豆類乾燥調整施設を4億3千万円で行っている。

その他農業生産体制強化総合推進対策事業の中で1996年(平成8年)にポテトチップス処理加工ライン一式を3億2千万円で整備し、1998年(平成10年)には、京都府福知山市にポテトサラダ製造処理施設を建設したが事業費は10億4千万円であった。

1998年(平成10年)度で新たに取りあげられた「地域農業基盤確立農業構造改善事業」では原料馬鈴しょ貯蔵庫と農業気象高度利用施設(情報システム)で14億円の事業を行った。原料馬鈴しょ貯蔵庫はこれまでのバラ貯蔵施設とは異なりコンテナのまま貯蔵する冷蔵装置付きの施設でスチールコンテナ9488基とフォークリフト3台も併せて導入している。

また、翌11年度の同事業でも食用馬鈴しょ貯蔵庫(前年事業と同様コンテナ1万464基、フォークリフト3台含む)ポテトスナック製造施設、食用馬鈴しょ選別施設のほか、前年から2年継続事業で行った農業気象高度利用施設(情報システム)などあわせて21億1千万円を投資して事業を実施した。

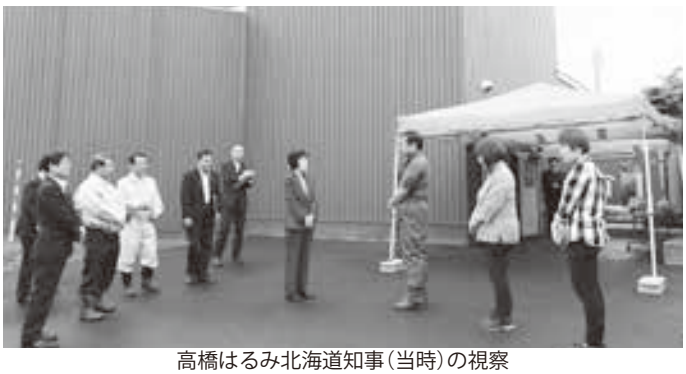
農業基本法第21条に基づいた農業構造政策の中で、1962年(昭和37年)に第1次農業構造改善事業(パイロット事業)としてスタートした本事業は、その後第2次農構、新農構と引継ぎ更に事業名を変えながら延々と1999年(平成11年)まで実施されてきたが、農業生産総合関係事業も含め、土地改良以外の基盤整備に投入した事業資金は279億円となり、内補助金は、134億となった。昭和30年～40年代の貨幣価値を考えると莫大な額である。この農業構造改善事業は、時の政治経済や社会の要求・要望等に対応し名称や内容、手法、予算規模を変えながら展開され、全国ほとんどの市町村がこの事業を導入し、その結果、農業・農村の生産力・生活基盤が整備された。しかし、わが国の食料自給率は大幅に低下し、担い手不足が深刻化し、過疎化が進展してきた。このような事態に対応すべく、これまでの農業基本法にかわり、食料・農業・農村基本法(新農業基本法)が1999年(平成11年)に制定され、農業構造改善事業もなくなり、代わって経営構造対策が2000年(平成12年)から展開されることになった。

○農業生産総合対策事業

2001年(平成13年)には、十勝管内の澱粉工場の再編に伴い、士幌農協澱粉工場の加工処理施設、貯蔵施設、排水処理施設等の整備で事業費87億4千万円、2002年(平成14年)集出荷貯蔵施設の改造には事業費9億6千万円の生産振興総合対策事業を実施した。

○耕畜連携・資源循環総合対策条件整備事業

2003年(平成15年)食品加工の際に出る野菜くずから家畜の飼料等を作るため、食品リサイクル施設の建設に2億1千万円。


高橋はるみ北海道知事(当時)の視察

○バイオマス利活用フロンティア推進事業

2003年(平成15年)バイオガスプラント(2基)消化液散布機(2台)に1億7千万円、2004年(平成16年)バイオガスプラント(1基)に6千万円。

○経営構造対策事業

2004年(平成16年)農産物生産情報管理システム

に1億4千万円。

○強い農業づくり交付金事業

２００７年(平成19年)農畜産物集出荷施設整備に1億3千万円、２００９年(平成21年)スイートコーン加工施設の整備に10億8千万円、スイートコーン収穫機(2台)の導入に5千万円、２０１０年(平成22年)小麦乾燥調製貯蔵施設の整備に21億1千万円、農業用機械(5台)の導入に4千万円、２０１１年(平成23年)食用馬鈴しょ受入検品施設の整備に7千万円、食用馬鈴しょ選果施設整備に4億9千万円、種子用馬鈴しょ選別施設整備に6千万円、２０１３年(平成25年)農業用機械等(20戸：29台)の導入に1億5千万円、２０１４年(平成26年)農業用機械等(16戸：21台)の導入に1億3千万円、２０１５年(平成27年)農業用機械等(30戸：38台)の導入に2億3千万円、２０１６年(平成28年)農業用機械等(2戸：7台)の導入に8千万円、でん粉工場取水施設に2千万円、公共牧場に1億4千万円、２０１７年(平成29年)農業用機械等(3戸：5台)の導入に3千万円、２０１９年(令和元年)種馬鈴しょ集出荷調整に2億2千万円、２０２０年(令和2年)農作業用機械(3戸：9台)の導入に7千万円、大豆バラ受入施設に8千万円

○北海道地域づくり総合交付金事業

２０１２年(平成24年)家畜防疫車整備に2千万円、２０１３年(平成25年)馬鈴しょ集出荷貯蔵施設エチレン供給制御装置整備に3千万円、２０１４年(平成26年)小麦グレードアップ選別機整備に1億5千万円、２０１６年(平成28年)ジャガイモ保管施設加湿装置整備に1千万円、２０１８年(平成30年)豆類自動包装ライン整備に3千万円、乳成分・体細胞数測定装置導入に6千万円、２０２０年(令和2年)豆類色彩選別機改修整備に8千万円

・産地パワーアップ事業

２０１６年(平成28年)馬鈴しょ集出荷貯蔵施設に37億8千万円、２０１７年(平成29年)農業用機械等の導入に6億3千万円

・畑作構造転換事業

２０１８年(平成30年)省力化機械等(42戸：48台)の導入に1億8千万円、２０１９年(令和元年)病害虫抵抗品種の導入に3千万円、豆類の省力栽培に向けた取組に3千万円、２０２０年(令和2年)てん菜の風害・湿害軽減技術の導入に6千万円、病害虫抵抗品種の導入に3千万円、豆類の省力栽培に向けた取組に6千万円、り病率の低い種子の供給に向けた取組に2千万円

・地域経済循環創造事業交付金

２０１９年(令和元年)脱炭素スマートグリッド構築事業に2千万円

畑作土地改良

士幌町は、土地基盤整備事業を早くから実施し、農業生産の向上に努めてきた。

１９９２年(平成4年)以降における、国営・道営・町営による当町内で実施した事業は表－1・表－2のとおりである。

道営土地改良事業では、明渠排水・暗渠排水・石礫除去・農地造成等が含まれ、地域全体の土地条件の整備が行われている。

１９９６年(平成8年)から道は、「21世紀高生産基盤整備促進特別対策事業」(通称～農地パワーアップ事業)を開始した。この事業は、農業の国際化が進む中で、体質の強い農業経営を実現するため、農家が今必要としている生産基盤の整備に積極的に取り組めるよう、農家負担を軽減する特別対策事業で既存の整備事業では事業費の20％程度かかる農家負担を5％とし、従来との差額は道と町が負担する制度となっていた。この事業の対策期間は5年間であったが、その後も5年ごとに継続し、農家負担については、現在7．5％となっている。

国営、道営土地改良（農業基盤整備）事業一覧

表－１

（※総事業費１億円以上の事業）

事業名	地区名	工事期間	総事業費（百万円）	事　業　内　容
国営直轄明渠排水	オピチャ	平６～９	1,694	明渠排水
国営造成施設整備	西士幌	平８～12	2,006	畑かん施設
道営担い手畑総	上居辺	昭59～平14	5,622	明渠排水・農道・暗渠排水・石礫除去・農地造成・区画整理
道営担い手畑総	士幌南	昭62～平16	6,984	明渠排水・農道・暗渠排水・石礫除去
道営担い手畑総	西吉野	昭62～平15	6,396	明渠排水・農道・畑かん・暗渠排水・石礫除去・農地造成 区画整理
道営担い手畑総	上押帯	平元～16	1,650	農道・暗渠排水・石礫除去・農地造成・区画整理
道営担い手畑総	新　田	平８～13	912	農道・区画整理・石礫除去
道営緊急畑総	士幌北部東	平２～５	791	明渠排水・農道・暗渠排水・石礫除去
道営緊急畑総	士幌北部西	平２～５	506	暗渠排水・農道・石礫除去
道営緊急畑総	共　益	平５～12	1,101	農道・暗渠排水・区画整理・石礫除去
道営緊急畑総	西　上	平５～13	1,891	農道・暗渠排水・区画整理・石礫除去
道営緊急畑総	佐倉	平７～13	906	明渠排水・農道・暗渠排水・区画整理・石礫除去
道営明渠排水	士幌東	平３～９	1,026	明渠排水
道営農地開発	上音更	昭62～平13	816	農道・明渠排水・農地造成
道営農地開発	川　西	平３～13	1,498	農道・明渠排水・農地造成
道営農地開発	豊年	平４～12	544	農道・農地造成
道営農地保全	士幌中央	平８～13	282	石礫除去
道営農地保全	士幌西	平９～14	350	石礫除去
道営営農用水	西士幌新田	平10～13	757	営農用水
道営広域農道	十勝北西部	昭62～平10	2,270	西９線24号～40号・40号西９線～西３線
道営基幹農道舗装	第２新田２期	昭63～平４	210	新田５号線
道営開拓地農道	栄　進	平元～７	268	新田６号線、川西西16線
道営広域関連農道	協　進	平９～14	437	基線国道241号～31号
道営農免農道	中音更	平３～10	433	川西西１線30号～35号
道営農免農道	居辺東	平４～13	753	29号東７線～東14線
道営農免農道	中音更２期	平７～14	667	川西西１線35号～38号
道営農免農道	平　和	平６～10	296	基線31号～35号
道営農免農道	新　光	平７～14	735	東６線21号～27号
道営農免農道	富　秋	平11～17	800	西３線13号～21号
道営農道特別対策	西３線	平５～９	428	西３線21号～士幌市街、中央線・21号西２線～西３線
道営農道特別対策	南百戸	平７～10	182	幹線23号～29号
道営農道特別対策	瑞　穂	平10～12	151	20号基線～東３線
道営農道特別対策	豊　進	平９～13	385	西１線15号～21号
道営農地保全	士幌北生	平16～19	165	石礫除去
道営営農用水	西士幌新田２期	平13～18	1,378	営農用水
国営かんがい排水	上音更	平19～24	3,900	明渠排水
国営かんがい排水	富秋士幌川下流域	平24～令４	6,310	明渠排水
国営かんがい排水	士幌西部	平24～令２	4,970	明渠排水
道営担い手畑総	士幌西部北	平16～20	304	暗渠排水・石礫除去
道営担い手畑総	士幌東部	平17～22	1,047	明渠排水・暗渠排水・石礫除去・農道
道営担い手畑総	士幌佐倉	平18～23	705	暗渠排水・石礫除去・農道
道営担い手畑総	士幌南部	平19～23	376	暗渠排水・石礫除去
道営担い手畑総	下居辺	平20～24	582	明渠排水・石礫除去
道営担い手畑総	士幌西部南	平21～25	1,482	暗渠排水・石礫除去・区画整理・農地造成
道営担い手畑総	士幌北部	平23～26	497	客土・暗渠排水・石礫除去
道営担い手畑総	上居辺第２	平24～28	1,218	農道・客土・暗渠排水・石礫除去・区画整理・農地造成
道営担い手畑総	西上第２	平26～30	559	明渠排水・暗渠排水・石礫除去・区画整理
道営担い手畑総	士幌佐倉第２	平27～令１	683	明渠排水・農道・暗渠排水・石礫除去・区画整理
道営担い手畑総	士幌南部第２	平29～令６	1,917	明渠排水・農道・暗渠排水・石礫除去・区画整理
道営担い手畑総	第２下居辺	平30～令５	1,090	暗渠排水・石礫除去・区画整理
道営担い手畑総	士幌川西西	令２～令８	2,278	明渠排水・区画整理・農地造成
道営担い手畑総	士幌川西東北	令３～令７	990	区間整理
道営草地整備	新　田	平24～29	1,069	草地整備改良・草地造成改良・障害物整備 家畜保護施設整備・他
道営農道特別対策	上居辺（柏・柏野）	平30～令４	300	農道
道営通作条件整備	北　中	令２～６	400	農道
道営営農用水	西堀田	平16～20	2,337	営農用水
道営営農用水	士　幌	平27～令２	2,009	営農用水

市町村営土地改良事業一覧

表－2　　（単位：百万円）

施行年度	事業名	事　業　内　容	事業費
昭 63 ～平 6	佐倉地区土地改良総合整備	明渠排水・農道・暗渠排水・石礫除去農地開発・区画整理	605
平元～ 3	西士幌地区土地改良総合整備	農道・石礫除去	115
平 6 ～ 9	共進ふるさと農道	西 1 線 10 号～ 13 号、10 号西 2 線～西 1 線 13 号西 1 ～基線	88
平 5 ～ 6	実勝ふるさと農道	21 号幹線～西 3 線	33
平 5 ～ 6	西居辺ふるさと農道	32 号東 7 線～東 10 線	69
平 9 ～ 11	開運ふるさと農道	28 号東 10 線～東 14 線	130
平 10 ～ 12	西居辺南ふるさと農道	28 号東 7 線～東 9 線	69
平 11 ～ 12	西堀田ふるさと農道	20 号東 4 線～東 5 線	30
平 12 ～ 14	郷愛道営農道特別対策	農　道	288
平 12 ～ 13	開運ふるさと農道	農　道	54
平 13 ～ 14	北開ふるさと農道	農　道	35
平 17 ～ 19	北旭ふるさと農道	農　道	118
平 20 ～ 21	北旭東ふるさと農道	農　道	34
平 20	東雲ふるさと農道	農　道	7
平 21 ～ 22	日進ふるさと農道	農　道	37
平 22 ～ 24	西居辺北ふるさと農道	農　道	90
平 21 ～ 24	実勝第 2 ふるさと農道	農　道	150
平 22 ～ 24	日の出ふるさと農道	農　道	100
平 27 ～ 29	上居辺地区農道整備事業	農　道	103
平 27 ～ 30	中士幌地区農道整備事業	農　道	46
平 27 ～令 1	士幌南地区農道整備事業	農　道	63
令 1 ～ 2	中士幌 20 号西地区農道整備事業	農　道	27
平 29 ～令 1	下居辺地区農地耕作条件改善事業	農　道	424
令 2 ～ 4	士幌南地区農地耕作条件改善事業	明渠排水	280
平 25	農業体質強化基盤整備促進事業	明渠排水	36
平 26	新田地区小規模土地改良事業	明渠排水	23
平 27 ～ 29	新栄地区小規模土地改良事業	明渠排水	70
平 30	新田 2 地区小規模土地改良事業	明渠排水	15
令 1	上居辺地区小規模土地改良事業	明渠排水	10
令 2 ・ 4	士幌南地区小規模土地改良事業	明渠排水	20
令 3	実勝地区小規模土地改良事業	明渠排水	6
平 24 ～ 25	農業体質強化基盤整備促進事業	明渠排水	288

3、農政・農業共済

農業委員会の活動

１９５１年(昭和26年)３月「農業委員会等に関する法律」が公布され、この法律に基づいて設立された農業委員会は、戦後断行された農民開放、農地改革の推進業務を実施していた「農地委員会」を引き継ぎ、農地を守り、有効に活用するための行政委員会として活動している。農業情勢の変化によって業務の重点が移り、また拡大され、その時々の農政の課題を先取りする方向で農地の流動化あっ旋業務、担い手育成等に重要な役割を果たしてきた。

また、町独自の事業として行っている農地保有合理化促進事業では、農用地の合理的な利用集積を図り、均衡のある農地流動化対策を進め、更に優良農地等の適正配分では地区農用地利用調整協議会が農地の貸し手、借り手の掘り起こしとあっせん調整を行い、地区内農地流動化を積極的に図って経営規模拡大に努めている。

１９９９年(平成11年)度のあっせん実績は78件で５１７㌶、２０２０年(令和２年)度で32件、４５２㌶となっている。

委員の定数は、選挙による委員12人と農協理事から推薦する者１人、町議会が推薦する学識経験者１人の計14人で構成されていたが、２０１４年(平成26年)から町議会の推薦が無くなり13人で構成していた。(表－１参照)

２０１５年(平成27年)９月に「農業委員会等に関する法律」の改正により、農業委員の選出方法が公職選挙法に基づく選挙制から、町長が議会の同意を得て任命する任命制となり、２０１６年(平成28年)４月より施行されたことに伴い、定数を13人から地区団体一般公募13人、利害関係を有しない者１人の計14人に改正した。

委員会は毎月１回定例総会を開くほか、２００７年(平成19年)までは、農地・農政・農業後継者対策の３つの小委員会を設置、２００８年(平成20年)からは、議会からの推薦が３人減少したことに伴い、農地・農業振興の二つの小委員会に再編し、きめ細かな活動を行っている。

▽農業委員会会長(平成３年以降)

板垣邦宏(平３・５～５・７)／加藤英雄(平５・７～８・７)／森本慶一(平８・７～14・７)／成田吉信(平14・７～17・４)／二川政義(平17・４～17・７)／井原力也(平17・７～20・７)／山田真人(平20・７～23・７)／赤間敏博(平23・７～26・７)／渡邊睦実(平26・７～令２・７)／森本耕二(令２・７～現在)

農業委員会定期総会

農地集団化事業

士幌町農業委員会では、１９５８年(昭和33年)以降、農業経営の合理化を図るため、農地集団化事業を積極的に実施し、地域全体の安定合理化に大きな役割を果たしてきたが、１９９０年(平成２年)以降の事業実施状況は「農地集団化事業一覧」(表－２参照)のとおりで、

表－１ **農業委員の定数**

年　度	選挙による委員	選任による委員		計
		議会が推薦した委員	農協推薦理事	
1990（H２）	12	4	1	17
1993（H５）	12	5	1	18
1996（H８）	12	4	1	17
1999（H11）	12	5	1	18
2002（H14）	12	5	1	18
2005（H17）	12	4	1	17
2008（H20）	12	1	1	14
2011（H23）	12	1	1	14
2014（H26）	12	—	1	13

※平成27年９月「農業委員会等に関する法律」が改正され公募等により町議会の同意を得て、町長が任命する。

年　度	公募（推薦・応募）	計
2017　（H29）	14	14
2020（令和２）	14	14

表－２ **農地集団化事業一覧**

年　度	地区名	実施面積	受益戸数	移動率	集団化率	受益駐在区
平２～３	佐倉地区	700	36	23.1	40.2	佐倉地区全域
平３～４	下居辺地区	850	48	30.6	36.5	下居辺地区全域
平５～６	士幌北地区	1,000	80	34.7	34.7	士幌北地区全域
平７～８	上居辺地区	1,430.7	110	34.6	33.9	上居辺地区全域
平９～10	中士幌地区	1,000	114	16.5	34.4	中士幌地区全域
平11～12	新田地区	1,000	47	46.3	34.5	新田地区全域
平13～15	士幌南地区	650	89	26.2	36.3	士幌南地区全域
平16～17	川西地区	1,140	41	21.6	41.6	西上・中音更地区全域
平18～19	佐倉地区	650	58	29.1	35.6	佐倉地区全域
平20～21	下居辺地区	750	38	29.7	40.2	下居辺地区全域
平22～23	士幌北地区	600	47	38.5	42.3	士幌北地区全域

※平成24年度以降は実施事業なし

間断なく町内各地区について順次事業が進められていたが、２０１１年(平成23年)の士幌北地区の事業以降は行われていない。

本事業は、全体的な見直しの中で更に検討されることとなっている。

農業後継者と農業者年金

昭和50年代後半まで毎年20人以上いた新規農業後継者(いわゆる農家の跡取り)も、少子化の影響もあって年々減少し、かつての半数以下となっている。

農業担い手育成は、長年、町関係機関が取り組んできているが、士幌高校による農業青年育成のほか農業後継者のパートナー対策に重点を置き推進している。

パートナー対策は、農業後継者結婚推進員会(２０１２年(平成24年)度に農業担い手支援協議会に改称)が主体となって、これまで多くの後継者の結婚を成立させた。

１９９４年(平成６年)度から「北海道すずらんの里交流会」に本町の青年が毎年１～４名参加し、関西女性との交流会の中から、２０１８年(平成30年)の間に８名の後継者を結婚に結びつけた。「北海道すずらんの里交流会」は２０１０年(平成22年)より「北海道十勝農業青年との交流会」へ名称が変更されるとともに、２０１７年(平成29年)から大阪市での開催に代わり十勝での開催となっている。

十勝農業委員会連合会主催で１９９４年(平成６年)に事業を開始した「十勝農業青年と名古屋独身女性の交流会」にも１９９８年(平成10年)度から本町の農業青年が参加し、２００２年(平成14年)に１名、２００８年(平成20年)に１名の後継者を結婚に結びつけたが、名古屋交流会は同年をもって終了した。

農業者年金は、経営を移譲したものに年金を支給する制度として１９７０年(昭和45年)に法制化された。２００２年(平成14年)１月からは「積立方式」を採用する政策年金として生まれ変わった。

１９９９年(平成11年)度における本町の年金加入者は、４２６人で、年金受給者は、移譲年金２６５人、老齢年金31人の、合わせて２９６人が７６００万円余の年金を受給し、２０２０年(令和2年)度では、加入者が２６５人、受給者は２９６人が９千万円余の年金を受給している。

農業振興基金と人材育成基金

１９７３年(昭和48年)農協からの寄付(3億円)を原資として設置した「農業振興基金」は、基金から生ずる果実により、これまで多くの農業振興事業を実施してきたが、とりわけ果実運用の当初から取り進めた農家を主とする海外研修視察は毎年計画的に行われ、１９９１年(平成3年)までに町内農家のほぼ全戸がこの研修に参加するという他に例を見ない事業として注目された。

毎年、農業振興基金運用委員がその年ごとの農業振興上の重点事項を選定し、事業費の配分を行っているが、士幌高校の農業教育振興にも重点配分されていた。２０２０年(令和2年)度末現在の基金残高(特別基金除く)は、約5億円余で、ほかに白老と苫小牧に原野、山林、宅地23㌶を保有している。

◎２０２０年(令和2年)度の基金による事業は次のとおり。

農薬空袋処理事業・農業廃棄物処理事業・基幹作物輪作維持支援事業などで支出総額は、1億1千万円余となった。

１９８４年(昭和59年)、名誉町民故太田寛一(元士幌農協組合長)の生前の意志により、遺族からの寄付金(1億円)を積立て設置した「太田寛一人材育成基金」は、農業振興のための人材を育成する事業に充てるもので、農業振興基金同様果実をもって運営している。事業実施に当たっては、運用委員会において決定しているが、２０２０年(令和2年)度の主な事業としては、アグリ研究グループ活動助成・人材育成団体活動助成(啓明塾)、農協青年・女性部研修講座の3事業で事業費決算額は、１３３万円であった。

なお、近年は低金利により果実収入も減少しているため、農業振興基金による事業も含め、事業件数および事業費が縮小されている。

真価発揮する農業共済事業

１９７４年(昭和49年)農業共済組合から町へ移管した農業共済事業は、１９７９年(昭和54年)度からは、馬鈴しょ・てん菜・豆類が、２００２年(平成14年)度からはスイートコーン・たまねぎが畑作共済として事業に加わり、小麦を含めた本町の主要作目のほとんどが共済制度対象となり、家畜共済事業も合わせ、災害を受けた農家の損失補償と、再生産のため重要な役割を果たしてきた。

共済目的ごとの引受(加入)もほぼ１００％に近く、更

に家畜は補償の選択加入で万一に備えている。

家畜の飼育頭数が年々増加し、共済引受も1995年(平成7年)度で4万頭を、また2004年(平成16年)度から乳牛および肥育牛の子牛共済制度が導入されたことにより5万頭を超え、2012年(平成24年)度の引受実績は6万4518頭に達した。

一方、農畑作物の被害、家畜の事故(死廃・病傷)に対して補償する共済金は、年によって違うが、冷湿害被害を受けた1993年(平成5年)の畑作物共済金4億9千万円、1996年(平成8年)の農作物(小麦)共済金3億5千万円、2003年(平成15年)の畑作物共済金3億1千万円、2009年(平成21年)の農作物(小麦)共済金5億3千万円、翌年には、農作物(小麦)共済金5億円、畑作物共済金3億2千万円余、2016年(平成28年)度では、農作物共済勘定で6億5千万円余、畑作物共済勘定で2億7千万円余、家畜共済勘定

表－3

農畑作物引受（契約）状況

(単位：百万円)

項目			1995 (H 7)	2000 (H12)	2005 (H17)	2010 (H22)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)
農作物（小麦）	加入戸数（戸）	349	311	292	274	260	247	244	242
	引受面積（a）	249,834	210,353	235,200	245,080	260,242	244,189	237,921	235,482
	共済金額（保険加入額）（百万円）	1,176	1,030	1,238	1,709	977	1,262	1,583	1,500
畑作物（てん菜・馬鈴しょ・豆類）	加入戸数（戸）	354	317	287	271	260	252	250	—
	共済金額（保険加入額）（a）	642,780	640,482	605,650	639,615	619,729	647,244	652,946	—
	共済金額（保険加入額）（百万円）	5,148	5,350	4,692	4,882	4,291	5,224	5,451	—
共済金額合計（百万円）			6,380	5,930	6,591	5,268	6,486	7,034	—

表－4

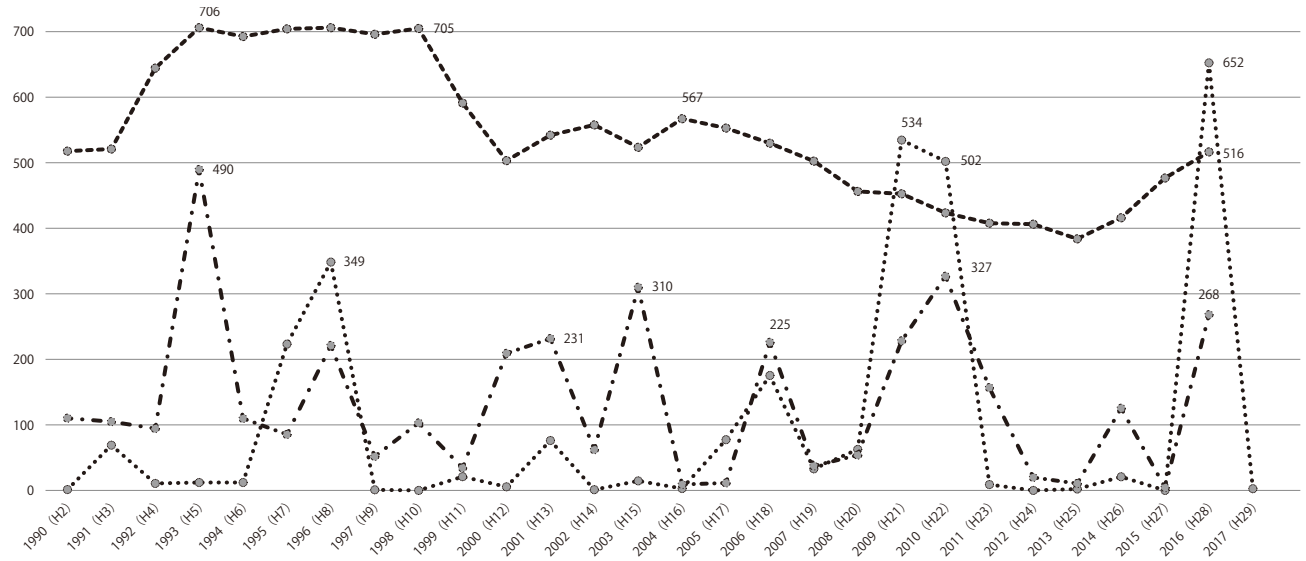
家畜共済引受（加入）状況

		1990 (H 2)	1995 (H 7)	2000 (平 12)	2005 (H17)	2010 (平 22)	2015 (H27)	2016 (H28)
乳用成牛	加入戸数	107	98	93	85	80	69	67
	加入頭数	10,866	13,172	13,641	15,209	14,985	13,981	13,851
	共済金額（百万円）	3,117	4,801	3,174	3,280	2,828	2,403	2,580
乳用子牛等	加入戸数				51	64	56	54
	加入頭数				9,519	13,337	13,602	13,092
	共済金額（百万円）				343	263	358	420
肥育用成牛	加入戸数	36	37	39	30	35	29	30
	加入頭数	17,212	27,382	25,352	27,759	32,208	32,423	32,073
	共済金額（百万円）	3,607	8,081	3,166	4,047	4,353	5,197	6,101
肥育用子牛	加入戸数				6	7	6	6
	加入頭数				1,417	2,106	1,845	1,893
	共済金額（百万円）				69	83	102	149
馬・種畜その他	加入戸数	43	45	32	35	34	23	25
	加入頭数	362	214	148	637	918	815	820
	共済金額（百万円）	176	167	66	111	135	128	155
合　計	加入戸数	163	153	139	123	117	100	101
	加入頭数	28,440	40,768	39,141	54,541	63,554	62,666	61,729
	共済金額（百万円）	6,900	13,049	6,406	7,850	7,662	8,188	9,405

図－1

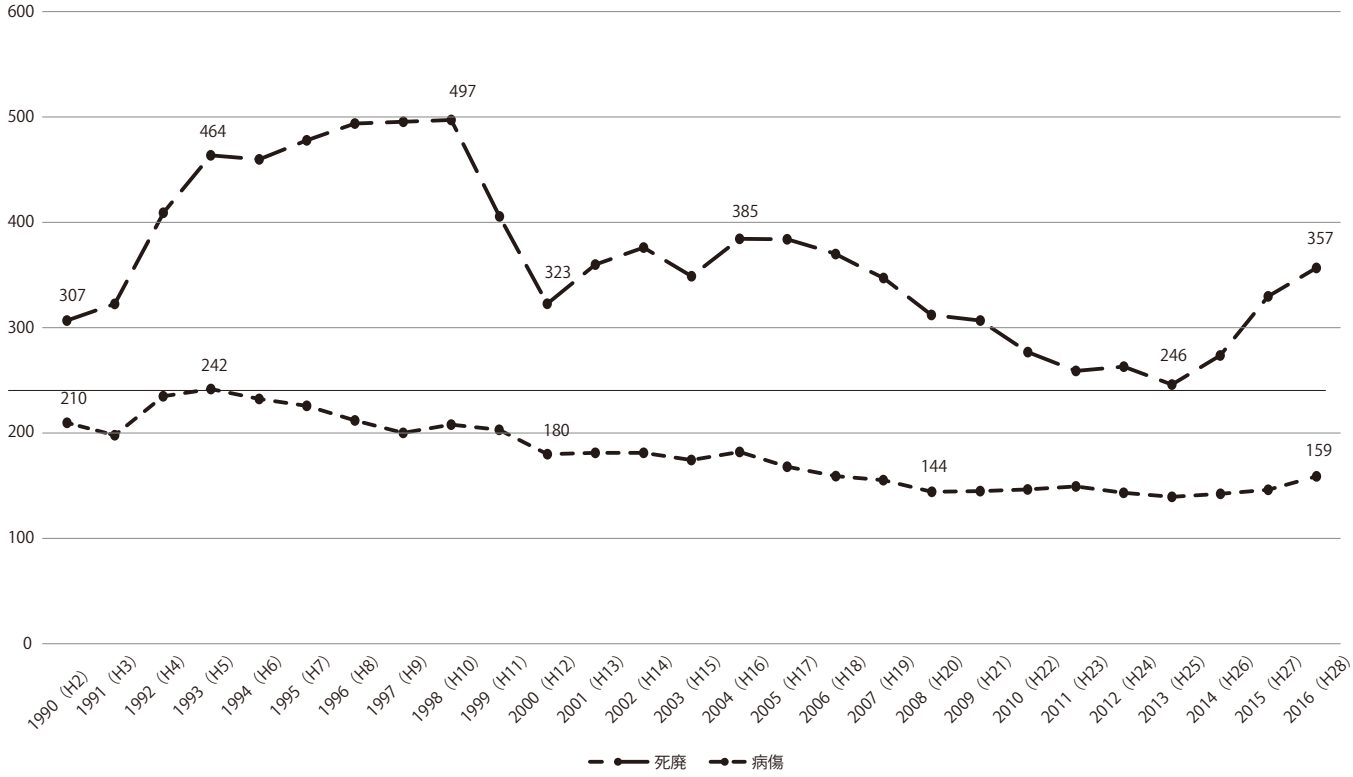
農業共済金事業支払共済金状況

(単位：百万円)



図－2
（百万円）

家畜共済支払内訳（死廃・病傷）



では、3億6千万円余（病傷事故は現物給付として補償）が支払われている。

農業共済組合当時行っていた家畜診療業務は、JA士幌町が担当し、町からの嘱託獣医契約により共済加入畜の診療にあたっている。

しかし、国の農業共済組織の一県一組合化の推進を受け、2017年（平成29年）3月、町営事業としては43年間で幕を下ろすこととなった。（表－3、4・図－1、2参照）

農業共済合併不参加

十勝管内20の農業共済組合を一本化する方向で進められてきた組合の広域合併は、1989年（平成元年）、士幌町のほか、音更町、幕別町、豊頃町の3農業共済組合が不参加の中、16組合で発足し、同年4月から十勝農業共済組合として事業を開始した。

士幌町と3組合は、これまでどおり単独組織として事業を続けてきたが、その後も道、農水省の執拗な合併要請を受けたことから再度検討することとなり、1996年（平成8年）度で十勝農業共済組合、3単独組合と士幌町の5団体による「管内農業共済組合等広域合併検討委員会」を設置して検討に入った。

合併案は、十勝農業共済組合の運営方針に士幌町ほか3組合の条件がどこまで満たされるかを主体に検討が進められたが、特に士幌町が提起してきた農家負担の軽減もしくは現状の維持については、逆に大幅増（事務費賦課金）が見込まれ、農協と一体で進めている奨励事業等も後退する内容であった。町は、1998年（平成10年）4月、農家を対象とした地区別懇談会を開き、検討経過の説明と意見聴取を行ったが、全体的な意見として、条件的に不利となる合併には反対、広域化することで末端のサービスが悪くなるという意見の一方、合併に不参加の場合、国の補助金等が減額され運営上問題はないか、また行政上立場が悪くならないかと心配する声も一部あった。

町は、十勝の合併案と懇談会の意見をもとに、町で設置した、広域合併検討委員会、農業共済事業運営協議会で慎重な検討を行ってきた。その結果、示された合併案では、条件が違いすぎて受け入れることはできないという結論に達し、1998年（平成10年）5月に十勝の検討委員会から離脱した。

士幌を除く4組合は、更に協議を続けてきたが、合併に向けた合意が成立し、1999年（平成11年）2月に合併調印、同年4月から、新しい組合をスタートさせた。

かつて管内に20あった農業共済組合もこれで、1組合1公営事業体となった。

町が農業共済事業を開始した1974年（昭和49年）は道内で10の市町村が農業共済事業を公営で行っていたがそれぞれ広域合併で逆移譲し、本町は北海道で唯一、市町村営で実施していた。

士幌町農業共済事業の廃止

北海道で唯一の市町村営による農業共済として、法令等遵守の徹底を図るとともに、加入者間の公平を図り信頼される農業共済を目指し運営を行ってきたが、２００６年(平成18年)度から市町村農業共済事業の事務費補助金が地方交付税に一般財源化されたことにより、事業運営に危機感を持たざるを得ない状況となった。

２０１０年(平成22年)11月、農林水産省から「１県１組合化の取組の推進」の通知を受け、北海道では、５ブロック化で検討することとなり、２０１１年(平成23年)十勝農業共済組合と「十勝管内農業共済組合組織再編検討協議会」を創設し、協議を行うこととなった。

２０１２年(平成24年)12月に第２段階である再編検討委員会へ移行し、再編後の基本構想案のほか、ＪＡ士幌町が行っている家畜診療の嘱託の継続や、多頭飼育加入者の事務費賦課金負担軽減措置などについて協議を継続していたが、十勝農業共済組合との意見の隔たりが大きく、再編の時期の延長などを行ったが、意見の溝は埋まらず協議が膠着する状態となった。

２０１５年(平成27年)７月に北海道農業共済組合連合会より再編の道筋として、ＪＡ士幌町の家畜診療所を「開業扱い」とする案が打診され、再編の時期を２０１７年(平成29年)３月末を最終期限として協議を続けることとなり、町が農業共済事業を廃止し、十勝農業共済組合が士幌町に区域を拡大し、農業共済事業を引き継ぐこととなった。２０１７年(平成29年)３月27日には、「農業共済事業町営43年を振り返る会」が開催された。

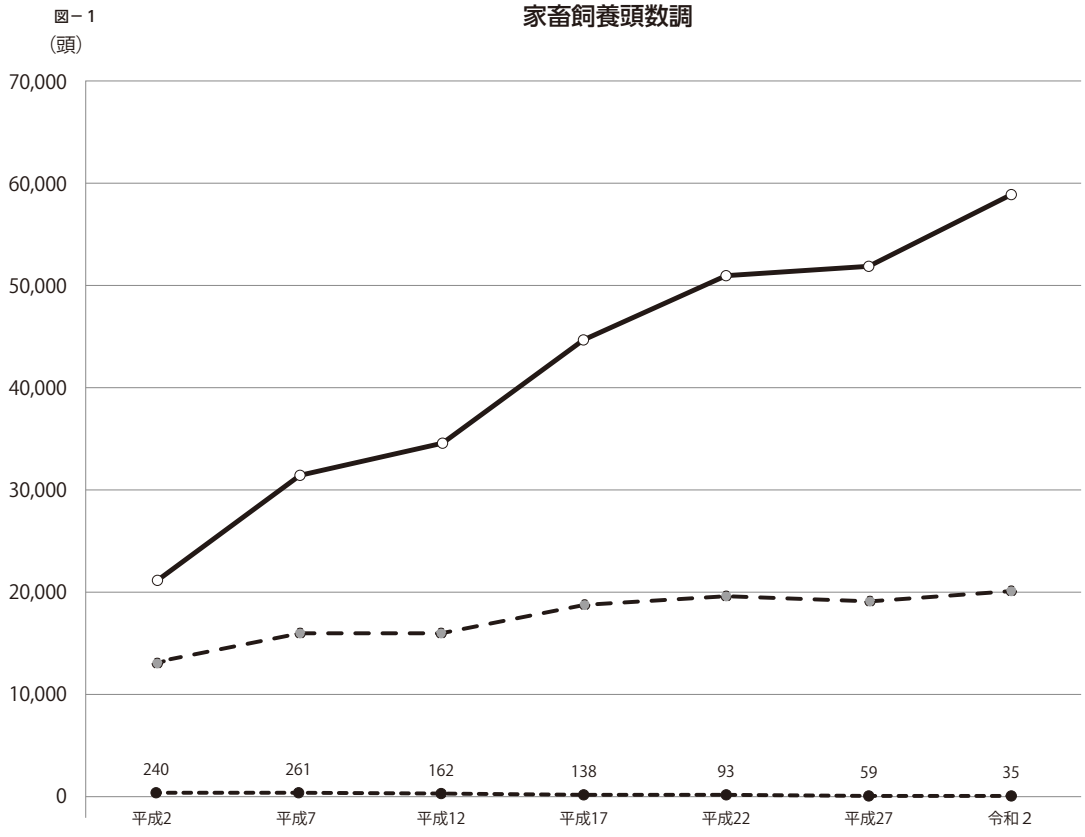
4、畜　産

成長続ける畜産

乳価の値下がりと、牛肉輸入自由化(平成３年)の影響で肉牛価格の低迷、近年では、日豪ＥＰＡ(平成27年)、ＴＰＰ11(平成30年)、日欧ＥＰＡ(令和元年)が続くなど、道内の畜産農家の経営は厳しい状況となっている。

本町の畜産についても同条件下ではあるが、酪農、肉牛経営とも、規模拡大、経営合理化を図りながら成長を続けている。(図－１参照)

図－１



(単位：百万円)

	1990 H２年度	1995 H７年度	2000 H12年度	2005 H17年度	2010 H22年度	2015 H27年度	2020 R２年度
肉用牛	21,093	31,359	34,493	44,849	50,922	51,976	58,999
乳用牛	13,105	15,936	15,961	18,799	19,572	18,954	20,007
馬	240	261	162	138	93	59	35

士幌町の畜産産出額は、１９９８年(平成10年)の農林統計によれば91億に達し、１９９０年(平成２年)の68億円に比べて23億円の増、２００６年(平成18年)の農林統計では、１２４億に達し、１９９０年(平成２年)の68億円に比べて56億円増の１・82倍となった。

２０１８年(平成30年)の農林統計によれば２０３億に達し、２００６年(平成十八年)の１２４億円に比べて79億円増となり、産出額を１戸当たり(２０１５年(平成27年)農林センサス)で見ると、酪農は１億２千万円(十勝平均８４００万円)、肉牛農家１億６千万円(十勝平均５０００万円)と十勝平均の１戸当たり産出額を大きくしのいでいる。

政府が決める加工原料乳保証価格は、１９８５年(昭和60年)１キロ当たり90・07円であったのが、平成に入ってから70円台まで下がった。２００１年(平成13年)度からは、国の定める保証価格と基準取引価格が廃止され、加工原料乳価格は、指定生乳生産者団体と乳業者の交渉により決定され、新しい補給金単価の算出方法は、過去３年の平均生産量、乳量等から算出された変化率を前年度の補給金単価に乗じて算出される。

バイオガスプラント

規模拡大と個体の能力向上により、頭数や生乳生産量が増えているが、１９９３年(平成５年)５月に、士幌町農協は町内生乳生産５万トン、肉牛３万頭達成記念パーティーを農業会館大ホールで開催し更なる飛躍を祈り祝った。また、乳牛飼育頭数の規模拡大による牛舎や設備の拡充増設を行い、２００８年(平成20年)度に１戸当たり牛乳出荷量が１０００トンを超える実績を上げた。

２０１９年(令和元年)の乳価は、１００・84円(ＪＡ士幌町調)、ホクレン農業協同組合連合会帯広支所調では１０１・50円となっている。また、乳牛飼育頭数の規模拡大による牛舎や設備の拡充増設を行い、２０１９年(令和元年)度に１戸当たり牛乳出荷量が１５００トン、１頭当たり１万２００キロを超える実績を上げた。

家畜の糞尿による環境汚染が問題となっているが、国は、１９９９年(平成11年)「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」を制定、同年11月１日から施行となり、畜産業を営む者は堆肥舎等の施設整備を環境防止策として行うことが義務化となった。

本町の場合、酪農、肉牛経営のほとんどの農家がすでに堆肥舎等を設置している。また利用促進については、肉牛施設を中心に周辺畑作農家の土づくりのための堆肥還元を行っている。また、新しい環境対策とエネルギーを考えたバイオガスプラントの広域利用もできないか、士幌高原道路代替振興策の中で検討された。

２００３年(平成15年)からは、地域の課題として、基幹産業である農業の持続的発展を図るには、家畜ふん尿の耕畜連携による適切な処理(堆肥)と農村環境の維持・向上が必要であり、環境問題として地球温暖化(温室効果ガス)対策が必要なことから、モデル実証施設として３基のバイオガスプラントを町が設置、２０１２年(平成24年)ＪＡ士幌町が設置した技術実証施設４基を経て、現在では、町内に13基のバイオガスプラントが稼働している。

酪農経営

酪農の専業化、大型化が進み酪農経営の形態も大きく変化してきた。１９９９年(平成11年)度における本町の搾乳農家は89戸で１万６千頭を超える乳牛を飼養しており、１戸当たり１６０頭。２００９年(平成21年)度における搾乳農家は80戸で、１万９千頭を超える乳牛を飼養しており、１戸当たり２４０頭に及ぶ。

２０１９年(令和元年)度において搾乳農家は63戸と減少したが、１万９千頭を超える乳用牛を飼養しており、１戸当たり３００頭余にも及ぶ。

規模の拡大に伴い、飼養形態、搾乳形態も進歩し、古くから使われていたスタンチョン方式(つなぎ飼い)からフリーストール方式(放し飼い)へ、また搾乳方法もパイプライン方式からミルキングパーラーシステムに変わってきており、また昨今の労働力不足もあり、今では搾乳ロボットも増えてきている。これらを主流とした近代的経営は、労働の省力化、経営の合理化、効率化をもたらしている。

２０００年(平成12年)８月、雪印乳業大阪工場の乳製品による食中毒事件は、その後同乳業大樹工場の原料乳から造られた脱脂粉乳の製造過程で発生した黄色ブドウ球菌が原因であるこ

とが判明し、生乳生産者はじめ農協および関係機関に衝撃を与えた。

国営草地開発

1987年(昭和62年)度に畜産基地建設を完了させ農協のヌプカウシ公共育成牧場の整備を図ったが、1994年(平成6年)度に、新たに国営草地開発事業を開始し、現ヌプカウシ牧場を隣接する形で造成された。国有林770ヘクタールの払い下げを受け、うち400ヘクタール余を草地造成し道路等の付帯事業もからめ総事業費43億円を投入して1999年(平成11年)度で完成した。本町酪農畜産の飼料供給補完的施設として期待される。

この事業の完成で牧場の総面積は、1566ヘクタールとなった。また、この事業は上士幌町の区域にもおよぶため同町の協力も得ながら進められた。

この国営草地開発事業区域の中に士幌高原観光資源の一つとして位置付けられている樹齢800年ともいわれる天然巨木ミズナラが存在していた。この巨木から半径百メートルの区域は草地開発せず周囲のカラマツ林で老大樹を守ると共に老木の治療や保護を含めた保全計画により御神木として保存していたが、2015年(平成27年)老木のため倒れてしまった。

酪農振興組織

搾乳農家の集まりとして組織している酪農振興協議会は、全道、十勝の酪農対策協議会を通じ長年乳価運動や酪農振興に係る活動を続けているが、1995年(平成7年)4月から、別組織であった、乳牛検定組合およびデイリーヘルパー・コーポレーション(酪農ヘルパー組合)と一体化し、効率的な活動を行っている。

乳牛検定事業は、1996年(平成8年)に他に先がけて「AT検定法」の実験的な取り組みを開始し、2000年(平成12年)には「AT検定法」が制度化された。現行の制度下では、搾乳ごとに立ち会いを要していたが、タイマーの設置により、搾乳時間間隔、および各個体ごとの分娩後日数に基づいた補正係数によって1日乳量、日乳脂量を推定する手法で1回の立ち会いで済み、立ち会いに伴う作業と経費の軽減を図り従来と同様のデータが得られる。

タイマー設置に6万5千円の費用を要したが、町とJA士幌町で各1万円補助し、事業を開始した。

酪農労働の軽減対策として、酪農ヘルパー制度が1989年(平成元年)度からスタートし、1990年(平成2年)度では、年間延べ利用が635人日だったが、2019年(令和元年)度の活用は全体で4877人日を利用している。(表－1参照)

表－1　酪農ヘルパー活用実績の推移（内訳）

(平成11年度)

目的	レジャー	傷病事業	研修	葬儀	結婚	定休日	傷病	出産	割当	その他
人口	407.5	333.5	190.5	103.0	68.5	64.0	62.0	36.5	13.0	312.0
割合（%）	25.6	21.0	12.0	6.5	4.3	4.0	3.9	2.3	0.8	19.6

(平成21年度)

目的	レジャー	傷病	傷事業	研修	葬儀	農作業	農休日	結婚	出産	割当	その他
人口	268.0	103.3	563.3	467.5	38.5	47.0	446.0	82.0	5.0	10.0	155.0
割合（%）	12.3	4.7	25.8	21.4	1.7	2.1	20.4	3.6	0.3	0.6	7.1

(令和元年度)

目的	レジャー	傷病	傷事業	研修	葬儀	農作業	農休日	結婚	出産	割当	欠員	従業員休	その他
人口	217.5	365.25	392.75	507.5	81.0	320.5	1,543.5	15.0	1.0	2.0	654.0	697.5	80.0
割合（%）	4.5	7.5	8.1	10.4	1.7	6.6	31.6	0.3	0.0	0.0	13.4	14.3	1.6

・士幌町酪農振興協議会会長
宇佐見庸夫(現在)
2006年(平成18年)11月
設立50周年記念式典挙行
2009年(平成21年)12月
しほろ酪農50年のあゆみ
発刊

肉牛振興

1991年(平成3年)、新上、緑陽、士幌北と三つの肉牛センターができ、肉牛センターは、18となった。これに一般の肉牛飼養農家を加えると、38戸で約3万4千頭の肉牛を飼養していたが、2019年(令和元年)では、肉牛センターは町内に19か所あり、これに一般の肉牛飼養農家を加えると、41戸で約6万頭の肉牛を飼養している。

その内約2万5千頭余が肉専用種・和牛・F1で、残りはホルスタインの雄子牛となる。肉牛肥育センターは、1か所500頭から2千頭の規模で飼養しており、センター以外の農家も含めた一戸当たりの飼養頭数は、約1400頭余りとなる。肉牛施設から出る牛の排せつ物を利用した堆肥を、周辺畑作農家の土づくりに還元するため各センターに利用組合をつくり耕畜連携を確立している。

肉牛生産農家は、1970年(昭和45年)以来、肉牛振興会を組織し、飼養管理技術研鑽を行い、枝肉共励会等を開催し「しほろ牛」の品質向上に努めている。

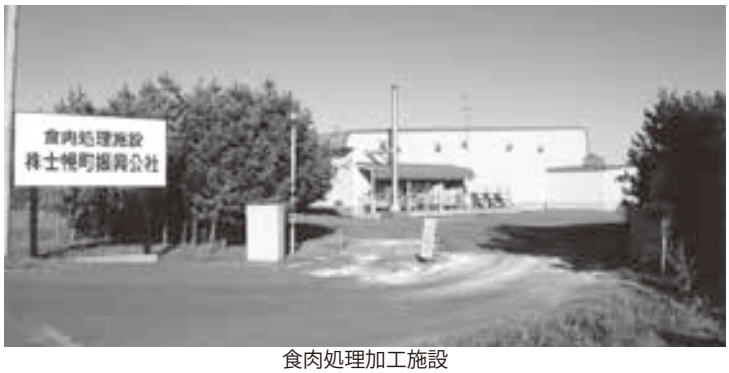
しほろ牛

▽士幌町肉牛振興会会長
力石和彦(現在)
会員数25戸

食肉加工施設

1986年(昭和61年)、株式会社士幌町振興公社を設立して食肉処理加工施設を建設、消費者ニーズに適う「しほろ牛」生産を目指し、町内生産肉牛の「と殺」処理(帯広市)後の加工を最新の施設(懸垂脱骨)で処理し、1頭ごと、部位ごとにバーコードによるトレーサビリティシステムで管理し、近年ではダンボールから通いコンテナを導入するなど、環境に配慮した取り組みを行っている。

提携している本州の有力食肉メーカー㈱吉田ハムとの業務提携を行い、営業成績も年々向上しており、1999年(平成11年)度実績では、1万2千頭余の処理で、正肉出来高4000㌧、第2次加工製品(筋引・整形)は、1800㌧となった。2019年(令和元年)度では、我が国の農業を取り巻く情勢が厳しい環境の中で1万8801頭の処理、正肉出来高3078㌧ミンチ加工608㌧となっている。



食肉処理加工施設

2017年(平成29年)2月には、創立30周年記念式典を開催。また、2019年(令和元年)11月には、記念事業として沖縄へ社員旅行を行った。同年12月には、キュービクル屋外移設工事および発電機新設工事を行っている。

▽代表取締役社長
菊地和浩(士幌町農業協同組合常務理事)
令和3年度現在
職員数46人

口蹄疫(伝染病)発生

2000年(平成12年)5月11日、本町に隣接する本別町押帯の肉牛肥育農家から、ウイルス性家畜法定伝染病「口蹄疫」が発生した。口蹄疫は、世界中で最も恐れられている伝染病で日本では本別での感染の約2か月前、宮崎県で92年ぶりに牛の口蹄疫が発生し終息したばかりで、安全宣言をした翌日に本別町での「まさか」の感染畜発生となった。北海道では初めての発生である。

口蹄疫は口蹄疫ウイルスが、牛をはじめ豚、羊、山羊そのほか多くの偶蹄類(ひづめの形が割れている動物)に感染し、死亡率は5%位とされているが、発育障害、流産、乳房炎、不妊症などの障害がでて、生産性の低下に結びつき、その影響が大きいといわれている。感染力はウイルスの型によって異なるが予防法がなく、感染が発見されるとすぐ、感染牛はもちろん状況によってその牛群全頭が殺処分される。

本別町での発生に伴い、北海道知事は家畜伝染病予防法に基づき、発生農場の飼育牛705頭の殺処分と半径10キロ以内の本別、池田、上士幌、士幌、音更町の一部を移動制限地域に設定し、翌12日午前0時からは制限地域内の家畜の移動と人工授精、放牧を禁止した。

さらに、地域内に通ずる主要な道路に消毒ポイントを設け畜産農家に出入りする車両すべてに対し消毒することを決定した。本町も役場内に対策本部を設置し、まん延防止に向けた万全対策を検討、発生農家から半径10キロ以内の移動制限地域に41戸の畜産農家が、8

８００頭強の牛を飼養していることから、町道東3線東側の道路4か所を消毒ポイントとし、関係職員とともに町議会議員や農業委員、農協役員、農民協役員が毎日交代で消毒ポイントに立ち、畜産農家に出入りする車両すべてに対しタイヤなどへ噴霧による懸命の消毒作業を行った。また多くの人が出入りする役場や農協の玄関前には、消毒用マットを設置し、まん延防止対策をとったほか、一般住民への啓発についてはチラシの配付等で協力を呼びかけた。

道(十勝防疫対策本部)は、5月18日、発生農場の畜舎農機具の消毒、残存飼料の処分などすべての防疫処分が終了したことを公表、更に同25日には、家畜の移動制限区域内の１３９戸および疫学的関連により血液検査を実施していた制限区域外の85戸すべてに「異常なし」を確認した。ウイルスの最長潜伏期間(3週間程度)を待って、6月9日午前零時に「口蹄疫終息宣言」が出された。

今回の伝染病の感染経路は特定されていないが、迅速な防疫体制で他への感染を防ぐことができ将来再発の際の手本となる。また牛肉消費などへの風評被害も心配されたが、一過性のもので、やがて鎮静した。

本町の対策本部は、終息宣言後も事後処理や今後の対策を検討してきたが、9月7日任務を終え解散した。

口蹄疫発生で２０００年(平成12年)の家畜品評会は中止となった。

２０１０年(平成22年)4月、国内で約10年ぶりとなる口蹄疫が宮崎県で発生した。感染が疑われる牛豚等の殺処分や埋却、農場消毒、移動制限等の防疫措置が講じられ、同年7月にすべての移動制限が解除され、翌年2月には「ワクチン非接種口蹄疫清浄国」として認定されている。

今後も、飼養衛生管理の徹底や早期摘発のための監視など行動が求められている。

5、溶液栽培

バイテク研究所

士幌で初めての冬季間溶液(水耕)栽培試験を行うため１９８６年(昭和61年)に寒地バイテク研究所を設立し、東芝プラント建設(本社・東京)と業務提携を図りながら作物の溶液栽培や苗の生長点培養などの研究を行い農協所有の溶液栽培ハウスでミニトマトやワサビ栽培に応用し成果を挙げている。

東芝プラント建設研究グループは10年以上にわたり士幌で技術開発や指導に当たってきたが、士幌での研究の使命もひと区切りとなり、１９９８年(平成10年)3月末でグループ研究員を撤退させた。農協はその後も独自に栽培溶液の改善や、生育環境分析など応用面で研究を進めハウス内での生産性向上に努力している。

溶液栽培団地

士幌農協が団地造成で設置した溶液栽培ハウスは、これまでに中士幌栽培団地67棟、士幌栽培団地19棟、西上栽培団地8棟の合計94棟になった。これらはリース向けハウスとして、ミニトマト、イチゴ、ワサビ苗、バラ、スターチなど花き類とイチゴリレー苗の栽培を行っていた。ミニトマトは「しほろキュート」の名称で道内市場へ、またイチゴは帯広の製菓業者を中心にそれぞれ露地物収穫以降の端境期に出荷したほか、花き類は道内のほか本州市場へも出荷をおこなっていた。ワサビ苗は静岡県山葵組合連合会からの委託栽培で育苗したものを出荷している。

これらリース向けハウスのほか、バイテク研究所ではテストハウス6棟と馴化株、選果場、選花場などを有しているが、１９９３年(平成5年)にマッシュルーム栽培用の施設を作りハウスで生産していた。

「新規就農者による施設園芸」という新たな形の農業を確立するため、作物の栽培のマニュアル化が可能で、高齢者や農業未経験者でも取り組みができる養液栽培に着目し、加工品の生産に取り組み、新規参入者もピーク時には25戸となったが、バブル崩壊後の景気後退、価格低迷、価格変動に翻弄され撤退者が増えた。

現在は、ミニトマト・わさび苗を主力にし、遊休ハウスの用途転換も実施している。２０２０年(令和2年)現在、中士幌栽培団地については、中士幌牧場の開設に伴い、一部で畜産施設への建て替え工事が開始されている。

ミニトマトジュース

第二章　農協と団体

1、士幌町農協

発展する農協

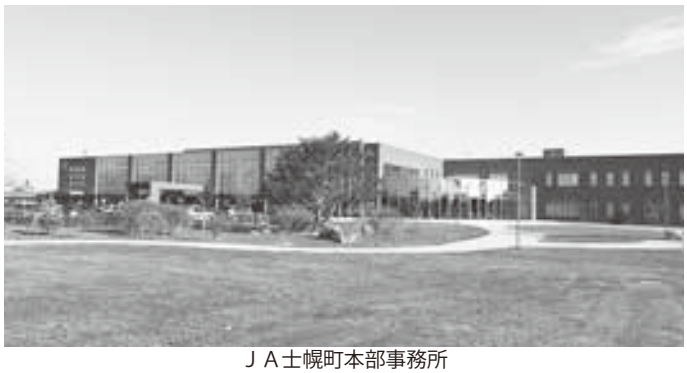
１９３１年(昭和６年)に産業組合として設立し、農業会を経て農業協同組合となった士幌農協は、２０２１年(令和３年)に満90周年を迎える。

設立当初から「堅実第一主義」を組合の方針とし、組合を信頼して参加・利用する組合員の生活と経済の安定を図ることを基本にしてきた精神は、今も脈々として受け継がれている。

早い時期から事業規模、財政状況などの各分野において道内各農協のトップクラスに位置してきた士幌農協は、益々飛躍、発展し、今では全国に誇る有数な農業協同組合として万人が認める組織に発展した。

今日の士幌農協の隆盛があるのは、開拓以来先人の血のにじむ苦労と英知を引き継いだ農民の強い意志と歴代指導者等の先見性の豊かさによるもので士幌農協が果たした役割は極めて大きいものがある。

近年の決算書等から見た士幌農協の主な業務成績は「表－１」のとおりで、組合員は後継者難等による離農で減少しているが他の部門では堅実な業績が示されており中でも、貯金保有高は、



ＪＡ士幌町本部事務所

表－１　**士幌農協事業の伸長**　（単位：百万円）

	1995（平成７年）	2005（平成１７年）	2010（平成２２年）	2015（平成２７年）	2020（令和２年）
貯金保有高	５７,６５７	７２,６３８	７８,２９５	８６,７６３	１０２,９５５
有形固定資産	４１,６３１	６３,３６７	６６,９０６	６９,１２３	７９,２４４
農畜産物販売高	１９,７９９	２４,５５３	２６,９６８	３８,１２７	４０,３１３
貸付金	１０,３４２	９,７９６	８,７６８	８,４９８	７,６３０
購買品供給高	１０,１７５	１２,５６３	１４,０３１	１５,９７５	１６,３０５

	1990（H２年）	1995（H７年）	2000（H12年）	2005（H17年）	2010（H22年）	2015（H27年）	2020（R2年）
正組合員戸数	５５３	５１１	４９４	４５５	４３６	４１３	３９５
職員数	１７２	１８６	１４８	１５３	１６０	１６５	１６９

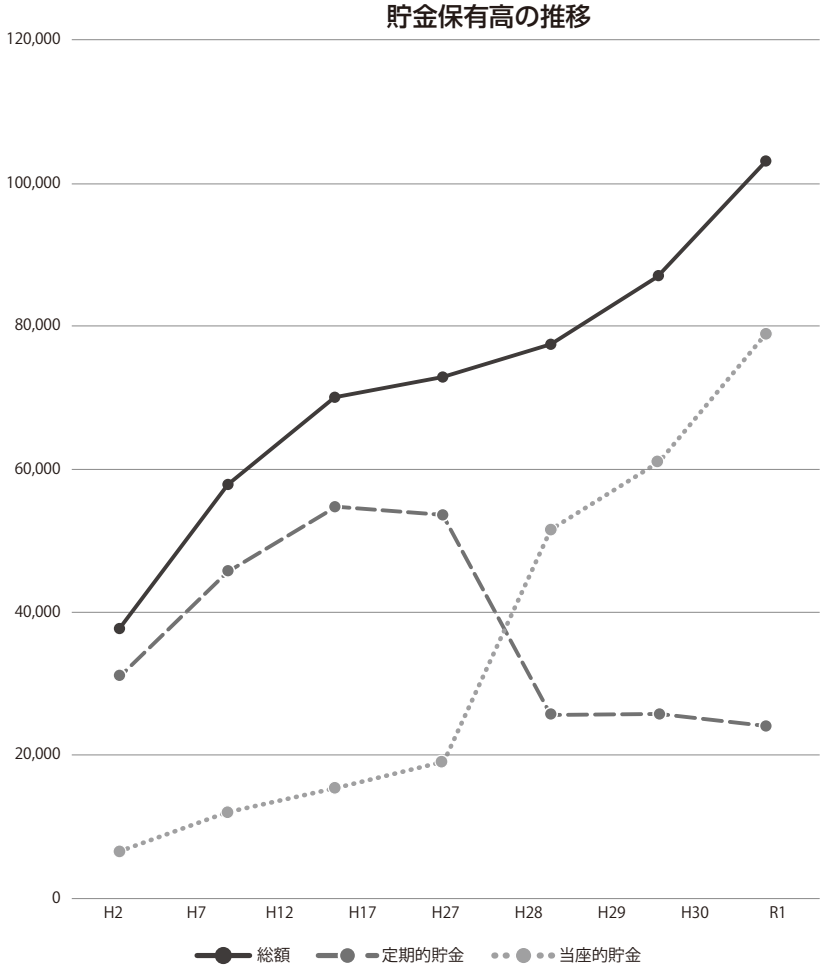
1989年(平成元年)の347億円に対し、2019年(令和元年)では952億円と30年間で約2・7倍の伸びとなり、2020年(令和2年)には、1029億円と1千億円を超え、農民の経済力の向上が伺える。(図－1参照)

2016年(平成28年)4月からバイオガス施設で発電した電力を自施設で消費する「電力の地産地消」に乗り出した。

2020年(令和2年)2月から、各戸に情報端末(タブレット・複合機)を設置し組合員営農支援情報ネットワークを構築している。

2021年(令和3年)の節目の年に新本部事務所を完成させるため、工事が進められ、同年5月6日にオープニングセレモニーが執り行われた。同年11月に90周年記念式典と併せ新事務所の落成式が行われた。

図－1



(単位：百万円)

	1990 H 2年度	1995 H 7年度	2000 H 12年度	2005 H 17年度	2010 H 22年度	2015 H 27年度	2020 R 2年度
総額	37,669	57,659	70,061	72,638	77,192	86,763	102,955
定期的貯金	31,052	45,593	54,676	53,529	25,841	25,943	24,173
当座的貯金	6,617	12,066	15,385	19,109	51,351	60,820	78,782

◎近年の主な経過

▽1992年(平成4年)

農協貯金400億円、長期共済保有高700億円達成

内部審査室設置

安村志朗組合長が退任し会長理事となり、組合長理事森本　勝、専務理事太田助が就任

新田事業所開設30周年記念式典

田名部農林水産大臣来町

農協の新愛称「JA」スタート

▽1993年(平成5年)

海外農業事情視察研修最終年となる(第21回)

森本組合長ホクレン理事就任

生乳出荷5万㌧、肉用牛飼養3万頭達成記念祝賀会開催

北海道フーズ創立20周年記念式典開催

▽1994年(平成6年)

農協婦人部設立40周年記念式典開催

役員改選

代表理事組合長　森本　勝

専務理事　太田　助

常務理事　髙橋正道

農協記念館建設

佐倉事業所改築

安村志朗名誉会長規程を制定

▽1995年(平成7年)

安村志朗名誉会長が名誉町民の称号を受ける

役員補欠選挙実施

安村名誉会長中国華西村訪問

▽1996年(平成8年)

中国華西村友好視察団来訪

名誉組合員鈴木辰治組合葬

販売事業200億円超JA組合長会議士幌農協で開催

下居辺事業所改築、同事

業所開設50周年記念式典開催
▽1997年(平成9年)
役員改選
代表理事組合長　森本　勝
専務理事　髙橋正道
常務理事　触沢春芳
Aコープ新店舗「アスポ」オープン
豊田章一郎経団連会長来訪
▽1998年(平成10年)
モンゴル共和国大統領夫人来訪
各麦作組合設立30周年記念式典開催
食用馬鈴しょ大型コンテナ、貯蔵庫建設
▽1999年(平成11年)
士幌町馬事振興会設立20周年記念式典開催
安村志朗名誉会長銅像建立期成会発足
関西食品工場竣工式並びに落成祝賀会開催
▽2000年(平成12年)
安村志朗名誉会長銅像除幕式
士幌町麦作連絡協議会設立30周年記念式典開催
国営草地開発事業完了(草地・牧野造成ほか)
役員改選
代表理事組合長　森本　勝
専務理事　髙橋正道
常務理事　田中　弘
代表監事　鴨川繁雄
常任監事　田中　端
スイートコーン追肥機利用組合設立総会
士幌町肉牛振興会設立30周年を祝う会開催
安村志朗名誉会長銅像建立除幕式
苫小牧低温農業倉庫完成
▽2001年(平成13年)
士幌町酪農振興協議会、(社)中央畜産会主催畜産大賞最優秀賞受賞
農協青年部設立40周年記念式典
士幌町酪農振興協議会、北海道産業貢献賞受賞
でん粉工場地鎮祭執行
士幌町酪農振興協議会、畜産大賞・北海道産業貢献賞受賞を祝う会
でん粉工場竣工式ならびに祝賀会
森本武次郎名誉組合員組合葬
組合創立70周年記念式典開催
組合創立70周年記念芸能「長山洋子ショー」
▽2002年(平成14年)
士幌町農協女性部中音更支部設立35周年記念式典
士幌町農協女性部西上支部設立35周年記念式典
第1回農民ゲートボール大会
清遊会開催
▽2003年(平成15年)
下居辺地区種子用麦作組合設立30周年記念式典
上居辺事業所開設50周年・地区農協運営協力委員会設立50周年記念式典
士幌町農業法人会発足40周年を祝う会
役員改選
代表理事組合長　森本　勝
専務理事　髙橋正道
常務理事　田中　弘
代表監事　鴨川繁雄
常勤監事　田中　端
食品リサイクル施設設置
肉牛生産出荷準提携産地(首都圏コープ)協定調印式
士幌町農協女性部下居辺支部創立50周年記念式典
▽2004年(平成16年)
西上地区馬鈴しょ振興会設立30周年記念視察
士幌町農協女性部創立50周年記念式典
佐倉麦作機械利用組合設立30周年記念式典
士幌町農協蔬菜生産振興協議会長葱部会創立10周年を祝う会
農業関係リーダー・海外農業研修視察派遣要領制定
北海道信連システムへ一部貯金移行
清遊会開催
▽2005年(平成17年)
北海道麦作共励会最優秀賞下居辺種子用麦作組合受賞
士幌スイートコーン生産協議会創立10周年を祝う会
苫小牧常温倉庫完成
JA全国中央会会長宮田勇氏来組
セルフガソリンスタンド設置
公正取引委員会調査
牛乳消費減退による生産調整
中士幌事業所開設50周年記念式典
▽2006年(平成18年)
JAバンクジャスシステム移行
士幌町農協青年部士幌南支部設立45周年記念式典
食品工場バイオガスプラント設置
役員改選
代表理事組合長　森本　勝
専務理事　髙橋正道
常務理事　向井察光
代表監事　小林雅明
常勤監事　横山正弘
清遊会開催
士幌町酪農振興協議会設立50周年記念式典
▽2007年(平成19年)
Aコープ「アスポ店」10周年感謝デー
役員選挙制度審議会
国産牛肉産地フォーラムしほろ開催
小麦作付農家全戸エコファーマー認証取得
士幌町コスモス会発足30周年を祝う会
コンプライアンス管理体制の確立
国土交通省政策統括官賞受賞
(トラックから鉄道輸送へモーダルシフトする省エネ事業)
▽2008年(平成20年)
JA女性部「家の光クッキングフェスタ食彩inしほろ」開催

士幌南麦作組合設立40周年記念式典
Aコープ「アスポ店」11周年リニューアルオープン
清遊会開催
西上事業所開設45周年記念式典
大豆・てん菜全戸エコファーマー認証
▽2009年(平成21年)
安村志朗名誉会長　士幌町・士幌農協合同葬
「家の光文化賞」受賞
役員改選
代表理事組合長　高橋正道
専務理事　早坂孝夫
常務理事　向井察光
代表監事　小林雅明
常勤監事　横山正弘
総代会開催　森本　勝前組合長、名誉組合員推戴
スイートコーン加工施設増設
下居辺地区豆類種子生産組合設立35周年記念祝賀会
▽2010年(平成22年)
士幌町農協青年部上居辺支部創立50周年記念式典
士幌町蔬菜協議会設立20周年記念式典
士幌町麦作連絡協議会設立40周年を祝う会
小麦新品種「きたほなみ」導入に対応する乾燥調整施設の増設
農協役員補選の実施(無投票)
農協青年部設立50周年記念事業「イノベーションinしほろ」
平野春雄名誉組合員　農協・農業委員会合同葬
農協青年部設立50周年記念事業「ばんえい競馬イベント(俺たちバンバるでぃ)」
清遊会開催
▽2011年(平成23年)
生鮮プラス便の開始
組合創立80周年記念式典
組合創立80周年記念特別公演「コロッケオンステージ」開催
▽2012年(平成24年)
農協青年部中士幌支部設立50周年記念式典
農協青年部上居辺支部設立50周年記念式典
しほろ牛一頭販売開始
役員改選
代表理事組合長　高橋正道
専務理事　早坂孝夫
常務理事　篠原末治
代表監事　小林雅明
常勤監事　井上恵一
原材料確保対策をスタート(澱粉原料確保による生産者所得の安定化とユーザーへの供給責任)
清遊会開催
新田事業所開設・農協青年部新田支部創立50周年記念式典
第2回高品質てん菜出荷共励会　最優秀賞　㈱ナガセ
▽2013年(平成25年)
下居辺地区種子用麦作組合設立40周年記念・祝賀会
中士幌地区お届け隊を開始
㈱北海道フーズ創立40周年
第3回高品質てん菜出荷共励会　優秀賞　藤井淳一
▽2014年(平成26年)
士幌町酪農・畜産クラスター協議会設立
アスポ店日曜営業開始
清遊会開催
▽2015年(平成27年)
スイートコーン生産協議会設立20周年記念式典
役員改選
代表理事組合長　高橋正道
専務理事　篠原末治
常務理事　七條光寛
代表監事　成瀬　功
常勤監事　井上恵一
現金チャージ(電子マネー)機能を付加した新アスポカードの運用開始
▽2016年(平成28年)
農協青年部士幌南支部設立55周年記念式典
購買割戻カード廃止、新アスポカードに割戻機能追加
スマートコミュニティ事業　アスポ電気(電気供給事業)開始
新アスポ店地鎮祭
北海道を襲った4つの台風の影響で過去最低の馬鈴しょ取扱量を記録
新アスポ店建設住民説明会開催
清遊会開催
▽2017年(平成29年)
旧アスポ店閉店
新アスポ店開店奉告祈願祭
新アスポ店開店
㈱士幌町振興公社創立30周年記念式典
酪友会50周年記念式典
道の駅ピア21しほろオープンにより出店
▽2018年(平成30年)
士幌西地区麦作組合設立50周年記念祝賀会
士幌北地区麦作組合創立50周年記念式典
松室地区麦作組合設立50周年記念式典
士幌南麦作組合設立50周年記念式典
スマートコミュニティ事業　アスポ電気(一般向け高圧)供給開始
役員改選
代表理事組合長　篠原末治
専務理事　七條光寛
常務理事　國井浩樹
代表監事　井原誠一
常勤監事　中島利一
高橋正道前組合長に相談役を委嘱
高橋正道前組合長を名誉組合員に推戴
清遊会開催
▽2019年(平成31年・令和元年)
上居辺西麦作組合設立50周年記念式典
中士幌麦作組合設立50周年記念式典
「しほろ牛」地域団体商標

登録
生乳生産量9万トン達成
胆振東部地震時の対応に経済産業大臣から感謝状授与
㈱ポテトフーズ創立30周年
▽2020年(令和2年)
農協青年部上居辺支部創立60周年記念式典
士幌町麦作連絡協議会50周年記念式典
士幌町麦作連絡協議会全国麦作共励会(集団の部)日本農業新聞会長賞受賞
士幌町麦作連絡協議会北海道麦作共励会(集団の部)最優秀賞受賞
中士幌牧場育成牛飼養開始
篠原末治組合長、ホクレン会長就任による役員改選
会長理事　篠原末治
代表理事組合長　國井浩樹
常務理事　菊地和浩
▽2021年(令和3年)
第7回ジャパン・レジリエンス・アワード2021準グランプリ(特別顧問賞二階俊博国土強靭化提唱者賞)受賞
組合創立90周年記念式典

広がる関連施設

付加価値農業確立の原点となった合理化でん粉工場が1955年(昭和30年)、全国に先駆け建設されて以来、士幌農協は、「生産から加工、消流まで」を合言葉に、生産の増強を図る一方、農畜生産物の処理加工施設を次々建設すると共に、手堅い流通戦略で農家経済を安定強固なものとしてきた。

食品工場

特に馬鈴しょコンビナート施設(食品加工工場、生食用選果施設、冷凍、冷蔵貯蔵施設、放射線照射施設など)では着実な成果を挙げ全国各地への消費拡大が図られている。

士幌農協は、馬鈴しょ関連施設のほか、町内に溶液栽培団地施設(寒地バイテク研究所)、土壌診断センター、種子馬鈴しょ貯蔵施設、麦乾燥調整施設、自家発電設備、肉牛振興施設(肥育センター19か所)、畜産総合施設、酪農団地、ヌプカウシ共同利用模範牧場、食肉処理施設ほか多くの施設を有しているが、事業成果を全国規模に発展させるため、道内には、釧路と苫小牧に農業倉庫を上春別に肉用素牛集出荷繁留施設を建設したほか、本州では埼玉県熊谷市に消費地集出荷施設と同県東松山市に関東食品加工研究所を設置し、大消費地周辺で馬鈴しょ食品の加工供給を新たな試みとして行い、成功を収めている。また大阪泉佐野市にも農業倉庫が建設されており、1998年(平成10年)には食品加工工場の関西進出を図り京都府福知山市にポテトサラダ工場を建設し、周辺都市を消費エリアに事業を展開している。

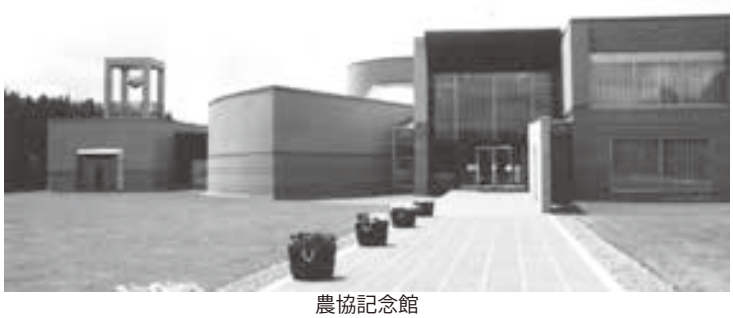
農協は本部事務所のほか地区6か所(中士幌、佐倉、上居辺、下居辺、新田、西上)に事業所を置き地区農民の通常の農協利用の便を図っている。

農協記念館

1991年(平成3年)に創立60周年を迎えた士幌農協は、記念事業の一つとして計画していた「農協記念館」を1993年(平成5年)度に建設し、士幌農業の歴史や、農協の各事業、そして今日の士幌農協を築いた太田寛一元組合長(元ホクレン、全農会長)の業績を展示等で紹介すると共に農業研修や加工実習等に広く開放している。

同施設は、役場向かい(南側)に建設され一部2階建ての面積は1551平方メートルで、士幌農業体験ホールのほか、多目的ホール、食品加工実習室、農業情報室、気象情報コーナーと「野の宰相」「北の闘魂」とも呼ばれた故太田寛一名誉組合長の功績を永く後世に伝えるための「太田寛一記念室」が設けられている。

同記念館は地元農民の利用はもとより、道内外から町、農協を訪れる人たちの視察コースともなり、士幌農業を多くの人に理解してもらう施設として成果を挙げている。


農協記念館

２０１１年(平成23年)士幌農協は満80周年を迎え、記念事業の一環として故太田寛一と共に士幌農協を築いた故安村志朗名誉組合長の功績を称えるため「安村志朗記念室」を増設した。

女性部と青年部

農協には「農村婦人の地位向上と明るい豊かな農村づくり」を目指して設立された女性部(旧婦人部)と、農業後継者等を中心に将来の農協活動を担う青年部がある。女性部・青年部は士幌農協を陰から支える組織として活発な活動を行っている。

２００４年(平成16年)女性部(当時は婦人部)は創立50周年を迎えた。発足当時は、終戦後の混乱期で経済的にも精神的にも不安定な時代で農業を陰から支えた婦人の役割は極めて大きかった。農業の機械化と共に農村婦人の肉体労働も軽減され、今日では家族の健康管理、食生活の改善、家計の合理化等に努める一方女性部活動にも積極的に参加し、農業経営を支えている。

女性部は地区ごとに支部(10支部)を置き、一般部員、若妻部員と金令層部員(高齢者)の３部会制をとり、それぞれの支部、部会で活動しているほか、町の女性団体連絡協議会にも加盟し、全町の女性たちとの連携も図りながら、ボランティア活動花いっぱい運動、健康管理研修等に取り組んでいる。

青年部は女性部より数年遅れて創設され２０２０年(令和2年)で創立60周年となる。農業経営、農業技術を学び農村の民主化と社会的経済的地位の向上を図るため組織的な活動を行っている。主な活動内容は、部員の交流活動としてスポーツ大会を開催しているほか、畑作・畜産・土壌診断の三部会ごとの学習会、研究会や農畜産物の消費拡大運動などを積極的に行っている。

２０２１年(令和３年)１月に設立60周年記念式典を計画していたが、新型コロナウイルスの流行により感染防止策を講じた中で練り直しを余儀なくされ、式典を中止した。しかしながら歴代の功労者に対する感謝の気持ちを伝えたいとのことから、感染防止策を最大限考え、功労者、実行委員のみの参集でＪＡ士幌町青年部設立60周年記念感謝状贈呈式が挙行された。

▽女性部部長　曽我礼子(現在)
▽青年部部長　酒井敬明(現在)

青年部６０周年記念オブジェを道の駅ピア２１しほろに設置(ペコポちゃん)

2、農民団体

農民協議会

士幌町で戦後はじめて結成された農民運動組織は、１９４６年(昭和21年)の「士幌村新郷土建設連盟」で、現士幌町農民協議会の発端となっている。

同連盟は、その後、農民同盟、農民民主協議会と、全農連を経て１９９０年(平成２年)には、農民協議会と改称し、この間組織の改編、整備を行いながら、農業振興や農民の生活安定のため、大同団結して幅広い運動を展開し多くの成果をあげた。

１９９７年(平成９年)、士幌町農民協議会は組織結成50周年を迎え、同年12月６日、農業会館大ホールを会場に記念式典を開催し、多くの来賓と盟友が出席する中、功労者への感謝状贈呈などセレモニーと祝賀会を開催、記念誌「続士と人と」を発刊し今後一層の団結を誓い合った。

草創期は、「全村一農協」運動で当時町内に３つあった農協組織の一本化の実現、自衛隊(予備隊)の演習地買収反対運動の展開、更に農業労働力対策として農業労務者受入協議会を発足させ、青森県を中心に若い男女の労働力を受け入れ、春耕期から秋の収穫まで農家家族の一員として、労働力確保を図った。

これら労務者の中には、当町の農業青年と結婚し専業農家の主婦として在住する者もいる。

このような激動の時代を経ながら農業は近代化、大型化へと進むが、農業、農民をとりまく情勢は常に厳しく貿易の自由化反対闘争や、乳価闘争、農畜産物の価格闘争など、時代時代の問題を的確に分析し運動に結びつけて今日に至っている。

活動の目標として、①誰にも束縛されない、自由で民主的な組織にしよう。②個人の意見を尊重し、整理して組織全体の力にまとめよう。③非農業者と農業者が提携するための運動をもりあげよう。④農業経営と

農村生活を充実発展するため、あらゆる努力をしよう。の4点を掲げ、組織・税金対策、産業振興対策、農政・情報対策など、具体的活動目標を定め運動を進めている。

▽会　長(平成4年以降)
後藤義孝(平4～5)／成田吉信(平6～11)／篠原一廣(平12～17)／三本善則(平18～19)／横山和敏(平20～21)／河村幸芳(平22～25)／加藤　智(平26～27)／竹迫真樹(平28～令元)／篠原貴幸(令2～現在)

農民組合

北海道で農民組合が組織されたのは1925年(大正14年)に日本農民組合旭川村米飯支部を結成したのが始まりである。

日本農民組合は、絶対主義的天皇制と半封建的地主制度の中で小作料の減免や農民の土地取得要求のスローガンを掲げることも許されなかった時代に厳しい弾圧と闘いながら要求実現のため闘う組織として結成されたといわれている。

太平洋戦争を挟んで組織活動は中断したが戦後の1953年(昭和28年)道内の自衛隊反基地闘争を繰り広げる中で全日農北海道連合会として再建された。

士幌町農民組合はこれに合わせ結成された。初代委員長は、石垣春雄で農業委員、農協役員などを組織から送り込む活動も行っていた。3・9冷害諸対策要求運動(昭和39年の冷害対策)を始め、農畜産物の価格闘争、同自由化阻止闘争、農協中央会・振興局農務課との要請懇談会、税務学習会などの活動を行っている。十勝の農業を守り、後継者が育つ「家族農業」を基本とする経営を目指している。

▽士幌町農民組合
組合員　26人

歴代執行委員長(平成3年以降)
清水秀雄(昭62～平12)
鈴木博文(平12～25)
渡邉一元(平26～現在)

第三章　林業と内水面漁業

1、林業

森林と自然環境保全

森林は、国土保全対策上重要な役割を果たしているが、士幌町では、森林整備計画に基づき、長期的に適切な森林整備の促進を図っている。また1992年(平成4年)には、自然保護と緑の育成をまちづくりの基本理念とした「士幌町自然環境等保全条例」を制定し自然環境の保全と無秩序な開発を防止するため、自然環境保全地区の指定を行い乱開発の防止に努めている。

環境保全地区の指定は、自然的社会的諸条件からみて、その区域における自然環境の保全を図ることが特に必要なものと認められる場合に町長が諮問機関として設置している「士幌町自然環境保全審議会」の意見を聞き指定することになっており、現在その指定を受けているのは5地区で内訳は(表－1)のとおりである。また自然環境の保全のために必要な監視および指導を行わせるため、自然環境等保全監視人を委嘱し、保全指定地区のみでなく町内全域を巡回し資源の乱獲防止、自然保護の指導を行っている。

なお、監視業務の運営は「士幌町開発と自然保護の会」に委託し実施していたが、組織の改編により2003年(平成15年)6月から「しほろ自然環境に親しむ会」に委託している。

士幌町内における森林面積は、約5600ha(ヘクタール)で町総面積の約22%を占めている。1990年(平成2年)の総面積と比べ約1100ha(ヘクタール)減少したが、新田牧場を中心とした林地開発が主な原因と見られ、民有林面積は、5449ha(ヘクタール)、内人工林地が2966ha(ヘクタール)で人工林率は54%となっている。

人工林の樹種は、ほとんどカラマツとなっているが伐期齢に達した森林も増え、今後計画的な伐採、造林を行うこととしている。

町有の防風保安林は、655ha(ヘクタール)程度と若干減少している。(表－2参照)

表－1　**士幌町自然環境保全地区指定状況**

指定箇所	所有者	指定面積	森林現況等
農協自然公園 (農協所有天然林)	農　協	17.04ha	ヤチダモ・ハンノキ二次林
森林公園 (北地区柏林)	町	4.64ha	カシワ二次林
朝陽居辺坂	町	44.59ha	シナノキ・イタヤ林
朝陽天然林	町	3.64ha	シナノキ・イタヤ林
創造の森下居辺 刑務所跡地	町	82.25ha	落葉広葉樹林 (ミズナラ・イタヤ・ヤチダモ林)

表－2　**所有者形態別森林面積**　(単位：ha)

所有区分＼面積		立木 人工林	立木 天然林	立木 計	無立木地	合計	人工林率
国有林		5	145	150		150	3%
民有林	町有林	1,362	471	1,833	26	1,859	73%
	私有林等	1,604	1,641	3,245	345	3,590	45%
	小計	2,966	2,112	5,078	371	5,449	54%
合計		2,971	2,257	5,228	371	5,599	53%

※令和元年度北海道林業統計（令和３年３月北海道水産林務部）

町有林と創造の森

町有林は、２０１９年(令和元年)現在、１８５９㌶で１９９０年(平成２年)当時から約２６０㌶増え全体の73％が人工林となっている。

毎年計画的な人工造林、除間伐、下刈等を行っているが２０１０年(平成22年)から２０１９年(令和元年)までの実績は(表－３)のとおりである。

１９８８年(昭和63年)に取得し、町の「自然環境保全地区」に指定していた、下居辺旧刑務所農場跡地８２㌶を整備し、「士幌創造の森」を建設することになり、１９９４年(平成６年)から事業を進め、１９９７年(平成９年)に完成した。

この地区は、樹齢50年以上のミズナラやイタヤ類を含む約20種もの貴重な天然広葉樹林として保全されており、「創造の森」事業では、植栽や間伐を進める一方、渓流路や３つの散策路を造成したほか、休憩室やトイレ、木工作業室などを備えた「やまびこハウス」と展望台も設置されており、森とのふれあう場として整備された。

創造の森

表－３　**（１）町有林の現況**
(令和２年４月)

区　分	面積（ha）	蓄積（1000 ㎥）
天然林	４７１	３９
人工林	１,３５９	３５３
無立木	２９	—
合　計	１,８５９	３９２

（２）町有林管理状況
(上段　平22～平26：下段　平27～令元)

人工造林	植栽	45.27（ha）
		32.99（ha）
間　伐	面積	300.84（ha）
		139.63（ha）
町有林管理事業費	金額	121（百万円）
		87（百万円）

（３）町有林伐採売払の状況
(上段　平22～平26　：　下段　平27～令元)

	面　積	材　積	売払収入
皆　伐	５１（ha）	１１（1000 ㎥）	３１（百万円）
	２０（ha）	４（1000 ㎥）	１６（百万円）

森林組合

低廉な輸入外材の増加、長期的な立木価格の低迷など林業事情の厳しい中、士幌町森林組合は、民有林の振興と組合の健全運営を目指し努力していた。

２０００年(平成12年)度から、第２次流域森林総合整備事業、緊急間伐実施事業が始まり、遅れる間伐の解消に重点を置いた事業としてスタートした。これによって、民有林の事業受託および公費造林等補助制度の利用を促し、組合員の負担軽減を図りながら、造林、造林地の下刈や除間伐事業を計画的に実施できるよう全力を注いだ。

組合の体質強化や、多面的事業の展開を目指した森林組合の広域合併が指導され、管内もブロックごとの広域化に向け検討に入り、西部地区ブロックとして、音更、士幌、上士幌、新得、鹿追、清水の６町による「十勝西部地区広域合併協議会」を１９９５年(平成７年)に発足させ、同12年３月を目途に、長期間協議を続けたが、合併実施計画策定の合意には至らなかった。一方北十勝３町(音更、士幌、上士幌町)の各組合は、業務協業により、労務関係の連携で労働力確保、工場側の仕様に即応、有利な材の生産体制充実に努め、２００７年(平成19年)10月、十勝大雪森林組合として合併した。

２００８年(平成20年)５月に合併後初の総代会が開催され、理事会において中島康夫が組合長に選任(平成23年４月まで)された。

建築用の木材加工を行う道東プレカット工場が、１９９３年(平成５年)10月中士幌幹線道路沿いに完成した。この工場は木造住宅の土台、柱、けた、はりなどの構造の事前加工(プレカット)をコンピューター制御で行い、家一棟分の加工をほとんど無人状態でわずか一日で仕上げてしまうシステムとなっており、国産カラマツ材の需要拡大に期待がかけられている。

▽士幌町森林組合　組合長
(平成３年～合併まで)
吉田喬一(昭59～平６)／
中島康夫(平７～合併まで)

2、内水面漁業

3つの養魚場

町内には、3か所の養魚場があり、士幌淡水養魚園は、鹿追町町界の新栄地区で、以前はレストランも経営していたが、釣り堀を営み、ニジマスを主としている。

朝陽ヤマベ園は、朝陽地区内の湧水を利用し、3700平方メートルの池にサクラマス、ニジマス、オショロコマを養殖し、各地に出荷、釣り堀としても愛好者に提供している。以前、町で行っていた「やまべ祭り」の放流用やまべは同園のやまべを利用した。

西上地区にある士幌フィッシングパークは、西上地区ウオップ川上流の良質な湧水を利用し、一時は姫ますを養殖して出荷していたが現在は、ニジマス、オショロコマ、イトウを中心に養殖してスポーツフィッシングとしてキャッチ&リリースでの釣りおよびえさ釣りを中心に行っている。

表－1　**内水面漁業**　（令和2年）

名　称	所　在	使用池 面積（㎡）	おもな魚種	摘　要
士幌淡水養魚園	新　栄	2,100	ニジマス	・釣り堀
朝陽ヤマベ園	朝　陽	3,700	サクラマス、ニジマス、オショロコマ	・釣り堀・活魚で出荷
士幌フィッシングパーク	西　上	5,800	ニジマス、オショロコマ、イトウ	・管理釣場・釣り堀
合　　計		11,600		

第四編　商工と建設

SHIHORO

100th Anniversary

第一章　商工業

1、商業と商工会

商業活動

町内では、小売業、サービス業を中心に20以上の業種が商業活動を行っている。3年～5年ごとに調査される十勝の商業統計で報告された1997年(平成9年)度の本町の小売商店数は66店、年間商品販売額は75億1千万円とされ、2016年(平成28年)経済センサスでは、卸売・小売業で35店、年間商品販売額34億7千万円と、店舗数は31店舗、年間商品売上額も、約40億円減と大幅に減少している。

1993年(平成5年)に音更町の国道241号沿いに大型スーパーが進出して以降、音更、帯広間の同国道路沿いには、日用品の総合販売店や家電製品を取り扱う大型ショッピングセンターなどが次々進出し、士幌町内の商業経営にも大きな影響を与えているが、商店街近代化事業等による店舗の改築、拡張改善等で販売高が増した業種もあり、今後とも自助努力を重ね、消費の流出を最小限とすることが望まれる。

年中無休のコンビニエンスストアが近年は地方にも進出するようになり、本町でも国道241号の士幌市街への南北入口付近、市街地および中士幌市街地に、3つのチェーン店5店舗がそれぞれ営業している。

士幌町商工会

1960年(昭和35年)に「商工会の組織等に関する法律」が制定され、同年6月施行となったが、士幌町においても同年12月27日、士幌町(村)商工会を設立し、爾来、町の商工業振興活動を展開してきた。

この間、昭和40年代の高度経済成長時代、また昭和50年代のオイルショック後の安定成長期、昭和61年からのバブル景気を経て、平成3年にはバブル景気が崩壊し、その後、金融危機が発生し平成不況が平成23年までつづくこととなる。平成24年頃よりアベノミクス景気が始まり平成30年まで継続するが2020年(令和2年)には「新型コロナウイルスCOVID―19」の感染拡大により戦後最大の景気後退局面となる。このように経済情勢が大きく変動する中、町内の商工業者も経営の改善について対応を求められている。

商工会では町が行った商店街診断での「診断勧告」を分析し、自立する商店街確立をめざし、具体的施策をもって活動してきた。特に商店街近代化の一連の諸事業によって、町並み整備を図り、核施設の「タウンプラザ」を商工会の拠点として、会員に対する経営改善普及事業を中心に指導推進を図っているほか、1997年(平成9年)新装したJAし

商店街の街並み

士幌町商工会会員の業種構成

表－1

事業分類	業種細分類	1990（平成２年度）				2000（平成 12 年度）				2010（平成 22 年度）				2020（令和２年度）			
		士幌	中士幌	下居辺	計	士幌	中士幌	下居辺	計	士幌	中士幌	下居辺	計	士幌	中士幌	下居辺	計
小　売　業	食料品小売業	14	2	1	17	10	3	0	13	7	1	0	8	4	1	0	5
	繊維製品小売業	6	0	0	6	4	0	0	4	1	0	0	1	0	0	0	0
	医薬品・化粧品小売業	3	1	0	4	3	1	0	4	3	1	0	4	2	1	0	3
	金物・せともの小売業	3	0	0	3	2	0	0	2	2	0	0	2	0	0	0	0
	燃料・石油小売業	3	1	0	4	2	1	0	3	2	0	0	2	3	0	0	3
	電気製品小売業	3	0	0	3	2	0	0	2	4	0	0	4	3	0	0	3
	その他の小売業	10	1	0	11	13	5	0	18	7	2	0	9	13	1	0	14
	計	42	5	1	48	36	10	0	46	26	4	0	30	25	3	0	28
卸　売　業		0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0				
サービス業	飲食業	16	1	0	17	16	1	0	17	22	0	1	23	18	0	1	19
	理・美容室	8	1	0	9	9	1	0	10	10	2	0	12	8	2	0	10
	旅館業	3	0	1	4	5	0	1	6	2	0	2	4	2	0	1	3
	運輸業	3	0	0	3	2	0	0	2	5	0	0	5	5	0	0	5
	農機具・自動車修理業	6	2	1	9	7	2	1	10	7	3	1	11	6	3	0	9
	その他のサービス業	13	2	0	15	17	1	0	18	29	7	2	38	10	3	1	14
	計	49	6	2	57	56	5	2	63	75	12	6	93	49	8	3	60
製　造　業	建設資材等製造業	10	2	0	12	4	1	0	5	4	1	0	5	2	1	0	3
	その他の製造業	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	3	0	0	3
	食品製造業	0	2	0	2	0	1	0	1	0	1	0	1	3	2	0	5
	農業機械製造業	2	0	0	2	3	0	0	3	0	0	0	0				
	製材業	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0				
	計	13	4	0	17	7	2	0	9	6	2	0	8	8	3	0	11
不動産業 物品賃貸業	不動産賃貸業													7	0	0	7
	物品賃貸業													1	0	0	1
	計													8	0	0	8
医療・福祉	その他医療業・福祉													1	0	0	1
建設業		18	7	0	25	19	7	0	26	20	6	0	26	22	8	0	30
農林業		1	0	0	1	1	0	0	1	2	0	0	2	4	0	0	4
その他業種														3	0	0	3
鉱　　業	（砂利採取業）	1	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0				
家畜商業		2	1	0	3	1	0	0	1	1	0	0	1				
定款会員		6	0	0	6	6	0	0	6	4	0	0	4	12	1	0	13
合　　計		132	24	3	159	127	24	2	153	134	24	6	164	132	23	3	158
特別会員	（含む準会員）	2	1	0	3	0	1	0	1	0	0	0	0				

ほろ「アスポ」店とも連携した商工振興を推進している。

商店街近代化事業で改築することになった「Aコープ士幌店」は、当初市街中心部から若干離れた場所への移転を計画していたが、Aコープが中心街から抜けることによる商店街の空洞化や、農協組合員のみでなく、市街地住民が多く利用していること、更に町内の商業活動を商工会と協調し一体となって進めてほしいという町の要請を受け、現在地への移転改築となった。

この地への移転を図るため町は、移転予定地沿線に居住する住民へ代替地を用意し、その実現を図った。

新しくなったAコープは「アスポ」と命名し、町内から数店がテナントとして入店し、それぞれ相乗効果をあげている。

サービス友の会が早くから実施しているシール事業(奥様シール)は1996年(平成8年)4月からポイントカード制を併用し「大地くんカード」として機能の充実を図った。この事業は商店街協同組合が行い、商工会が運営協力をしている。

商工会の主な活動は、大きく「経営改善普及事業」と「地域振興事業」に分類されるが、前者では、商工会に関連する法律改正が施行され、2013年(平成25年)には「中小企業基本法の改正」、2014年(平成26年)「小規模企業振興基本法(小規模基本法)」と「商工会及び商工会議所による小規模事業者の支援に関する法律(小規模支援法)改正」が施行され、本町では、2017年(平成29年)にこれら法律を受け北海道内市町村に先駆けて「士幌町小規模企業基本条例」が公布された。

商工会では、小規模2法の成立を受けて、2015年(平成27年)の第一回申請にて、経済産業省より、北海道内の商工会で初となる経営発達支援計画の認定を受け、令和2年には、全国的に小規模事業者などの経営に甚大な影響を及ぼす大規模災害が相次いでいることを踏まえ、自然災害等への事前の備え、事後のいち早い復旧を支援するため、士幌町との連盟にて北海道より事業継続力強化支援計画の認定を受け、災害に係る新たな枠組みを構築している。

これらの商工会に関連する法律等の改正などにより、これまでの商工会の中心的支援内容であった、事業者の経営、労務管理および税務、金融、取引等は、基礎経営的改善普及事業と位置づけされ、新たに「小規模事業者の持続的発展に資するもの」を重点事業とした体系へと遷移した。

また、「地域振興事業」では「社会一般の福祉の増進に資する事業」として、各部会の強化促進・広報活動・商店街景観美化の推進・商品券発行事業・各種イベントの実施など多岐にわたる。

2010年(平成22年)には「商工会による不動産事業」許認可を取得、平成23年より本格的に参入し、不動産事業関連による定住人口の増加による地域活性化を図っている。

2014年(平成26年)には、商工業者の後継者問題および経営者の高齢化等を要因とした廃業等により商店街での空店舗数が増加。空店舗による商店街空洞化は、商店街での不足業種が生じることと合わせ、商店街機能として重要度の高い回遊性低下を生じ結果的に商店街の魅力が衰退し、空店舗数が更に増加する負の循環が生じることが懸念された。このため、町の支援により「商店街空店舗対策事業」として、商工会が店舗を取得し賃貸店舗として有効に活用する事業を実施し2事業所が開業。その後5事業者が「士幌町商工業活性化推進事業」により空店舗を活用した事業を展開している。

2015年(平成27年)には、町の支援により「町づくり」のための収益事業として「小規模水力発電事業」に参入、売電事業により得られる財源の活用により地域振興に資する事業を展開し商工業の振興を図っている。

2016年(平成28年)には、「士幌町地域創造発信拠点施設(道の駅ピア21しほろ)」指定管理業務を受託し平成29年に移転開業した、町内において交流人口最大の受入施設である「道の駅ピア21しほろ」の総合的な管理運営を担っている。

商工会の会員数は、2020年(令和2年)度末現在158会員で、1990年(平成2年)度末と比べ1会員減少している。(表－1参照)

▽商工会会長(平成3年以降)

山中芳美(昭57～平4)／杉原憲司(平5～17)／有澤忠男(平17～22)／大口静夫(平22～24)／中村　貢(平24～現在)

商工会青年部と女性部

1991年(平成3年)に会員36人で組織していた商工青年部も、2019年(令和元年)度末で部員数14人となり、かつてより減少したものの賛助部員などの入部により安定した傾向となっている。

近年の主な活動は、しほ

ろっち夏祭り花火大会の開催、各種研修会の実施、各種事業への参加協力を行っている。

▽商工会青年部部長(平成3年度以降)

尾形憲一(平3～4)／谷本仁志(平5～6)／寺田典之(平7～8)／岡崎譲二(平9～12)／今木教雄(平13～14)／波多野達也(平15～16)／朝井宏嗣(平17～18)／鈴木賢一(平19～20)／黒坂幸一(平21～22)／中村徹(平23～24)／原尾英祐(平25～26)／田中純一(平27～28)／大林祐也(平29～30)／柴田真稔(平31～令2)／高橋梢太(令3～現在)

女性部員は、2019年(令和元年)度末で32人となっており1999年(平成11年)度末の53人から減少しているが、活動は活発で各種研修の実施、各種事業への参加協力、環境美化運動事業(花壇事業)、交通安全「愛の鈴」製作贈呈等を積極的に行い、士幌町女性団体連絡協議会にも加盟して活動の幅を広げている。

以前は、商工会婦人部としていたが、2000年(平成12年)度で女性部と名称の変更を行った。これは、全国商工会婦人部連合会が「商工会女性部」と名称が変更されたことに伴うものである。

▽商工会女性部部長(平成3年度以降)

谷本幸枝(昭59～平13)／鈴木久子(平14～18)／浅野幸子(平19～20)／加藤弘子(平21～24)／森　悦子(平25～28)／末永美津代(平29～令2)／岡崎睦子(令3～現在)

タウンプラザ

1996年(平成8年)4月1日、士幌町で初めての4階建て施設「タウンプラザ」がオープンした。同施設は、商店街近代化事業と合わせ商店街の核施設として、商工会館を併設したコミュニティ活動の拠点とするため1995年(平成7年)度、商業基盤施設整備事業(国庫)と商工会館建設事業(道費)の補助を受け建設したもので、士幌町商工会が事業主体となった。旧寿の家跡地(2183平方メートル)に鉄骨造屋根4階建とし、総工事費3億2300万円を投じて建設した。

タウンプラザ

同施設は、商工会館のほか、自由にくつろいだり、イベントなどに利用できるアトリウムや大小の会議室、集会室をもち、商店街活動の拠点、商店街近代化のシンボルとしての期待がもたれている。

商工会では、同年4月16日複合施設「タウンプラザ」落成式を開催し、地域振興発展の推進拠点とすることを誓った。

道の駅ピア21しほろ

1989年(平成元年)度に、国道241号線士幌市街南側入口沿いに設置された「ピア21しほろ」は周遊観光者等ドライバーの一時休憩の場や地場特産品の展示販売、しほろ牛を中心とした地場産品の材料による調理食品の販売施設として親しまれてきた。

オープン当初の営業成績は、必ずしも良好とはいえなかったが、経営努力と年数の経過で施設の存在も広く知れわたるようになり、年々好転してきた。

この施設をより効果的にPRするため、1996年(平成8年)に「道の駅」として登録申請、翌年(平成9年)指定を受け道内44番目の道の駅として登録された。

道の駅 ピア２１しほろ

「道の駅」は、パーキングエリアなどの休息施設と、行政が設置する物産館などの地域振興施設を一体的に整備した多機能型施設で無料駐車場のほか、水洗トイレ、身障者用トイレ、オストメイトトイレに公衆電話、地域の特産品や観光案内、道路情報が得られる地域情報システムを設置し、旅行者などドライバーの休息と地域情報の発信や物産品の販売で地域振興を図る目的につくられたもので、2020年(令和2年)7月現在道内128か所に設置されている。

「道の駅ピア21しほろ」の管理運営業務は第三セクターである㈱士幌町物産振興公社が行ってきたが、施設の老朽化等により新たに移転新築することとなり、2016年(平成28年)度末をもって道の駅機能を閉鎖、㈱士幌町物産振興公社の解散と合わせ2017年(平

成29年）3月で施設を閉館した。

「新・道の駅」（士幌町地域創造発信拠点施設）は、国土交通省が選定する重点「道の駅」としても選定され、「まち」の魅力、とりわけ基幹である「農」と「食」の情報発信、商店街や観光資源へ導くための道標として様々な情報を発信するとともに、国道往来者の休憩施設と併せ、防災機能や交通情報など、道路機能の向上を図りつつ、更なる振興の発展に役立てることを目的として国道274号と国道241号が交差する南側に建設された。

運営に当たっては、士幌町商工会が指定管理者として選定され、軽食・飲食提供施設の経営者として㈱atLOCAL、地場産品等提供施設の経営者として士幌町農業業同組合が選定された。

2017年（平成29年）4月23日にグランドオープンした「道の駅ピア21しほろ」は多くの来場者で賑わいを見せ、オープン数日後の5月3日には士幌町の人口を超える約7500人、このゴールデンウイーク期間中にかけては6万8千人という大勢の来場があった。また、2019年（令和元年）8月1日には来場者数が延べ100万人を突破した。（表－1参照）

十勝の広大な大地で育ったジャガイモ、ビート、しほろ牛、小麦などを使用した特産品のほか、士幌高校生が開発した商品などを販売し好評を得ている。

道の駅「ピア21しほろ」入り込み数の推移

表－1　（令和2年）

年度	利用者数
2004（平成16年度）	257,700人
2006（平成18年度）	232,168人
2008（平成20年度）	245,595人
2010（平成22年度）	274,098人
2012（平成24年度）	264,187人
2014（平成26年度）	254,474人
2016（平成28年度）	193,127人

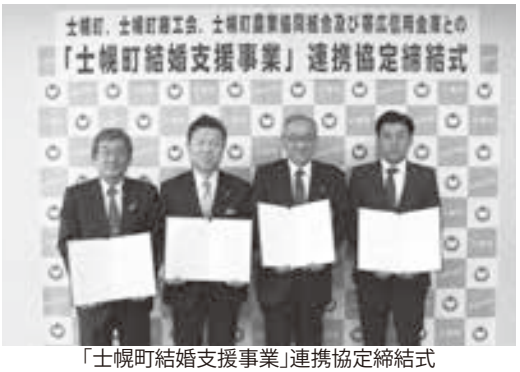
・平成28年12月30日　道の駅の機能を閉鎖
・平成29年　3月28日　閉館
・平成29年　4月23日　リニューアルオープン

2017（平成29年度）	446,101人
2018（平成30年度）	382,817人
2019（令和元年度）	410,691人
2020（令和2年度）	310,521人

信金士幌支店

帯広信用金庫士幌支店は、1960年（昭和35年）出張所として開設されたが、その後1964年（昭和39年）に支店に昇格、2020年（令和2年）12月で開設60周年を迎えた。

同支店は町内唯一の独立した金融機関として、着実な業績を見せているが、地域に密着した活動も積極的に行い、町内行事への協賛、仮装盆おどり大会など町のイベントにも参加。また、2018年（平成30年）11月、士幌町・士幌町商工会・士幌町農業協同組合と信金の4者間で「士幌町結婚支援事業」連携協定を締結するなど、町の活性化に寄与している。



「士幌町結婚支援事業」連携協定締結式

▽歴代支店長（平成2年以降）
中山敏勝（平2～4）／本村正幸（平4～7）／鈴木頼夫（平7～10）／鈴木経義（平10～13）／高橋嗣明（平13～15）／深澤洋史（平15～18）／伊藤幸彦（平18～21）／藤村秀憲（平21～22）／宇佐美等（平23～26）／丸山教範（平26～28）／中井崇仁（平28～31）／堀川真志（平31～現在）

2、商店街

商店街近代化事業

本町の顔ともいうべき士幌市街商店街は、以前の国道274号（旧道道本別新得線）、2017年（平成29年）4月からは、道道本別士幌線と、道道士幌停車場線（西2線通り）沿いで形成されている。

1987年（昭和62年）に実施した道の商店街診断での各種提言を参考に開始した士幌町商店街近代化事業は、1988年（昭和63年）から実施した道道本別新得線（平成5年4月1日付で国道昇格）拡幅整備事業（マイウエイ・アワーロード「ふれあいの道」）と連動して進められ、引き続き1993年（平成5年）からの道道士幌停車場線拡幅事業の完了（平成10年度）と共に整備が終了した。

バス待合所付近

先行の旧本別新得線拡幅工事では、「ふれあいの道」として幹西1線(いこい団地西端)から国道241号までの2900メートルを拡幅し、うち市街地900メートル(役場入口から西1線まで)をマイウェイ・アワーロード事業として、無電柱化、植栽(花壇)、歩道インターロッキング舗装、街路灯の整備を図った。

更に中心部の370メートルの区間(寿し大洋～キング商会スタンド)をシンボルゾーンとして0・5メートルのセットバックとし、両サイドの歩道を町有地をもって拡幅した。

士幌市街発祥の地が同道路沿い、現聖教寺西側に当たるが地元有志が期成会をつくり、道路拡幅整備事業に合わせ同地に「市街地発祥の記念碑」を建立した。

交通安全施設整備事業として実施された、士幌停車場線拡幅工事は、歩道拡幅に併せて、マイウェイ・アワーロード事業として、本別新得線と同様の施工で行われた。

旧本別新得線の事業は、1988年(昭和63年)から1992年(平成4年)までの5か年で総事業費17億5千万円、また士幌停車場線の拡幅事業では、1993年(平成5年)から1998年(平成10年)で事業費は20億4千万円を超える大事業であった。

この事業による用地補償と町並み整備事業等により店舗の改築、移転等の整備が図られたほか、市街地再開発事業の中でコミュニティ広場の造成(旧役場跡地)、更に商工会館を併設したコミュニティ施設としてのタウンプラザ建設など商店街はもとより周辺環境も大きく変貌した。

これら一連の事業を推進するため設立し活動した、商店街近代化推進協議会(平成元年設立)や商店街協同組合(平成3年設立)が事業完成まで果たした役割は極めて大きいものがある。

2つの事業でそれぞれ沿線の店舗、住宅等はほとんど改築、移転し町並みが一新され、久しぶりに訪れた人には、昔の面影がなくなり、「どこがどこだか分からなくなった」と言われるぐらいの変貌だったが、現在では経営者の高齢化、後継者問題などもあり、空き店舗も目立つ状態にある。

3、工業

伸びる食品加工

士幌町の工業生産は、2018年(平成30年)の工業統計によると、製品出荷額198億円で1989年(平成元年)に比べ1・9倍となっている。

製品出荷額の80％、従業員数の88％は、食糧品製造で占め、当町の工業は、その大半を農協関連の食品製造業によって支えられている。(表－1参照)

農協の食品加工工場

馬鈴しょを中心とした士幌農協の食品工場は、「馬鈴しょコンビナート」の中で随時拡充され特にコロッケ部門は1993年(平成5年)以降工場施設、製造ラインの増強を図り売上げを大幅に増やしている。

また馬鈴しょの加工流通の合理化を図るため関東に進出した東松山市の関東食品開発研究所では、1993年(平成5年)にポテトサラダ製造ライン一式を新設、1998年(平成10年)には関西進出を果たし、京都府福知山市で食品加工施設(ポテトサラダ製造工場)の建設を行い翌年から操業を開始した。

合理化でん粉工場は馬鈴しょ栽培の根幹をなすものとして食用・加工以外の芋処理に着実な操業を続けているが、でん粉価格の低迷で売上額は減少している。

でん粉工場の再編整理計画で、ホクレン芽室工場が廃止となり、新たに1市3町4農協(帯広市、芽室町、清水町、新得町)の馬鈴しょを士幌工場が受け入れる再編整備計画に伴い、原料集荷対象区域が拡大し、原料受入数量もこれまでの年間約8万トンから14万トンと大幅に増加することになるが、国は2000年(平成12年)度の補正予算で新工場建設に対する事業費補助を決定

表－1 士幌の工業の推移 **士幌の工業**

年　度	事業所数	従業員数	製品出荷額
H元	11	532人	105億6,579万円
H5	13	697人	160億8,486万円
H10	12	872人	190億7,791万円
H15	12	789人	192億705万円
H20	11	641人	195億8,104万円
H25	10	599人	196億772万円
H30	10	1,093人	198億4,217万円

産業別の現況（平成30年調）

区　分	事業所数
パルプ・紙・紙加工品製造業	1
金属製品製造業	1
食料品製造業	5
木材一般製材製造業	1
はん用機械器具製造業	1
飼料・その他	1
総　計	10

した。

新工場建設を含む関連事業は87億1500万円の計画事業費で2001年(平成13年)8月に完成し操業を行っている。

この事業の中で「でん粉粕」から出る悪臭防止施設の整備を図り「士幌のニオイ」と言われた悪臭も大幅に減少し、悪臭対策は一段落した。

農協の馬鈴しょコンビナート内施設概要と主要農産物の加工実績は「表－2」「表－3」のとおりである。

士幌農協馬鈴しょコンビナート内施設概要

表－2

施設名	建設年次	建設面積（施設）㎡
コバルト照射施設	昭48	1,912
フレンチフライ工場	昭48	12,345
スイートコーン工場	昭60	3,140
調理食品コロッケ工場	昭62～平6	13,559
食用馬鈴しょ選果プラント	昭49～平24	5,033
馬鈴しょ貯蔵施設	昭48～平30	78,411
給排水施設	昭48	(3,855)
自家用発電施設	平元～平13	887
スナック工場	平28	4,507
合　計		(3,855)
		119,794

おもな製造工場

町内には、馬鈴しょ関連工場のほか幾つかの特色ある工場が立地している。

◎森産業株式会社

十勝バークで知られる森産業は、1994年に本社工場、事務所を中音更基線(十幌新橋南)に移転改築し、更に1996年には東北営業所(盛岡市)を開設するなど営業の拡大を図っている。

バーク堆肥(十勝バーク)は牛糞、樹皮に高温発酵促進剤を添加し、約1年間発酵熟成して、水分調整、粒径区分を経て完全無臭の有機質土壌改良材ができあがるが、農地の有機質補給のほか、製品加工によるオリジナル園芸培養土として市場開拓も行い、順調な経営実績をあげている。

士幌農協主要農産物加工実績

表－3　(百万円)

	平成2年売上金額	平成7年売上金額	平成12年売上金額	平成17年売上金額	平成22年売上金額	平成27年売上金額	令和元年売上金額
精粉でん粉	2,255	2,297	1,473	1,295	618	813	736
食用いも	7,333	7,660	7,026	8,402	9,980	11,681	10,445
馬鈴しょ加工食品(スナック・冷凍食品)	10,909	17,849	17,804	18,910	19,122	21,877	23,031
合　計	20,497	27,806	26,303	28,607	29,720	34,371	34,212

※決算書による

森産業は系列会社として、1988年(昭和63年)に、㈱協和興産を深川市(「十勝バーク」道央プラント)に、1999年(平成11年)には、富士化水工業㈱との共同出資で、㈱富士フォレックスを設立(森産業本社内)し、家畜糞尿の処理装置の設計販売を行っているほか、ローソン新得サホロ店を開設するなど経営の拡大を図っている。

代表取締役社長　森　雅三

▽平成12年以降の主な出来事

・平成17年
西上地区温室栽培事業開始
本社敷地内に「十勝そば玉置屋」本店開店
㈱協和興産、業務統合(製造・総務)

・平成18年
無農薬野菜苗栽培試験・販売開始

・平成19年
㈱協和興産、㈱みどりに称号変更
第3回「ものづくり日本大賞」ものづくり地域貢献賞受賞

・平成20年
北海道農業研究センターを中心としたGABAの共同研究を開始

・平成22年
バイオマス事業開始
GABA共同研究を終了し、事業化開始
岩手県一関市千厩町に東北事業所開設

・平成23年
恵庭市に道央事業所開設

・平成24年
栃木県鹿沼市に関東分析室を開設

・平成25年
㈱みどりを㈱FOREXに称号変更し、恵庭市へ移転

・平成26年
東北事業所を岩手県花巻市に移転。花巻工場を開設
士幌町商店街に「雑貨店もりのくまさん」を開店

・平成27年
士幌町にて創業40年の謝恩イベントを開催
FOREXホールディングス㈱を設立。森産業の

株式を集約し事業継承に備える。
・平成28年
広島県三次市の東洋林産化成㈱を子会社化。㈱FOREXトーリンに改称
㈱FOREXを㈱FOREX販売に称号変更
・令和2年
森産業㈱が㈱FOREX販売を吸収合併

◎横山食品㈱道東工場

1991年(平成3年)本町に進出した横山食品㈱道東工場(本社札幌市)は、同年12月に操業を開始し道東北をエリアにパン粉の生産を行っているが、需要量の伸びから、1993年(平成5年)と翌94年(平成6年)の二度にわたり増築と設備の増設を行い、粉砕包装ラインの能力アップで日産製造量の増強を図るなど意欲的な操業を続けている。

同工場では高品質のパン粉を製造するため、他の工場にはない次の方法で行っている。

①パンの大きさを本社工場のものより約60%小さくする
②焙焼時間を25%長くする
③第二発酵室を従来の方式と変える

▽平成12年以降の主な出来事
・平成13年
道東工場落成10周年を迎え、消費者の「安全」「安心」の要請に応えるためISOやHACCP対応の建物の増改築や設備の更新等、品質の向上と衛生面の改善を行う。
・平成17年
新社長に横山昭仁就任
最新型焙焼式メイキャップラインを導入し更なる品質向上を図った。
・平成22年
複合型異物選別機(ノンベルトレナスター)導入により異物混入対策の強化を図る。
工場長に田中欣晃就任
・平成23年
国内クレジット制度CO2排出削減事業承認
・平成24年
自動計量器、梱包機を導入し、更なる生産効率向上を図った。
・平成28年
LED照明装置を設置により、異物混入対策の強化を図る。
・平成30年
自動開袋給粉機導入し、異物混入対策強化、生産効率向上を図る。
・令和2年
製品冷蔵庫、冷却設備更(環境保護の為)
放冷室除湿用再熱コイル設置により生産効率向上を図る。

◎十勝パッケージ株式会社

馬鈴しょコンビナートの東側にある十勝パッケージ㈱は、ダンボールの全国大手トーモクのグループとして、1980年(昭和50年)農協の誘致により設立した。馬鈴しょコンビナート製品包装材をはじめ、ダンボールを制作し各地に出荷している。

▽平成23年以降の主な出来事
・平成24年
代表取締役　吉尾　佶
・平成26年
㈱トーモクの完全連結子会社化
代表取締役　中橋光男
・平成29年　㈱トーモクが士幌農協から隣接地一万二千八百㎡購入
㈱トーモク道東営業所開設
・平成30年
代表取締役　井上光男

軽工業団地

軽工業(企業)の誘致のため、1976年(昭和51年)に町土地開発公社が造成販売した軽工業団地は、中小の工場の立地の便を図ったもので、1999年(平成11年)、団地のすべてが埋まり、アスファルト合材企業を含む10社が企業を営んでいたが、2000年(平成12年)で一企業が都合により閉鎖するなど、2019年(令和元年)現在、6社が業務を営んでいる。(表－4参照)

商工振興団地

1981年(昭和56年)新生地区に造成し分譲した資材置場団地は、建設事業に伴う資材や機械の一時置場として、1区画1188平方メートルを24区画造成したが、現在20区画が利用されている。

立地決定企業等の内訳

表－4

企業名	立地年月日および主要製品名	敷地面積
ヤマト運輸	昭63.10　運送業	4,365㎡
秋津道路(株)	昭59.7　アスファルト合材	5,384㎡
士幌機工	昭56.8　農機具	1,541㎡
(株)反町建鉄工業	昭52.7　建設金物	1,336㎡
帯広鋼建	昭59.2　建設金物	1,504㎡
士幌交通(株)	昭63.9　一般旅客運送業	5,293㎡

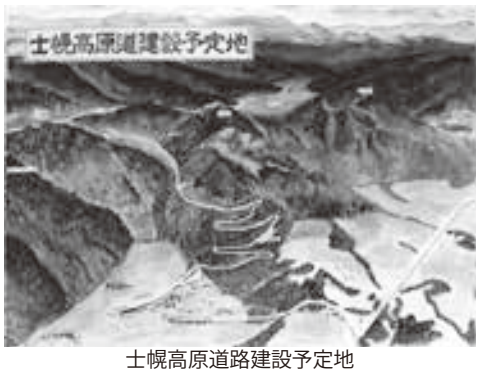
第二章　観　光

1、士幌高原道路

高原道路構想

１９５８年(昭和33年)、士幌村議会議員や村の有志が新田牧場から白雲山を経て然別湖までを踏査し、ここに町道を付けようと大きな構想をうちあげた。新田地区一帯が自衛隊の演習地として買収されようとしたのを、町を挙げて阻止した直後のことである。

東ヌプカ山麓一帯に広がる小カシワの疎林は、それまで不毛の地とされてきたが「新農村建設計画」によって、農用地として大きく変わろうとしていた。また農協の牧場があり、牧道を付けたり、草地を改良したのをはじめ、山裾の国有林の無林木地を町が借り受け植林するなど山の少ない士幌町は、東ヌプカ山麓とは古くから深くかかわってきた。



士幌高原道路建設予定地

「坊主山」ともいわれたように山火事が頻繁に起き、その消火作業には多くの町民が出動し消火につとめた。

日照りの年は「雨乞い」、長雨の年は「照り乞い」と多くの人たちが山越えして然別湖の弁天様にお参りをし、また農民の生活が貧しい頃のタンパク源としてのイワナ(オショロコマ)釣りなど開拓当時からの深いかかわりから発想されたこの道路構想は偶然に生まれたものではない。

工事着工

構想実現に向け検討を続けてきた町は、道路予定コースが上士幌、鹿追２町の区域を通過することとなるため、１９６４年(昭和39年)までに両町内通過の同意を取り付け、国立公園内での町道士幌然別湖間線道路建設工事にかかる承認申請を厚生省に提出していたが、１９６５年10月27日付けで、国立公園審議会の議を経た同道路の建設は厚生大臣(鈴木善幸)名で許可承認となった。

１９６６年(昭和41年)国有林の貸し付けを受け町道として事業に着手、１９６９年(昭和44年)までに２・４キロ㍍の道路建設が行われた。

道道に昇格

この道路は士幌町を起点に上士幌町、鹿追町区域を通って十勝を代表する観光地、然別湖に至る道路であり、その広域性、公共性から町は１９６８年(昭和43年)に道道昇格の要請をしたところ翌年６月に承認され、以降道道として事業が継続されることとなった。

１９７０年(昭和45年)から道土木部(帯広建設管理部)によって継続された工事は１９７２年(昭和47年)までに４４０㍍延長された。

道路工事中断

１９７１年(昭和46年)全

国的に公害問題や自然環境保全に対する世論が急速な高まりを見せ、道内自然保護団体などもこの道路計画による自然破壊への危惧を抱くようになり、１９７２年(昭和47年)４月、北海道自然保護協会は、「士幌高原道路予定コース」には貴重な動植物が存在し、道路建設によって重大な被害を受けるおそれがあるのでトンネル工法を取り入れる等、適切な方法への工事設計の変更について道へ要望書が提出されたのをはじめ、地区労十勝ブロック会議、鹿追町自然を守る会も同趣旨から建設中止の申し入れがあった。また翌、１９７３年(昭和48年)には鹿追町議会でこの道路の建設反対の決議を行っている。

各団体の道路建設中止申し入れや自然保護の全国的な運動は、士幌町にとっても大きな衝撃となったが、この道路建設にあたって一部自然への配慮に欠けていたことも事実として認め、開発優先の考え方を改めて自然を守りながら開発を進める方向に転換することとなり、１９７２年(昭和47年)６月に「開発と自然保護の会」を結成した。以来同会は、士幌高原一帯の清掃、植樹、自然保護に対する町民啓蒙、講習会などを行う一方、自然に配慮した道路の建設を、道をはじめ関係機関に要請してきた。

道は各団体からの中止申し入れや自然保護に対する従来の建設方式の反省にたって、１９７３年(昭和48年)以降この道路の新規開削を中止し、既設道路の法面等の緑化、自然復元に努め未着工部分２・６キロﾒｰﾄﾙについては、トンネル工法等を取り入れた工事計画、ルート変更の検討に入り、１９７５年(昭和50年)に建設省、環境庁との協議を進める一方、自然保護団体等にも意見を求めた。

環境アセスメント

１９７８年(昭和53年)から道は、㈱北海道開発コンサルに委託してこの高原道路に対する「環境影響評価調査(環境アセスメント)」を３年間にわたり実施したが、この調査に基づき道内部で路線、工法等について検討を重ね、１９８７年(昭和62年)に公聴会を開催、地元３町(士幌、上士幌、鹿追)の同意を得ると共に道内有識者による検討委員会に付議、「おおむね妥当」との答申を受けた。

更に道は自然保護に万全を期すべく、十勝自然保護協会(１９７１年設立)等との協議により、１９８８年(昭和63年)から３か年かけて地域自然環境の詳細調査を行い、１９９１年(平成３年)調査を終了、それぞれ自治体関係機関に報告書が配布された。

士幌高原道路早期完成決起集会

６年にわたる環境アセスメントの実施は全国的にもまれなことで、自然に配慮したモデル的な道路造成として期待されていた。

推進と反対

道は、１９７３年(昭和48年)以降新規開削を中断し既設開削部分の補修整備と起点からの改良舗装、歩道設置などの工事を行いながら環境アセスメント等を通じ、また自然保護団体や労働団体等の意見を尊重して路線や工法の変更、動植物に配慮して必要な場所についてトンネル、陸橋等の工法を取り入れることを示し反対の立場をとる団体等の理解を求めた。

１９８７年(昭和62年)地区労十勝ブロックが工事再開に賛成の立場を表明、翌１９８８年(昭和63年)には、高原道路建設反対の決議をした鹿追町が地元住民の強い求めに応じ、早期完成の陳情を議会が採択し１９７３年(昭和48年)の反対決議にピリオドを打った。

１９７１年(昭和46年)に設立した十勝自然保護協会は、当初北海道自然保護協会と連動し道路建設にあたって路線、トンネル工法など建設上の注文も出し消極的ながら同道路建設を認めようとする動きもあったが同協会内の意見の統一ができず、１９９２年(平成４年)十勝自然保護協会は分裂し、反対派(及川派)と柔軟派(野洲派)に別れた。道自然保護連合は十勝自然保護協会(及川派)を認知し最後まで反対運動を展開した。

一方高原道路建設を強力に推進する士幌町では工事中断による戸惑いも一時期あったが、自然の大切さを深く認識し地元の責任として自然を守る活動を積極的に進めようと「開発と自然保護の会」と連携し、並木の植栽、環境保全清掃、ミズバショウ、古木の保全、森林コースの造成、マウンテンバイクの普及奨励、野鳥観察会、野草を食べる会など自然を大切に自然に親しむ活動を進めてきた。また地域の自然を守るため１９７２年(昭和47年)から地

元住民に監視員を委嘱、その後も専従の監視員を置いて自然保護の強化を図ってきた。

地元としての道路建設再開への願いは強く、中断以降も毎年行政と民間が一体となって道をはじめ関係機関に道路建設の促進を要請してきた。

１９９１年(平成３年)からは鹿追、上士幌、士幌３町での合同陳情、翌１９９２年(平成４年)には、十勝町村会、十勝町村議会議長会が十勝の主要課題の一つとして、この道路の促進について陳情を行った。

分裂以来、十勝自然保護協会反対派は、環境庁、道、帯広土木現業所等に対し、この道路建設反対を強く申し入れる一方、哺乳類学会での反対決議や署名運動等による反対行動を先鋭化し、またこれに呼応して北海道自然保護協会も反対を声明するとともに活動を顕著にしてきた。

賛否両論の運動は報道機関の関心を深めて大きく報道され残る２・６キロ㍍の「建設か反対か」は、当時全国的な注目を集めるところとなった。

１９９３年(平成５年)５月、札幌市で開かれた北海道自然保護協会総会に会員として出席した元参議院議員丸谷金保は、かつて昭和30年代士幌村農民連盟事務局長として演習地反対や新田地区開発にそのリーダーとして活躍し高原道路の必要性を力説した闘士の一人であったが若き日に描いた夢実現への情熱はなお脈々として燃え、同総会の席上この道路建設の経緯と必要性を強く訴えた。

出席会員の中には、その意見に賛同し、反対行動に批判的な人もいたが反対決議を覆すまでにはいたらなかった。

全線トンネル案

環境アセスや動植物の詳細調査を終えた道は１９９２年(平成４年)７月、定例道議会で清水誠一議員(帯広市選出)の士幌高原道路の今後の取り組みに対する質問で横路孝弘知事は、調査終了後、速やかに道路建設が出来るよう取り組むと言明、加えて現地調査はおおむね２年間で実施する考えを明らかにした。同年９月帯広土木現業所による測量調査が開始されることになり関係者が現地入りしたが反対派の抵抗もあり、この日は混乱を避けて中断したが、10月に入ってから平穏に測量を進めた。

地域住民への新たなトンネルルート説明会

士幌高原道路は地域振興のうえからも必要な道路であると位置付ける横路知事は、１９９３年(平成５年)９月30日の道議会で「自然環境への影響を最小限に抑えるため、未開通区間全線をトンネルで結ぶ案を基本とすることが最善と考える」と答弁し、事態は新たな展開を迎えた。

道土木部では、知事見解をうけ、いくつかの全線トンネル案をつくり建設省、環境庁とのルート選定の協議と併せて、学識経験者による検討委員会も開き協議を続けてきたが最終的に環境上一番影響の少ないルートとして第２展望台(銅像のある第１展望台から１・８キロ㍍)付近から白雪山の南西下を通り然別湖南端に抜ける延長２７００㍍のうち２４４０㍍をトンネルとするルートを選択し、１９９４年(平成６年)12月の定例道議会で横路知事が正式表明した。

新たなトンネルルートの地域住民への説明会が同年12月17日総合研修センターで開かれ、士幌、上士幌、鹿追、音更の町民約５００人がつめかけ、道路の必要性、トンネルルートの選定経過、今後の事業計画など詳しい説明を受けたが説明後の質疑応答では、早期着工、完成を要望する声が相次いで出された。

帯広土木現業所からは１９９５年(平成７年)度には環境に配慮した調査設計を行いたいとの意向が示された。

環境庁承認

１９９５年(平成７年)５月９日、一般道道士幌然別湖線の計画ルートの是非を判断するため環境庁自然環境保全審議会自然公園部会の一行が十勝入りした。到着後帯広市で小委員会(委員12人)を開催し、高原道路建設の賛成側、反対側の代表から意見を聞き、翌10日には現地視察を行った。

賛成側の立場からは、十勝総合開発期成会長、北海道商工会連合会十勝支部長など12人が出席し、小川町長はその代表として意見陳述を行った。

意見陳述で小川町長は、この道路は十勝の基幹産業である農業や、商業の振興に大きく寄与できること、新しい滞在型・体験型の観光が実現できることなど具体的な内容を述べるととも

に「30年間に及ぶ地域の熱い思いを理解願い公園計画車道として認めて欲しい」と陳情意見を述べた。

翌10日の現地調査では安田環境庁西北海道国立公園・野生生物事務所長の説明で、士幌高原ヌプカの里、第2展望台、トンネルルート入口、開削終点、然別湖トンネル出口、千畳くずれを視察し質疑が行われた。

環境庁自然環境保全審議会は、環境庁長官の諮問機関で、今回の目的は大雪山国立公園計画見直しの現地視察として来勝した。

環境庁から諮問を受けていた同審議会は、現地での意見陳述や視察結果をもとに審議を続けていたが5月30日、一部留意する意見(付帯意見)を付けてはいるが、士幌高原道路のトンネルへの変更計画を認める決定をした。承認にあたり留意する意見として付けられたのは次のとおり。

①地質、地形について専門的に調べる。

②工事実施に伴う周辺への影響や排ガスの影響を検討し、その対策をとる。

③然別湖地区の道路など、各施設整備は慎重で適正な利用に努める。

ナキウサギ裁判

1996年(平成8年)8月26日道内の自然保護運動関係者21人(代表八木北大名誉教授)が堀達也知事を相手取り、士幌高原道路の建設にかかわる一切の支出差し止めを求める行政訴訟を札幌地裁に起こした。

訴状による公費違法支出差止請求の趣旨として、道路建設予定地はエゾナキウサギの生息地であり、コマクサの自生地としても判明していることや、全線トンネルルートとしてもその出入口周辺は日本最大規模の風穴地域で地下には永久凍土も存在し、この風穴によってエゾイソツツジ、コケモモ、ガンコウランなどの高山植物が自生、また出入口周辺にも氷河期の生き残りと言われるエゾナキウサギが生息しており、道路建設により自然環境での生態系の破壊、種の破壊、遺伝資源の破壊など生物多様性の脅威にあたるとし、この計画は「北海道自然環境保全指針」をはじめ「環境基本法」「文化財保護法」に違反するとしている。この裁判は公費支出差し止めの訴訟であるが、道路建設による動植物、とりわけナキウサギへの影響について争うもので通称「ナキウサギ裁判」と呼ばれた。

ナキウサギ

一方、道は、この訴状に対し、道路建設にかかわって違法性の問題は生じないとし、環境基本法は国の債務を規定したもので地方公共団体には適用されない、文化財保護法ではカラフトルリシジミ個体のみが天然記念物に指定されているもので、その生息地まで指定されておらず、本計画が実行されても直ちに天然記念物の滅失等の罰則を定めた同法(107条の2第1項)違反の問題とはならない、また、道の自然環境保全指針については、法的規制を伴うものではなく、あくまでも道しるべとしたもので違法とはならないと反論し、この道路は広域観光ルートの充実などによる観光開発や地域振興の支援、更に道道鹿追糠平線の代替ルートとして、また交通事故や災害等の緊急事態に対応することを目的とした必要性のある道路として争うこととした。

同裁判は、1996年(平成8年)11月28日の第1回口頭弁論から始まり、札幌地裁が現地調査を行い、また原告、被告双方による激しいやりとりで延々と進められてきたが1999年(平成11年)3月、時のアセスメント対象事業となっていた士幌高原道路が工事中止と決定したことから同年4月15日開かれた第13回口頭弁論で原告側が訴えの取り下げを申し出、提訴から2年8か月に及ぶ裁判は終結した。

時のアセスメント

堀知事は、1997年(平成9年)1月6日、道庁内で年頭の記者会見を行い構想着手から時が経ち住民ニーズに合わなくなった道の大規模事業の継続を含めて見直すため「時のアセスメント」(時代の変化を踏まえた施策の再評価)制度を発足させることを表明した。1月中にも要綱を定め道庁内に検討委員会を設置して事業の点検、再評価を行うというものである。

一連の食糧費等裏金操作による不正経理の発覚で厳しい世論から視線を反らそうともみられるこの施策は、前述の記者会見では対象事業を明らかにしていなかったが、新聞等の報道などでは、士幌高原道路などが対象事業としてやり玉にあがるだろうとの観測もあり、士幌町内はじめ近辺地域に大きな動揺と不安が広がった。

時のアセスは、事業の①

必要性、②妥当性、③優先性、④効果、⑤住民意識、⑥代替性など6項目について再評価しようとするものであるが、道道士幌然別湖線は環境庁の承認も受け、新規開削こそ中断していたが既設部分の整備など継続的に事業を実施しており、これから新ルートによる事業再開が行われようとしている時、この制度の対象になるものでないと強く主張してきたが、道はこの年の7月15日の政策会議で士幌高原道路を含む6事業を時のアセスメント対象事業として決定公表した。

対象事業となったことで地域には危機感が高まり、4町の促進期成会をはじめ、町内各機関、団体による強力な促進運動が展開され、同年8月25日には北十勝4町住民や、札幌士幌会会員など260名の促進要請団を札幌に派遣し、代表による道幹部への要請のほか、班編成による道議会や関係部局への要請と札幌市民への支援、協力要請のためのビラ配り等を行い道路促進に対する理解を求めた。

決定された対象6事業(その後3事業増えて9事業となる)は、その後も覆されることなく1999年(平成11年)3月を目途に再評価し施行方針が決定されることになった。

道路建設中止

時のアセス対象事業に決定した士幌高原道路は、その後担当部局の道建設部で「検討評価調書」が作られ、西村副知事を座長とする検討チーム(8名)で再評価、施行方針の検討に入った。

一方士幌町では、時のアセスは事業の中止、廃止を前提としたものではなく再評価の結果で継続・中止が決まるという知事の見解と1995年(平成7年)に行った北海道知事選挙で道道士幌然別湖線の早期完成を実現させるとした堀知事の公約を信じ対象事業となった後も促進運動を展開、道への波状的な促進要請のほか、数度にわたる1000人以上を動員した地域住民総決起集会を開くなど大詰めを迎えた道の方針決定に地元の声が反映されるよう強くアピールした。

他の対象事業が早々と中止決定する中、士幌高原道路に対する方針決定は遅れ、道建設部が交通解析調査、概算工事費算出、住民意識調査、事業効果分析、環境調査などを行って検討評価調書を取りまとめたのは、1999年(平成11年)3月11日であった。

「検討評価調書」では、本道路の必要性、妥当性はあると判断するが、地形、地質について引き続き調査検討が必要であるとし、「建設部としては、本道路の未開削区間の工事着工は、現時点では難しいと判断する」とされた。

掘知事から中止決定の電話を受ける小林町長

建設部から検討評価調書の提出を受けた「時のアセス検討チーム」は3月17日、事業の取扱いを、①道路の直接効果による費用弁益比は0・54と低い値、②広域ルートの形成の面から見ると効果は大きくない、③道民意識調査によると自然環境に与える影響を重視する傾向が見られる、④観光客や売上の増加に対する期待はさほど高くない、⑤有識者の意見は推進すべきとする意見がある一方、凍結や中止を求める意見も多く見られたとして中止を前提とした内容の調書を同日、知事をトップとする道の政策会議に提出した。政策会議は知事のほか、副知事、出納長と一部の部長クラスら道庁幹部だけで話し合う「時のアセス」の最終意志決定機関として組織されているもので、これまで既に結果の出ている他の対象事業の検討では、政策会議でほとんど意見のやりとりがなく担当部局の方針に従って結論が出されたが、士幌高原道路では約1時間切れ間無く発言が続いたといわれ、「中止という結論は無理がある、今の時点で判断しなくていい」中止でなく「凍結」を求めるという異論も出たという。最終的には知事の判断に委ねられたが知事は環境への打撃が懸念される、経済効果がさほど得られないとの判断で「中止」の結論を出した。

建設部の検討評価調書では、現時点での工事着工は難しいとしているものの動植物への影響はほとんどなく、この道路は必要であり、妥当と認めているのに知事の判断には矛盾を感ずる。同日午後5時25分堀知事から小林町長に電話が入り「工事取り止め」決定が知らされた。町長室に詰めかけた関係者一同から怒りと無念の息が漏れた。

30年来の地元の悲願として地域一丸となって推進してきた「道道士幌然別湖線道路」はこの瞬間「まぼろし」と化した。

代替振興策

電話で「建設中止」を伝え

た道は、翌日時のアセス検討チームの西村博司副知事ら道幹部が士幌町役場を訪れた。しかし町側は「知事が説明にくるべきだ」と強硬に反発したが最終的には小林町長と今田鉄郎議長の2人が同副知事から挨拶のみを受けるとして会うこととした。西村副知事は中止に至った知事判断を示した上で、地域振興に積極的支援する道の姿勢を示した。これに対して小林町長は「知事自らが説明に来るべきと多くの町民は怒りをもっている。アセスの制度を無視して政治判断で決着させるのであれば制度そのものに疑問が残る」と改めて不信感を示し、知事に直接地元に来て説明するよう伝えて欲しいと強く求めた。副知事らの訪問は20分ほどで終わり、今後の地域振興策については、再度打ち合わせることになった。

その後も知事は士幌町を訪れることなく、同年4月11日執行の北海道知事選挙で候補者として、3月末遊説のため十勝入りし、管内半数以上の市町村を巡回したが本町には立ち寄らなかった。当選(再選)後の記者会見で高原道路建設中止問題について「私自身が地元に話す機会をつくりたい」としていたが、すぐには実現せず、中止を発表して以来、町長が知事と接触したのは同年7月28日がはじめてであった。しかも他の用務で来勝した折に帯広市で地元4町(士幌、上士幌、鹿追、音更)の町長と議長との懇談という形で行われ、時のアセスによる中止経過の説明はなく今後の地域振興策についての懇談となった。

懇談の席上小林町長は、建設中止の結論は大変残念である。高原道路に対する地域の思いは重く受け止めて欲しいと述べ、地域主体の振興策を積極的に支援するよう求めて、具体的には「士幌高原を中心とした環境教育の拠点づくりや環境にやさしい農業の実現等を軸とする振興策」の方針を伝え支援を要請した。

これより先士幌町では、

プロジェクトチーム発足

助役をはじめとした役場プロジェクトチームを発足させ、1996年(平成8年)から10か年の町づくり総合計画で「高原道路の早期開通の促進」とこれを前提とした農業振興策や「自然環境教育メッカづくり」などの施策修正や町としての代替施策の策定に着手した。「地域の思いは思いとして、行政としては現実的な振興策を探さなければならない」とする士幌町は、道路建設の民間推進組織「開発と自然保護の会」総会で小林町長が道の中止決定で断念するのは遺憾であるが今後の施策には町民の意見を反映させながら町、町議会が連携して進めていくと報告し、今後の協力を求め、同会も異論はなく町の振興策への支援と推進活動を進めることが承認された。

また道路促進運動を展開するため組織していた北十勝4町の町長と議長で構成していた「道道士幌然別湖線促進期成会」も総会を開き組織の解散をすることとしたが、新たな広域連携を図るための協議機関を設立することになり「北十勝4町地域振興連絡協議会(町長・議長)」を設立、当面は士幌高原道路に関わる地域振興策を検討協議することになった。

一方、道は道庁と十勝支庁に士幌高原道路に代わって地域振興策を検討するプロジェクトチームを発足させ、士幌町など地元4町が進める振興策づくりへの助言や具体的な支援策を検討することとし、今後2年間をめどに振興策を固める一方、着手できる事業については来年度予算案で実現を図った。

町では2000年(平成12年)10月をめどに地域振興策の取りまとめを目指し作業を進め、施策に町民意見が反映されるよう町内団体への提言要請や町民には「ユートピアメール」による意見募集などを行ったところ多くの提言や意見が寄せられた。寄せられた意見・提言は、庁内で組織した「振興方策検討プロジェクトチーム」等で検討し振興策にふさわしい事業の検討を進め、「北十勝4町地域振興連絡協議会」に士幌町の意見として提出した。同協議会では士幌町中心の振興であることを踏まえながら4町広域連携での振興策づくりを進め、次のような基本方針を決定した。

①新世紀「農業」の先進地とするために。
②自然・生活「環境」の調和のとれた共生地域とするために。
③農業・農村景観と自然が融和する「観光」の拠点とするために。

その後4町協議会では3つの基本理念に基づき、①交流産業担い手プロジェクト。②循環型農業システム

プロジェクト。③流域環境保全プロジェクト。④ネイチャーネットワークプロジェクトからなる基本的考え方をまとめ、4プロジェクト22事業で構成される北十勝4町地域振興計画をまとめ、2001年(平成13年)1月道に地域振興計画を提出した。

◎士幌高原道路の足どり

1934年(昭和9年)
・大雪山国立公園指定
1958年(昭和33年)
・士幌村議会議員によるルート踏査
1962年(昭和37年)
・新田地区草地造成に着手
1963年(昭和38年)
・他町村通過に伴う承認申請
・町道として整備することを決定
1965年(昭和40年)
・公園事業計画で車道と決定(厚生大臣着工許可)
1966年(昭和41年)
・町道として国庫補助に採択され着工
1969年(昭和44年)
・道道に昇格(道道士幌然別湖線となる)
1970年(昭和45年)
・道道として着工
1971年(昭和46年)
・十勝自然保護協会設立
1972年(昭和47年)
・北海道自然保護協会が北海道知事、帯広営林局長に反対要望書提出
・鹿追町自然を守る会が帯広土木現業所、上士幌営林署長に工事中止陳情書提出
・士幌町開発と自然保護の会結成
1973年(昭和48年)
・鹿追町議会が士幌高原道路阻止を決議
・新規部分の開削を中断、既設部分の法面保護を中心に工事を進めることを決定
・第1回士幌高原のつどい開催
1974年(昭和49年)
・道士木部、トンネル工法などを含む工事計画を検討(トンネル試堀)
1975年(昭和50年)
・変更ルート現地踏査実施
1978年(昭和53年)
・北海道環境影響評価条例制定
1979年(昭和54年)
・道道士幌然別湖線早期完成決起集会
1982年(昭和57年)
・自然環境調査報告まとまる　駒止トンネル案に内定
1987年(昭和62年)
・地元3町で説明会を開催(出席者　延539人)
・士幌町自然環境保全監視人配置
1988年(昭和63年)
・鹿追町議会が道路早期完成の請願を可決、1973年の反対決議にピリオド
・ボーリング調査(駒止湖の水位との関係)
・ボーリング結果地下水脈は確認できずと発表(帯広土現)
・検討会議、アセス報告書の内容はおおむね妥当と答申
・動植物など詳細調査を開始
1991年(平成3年)
・士幌、上士幌、鹿追の3町長・議会議長合同陳情(十勝支庁長、帯広土現所長、北海道知事)
1992年(平成4年)
・道道士幌然別湖線早期完成決起集会
・早期完成を求める署名2万人集まる
・現地測量調査に着手
・十勝自然保護協会が野洲派と及川派に分裂
1993年(平成5年)
・道議会で「トンネル案を基本とする」と知事答弁
1994年(平成6年)
・道が新トンネルルート公表
・士幌、上士幌、鹿追、音更の4町による道道士幌然別湖線促進期成会設立
・音更町、士幌町、上士幌町の3町議会が早期完成への促進議決を行う
1995年(平成7年)
・環境庁自然環境保全審議会が3点の留意事項を付けて新トンネル案を承認
1996年(平成8年)2月
・トンネルルート着工に向けた水平ボーリング調査実施
8月
・ナキウサギ裁判開始(公費違法支出差止請求訴訟)
1997年(平成9年)1月
・堀知事が「時のアセスメント」導入を発表
2月
・促進期成会(4町)の青壮年が十勝20市町村へキャンペーン
7月
・士幌高原道路が時のアセス対象事業に確定
・町内各団体(5団体)、4町期成会の要請活動活発化
8月
・260人の大要請団札幌へ促進要請
1998年(平成10年)5月
・士幌高原道路促進地域住民総決起集会(参加者1400人)
6月
・代表者30人、道庁や道議会へ促進要請
10月
・道民意識調査集計結果公表
1999年(平成11年)2月
・間接効果などを報告
・賛成・反対の各団体から意見聴取
3月

・道建設部が検討評価調書をまとめる。道路の必要性、妥当性はあるが、引き続き調査、検討が必要で、現時点での工事着工は難しいと判断

・道の政策会議で知事判断により建設中止となる

4月

・ナキウサギ裁判で原告側が訴えを取り下げ

6月

・4町による促進期成会解散

7月

・新たに4町の地域振興連絡協議会を設立、今後の地域振興策の検討協議に備える

2001年(平成13年)1月

・北十勝4町地域振興連絡協議会、振興計画決定

・北十勝4町地域振興計画を道に提出

北十勝4町地域振興計画

士幌高原道路(道道士幌然別湖線)の代替振興策として、北十勝4町が策定した「北十勝4町地域振興計画」は、2001年(平成13年)度より実施に向けた具体的な検討を進め、即実施可能な事業については、4町と協議のうえ道と支援に向けた協議調整を進めることとし、4プロジェクト22事業の検討を進めた。

なお、本計画の中で重点事業として3つの事業を指定し、これらについては、道においても調査研究費を計上し、実施に向けた検討を進めることとなった。

重点事業

①交流産業担い手育成プロジェクト

自然体験指導者養成センター整備事業(道支援事業　地域特性を活かした担い手づくり事業)

②循環型農業システムプロジェクトバイオガスプラント実証施設整備事業(道支援事業　環境に負担のかけない家畜糞尿処理システムの策定事業)

③流域環境保全プロジェクト

流域マスタープラン策定事業、北十勝流域ネットワーク整備事業(道支援事業　流域環境保全のシステムづくり事業)

士幌町が関係する事業のうち、事業実施および実施可能となった事業

①総合的グリーンツーリズム支援事業

道の補助を受けながら、今後の推進に必要な調査研究および検討会の実施

②農産物加工施設廃棄物再資源化事業

道の補助を受け、国庫補助の上乗せ支援を受ける。

③下居辺ふれあいの里づくり事業の推進

道において、道道事業および河川景観修事業において、駐車公園、道道の歩道拡張に伴うサイクリングロ―ド化、水ゾーンの整備

4プロジェクトの経過

⑴交流産業担い手育成プロジェクト

士幌町が主体となって取り進める「自然体験指導者養成センター整備事業」については、2002年(平成14年)3月道のプロジェクトチーム会議において、道立運営では、財政的な面や運営面で実施困難との見解が出され、これを受け、士幌高校を道立に移管し、自然体験指導者養成機能を持たせることが可能か道、町双方で検討された。町においては、教育委員会、高校関係団体、機能検討プロジェクト会議において「士幌高校の在り方」として検討されたが、同年6月教育委員会より町に対して「平成13年10月5日付けで認可を受けた現行学科の主旨に従い士幌高校を存続する」との検討結果の提出があった。町は、自然体験に農業体験も合わせながら、グリーンツーリズムと連携した食品加工研修センターの整備を2003年(平成15年)度に行うこととした。

食品加工研修センター

床面積　1階908・28㎡　2階213・34㎡

地下1階12・96㎡

事業費　4億3389千円

また、2003年(平成15年)11月に「食農フォーラムinしほろ」が総合研修センターふれあいホールで開催され、基調講演「今、地産地消活動に求められているもの」ファーム&スペース・レラ世話人新田みゆき氏。パネルデスカッションが行われた。

⑵循環型農業担い手育成プロジェクト

振興計画の重点事業である「バイオガスプラント実証施設整備事業」について、士幌町循環型農業システム検討会を中心に関心のある生産者も特別委員として参加し検討を行った結果、個別プラント型(250頭規模)2基の建設を2003年(平成15年)に、翌年同規模を1基建設した。

⑶流域環境保全プロジェクト

上士幌町が主管町となり、2003年(平成15年)6月の北十勝4町地域振興連絡協議会総会において北十勝流域憲章が決定され、同年

11月にシンポジウムが開催された。

⑷ネイチャーネットワークプロジェクト

鹿追町が主管町となり、各町の観光拠点の連携整備が検討された。

士幌町における拠点として、プラザ緑風の改築に伴い、居辺川修景整備、道道整備が実施された。

2、士幌の観光

観光基地

士幌町では一般的な観光資源は乏しく、唯一、士幌高原道路の開通を見込んで整備を図ってきた「士幌高原ヌプカの里」一帯が景観の地として注目を集めるようになり、毎年町内外から同地を訪れる人も多くなっていた。

士幌高原ヌプカの里

士幌高原ヌプカの里は、都市と農村の交流を図るための学習体験の里として整備してきたもので「ロッジヌプカ」を中心に、高山植物園、遊具、遊歩道、キャンプ場のほか、コテージ、木材展示館施設などが整備され、アウトドア施設としてマウンテンバイクコース造成と共に全道マウンテンバイク競技大会が同コースで続けられてきた。

移住体験住宅「オリベ」

東ヌプカウシ山麓「大雪山国立公園」内に位置するこの周辺は、十勝平野を視界180度でさえぎるものなく、その景観は北海道でも有数の自然豊かな場所として、自然を守りながら、都会の人々とふれあう貴重な地域資源として今後の整備が期待される。

また下居辺地域は、温泉施設とホタルの里、また、2013年(平成25年)に整備した、移住体験住宅「オリベ」や2018年(平成30年)に整備した農園付き住宅を有し、町内第二の観光資源としてPRし交流人口の増加を図り、農業、商業等の関連産業との相乗効果を考えた取り組みが求められている。特にこれからは、都市と農村を結ぶ新たな共存関係を目指したグリーン・ツーリズム・体験型観光の研究、推進で地域の活性化を図ることが重要となる。

観光協会

士幌町に観光協会が設立されてから、やがて40年になろうとしている。観光協会は、士幌高原道路促進運動が活発化し、高原での観光開発の機運が高まってきた時期をとらえ、1982年(昭和57年)に民間組織として設立したもので、町内の観光資源の調査研究、郷土の特産品、名産品の調査開発、観光地の宣伝紹介や観光客の誘致活動などを通じ住民の文化民芸の向上発展と産業の振興を図ることを目的としている。

年間の主な事業としては、しほろ収穫祭、北海道バルーンフェスティバル(上士幌町)、さっぽろオータムフェスト(札幌市)、とかち大収穫市うまいもんまつり(帯広市)など、広報宣伝活動として、観光パンフレット発行、観光ホームページ開設など、企画振興活動としては、しほろ7000人のまつり、しほろっち夏祭り(花火大会)、ホタル観賞会の協力、シーニックバイウェイ北海道十勝平野・山麓ルート代表者会議への参加・活動協力を行っている。

会員の状況は

22事業者、特別会員　11団体、賛助会員　13団体

観光協会会長

加藤邦彦(現在)

北十勝4町広域観光振興事業

2011年(平成23年)の道東自動車道清水～夕張間の全面開通に向け、札幌圏や千歳空港を利用する観光客へのPRを図ることを目的に士幌町・音更町・上士幌町・鹿追町の4町で構成する北十勝4町広域観光振興協議会が2008年(平成20年)5月に設立され、地域資源を活かした観光事業の連携強化と観光客誘致に向けた取組として滞在型観光客の誘致と動向の把握を目的とした事業の取組を行った。

開通後も連携して誘客促進への取組を続けることとなり、SNSを使った発信事業やバスツアーの企画、海外プロモーションなど4町のPRを実施し今後の観光客の課題などを探っている。

3、下居辺温泉

緑風荘から、しほろ温泉プラザ緑風へ

１９７７年(昭和52年)に、農業構造改善事業による補助を受けて建設された農民健康増進施設「緑風荘」は、町内はじめての温泉宿泊施設として、良質な泉源と閑静な環境の保養地として好評であったが、施設規模も小さく、また近隣に近代的な温泉施設も増えてきたことなどから、利用客も年々減少し、１９９９年(平成11年)度の利用実績は、宿泊１９７３人、休憩１５２７人で、１９９１年(平成３年)の実績に対し、宿泊で69％、休憩で46％にしか達していない。また毎年町民世帯に10枚ずつ交付している無料入湯券の利用も清渓園の利用も含め40％程度となった。

しほろ温泉プラザ緑風

緑風荘は建設後23年経過し老朽化が進んでいるが、町では第４期町づくり総合計画において、下居辺地区を温泉などの地域資源を活用した「特色ある拠点づくり」のエリアとして位置づけ、１９９８年(平成10年)に、下居辺「ふれあいの里づくり」基本計画を策定した。この計画の中で緑風荘に代わる温泉宿泊施設の整備を図ることとし準備を進めてきたが、１９９９年(平成11年)度で、町づくり懇談会などを通じて町民の意見を聴し、参考にしながら設計を行い、２０００年(平成12年)６月に着工した。

予定どおり工事が進み８月には本体部分が完成、外構工事並びに備品購入についても順調に進み、当初の予定通り２００１年(平成13年)10月１日にオープンした。

名称は公募の結果、帯広市の小池八重子さんから応募があった『しほろ温泉「プラザ緑風」』に決定。オープンに先駆け９月26日には、町内外からの来賓者、各主要団体長、地元関係者、工事関係者等多数により落成式を挙行、10月１日にオープンセレモニーを挙行した。

「下居辺交流施設」と位置づけた新しい温泉施設は、鉄筋コンクリート３階建、延床面積約３６００平方㍍で、部屋数は和・洋室併せて15室(和室11室、洋室3室、身障者用１室)で洋室３室のうち２室については、家族・小グループで利用できる「メゾネット(１室が１階と中２階で造られ双方併せて利用できる)」タイプとなっており、約60名の宿泊が可能となっている。また、浴場部分は、利用者から希望の多かったサウナ、露天風呂を完備、その他レストラン、休憩室、地場産品展示販売コーナーなどを設置した。また、旧緑風荘の一部も２００２年(平成14年)度から別館として使用している。

運営は、町50％出資の第三セクター「株式会社ベリオーレ」を設置し、同社に委託してきたが、指定管理者制度導入により、２００６年(平成18年)度から同社を指定管理者として指定し基本契約を締結し、施設を管理運営させている。

施設利用状況は、２０１９年(令和元年)度で、宿泊９６５８人、日帰り宴会３２８４人、入湯利用者は９万５５７１人となっている。また、毎年町民世帯に交付している無料入湯券の利用率は、配布枚数に対し55％となっている。

２０２０年(令和2年)度の施設利用率は、新型コロナウイルスの流行により大幅に減少し、宿泊５５５９人、日帰り宴会３６２人、入湯利用者は8万２９０人となっており、無料入湯券の利用率は41％となった。(表－１参照)

表－１　しほろ温泉プラザ緑風利用状況　(単位：人)

年　度	利用者数	
	宿　泊	休　憩
１９９９(平成１１年度)	１,９７３	１,５２７
２００１(平成１３年度)	５,６５６	３,８３３
２００３(平成１５年度)	１１,３７２	５,２５２
２００５(平成１７年度)	９,１９９	６,１１０
２００７(平成１９年度)	１１,２０７	６,５０６
２００９(平成２１年度)	９,００４	５,４７６
２０１１(平成２３年度)	８,５２７	５,５２９
２０１３(平成２５年度)	９,２０９	５,４９５
２０１５(平成２７年度)	１０,６０４	５,７０６
２０１７(平成２９年度)	９,２６２	４,８４８
２０１９(令和元年度)	９,６５８	３,２８４
２０２０(令和２年度)	５,５５９	３６２

山の湯温泉

緑風荘より4年早い、1973年(昭和48年)に温泉脈を掘り当てた坪坂屯が、有限会社山の湯温泉清渓園として温泉旅館を開業、その後1980年(昭和55年)には、会社が西潟征男に引き継がれ、家庭的な自然体のサービスが親しまれ、幅広い常連客層によって手堅い運営が行われていた。

1991年(平成3年)からは町の発行する無料入湯券の利用も可能となり好評を得ていたが、2012年(平成24年)10月に休業となった。

山の湯温泉

第三章　建設と交通

1、道路

進む改良舗装化

士幌町における町道の認定路線は、２０２１年（令和３年）４月現在で３５２路線、実延長５８６キロメートルとなっている。

車社会の今日、住民の生活（交通）手段として使われる道路の整備は、年々着実に進められており、特に農畜産物の輸送など利用度の高い、農村道を優先して整備が図られている。町道全体の改良率は82・５％で舗装率も51・５％と、１９９１年（平成３年）の舗装率26％からみて大きく伸びた。

道路の交通安全施設として、幅員の拡張・歩道の設置も進められ、２０２０年（令和２年）８月現在、町道の歩道設置は71路線延48キロメートルで、通学児童等の安全確保に備えている。

士幌大橋開通

士幌市街地の道路については、１９８８年（昭和63年）から行われた現国道２７４号拡幅工事（ふれあいの道）と、１９９３年以降実施した士幌停車場線拡幅事業で中心部の整備を図ったが、裏通りについても順次整備することとしている。

旧道道本別新得線は、１９９３年（平成５年）４月１日、清水～士幌間（国道２４１号に交わる地点まで）が国道に昇格、国道２７４号となった。

国道２４１号交点から本別までは道道本別士幌線として残り帯広建設管理部によって道路管理が行われている。

国道（２７４号）に昇格した士幌市街区間は、同昇格前に「ふれあいの道」として道路の拡幅整備が図られ、道道として残った国道２４１号以東の本別士幌線についても、１９９３年（平成５年）から、帯広建設管理部（当時：帯広土木現業所～平成22年４月支庁改革により名称変更）において拡幅工事が進められており、これまで下居辺市街に向かって工事が進められ、居辺坂の急勾配、半楕円形にカーブする箇所も緩和され直線部分も多く交通安全上好ましい整備が図られ１９９８年（平成10年）８月から供用が開始された。

下居辺市街から本別町の境界までの区間は、勾配・カーブともに急な箇所が多くこれを抜本的に改良するため、従来ルートより南側の谷を経由する新ルートに変更し工事が行われ、２０１０年（平成22年）３月より供用が開始された。２０００年（平成12年）度に着工し、総工費65億円が投じられた。

新ルートは延長３９１０メートルで、４本の橋が架かり、中でも山景大橋（２６４・８メートル）は、５年がかりで架設した。これにより、最小曲線半径は40メートルから２００メートルへ、最急勾配は７・４％から４％へ緩和された。

士幌町中音更から西２線22号を結ぶ延長約３キロメートルの新ルート「十幌防災」では、士幌新橋の南１・７㎞地点

士幌町内道路橋りょう現況

表－１　　令和３年４月現在

	路線数	実延長（km）	改良済（km）	舗装済（km）	改良率（%）	舗装率（%）	橋りょう	
							数	延長（m）
国　道	2	24.6	24.6	24.6	100.0	100.0	4	320
道　道	9	70.8	70.8	67.9	100.0	95.9	21	1,025
町　道	352	586.3	483.8	302.1	82.5	51.5	202	3,518
合　計	363	681.7	579.2	394.6	85.0	57.9	227	4,863
参　考 平成３年 当時町道	282	551	330	146	60	26	166	2,529

に新たに「士幌大橋」が設置され、交通ネットワークの充実と耐震性を確保するとともに、狭い道路幅員や直角交差点の解消が図られた。

２０１２年(平成24年)12月15日には開通式が執り行われ、交通安全宣言やテープカットの後、「士幌防災」の永続、町の発展を祈願し、地域の住民を代表して出村一介・光代夫妻と息子、孫の三世代夫婦６人を先頭に「士幌大橋」の渡り初めを行い、開通を祝った。

士幌防災の完成に伴い、旧道(士幌新橋を含む)は２０１７年(平成29年)４月に国管理から北海道管理へと移管された。(表－１参照)

橋りょう

町内の河川等に架けられている橋りょうは、町道で２０２か所、延長３５１８㍍に及んでおり、１９９１年(平成3年)と比べ36か所９８９㍍の増となっている。大きな架橋事業はほとんどなく、直轄明渠事業により増加あるいは延長を図ったもので、既設の橋りょうも含めすべて永久橋化されている。

町道のほかに国道、道道でもそれぞれ何か所かの橋が架けられているが、道道本別士幌線では、拡幅工事に伴い、昔から大雨等の被害で通行止めを招いていた居辺橋が１９９６年(平成８年)から、架けかえ工事が現橋より北側で進められ４年間の難工事を経て１９９９年(平成11年)に完成した。

現在、国道で4か所、延長３２０㍍、道道で21か所１０２５㍍の橋が架けられている。

除雪と道路維持

町道の改良・舗装化も進んでいるが、交通量増加に加え、車両の大型化と経年に伴う損傷箇所も多く点在しており、付帯する道路側溝整備等を含む道路維持に努めている。

夏期の路面維持は、地区保全隊事業と連携をとりながら、状況に応じて改良済道路は砂利、未改良道路は砂利および火山礫を散布し良好な走行が保たれる路面となるよう努めた。また、グレーダーによる路面の不陸均しを全町的に行うとともに、保全隊要望に合わせ砂利等の散布前後に実施した。

道路施設の維持では、重機借り上げによる道路法面補修、側溝整備等、町有車両による道路路肩の草刈り、雑木の除去等を実施し道路維持を図っている。

冬期の交通路を確保するために除雪作業は欠くことはできない。町では早くから直営除雪車両のほか、民間機動力を借り上げて除雪作業を行い交通路の確保に当たっている。

帯広開発建設部は、１９９４年(平成６年)、国道２

冬期間の除雪

41号沿いキング商会ガソリンスタンド東側に士幌除雪ステーションを設置、前年度で国道に昇格した国道274号と国道241号の除雪のスピードアップを図った。

冬期間の交通を確保するために、町有車両8台の他、借り上げ除雪車両28台で除排雪を行うとともに、圧雪路面の整正、歩道の確保、吹き溜まり箇所の拡幅等を実施し、凍結防止剤を散布し交差点、坂道等の交通安全対策に努め、吹雪対策として、吹きだまりの多い地帯を中心に防雪柵を設置し、吹雪に備えている。

本町は比較的降雪の少ない地区とされているが、年によって降雪量に差があり、また農村部では降雪量が少なくても各地に吹きだまりができ、除雪のための出動を余儀なくされる。

現在、町が保有している道路維持の車両等は、除雪グレーダー、除雪ダンプ、小型除雪車2台、除雪ドーザー、小型ショベル、除雪トラック2台、小型トラック、パトロール車、トラクターとなっている。

1994年(平成6年)の機構改革で車両課は車両センターと呼称することになったが、2002年(平成14年)の機構改革で建設課に統合された。

士幌町車両センター

2、交通

民間バスと町営バス

1987年(昭和62年)3月で廃止となった国鉄士幌線の代替輸送機関は、バス転換事業によって、十勝バス、拓殖バスの両社が従来の定期運行のほか、鉄道代替分を増便し、3町と帯広を結ぶ沿線住民の足として重要な役割を果たしている。

2000年(平成12年)8月1日の運行回数は、両バス会社合わせて、帯広および音更高校方面(上り)が22回、上士幌方面(下り)が21回となっており、利用者の減少により当初の運行回数より若干少なくなっている。2020年(令和2年)5月現在の運行回数は、両バス会社合わせて、帯広および音更高校方面(上り)が17回、上士幌方面(下り)が17回となっており、更に減少している。

バス転換事業は、国の特別措置法による士幌線転換交付金(23億4900万円)で行われ、代替バスの初期購入等の必要額を除き、関係4市町に配分となり、それぞれが将来の車両更新補助、バス運営費補助、関連施設(待合所等)保守管理などの目的のため基金として備えた。1994年(平成6年)に最初の車両更新(9台)がはかられたが、本町の負担の補助額は6300万円。2002年(平成14年)車両更新(9台)では、補助額は約7200万円であった。

1997年(平成9年)度には、スクールバス格納庫を改築し、旧国鉄バス当時から使われてきた車庫を解体、同跡に鉄骨造り、約500平方メートルの車庫が整備され、全車両が格納されている。

士幌町ではスクールバスを配置し、中学生の通学を主として8路線で運行しているが、一部路線を除き、一般住民を混乗させて、町民バスとして利便を図っている。(表－1参照)

スクールバス利用状況

表－1

			1995 (H 7年度)	2000 (H12 年度)	2005 (H17 年度)	2010 (H22 年度)	2015 (H27 年度)	2020 (R 2年度)
スクールバス	路線数		6	6	6	6	6	8
	乗車人員	小学生	72	63	62	59	67	82
		中学生	156	128	98	84	79	106
		高校生	50	37	40	35	20	32
		計	278	228	200	178	166	220
一般利用者	路線数		5	5	5	5	5	7
	運行日数		273	271	244	243	243	243
	年間延乗客数		14,398	9,369	7,462	4,744	3,895	1,500
	1日当たり平均		52.7	34.6	30.6	19.5	16.0	6.2

コミュニティバス(コミバス)の運行

町では、高齢者など交通弱者の方の病院や買い物等への移動手段を確保するため、士幌市街を巡回するコミュニティバス(9人乗り)の運行を2015年(平成27年)4月から開始した。

開始にあたっては、2013年(平成25年)から試験運行を繰り返し、アンケートを行うなど通年運行に向けての取組を行ったものであり、結果として目標とした一日平均20人以上の利用を上回ったことから実施されたもので、北回り便・南回り便の2路線で運行されている。

コミュニティバス

高齢者等移動支援実証事業

2019年(令和元年)度から、農村部、中士幌に居住の交通弱者に対する支援として、ハイヤーチケットの交付を実証事業として開始した。

自動車運転免許証を保有していない75歳以上を対象とし、自宅～役場間2往復分をハイヤーチケットにより交付した。

2019年(令和元年)度
利用実績　58名
利用金額　39万8千円

2020年(令和2年)度には対象を70歳以上の運転免許証を返納した方や身体の不自由な方などにも拡大し、自宅～役場間6往復分のハイヤーチケットを交付した。

2020年(令和2年)度
利用実績　78名
利用金額　172万3千円

2021年(令和3年)度から、自宅～役場間12往復分に拡大し、本格運用を開始した。

ハイヤー・バス・貨物自動車

▽士幌ハイヤー

1955年(昭和30年)創業の士幌ハイヤーは、現在、5代目の石垣好典が社長となっている。士幌町は町長専用の公用車を持たず、早くから士幌ハイヤーを利用し、道内的にも珍しがられていたが、最近は、自治体の行政改革を進める中で士幌方式が進み十勝管内でも半数に近い自治体が町長専用車の廃止を行っている。

1998年(平成10年)に、士幌停車場線道路拡幅と近代化事業により、既存地に新社屋(車庫併設)を改築した。

2000年(平成12年)4月からは、スクールバス一路線(新田線)の運行を町の委託で開始している。

普通車、特大車(ワゴン車等)マイクロバスを保有し、社長のほか10人の社員で経営している。

営業種目、旅客運送、運転代行、観光貸切り等である。

・代表取締役　石垣好典

▽士幌運輸有限会社

1959年(昭和34年)の創業で、現在は大型トラック、重機などを保有し、農畜産物や砂利の一般貨物運送業のほか、建築物解体業、産業廃棄物・一般廃棄物収集運搬業、浄化槽維持管理(保守点検・清掃)、し尿汲取り、各種基礎工事(ハウス等下地掘削、農産物堆積土場整備)、路盤材(火山石、火山灰)販売等多岐にわたって事業を展開している。

2011年(平成23年)10月新社屋に移転。

・代表取締役　仁科　弘

▽北斗運輸株式会社

1980年(昭和55年)北斗産業株式会社が株主となり設立、主に農協系統機関を取引先とし、飼料、肥料、ビート、砂利のほか、枝肉、チルド肉、冷凍食品等の運送で品目によって本州方面への運送が行われる。

輸送事業のほか、産業廃棄物関連の許可証の取得により、廃棄物の収集、建物解体など事業の拡大をはかっている。

・代表取締役会長　國井浩樹

▽士幌交通株式会社

1978年(昭和53年)創業、西部自動車整備工場では、1971年(昭和46年)からレンタカーを置いて貸し出しをしていたが、北海道フーズ、士幌農協馬鈴しょ関係従業員輸送の需要に応え、旅客運送事業として会社を設立したもので、1989年(平成元年)からは、運行区域を拡大、観光専用バスを導入すると共に社屋も新築、2018年(平成30年)9月貸切バス事業者安全性評価認定制度の認定を受ける。

16台のバスを所有している。

・代表取締役　細谷庫嗣

▽ヤマト運輸(株)十勝士幌センター

1988年(昭和63年)に宅配便業界最大手の同社が町の軽工業団地に開設したもので、士幌、上士幌をエリアとして活発な営業活動を展開している。

・士幌センター長　山口生時

自動車関連業種

自動車の普及が進み、これに関連する産業も多くあるが、士幌町内では自動車修理工場が士幌と中士幌で営業されており、主な工場として、士幌自動車整備工場、西部自動車整備工場、中士幌自動車工業、中川自動車のほか農業用車両を主とする今木トラクターサービス等がある。

町内のガソリンスタンドは「表－2」のとおりであり、２０００年(平成12年)には町内に11か所のガソリンスタンドがあったが、現在は４か所となっている。

士幌町内ガソリンスタンドの現状

表－２　　令和２年８月現在

地域別	ガソリンスタンド(販売用)	
	数	許可数量(kℓ)
士幌市街	1	１０
中士幌市街	1	１０
士幌地区農村部	2	６４

3、通信

変わる通信手段

日本の通信手段としての始まりは、「飛脚」(ひきゃく)制度が原点で、郵政事業での郵便業務はその延長線上にある。速く知らせたいことは「速達郵便」大事な通信事項は「書留郵便」また小荷物を届けたいときは「小包郵便」と郵政事業では多くのメニューを揃え国民の情報伝達の手助けをしている。

速達郵便より速い通信手段として電報が使われ、更に電話の普及へとつながるが、これらの事業は、日本電信電話公社が担当してきた。１９８５年(昭和60年)同公社は民営化され「ＮＴＴ」と称している。

電話が一般化していなかった時代の電報は緊急時の通信手段であったが、現在では、吉事と凶事での慶弔電報がほとんどで、通常電報はまず使われていない。

一方、電話については、公社の民営化と共に一般業者の電話事業への参入で競争激化によるサービス向上がはかられている。電話機も様変わりし、多機能機種とサービスメニューの増加で、こなしきれない利用者も多くいる。

近年携帯電話が急激に普及し、出始めの頃は営業など特定の者しか所持していなかったが、今では中学生、高校生まで多くの人が所有している。

携帯電話等のエリアの拡大と難聴地区解消を図るため、電話会社は各地に無線中継のための多くの鉄塔を設置している。

下居辺の居辺川沿い地区住民からＮＨＫテレビの地上波放送が受診できないという苦情があったが、１９９６年(平成８年)度で日本通信放送機構と町がＢＳアンテナ、ＢＳチューナーの購入助成を行い、同地区の難視聴を解消している。

２０１０年(平成22年)地上デジタル放送の難視聴地域(佐倉・上居辺・下居辺の３地区)を解消するため、国の交付金を受け無線システム普及支援事業を実施、また、町内市街部と農村部の情報格差(ブロードバンド環境)を解消するため、地域情報通信基盤整備推進交付金事業により、無線によるインターネット環境を整備した。

２０２０年(令和２年)度には、国の新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金や無線システム普及支援事業により、町内全域に光ファイバ網を整備すべく、事業に着手し、令和４年度より供用を開始する予定。

町内の郵便局

町内には、士幌、中士幌、居辺と三つの郵便局があり、それぞれの区域を管轄して郵政業務を行っている。郵政の民営化が叫ばれてから全国的な合理化で事業の統廃合、職員の削減が行われ、士幌町でも１９９３年(平成５年)、居辺局の集配業務が士幌郵便局に移管されるなど縮小の方向に進んでいる。

地域に密着した職場を目指す各郵便局は独自のアイディアで住民と接し、士幌郵便局では、１９９７年(平成９年)から、局舎内を主会場にクラシックコンサートを開き多くの町民とのふれあいを大切にしていた。

２０００年(平成12年)のコンサートでは、健康づくり教室とセットとして９月

士幌郵便局

中士幌郵便局

に開催し、町民保健センターの保健婦(現在は保健師)、栄養士の講演と、コンサートでは本町出身で札幌在住の全盲ギタリスト(音楽療法士)樋口清美をゲストに、クラシックギター愛好家の杉本局長も共演するなど、来場した住民に感銘を与えた。

また、地元をPRしようと、風景入り日付印をつくり、中士幌局では1991年(平成3年)に「美濃の家」を、士幌局は翌年(平成4年)に「ヌプカの里」をそれぞれデザインし好評を博した。

そのほか、士幌郵便局では1997年(平成9年)に太陽光を活用したソーラー発電施設を設置(当時全国3番目)し、災害時の貯金窓口端末機等の電源確保に

居辺郵便局

備え、2000年(平成12年)には郵便局のコンピューターからインターネットで地域や郵便局の情報にアクセスできる「電子郵便局」を開設した。

2007年(平成19年)10月民営化法施行により合理化で事業の統廃合、職員の削減が行われ、士幌町でも居辺局の集配業務に続き、2011年(平成23年)には中士幌局の集配業務も士幌郵便局に移管された。

2015年(平成27年)に中士幌郵便局の郵便舎が新築された。

▽士幌郵便局長　高野　均(現在)
▽中士幌郵便局長　毛利敏広(現在)
▽居辺郵便局長　池田一彦(現在)

4、建　設

減少する公共事業

1990年代、国の公共事業見直しが政情絡みで叫ばれた。これまで本町では、国・道による建設事業も含め莫大な公共投資を行い、基盤整備を図ってきた。道路整備、土地改良事業を主とした、国・道の直轄事業は、50億円を超え、年によって差はあるが、町の行う建設事業費も加えると70億～80億円の投資額となる。

増えていた公共事業も2000年代、公共事業の見直しと財政難の折から、本町の工事等発注額も減少し2000年(平成12年)では25億円を超えていたが、道路改良および公共施設の建設も一段落した2009年(平成21年)では、5億円を切り、2019年(令和元年)では、4億円を切る投資額となっている。

これら公共工事の施工にあたっては、2年ごとに行われる建設工事請負業者資格審査会の審査を経て登録された業者が建設工事の指名競争入札参加の有資格者となり、工事ごとの請負業者指名委員会で指名を受けた業者(数社)による競争入札で落札した者が工事施工業者となる。

1999年(平成11年)に行った資格審査で有資格者として登録されたのは、14種別全体で延べ2203業者となっているが、2019年(令和元年)に行った資格審査で有資格者として登録されたのは、15種別全体で延べ1317業者となり、886業者減少している。町内の入札参加資格を有する業者は、一般土木工事、建築工事など9種別に延30社が登録され入札への参加と工事の施工(落札者)にあたってきた。

1999年(平成11年)度で、町が行った建設事業等に係る入札件数は、土木工事の41件をはじめ建築、電気、管工事や設計委託等を含め128件、2019年(令和元年)度で、町が行った建設事業等に係る入札件数は、土木工事の17件をはじめ建築、電気、管工事や設計委託等を含め58件となり、いずれも減少している。(表－1参照)

建設工事入札参加資格審査結果

表－1

工事種別	平成11年度資格者数	令和元年度資格者数	資格者の内訳 町内	管内	道内	道外
一般土木工事	330	155	7	65	58	25
舗装工事	135	70	2	26	29	13
鋼橋上部工事	107	44	1	8	23	12
建築工事	207	104	5	40	35	24
電気工事	171	128	3	37	38	50
管工事	216	132	4	35	48	45
道路標識設置	275	76	6	33	30	7
建築設計	125	96	0	17	58	21
土木設計	166	151	0	29	85	37
測量	175	141	0	29	80	32
地質調査	81	84	0	7	51	26
塗装	46	47	1	21	20	5
造園	73	16	1	6	7	2
機械器具設置	96	71	0	3	28	40
林産物売払		2	0	2	0	0
技術資料						
計	2,203	1,317	30	358	590	339

公営住宅

宅地分譲が進み、マイホーム建設をする人が増加しているが、まだ賃貸住宅の需要は多く、町の公営住宅も政策空き家を除けば、空き家はほとんどみられず高い入居率となっている。

町では、１９９７年(平成９年)に「士幌町公共賃貸住宅再生マスタープラン」を立て、団地ごとの建替計画により事業に着手した。

建設年度の古い団地から改築する方針で、１９９８年(平成10年)度から、長い間、更新のため政策空き家を多くもっていた大通西団地の改築が始まり、同年では1棟6戸(2階建)を2棟、翌年度で6戸1棟のほか、12戸1棟の建設を行い、２０００年(平成12年)度で1棟6戸(2階建)、２００１年(平成13年)度で1棟12戸(2階建)の建設を行い、4か年で48戸分の整備を図った。

公営住宅　若葉団地

この住宅は、町内初の世代混合型住宅とし、鉄筋コンクリート2階建てで1棟6戸の住宅は、1階が単身高齢者向け１ＬＤＫ、2階は一般世帯用２ＬＤＫとなっており、1棟12戸の住宅は1階は高齢者(夫婦)と身障者世帯向け２ＬＤＫと２階が一般世帯用３ＬＤＫとなっている。いずれの世帯向けにも全戸水洗トイレ、浴槽を備え、単身高齢者・身障者向けの1階では手すりを付けた浴室、車椅子対応の台所、更に各部屋の段差をなくすバリアフリーと非常用ベルを取り入れた高齢者、障がい者に優しい造りとなっている。

大通西団地の整備終了後は、中士幌みのり野団地に、２００２年(平成14年)度に1棟８戸(一般４戸・特公賃４戸)、２００５年(平成17年)度に1棟８戸の建設を行った。２０１１年(平成23年)度以降では、16棟44戸の建設が行われている。特に、２０１４年(平成26年)度から翌年度にかけて、若葉団地において3棟14戸の木造平屋の公営住宅が2か年計画で建設されたが、この公営住宅は見守り付き高齢者等向け住宅として整備され、独居高齢者や障がい者などに対し定期的に見守りを行うなど、社会的弱者に配慮した構造、対応を行っている。

また改築までに時間のかかる既存住宅については、修繕計画に基づいて整備し利用者へのサービスを図っている。

２００９年(平成21年)度末には４４５戸の公営住宅を有していたが２０２０年(令和2年)度末では４１１戸となっている。(表－2参照)

町の宅地分譲

１９６３年(昭和38年)に町が初めて宅地分譲した「みどり団地」(30区画)以降、２０１９年(令和元年)度までに27団地が造成され５８５区画が分譲されている。

１９８７年(昭和62年)までに12団地が造成され３６９区画が分譲されているが、平成に入ってからも分譲の要望が多く１９９３年(平成５年)で新たに常盤団地として31区画の造成を行ったほか、中士幌新東団地の第2期造成で24区画の整備を行い、宅地供給としての分譲を開始した。

表－2　**士幌町公営住宅**　令和２年度末

団　地　名	若年 1LDK	高齢 1LDK	2DK	高齢 2LDK	2LDK	3DK	3LDK	合計
大通西		12		12	12		12	48
南百戸			17		10	29	8	64
睦			34		12	34		80
若葉		11	31	3	12	33	8	98
中士幌北			12			4		16
中士幌東						12	11	23
士幌北							10	10
下居辺						4		4
士幌南							12	12
昭和南							24	24
みのり野					12			12
特公賃みのり野					4			4
特公賃協進	8							8
公協賃かしわ荘					4		4	8
合　　計	8	23	94	15	66	116	89	411

常盤団地（現在の緑光）は、士幌幹線沿い（南団地の防風林を挟んだ西側）に造成され、1区画約400平方㍍（120坪）から495平方㍍（150坪）の31区画で、1区画約308万円から400万円で売り出された。市街地にもそれ程遠くなく、手頃な価格から若い夫婦世帯が多く購入し、1995年（平成7年）度末には完売となる人気であった。

一方、中士幌新東団地の第2期分譲地は、第1期新東団地として分譲した南側に続けて造成し、24区画分を1区画465平方㍍（約141坪）から597平方㍍（約181坪）の面積とし価格も1区画当たり約352万円から450万円で分譲された。同地区での分譲は、帯広方面で仕事をしている人の通勤範囲として人気があり、また仕事を終えた定年退職者も含め、町外からの契約者も多くなっている。

みのり野団地

1975年（昭和50年）のいこい団地の分譲以降は、土地開発公社が土地を取得して造成分譲を行った。1997年（平成9年）には、常盤第2団地29区画、また、1998年（平成10年）に中士幌新東団地第3期造成で15区画を整備分譲した。それ以降も分譲の要望が多く2004年（平成16年）新たに「みのり野団地」として56区画の造成を行った。「みのり野団地」は、中士幌新南に造成され、1区画約340平方㍍（103坪）から480平方㍍（145坪）の区画で、1区画約277万円から339万円で売り出された。帯広から20キロ㍍通勤圏である分譲地はのどかに広がる田園の一等地に大きな区画と自然豊かな住環境が何よりも魅力の優良分譲地となっている。

「みのり野団地」以降の分譲は、士幌町土地開発公社が2004年（平成16年）6月に解散したことから、士幌町の事業として分譲している。

また、「みのり野団地」以降の分譲区画数は12区間から4区間と少数区画で、どの地区も市街地から近く完売となる人気であった。

2020年（令和2年）度には「みどり団地」9区画が整備された。近年における分譲では、いずれも3から9区画と小規模の分譲となっている。（表－3参照）

表－3　**士幌町の団地分譲の変遷**　令和3年3月

団　地　名	分譲開始	区　画	事業主体	未分譲区画
みどり	昭和 38 年	30	士幌町	
中士幌南	昭和 39 年	12	同	
中士幌北	昭和 39 年	24	同	
中士幌北	昭和 46 年	10	同	
南百戸	昭和 42 年	20	開発振興公社	
南百戸	昭和 43 年	12	士幌町	
南百戸	昭和 46 年	14	同	
いこい	昭和 50 年	85	土地開発公社	
中士幌東	昭和 51 年	48	同	
士幌南	昭和 57 年	64	同	
士幌南（第２期）	昭和 62 年	25	同	
中士幌新東	昭和 62 年	25	同	
常盤	平成５年	31	同	
中士幌新東（第２期）	平成５年	24	同	1
常盤（第２期）	平成９年	29	同	
中士幌新東（第３期）	平成 10 年	15	同	
みのり野	平成 16 年	56	士幌町	29
ゆうすい（第１期）	平成 16 年	9	同	
ゆうすい（第２期）	平成 17 年	12	同	
いこい（第２期）	平成 19 年	6	同	
士幌北（第１期）	平成 22 年	5	同	
士幌北（第２期）	平成 23 年	4	同	
士幌北（第３期）	平成 24 年	6	同	
士幌北（第４期）	平成 25 年	3	同	
大通西	平成 28 年	8	同	
士幌北（第５期）	平成 30 年	4	同	
定住促進（新生・高徳）	令和１年	4	同	3
みどり	令和２年	9	同	6

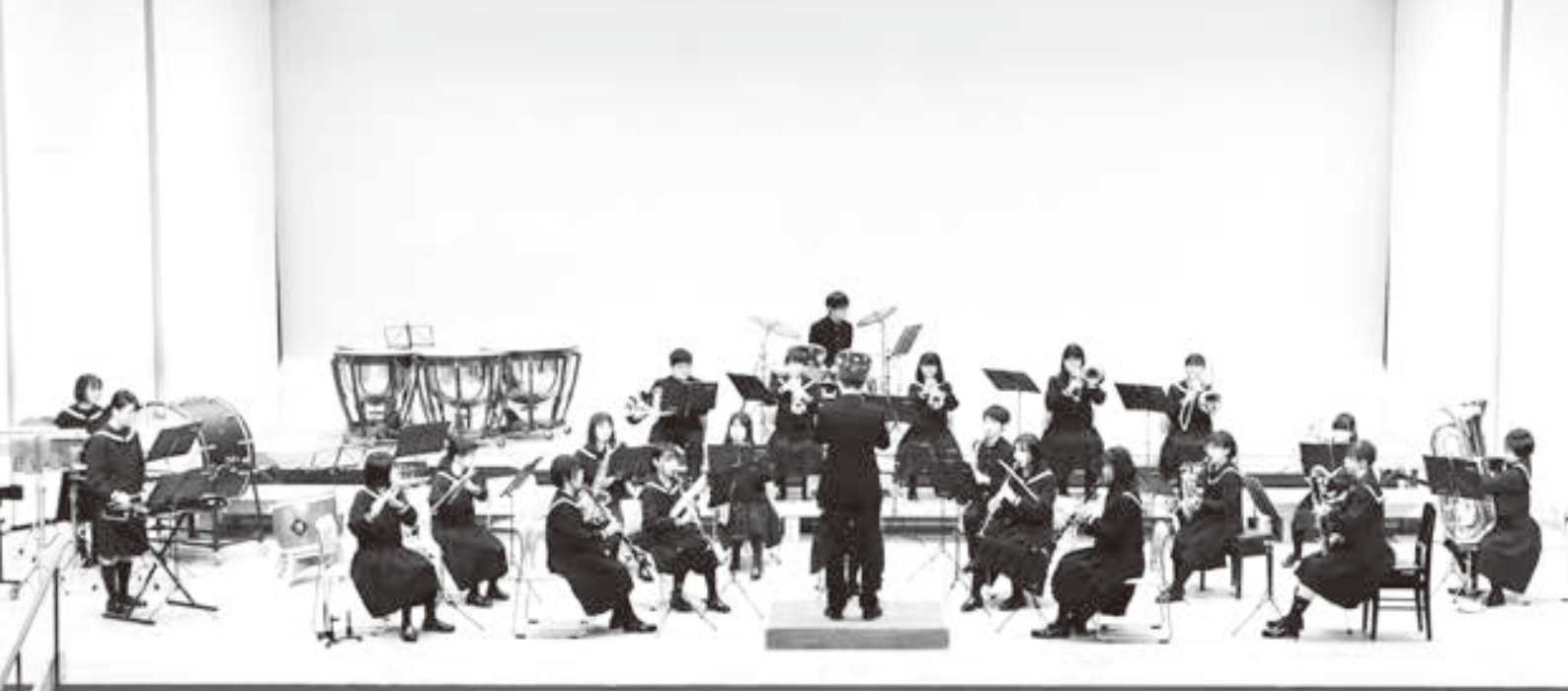
民間の宅地分譲

民間の宅地分譲では、中士幌市街（旧国鉄中士幌駅西側）に帯広の業者が、「ヌプカの森」団地として約20区画を造成分譲したほか、士幌町農協が職員の福利厚生の一環として士幌市街高徳の組合所有地を宅地化し約30区画を、同組合職員を主体に分譲した。

第五編　教育と文化

SHIHORO

100th Anniversary



第一章　教　育

1、教育行政

ゆとりと豊かさを求めて ～生きる力

学校教育は、児童・生徒の心身の調和と豊かな人格形成を培い、生涯学習の基礎を固める場として重要な役割を担っているが、町内各学校では「学習指導要領」に基づく教育課程に地域に根ざした特色ある学校づくりを目指し、それぞれ教育計画を策定して実践している。

１９９２年（平成４年）９月から学校週５日制が導入され月１回の第２土曜日が休みとなった。学校週５日制は「子供のゆとりある生活の実現」と「個性や創造性を育てる教育を目指す」ことを狙いとしたもので、その後１９９５年（平成７年）

力石　憲二（教育委員長）

太田　助（教育委員長）

大口　靜夫（教育委員長）

佐藤　正一（教育長）

尾形　文夫（教育長）

土屋　仁志（教育長）

堀江　博文（教育長）

神野　光男（教育長）

4月からは第4土曜日も休日に、月2回の週5日制となった。

この制度の導入時は、子供の学力の低下や休みの過ごし方などに懸念する声もあったが、子供たちの自主性が育ち、学習面や生活面でも望ましい姿がみられるとされている。完全実施によって更にゆとりと豊かさのある教育となるよう、家庭、地域、学校がそれぞれの役割を果たし協力していくことが必要であった。

２００２年(平成14年)度は、小・中学校において、新学習指導要領の実施年度にあたり、完全学校週5日制が本格的にスタートした。新学習指導要領の目的は「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」、「自ら学び、自ら考える力を育成すること」、「ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎基本の確実な定着をはかり、個性を生かす教育を充実すること」、「各学校が創意工夫を生かし特色ある学校づくりを進めること」とされており、各学校と連携をはかり、教育内容の充実に努めた。

また「総合的学習の時間」が本格的に実施され、新たな学校づくりが学校長を中心に進められた。さらに、不足がちといわれる読書体験を積極的に補い、児童の豊かな感受性を発達させる活動として、読書活動の推進にも積極的に取り組んだ。

２０２０年(令和2年)度から小学校、２０２１年(令和3年)度から中学校を対象として、これからの社会が、どんなに変化し予測困難になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい。そして、明るい未来を、共に創っていきたい。との願いが込められた新しい「学習指導要領」に合わせて教育課程の基準が改訂された。

町では、２０１７年(平成29年)度から4年間を計画期間とする「士幌町教育振興基本計画」に基づき、教育施策の総合的・計画的な推進を図っている。今日の社会は、人口の減少、少子高齢化に加え、グローバル化、産業構造の変化など数多くの課題を抱えており、これからの社会は、ＩＯＴやビッグデータ、人工知能をはじめとする急速な技術革新やグローバル化の一層の推進などにより、大きく変化することが予想される。そうした中、町の学校教育においては、教育実践のテーマである「過去を見直し、今を見極め、先を見据える教育」を基調とし、子ども一人ひとりが夢と希望を持って「生きる力」を身につけるため、学校はもとより家庭や地域と連携して「確かな学力・豊かな心・健やかな体」の調和のとれた育成を目指し、地域の温かい眼差しの中で、未来を担う子どもたちが人間性豊かで創造性にあふれ、心身ともにたくましく成長するよう充実した教育環境づくりに取り組んできた。

少子、高齢化の進む中、全国的に児童、生徒の数も減少しているが、一方では、いじめ、登校拒否、校内暴力など深刻な状況が各地で続き、本町では幸いに表面に出る程の問題は発生していないが、生徒指導では生命や人権の大切さを徹底し、豊かな思いやりをもった心を育てる教育に努めている。

教育委員会制度の改正

今まで教育委員会は、町長の任命する委員5名で組織していたが「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の施行に伴い２０１５年(平成27年)4月より教育委員会制度が改正された。

これまでの教育委員会の課題として、教育委員長と教育長のどちらが責任者かわかりにくい、いじめ等の問題に対して必ずしも迅速に対応できていない、地域住民の民意が十分に反映されていない、等との指摘が全国的になされていたことから、教育行政における責任体制の明確化、迅速な危機管理体制の構築、地域の民意を代表する首長との連携強化等を図るため改正された。

具体的には、教育委員長と教育長を一本化した新「教育長」の設置、会議招集の規定・議事録の作成・公表等を規定し、教育長へのチェック機能の強化と会議の透明化、首長が参加する「総合教育会議」の設置、教育の目標や施策の根本的な方針を定める「大綱」を首長が策定することなどが定められた。

ちなみに、旧制度下で任命された教育委員長、教育長は２０１５年(平成27年)4月以降も任期内であれば在任可能であったが、力石委員長、堀江教育長とも退任することを自ら選んだ。

教育委員長、教育長は次のとおりである。(平成3年以降)

◎教育委員会(旧制度下)

▽委員長

大口静夫(昭63・10～平11・11)

太田　助(平12・2～平16・9)

力石憲二(平16・10～平27・3)

▽教育長
尾形文夫(昭62・4～平11・3)
佐藤正一(平11・4～平15・3)
神野光男(平15・4～平25・3)
堀江博文(平25・4～平27・3)
◎教育委員会(新制度下)
▽教育長
堀江博文(平27・4～令3・3)
土屋仁志(令3・4～現在)

施設整備

学校の施設整備は年次計画によって進められ、快適な学校生活の環境改善が図られている。

1991年(平成3年)の下居辺小をはじめ翌年には上居辺小、1995年(平成7年)西上音更小、1998年(平成10年)佐倉小と、中央中では1995年(平成7年)に校舎、翌年には体育館が改築されている。

これで一通り学校改築は終了したこととなる。

・2000年(平成12年)度、中央中では校舎改修、4小学校プール濾過器設置、上居辺小屋体暖房設備改修、中士幌小校舎塗装塗り替え、中士幌小高圧ケーブル改修、北中音更小石油暖房機更新

・2001年(平成13年)度、5小学校洋式トイレ改修、

・2002年(平成14年)度、西上音更小・新田小浄化槽設置

・2003年(平成15年)度、北中音更小浄化槽設置、中士幌小放送設備改修、北中音更小石油暖房機更新

・2004年(平成16年)度、町内各小学校防犯用警報装置設置、下居辺小浄化槽設置、佐倉小屋内体育館屋根塗装、下居辺小施設整備改修

・2005年(平成17年)度、士幌小便所改修、下居辺小体育館屋根塗装

・2006年(平成18年)度、西上音更小体育館屋根塗装、佐倉小・新田小・西上音更小児童用パソコン更新

・2007年(平成19年)度、士幌小校舎外壁塗装、上居辺小・下居辺小・北中音更小児童用パソコン更新

・2008年(平成20年)度、上居辺小・北中音更小体育館耐震補強工事、士幌小校舎外壁塗装、士幌小・中士幌小児童用パソコン更新、士幌小カリヨン制御装置取り替え

・2009年(平成21年)度、中士幌小校舎棟耐震改修および断熱改修、中央中トップライトガラス修繕、ICT環境整備、士幌小体育館外壁塗装、下居辺小校舎暖房機器更新、学校ICT環境整備

・2010年(平成22年)度、士幌小体育館外壁塗装、士幌小・中央中太陽光発電設備設置

士幌小学校

中士幌小学校

上居辺小学校

中央中学校

・2011年(平成23年)度、中士幌小体育館塗装

・2012年(平成24年)度、全校防犯用カメラ付ドアホン設置、中士幌小体育館塗装

・2013年(平成25年)度、士幌小校舎・中士幌小体育館塗装、中央中音楽室暖房設備改修

・2014年(平成26年)度、上居辺小外灯設置、中士幌小プール解体、中央中校舎外壁東面塗装

・2015年(平成27年)、各校屋体施設吊り物落下防止対策、中央中校舎外壁南面塗装

・2016年(平成28年)度、士幌小ボイラー改修・玄関スロープ改修、中央中校舎吊り天井落下対策改修・校舎外壁塗装

・2017年(平成29年)度、士幌小・中央中校内無線LAN環境整備、士幌小ボイラー・特別支援教室改修、中央中体育館塗装

・2018年(平成30年)度、士幌小通学路整備、中士幌小校舎屋根塗装・体育館暖房機改修・校内無線LAN

環境整備、中央中体育館塗装

・2019年(令和元年)度、士幌小エレベーターおよび身障者用トイレ設置・体育館壁面塗装、中士幌・上居辺小ICT教育機器、中央中ICT教育機器、吹奏楽部楽器購入

・2020年(令和2年)度、新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金を利用し、各小中学校で冷房設備設置、国が推し進める「GIGAスクール構想」の実現に向けて補助金を活用し、情報機器・通信環境ネットワーク環境整備、また児童生徒用トイレの洋式化なども年次計画で整備された。(表－1参照)

小中学校施設一覧

表－1　　(令和3年4月現在)

学校名	校舎				屋内体育館		学校プール		教職員住宅（戸）
	建築年次	総面積（㎡）	普通教室（㎡）	特別教室（㎡）	建築年次	面積（㎡）	建築年次	面積（m）	
士幌小学校	昭和63	4,204	748	633	平成元	1,311			9
中士幌小学校	昭和53	1,668	401	347	昭和61	820			4
上居辺小学校	平成4	1,693	247	273	昭和55	615	平成7	25×10	8
令和2年3月閉校 佐倉小学校	平成10	1,118	147	227	昭和59	587	昭和55	20×8	5
平成31年3月閉校 下居辺小学校	平成3	1,141	194	164	昭和58	579	昭和60	25×5	5
平成28年3月閉校 北中音更小学校	昭和57	799	101	180	昭和51	566	昭和55	25×8	5
平成31年3月閉校 新田小学校	昭和60	1,036	224	246	昭和61	586	昭和63	25×8	5
平成31年3月閉校 西上音更小学校	平成7	1,203	225	158	昭和60	585	昭和60	20×8	6
士幌町中央中学校	平成7	4,100	726	1,225	平成8	1,350			12

2、小中学校

減少する児童・生徒

古くから学校は、地域活動の拠り所として各地域の発展とともに歴史を刻んできたが、多くの学校で節目の年に記念式や記念事業を行っている。１９９７年(平成９年)には下居辺小、１９９８年(平成10年)には士幌小が開校90周年を、２００１年(平成13年)には新田小開校70周年、２００３年(平成15年)には中士幌小開校１００年、２００７年(平成19年)には下居辺小開校１００年、２００８年(平成20年)には北中音更小開校１００周年、士幌小開校１００周年、西上音更小が開校90周年、２０１５年(平成27年)には上居辺小・佐倉小が開校１００周年、中央中が開校50周年を迎えそれぞれ記念式典や記念事業を行った。

町内各学校の児童生徒数は「表－１」のとおりで、小学校では、１９９１年(平成３年)より半減しており、中学校も当時より40％減少し、現在１９６人となっている。町の人口も減少しているがその中で児童生徒の減少は大きく、少子、高齢化が進んでいる。

減少する児童確保のため下居辺小では山村留学の推進に取り組み、１９９８年(平成10年)度で全国に呼び掛け、翌年度から受け入れを開始し、成果を挙げていたが２００９年(平成21年)３月に山村留学推進協議会が解散し山村留学が終了した。

小中学校児童・生徒数等の推移

表－１　　(各年５月１日現在)

小学校名	児童生徒数					学級数					教員数				
	1990(H2)	2000(H12)	2010(H22)	2015(H27)	2020(R2)	1990(H2)	2000(H12)	2010(H22)	2015(H27)	2020(R2)	1990(H2)	2000(H12)	2010(H22)	2015(H27)	2020(R2)
士幌	390	249	207	213	239	14	11	10	14	17	19	19	19	24	26
中士幌	72	66	55	52	34	6	7	6	9	8	10	12	10	12	13
上居辺	61	28	22	33	30	6	3	4	6	6	10	7	8	11	11
下居辺	26	23	15	12	-	3	3	3	3	-	6	7	6	5	-
佐倉	29	20	18	23	-	3	4	3	5	-	6	8	7	9	-
北中音更	21	13	10	11	-	3	3	3	4	-	6	5	4	7	-
西上音更	23	26	18	15	-	3	3	6	4	-	6	7	9	7	-
新田	24	29	9	16	-	3	3	3	4	-	6	7	4	7	-
計	646	454	354	375	303	41	37	38	49	31	69	72	67	82	50
中央中	286	282	169	172	196	10	10	10	10	12	21	22	19	19	24

充実する学習活動

士幌町教育委員会では学校教育目標を定め児童生徒が「自ら学び、自ら考える」教育から基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等、子どもたちが社会の一員として自立し、たくましく生きていくため知・徳・体のバランスのとれた子どもの育成、「生きる力」を育成することが極めて重要となっている。

「基礎・基本を身につけた確かな学力」では、全国学力・学習状況調査の結果を受けた学力向上のための学校改善プランを策定し、具体的な授業改善や個に応じた指導の充実、２０１０年(平成22年)度から開始された子どもへの学習サポート、２０１４年(平成26年)には、北海道大学の学生による「学習サポート塾」、日常の授業において、個に応じた指導の充実図る町費負担による臨時教諭の配置、ＡＬＴ(外国語指導助手)を活用した外国語教育、教科指導における情報通信技術(ＩＣＴ)の活用、情報活用能力の育成、ＩＣＴ機器等の整備などを図っている。(表－２参照)

「優しさと思いやりのある豊かな心」では、命を大切にする心や思いやりの心、公共心や規範意識を育てるため、あるいは社会性や豊かな人間性を育むため、道徳教育の充実、教育委員会と各学校が策定した「いじめ防止基本方針」に基づく、いじめ防止対策を行っている。

「健康とたくましい体力」では、子どもたちの運動の日常化の取組の実践による体力向上、「早寝早起き朝ごはん運動」の推進、スポーツ少年団・部活動の支援、更には、本町の特色ある教育の一つである食農体験学

学校別パソコン配備状況

表－２　　(令和２年度末)

学校名	台数
士幌小学校	320
中士幌小学校	61
上居辺小学校	56
士幌町中央中学校	269

※インターネット教育に利用できるもののみの台数

習「大地くんと学ぼう」、２０１４年(平成26年)度から全小学校で実施されている「お弁当の日」など実情に即した学習活動が取り入れられ成果を上げている。

各学校では教育目標に沿ってそれぞれの実情に即した学習活動が取り入れられ成果を挙げている。

体験学習として農園、花壇の活動を多くの学校で行っているが、下居辺小では、下小タイムを設け作物の種まきから収穫までの作業と観察、収穫された作物の加工利用まで児童が話し合い祖父祖母を農園講師としてユニークな活動をしていた。また、「サケ」の放流やホタル飼育羽化にも成功している。そのほか各学校では小動物の飼育観察も行っている。

文化・スポーツ活動も活発で北中音更小学校では１９９６年(平成８年)と97年(同９年)全国版画コンクールで２年連続金賞を受賞、２００２年(平成14年)租税教育推進校表彰、２００８年(平成20年)いじめ根絶メッセージコンクール最優秀賞、全国版画コンクールでも２００８年(平成20年)銅賞と、２００９年(平成21年)金賞・銅賞を受賞、下居辺小学校でも全道交通安全ポスターコンクールや作文コンクールで優秀賞、奨励賞、２００５年(平成17年)十勝の児童詩を推進している子どもの詩「サイロ」学校表彰受賞を受けている。上居辺小学校では、「サイロ」への多くの作品の応募で入選を果たし、お菓子の袋や掲示用パネルに作品(詩)が採用されるなど校外作品展での活躍が目立つ。スポーツ関係では少年団活動で野球、サッカー、スケート等が盛んに行われているほか、士幌小ではラジオ体操コンクールで優秀な成績をおさめている。

西上小学校では２０００年(平成12年)10月に全道へき地・複式教育研究大会十勝大会の会場校として生活科、社会科の授業が行われ、同時に「なかよし広場の集会活動」を公開し評価を得た。なかよし広場の活動は総合的な学習の時間の移行期の学習として、個人課題や調査活動を取り入れた「生きる力」を育成する活動として注目された。同校はまた、郷土芸能ヌプカウシ太鼓の創作演出・保存活動を長年続け、児童の表現力を高める活動に取り組み成果を挙げていた。

佐倉小学校では２０００年(平成12年)帯広市内の産科病院で「母と子の性教育講座」を開いた、母子と教諭が参加し、同病院内を見学した後、院長の話を聴き、生きていることの素晴らしさを学んだ。生命の始まりから胎児の成長、出産などについて知ることで一人ひとりにかけがえのない命を大切にしてもらおうとＰＴＡ母の部が企画した。

交流活動も盛んで、１９７２年(昭和47年)に始まった新田小学校と川崎市の下川原小学校児童との交流は夏休みと冬休みを利用しほぼ毎年児童の相互訪問による交流を行っていた。この交流のきっかけは、当時新田小に赴任した先生と下川原小の先生の一人が大学の同窓であった縁で続けられたものであった。

ほかに佐倉小学校は千葉県佐倉市の小学校と交流活動を行っている。佐倉の地名は旧佐倉藩主が１９１４年(大正３年)同地区に佐倉農場を開き多くの人が小作人として入植し戦後の農地解放で土地が小作人に売り渡され農場は解散したが佐倉としての地名がそのまま残った。１９８５年(昭和60年)に挙行された佐倉小学校開校70周年記念式典に佐倉農場開設者堀田正恒の長男で元千葉県佐倉市長の堀田正久を招いたのをきっかけに交流の機運が高まり、１９８９年(平成元年)に学校長、ＰＴＡ会長等の訪問団派遣を行って以来児童を含めた相互交流が続いていた。

一方中士幌小学校は、岐阜県美濃市からの入植が同地区であり、本町発祥の地となっていることから、１９９１年(平成３年)から交流が始まり、２００３年(平成15年)からは、士幌町・美濃市児童交流事業として実施している。２０１９年(令和元年)で17回目を迎え、士幌小学校・中士幌小学校の６年生43人が美濃市を訪れ、士幌町とは異なる自然や町並み、そして文化や歴史の体験を行った。また、美濃市児童99人が士幌町を訪れた際には、士幌高等学校で本町の児童と一緒にじゃがいも掘り等を体験、士幌高原、道の駅ピア21しほろ、じゃがりこ工場等の町内の施設を見学し、本町の歴史や産業などを学んだ。ホームステイでは、２校の校下ＰＴＡの協力はもとより、各関係団体、一般町民の協力を得て受け入れすることができ、士幌町を築いてくれた祖先のふるさと美濃市との絆を一層深めることができた。

上居辺小学校では、２００１年(平成13年)から都市間交流として千葉県鎌ヶ谷市に児童が訪問し、ホームステイ先との交流を深めている。

士幌中央中学校では早くから生徒の自主的創造活動

を中心にした生徒活動を行っているが、１９９６年(平成８年)生徒が自主的に「生徒憲章」を制定した。

開校30周年を記念して生徒会が提案し全校生徒の取り組みの中でまとめられたもので、いじめや差別のない学校を目指すとした憲章は「人権」「自主」「民主」「希望」の４章からなり、生徒一人ひとりがいつでもつぶやける「詩」をイメージした構成になっている。

「人権」は命を大切に、いじめをなくす、「自主」は何事も自分で取り組み責任をもつ、「民主」は差別がなく平等、「希望」はみんなが幸せであるように、との願いがこめられている「生徒憲章」は同年３月15日の卒業式で制定された。

(生徒憲章全文　別掲)

小学校の閉校

１９７３年(昭和48年)３月の朝陽小学校の閉校以来、２０２０年までに５校の小学校が閉校となった。

２０１６年(平成28年)３月、北中音更小学校が開校１０７年の歴史を積み重ねて閉校となった。北中音更小学校は明治41年、音更第七教育所付属西特別教授所として創立、以来７１７人の卒業生を送り出してきた。２０１６年(平成28年)２月28日には、閉校式典が開催され、卒業生や地域住民など約２２０人が出席。同校での最後の思い出を胸に刻んだ。

２０１９年(平成31年)３月、西上音更小学校・下居辺小学校・新田小学校が閉校となった。西上音更小学校は大正８年、音更村北中士幌尋常高等小学校付属西上音更特別教授場として創設。２０１８年(平成30年)12月９日に閉校式が開催され児童、教職員や地域住民約２００人が出席。開校から99年の歩みに別れを惜しんでいた。

下居辺小学校は明治40年居辺簡易教育所所属奥居辺特別教授場として創設。２０１９年(平成31年)２月10日に閉校式が開催され、児童、教職員や地域住民約２５０人が出席、出席者の中には山村留学の元留学生やそのご家族も駆けつけていた。開校から１１２年の歩みに別れを惜しんでいた。

新田小学校は昭和７年北中音更小学校新田特別教授場として創設。２０１９年(平成31年)２月24日に閉校式が開催され児童、教職員や地域住民約１８０人が出席。開校から87年間の歩みに別れを惜しんでいた。

２０２０年(令和２年)３月、佐倉小学校が閉校となった。佐倉小学校は、大正６年佐倉尋常小学校として創立。２０２０年(令和２年)２月23日に閉校式が開催され、児童、教職員、地域住民などのほか、交流のある千葉県佐倉市からも駆けつけ約２５０名が出席。開校から１０３年間の歩みに別れを惜しんでいた。

余談ではあるが、開校から99年で閉校した西上音更小学校では、２０１９年(令和元年)12月に西上音更小学校開校１００周年の集いが西上地区運営協議会の主催により開催された。どの地区でも同じだか、地区の学校に対する深い思いが伝わるものであり、閉校に際してはどの地区も苦渋の決断であったことが窺える。

下居辺小学校

西上音更小学校

北中音更小学校

佐倉小学校

新田小学校

ことばの教室と士幌町こども発達相談センター

言語治療を要する幼児が増え「ことばを育てる親の会」の働きかけで１９８７年(昭和62年)１月に特殊学級の認可を受け開設以来、士幌小学校言語治療教室(ことばの教室)と士幌町幼児療育センターとして設置され、幼児・小学生・中学生、一時は上士幌町からも児童を受け入れ、早期療育に取り組んできた。

２０１６年(平成28年)度から認定こども園内で行っていた発達支援センターの業務とことばの教室内で行っていた幼児療育センターの業務の統合を図り、士幌町こども発達相談センターとして町長から委任を受け教育委員会で実施することとなった。これは、支援を必要とする児童の増加と、療育支援にあたる支援員等を確保するために行ったものであり、こども発達相談センターでは、児童の心身の発達に関する相談、指導、療育等の支援を行う事業のほか、児童福祉法に基づく通所支援事業所の指定を受け、児童発達支援および放課後等デイサービスの事業を実施、２０１８年(平成30年)度には相談支援事業所も開設している。

言語通級指導教室への通所児童数は平成27年度に29名であったが、平成28年度には８名に減少している。

平成28年度のこども発達相談センターの通所者数は幼児から生徒まで47名となっている。

言語通級指導教室通所児童数

令和2年度　0人

こども発達相談センター通所者数

令和2年度　6人

学校給食

士幌町での学校給食は、士幌小学校改築1988年(昭和63年)で併設された学校給食センターが町内小中学校すべての調理を行い配送している。配送は業者委託(北斗運輸)としている。

1954年(昭和29年)に制定された「学校給食法」が、子供の食生活の変化や「食育基本法」の制定により、初めて改正(平成21年4月1日施行)され「食生活の改善」から「食育の推進」を重視したものになった。

学校給食(ふるさと給食)

これにより、2009年(平成21年)から士幌小学校を本務校とする栄養教諭1名が、学校給食の管理に従事するため、学校給食センターに兼務発令で配置を受けたほか、臨時栄養士1名を増員し運営体制の強化を図った。

学校給食は、児童および生徒の心身の健康な発達と、食に関する正しい理解と適切な判断力を養う上で重要な役割を果たすものであり、学校給食の普及充実および学校における食育の推進を図ることを目的としており、このため、センターでは次のことがらを重点として実施した。

・栄養のバランスのとれた食事の提供による児童および生徒の健康の増進、体位の向上。

・日常生活における正しい食習慣の形成。

・給食を共にすることによる教師と児童・生徒の心の触れ合いと人間関係の育成。

・給食の事前の準備、後片付けを通した基本的生活態度の獲得。

地産地消の推進については、町内生産者でつくる「もぎたて市なかよし会」や士幌高等学校の協力のもと、士幌産食材を生きた教材として活用し安心できる給食を提供することで、地域の食文化への理解を深める取組を進めている。栄養教諭等による食育の指導を通し望ましい食習慣や生活習慣の確立に努めていくため、2015年(平成27年)度から月1回、献立の中に「和食の日」を設けており、更なる和食への理解を深めている。

食物アレルギーを有する児童生徒が他の児童生徒と同じように学校生活を安心して過ごすことができるよう2015年(平成27年)度に策定した「学校における食物アレルギー対応の指針」および「学校における食物アレルギー対応の指針」を活用し対応に当たることとしている。

異物混入事故対策では「学校給食における危機管理マニュアル」により対応している。また、2012年(平成24年)4月より食材の食品放射性物質検査を定期的に行っている。

学校給食費については、2015年(平成27年)度より、子育て支援対策の一環として1食当たり50円の町費負担。2016年(平成28年)度より第3子以降の学校給食費免除を実施した。2019年(令和元年)度からは、食材価格の高騰により、小学校児童1食当たり55円、中学校生徒1食当たり56円の町費負担とし、保護者の負担を据え置いた。

1食あたりの給食費

平成3年度

小学生　170円

中学生　200円

令和2年度

小学生　255円

(内町負担55円)

中学生　296円

(内町負担56円)

給食センターの不祥事件

1999年(平成11年)6月、学校給食センターで不祥事件が発覚した。学校給食の現場責任者として給食費の管理や業者への支払、資材管理などの業務を担当している職員(当時センター業務係長)が、保護者から徴収した学校給食費を着服、流用していたもので、1997年(平成9年)度と翌年度(平成10年)の2年度で10回以上に分け53万円を引き出していたものである。

内部から使途不明金の疑義の指摘があり、調査の結果発覚したもので学校給食センター運営委員会(委員長・士幌小学校長)の2回の定例監査ではチェックできなかった。

流用された金額は、1999年(平成11年)6月までに全額本人より返済されたが、町教委は同年7月9日付でこの職員を6か月の停職処分とするとともに管理責任者の学校給食センター所長(教育委員会管理課長)にも給料10分の1減給3か月の処分を行った。

その後流用した職員から辞職願が提出され、町教委が受理、同年8月31日付で依願退職している。

問題を重視した町議会は、地方自治法第98条第1項による検査の権限を総務常任委員会に委任し事務検査を行った。

同委員会は同年10月19日から11月30日までの間で7回開かれ、教育委員会関係者からの事情聴取(当該職員含む)や関係書類の検査をし、問題点を明らかにすると同時に議会だより「臨時号」を発行して町民への情報提供を行っている。

検査報告では、使途不明金の年月日ごと流用金額を明らかにするとともに、問題点として、本事件発覚前後の町教委の対応のまずさや、処分の甘さなどが指摘される一方、かつて町議会が一般質問で取り上げた学校給食費の公会計移行を実現しなかったことが今回の不祥事件の起因としている。

また町理事者に対しては今回の事件を教訓として綱紀の引き締めと、職員のモラルの向上を図り、町民の行政への信頼回復に努めるよう要望が出された。

今回の不祥事は、刑事事件とはならなかったが、町理事者は自らも処分を科すことを決め、同年12月の定例町議会に提案、議決を経て、町長、助役、教育長の給料を2000年(平成12年)1月から3月までの3か月間それぞれ月額の10分の1減給することとした。

2000年(平成12年)4月から学校給食に関わる収支は公会計(一般会計・教育費)に移行され運営されている。

各小中学校近年のあゆみ

◎士幌小学校

▽平2　パーゴラ学級開始、国際交流学習開始

▽平3　公立学校優良文教施設協会会長賞授賞、町開基70周年公開研究会

▽平4　学校週5日制開始(全校)

▽平5　集団風邪による臨時休校(3日間)

▽平6　十勝管内PTA研究大会開催

▽平8　「ことばの教室」10周年記念式典挙行

▽平10　開校90周年記念事業実施　校庭の「しだれ柳」台風5号で風倒しお別れ会実施

▽平11　21世紀TV交流会(帯広市、音更町、士幌町、上士幌町)

▽平12　子ども模擬議会開催(6年生参加)

▽平13　管内進路指導研修会授業公開

▽平14　JICA(中国)との交流集会、たてわり「しほろ」で全校登山

▽平15　岐阜県美濃市との交流始まる、士幌町教育研究大会授業公開

▽平16　読み聞かせ開始(月一回のペースで実施)、校内防犯ベル設置完了

▽平17　セキュリティセンサー増設

▽平18　士幌小学校開校100周年事業準備委員会発足

▽平19　士幌小学校開校100周年記念協賛会設立総会

▽平20　児童用パソコン20台設置(ビスタ)、士幌町教育研究大会　士幌小会場、地域公開参観日実施、士幌小学校開校100周年記念式典および祝賀会開催、士幌小学校開校100周年記念事業　パフファミリーコンサート

▽平21　ブランコ(新)、ジャングルジム(新)、鉄棒(修理)の遊具が設置される

▽平22　指導方法工夫改善のためTT配置、ソーラーパネル設置

▽平23　開町90周年記念音楽会鑑賞

▽平25　十勝管内国際理解教育研究大会士幌大会(士幌小・中央中)

▽平26　学習サポート(北海道大学学生ボランティア)

▽平27　学習サポート(北海道大学学生ボランティア)

▽平28　台風の影響による下水道使用不可のため臨時休校修学旅行延期

▽平29　ペッパー君来校(1・2年生)、指導工夫改善のためのTT配置終了、学習発表会を土曜授業として実施

▽平30　統廃合のためのコーディネーター配置、統合3校交流授業、開校80周年記念および第79～85回卒業記念制作物撤去、胆振東部地震発生　北海道全域停電のため臨時休校(6日)、統合3校交流授業

▽平31　新田・西上・下居辺と統合、指導法工夫改善のためのTT配置

▽令元　佐倉小交流授業、佐倉合同学習

▽令2年　スケート授業の町営リンク使用開始、佐倉合同学習、新型コロナウイルス感染症のため全道一斉休校(3月5日まで)、新型コロナウイルス感染症のため全道一斉休校延長(3月24日まで)

※平成3年以降校長名

小松繁雄(平4着任)、岩隅　哲(平7着任)、村瀬　満(平9着任)、我妻　修(平13着任)、土肥晋哉(平17着任)、鹿山　勇(平19着任)、家田　輝(平22着任)、蔵重　進(平25着任)、大島　健(平27着任)、佐藤育子(平30着任)、清水　弘(令3着任)

◎中士幌小学校

▽平３　美濃市との交流開始、パソコン導入
▽平７　士幌町教育研究大会開催
▽平８　校舎出入口拡張工事
▽平９　学校池改修工事、十勝管内算数・数学サークル研究会開催
▽平10　校舎屋上改修工事
▽平12　花いっぱい運動「人権の花指定」贈呈式、校舎外壁全面塗装工事
▽平13　中士幌小学校開校100周年記念事業協賛会総会
▽平14　十勝教育研修センター研修講座(算数)実施
▽平15　中士幌小学校開校100周年記念式典・祝賀会挙行
▽平16　自転車駐輪場工事
▽平17　NHK「ふる里の学舎」校歌取材
▽平18　士幌町教育研究大会開催
▽平19　プール漏水のため使用断念
▽平20　児童用コンピューター(10台)新規設置
▽平21　耐震補強工事および防寒用窓二重サッシ工事、グランド遊具撤去・新設工事
▽平22　2階女子トイレ(一部)洋式化工事
▽平23　東日本大震災義援金古本市開催
▽平25　プール鉄骨解体工事
▽平26　インターネット光回線切り替え工事、いじめ防止講演会開催(3～6年)、全道音楽教育研究大会十勝大会記念演奏出演
▽平30　士幌町教育研究大会　中士幌小会場
▽平31　全校スケート体験学習(帯広オーバル)
▽令元　中士幌小学校地域見守り隊結成、中士幌小学校学校図書館ボランティア「ほたる」読み聞かせ(月2回)、複式3校合同宿泊学習(5年)
▽令2　新型コロナウイルス感染症拡大防止のため臨時休校(3月24日まで)、新型コロナウイルス感染症まん延防止のため臨時休校(5月31日まで)・分散登校(5月中6日間)
※平成3年以降校長名
酒向孝雄(平4着任)、松橋源四郎(平6着任)、葛西良夫(平8着任)、佐々木孝士(平11着任)、丸谷嘉市(平13着任)、高木昇一(平16着任)、作田博光(平18着任)、十字　覚(平21着任)、山下　勇(平24着任)、安孫子徹(平27着任)、川北隆一(平28着任)、山本端聡(平30着任)、小西一寿(令2着任)

◎佐倉小学校
▽平３　千葉県佐倉市佐倉小学校交流団来校
▽平４　全道へき地複式教育研究会開催会場校
▽平７　北部複式教育研究会開催
▽平９　「エゾヤマザクラ」苗寄贈による児童記念植樹(道新より)
▽平10　校舎改築
▽平11　特殊学級かしわ開設、校舎改築落成記念式典・祝賀会挙行
▽平12　プール濾過器設置
▽平13　佐倉地区合同運動会開催　学校南側歩道設置工事開始、士幌町複式教育研究大会開催
▽平14　十勝管内特殊教育研究大会開催
▽平17　士幌町複式教育研究大会開催
▽平19　へき地複式校体験学生受け入れ
▽平21　十勝・帯広地区放送研究大会小学校授業会場
▽平23　町内教育研究大会兼複式教育研究大会
▽平26　十勝っ子ミニバレー大会準優勝
▽令2　閉校式
※平成3年以降校長名
山本　勉(平4着任)、大阪恒雄(平6着任)、山田清(平8着任)、合田義博(平11着任)、岡本眞一(平14着任)、本田チヱ子(平17着任)、石山貢司(平20着任)、濱口重則(平23着任)、清水敏文(平26着任)、小西一寿(平30着任)

◎上居辺小学校
▽平４　校舎改築
▽平５　新校舎落成記念式典挙行
▽平６　十勝管内放送教育研究会小学校会場
▽平９　学童保育所閉鎖、新プール完成
▽平10　学校林売却
▽平12　体育館ボイラー設置
▽平13　玄関照明新規設置
▽平15　十勝北部方面へき地複式教育研究大会
▽平16　防犯警報装置設置
▽平18　十勝管内複式校母の集い会場校
▽平20　体育館耐震補強工事
▽平21　士幌町教育研究大会兼町複式研究大会会場校
▽平24　玄関インターフォン設置
▽平25　全道へき地複式教育研究大会プレ大会開催
▽平26　全道へき地複式研究大会
▽平27　上居辺地区開基100周年、上居辺小学校開校100周年記念式典、記念碑建立、体育館バスケットゴール耐震工事
▽平29　グランド階段補修工事
▽平30　移動式黒板設置、NHKが「サイロ」の取組を番組取材
▽令元年　士幌町教育研究大会会場校
※平成3年以降校長名
高全國男(平4着任)、宇野英樹(平6着任)、丸山敬

志(平9着任)、金子　章(平12着任)、斉藤正美(平15着任)、青山孝和(平20着任)、中村真也(平23着任)、能瀬博行(平26着任)、津田裕匡(令2着任)

◎下居辺小学校

▽平4　校舎落成記念式・祝賀会挙行

▽平6　士幌町教育研究会開催会場校、地区開拓100年記念式参加

▽平7　十勝管内教育実践指定校(性教育)

▽平9　開校90周年記念式・祝賀会挙行、十勝管内性教育研究大会会場校

▽平10　下居辺地区山村留学推進協議会発足

▽平11　ホタル飼育羽化成功、山村留学生受入開始

▽平12　プール浄化槽工事終了

▽平14　町教育研究大会兼町複式教育研究大会会場校

▽平15　東京大学地殻変動調査装置設置

▽平16　熟年農園講師団飯島賞(町功労者表彰)受賞、北海道大学大学院山村留学に係わる学術調査協力・下居辺小学校開校100周年記念協賛会設立総会

▽平17　子どもの詩「サイロ」学校表彰受賞

▽平18　学校林皆伐

▽平19　下居辺小学校開校100周年記念式典・祝賀会挙行、開校100年記念誌「響流」発行、町内教育研究大会、町内複式教育研究大会

▽平20　管内へき地複式教育研

▽平21　山村留学推進協議会解散、学童保育所開所、町民駅伝大会小学生混成の部準優勝

▽平22　町内小学生ミニバレー大会準優勝

▽平24　玄関にカメラ付ドアホン設置、第55回全国新聞教育研究大会にてPTAだより表彰

▽平26　町民駅伝大会小学生混成の部優勝、町民体育祭小学生ミニバレー大会優勝、東部3校ミニバレー大会優勝

▽平27　町内小学生交流ミニバレー大会準優勝

▽平28　開校110十周年記念事業実行委員会設立、記念事業でカメラを購入、開校110周年記念ふるさと大運動会、町民駅伝大会小学生混成の部優勝

▽平29　閉校記念事業実行委員会設立総会

▽平30　閉校記念事業看板設置、閉校記念下居辺地区「ふるさと大運動会」、勝毎花火大会小学生・教員・父母招待

▽平31　閉校式、惜別の会、校旗返還式、施錠式

※平成3年以降校長名

越田　覚(平5着任)、須田　学(平7着任)、結城光明(平10着任)、宮沢　洋(平13着任)、木下伸一(平17着任)、横山　徹(平19着任)、戸塚　信(平22着任)、松井敦子(平26着任)、玉川弘幸(平29着任)

◎北中音更小学校

▽平3　全道子どもミルクパッケージクラフト展「造形賞」受賞

▽平4　町ラジオ体操コンクール優良賞受賞

▽平5　町内教育研究大会会場校

▽平7　プール改修

▽平8　全国版画コンクール金賞受賞

▽平9　十勝子ども大会家庭科作品特選受賞、倒木柏樹保存東家設置

▽平10　北部方面複式教育研究大会会場校、開校90周年記念「昔を語る会」実施

▽平13　散水用給水管移設

▽平14　租税教育推進校表彰

▽平17　北中音更小学校開校100周年記念協賛会設立総会開催

▽平20　全国版画コンクール入賞(銅賞1名、入選1名)、体育館耐震補強工事完了、いじめ根絶メッセージコンクール最優秀賞、北中音更小学校開校100周年記念式典・祝賀会挙行

▽平21　全国版画コンクール入賞(金1名、銅賞1名)、開校100周年記念誌発行、管内複式教育研究大会研究提言、管内放送教育研究大会授業公開

▽平22　町複式教育研究会会場校

▽平23　日専連ひだか・おびひろ児童版画展(金賞1名、銅賞1名)、日専連全国児童版画展(金賞1名、銀賞1名)、統廃合検討委員会設立

▽平24　日専連ひだか・おびひろ児童版画展(金賞1名)

▽平25　日専連ひだか・おびひろ児童版画展(帯広市長賞1名)

▽平26　地区総会にて閉校決定、閉校事業準備委員会設立、閉校事業実行委員会総会

▽平27　閉校事業看板設置・北中夏の集い　花火打上

▽平28　閉校記念授業(オリンピック銀メダリスト長島圭一郎)、閉校記念式典、惜別の会開催、施錠式実施

※平成3年以降校長名

東藤　隆(平4着任)、土居一成(平7着任)、野田勲(平9着任)、越坂入久(平12着任)、高田睦夫(平16着任)、家田　輝(平18着任)、武田　啓(平22着任)、大熊孝史(平成24着任)

◎新田小学校

▽平3　下川原小交流20周年記念式典

▽平5　植樹祭開催(学校

林に桜ほか６３０本植樹）
▽平６　十勝子供大会調査研究の部金賞受賞
▽平７　学校教育目標改定、道第６回愛鳥モデル校指定
▽平９　十勝子供大会絵画の部特選ほか多数の作品入選、町内教育研究大会会場
▽平11　校舎前舗装道路改修
▽平13　愛鳥モデル校指定、新田小学校開校70周年　地区連合運動会開催、記念式典挙行（グランド照明、自転車置き場設置）、陶芸教室開催
▽平14　北海道社会貢献賞受賞
▽平16　士幌町剣道大会団体の部優勝
▽平18　第３回全国手作り絵はがきコンクール団体優勝
▽平20　管内へき地複式教育研究大会
▽平21　野生生物保護文部科学大臣奨励賞受賞
▽平22　管内教育実践表彰受賞
▽平27　町教育研究大会兼町複式教育研究大会開催、管内複式校剣道大会開催
▽平28　愛鳥モデル校に再指定、一歩園ジュニア自然環境賞奨励賞受賞
▽平29　新田地区公民館臨時総会（閉校の決定）、閉校事業協賛会設立総会
▽平30　閉校協賛会看板設置、新田花火大会、かちまい花火大会招待、学習発表会・新田音楽祭
▽平31　閉校式、思い出を語る会挙行
※平成３年以降校長名
　伊勢英男（平５着任）、林　正幸（平７着任）、小野誠（平10着任）横山　昇（平12着任）、青木敬二（平15着任）、波多野伸一（平19着任）、蔵重　進（平22着任）、太田道夫（平成25着任）、仲　敏行（平成28着任）

◎西上音更小学校
▽平５　校舎改築期成会発足
▽平６　士幌町複式教育研究会開催（授業公開）
▽平７　校舎改築完成
▽平８　校舎改築落成記念式典・祝賀会挙行、新校門「こだまの像」除幕式
▽平10　炭焼き体験学習
▽平12　全道へき地・複式教育研究大会十勝大会会場校
▽平13　「シホロおとわの祭り」参加
▽平14　町陸上競技大会混成リレー優勝、町民バレーボール大会優勝
▽平16　町会長杯ミニバレー大会優勝
▽平18　町複式教育研究大会開催
▽平19　管内教育実践特別表彰、十勝教育局表彰
▽平20　第16回おびひろ版画コンクール優秀学校賞受賞、西上地区開拓１００周年、西上音更小学校開校90周年記念式典
▽平21　町民ミニバレー大会優勝
▽平22　町民ミニバレー大会優勝
▽平23　とかちっこミニバレー大会優勝
▽平24　防犯カメラ付ドアホン設置、人権教室
▽平28　町小学生交流ミニバレー大会優勝
▽平29　町小学生交流ミニバレー大会優勝、第１回閉校事業実行委員会
▽平30　町小学生交流ミニバレー大会優勝、閉校記念大運動会・西上サマーフェスティバル、閉校式挙行、思い出を語る会開催
▽平31　校舎施錠式
※平成３年以降校長名
　工藤久夫（平６着任）、田中信宏（平８着任）、福田良雄（平10着任）、早坂克己（平12着任）、清水正典（平15着任）、森谷紘一（平18着任）、木戸正人（平20着任）、須永正志（平23着任）、竹田義隆（平26着任）、川上裕明（平29着任）

◎士幌中央中学校
▽平２　十勝中体連剣道大会優勝（女子団体）
▽平３　校舎改築期成会設立、中高４校研究交流会、道東壁新聞コンクール優秀賞、管内放送教育研究大会会場校
▽平５　十勝大会「演劇」「意見発表」最優秀賞、第23回管内サークル合同研究会会場校
▽平６　鎌ケ谷市「少年の船」交流事業、校舎改築完成、旧校舎お別れ式、新校舎へ移転
▽平７　体育館改築完成
▽平８　校舎改築落成式、開校30周年記念式典、「生徒憲章」制定
▽平９　校舎外構整備事業
▽平12　ボランティアスクール「施設体験ワークシティ」、鎌ケ谷「少年の船」交流活動、全十勝中体連柔道大会優勝（73キログラム級）、全道中学生陸上大会入賞（１００メートル）
▽平13　・全道障がい者スポーツ大会へボランティア参加、全道中学生陸上大会優勝（走り幅跳び）・入賞（棒高跳び）、士幌町80周年おとわの祭りに吹奏楽部出演
▽平14　全国中体連スピードスケート大会入賞（１５００メートル）
▽平15　全国中体連スピードスケート大会入賞（１０００メートル・１５００メートル・女子５００メートル・３０００メートル）、全道新人陸上競技大会入賞（１００メートル・２００メートル）、十勝会英語暗唱大会最優秀賞
▽平16　全道壁新聞コンクール準大賞受賞（十勝コンクール・最優秀賞）、全国

中体連スピードスケート大会優勝(女子団体、女子500㍍・1000㍍)・入賞(男子1500㍍、女子500㍍・1000㍍・3000㍍)、JICA出前講座、帯広地区吹奏楽コンクール金賞受賞、第2回吹奏楽部演奏会、中越地震募金活動(生徒会)

▽平17　全国中体連スピードスケート大会優勝(女子500㍍・1000㍍　2年連続二冠)・入賞(女子1500㍍)、全国中学校スケート大会での活躍を讃える会、第1学年PTAサマーボランティアキャンプ、士幌町教育研究大会会場校、JICA来校

▽平18　水谷　修氏(夜回り先生)講演会、JICA来校、板東　元氏(旭山動物園副園長)講演会、クリスマスコンサート実施　吹奏楽部

▽平19　全国中体連スピードスケート大会入賞(男子3000㍍・5000㍍)、ビニールハウス完成、サマーコンサート実施　吹奏楽部、帯広地区吹奏楽コンクール金賞受賞、管内中学校壁新聞コンクール第1学年の部　特別賞、中学校新人バトミントン大会　シングル優勝、クリスマスコンサート実施　吹奏楽部

▽平20　全国中体連スピードスケート大会出場(男子3000㍍・5000㍍)、サマーコンサート実施　吹奏楽部、管内中学校壁新聞コンクール第3学年の部　特別賞、クリスマスコンサート実施　吹奏楽部

▽平21　全道中体連スピードスケート大会準優勝(男子2000㍍リレー)、全国中体連スピードスケート大会出場、帯広地区吹奏楽コンクール金賞受賞、全道卓球選手権大会出場(苫小牧)、クリスマスコンサート実施　吹奏楽部

▽平22　全道中体連スピードスケート大会準優勝(男子2000㍍リレー)、全国中体連スピードスケート大会入賞(男子500㍍・5000㍍)、少年の主張十勝大会　優秀賞、全十勝中体連野球大会　第3位、北海道ユースU－15サッカー選手権大会十勝大会第3位、サマーコンサート実施　吹奏楽部、北海道ジュニア陸上選手権大会優勝(800㍍)、太陽光発電施設完成・ジュニアオリンピック大会優勝(800㍍)、管内中学校壁新聞コンクール第3学年の部　優良賞

▽平23　全道中学校新人陸上大会優勝(800㍍・走幅跳)、管内中学校壁新聞コンクール第1学年の部　特別賞　第2・3学年の部　優良賞

▽平24　全道中体連スピードスケート大会入賞(女子1500㍍・3000㍍)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子1500㍍・3000㍍)、全道中学校陸上大会優勝(走幅跳)、全道中学校新人陸上大会優勝(走幅跳)、十勝英語暗唱大会　最優秀賞、全十勝中学校スピードスケート大会優勝(女子団体)

▽平25　全道中体連スピードスケート大会優勝(女子1500㍍・3000㍍・女子団体)、全国中体連スピードスケート大会優勝(女子団体)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子1500㍍・3000㍍・女子団体)、全道中学校スピードスケート大会優勝(女子団体)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子1500㍍・3000㍍・女子団体)、全国中学校スピードスケート大会優勝(女子団体)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子団体)、全国中体連スピードスケート大会優勝(女子団体)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子1500㍍・3000㍍)、全道新人陸上競技大会入賞(走幅跳)、十勝英語暗唱大会　最優秀賞

▽平27　全道中学校スピードスケート大会優勝(女子2000㍍・女子団体)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子1500㍍・3000㍍・女子団体)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子1500㍍・3000㍍)

▽平28　全道中体連スピードスケート大会優勝(女子2000㍍・女子団体)、全国中体連スピードスケート入賞(女子1500㍍・3000㍍)

・北海道ジュニア陸上選手権大会入賞(800㍍)、十勝英語暗唱大会　最優秀賞

▽平29　北海道中体連スピードスケート大会優勝(女子団体)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子1500㍍・3000㍍・女子団体)、北海道中学校スケート大会入賞(女子1500㍍・3000㍍)、北海道ジュニア陸上選手権大会入賞(1500㍍・砲丸投げ)、北海道中学校新人陸上大会入賞(100㍍)、十勝英語暗唱大会　最優秀賞、全十勝中体連秋季卓球大会団体戦準優勝

▽平30　全道中体連スピードスケート大会入賞(男子3000㍍・5000㍍・女子1500㍍・3000㍍)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子1000㍍・1500㍍・3000㍍)、全十勝中体連春季剣道大会優勝(女子団体)、吹奏楽コンクール帯広地区大会　金賞、北海道ジュニア陸上選手権大会入賞(100㍍・3000㍍)、北海道中学校新人陸上大会入賞(100㍍)、十勝英語暗唱大会　最優秀賞、全十勝中学校スケート選手権大会優勝(女子団体)

▽平31　全道中体連スピー

ドスケート大会優(女子団体)入賞(女子1500㍍・3000㍍・2000㍍R)、全国中体連スピードスケート大会入賞(女子1500㍍)、阿部重広杯長距離競技会兼競歩記録会入賞(800㍍)

▽令元　南部忠平記念陸上競技大会入賞(400㍍R)、全道中学校陸上競技大会入賞(100㍍)、全十勝秋季中体連剣道大会優勝(女子団体・女子個人)・準優勝(女子個人)、全十勝秋季中体連サッカー大会準優勝、十勝英語暗唱大会　最優秀賞、全十勝スピードスケート選手権大会総合優勝・準優勝、全十勝中学校冬季スケート大会優勝(女子1500㍍・3000㍍・2000㍍R)

▽令2　北海道中学校スピードスケート大会優勝(女子1500㍍・2000㍍R)・準優勝(女子3000㍍)・入賞(女子3000㍍・1500㍍)、JFA全日本U-15女子選手選手権大会　準優勝、全国中学校スピードスケート大会優勝(女子団体)・入賞(女子1500㍍・3000㍍)

※平成3年以降校長名

星　留夫(平3着任)、北野喜八郎(平7着任)、佐藤龍明(平10着任)、藤川幸二(平12着任)、田中純一郎(平14着任)、田中信宏(平16着任)、石井正大(平18着任)、西岡敏幸(平22着任)、川口久(平25着任)、小澤一記(平28着任)、上田禎子(令元着任)、小室彰人(令3着任)

士幌町中央中学校「生徒憲章」

一九九六年三月十五日制定

〈人権の章〉

人間だから
わたしの生命も心もたった一つ
かけがいのないひとりとして
大切にされる
あなたも人間だから
わたしはあなたを大切にする

〈自主の章〉

人間だから
わたしはわたしの意志をもつ
自ら創りあげる喜び
やりとげる責任とともに
ひとりの人間だから
わたしもあなたも自分で立てる

〈民主の章〉

人間だから
わたしはあなたと違う
たがいを認め、そして話しあう
違う人間だけれど平等であるために
だれもが人間だから
わたしとあなたは支えあえる

〈希望の章〉

人間だから
わたしはわたしを高めていける
真実を求め
豊かな心を育てる
わたしたちは人間だから
夢に向かってともに歩く

3、高等学校

開校70周年

１９５０年(昭和25年)４月、北海道川西農業高等学校士幌分校の設置認可を受け、開校した士幌高等学校(２年後に北海道士幌高等学校と改称独立)が２０２０年(令和２年)で開校満70周年を迎えた。

北海道でも数少ない町立の農業高校として特色ある教育を続けている同校は、この間実習宿泊施設「白雲寮」の設置(１９７０年)、農業特別専攻科の設置(１９７４年)と共に１９７５年(昭和50年)から、現中央公園付近にあった校舎を新田地区に移し、広大な自然環境の中、実学教育を大幅に取り入れたユニークな実践教育を行っている。

士幌高等学校

１９８２年(昭和57年)には全日制に移行、生徒数も増加傾向を示した。少子化の影響で全般的に高校間口の減少が見られる中、同校では間口増の運動を行い、１９８７年(昭和62年)度からの一間口増が認められ、生活科を新設した。情報処理、バイオなどの先端技術を重点とする教育課程の編成に人気が集まり当初の募集では定数を大幅に超える応募人員(農業科も含む)となった。

１９９０年(平成２年)度から生活科は「生活科学科」に変更し、より近代化教育に向けた取り組みを進めている。

間口増もあって同校へは町外からの入学生も増え１９８７年(昭和62年)度には寄宿舎「高原寮」(80人収容)を建設した。１９９１年(平成３年)には講堂および体育館の増改築を行い落成を記念して、翌年11月に野球評論家古葉竹識氏(元プロ野球広島東洋カープ監督)を招き記念講演会を実施している。

２０００年(平成12年)に50周年を迎えた同校は、11月25日、同窓生はじめ、内外から多くの関係者が集まり、半世紀にわたる同校の発展した歴史を振り返ると共に今後の益々の飛躍を願うための記念式典・祝賀会が盛大に挙行された。併せて記念誌「五十年のあゆみ」を発刊した。

２００２年(平成14年)「農業の町士幌」に確固たる役割を担ってきた農業科、生活科学科から、農業新時代に向けて対応できる人材を育てようと、アグリビジネス科、フードシステム科に学科を転換してスタートした。

士幌高等学校は、町立高校として農業教育の充実、産業を担う人づくりに向け地域と密着した教育の発展と魅力ある学校づくりを目指し取り組みを進めているが、開校以来２０２１年(令和３年)３月までに定時制時代を含め、本科、専攻科合わせて、３４４７名の卒業生を社会に送り出し、卒業生は農業をはじめ多くの分野で活躍している。(表－１、２参照)

特色ある学習活動

過去に北海道教育実践校として表彰を受けた士幌高等学校では多彩な教育実践を続け、１９９０年(平成２年)度では、畜産実習の一環として牛の受精卵の移植に取り組んだ。これは近

高校で飼育している馬

表－１ **士幌高等学校卒業生**

学科		1990 (平成２年度)	1995 (平成７年度)	2000 (平成12年度)
農業科		30	39	33
生活科学科		35	38	39
計		65	77	72
再掲	男	30	39	28
	女	35	38	44

学科		2005 (平成17年度)	2010 (平成22年度)	2015 (平成27年度)	2020 (令和２年度)
アグリビジネス科		25	19	15	26
フードシステム科		37	37	38	35
計		62	56	53	61
再掲	男	37	30	19	41
	女	25	26	34	20

表－２ **士幌高等学校在学生出身別** (令和３年４月現在)

	士幌町	音更町	上士幌町	その他	帯広市	合計
1995 (平成７年度)	101	69	20	32	26	248
2000 (平成12年度)	71	72	13	25	24	205
2005 (平成17年度)	60	45	5	31	37	178
2010 (平成22年度)	22	69	5	39	18	153
2015 (平成27年度)	13	70	2	27	63	175
2020 (令和２年度)	16	63	5	12	66	162

くの肉牛農家から黒毛和種の受精卵の提供を受け、学校のホルスタインに移植するもので、士幌町農業協同組合、家畜改良事業団の協力を得て初の試みとして行われたが、翌年(平成3年)5月、移植牛から仔牛の出産を見ることができた。受精卵移植で高校レベルとして受胎、出産まで成功させるのは当時としては珍しく、畜産実習の励みにつながった。

1991年(平成3年)に初めて家畜品評会に出陳し、全道大会で入賞した牛(ホルスタイン)の共進会への出場は、その後も毎年続けられ好成績を収めている。

1992年(平成4年)度からは、国際文化交流事業が取り入れられ毎年本科3年生を海外(主に米国)に派遣し地元高校生との交流やホームステイ等の経験を通して国際化時代に対応できる資質の向上に努めている。

1997年(平成9年)度には軽種馬を導入し、翌年度から畜産教科の中に馬に関する授業を開始した。特色ある学校として生徒募集の施策として考えたものである。

1998年(平成10年)ではホームヘルパー3級が取得できるカリキュラムの編成(ヘルパー制度の改正等で終了)や2000年(平成12年)にはインターネットの導入など新たな実践教育に向け取り組みが続けられている。

2005年(平成17年)には、士幌町の新たな特産品開発を目指すべくグミ科の小果樹シーベリー(ヒッポファエ)の加工研究を帯広畜産大学との連携により取り組んだ。2006年(平成18年)には、新しいブランド製品の開発に着手、帯広畜産大学や管内のチーズ工房と連携して酵母熟成チーズの商品化を目指し、2007年(平成19年)には、エメンタールチーズと呼ばれる「穴あきチーズ」の製造技術を学んだ。

2008年(平成20年)には、特色と魅力ある学校づくりのために「農業教員養成コース」を設置し、高収益作物としての京野菜の栽培研修、切花の栽培学習とパン加工技術研修、また酪農学園大学との高大連携協定を締結し活性化を目指した。

2013年(平成25年)に環境班が結成され、農業と環境の調和を目指して、士幌町のカシワ林の植生調査を行い、2016年(平成28年)には、士幌町全域の全ての林を調査し、士幌町現存植生図を作成するなど地域から全国にかけて保全啓蒙活動に取り組み、2019年(令和元年)に全日本学校関係緑化コンクールにおいて特選(農林水産大臣賞)を受賞した。

2016年(平成28年)には、大手インターネット通信販売サイトにて生徒が考案した加工品「ヌプカの雪解け」「シーベリーサイダー」を販売。2017年(平成29年)度には、高校として全国で2番目にGLOBALG.A.P.(農産物の国際基準)の認証を受ける。2018年(平成30年)度には、GLOBALG.A.P.で新たに2品目の認証、これで4品目(ニンジン・ニンニク・バレイショ・コムギ)の認証、「ヌプカの雪解け」の製造では北海道HACCP(自主衛生管理認証制度)の認証、そして、全国の高校で初めてとなる「アニマルウェルフェア」(家畜の快適な飼育環境に配慮)の認証を受けるなど多くの分野でさらなる取り組みがなされている。2020年(令和2年)度「志プロジェクト」が7年目を迎え、さらなる発展のため専攻班の枠を超えた活動を行う「志Lab」を設立した。

そのほかの実践教育としては毎年1年生を対象に一学期の登校日に、作物、園芸、畜産、加工の実習を行う放課後実習(平成28年度より教育課程変更のため終了)や、2年生を対象に町内や上士幌、音更の農家、企業に入って実践力を身につける農家委託実習、産業現場実習(インターンシップ)がある。

また、福祉教育にも力を入れ、特に農業クラブ福祉班やボランティア部は施設の慰問およびことばの教室等の行事運営に参加し奉仕活動を行い産業教育の振興はもとより魅力ある学校づくりに取り組んでいる。

▽歴代校長(平成4年以降)
寺田勝年(平5着任)、今多　進(平7着任)、平野賢治(平10着任)、赤間忠博(平14着任)、伊藤賢三(平17着任)、西田丈夫(平19着任)、小松芳幸(平21着任)、杉田良二(平23着任)、谷口　宏(平25着任)、吉田岳夫(平27着任)、近江　勉(平29着任)、赤穂悦生(令2着任)

活発なクラブ活動

農業クラブはじめ、各種部活動等を積極的に行っているが特に農業クラブは全国大会の常連として多くの部門で優秀な成績を挙げている。

近年の農業クラブの活動実績と他の部活動等の実績は次の通りである。

▽農業クラブ各種大会の結果

平4年2月
・学校農業クラブ全道実績発表大会プロジェクト生活の部出場（最優秀位）
10月
・学校農業クラブ全国大会プロジェクト生活の部出場（最優秀位）
平5年2月
・学校農業クラブ全道実績発表大会プロジェクト生活の部出場（最優秀位）
11月
・学校農業クラブ全国大会プロジェクト生活の部出場（優秀位）
平6年10月
・学校農業クラブ全国大会鑑定競技出場（畜産、生活）、情報処理競技出場
平7年11月
・学校農業クラブ全国大会出場
鑑定競技（畜産、生活）
飯島広典（優秀位）
秋田恵里（優秀位）
情報処理競技
高田和宏（優秀位）
平8年2月
・学校農業クラブ全道実績発表大会プロジェクト生活の部出場（最優秀位）
10月
・学校農業クラブ全国大会出場
生活鑑定競技
秋田恵里（優秀位）
情報処理競技、プロジェクト生活の部
平9年10月
・学校農業クラブ全国大会出場
生活鑑定競技
坪内則子（優秀位）
農業鑑定競技、畜産鑑定競技、情報処理競技
平10年2月
・学校農業クラブ全道実績発表大会プロジェクト生活の部出場（最優秀位）
10月
・学校農業クラブ全国大会出場
生活鑑定競技
坪内則子（優秀位）
畜産鑑定競技
溝口　寛（優秀位）
プロジェクト生活の部（優秀位）
平11年10月
・学校農業クラブ全国大会出場
畜産鑑定競技
溝口　寛（優秀位）
平12年10月
・学校農業クラブ全国大会出場
生活鑑定競技
秋田恵里（優秀位）
情報処理競技、プロジェクト生活の部
平13年10月
・第52回日本学校農業クラブ全国大会（家畜審査部門）出場
平14年10月
・第53回日本学校農業クラブ全国大会（農業鑑定競技）出場
平15年9月
・東北海道学校農業クラブ連盟意見発表大会出場
佐藤千鶴（優秀賞）
10月
・第54回日本学校農業クラブ全国大会出場
食品科学コース
村上琴美（優秀賞）
平16年10月
・第55回日本学校農業クラブ全国大会出場
農業鑑定競技
村上琴美（優秀賞）
平17年10月
・第56回日本学校農業クラブ全国大会（フラワーアレンジメント競技）出場
平18年2月
・第57回日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
農業クラブ文化・生活の部（優秀賞）
8月
・農業クラブ東北海道技術競技大会出場
農業情報処理競技
早坂麻里（優秀賞）
フラワーアレンジメント競技　野口ちえ美
11月
・第16回全国産業教育フェア（フラワーアレンジメントコンテスト）出場
野口ちえ美
平19年2月
・第58回日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
食料の部　肉製品加工班（優秀賞）
11月
・第17回全国産業教育フェア（フラワーアレンジメントコンテスト）出場
林中絵理
平20年1月
・第56回東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場（士幌町開催）
食料区分
乳製品製造研究班
肉製品加工班（優秀賞）
文化生活区分
食物班（優秀賞）
クラブ発表区分
農業クラブ執行部（優秀賞）
2月
・第59回日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
食料区分
乳製品製造研究班（優秀賞）
肉製品加工班（優秀賞）
10月
・第59回日本学校農業クラブ全国大会（乳製品製造研究班）出場
平21年1月
・第57回東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場
食料・生産区分
乳製品製造研究班（優秀賞）
クラブ発表区分
農業クラブ執行部（優秀賞）
2月
・第60回日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
食料・生産区分　乳製品製造研究班
クラブ発表区分　農業ク

ラブ執行部
8月
・東北海道学校農業クラブ連盟技術競技大会出場
農業鑑定競技　農業コース　真田ありさ(優秀賞)
食品科学コース
小竹　隼人(優秀賞)
本田　莉菜(優秀賞)
フラワーアレンジメント競技
上之段篤志(最優秀賞)
10月
・日本学校農業クラブ全国大会出場
農業鑑定競技優秀賞
真田ありさ、小竹隼人
11月
・全国産業教育フェア(フラワーアレンジメントコンテスト)出場
上之段　篤志
平22年1月
・東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場
文化・生活区分
乗馬セラピー専攻班(優秀賞)
2月
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場　文化・生活区分
乗馬セラピー専攻班

8月
・東北海道学校農業クラブ連盟技術競技大会出場
フラワーアレンジメント競技
森本な(優秀賞)
平23年8月
・東北海道学校農業クラブ連盟技術競技大会出場
農業鑑定競技　食品科学の部
藤川　結衣(優秀賞)
家畜審査競技　乳牛の部
猪狩祐平(優秀賞)
10月
・日本学校農業クラブ全国大会出場
農業鑑定競技　食品科学の部　藤川　結衣
平24年8月
・東北海道学校農業クラブ連盟技術競技大会出場
家畜審査競技　乳牛の部
猪狩祐平(最優秀賞)
10月
・日本学校農業クラブ全国大会出場
農業鑑定競技　農業コース
須田侑希(優秀賞)
平25年1月
・東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場
文化・生活
肉加工専攻班(優秀賞)
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
文化・生活　肉加工専攻班
8月
・東北海道学校農業クラブ連盟技術競技大会出場
農業鑑定競技　農業コース
小笠原朔夜(優秀賞)
食品科学コース
石鳥谷有威(優秀賞)
フラワーアレンジメント競技　優秀賞　村田美和
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道意見発表大会
兼南北海道学校農業クラブ連盟意見発表大会出場
環境
村田茉優(優秀賞)
10月
・日本学校農業クラブ全国首都圏大会出場
農業鑑定競技　農業コース
小笠原朔夜
食品科学コース
石鳥谷有威
平26年1月

・東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会
文化・生活　地域食物専攻班
(優秀賞)
環境
酪農専攻班　(優秀賞)
2月
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
環境
酪農専攻班　(優秀賞)
8月
・東北海道学校農業クラブ連盟技術競技大会出場
フラワーアレンジメント競技
高橋菜々実(最優秀賞)
農業鑑定競技
畜産
宮本菜摘(優秀賞)
食品科学
中野利之(優秀賞)
齊藤香那(優秀賞)
10月
・日本学校農業クラブ全国大会出場
農業鑑定競技　畜産
宮本菜摘
農業鑑定競技　食品科学
中野利之、齊藤香那
11月

・全国高校生フラワーアレンジメントコンテスト出場
高橋菜々実
平27年1月
・東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場
地域資源専攻班(優秀賞)
環境専攻班(優秀賞)
酪農専攻班(優秀賞)
農業クラブ執行部(優秀賞)
2月
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
酪農専攻班　(最優秀賞)
8月
・東北海道学校農業クラブ連盟技術競技大会出場
フラワーアレンジメント競技
家常優希(最優秀賞)
星久保菫(優秀賞)
農業鑑定競技
畜産
宮本翔馬(優秀賞)
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道意見発表大会
兼東北海道学校農業クラブ連盟意見発表大会出場
10月
・日本学校農業クラブ全国大会(農業鑑定競技)出場

・全国高校生フラワーアレンジメントコンテスト出場
家常優希
平28年1月
・東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場
乳加工専攻班（優秀賞）
地域資源専攻班（優秀賞）
農業クラブ執行部（優秀賞）
2月
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
乳加工専攻班　地域資源専攻班　農業クラブ執行部
8月
・東北海道学校農業クラブ連盟技術競技大会出場
フラワーアレンジメント競技
星久保董（最優秀賞）
農業鑑定競技　畜産コース　宮本翔馬（優秀賞）
食品科学コース
滝本一加（優秀賞）
10月
・日本学校農業クラブ全国大会出場
農業鑑定競技　食品科学コース
滝本一加（優秀賞）
平29年1月
・東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場
野菜専攻班（優秀賞）
乳加工専攻班（優秀賞）
草花専攻班（優秀賞）
農業クラブ執行部（優秀賞）
2月
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
乳加工専攻班（優秀賞）
8月
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道技術競技大会出場
フラワーアレンジメント競技
前多唯衣（最優秀賞）
農業鑑定競技
畜産コース
伊藤銘志（優秀賞）
食品コース
太田菜摘（最優秀賞）
畜産審査競技
乳牛コース
髙瀬惇生（最優秀賞）
酒井悠多・髙瀬惇生・稗田智将（団体最優秀賞）
農業情報処理競技
遠藤星弥（優秀賞）
10月
・日本学校農業クラブ全国大会（農業鑑定競技）出場
平30年1月
・東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場
環境専攻班（優秀賞）
野菜専攻班（優秀賞）
乳加工専攻班（優秀賞）
2月
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
野菜専攻班（優秀賞）
乳加工専攻班（最優秀賞）
8月
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道技術競技大会出場
フラワーアレンジメント競技
中村茉那（最優秀賞）
農業鑑定競技
畜産コース
高橋六花（優秀賞）
瀧　朱（優秀賞）
食品コース
谷崎有希（優秀賞）
畜産審査競技
乳牛コース
大川瑞穂（最優秀賞）
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道意見発表大会出場
分野Ⅰ類　小川菜月
10月
・日本学校農業クラブ全国大会出場
プロジェクト発表
分類Ⅲ類
乳加工専攻班（優秀賞）
・全国高校生フラワーアレンジメントコンテスト出場　中村茉那
平31年1月
・東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場
農産加工専攻班（優秀賞）
乳加工専攻班（最優秀賞）
農業クラブ執行部（最優秀賞）
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
農産加工専攻班（優秀賞）
乳加工専攻班（優秀賞）
農業クラブ執行部（優秀賞）
令元年8月
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道技術競技大会出場
フラワーアレンジメント競技
鈴村誠也（最優秀賞）
農業情報処理競技
小川菜月（優秀賞）
農業鑑定競技　農業
駒形守羅（優秀賞）
食品
浜平くるみ（優秀賞）
青山エイト（優秀賞）
畜産　瀧　朱（優秀賞）
赤川人成（優秀賞）
前多涼介（優秀賞）
高橋六花（優秀賞）
家畜審査競技　乳牛の部
野田達哉（最優秀賞）
岡崎弘季（優秀賞）
松本颯太（優秀賞）
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道意見発表大会出場
分野Ⅰ類
小川菜月（優秀賞）
分野Ⅲ類
福田あみ（優秀賞）
10月
・日本学校農業クラブ全国大会（農業鑑定競技）出場
・全国高校生フラワーアレンジメントコンテスト出場　鈴村誠也（最優秀賞）
令2年1月
・東北海道学校農業クラブ連盟実績発表大会出場
乳加工専攻班（最優秀賞）

有機農業専攻班（優秀賞）
畜産専攻班
農業クラブ熟行部（優秀賞）
・日本学校農業クラブ北海道連盟全道実績発表大会出場
乳加工専攻班（最優秀賞）
農業クラブ熟行部（優秀賞）

▽その他部活動等の実績

平2年6月
・全道高校陸上大会（札幌）
砲丸投げ1位　加藤吉宏
7月
・全道加盟団体陸上大会（三笠）高校一年砲丸投げ1位　方川博幸
9月
・国体陸上北海道予選（函館）
砲丸投げ3位　方川博幸
平3年6月
・全道高校陸上大会（室蘭）
砲丸投げ1位　山崎康幸
9月
・第7回全道高校新人大会
ハンマー投げ
2位　方川博幸
平4年6月
・全道高校陸上大会（釧路）
ハンマー投げ
2位　方川博幸
8月
・国体陸上北海道予選（旭川）
円盤投げ3位　方川博幸
・全国高校総合体育大会陸上ハンマー投げ出場
平5年6月
・高体連全道陸上大会女子
円盤投げ3位　衣原由香
8月
・国体陸上北海道予選（釧路）
円盤投げ3位　衣原由香
・全国高校総合体育大会陸上円盤投げ出場
9月
・北海道ホルスタイン共進会（早来）
第十三部　ハイランド　テルスター　エース　二等六席
平6年9月
・北海道ホルスタイン共進会（早来）
第二部　ハイランド　プリンセス　シャーリン　一等六席
平9年9月
・国体陸上北海道予選（帯広）
砲丸投げ　2位　菅原
・北海道ホルスタインナショナルショー（早来）
第一部　ハイランド　インスピレーション　アパッチ　一等三席
平10年9月
・第12回北海道総合畜産共進会（音更）
第五部　ハイランド　インスピレーション　アパッチ　一等三席
平11年9月
・第13回北海道総合畜産共進会（早来）
第四部　ハイランド　デアレックス　バージニア　二等七席
平14年9月
・第24回十勝総合家畜共進会入賞（ハイランドベンスター・イブ・コリー号　二等）
・全道共進会入賞（ハイランドベンスター・イブ・コリー号　一等八席）
平15年9月
・陸上競技新人戦十勝大会
準優勝　女子砲丸投げ
瀬口祐加
5位　男子百メートル
森谷幸広
平16年1月
・アグリフォーラムイン十勝　プロジェクト研究部門出場
河瀬　祐（最優秀賞）
9月
・第59回国民体育大会陸上競技大会北海道選手権選考会　優勝（少年女子A砲丸投げ　瀬口祐加）
・第59回国民体育大会陸上競技全国大会出場（少年女子A砲丸投げ）
10月
・第2回全道ホルスタインウインターフェアー出場
全道優勝（生後8か月未満の部　乳牛改良研究クラブ　部員4人）
平17年6月
・国際ナチュラルチーズフェアin十勝　チーズコンテスト銅賞（チェダーチーズ）
・第5回オール・ジャパン・ナチュラルチーズコンテスト優秀賞（チェダーチーズ）
平18年9月
・第42回高文連十勝支部書道展・研究会　高文連賞受賞　戸崎裕美、塩谷明子
10月
・北海道ホルスタインウインターフェアー入賞2頭（乳牛）
平19年12月
・2007青年アグリフォーラムin十勝
農業経営部門最優秀賞
専攻科　小森規央
平20年12月
・2008青年アグリフォーラムin十勝
畜産部門優秀賞
専攻科　上森美佐子
平21年12月
・2009青年アグリフォーラムin十勝
農業経営部門最優秀賞
専攻科　河村拓也
畜産部門優秀賞
専攻科　成田和善
平27年9月
・北海道ホルスタインナショナルショー出場
10月

・前日本ホルスタイン共進会北海道大会出場
平29年6月
・さっぽろ花フェスタ2017・第8回北海道農業高校生ガーデニングコンテスト準大賞
11月
・全国高校生農業アクション大賞（15のグループに認定）野菜専攻班
2019年秋の大賞審査候補に選定される。
（主催：全国農業協同組合中央会、毎日新聞社）
12月
・第5回高校生ビジネスプラングランプリ「全国ベスト100」を受賞
プランタイトル「士幌発!!ヌプカの雪解け地方創生への挑戦」
（主催：日本政策金融公庫）
平30年2月
・第3回全国ユース環境活動発表大会
優秀賞受賞　環境専攻班
活動名「士幌の原植生カシワ林を後世に伝えるために」
（主催：全国ユース環境活動発表大会実行委員会（環境省、独立行政法人環境再生保全機構、国連大学サステイナビリティ高等研究所））
6月
・さっぽろ花フェスタ2018・第9回北海道農業高校生ガーデニングコンテスト準大賞
・第6回高校生ビジネスプラングランプリ「全国ベスト100」を受賞
プランタイトル「提案ヌプカの雪解けが創るわたしたちの町しほろ」
（主催：日本政策金融公庫）
10月
・第1回全国ヨーグルトサミットin小美玉市「また食べたい部門」ベストリピーター賞受賞
平31年4月
・日本自然保護大賞2019（2018年度）
大賞受賞（子ども・学生部門）　環境専攻班・士幌環境講座
（主催：公益財団法人日本自然保護協会）
令2年3月
・令和元年度全日本学校関係緑化コンクール特選（農林水産大臣賞）受賞
学校林等活動の部（主催：公益社団法人国土緑化推進機構）

高校食品加工実習

農業特別専攻科

農業後継者養成の場として1974年（昭和49年）に士幌高校に農業特別専攻科が設置され、高校卒業後農業に従事しながら更に専門的教育を2年間学び、冬期間の農閑期に約100日登校し講義を受け、農繁期は、自主登校と自家の農業経営をプロジェクトとして実践学習を行う特殊な教育課程を行ってきた。道内では本校を含め3校のみであった。

開設以来、士幌高校卒業生は勿論、帯広農業高校、上士幌高校など、管内の高校のほか、十勝管外、道外出身者の卒業生も多く出している。

農業振興基金の配分を受け、1992年（平成4年）度から実施している米国研修セミナーは、毎年専攻科1、2年生を対象に、米国コロラド州デンバーに50日を超える日程で派遣し、デンバー近郊農家でファームステイして農業実習を行っている。このセミナーは次代を担う農業経営者として国際感覚と強い精神力を身に付けることを目的に始められたもので、2008年（平成20年）度までに17回行われ1、2年生169人が参加している。

1994年（平成6年）に開講20周年を迎えた農業特別専攻科は、同年12月13日、20周年記念事業として「講演会・祝賀会」を挙行、あわせて記念誌「二十年のあゆみ」を発行した。また、2003年（平成15年）米国研修セミナーの記念誌『ゆめ、発見』が発刊された。

十勝の農業担い手育成の拠点としての役割を果たしてきたが、全体的な入学者の減と併せ町内出身者の減少が顕著となり、2008

表－3　出身学校別在学生

農業特別専攻科概要

	士幌高校	上士幌高校	帯広農業高校	音更高校	帯広三条高校	とわの森三愛	その他高校	合計 男	合計 女
1995（平成7年度）	12		4	2		1	3	22	0
2000（平成12年度）	12	1	13	1	1	1	4	31	2
2005（平成17年度）	6	2					2	9	1
2009（平成21年度）	4		1				2	6	1

注）平成22年3月31日で閉科

年(平成20年)度においても入学者は8名で、内町内の出身者は1名の状況となった。開設以来、家業を引き継ぎスムーズな経営移譲をしていくためにも大きな役割を果たしてきたが、本町の新規就農者の動向、農業後継者育成のニーズそして財政面における状況などを鑑みて、農業特別専攻科についての募集は同年度を以て終了し、２０１０年(平成22年)3月を以て閉科されることとなった。

２００９年(平成21年)12月5日に本校体育館において修了生や来賓等４００名が出席して閉科記念式典が行われ、36年間の歴史に幕を閉じた。開設以来、４４９名が同課程を修了した。(表－3参照)

農場実習と食品加工

士幌高校では実践活動により開校以来めざましい実績を挙げてきた。特に校舎を新田地区に移してからは広大な土地を利用した農場実習として畑作、園芸、畜産に分けた部門ごとの実習に力を入れ、畑作部門では毎年22ヘクタール程の農地に馬鈴薯、甜菜、デントコーン、牧草、その他の作物を耕作し、耕起、施肥、播種から収穫までの管理技術を実践で学び、園芸部門では、ナス、トマト、イチゴなど野菜づくりと、鉢花、野菜苗、花苗づくりにも取り組んで成果を挙げているほか、畜産部門では乳牛の導入による酪農技術と経営感覚を養うなど幅広い活動を行っている。

食品加工部門では、早くから取り組んでいる乳製品のチーズ、アイスクリーム、ヨーグルトに加え、２００８年(平成20年)からはどら焼き、パンなども加わり売り上げを伸ばしている。

また肉製品としては、ソーセージ、ベーコン、スモークチキンなど多彩な品目を製造しこれらは町の各種イベント、都市観光物産展等に提供している。

畑作で収穫される馬鈴薯等は調理実習に使われ特に馬鈴薯の調理実習では早くから多くの調理メニューが研究され、過去に調理カードを作成して町民各戸に配布したほか、ＮＨＫテレビ番組でも取り上げられた実績をもつ。

２００３年(平成15年)農畜産物を活用した食品の研究開発と士幌高校の学科転換への対応を目的とする地域施設として食品加工研修センターが建設された。２００４年(平成16年)4月からこの施設では、町民一般と士幌高校で利用され食品加工研究開発と、食農教育の場として供用を開始した。

２０１９年(令和元年)度より、農畜産物加工研修施設「しほろキッチン」のオープンに伴い、名称を「食品加工施設」に改め、高校の専用施設として活用した。

部門ごとの生産物は実習使用量を除き販売しているが、２０２０年(令和2年)度の売上額は「表－4」のとおりである。

表－4 令和２年度士幌高等学校生産物売上

(1) 畑作部門

作　物　名	販売金額
馬鈴薯（3品種）	２３２,９８８円
豆類（2品種）	１５,９３５円
小　　麦	２９,３６２円
計	２７８,２８５円

(2) 園芸部門

品　　名	販 売 金 額	備　　考
野菜	５７０,６８８円	人参・タマネギ・ミニトマト他
鉢花・切花	６１５,９７１円	シクラメン・ベゴニア・アルストロメリア他
花・野菜苗	３０８,４６３円	マリーゴールド・サルビア・トマト・ピーマン他
計	１,４９５,１２２円	

(3) 畜産部門

品　　名	販 売 金 額	備　　考
乳　　代	４,７８５,２７８円	年間生産乳量　５６,６８７kg 内訳＜販売用＞　５６,３６４kg ＜加工用＞　３２３kg
個 体 販 売	１,５０７,５６９円	乳用牛販売
計	６,２９２,８４７円	

(4) 食品加工部門

品　　名	販 売 金 額	備　　考
乳製品	３６１,６０５円	チーズ・ヨーグルト他
肉製品	９１８,１７２円	ベーコン・フランクフルト他
農産加工品	６０２,５８９円	どら焼き・ハスカップジャム他
計	１,８８２,３６６円	

4、幼稚園から認定こども園へ

減少する園児

幼稚園は人間形成の最も大切な幼児期を育てるための施設として制度化されたもので士幌町では1974年(昭和49年)4月に就学前の5歳児を対象に設置した。

1977年(昭和52年)度からは4歳児も対象に2学級編成とし専任園長も配置された。2001年(平成13年)度から3歳児教育(保育)が導入され、3学級編成となっている。

当初は、保育所に併設されていた幼稚園は、1980年(昭和55年)に農村環境改善センター内に移り、1990年(平成2年)で独立園舎を新築、2008年(平成20年)から士幌保育所と併せ認定こども園として新しい施設で指導・保育が行われている。園児数は、少子化による絶対数の減少で年々減っている。

これまでの保育所児は長時間型として、幼稚園児は短時間型として認定こども園内では分類されているが、長時間児も短時間児も一体としてクラス編成を行っている。少子化に伴い園児数の減少もあるが、近年の保育料無償化等に伴い、短時間型の園児は減少する傾向が強くなっている。

(※第2編第3章3項、児童福祉を参照)

▽園長(平成3年以降)

原　高義(平元～6)、小松繁雄(平7～12)、村瀬　満(平13～16)、丸山敬志(平17～19)、菅　忠良(平20)、菅野敏見(平21途中)、笠谷直樹(平21)、堀　光生(平22)、石井正大(平23～25)、狩野信也(平26～29)、山中明裕(平30～現在)

園児数の推移

表－1　(単位：人)

		4歳児	5歳児	計
平成3年度	男	9	16	25
	女	16	14	30
	計	25	30	55
平成8年度	男	11	8	19
	女	9	9	18
	計	20	17	37
平成12年度	男	9	10	19
	女	6	9	15
	計	15	19	34
平成17年度	男	8	6	14
	女	12	3	15
	計	20	9	29
平成21年度	男	6	8	14
	女	6	8	14
	計	12	16	28

第二章　社会教育

1、社会教育

生涯学習の推進

町の生涯教育活動は、町教育委員会が１９８１年(昭和56年)に立てた社会教育中期計画(第１期　昭和56年～同60年)を基礎に進められており、少年、青年、成人、家庭、婦人、高齢者等の階層に分けた教育と芸術文化、社会体育、指導体制、社会教育施設の各分野にわたる具体的な計画に沿って推進されている。

同計画は１９８７年(昭和62年)に第２期計画を、以降５年を区切りとして、社会教育委員会に諮問して、社会情勢、社会教育の状況を分析した中で見直しが図られている。

ＡＬＴと一緒にイングリッシュキャンプ

１９９７年(平成９年)に策定した第４期計画では、人生80年時代を迎え、生涯にわたって健康で豊かな人生を送るための生涯学習社会の推進体制が必要だとし、社会教育の延長線上に生涯学習を置くと言う考え方を広げ、家庭教育、学校教育、社会教育、企業教育、無組織教育などあらゆる教育機関を大きく包括して、生涯の各時期における学習環境・条件を総合的に融合させ、子どもから大人までだれでもが、いつでも、どこでも学習できる生涯学習を推進するとしている。

このため計画の名称も「生涯学習推進中期計画」とし町民憲章の精神を基調に、町の第４期町づくり総合計画との調和も図りながら、新しい時代に向けた推進活動を展開していくこととした。

２００１年(平成13年)の社会教育委員を中心とした策定委員会の答申を受けて策定された「士幌町生涯学習推進中期計画」では「町民一人、一学習・一スポーツ」を目標として各種事業を展開した。翌年生涯学習推進本部を設立するため検討を重ねた結果、町企画課への本部設置を決め体制を整備し生涯学習を推進した。

２００７年(平成19年)以降の社会教育中期計画では、町の第５期・第６期町づくり総合計画に基づき「地域の連帯意識を高め活力とうるおいに満ちた自立した地域を創ること」を目標に推進されている。

２０１１年(平成23年)、教育基本法の改正があったこと、一定の成果が得られたことから教育委員会で推進することとなった。

▽社会教育委員会

社会教育委員は法の規程により設置され、社会教育計画への参画やその推進にあたっている。定数は12名で、学校教育、社会教育の関係者と学識経験者が教育長の委嘱を受け委員会を構成している。

委員長(平成３年以降)
森本武次郎(平２・７～６・６)／鈴木晃一(平６・７～

22・6）／吉田静二（平22・7～現在）

生涯学習講座

1997年（平成9年）1月、北海道地域リカレント教育推進協議会（北海道大学高等教育機能開発総合センター）の主催による士幌町生涯学習講座が同年1月18日から3月1日の間で7講座開かれた。同講座は、高齢化社会が進む中、生活環境の変化や多岐にわたる町民ニーズに対応する新たな方向と地域社会の在り方、振興の方向について、7つのテーマを設け開かれたもので、定員を超える72名の町民が受講した。

同講座は好評を博し、継続開設の要望が強かったことから、1999年（平成11年）度まで北海道大学高等教育機能開発総合センターの主催により年6講座が福祉・農業・子育て・町づくりなど多彩なテーマで実施され、多くの町民が受講した。

翌年度以降は、町主催で生涯学習講座が開かれたが、2000年（平成12年）度に生涯学習時代を迎え時代の変化とともに学習意欲の高まりや内容の高度化、専門化、多様化の傾向が急速に進む中で、その領域に合った生涯学習の在り方について総合的に推進することが必要として、庁内機構として「ふれ愛ユートピア推進本部」および「生涯学習専門委員会」を、生涯学習社会を的確に構築していくための諮問、建議、審議機関として「ふれ愛ユートピア推進協議会」を設置した。生涯学習事業として、町職員等が講師となり町民の皆さんのお手元へ出向き、お話などをする「ふれ愛ユートピア出前講座」、町づくりについて学習する「ふれ愛ユートピア講座」（生涯学習講座）を開催するとともに、町民の知識や技術・技能等を町民の学習活動の場で生かされるよう「生涯学習支援バンク（講師登録）制度」を開始した。

◎2019年（令和元年）度実績

生涯学習講座　4回
受講者　610人
出前講座　102回
受講者延　3973人
生涯学習支援バンク講師登録者数　4団体6個人

2020年（令和2年）度は新型コロナウイルス感染症予防のため中止となった。

生涯学習支援バンク講師登録者数　4団体8個人

生涯学習指導体制

町教育委員会では、社会教育の広範にわたる指導体制を強化しているが、社会教育指導員、生涯学習指導員制度を通じ、地域、団体の学習活動で成果を挙げている。

1990年（平成2年）から町の生涯学習指導員として活躍していた野久一郎は、2000年（平成12年）財団法人社会通信教育協会認定の生涯学習インストラクター2級資格を取得した。道内では最高齢の取得者となり同協会の人材バンクにも登録された。

同指導員は、本町のみでなく近隣市町村の高齢者学級等にも出向き活動していた。

1994年（平成6年）度には、生涯学習総括主幹を置き青少年の相談活動をはじめ一般町民を対象とした指導体制の強化を図っている。翌年からの同主幹には、1993年（平成5年）3月まで士幌高校の校長を務め、その後他校で定年となり、士幌を永住の地として自宅を新築した三澤治を委嘱、教職生活の指導力を発揮し活躍、2000年（平成12年）度まで務めた。

現在の生涯学習指導体制は生涯学習支援バンク制度による講師を派遣、町民相互が学び合い、認め合う、豊かな地域社会形成を目指している。

総合研修センター

第3期町づくり総合計画に、総合体育館、図書館、農業資料館などの建設計画が立てられていたが、3年ローリングによる見直しで計画の一部を変更し、生涯学習の拠点となる総合研修施設を建設することにした。

総合研修センター

プロジェクトチームによる調査・研究を経て1991年（平成3年）度で設計、翌年（平成4年）5月に着工した。

同施設は、体育館、武道館、資料館、図書館、ホール、ほか学習施設など多くの機能を有する文化の拠点として建設したもので、本体工事を2年間で行い1993年（平成5年）11月に完成した。その後備品の購入、事務所の引越し等、準備期間をおいて翌年（平成6年）4月にオープンした。

同施設は、鉄筋コンクリート造り、一部2階建てで延床面積8331・86平方メートルとなっており、総建設費約33億円が投じられた。施

設全体の名称を「士幌町総合研修センター」とし、内部の施設ごとにも町民に馴染みやすい愛称をつけた。

○すこやか体育館

（3138・9平方㍍）

アリーナは1575平方㍍でバスケットボール、バレーボール、テニスなどは2面、バトミントンは8面、卓球なら16面の利用が可能な広さをもつ。アリーナ上部の周囲をランニングコースとし、そのほか更衣室、シャワー室、幼児室を備えている。

武道館は456平方㍍で剣道、柔道、少林寺拳法などが2面とれるスペースとなっている。そのほか研修室（105・8平方㍍）も備え、ここではエアロビクス、バレエ、ジャズダンスなどが行われている。

体育館全体の使用人数は1999年（平成11年）度で延べ2万5176人、2019年（令和元年）度で延べ3万7168人となっている。

○したしみ図書館

（716・7平方㍍）

コミセン図書室当時の蔵書数は2万2千冊であったが、2000年（平成12年）3月末現在では4万5千冊、2019年（令和元年）3月末現在では7万9千冊を超える蔵書数となっている。

ゆったりとした空間で本に親しむ一般コーナーのほか、児童コーナー、お話コーナー、ビデオコーナー、調査研究室を備え貸出本の受け払いはコンピューターで管理している。

1999年度（平成11年）の利用状況は、貸出人数6469人、貸出冊数で2万4789冊、2019年（令和元年）度では、入館者数1万1697人、貸出人数5775人、貸出冊数で2万417冊となった。

○ふれあいホール

（1212・9平方㍍）

移動観覧席（252席）を含め800人の収容スペースをもつホールは、芸能等各種催し物など多目的に利用され、グランドピアノも備えられている。

同ホールではオープン記念事業の一環としてNHKの公開番組「ふるさと愉快亭、小朝が参りました」の公開録画の収録が行われた。

ふれあいホールの付属施設として、クッキングルームのほか、100人収容できる和室、電子ピアノや各種楽器を備えた音楽室（防音室）などがある。

1999年（平成11年）度の利用状況は229日利用され利用人数は1万5875人、2019年（令和元年）度では開館日数281日、利用人数は1万527人となった。

○ふるさと資料館

（495・1平方㍍）

開拓当初からの士幌のあゆみと現在の豊かな士幌町、更に未来に向かっての士幌町を資料展示や、模型、パネルで紹介しているほか、児童・生徒の郷土学習にも利用されている。

1999年（平成11年）度の利用者数は4237人、2019年（令和元年）度の利用者数は96人。

○さわやか工房

（455・7平方㍍）⇓（348平方㍍）

陶芸室（286・5平方㍍）は、本焼用電気窯・電動ろくろ、土練機コンプレッサー等が備え付けられ30人まで利用できる。

そのほか、木工室（20人収容。後にトレーニング室に改造）、石工室（同10人）も設けられ時折教室も開きながら愛好者がそれぞれサークルをつくり年間利用している。

1999年（平成11年）度、延べ1639人、2019年（令和元年）度では延べ1509人が利用した。

○トレーニング室

（107・7平方㍍）

2016年（平成28年）度に木工室を改造して設置、トレーニング機器の設置や指導者の付いた運動教室などが開催されている。

2019年（令和元年）度では延べ5452人が利用した。

○その他学習施設

（348・7平方㍍）

視聴覚室（196・8平方㍍）は75人の収容スペースでビデオプロジェクター、ビデオ、LDプレーヤー、ワイヤレスマイク、DVDプレーヤーなどが備えられ学習活動に利用されているほか、パソコン室や会議室も設置している。

教育委員会事務局が同施設に入り管理運営に当たっているが、清掃、警備等は、民間業者に委託している。

文化の殿堂としてオープンした「総合研修センター」は1994年（平成6年）夏までに外構工事を終え、同年8月30日ふれあいホールで落成記念式典を挙行、午後からは元オリンピック全日本女子バレーボールチームの名セッター「中田久美」選手を招きトークショーのあと体育館でバレー教室を開き施設のオープンを祝った。

総合研修センターは「総研」の愛称で呼ばれるようになり、町教育委員会では、施設パンフレットで「さあ！

みんなで「総研」へでかけて爽(爽快)健(健康)になろう」を標題にサブ的標語として
・したしみ図書館で、かしこくなろう。
・ふるさと資料館で、郷土を知ろう。
・すこやか体育館で、たのしくリフレッシュ。
・さわやか工房・ふれあいホールで、趣味とふれあいを広げよう。
と記し多くの町民の施設利用を呼びかけている。

伝統農業保存伝承館・美濃の家

士幌町発祥の地記念公園内に1997年(平成9年)に建設された「伝統農業保存伝承館」は、将来を担う子どもたちを始め、多くの人たちに、昔を知ってもらう目的で建設され、士幌町開拓90周年を記念して、同公園内に移設された「美濃の家」と合わせ、体験や実習を通して、開拓当時からの先人の農業や生活の様子を知り、たくましい開拓精神を学ぶことを目的としている。

高齢者大学と大学院から柏樹学級へ

高齢者の社会活動の促進と生きがいのある生活観の確立を柱とした高齢者教育を図るため、教育委員会では、「柏樹大学」「柏樹大学院」を開設していた。

1987年(昭和62年)度から3年制に延長した柏樹大学は満60歳から入学でき、月1回の学級開設と年2～3回の臨時開設でふまねっと教室、クラブ活動、他町高齢者学級との交流会、士幌小・中央中学校生徒との交流、ボランティア活動、研修旅行、生きいき交歓会等を通じ、自己研さんと社会参加を果たした。

2009年(平成21年)度の学級生は1年生から3年生まで44人であった。大学卒業(3年)後は柏樹大学院へ進むこともでき、学習意欲のある高齢者は終身学校としての同大学院に進み更なる学習活動に励んでいた。

柏樹大学院は、はじめ3年間を修士課程とし、続く4年間が博士課程、8年目からは生涯課程(終身)として通級できるが、2009年(平成21年)度の在級生は、修士課程57人、博士課程43人、生涯課程52人、総計152人となっていた。

表－1 **柏樹学級の開催状況** (令和元年度)

学級生数			開催回数(回)	出席者数(人)	学習内容
男	女	計			
54	92	146	11	329	クラブ活動・他町高齢者学級との交流会・中央中学校生徒との交流・ボランティア活動・研修旅行・健活セミナー・芸術鑑賞他

柏樹大学・大学院の開催状況 (平成21年度)

柏樹大学(3年制)

学年	学級数	学習内容
1年生	23	ふまねっと教室・クラブ活動・他町高齢者学級との交流会・士幌小および中央中学校生徒との交流・ボランティア活動・研修旅行・生きいき交歓会・他
2年生	9	
3年生	12	
計	44	

柏樹大学院 (大学卒業者による終身学校)

柏樹大学(3年制)

	計	学習内容
修士課程(3年制)	57	生きいき交歓会・講和・研修旅行・クラブ活動・士幌小及び中央中学校生徒との交流・ボランティア活動
21期～23期生		
博士課程(4年制)	43	
18期～20期生		
生涯課程(終身)	52	
5期～16期生		

近年、新たな入学者が少ないため、2019年(令和元年)度より、単年度募集の学級制へと変更し、柏樹学級を開設した。学習内容は、研修旅行・健康セミナー・芸術鑑賞・クラブ活動などをおこなっており、2019年(令和元年)度の学級人数は146人となっている。(表－1参照)

学級と講座

社会教育事業として早くから年代別、階層別の学級、講座等が開かれているが、女性教育の推進を図るための学級として中央に年間を通した女性学級が1か所、2003年(平成15年)から女性ライフスクールに名称を変更し実施。ほかに冬期間地域の要請で開く地域単位の学級も数か所ある。女性学級は、講話、町外施設見学、アイヌ文化学習、お菓子作りを通した国際交流、子どもと交流など学級生の要望も取り入れながら運営されている。2019年(令和元年)度の学級生は21人、年10回開く学級に延べ108人の出席。また、佐倉学級(延べ52人)が4回、中士幌学級(延べ36人)で2回開催された。

乳幼児の母親を対象とした乳幼児学級も年間10回前後開かれ、情報交換、本の読み聞かせ、親子レクリエ

女性ライフスクール

ーション、バス学習、人形劇、水遊び、遠足などを行っていたが、２００８年(平成20年)度から子ども課で実施され、現在はキッズクラブとして開催されている。

町内小学校８か所に家庭教育学級を開設し、母と子のふれあいや、子供の心と体(性教育)、体力づくり、講話等を通じ、健全な家庭づくりを推進していたが、２００５年(平成17年)度で終了している。また青年教育の一環として青年講座を開き、青年の社会参加、地域おこし等を学び、情報交換、レクリエーションも行っていた。２００５年(平成17年)度から北部３町青年指導者研修会を青年講座に位置づけていたが２０１５年(平成27年)度で終了した。

公民館

公民館は、社会教育法の規定に基づき町の条例で設置することを定めている。

生涯学習時代を迎え、地域における教育施設の相互連携、ネットワーク化、さらに指導者を含む地域の教育資源の活用など多くの使命を担って設置しているもので本町では士幌町公民館(中央公民館)、中士幌地区公民館のほかに町内12の地区に士幌町公民館の分館を設置している。

中央公民館は、多目的集会施設として建設されていた「コミセン」でその機能を果たしてきたが、１９９４年(平成６年)新しく建設された総合研修センターの使用開始にあわせ同センターに移動した。

中央公民館では、各種学級、講座の開設や文芸、芸能発表、芸術観賞などのほか総研ロビーの開放による絵画、書道、写真、児童作品等の展示、更に体育レクリエーション活動にいたる幅広い事業を行っている。

公民館施設の利用は、申請により行うが使用料が徴収される。使用料には減免規定もあり、教育委員会に登録された文化団体の行う事業、町の新生活運動に則り行う冠婚葬祭は免除される。

公民館の運営計画、事業推進を図るため、公民館運営審議会を設置しているが現在の委員数は16名。

▽委員長(平成３年以降)
中島昌昭(平元・７～10・６)／小松繁雄(平10・７～17・４)／滝　千冬(平17・５～23・５)／東村達夫(平23・６～31・３)／中村貢(平31・４～現在)

地区公民館活動

地域ごとの住民活動の拠点として地区公民館を組織しているが、中士幌には単独の地区公民館があり、その他12地区には中央公民館の分館を設置して地域活動が行われている。

町では町づくり活動の基盤として地区公民館の育成強化に努め、拠点となる施設の整備を進めている。

当初地区公民館(分館)は独立した施設はもたず、他の集会施設と併用していたが、現在は下居辺、西上、市街南町、士幌南、士幌北が公民館として独立した施設となった。

地区公民館は、それぞれ特色のある活動に取り組み、夏まつりや、地域内の清掃ボランティア、レクリエーション活動を積極的に行っているが、一部停滞している地区も見られる。

中士幌も含めた地区公民館の現況は表－２のとおりである。

地区公民館の現況

表－２　　令和３年５月現在

公民館名（分館）	地区名			集合施設			特色ある事業	令和３年度推進委員長名
	駐在区数	世帯数	人　口	名　称	新築整備年月	床面積㎡		
中士幌	12	396	818	中士幌地区館	昭和 57	750.01	地区盆踊り大会・地区公民館まつり・各種教養講座・地区パークゴルフ大会・地区ミニバレー大会・公民館だよりの発行・中士幌小新１年生へお祝いの寄贈	吉田静二
佐倉	6	70	225	佐倉交流センター	平成８	260.00	士幌町下の句かるた大会協力、公民館環境整備（花壇、南庭園）、地区内交通安全旗及び防犯旗の整備	小野春信
上居辺	9	107	422	上居辺総合地域施設	昭和 52	498.90	地区大運動会・地区敬老会・公民館役員研修・地区文化交流会	太田義則
下居辺	6	67	165	下居辺地区集落センター	平成元	261.63	公民館だよりの発行・地域貢献賞の選考と授与・百年記念公園清掃	永森茂之
中音更	3	76	176	中音更地区交流促進センター	昭和 52	372.60	新年三世代交流会・研修会等の開催・地域の環境整備・福祉活動ネットワークづくり	鎌田秀治
新田	5	78	185	新田集落センター	昭和 54	343.40	地区転出入者の歓送迎会・秋スポーツ交流・地区交通安全及び防犯対策	宇佐見庸夫
西上	1	85	214	西上地区集落センター	平成２	252.72	町づくり懇談会・馬頭観音祭・太田神社祭典・農協懇談会・農作業並びに交通安全祈願祭・地区研修視察	中山謙次
士幌南	11	124	401	士幌南地区集落センター	昭和 59	258.40	庭園環境整備・スポーツと家族研修の集い・冬季スポーツ大会	井尾康弘
士幌北	6	95	279	士幌北地区集落センター	昭和 62	247.20	集落センター周辺環境整備・新年会・スポーツ・レク活動の推進・公民館だよりの発行	長船興宣
市街南町	8	457	892	士幌市街南町会館	昭和 56	143.00	ふれあいのまつり・交通安全大会・防犯大会	吉弘英八
市街中町	7	288	550	タウンプラザ	平成８	272.20	環境美化の推進・道路愛護活動・廃品回収事業（年５回）・青少年健全育成事業	淡中　済
市街西町	4	230	481	南百戸団地集会施設	昭和 53	124.95	公民館環境整備・町づくり懇談会	青島喜久雄
市街北町	5	570	1,052	環境改善センター	昭和 54	912.16	公民館祭り・公民館だよりの発行・資源回収事業・北町奉仕デー実施	山中明裕

2、スポーツ

増えるスポーツ人口

「一人・一学習・一スポーツ活動」を目標に町内では多くの町民がスポーツ行事に参加している。スポーツ少年団から中高年齢者のゲートボールまで多くの大衆スポーツとふれあい、中でも子どもからお年寄りまで気軽に出来るパークゴルフは施設整備の充実もあって、近年、ゲームを楽しむ人口が急激に増加している。

年齢、体力に応じたスポーツの実践は、健康づくりの一助ともなり、地域ごとの取り組みも盛んであるが今後指導者の養成など更に生涯スポーツ推進に向けた体制が望まれる。

特に運動不足となる冬期間対策として体育館を有効に町民が利用し、ミニバレー、バドミントン、卓球等、手軽に出来るスポーツ愛好者の拡大に期待したい。

競技スポーツについては愛好者が高齢化の傾向にあり減少しているが、小、中、高校生は毎年活発な活動を続け、スポーツ少年団では、野球、サッカー、剣道、バレーボール、スケート、基礎スキー、トランポリンなど10の少年団を結成し対外試合を行っている。（表－1参照）

ワールドカップ（スピードスケート）出場報告
森本拓也選手、小野寺優奈選手

表－1　**スポーツ少年団**（令和３年４月現在）

団　体　名	会員数
士幌野球少年団	15
士幌サッカー少年団	29
士幌剣道スポーツ少年団	6
士幌バレーボール少年団	17
士幌スケート少年団	21
士幌基礎スキー少年団	30
士幌トランポリンスポーツ少年団	16
中士幌スポーツ少年団野球部	10
中士幌スケート少年団	13
上居辺スポーツ少年団	23
合　計	180

中学校はクラブ活動として野球、陸上競技ほか種別ごとのクラブ競技大会に参加健闘しているが、中でも陸上競技は中体連をはじめ数多い大会で、十勝、全道でも優秀な成績を納めている。また、スピードスケートでは２００４年（平成16年）２月に開催された、第24回全国中学校スケート大会において、わずか４人（松山智衣・仁科有加那・國島美貴・小林奈津美）の士幌町中央中学校女子スケート部が学校対抗で全国制覇を成し遂げた。同大会で仁科有加那は女子５００ｍ・１０００ｍで第１位と２冠を達成している。また、翌年の第25回全国中学校スケート大会において、仁科有加那が女子５００ｍ・１０００ｍで第１位と２年連続優勝するなど、全国大会で優秀な成績を納めた。２０１３年（平成25年）２月に開催された、全国中体連第33回全国中学校スケート大会で士幌町中央中学校スピードスケート女子チームが学校対抗女子で全国の強豪を退け、９年ぶりとなる全国制覇の偉業を成し遂げた。わずか３選手（小野寺優奈・森本里穂・宇佐見鈴音）で全国の頂点に立った。同大会で宇佐見鈴音は女子５００ｍで第３位、小野寺優奈は女子１５００ｍ・３０００ｍで第１位の２冠を達成している。２０２０年（令和２年）１月、第40回全国中学校スケート大会において３度目の全国制覇を５選手（高橋美生・奥秋智佳・中島帆乃華・塩谷明里・鈴木咲凪）で成し遂げた。

「全国中学校スケート大会」学校対抗で優勝した中央中女子スケート部

１９９７年（平成９年）９月21日、町体育連盟50周年記念事業としてＮＨＫ少年野球教室が町の農村運動公園野球場で開かれ、元プロ野球巨人軍選手の西本聖、瀧安治両氏を招き、町内の野球少年団員50人と監督、コーチ12人が指導を受けた。３時間に及ぶ懇切丁寧な指導で参加者は、野球の基礎と楽しさを感じ取り大変感動していた。

下居辺出身の山影博明が冬季オリンピックに出場した。１９９８年（平成10年）２月に開催された長野オリンピック、スピードスケート５００ｍ（メートル）の日本代表となな

長野オリンピックに出場した山影博明選手

ったもので、士幌町からオリンピック選手の誕生は初めてである。

同選手は、下居辺小学校から士幌中央中を経てスケートの名門白樺学園高校で力をつけ、日本大学卒業後、王子製紙に籍を置き、小学時代から一貫して選手生活を続けてきた。オリンピックでは世界の強豪を相手に入賞は果たせなかったが15位と健闘した。

異色のスポーツマンとして池本進(居酒屋鳥しん経営)が活躍していた。両下肢に障がいをもつ池本は40代になってから、リハビリも兼ねて水泳に取り組み、週3回程度帯広のプールに通っていたが、1996年(平成8年)に初めて北海道障害者スポーツ大会に出場、自由形(クロール)25㍍と50㍍の「両下肢不完全」の障害区分の部でそれぞれ1位に輝き、その一つは北海道新記録であった。翌年は、背泳ぎに切り換えて出場し50㍍競技で自己記録を6秒更新、同年11月大阪で行われた全国障害者スポーツ大会に出場しメダルは取れなかったが好成績を収めた。

教育委員会主催による町民体育祭が毎年開かれ、2019年(令和元年)度で36回目を数えた。この年は7月にソフトボール・パークゴルフ競技が11月には、ミニバレー競技が行われ延べ252人が参加、10月に開催されている町民スポーツの集いでは、町民駅伝大会・タイムトライアル・走り方教室・パークゴルフ大会が開催され延べ204人が参加、1月に開催されている町民スケート大会は第43回を数え、83人が参加した。

道民スポーツ大会は2000年(平成12年)まで行われ、2001年(平成13年)から北部3町共同競技会として軟式野球、バスケットボール、バレーボール、スケート大会が行われていたが、2019年(令和元年)度は北部方面スピードスケート大会が音更町(当番町)で行われ197人が出場している。

また2001年(平成13年)から町民の健康増進のため音更町温水プール利用者に対し、利用料金の80％(現在は50％)の助成し、利用者には大変好評を得ている。1975年(昭和50年)から農業者の体力増進施設として、広く町民に親しまれてきたトレーニングセンターが、総合研修センターの完成から利用率の低下、衛生施設については老朽化により、2001年(平成13年)度をもって閉鎖となった。

2016年(平成28年)5月から木工室をトレーニング室として改修し、フィットネス事業と運動教室を毎週月・水・金曜日に実施している。

スポーツ賞

町教育委員会では例年、体育振興に功労のあった者およびその年度めざましい活躍をした人たちに対しスポーツ功労賞、奨励賞を贈っている。

◎町スポーツ賞受賞者一覧

表

1991年(平成3年)度

○スポーツ功労賞

安村敏美

○スポーツ賞

山崎康幸、児玉祥洋、山影博明

○スポーツ奨励賞

方川博幸

○ジュニアスポーツ奨励賞

士幌小学校4年赤組ラジオ体操チーム、士幌小学校4年白組ラジオ体操チーム、猪又智子、太田陽子、大林祐也、森　光祥、岡部大地、西潟孝安、沢田桂司、坂本美晴、櫻井洋二、安藤輝彦

1992年(平成4年)度

○スポーツ賞

方川　博幸、飯島智人

○スポーツ奨励賞

服部秀樹、松岡久乃、古川みちる、士幌町剣道連盟一般四段以下チーム、士幌町教職員ソフトボールチーム、上居辺GBチーム(ゲートボール)、JA士幌町女子ソフトボール部

○ジュニアスポーツ賞

福松小百合

○ジュニアスポーツ奨励賞

星屋有希、木村美那子、西向慎治、奥秋和博、久保田淳、高橋智和、君羅哲也、清野賢司、ヴィクトリーチーム(ラジオ体操)、士幌ファイターズ、中央中学校女子400㍍リレーチーム、中央中学校男子陸上部

1993年(平成5年)度

○スポーツ賞

松岡久乃

○スポーツ奨励賞

房谷健司、士幌町剣道連盟一般女子チーム

○ジュニアスポーツ奨励賞

藤内嗣未、波多野佳弘、中央中学校男子バレーボール部、中央中学校ソフトボール部、中央中学校男子剣道部

1994年(平成6年)度

○スポーツ功労賞

北井和雄

○スポーツ奨励賞

多辻鐵雄

○ジュニアスポーツ賞

小畑　倫、片山　拓、波多野真弓、高橋智和、奥秋和博

○ジュニアスポーツ奨励賞
堀田絢路、會田史門、馬野翔大、堀田朝路、加納友香里、藤内義史、河野英里香、那須慎一郎、菅野奈津子、土生智保、士幌小学校6年男子リレーチーム、士幌小学校3年女子リレーチーム、士幌小学校5年Aチーム(ラジオ体操)

1995年(平成7年)度
○スポーツ功労賞
津田範之、沓澤　清
○スポーツ奨励賞
伊藤公輔、石井龍治、市町村対抗剣道大会年齢の部士幌チーム
○ジュニアスポーツ賞
菅野奈津子、士幌小学校4年女子400メートルリレーチーム
○ジュニアスポーツ奨励賞
堀田朝路、那須　理、波多野佳弘、森本啓史、三浦康伸、富原綾祐、大久保正道、三井英明、植田恭平、仁科祐典、士幌剣道スポーツ少年団低学年女子チーム、士幌剣道スポーツ少年団チーム、新田小学校Aチーム(ミニバレー)、士幌ファイターズ、士幌小学校6年男子400メートルリレーチーム、士幌小学校6年生Aチーム(ラジオ体操)、士幌町中央中学校柔道部

1996年(平成8年)度
○スポーツ功労賞
船戸修司
○スポーツ賞
小野原成喜子、士幌町連合青年団男子バレーボールチーム
○スポーツ奨励賞
森本　隆、十勝剣道祭年代別の部士幌チーム、道民スポーツ大会男子バレーボールチーム、士幌町連合青年団リレーチーム
○ジュニアスポーツ賞
波多野佳弘
○ジュニアスポーツ奨励賞
寺田ゆかり、松井昭人、會田史門、鈴木希望、佐藤将海、森本真悠子、石橋あきよ、御子柴卓史、岡部翔太、波多野真弓、高橋幸太郎、三上沙希子、石橋遺一、士幌小学校3年生女子リレーチーム、士幌小学校3年男子リレーチーム、士幌小学校6年男子リレーチーム、上居辺小学校チーム(ミニバレー)、士幌柔道小学生高学年チーム、士幌ファイターズ、士幌小学校5年女子チーム(ラジオ体操)、士幌小学校6年チーム(ラジオ体操)、士幌町中央中学校柔道部女子チーム、士幌町中央中学校男子陸上部、士幌町中央中学校陸上部

1997年(平成9年)度
○スポーツ功労賞
柴田喜美夫
○スポーツ賞
山下あずさ、宇佐見直美、士幌町連合青年団ソフトボールチーム
○スポーツ奨励賞
清水秀則、佐藤芳樹、野崎靖代、士幌剣道祭年代別の部士幌チーム、士幌壮年ソフトボールチーム
○ジュニアスポーツ奨励賞
仁科有加那、大滝裕子、菅原康人、仁科慎吾、小畑憂輔、飯島寿和、山中有衣、水戸奈緒子、大久保利成、佐々木めぐみ、大野晃康、小野寺誠、士幌小学校6年男子リレーチーム、士幌剣道スポーツ少年団、リアルムック(士幌小6男子ミニバレー)、北中音更小学校ドングリーズ、士幌ファイターズ

1998年(平成10年)度
○スポーツ奨励賞
寺澤真吾、瀧口大志、棚橋伸康、士幌スズランチーム(ゲートボール)
○ジュニアスポーツ賞
仁科慎吾、會田史門
○ジュニアスポーツ奨励賞
森崎寛史、柚原祥吾、佐藤晴香、松山智衣、飯島芳和、山中有衣、加納友香理、水戸準一、山田享平、堀田浩司、奥秋陽子、馬野航太、市田文男、木川吉広、士幌小学校3年女子リレーチーム、士幌小学校3年男子リレーチーム、士幌小学校4年女子リレーチーム、士幌小学校4年男子リレーチーム、士幌小学校6年レッドアンドホワイト(ラジオ体操)、ジュニアブルス(上居辺小学校六年生、ミニバレー)、士幌ファイターズ、士幌町中央中学校男子陸上競技部、士幌町中央中学校陸上競技部男子リレーチーム、士幌町柔道少年団中学生チーム

1999年(平成11年)度
○スポーツ賞
大野晃康
○スポーツ奨励賞
小関天地、中山竜一、瀧口大志、大久保正道、士幌町剣道連盟一般女子チーム
○ジュニアスポーツ賞
仁科有加那、小野泰幸、加納友香里、奥秋陽子、水戸準一
○ジュニアスポーツ奨励賞
森山拓也、今田義貴、鈴木健太、森崎寛史、武藤　愛、奥秋秀蔵、佐野　明、森山佑太、奥村奈都美、飯澤良祐、市原龍一、國島由貴、仁科衣理那、田中慎吾、馬野翔大、

上屋敷隆、高橋伸明、松嶋智也、飯島寿和、波多野正幸、水戸奈緒子、鎌上龍介、早川大輔、士幌小みつばちハッチ(ラジオ体操)、佐倉バイキング(ミニバレー)、上居辺ムキワニーズ(ミニバレー)、士幌町中央中学校男子バドミントン部、士幌町中央中学校陸上競技部女子リレーチーム、士幌町中央中学校陸上競技部男子リレーチーム、士幌町中央中学校陸上競技部男子駅伝チーム、士幌町中央中学校陸上競技部

2000年(平成12年)度

○スポーツ賞

士幌町連合青年団剣道チーム

○スポーツ奨励賞

大久保利成、高橋　竜、士幌町連合青年団野球チーム、士幌町連合青年団バレーボールチーム

○ジュニアスポーツ賞

小野翔太

○ジュニアスポーツ奨励賞

森山祐季、加賀屋健、山中沙都、木川直之、冨山太一、塚越祥平、佐倉バイキング(ミニバレー)、士幌小学校4年ドリームランド(ラジオ体操)、士幌ファイターズ(少年野球)、士幌サッカー少年団、士幌町中央中学校剣道部Aチーム

2001年(平成13年)度

○スポーツ賞

三井英明

○スポーツ奨励賞

堀田浩司、古川元気、士幌町剣道連盟一般4段以下チーム

○ジュニアスポーツ賞

小野泰幸、冬野陽美

○ジュニアスポーツ奨励賞

窪田　望、後藤広樹、堀田なな美、後藤詩緒里、清水　萌、仁科有加那、嘉藤康斗、小野翔太、山中沙都、冬野朝美、松山隆多、士幌小学校4年ドリームランド(ラジオ体操)、士幌町中央中学校男子4×200㍍リレーチーム、士幌町中央中学校女子4×100㍍リレーチーム

2002年(平成14年)度

○スポーツ奨励賞

加納友香理、飯島芳和、瀧口勇志、飯島広真、永井武志

○ジュニアスポーツ奨励賞

後藤瑞樹、後藤和樹、香川勇人、寺町あずさ、西田拓人、阿部美保、

瀬戸紳弥、篠原舞子、若園　梢、仁科有加那、佐藤美佳、奥村奈都美、士幌小　ザ　ヤンキー☆狙い撃ち(ミニバレー)、士幌町中央中学校陸上部女子4×100㍍リレーチーム、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム

2003年(平成15年)度

○スポーツ功労賞

稲葉正志

○スポーツ賞

飯島芳和

○スポーツ奨励賞

菊池将晃、飯島寿和、松嶋智也、今田将之、足立好弘、士幌町剣道連盟一般四段以下チーム

○ジュニアスポーツ賞

岡村尚輝、居城和樹、西田拓人、小野翔太、國島未貴、仁科有加那、松山智衣、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム

○ジュニアスポーツ奨励賞

寺町　巧、岡村和輝、白木真理奈、居城和樹、上野未紗伎、野曽原千央、野曽原利明、佐藤亜美、小林奈津美、山中沙都、飯島愛里奈、奥秋秀蔵、三上由莉麻、士幌町中央中学校陸上部女子400㍍リレーチーム、佐倉バイキング(ミニバレー)、士幌小学校3年生男子400㍍リレーチーム

2004年(平成16年)度

○特別表彰

仁科有加那

○スポーツ功労賞

土屋公美

○スポーツ賞

冬野朝美、瀬口祐茄

○スポーツ奨励賞

冬野陽美、士幌町剣道連盟年代別の部ダイチ君チーム

○ジュニアスポーツ賞

森あおい、渡邊明日華

○ジュニアスポーツ奨励賞

土橋由里、森本拓也、田中元基、西田安見、矢野真鈴、岡村和輝、小笠原建佑、士幌剣道少年団

2005年(平成17年)度

○スポーツ賞

足立好弘

○スポーツ奨励賞

今田義貴

○ジュニアスポーツ奨励賞

岡村洋輝、鵜澤　好、西田安見、矢野遼一、鵜澤　元、國枝周平、森本絢哉、ファイターズ(ラジオ体操)、西上天空龍チーム(ミニバレー)、上居辺小学校みっちゃんズ(ミニバレー)

2006年(平成18年)度

○ジュニアスポーツ奨励賞

宇佐見鈴音、西田侑泰、田中元基、川崎悠介

2007年(平成19年)度

○スポーツ賞

小野翔太

○スポーツ奨励賞

森山祐季、赤間史絵、佐々木トミ子、士幌西南チーム(ゲートボール)

○ジュニアスポーツ奨励賞
水谷　司、小野寺優奈、田中義郎、岩舘紗也、土橋真理、丹羽亮介、中鉢かける、岩舘友哉、富田颯希、岡村和輝、士幌剣道スポーツ少年団、佐倉ウイングス（ミニバレー）、士幌ユニバースバレーボール少年団

２００８年（平成20年）度
○スポーツ賞
士幌上居辺チーム（ゲートボール）
○ジュニアスポーツ賞
小野寺留衣、岡村洋輝、岩舘紗也
○ジュニアスポーツ奨励賞
鵜澤友香、宇佐見鈴音、小野寺優奈、土橋真理、士幌陸上少年団、新田フアイターズ（ミニバレー）、士幌剣道スポーツ少年団、ＴＳＣ士幌（スピードスケート）、士幌町中央中学校スケート部

２００９年（平成21年）度
○スポーツ賞
佐々木トミ子
○スポーツ奨励賞
嶋田美代子
○ジュニアスポーツ賞
宇佐見鈴音、寺町　巧
○ジュニアスポーツ奨励賞
三塚大成、三塚優季、岩舘愛実、安保和也、亀村莉花、三塚紳之介、森本拓也、田中元基、西上スポーツ少年団ミニバレーチーム、士幌町中央中学校スピードスケート部リレーチーム

２０１０年（平成22年）度
○スポーツ奨励賞
半田ふみ、士幌アカシヤゲートボールチーム
○ジュニアスポーツ賞
佐藤駿也、宇佐見鈴音、岩舘紗也
○ジュニアスポーツ奨励賞
亀村真子、杉本侑紀、若原　楽、髙木沙彩、小野寺留衣、水谷　忍、長尾海夏、亀村莉花、松永桃佳、澁谷七緒、士幌ユニバースバレーボール少年団、佐倉スポーツ少年団タンキーズミニバレーチーム

２０１１年（平成23年）度
○スポーツ功労賞
中谷清敏、佐藤正一
○スポーツ奨励賞
士幌上居辺
○ジュニアスポーツ賞
三塚大成、宇佐見鈴音、小野寺優奈
○ジュニアスポーツ奨励賞
中島涼太、高橋美生、木幡七海、薄田衣加、若原　楽、髙木沙彩、佐藤駿也、加納あずさ、米木絢香、青木妃南、長尾海夏、小野めぐみ、西上スポーツ少年団西上ジャガ、士幌ユニバースバレーボール少年団、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム

２０１２年（平成24年）度
○スポーツ賞
森本拓也
○スポーツ奨励賞
士幌タンポポ、士幌なかよし
○ジュニアスポーツ賞
宇佐見鈴音、小野寺優奈、中川　拳、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム
○ジュニアスポーツ奨励賞
奥秋智佳、小野寺日菜、吉川七海、若原　楽、高橋大生、澁谷柚音、渡部結衣、比留間幹太、松永桃佳、水谷　司、岩舘紗也、上居辺スポーツ少年団上居辺カメさんズ∞、士幌町中央中学校陸上女子チーム

２０１３年（平成25年）度
○ジュニアスポーツ賞
中島涼太、高橋美生、若原　楽、水谷　司、宇佐見鈴音
○ジュニアスポーツ奨励賞
鈴木咲凪、澤村愛花、福田哲稀、今泉沙優、三塚大成、高橋大生、鵜澤友香、小野寺留衣、士幌サッカー少年団

２０１４年（平成26年）度
○スポーツ賞
中川　拳
○スポーツ奨励賞
士幌東部
○ジュニアスポーツ賞
福田哲稀、小野寺留衣、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム
○ジュニアスポーツ奨励賞
奥秋静子、篠原世凪、高橋美生、坂本きらり、若原　楽、佐藤駿也、水谷　忍、安保和也、Ｆｉｇｈｔさくら、士幌サッカー少年団

２０１５年（平成27年）度
○スポーツ功労賞
清野直樹
○ジュニアスポーツ賞
澤村愛花、小野寺留衣、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム
○ジュニアスポーツ奨励賞
小野寺　昴、寺町獅琉、河村燿世、上居辺キッズ、真西ハム、Ｆｉｇｈｔ佐倉、士幌サッカー少年団

２０１６年（平成28年）度
○ジュニアスポーツ賞
坂本頼武、若原　楽、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム
○ジュニアスポーツ奨励賞
篠原世凪、奥秋静子、鈴木咲凪、奥秋智佳、澤村愛花、福田哲稀、高橋美生、野々村綾河、小野

寺日菜、二代目真西ハム、士幌サッカー少年団

２０１７年(平成29年)度

○スポーツ賞

比留間幹太

○ジュニアスポーツ賞

坂本頼武、高橋美生、小野寺日菜、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム

○ジュニアスポーツ奨励賞

河村京葉、野口夏帆、小野寺仁菜、富田　凛、上野結菜、奥秋静子、篠原世凪、鈴木咲凪、東井咲詠、小野寺　昴、奥秋智佳、河村燿世、寺町獅琉、杉本皐輔、澤村愛花、伊田竜也、薄田衣加、野々村綾河、三塚大成、杉本侑紀、三代目真西ハム、士幌ファイターズ、士幌町中央中学校卓球部、士幌町中央中学校野球部

２０１８年(平成30年)度

○スポーツ賞

高橋六花

○ジュニアスポーツ賞

富田　凛、篠原世凪、鈴木咲凪、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム

○ジュニアスポーツ奨励賞

河村京葉、野口夏帆、小野寺仁菜、上野結菜、奥秋静子、寺町いろは、奥秋静子、東井咲詠、坂本頼武、奥秋智佳、澤村愛花、高橋美生、小野寺日菜、西上ｓｉｘ、四代目真西ハム、上居辺Ａチーム、士幌町中央中学校女子剣道部

２０１９年(令和元年)度

○スポーツ奨励賞

杉本侑紀

○ジュニアスポーツ賞

上野結菜、奥秋静子、奥秋智佳、國井麻耶、高橋美生、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム

○ジュニアスポーツ奨励賞

鈴木凱大、中川琴葉、大野隆晴、野口夏帆、小野寺仁菜、富田　凛、坂本頼武、鈴木咲凪、今泉空那、福田帆乃果、澤村愛花、杉本皐輔、福田哲稀、士幌サッカー少年団、士幌ボーイズ、さくらトライ、五等分の男達、士幌町中央中学校男子サッカー部、士幌町中央中学校剣道女子団体

２０２０年(令和2年)度

○スポーツ奨励賞

野々村綾河

○ジュニアスポーツ賞

鈴木凱大、上野愛菜、中川琴葉、小野寺仁菜、上野結菜、奥秋智佳、國井麻耶、士幌町中央中学校スピードスケート女子チーム

○ジュニアスポーツ奨励賞

栩内巧太、野口夏帆、大野隆晴、河村京葉、奥秋静子、鎌田璃子、原珠希、坂本頼武、東井咲詠、河村燿世、士幌町中央中学校スピードスケート男子チーム

パークゴルフ

体育施設とスポーツ団体

本町の体育施設も年々整備充実が図られているが、１９７１年(昭和46年)に整備した町営総合グランドの陸上競技場は帯広市を除く管内町村初の第三種公認グランドとして十勝管内の各種競技大会、記録会等が長年にわたり開かれてきた。５年ごとに公認更新のため、大きな財源を投じて整備管理に努め、１９９６年(平成８年)で5回の公認更新を行ったが、近年は管内のほとんどの大会が、帯広の森にできた陸上競技場に移って開催されており、公認競技場としての価値が薄れてきた。２００１年(平成13年)度で造成後30年となり、次の公認更新時期となることから町ではこの時点で公認申請を行わず、一般競技場として活用していくこととした。

この間全道青年大会をはじめ数多くの競技大会が行われてきただけに残念ではあるが費用対効果を考えるとやむを得ない措置である。

陸上競技場とともに総合グランドには野球場、ソフトボール球場を設置しているが、ソフトボール球場は開基70周年記念事業で夜間照明設備を整備し、ナイターソフトに活用されている。１９９８年(平成10年)には町営野球場の整備(ダックアウト、観覧席、グランド芝張り、ネット裏本部席設置、駐車場舗装化)を図っている。

近年多くの愛好者が行うパークゴルフ施設として、中央公園パークゴルフ場、総合運動公園パークゴルフ場、しほろ清流パークゴルフ場、中士幌の森パークゴルフ場、下居辺運動公園パークゴルフ場があるが、中央公園内に造成しているパークゴルフ場は、子どもの遊園地に近く危険防止の観点から使用しないこととした。

しほろ清流パークゴルフ場は、１９９４年(平成６年)

度と翌年度で音更川河川敷を利用したパークゴルフ場を造成することになり94年に18ホールとふれあい広場を造成、95年度で更に18ホールの造成工事と芝管理を行い、１９９６年(平成8年)に36ホールのパークゴルフ場としてオープンした。

また同時に造成していた中士幌の森パークゴルフ場も18ホール完成し、同年5月25日にオープン記念大会を両ゴルフ場で開催、92名が参加して完成を祝った。

しほろ清流パークゴルフ場は２０００年(平成12年)8月、公認パークゴルフ場として認定された。

２００６年(平成18年)度から行政改革の一貫で使用料・手数料が見直され、屋内ゲートボール場と併せ、しほろ清流パークゴルフ場も有料化されたが、有料に伴う経費等の勘案、健康に対する有益を考慮し、２０１５年(平成27年)度より無料化された。

なお、清流パークゴルフ場は２０１６年(平成28年)8月の相次ぐ台風により冠水・土砂の流入により使用不能となり、河川敷でもあることから使用を止め、代わりに、２０１８年(平成30年)から翌年の2か年にかけて総合運動公園パークゴルフ場の拡張再整備を行った。

そのほか町内には私設パークゴルフ場も設置されており、旧佐倉小学校に18ホールと旧北中音更小学校グランドに雪中パークゴルフ18ホールが整備され愛好者がそれぞれ利用している。

パークゴルフ協会は、協会内に指導員、アドバイザーを置き愛好者の普及・振興に当たっている。

ゲートボール場も町内各地に屋外コートを設け熱戦を繰り広げているが、冬期間のコート確保のため、１９８９年(平成元年)屋内ゲートボール場を中央公園に建設し、隣接の柔剣道場にもコートを造り合わせて利用してきた。

福祉村構想による病院等の建設で屋内ゲートボール場が病院等施設の建設予定地となり、同ゲートボール場を移設することになった。１９９９年(平成11年)8月から旧柔剣道場を解体し、その跡地に移転工事を行ったもので、二面のコートに人工芝と特殊な砂が敷かれ、明るく広い施設で愛好者の好評を博している。※1

同年12月14日、同施設で記念交流会が開かれ、１３０人を超える参加者が冬の柔らかい日射しを背に新しいコートの感触を楽しんでいた。

２０１２年(平成24年)度より睦サッカー場が整備され天然芝のサッカー場として利用されている。これは、サッカー少年団が士幌農協から借用していたが、２００５年(平成17年)にサッカー協会が設立され、設立後はサッカー協会が士幌農協より借用、町に対しサッカー協会より要望書が提出され、睦サッカー場の管理を町と協会で担うこととなり、ネットの設置・水道敷設が行われ現在に至っている。※2

２０２０年(令和2年)度の町有社会体育施設の使用状況は表－2のとおりである。

社会体育施設利用状況

(表－2)　　(令和２年度)

施設名		利用回数	利用人員
総合研修センター すこやか体育館	アリーナ	1,010	19,409
	研修室	379	3,203
	武道館	168	2,533
計		1,557	25,145

施設名		利用期間
総合運動公園	野球場	5/30～10/18
	多目的広場	5/30～11/1
	陸上競技場	5/30～10/31
	パークゴルフ場	5/30～11/1
中士幌の森パークゴルフ場		5/30～11/8
農村運動公園	野球場	5/30～10/4
	スケートリンク	12/27～2/15
町民プール		6/15～9/10
屋内ゲートボール場		6/1～3/31
睦サッカー場		5/30～10/3

※1　芝生の補修を行うためＣ・Ｄコースのみ9/7から閉鎖
※2　今年度より株式会社オカモトによる指定管理による運営

町内のスポーツ行事は、町あるいは団体が主催して行い、特に多くの団体は町体育連盟に所属して、種目ごとの底辺の拡大やスポーツの普及振興に努めている。

歴史の長い軟式野球連盟の朝野球リーグ戦をはじめバレーボールの長期リーグ、パークゴルフ大会など、それぞれの加盟チームによる優勝争いが毎年繰り広げられているほか、多くの団体が年間行事を計画し運営に当たっている。

１９９６年(平成8年)士幌町体育連盟は創立50周年を迎えた。終戦後、まだ悪夢が覚めきらない１９４７年(昭和22年)に陸上競技協会を軸に7競技部、5地区

支部の組織で初代会長は石塚良寛が務めた。

創立50周年を迎えた体育連盟は１９９７年(平成９年)町の体育事業と町民のスポーツ記録を一冊にまとめた記念誌「五十年のあゆみ」を発行、同年11月25日は関係者多数が総研センターに集まり、出版記念祝賀会を盛大に開いた。町体育連盟は、スポーツ技能の向上を図ることはもとより、青少年の健全育成、住民皆スポーツ・生涯スポーツをめざす町づくりに多大な貢献を果たしている。かつては町内の17競技団体が加盟していたが、弓道連盟、バスケットクラブなどが休部となり、２０２１年(令和３年)４月現在、加盟14団体、総会員数５８４人で構成されている。

体育連盟加盟団体は表のとおりで、士幌町ラジオ体操会も早くから組織され活動しているが体連には所属していない。(表－３参照)

ラジオ体操会は児童から職場まで広く普及し指導員を置いて活躍しているが、士幌小学校の児童が十勝大会で毎年のように優秀な成績を納めているほか、多くの指導者がラジオ体操の普及発展に寄与した功績が認められ、関係機関等からの表彰を受けている。

ゲートボール協会の前会長である稲葉正志は２００７年(平成19年)４月に士幌町ゲートボール協会会長に就任、２０１１年(平成23年)４月には、十勝ゲートボール協会副会長、その後２０１７年(平成29年)４月から２０１９年(平成31年)３月まで十勝ゲートボール協会会長としてゲートボール競技の振興に寄与したことから２０１９年(令和元年)10月北海道ゲートボール連合会長より「功労賞」を受賞している。

▽士幌町体育連盟会長

古田雪次(平３～10)／鎌田知侑(平11～14)／小松繁雄(平15～18)／宮部正彦(平19～20)／飯島　勝(平21～令２)／渡辺睦実(令３～現在)

▽士幌町ゲートボール協会会長

角田富夫(現在)

▽士幌町ラジオ体操会会長

佐藤昭雄(現在)

士幌町体育連盟加盟団体

表－３　　令和３年４月現在

団　体　名	会員数	代表者名
陸上競技協会	１７	山下博司
軟式野球連盟	２１０	時光宏三
柔道連盟	１５	加納三司
剣道連盟	２１	伊藤健蔵
サッカー協会	２０	森本真隆
バレーボール協会	１２	高橋良浩
卓球協会	２２	西　山　進
アイスホッケークラブ	２０	樋口豊司
スキー連盟	２９	市原照義
スケート協会	２７	三塚雅人
ミニバレー協会	４３	古川幸郎
パークゴルフ協会	６７	富田忠雄
ゲートボール協会	６９	角田富夫
トランポリン スポーツクラブ	１２	鵜澤和郎
計１４団体	５８４	

その他の体育団体　(令和３年４月現在)

団体名	会員数	設立年	代表者名
ラジオ体操会	22個人２団体	平成９年	佐藤昭雄

3、青年・女性団体

連合青年団

士幌町連合青年団は5単位団で構成されていたが川西青年団が１９９６年(平成８年)度に休団、２００２年(平成14年)度に東部青年団が休団、２００５年(平成17年)度に北星青年団が休団し、２０２０年(令和２年)現在は農村部２単位団で構成され団員数27人と大幅に減少している。市街地に単位団はなく、数人の青年が他の単位団に加入して活動を続けている。30年前には１００人を超える団員を有していたが、少子化等の影響もあり年々減少の傾向にある。

しかし団活動は活発に行われており、毎年行っている青年祭や夏季、冬季の各スポーツ大会、更に十勝青年大会、全道青年大会等を通じた内外交流活動を積極的に展開してきた。１９９６年(平成８年)には第47回全道青年大会を本町をメイン会場として開催した。大会の前夜祭は全団員が大会スタッフとして企画した交

連合青年団創立60周年記念式典

歓会を盛り上げ、全道各青年団との交流を成功させた。

青年大会では毎年「スポーツの集い」「文化の集い」に多くの種目を出場させ、それぞれ優秀な成績で全道大会に駒を進める種目も多いが、士幌町で開催した第47回全道青年大会では、全道の勤労青年17団体674人が9競技に挑み熱戦を繰り広げた。士幌町からも3競技に出場し、男子バレーボールで優勝、陸上競技女子走り高跳びで小野原成喜子が2位となり、それぞれ全国大会の出場を果たした。小野原成喜子は同年11月東京で行われた全国大会でも見事準優勝を果たした。

なお、町内をはじめ他の地域のさまざまな人たちとの交流を深めるため、役場青年婦人部や上士幌青年会との交流も行った。

1998年(平成10年)に創立40周年を迎え、記念誌「和」を発行すると共に同年12月13日、創立40周年記念式典を挙行した。2008年(平成20年)に創立50周年を迎え、記念事業として美濃市産業祭へ団員16人が参加、各団員が育てた野菜や牛肉で作ったレトルトカレーの販売等を行った。同年12月21日に式典祝賀会を総合研修センターで行い、約120人の関係者が出席した。翌年3月、創立50周年記念誌「友情」を発行。

2018年(平成30年)には、創立60周年を迎え、12月22日に記念式典を総合研修センターで行い、約90人の関係者が出席し、歴代団長への感謝状授与等が行われ、翌年4月に創立60周年記念誌「絆」が発行された。

▽士幌町連合青年団長(平成3年度以降)

平3／岡田智明、平5／森本真隆、平7／國井浩樹、平8／東井尚輝、平9／岡部真吾、平10／鎌田知昇、平11／伊賀勝彦、平12／篠原真人、平13／瀬口真宏、平14／久保田裕一、平15／成田哲也、平16／髙橋裕幸、平17／棚橋伸泰、平18／長屋博之、平19／早坂直浩、平20／加納大輝、平21／小川貴道、平22／大野晃康、平23／山田貴博、平24／石水　諒、平25／田中佑典、平26／市原龍一、平27／森本昌樹、平28／河村拓也、平29／飯沼一憲、平30／岡本健吾、令元／藤内智也、令2／大野文也

▽単位組織青年団(令和2年現在)

南青年団　21人
団長　井尾啓暉

上居辺青年団　6人
団長　なし

女性まつり

婦連協から女性連へ

女性組織の活動は、戦後間もなくから始まり、士幌町においても1953年(昭和38年)婦人団体が組織化されて今日まで、社会情勢の変化や女性を取り巻く環境も大きく変わる中、女性の権利や地位向上のため年々活動も活発化し、男女共同参画社会の実現に向けて大きな力を発揮してきた。

女性連の活動は、単に会員の親睦、地位向上にとどまらず町内各イベントへの参加、ボランティア活動、消費者活動など町づくり推進の一翼も担い町政執行の支えにもなっている。

1997年(平成9年)で満40年を迎えた士幌町婦人団体連絡協議会は、同年12月7日総合研修センターで創立40周年記念式典を挙行、功労者表彰等の後、婦人団体から女性団体への改名を決議、これまでの婦人団体連絡協議会から「士幌町女性団体連絡協議会」(略称・女性連)へと衣替えした。これは道婦連の名称変更に伴うもので、より幅広い女性の社会参画を図る意味もこめて改称したものである。

式典は一連のセレモニーの後、女優の松島トモ子を講師に記念講演「トモ子の幸せ論・多くの人たちとの出会いのなかで!」と不要品販売・一坪ショップが開かれ盛会のうちに終了した。

1998年(平成10年)3月、創立40周年記念誌「葦」を発行した。

2007年(平成19年)12月創立50周年記念式典を挙行した。記念事業として、同年8月に開催された北海道女性大会に20名の会員が参加している。また、翌年3月に50周年記念誌「蘆」が発行された。

2017年(平成29年)12月には、創立60周年記念『しほろ女性まつり』を「人づくりは家庭から」をテーマに開催した。当日は、札幌大学客員教授中田美和子氏の「女性が輝くために」と題しての講演、一坪ショップ、士幌高校の特産品販売などが行われた。また、翌年3月には、60周年記念コンサートとして帯広三条高校合

唱部によるコンサートが開催され、約１５０人が来場した。

このほか毎年、女性まつり、リーダー研修会、北部３町国内研修等が事業として実施されている。

女性連は40周年当時、町内４つの単位女性団体で構成されていた。

▽士幌町女性団体連絡協議会長

平２～10／和田良子、平11～13／菱沼美和子、平14～15／白木美恵子、平16～現在／大西廉子

単位女性団体

単位団体では連絡協議会の事業計画による活動のほか独自の事業も取り上げ積極的な活動を続けている。

商工会女性部は１９６９年(昭和44年)の結成で満50年を経過しているが、２０２０年(令和２年)現在の会員数は32人で商工会の内部組織として、女性の特性を生かし、組織内外のかけ橋としての役割を果たしている。

そのほか、町のまつり、イベントへは女性連としての協力以外に商工会女性部として売店を出し活動資金の捻出も図っている。

主な事業は花壇設置事業として毎年４～５百本の花苗をプランターに植えて商店街に設置してきた。この事業で１９９４年(平成６年)に町の善行賞を受賞した。

ボランティア活動では、特養ホーム花壇の花植え、オムツたたみ、独居老人昼食会等を行い、交通安全運動としてマスコット「愛の鈴」を手作りし毎年四百個程を幼児や新入学生(小１)にプレゼントしている。

そのほか、町のまつり、イベントへは女性連としての協力以外に商工会女性部として売店を出し活動資金の捻出も図っている。

▽商工会女性部部長

昭59～平13／谷本幸枝、平14～18／鈴木久子、平19～20／浅野幸子、平21～24／加藤弘子、平25～28／森悦子、平29～令２／末永美津代、令３～現在／岡崎睦子

西町公民館女性部は、西町地区(いこい、平原、平原第一、松並)全戸の女性が会員となり１９８１年(昭和56年)に結成した。ボランティア部を置き積極的に活動したほか、地区公民館事業への参加協力、特に長く続けている西町七夕まつりでは企画から参加し大きな役割を果たしてきたが、２０００年(平成12年)同まつりは地区の事情で休止となった。そのほか親子研修旅行、地区環境整備などを実施している。

中士幌ひまわり婦人会は、１９５８年(昭和33年)地元の希望者を中心に親睦と教養を図ることを目的に結成した。

結成後60年以上の活動歴を誇る同会の会員は８人で会員の親睦旅行、クリーン作戦等地区環境整備、交通安全防止活動などボランティア活動と地区イベント等への協力が主な活動となっている。

一時期婦連協(女性連)から離れたが１９８２年(昭和57年)に再加入している。

▽中士幌ひまわり婦人会会長

平11～13／田村トク、平14～16／白木美恵子、平17～現在／大西廉子

町内で初めて組織された女性団体は、士幌農協婦人部(ＪＡ女性部)で１９５３年(昭和28年)の結成となっている。

農協青年部と共に陰から士幌農協を支える組織として長年活発な活動を行っている。

農村女性の地位向上や食生活の改善、家族の健康管理など農村地区女性の共通の課題に取り組みながら活動を繰り広げてきたが、近年は高齢化社会に対応したボランティア活動や助け合い運動に力を入れて取り組みまた花いっぱい運動、リサイクル活動など環境面にも力を入れた活動が目立っている。

２０１４年(平成26年)１月に創立60周年記念式典が開催され部員・来賓約３２０人が出席し節目を祝い、３月に創立60周年記念誌「輝き」を発行した。

会員数は約３４０人で、一般部員、フレッシュミズ(若妻)部員とエルダーミセス(金令層)部員の三部制をとり、更に地区ごとに支部(９支部)を置いて活動している。

▽ＪＡ女性部部長

平12～13／河江依子、平14～15／庄司光恵、平16～17／出村成子、平18～19／瀬戸真知子、平20～21／西部光子、平22～23／堀部ひふみ、平24～25／岡田栄子、平26／森本昭代、平27～28／市原真理、平29～30／太田小枝子、令元～２／河田三紀　令３～現在／曽我礼子

第三章　文　化

1、文化活動

広がる文化活動

「文化の殿堂」総合研修施設の完成とともに町民の文化活動が活発に行われ広がりを見せている。文化の日（11月3日）を中心に毎年開催している文化祭は、２００５年（平成17年）度までは盛況で出品者数、出品点数も多かったが、２００６年（平成18年）度以降は固定化し、各賞も授与していない。（表－１参照）

　各種別とも優れた作品も多く、これが素人の作品かと目を見張るものもある。出品作品の中からすぐれた作品に文化祭大賞などをはじめ多くの賞を２００５年（平成17年）度まで授与していた。各賞授賞者は次のとおりである。

文化祭

表－１　**文化祭出陳点数**

年度	手芸	石工	木工	生花	俳句	短歌	川柳	絵画	写真	書道	菊花	盆栽	陶芸	こども園	小学生	中学生	高校生	絵手紙	ドライフラワー	その他	計
1990（H２年）	206		44	13	36	24		23	24	76	225		100		359	100				52	1,282
1999（H11年）	43		83	10	24	7		13	25	110	194		185		358	36		80	83	153	1,404
2009（H21年）	117	109	49		9	12			15	65	114		186	54	219	50		103		23	1,125
2019（R元年）	198	120		26	4	4	3	10	25	41	27	9	191	167	192	82	5	109	31		1,244

（平成３年度以降）

○文化祭奨励賞

　平３／林　一郎、平４／陶夢の会（陶芸）、平５／但田康宏、平６／後藤ツウ、平７／市原ミエ子、平８／小林文枝、平９／後藤ヨシ、平10／市原哲治、平11／杉田良二、平12／灘本千佐子、平13／鈴木イトエ、平14／小野静枝、平17／鎌田俊夫、成瀬定夫、田中しづの

○公民館長賞

　平３／士幌第二書道会、平４／東洋書道会、平５／絵画サークル木葉の会、平６／及川清武、平７／野沢　隆、平８／岩隈留里子、平９／中士幌陶芸サークル、平10／小柳　恒、平11／太田豊恵、平12／堀　醇、平13／河村富美子、平14／三上由一

○文化協会長賞

　平６／木谷隆彦、平７／加納友芳、平８／山平博子、平９／高橋冨男、平10／仙石　勲、平11／小原流（代表　藤井由美）、平12／菊

地　毅、平13／森本英子、平14／森本素代
○教育委員長賞
　平6／山内松子、平7／絵手紙サークル彩の会、平8／三輪嘉一、平9／大野憲光、平10／小村利男、平11／上野　清、平12／道端綾子、平13／遠藤文江、平14／吉川洋子
○特別賞
　平6／篠原春茂、佐藤吾一、むらさき短歌会、平7／西島一馬、船戸つぎ子、山岸きぬ、平8／田中しづの、丹野正行、河合松夫、沓澤　清、平9／玉田哲男、斉藤　実、松浦健作、平10／津田浩治、平田由紀江、士幌高校ＯＢドライフラワーの会、平11／森　悦子、萩　静江、平12／三上末春、ケアハウス愛風苑、平13／小林みね、中島三雄、成瀬定夫、平14／福原良子、大平菊子、花舞会、平15／大野憲光、後藤長八、士幌陶芸サークル、柏樹大学・大学院書道クラブ、平16／山岸　勝、寺田晴美、伊藤正子、大平菊子、平17／福士慎也、井上二三夫、増田喜美
○文化祭大賞
　平15／原　高義、平16／大野憲光、平17／池本晃子

　豊かな人間性を養うために芸術文化の振興を図ることは重要であり、文化活動に対する指導者の発掘養成や優れた芸術文化の鑑賞などでより幅広い文化活動が期待される。
　教育委員会では、町民が幅広く芸術文化に接する機会をつくるため、中央から文化人、文化団体を招いて鑑賞の場を設定しているが、特に総合研修センターのオープン後は回数も増え国際的な文化交流にまで発展している。
◎「総研」オープン以降開催された主な芸術観賞会等
▽１９９４年（平成６年）度
　劇団「現代座」公演（４月９日）／天満敦子ピアノトリオ（７月１日）／劇団「前進座」公演（７月19日）／中田久美トークショー（総研落成式～バレー教室）（８月30日）／小森谷巧デュオリサイタル（10月２日）／ヨーロッパ芸術の集い（11月12日）／テレビ公開録画「ふるさと愉快亭」（２月16日）
▽１９９５年（平成７年）度
　渡部麗子「みんなのコンサート」（７月11日）／ブルックナー・オーストリア首席奏者室内楽（７月15日）／劇団さっぽろ公演「へっこきあねさがよめにきて」（９月８日）／川島保徳「民謡語り口演会」（９月12日）／「横浜クラリネット合奏団」公演（９月16日）／文化講演会「ピーター・フランクル」（11月８日）／成人の集い「フルートコンサート」（１月15日）／人形劇団「ひとみ座」公演（２月７日）
▽１９９６年（平成８年）度
　民族舞踊団「こぶし座」公演（６月26日）／米国留学生交流演奏会（６月29日）／出前落語大演芸会「東家夢助・鴎家津都夢」（８月28日）／「福井良」ジャズコンサート（９月７日）／ミュージカル「銀河鉄道の夜」（９月25日）／管内郷土芸術祭邦楽邦舞発表会（11月10日）／文化講演会「正司歌江」（11月12日）／「ロス・ラティーノス」歌謡コンサート（２月８日）
▽１９９７年（平成９年）度
　ショパンの夕べ・ピアノコンサート（５月24日）／サクソフォン・クアルテット演奏会（６月26日）／演劇公演「再会」（９月９日）／劇団「影ぼうし」公演（10月19日）／文化講演会「京　唄子」（11月７日）／北電ファミリーコンサート「札幌交響楽団」（11月16日）／婦人まつり講演会「松島トモコ」（12月７日）
▽１９９８年（平成10年）度
　児童公演（小学生）劇団さっぽろ「のんびり転校生」（９月30日）／児童公演（中学生）音楽コンサート「三人の会」（９月16日）／文化講演会「大村　崑」（11月５日）／伝承事業「ライブ昔ばなし」（12月13日）
▽１９９９年（平成11年）度
　児童公演（小学生）劇団みんわ座「影絵人形劇」（９月30日）／児童公演（中学生）劇団はるか「杜子春」（９月４日）／児童公演（高校生）劇団ミュージカルショップ「サウンドオブミュージック」（７月22日）／能・狂言公演（６月29日）／リンツ・木管ゾリステン（７月21日）／美濃市姉妹都市交流事業「入船亭扇治落語公演」（９月14日）／文化講演会「牟田悌三」（11月５日）
▽２０００年（平成12年）度
　児童公演（小学生）コンチェルト・フロイデ（６月26日）／児童公演（中学生）劇団風の子「おれがあいつであいつがおれ」（９月６日）／児童公演（高校生）劇団トムシアター「オズの魔法使い」（７月20日）／アルプホルン演奏会（８月３日）／横浜クラリネット合奏団演奏会（９月15日）／文化講演会「人生その時々を大切に」八名信夫（11月16日）／町民音楽のつどい（11月18日）
▽２００１年（平成13年）度
　児童公演（小学生）劇団さっぽろ「やまんばのにしき」（７月10日）／児童公演（中学生）日本合唱協会　日照コーラスコンサート（９月３日）／児童公演（高校生）劇団さっぽろ「あらしのよるに」（７月20日）／ロシア民族アンサンブル公演（９月24日）／シホロおとわの祭り（11月24日）／深山尚久

ヴァイオリンリサイタル（3月7日）
▽2002年（平成14年）度
児童公演（小学生）民族歌舞団こぶし座「江良粒振り舞」他六曲（7月8日）／児童公演（中学生）日本演劇集団日照コーラスコンサート（9月13日）／児童公演（高校生）映画鑑賞「あかね色の空を見たよ」（9月25日）／北見吹奏楽団（7月21日）／志茂田影樹読み聞かせ会（8月27日）／新田親子三味線ライブ（11月19日）
▽2003年（平成15年）度
児童公演（小学生）影絵人形劇　劇団みんわ座「とべないホタル」「だるま夜話」「八郎太郎物語（9月1日）／児童公演（中学生）演劇　劇団め組「ベニスの商人」（9月3日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月18日）／香田　晋コンサート（11月6日）／映画鑑賞会「もも子かえるのうたがきこえるよ」（1月31日）
▽2004年（平成16年）度
児童公演（小学生）ジャン・ジェン・ホワとシルクロードアンサンブルコンサート（6月21日）／児童公演（中学生・一般）日本合唱協会コンサート（9月6日）／美濃子どもミュージカル（10月10日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月23日）／NHK公開番組「にっぽん愉快家族」収録（11月14日）／小椋家　渡道百周年記念事業「神田山陽独演会」（8月16日）
▽2005年（平成17年）度
児童公演（小学生・一般）児童劇「モモと時間どろぼう」（7月11日）／児童公演（中学生・一般）演劇「君たちはどう生きるか」（9月12日）／よしもとお笑いライブイン　シホロ（9月3日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月22日）
▽2006年（平成18年）度
児童生徒公演（児童・一般）「夜回り先生」水谷　修講演会（5月10日）／児童生徒公演（中学生）ハート音楽院アンサンブルコンサート（9月7日）／児童生徒公演（小学生・一般）劇団わらび座　ミュージカル「銀河鉄道の夜」（10月5日）／加門亮コンサート（6月18日）／民族歌舞団花こま車人形「さんしょう太夫」（6月23日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月28日）／十勝地区高等学校音楽教育研究会ふれあいコンサート（2月10日）
▽2007年（平成19年）度
児童生徒公演（小学生）劇団わらび座　「笛じいちゃんとボクの宇宙」（8月31日）／児童生徒公演（中学生）劇団風の子北海道「なるほ堂ものがたり」（9月12日）／アフリカンドラムコンサート（5月12日）／劇団虹っ子「風の童子」（9月15日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月20日）／パフ・ファミリーコンサート（12月16日）／ふれあいコンサート（2月2日）／民族歌舞団こぶし座公演（2月28日）
▽2008年（平成20年）度
児童生徒公演（中学生・一般）劇団風の子「ぼくのなかのぼく」（9月10日）／児童生徒公演（小学生）北海道人形劇協会「しりたがりやのぞうさん」他（10月7日）／ほくでんファミリーコンサート（6月14日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月25日）
▽2009年（平成21年）度
児童生徒公演（中学生・一般）ひのき屋ライブ「プトヴァーニェ（旅）」（9月4日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（11月7日）
▽2010年（平成22年）度
児童生徒公演（小学生）劇団民話芸術座「河童の笛」（8月31日）／児童生徒公演（中学生・一般）劇団虹っ子「花咲き山は花ざかり」（9月6日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月23日）
▽2011年（平成23年）度
児童生徒公演（小学生）劇団トマト座民話ミュージカル「踊るごんぎつね」（8月24日）／児童生徒公演（中学生・一般）たかはしべん「たかはしべんコンサート」（9月7日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月22日）
▽2012年（平成24年）度
児童生徒向け公演（小学生）ハート音楽院　アンサンブルコンサート（8月29日）／児童生徒向け公演（中学生・一般）劇団ポプラ　ミュージカル「火垂るの墓」（9月5日）／映画鑑賞「エクレールお菓子放浪記」（6月17日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月27日）／あかねぐもコンサートｉｎしほろ（11月17日）
▽2013年（平成25年）度
児童生徒向け公演（小学生）人形劇団ポポロ「じごくのそうべい」（9月4日）／児童生徒向け公演（中学生・一般）ゴスペルシンガーＫｉＫｉコンサート（9月10日）／映画「アンダンテ～稲の旋律」（7月7日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月26日）／みのや雅彦コンサート（2月9日）
▽2014年（平成26年）度
児童生徒向け公演（小学生低学年）パファミリーオフィス「イキイキわくわく音楽会」（8月26日）／児童生徒向け公演（小学生高学年）劇団四季「ふたりのロッテ」（9月1日）／児童生徒向け公演（中学生）劇団たんぽぽ「永遠の夏休み」（9月4日）／映画「じんじん」（6月27日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月25日）
▽2015年（平成27年）度

児童生徒向け公演（小学生）劇団たんぽぽ「１００万回生きたねこ」（９月３日）／児童生徒向け公演（中学生）大野靖之　学校ライブ（９月14日）／こぶし座公演（６月12日）／和太鼓松村組公演（９月23日）／中央中学校吹奏楽部コンサート（10月24日）

▽２０１６年（平成28年）度

児童生徒向け公演（小学生）ハート音楽院アンサンブル音楽鑑賞会（９月７日）／児童生徒向け公演（中学生）伝統文化みらい塾「楽しく遊ぶ歌舞伎鑑賞教室」（10月12日）／大日本プロレス士幌大会（４月14日）／和太鼓松村組士幌公演（９月22日）／十勝地区高等学校音楽教育研究会「ふれあいコンサート」（２月４日）

▽２０１７年（平成29年）度

児童生徒向け公演（小学生高学年）劇団四季「嵐の中の子どもたち」（８月21日）／児童生徒向け公演（小学生低学年）劇団たんぽぽ「グリックの冒険」（９月６日）／児童生徒向け公演（中学生）株式会社音楽舎ベスト・サポート「わくわくパーカッションサークル」（10月12日）／士幌町中央中学校吹奏楽部第15回定期演奏会（10月21日）／戸川よし乃ありがとうふるさと公演（１月21日）／十勝地区高等学校音楽教育研究会「ふれあいコンサート」（２月３日）／士幌町女性団体連絡協議会60周年記念帯広三条高等学校合唱コンサート（３月18日）

▽２０１８年（平成30年）度

児童生徒向け公演（小学生）株式会社ヒトココチ「ひのき屋わいわい音楽隊！」（11月28日）／児童生徒向け公演（中学生）劇団さっぽろ「五感で楽しむ短編演劇集」（10月12日）／札幌交響楽団士幌町公演（７月28日）

▽２０１９年（令和元年）度

株式会社わらび座「ミュージカルＫＩＮＪＩＲＯ！～本当は面白い二宮金次郎～」（12月４日）／児童生徒向け公演（中学生）株式会社スノー・ボール「見て・しゃべって・創って・体感する落語」（９月12日）

▽２０２０年（令和２年）度

株式会社音楽舎ベスト・サポート「ゴスペルシンガーＫｉＫｉコンサート」（９月14日）

例年２月11日町民のつどい（現在は３月の「みんなで教育を考える集い」）の際、町教育委員会では、文化振興に功績あった者、顕著な活動をした者に対し文化賞、文化奨励賞の授与をしてきた。１９９１年（平成３年）以降の受賞者は次のとおりである。

◎町文化賞受賞者一覧表

１９９１年（平成３年）度

○文化賞

佐藤ちどり、渡辺　勇

○文化奨励賞

鎌田万里子、菅原由美、鎌田久弥、吉田スエ、森　鈴奈、須藤梅吉

○ジュニア文化賞

伊藤　寛、中野智絵、鈴木奈都美

○ジュニア文化奨励賞

三上沙希子、奥村和博、入宇田啓樹、斉藤直文、大友まゆみ、輔田　真、原尾英祐、大友めぐみ、下居辺小学校５・６年生、士幌中央中学校２年生、士幌中央中学校３年Ａ組

１９９２年（平成４年）度

○文化賞

士幌高校ボランティアクラブ、衣斐恵美、倉川ゆかり、菅原由美、宮本　尚、武藤　巌

○文化奨励賞

真柳貴子、三浦真理子、井上素子、窪北　恵、佐藤俊勝、本田夏代、辛夷むらさき短歌会

○ジュニア文化奨励賞

山田亜希、今田佳織、佐藤拓海、藤内嗣未、金塚奈月、伊藤彩子、棚橋友希

１９９３年（平成５年）度

○文化賞

西部絵美、但田康宏、矢野亜由子、後藤ヨシ、井上素子、大野嘉富、池本一丸

○文化奨励賞

清水歩美、赤間真樹子、赤坂利香、高橋道夫

○ジュニア文化奨励賞

藤内雅史、永森紀恵、菊地将晃、松浦克枝、佐藤将海、月田雅弓、中央中学校３年生演劇スタッフ

１９９４年（平成６年）度

○文化賞

須藤梅吉

○文化奨励賞

飯島広典、橋原ゆみ、佐藤竜太、吉川武子、佐藤和枝

○ジュニア文化賞

佐藤将海、佐藤拓海

○ジュニア文化奨励賞

石田奈那、松倉智英、成瀬知宏

１９９５年（平成７年）度

○文化賞

秋田恵理、沓澤君代、高田和宏、飯島広典、士幌高等学校プロジェクト発表Ｃの部

○文化奨励賞

石橋ゆきこ、田村麻美、中鉢教宏、竹田富雄、赤間佳織、士幌吟友会

○ジュニア文化賞

伊藤　寛、柳谷真悟

○ジュニア文化奨励賞

茂古沼裕以、浅野友美、樋口寛美、沓澤寛人、佐々木綾子、岡部翔太、今田淑子、工藤佳江、伊藤雄太、太田陽子

１９９６年（平成８年）度

○文化賞
居城都子、永井キシ子
○文化奨励賞
酒井雄平、綿貫智佳子、山崎聖幸、沓澤　清、中士幌シクラメン、士幌高等学校プロジェクト発表Cの部
○ジュニア文化賞
河野美咲
○ジュニア文化奨励賞
山中沙都、和田陽子、木谷尚史、杉田将康、國島由貴、坪坂一宏、今田敦子、太田文香、岸田夏、敦賀一平、玉堀雄一、佐藤拓海、鈴木守門、士幌町中央中学校3年演劇チーム

1997年(平成9年)度
○文化賞
山平博子
○文化奨励賞
坪坂則子、溝口　寛、山田芳信、綿貫智佳子、清水秀則、小林みね、林一郎、佐々木シズ、森本かづゑ、士幌紅梅会
○ジュニア文化奨励賞
渡邉　哲、木谷尚史、岸田冬人、佐々木悠、國島由貴、萱原康人、森崎舞、三上将宏、長屋美香、今田淑子、士幌小学校4年一組、士幌小学校4年二組

1998年(平成10年)度
○文化賞
平成10年度士幌高等学校プロジェクト発表Cの部、溝口　寛
○文化奨励賞
平成9年度士幌高等学校プロジェクト発表Cの部、遠藤弘美
○ジュニア文化奨励賞
中島大輝、杉田愛実、仁科有加那、森崎　愛、前田浩孝

1999年(平成11年)度
○文化奨励賞
玉堀淑子、増田啓子、竹迫キミ、中士幌民謡会
○ジュニア文化奨励賞
森　和夫、杉田愛実、大友いずみ、仁科有加那、仁科衣理那、堀江はるか、鈴木亜沙美、高村祥子

2000年(平成12年)度
○文化奨励賞
逸見将人、中井由香
○ジュニア文化奨励賞
清水万結、渡部嵩史、木下優太郎、國島未貴、野川真寛

2001年(平成13年)度
○文化奨励賞
鈴木理恵、伊藤孝弘、士幌高等学校農業クラブ
○ジュニア文化奨励賞
時光晋平、鵜澤杏由美、野曽原秀典、仁科衣理那、野村郁恵

2002年(平成14年)度
○文化賞
小川キヨ、小林みね
○文化奨励賞
佐々木めぐみ、横澤加奈、士幌高等学校農業クラブC部門、士幌高等学校農業クラブ
○ジュニア文化奨励賞
森本翔太、小笠原熙理、宇佐見裕太、本田菜摘、七條成美、大場愛弓、及川桃子、中川誠仁

2003年(平成15年)度
○文化賞
村上琴美
○文化奨励賞
遊佐　昇、佐藤千鶴、士幌高等学校農業クラブ
○ジュニア文化奨励賞
鈴木康仁、小笠原拓也、服部大暉、士幌町中央中学校1年A組壁新聞部門

2004年(平成16年)度
○文化奨励賞
早坂麻里、嘉藤淳介、及川健一、長屋直克、小山田優希、山口クニ子、士幌高等学校食物班、士幌高等学校農産物加工班、士幌高等学校福祉班
○ジュニア文化奨励賞
寺町　司、貝澤友海、木村　勝、梅本茄奈、後藤広樹、小川美香、藤村和矢、清水　覚、士幌町中央中学校吹奏楽部

2005年(平成17年)度
○文化奨励賞
梁川夕貴子、名波一男、士幌高等学校乳製品製造研究班、士幌高等学校肉製品加工班、士幌高等学校食物班、士幌高等学校ライディングクラブ、士幌町木工クラブ
○ジュニア文化奨励賞
前田　健、川合知博、本田菜摘、酒井康太、三浦佑布子、矢野真鈴、梅本茄奈

2006年(平成18年)度
○文化奨励賞
野口ちえ美、士幌高等学校肉製品加工班、士幌高等学校乳製品製造研究班、士幌高等学校乗馬セラピー研究班
○ジュニア文化奨励賞
野川友絵、東井優夏、中島菜津美、堀部希美佳、佐藤敦哉、和田あかね、伊藤心平、瀬戸光樹

2007年(平成19年)度
○文化奨励賞
士幌高等学校乳製品製造研究班、士幌高等学校食物班
○ジュニア文化賞
上山華歩
○ジュニア文化奨励賞
米木絢香、比留間幹太、曽我花慧、東井優夏、貝澤亜樹、中山美紅、菊地美咲、曽我殊未、吉川遼、貝澤友海、梅本千寛、上野由葵、藤村志織、士幌中央中学校吹奏楽部

2008年(平成20年)度
○文化奨励賞
士幌高等学校農業クラブ執行部、士幌高等学校乳製品製造研究班
○ジュニア文化賞
宮野嵩平

○ジュニア文化奨励賞
佐藤綾香、高橋大生、足立隼人、伊藤里奈、小笠原安理、澁谷柚音、渡部結衣、吉田晴樹、野川友絵、二川瑠那、澁谷七緒、上山華歩、伊藤綾音、伊賀彩統、梅本千寛、矢野真鈴、中士幌小学校5・6年学級、北中音更小学校児童会

2009年(平成21年)度
○文化賞
小竹隼人、真田ありさ、野久郁子
○文化奨励賞
上之段篤志、本田莉菜、伊賀たりよ、士幌高等学校乗馬セラピー専攻班
○ジュニア文化賞
貝澤亜樹
○ジュニア文化奨励賞
渡邊寛太、芳賀護大、三上紗和、佐々木慶憲、長田愛音、吉田晴樹、荒木紘平、伊賀彩統、三上花央、曽我殊未、山田明穂、森あおい、多辻かれん、士幌中央中学校吹奏楽部

2010年(平成22年)度
○文化賞
樋口孝夫、田中康弘
○ジュニア文化奨励賞
前田菜見花、足立寛奈、宮島颯斗、佐々木航、吉川快、長瀬あやめ、青木妃南、河田友香、山下拓真、石山美聖、中山紅音、土橋真理、西田侑奏、宇佐見渓太、小菅映、福士麻由

2011年(平成23年)度
○文化奨励賞
戸崎あゆみ、猪狩裕平、藤川結衣
○ジュニア文化賞
貝澤友海
○ジュニア文化奨励賞
青木羅菜、澁谷響乃、栗原暖季、多田光希、鎌田汐音、髙田翔、中波明日香、藤井七成、鈴木乃亜、鎌田悠生、浅野龍哉、小椋優佳、鴨川真依

2012年(平成24年)度
○文化賞
小笠原朔夜、須田侑希
○文化奨励賞
泉田澄夫、士幌高等学校肉加工専攻班
○ジュニア文化賞
貝澤友海
○ジュニア文化奨励賞
森本悠月、西丸郁哉、髙橋亮太、富田伶亮、三本柚葉、中村瞳月、吉川宗彦、山下真央、小野寺遥香、来原宥稀、岡部真奈、川崎澄奈、石川祐輔、時光啓太、宇佐見桃佳、樋山絵里子、澁谷七緒、松尾衣莉果

2013年(平成25年)度
○文化賞
鈴木久子
○文化奨励賞
村田茉優、士幌高等学校酪農専攻班、士幌高等学校地域食物専攻班
○ジュニア文化奨励賞
松村沙音、飯島伽蓮、河村ひまり、井尾憲弘、伊藤慶、富田伶亮、田邊友菜、藤井咲羽、髙橋つぐみ、富田佑亮、加納京典、石川侑輝、中波明日香、佐藤亜月、高橋六花、佐藤綾香、佐藤美月、吉川美羽、高橋ひな、坪井明花

2014年(平成26年)度
○文化賞
士幌高等学校酪農専攻班
○文化奨励賞
坪井明花、高橋菜々実、士幌高等学校農業クラブ執行部、士幌高等学校地域資源専攻班、士幌高等学校環境専攻班
○ジュニア文化賞
中波明日香、東井優夏
○ジュニア文化奨励賞
奥秋静子、長屋聖央、鎌田琉生、塩谷明里、川村愛結、髙橋亮太、井尾梨々菜、石田結万、河田千香、鎌田汐音、竹迫日和、川口あい、西野伶、川口るか、河田友香、吉川美羽

2015年(平成27年)度
○文化奨励賞
家常優希、士幌高等学校農業クラブ執行部、士幌高等学校乳加工専攻班、士幌高等学校地域資源専攻班
○ジュニア文化奨励賞
河村晃瑛、宗原悠真、井尾光、石田悠真、鴨下雪輝、遠藤令梨、森本悠月、奥秋智佳、飯島綾那、浅野るな、樋口颯、足立寛奈、髙橋ひかる、森山志緒里、荒木綾香、新田小学校1年生、新田小学校5年生6年生、士幌町中央中学校1年生

2016年(平成28年)度
○文化奨励賞
士幌高等学校乳加工専攻班
○ジュニア文化奨励賞
木川統真、大槻心音、宗原悠真、鎌田琉生、伊賀リンダ、松村沙音、河村ひまり、塩谷詩織、篠原くるみ、髙橋亮太、長瀬莉々香、中波明日香、杉井志帆、佐倉小学校4年生

2017年(平成29年)度
○文化賞
士幌高等学校環境専攻班、士幌高等学校乳加工専攻班
○文化奨励賞
半場誠人、士幌高等学校野菜専攻班
○ジュニア文化賞
河村ひまり
○ジュニア文化奨励賞
長屋月駿、小野寺仁菜、野村桃花、二川心那、細井姫来、河村晃瑛、長谷川あまの、東井咲詠、川村愛結、田中博典、奥秋智佳、照井瞭太朗、青木

羅菜、澁谷響乃、藤井咲羽、甲山　怜、門眞莉奈、竹迫日和

２０１８年(平成30年)度

○文化賞

　士幌高等学校環境専攻班・士幌環境講座

○文化奨励賞

　士幌高等学校農業クラブ執行部、士幌高等学校乳加工専攻班、士幌高等学校農産加工専攻班

○ジュニア文化賞

　藤田愛優深、遠藤令梨

○ジュニア文化奨励賞

　野口夏帆、松本吏湖、上野結菜、小川こころ、寺町いろは、長谷川あまの、石田悠真、吉田隼輔、飯島伽蓮、鈴木健心、加藤真那、鎌田菜那、藤井咲羽、足立寛奈

２０１９年(令和元年)度

○文化賞

　士幌高等学校環境専攻班、士幌高等学校乳加工専攻班

○文化奨励賞

　小川菜月、福田あみ、士幌高等学校農業クラブ執行部

○ジュニア文化奨励賞

　西潟香花、田中英仁、伊賀丈琉、仁和奏音、成田にこ、原　珠希、仁和璃音、飯島伽蓮、松村沙音、斉藤ひまり、竹迫小春、青木羅菜、高橋美生、藤井咲羽、佐倉小学校３・４年生

２０２０(令和2年)度

○文化賞

　赤間かなう

○文化奨励賞

　士幌高等学校農業クラブ執行部、士幌高等学校有機農業専攻班

○ジュニア文化奨励賞

　田中英仁、市田柊斗

文芸、美術、音楽など

町内には文芸、美術等の愛好者も多く、文芸活動としては早くから短歌・俳句の会をつくり、例会等で作品を競い合っている。毎月発行の士幌広報文芸欄には多く作品が寄せられ紙面を飾ると共に読者の高い評価を受けている。

町民文芸誌「ぬぷか」

１９８１年(昭和56年)、町文化協会の創立10周年記念事業で創刊した町民文芸誌「ぬぷか」が２０００年(平成12年)11月に第20号を発行した。

同誌は、児童詩、意見発表など小、中、高校生から一般の創作、随筆、詩、評論、短歌、俳句等毎年多くの作品が載せられ町民に密着した文芸誌として愛読されているばかりでなく十勝管内でも質の高い作品集として評価されている。

記念号となる第20号では、76の力作が１７８ページにわたり掲載され町民に届けられた。文化協会では第15号に続き本号を町内全戸無償配付することとし、町の協力を得て11月に各戸に配った。

町民文芸誌「ぬぷか」の発刊は２００５年(平成17年)度より教育委員会が担当して毎年発行している。現在は、1部５００円での有料配布となっている。

「ぬぷか」には町民をはじめ、町とゆかりのある人たちが投稿し文芸誌を編集しているが、これらの人の中には独自に出版活動をする人もおり、「続・士幌のあゆみ」でも多くの人が紹介されている。

２０２０年(令和2年)第40号を発行した「ぬぷか」は投稿者数、児童・生徒58人、一般22人、合計80人であった。

１９９７年(平成9年)1月に元町議の清野要之進が自分史「初志一貫」(老家畜商の回想)を個人出版、激動の70余年の回想を３１２ページに綴っている。

また、かつて鈴蘭食堂経営の斉藤ハクの遺稿を発行した長男斉藤昌淳(士別市在住)が１９９５年(平成７年)に歌稿集「残像」(２１７ページ)、翌年(平成８年)には自分史「二つの峠」(４００ページ)を自費出版したほか、以前士幌町役場で畜産係長を努めた野呂清三の妻野呂愛子が１９９４年(平成６年)に歌集「紫木蓮」を発行している。

これらの作品は、それぞれ町図書館に寄贈され蔵所されている。

児童・生徒の文芸をまとめた士幌町児童・生徒文集「しほろっ子」が毎年町教育振興会によって発行されていた。町内の各小学校、中央中学校の生徒の作品で、詩、作文、俳句等多くの力作が載せられ、伝統ある文集で文芸活動の幅広さが伺えたが、２０１７年(平成29年)度を以て終了した。

１９９８年(平成10年)度の十勝文化団体協議会文化賞に町内の郷土史研究家河合松夫が選ばれその栄誉に輝いた。

同賞は毎年十勝の文化振興に功績のあった個人、団体に贈られるもので、河合は40年以上も短歌に親しみ、長年短歌愛好者の育成や指導に取り組んだことや、文化協会会長として町民文芸誌「ぬぷか」の創刊からその編集に努めたことなどが評価され受賞となった。

河合は時折新聞投稿などで意見、主張を行っていた

が、２０００年(平成12年)度毎日新聞にゴミとリサイクルを絡めた環境問題「美しい北海道を未来に伝えるために！身の回りから循環型社会を創ろう！」を提言、この年度の「北海道提言賞」優秀賞として入選を果たした。

郷土研究家としては、土幌町史、上士幌町史をはじめ町内の多くの記念誌の編さんに当たるなど町の生き字引として貴重な存在であった。

また、１９９４年(平成６年)家史「源流をたどりて」～或る移住一家八十年の足あと～父母が渡道して84年の河合家の歴史を十勝開拓の庶民記録として出版している。

２００２年(平成14年)11月、元町議会議長であった加納一郎が自分の生い立ち、農業、公職時代の自分史「ヌプカに拓く」を自費出版した。

２００４年(平成16年)８月、小椋　卓が小椋家が１９０４年(明治37年)北海道に渡ってから１００年記念として記念誌「渡道百年」を自費出版している。

１９０２年(明治35年)に入植した小川市太郎の孫で駒澤大学講師の小川光夫が２０１７年(平成29年)３月に『「幻の寺町」岐阜県から北海道十勝国へ』～音更村字中士幌開拓の歴史書～を出版、中士幌の開拓から近・現代の市街地の様子を紹介している。

美術活動としては絵画サークルもあるが基本的にはそれぞれが独自の創作活動でサークルとしては情報伝達(通知案内)程度にとどまっている。

同絵画サークルの会員山平博子は１９８８年(昭和63年)に平原社展に初出品で入選しているが、その後１９９３年(平成５年)には道美術協会展(道展)へ同作品を出品し、これまた初出品で初入選となった。同作品は油彩「早春の雑木林」と題した80号サイズの大作であるが、士幌町農協記念館建設記念として同館に寄贈されている。

１９９６年(平成８年)平原社美術協会会員となった山平は、翌年以降も道展(水彩)などで入選を果たし、１９９９年(平成11年)には東京美術館の水彩連盟展に初出品し入選の栄に輝いている。この時の題名は「薄れゆく記憶」で80号サイズの力作であった。同年４月29日から５月16日まで総合研修センターで山平博子水彩画展を初めての個展として開催した。

山平は１９９８年(平成10年)度に士幌町文化賞を受賞している。

長い間本州(前住地)で絵画活動を行ってきた木谷隆彦は１９８８年から子息の住む本町に移り活動を続けている。前住地の著名な展覧会で数多くの作品を入選させている木谷は、本町来住後も自宅にアトリエを持ち、作品制作に取り組み、ＮＨＫ帯広ギャラリーでの「二人展」や市民アート展ほか各地で個展を開くなど意欲的な活動を続けていたが、２００１年に亡くなった。遺作展が２０１６年(平成28年)町総合研修センターで開かれた。

郵便局に勤務する傍ら写真活動を続けてきた但田康宏は、１９９３年(平成５年)フォトライブラリー「シンフォニーオフィス」を開設、全国フォトバンクに登録しプロの道に進んだ。

幻想写真を中心に撮影活動を続ける但田はＮＨＫギャラリー、六花亭ギャラリー、勝毎サロンなどで何回も写真展を開く一方、全国山渓誌等への応募でも数多くの作品が採用掲載され、全国誌「山と渓谷」では１９９８年(平成10年)から２０００年(平成12年)９月までに10回応募し８回入選(内特選３回、準特選２回)するという快挙を成し遂げている。

１９９３年(平成５年)度に町文化賞を受賞した。

町内で「はらお昭文堂」を経営する原尾進は、商店街近代化事業に合わせ改築した店舗２階にギャラリーを開設した。名称を高山植物からとって「ちんぐるま」とした40平方メートル程のギャラリーのオープンには上士幌町の写真家(道写真協会会員)栗山睦雄の写真展「大地の風」(作品30点)が開かれ好評を博したが、その後も多くの作品による展覧会等に利用されている。原尾は、１９９１年(平成３年)の雲仙普賢岳噴火を取材中に火砕流の遭遇を受け不帰の人となったかつてのＮＨＫカメラマン矢内万喜男と、「なまくら会」行事の取材を通じ懇意にしていたが矢内の死後、遺族の了解を得て同人の山を主体とした遺作写真を中心にした写真展を各地で開く一方、１９９７年(平成９年)には矢内万喜男写真集(山と花と・・・そして命)を出版した。

この写真集は北海道の山の風景を中心に65ページに約80点の力作が載せられている。

音楽関係では、音楽少年団、和太鼓少年団、コーラス同好会などがそれぞれの指導者を得て活動を継続しているほか新たな動きはなかったが、２０１９年(令和元年)に士幌少年少女合唱団が結成され、町文化祭などで練習の成果を披露し

ている。また、大衆音楽として定着したカラオケは、同好会等で盛んに行われている。

かつて全国チビッ子歌謡選手権に出場した中村仁美は１９９３年(平成5年)十勝歌謡連合が主催した第10回十勝歌謡選手権大会で見事優勝、16歳(当時高一)の史上最年少チャンピオンとして出場１７７人の頂点に立った。中村は先に行われた旭川市での音楽歌謡祭でもチャンピオンになっているが、その後も１９９９年(平成11年)11月に函館市で開かれた日本アマチュア歌謡連盟主催の第16回日本アマチュア歌謡祭北海道地区予選でも優勝、２００３年(平成15年)日本アマチュア歌謡連盟主催の全国大会でヤングの部優勝、翌年には、遠藤実グランプリ杯ヤングミドルグランプリに輝き、２０１２年(平成24年)日本クラウンより芸名戸川よし乃として「すずめは雀」でデビュー、２０１８年(平成30年)戸川よし乃から本名の中村仁美に改名した。

東京でプロの学習漫画家として活躍していた北本善一が１９９４年郷里中士幌に帰り創作活動をしていた。大手出版社の学習雑誌への制作や単行本も多く出している北本は、これまでの活動を続ける一方、道内自治体の要請に応え、空知管内幌加内町の漫画百年史や足寄町の動物化石博物館のパンフレットなどを手掛けた。

１９９６年(平成８年)総合研修センターで北本善一原画展を開き来館者の目を楽しませた。

かつて士幌幼稚園の園長を務めていた原高義は教職時代の約30年前から独学で植物の細密画を描き続け、北海道でもその道の第一人者として活躍し、十勝山草会の会長を務める一方、帯広植物細密画同好会を主宰して多くの人を指導していた。１９９２年(平成４年)から数年にわたり北海道新聞帯広・十勝版の夕刊に連載した「続・私の植物譜」の画・文は好評で長年描き続けた作品展が各地で開かれている。また著書として「画文集・北の山野草」「山草生活史」などがある。

近年では、２０１４年(平成26年)河江力が「士幌町入植と開拓、学校教育の関わり。史跡より」と題した郷土史の資料を作成、２０１６年(平成28年)第38回國際書画展においては、中島康夫が準会員の部の準特選に入選、２０１７年(平成29年)町総合研修センターで前年、全道展の絵画部門で奨励賞を受賞した船戸稔が油絵の個展を開催、小椋卓がエッセー集「人生の終りに」を刊行、三木洵が山岳画の個展をＮＨＫ帯広放送局ギャラリーで開催、伊藤健蔵が植物画の個展を帯広市民ギャラリーで開催するなど活躍している。

士幌町文化協会構成団体および士幌町公民館認定登録団体

表－２　　(令和３年４月現在)

文化協会加入	部門	団体名	代表者名	会員数
○	ビデオ	士幌ビデオクラブ	鵜澤和郎	3
○	民謡	中士幌民謡会	吉田静二	3
○	詩吟	士幌吟友会	浪内一洋	5
○	大正琴	琴修会士幌	信太勢子	5
○	大正琴	ひまわり会	荻静江	9
○	邦舞	藤悦津会	加藤里奈	6
○	剣詩舞	聖月流剣詩舞士幌同好会	河村千代子	3
○	コーラス	コーラスこもれび	加納英子	13
○	歌謡	士幌歌謡同好会	鎌田弘美	8
○	舞踏	芳彦会	鈴木久子	20
○	歌謡、舞踏	士幌歌舞愛友会	隶原一敏	12

文化協会と文化団体

２００１年(平成13年)に創立30周年を迎えた町文化協会は翌年1月に記念式典を開催、30年のあゆみ「文化の軌跡」を発行した。

同協会では毎年芸能発表大会や芸術祭・文化祭を開き、日頃サークルごとに活動している成果を披露しあうほか、町の各種行事にも参加し町民文化の向上に努めている。

２０００年(平成12年)当時33団体４８０人を超えていた会員数も大幅に減少し、２０２０年(令和2年)度は11団体87人で活動し、発表会などを行った。(表－２参照)

２０１２年(平成24年)6月には、東日本大震災復興応援チャリティー映画上映会を開催、上映会で得られた益金と当日観覧者からの義援金を石巻市文化協会へ寄付した。

また、２０１４年(平成26年)2月に開催された「第42回士幌町文化協会主催芸能発表会」では復興支援として宮城県石巻市の「雄勝法印神楽」を招き公演を行った。この場で町から石巻市に東日本大震災復興祈願のメッセージが書かれたひようたんが贈られた。このひょうたんは震災の復興を願い、プラザ緑風に展示されていたものだが、今回の神楽公演に際し、作成者の大野憲光の善意により実現した。

町文化協会は２０２１年(令和3年)に創立50周年を

迎えた。
▽士幌町文化協会
会長　三上昌博／平3～6、須藤梅吉／平7年～12、浪内一洋／平13～26、富澤敏／平27～28、来原一敏／平29～現在

札幌の大学生が高知の「よさこい祭り」に参加したのをきっかけにソーラン節と鳴子を使った「ＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭り」を企画し実施してきたが瞬く間に北海道を代表する大イベントに成長した。毎年6月上旬に札幌市で開かれるこの祭り、当初は学生中心の小規模のイベントであったが現在は全道各地から多くのチームが参加し、札幌大通をはじめ多くの会場で祭りを繰り広げている。

踊りに参加する人は道外チームも含め数万人に達し、観客数は冬のイベント「雪まつり」を凌ぐ発展ぶりである。

１９９７年(平成９年)士幌町でも「しほろソーランの会」が結成された。青年層を中心に広く会員募集の呼び掛けを行い、町や町民多数の支援を受け結成したものでチーム名を「しほろジャガいも　√(ルート)７０００ターボ」と名付け町の７０００人のまつりや各種イベントで町民に披露していた。「札幌よさこいソーラン祭り」へは結成翌年の１９９８年(平成10年)から参加し、参加2年目の１９９９年(平成11年)には「新札幌会場賞」を受賞した。

２０１６年(平成28年)12月に結成から20年を節目に解散した。

▽しほろソーランの会代表(解散時)　篠原真人

アウトドア活動の普及に力を入れている「士幌なまくら会」は、１９８５年(昭和60年)に自然大好き人間が集まり設立された。自然と親しむ活動を中心に次々とユニークな事業を展開、「歩く旅」を十勝全域で行い、夏のわらじ１００キロウォーク、冬のスキー横断ウォークなど「ふるさと再発見」を合言葉に地域の歴史、地理、自然を歩きながら遊び、学ぶ活動を続けている一方、早くからアウトドアスクールを開設し青少年育成に努めていた。

クラブ開設とともに活動拠点「コムニハウス」を町内新田新栄地区に廃屋を利用して建設、野鳥観察、昆虫採取等の野外活動に子ども達が宿泊して楽しむ企画が次々と組まれ１９９７年(平成９年)12月には、大自然の恵みの中でクリスマスを楽しもうとネイチャークリスマスキャンプを士幌淡水漁園で開いた。メインイベントは水車発電によるツリー点灯で1か月前から準備にかかり直径1・8㍍の木製水車を制作、これに発電機を取り付け養漁園から流れ出る小川に設置、近くの木々に飾ったイルミネーションに点灯すると雪景色の中にツリーが幻想的に浮かび上がった。

この日は地元をはじめ札幌、旭川、帯広などから多くの人たちが集まり、花火の打ち上げや、手作りそば、野外バーベキューなどで楽しみながら交流を深めた。

第二の活動拠点として自然観察センターを完成させた。野鳥や野草観察のほかサイクリング、歩くスキーなど幅広い活動を展開させるもので、コムニハウスよりやや離れたパンケチン川のほとり、野鳥の森に建設した同センターは、木造2階建てで広さ36平方㍍。30人位まで宿泊できる施設で名称を「山荘パンケチン」とした。

同施設はクリスマスの星座観察会、夏は森林キャンプなど四季折々の活動の拠点として利用された。

また「山荘パンケチン」の隣りには体験型施設も作り、手押しポンプや、五右衛門風呂などを設置、昔の生活を学ぶ施設として利用するほか、環境教育・アウトドア活動サポートセンターやアウトドアスクールなどにも使われた。

「環境教育・アウトドア活動サポートセンター」を２０００年(平成12年)に設立し学校の環境教育を支援することとしている士幌なまくら会では自然に詳しい人たちの人材バンク登録制度を導入し指導者ネットワークの構築を目指し環境教育の支援活動に着手することにしている。

同サポートセンター設立記念として同年11月総合研修センターロビーで写真展「大雪の自然と動物たち」を開き道内の大雪山国立公園パークボランティア会員の作品50点を展示した。

同会の活動が賞賛され、２００２年(平成14年)2月には十勝管内教育実践表彰、同年8月には、第9回コカ・コーラ環境教育賞(全国)、翌年9月には、道新ボランティア奨励賞(全道)同年11月には第4回十勝環境賞(十勝毎日新聞社)そして、２００５年(平成17年)2月、北海道開発局が主催する「わが村は美しく－北海道」運動第2回コンクールで人の交流部門銅賞を受賞した。

士幌なまくら会の会員は、固定会員として25人位所属し、行事ごとの参加者を会員としていたが、固定会員の高齢化などにより現在は休止状態となっている。

2、文化財

町の名木

町では開拓時代の歴史を伝える貴重な文化的遺産ともいえる古木を保存樹に指定している。

１９７７年(昭和52年)以降町内に散在する、かしわ、こくわ、にしき木、いちい等の名木、記念木を23組保存樹に指定し保護を図ってきた。(表－１参照)

「町木」となっている「かしわ」の木が８組10本の保存樹指定を受け最も多かったが、このうち樹齢３７０年の新田小学校の「コブかしわ」と北中音更小学校校庭に植えられていた樹齢４００年を超える２本セットの「かしわ」が幹の腐れがひどく近年相次いで伐採された。

遊水公園植樹祭

多くの卒業生を見送った士幌小学校校庭のしだれ柳は１９７４年(昭和49年)道の保存樹に指定され長年士幌小学校のシンボルとして親しまれてきたが１９９８年(平成10年)９月の台風５号による強風で枝部分すべてが折れ幹を僅かに残すのみの無残な姿になった。

樹齢推定80年の同柳は幹の中心が腐って空洞になっており再生は難しく、このまま残しておくのはかえってしのびないと判断した学校側は同窓会と相談し、お別れ会を開いて処分することとした。

お別れ会は同年11月19日同窓会が主催して行われ、児童のほか、同窓生ら約50人が出席、校長や児童、同窓生のお別れメッセージの後、チェーンソーを入れて伐採し、思い出いっぱいの柳の木と別れを告げた。

現在残っている保存樹は15組でそれぞれ所有者、施設管理者によって管理保護されている。

１９８５年(昭和60年)、西上国有林内(現マウンテンバイクコース近く)で発見された巨大ミズナラは、近年行われた国営草地開発事業の区域内にあるが、名木として保存するため、この巨木から半径１００メートルの区域は草地開発せず残された。

樹齢８００年を超えるこのミズナラの巨木は１９９２年(平成４年)十勝の名木特選に選ばれ、同年８月開かれた「十勝・緑と地球博みどりいむ，92」で「後世に残すべき十勝の名木百選」で大きな位置づけをされ表彰された。

２０１５年(平成27年)長年風雪に耐えてきたこの巨木も倒れてしまい、現在は残っていない。

町の保存樹の指定は受けていないが、下居辺清澄地区保坂勇所有のミズナラも樹齢３５０年以上の巨木である。この地区に始めて鍬を入れた時から付近を遠望できる山林にそびえ立つ巨木は緩傾斜に頑強な根を張り、風雪や山火に耐えてきたのか幹にある十数個の瘤(こぶ)がこれらを物語っている。

開拓の地縁からも貴重な巨木として、アイヌ語のチャチャ(古老)をとり「ヲロベ・チャチャナラ」と名付けた。

町は１９８１年(昭和56年)開基60周年を記念して「町の木・花・鳥」の制定を行った。

町のシンボルツリーとしての町の木は「かしわ」町の花には「すずらん」町の鳥として「かっこう」が選ばれた。

「かしわ」は防風保安林、

表－１

士幌町指定保存樹

所在地	所有者(管理者)	樹　種	樹齢（年）	周囲（m）	樹高（m）	説　明
中士幌北	中士幌公民館	コクワ	97	測定不能	3.2	枝葉面積豊富で樹勢良好
明生	中士幌小学校	カシワ	237	3.12	15.9	中士幌小学校のシンボル的存在
佐倉北２	荻静江	カシワ	487～510	3.98	18.6	佐倉農場用開墾記念保存
友愛	報恩寺	アカマツ	137	2.69	12	報恩寺の歴史的存在
仲通	士幌小学校	イチイ	137	2.04	7.8	士幌小学校のシンボル的存在
仲通	士幌小学校	クワ	107	1.96	12.1	管内的に珍しい桑の大木
仲通	士幌小学校	カシワ	437	2.47	19.3	開拓時の柏が市街中心に残された
共益	士幌町	カシワ	437	3.05	17.8	元北中音更小学校跡地、開拓時の大木が残され、美観風致も優れている
朝陽	植田照江	ミズナラ	約386	3.41	22.1	数少なくなったナラの大樹
朝陽	植田照江	カツラ	約386	3.3	21.3	原生林にそびえ立つ希少価値の大樹
仲通	士幌小学校	クリ	96	1.96	12.3	天皇即位記念として植樹された記念樹
役場前	士幌町	クロマツ	86	1.77	10	樹容に優れ管内的にも一級品の折り紙付き
百戸	星屋好男	ハルニレ	126	2.42	21.4	士幌小学校の創立跡地のシンボル的存在
明生	中士幌小学校	カシワ		2.03	18.9	２本セットで開墾時代の名残り
				2.3	21.2	
共益	士幌町	カシワ		3.27	19.2	樹容に優れ、元北中音更小学校のシンボル的存在

※平成26年８月現況確認、周囲・樹高を測定

柏公園のほか保存樹に指定されている古木等も多く残っており、町の鳥「かっこう」も春の種まきを知らせる鳥として毎年その時期になると姿はあまり見られないが鳴き声は町内各地で聴かれる。

町の花に制定されている「すずらん」は、かつて全町的に自生し、気品のある姿、香が多くの町民に親しまれてきたが、開発が進むと共に姿を消し、自生のすずらんを見ることが少なくなった。町は絶滅を防ぐために公園、保安林等への移植で保護、増殖を図ったが芳しい結果にならなかった。今後「町の花」見直しも含め対策の必要がある。

郷土芸能

一時期「美濃神楽（かぐら）」を本町の郷土芸能として伝承していこうという取り組みがされたが定着せず、士幌町では古くから伝承されている郷土芸能はない。

１９８７年（昭和62年）２月に士幌高原太鼓愛好会が結成され三十数年になるが、活動が継続され郷土芸能として定着することを期待したい。

２０１５年（平成27年）９月、総合研修センターで神戸を拠点に全国展開する「和太鼓松村組」の「第１回十勝公演ｉｎ士幌」が開催され、友情出演した士幌高原太鼓愛好会がオープニングで松村組楽曲を演奏。フィナーレでは、松村組と士幌高原太鼓愛好会の合奏で会場を盛り上げた。

開町１００周年記念式典では「和太鼓松村組」の座長政本憲一氏が作曲した「十勝風～ｔｏｋａｃｈｉ－ｋａｚｅ～」を披露した。

士幌高原太鼓愛好会

埋蔵文化財と開拓遺品

町内で埋蔵文化財蔵地として指定されているのは１９９５年（平成７年）に指定された日進４遺跡を含め38か所となっている。

これらは大半が音更川、居辺川沿いから出土した土器のかけら、やじり、石斧（おの）などで、先住民族の生活拠点と思われる。

本町で入植開墾が始まってから１２０余年になるが、入植当時からの変化を物語る農耕具、生活用具等で今は使われなくなった道具類は、先人の足跡をしのぶために貴重な文化財であり、町では町民から寄贈された多くの開拓当時からの記念物品を総合研修センター資料室やしほろ発祥の地にある伝統農業保存伝承館で保存陳列されている。

町の史跡・遺跡

町は１９８９年（平成元年）度において「自ら考え、自ら実践する地域づくり事業」（ふるさと創生資金１億円の一部）の一貫として、広く町民に呼びかけ、町内の「史跡・遺跡」を現地に表示し、イラストマップを作成し、保存することとした。

結果、当年度において士幌町発祥の地を含め39か所を指定し、現地に解説版を設置するとともに「しほろ史跡イラストマップ」を発行した。これらの史跡は士幌町発展の歴史を物語るものとなっている。（表－２参照）

史跡イラストマップ

士幌町の史跡・遺跡（平成元年指定）

表－２

番　号	名　称	所在地
No.１	士幌町発祥の地	字中士幌幹線 86 番地
No.２	士幌町農耕発祥の地	字下居辺南２線 84 番地
No.３	中士幌小学校開設跡	字中士幌幹線 98 番地
No.４	下居辺小学校開設跡	字下居辺南２線 88 番地
No.５	士幌小学校開設跡	字士幌幹西２線 184 番地
No.６	北中音更小学校開設跡	字中音更基線 162 番地
No.７	中士幌寺町跡	字中士幌幹線 92 番地
No.８	割山の分監小屋跡	字中士幌幹線 118 番地
No.９	官設渡船場跡	字士幌幹西２線 170 番地
No.１０	佐倉農場事務所跡	字士幌東７線 122 番地
No.１１	官設上士幌駅逓跡	字士幌西１線 218 番地
No.１２	マッチ軸木工場跡	字中音更西１線 203 番地
No.１３	上居辺小学校開設跡	字士幌東７線 159 番地
No.１４	居辺駅逓跡	字下居辺西２線 134 番地
No.１５	佐倉小学校開設地	字士幌東７線 132 番地
No.１６	中音更橋跡	字中音更基線 157 番地
No.１７	西上音更小学校開設跡	字上音更西１線 229 番地
No.１８	士幌村役場跡	字士幌西２線 162 番地
No.１９	士幌かんがい溝跡	字士幌西２線 162 番地
No.２０	私設中士幌渡船場跡	字上音更西１線 229 番地
No.２１	士幌町農村工業発祥の地	字中音更
No.２２	国有鉄道士幌駅跡	字士幌西１線
No.２３	国有鉄道中士幌駅跡	字中士幌西２線
No.２４	士幌市街火力発電所跡	字士幌西２線 166 番地
No.２５	士幌家畜市場跡	字士幌西２線 176 番地
No.２６	北海道拓殖鉄道中音更駅跡	字中音更西１線 184 番地
No.２７	朝陽小学校跡	字士幌東 16 線 181 番地
No.２８	新田民有未墾解放地簡易水道跡	字上音更
No.２９	士幌村産業組合発祥の地	字士幌西２線 163 番地
No.３０	新田小学校開設地	字上音更西 12 線 21 の 93
No.３１	殖民軌道居辺線起点跡	字下居辺西２線 134 番地
No.３２	中士幌ブドウ糖水アメ工場跡	字中士幌西２線 78 番地
No.３３	士幌町中学校統合	字士幌幹線 168 番地
No.３４	国鉄バス営業所跡	字士幌西２線 161 番地
No.３５	下居辺小水力発電所跡	字下居辺西２線 130 番地
No.３６	帯広刑務所士幌農場泊込作業所跡	字下居辺南４戦 79 番地
No.３７	先住民チャシ跡オルベチャシ	字士幌東 16 線 176 番地
No.３８	先住民チャシ跡ウオップチャシ	字中音更 33 号地先
No.３９	新田牧場開設土塁跡	字上音更

第六編　地域余話

SHIHORO

100th Anniversary

第一章　地区の30年

1、中士幌地区

中士幌地区は、士幌町の南玄関口として音更町に接し、国道241号両沿いに市街地を形成し、市街地の東西に農村部がある。駐在区は市街地6、農村部6の12で841人の住民が居住し生活している。

1996年(平成8年)3月、士幌町の男性で初めて100歳を迎えた松井喜市は中士幌市街で長男の妻と2人暮らしをしながら晩年は、趣味の碁を打ったり、町民文芸誌ぬぷかに連続11回投稿するなど健在ぶりを示し、ふるさとの語り部として貴重な人材であったが翌年(平成9年)3月、満101歳で人生を終えた。

中士幌公民館

士幌町発祥の地でもある中士幌は1998年(平成10年)開拓100周年を迎えた。同年10月18日開拓100周年を祝う記念式典を町発祥の地で行い開拓100周年記念碑の除幕式や開拓者の子孫など功労者への感謝状の贈呈などセレモニーに続き、開拓まつりに移り多くの人たちが100周年を祝うと共に先人の残した偉業と遺訓を後世に伝承していくことを誓い合った。

開拓100周年を機に「中士幌を楽しむ会」が組織された。同会は100年を節目として歴史を振り返り、地域について考える交流の場をつくりたいと、郷里中士幌に戻ってきていた学習漫画家北本善一らが呼びかけ発足したもので、地区駐在のおまわりさん、住職など地区在住の者が中心となって活動している。

同会は、地区の活性化・町おこしを目標に文化活動、各種イベント、ボランティア活動等幅広い事業を展開、発足時には100年前の開拓者の足取りをたどろうと豊頃町大津から中士幌発祥の地までを歩く「キッズウォーク80キロ」を計画、小学生から80歳までの20人が参加し、3日かけて全員完歩した。

その他、国道沿いの桜の植樹、お花見ハイキング、クリスマスイブのアイスキャンドルロード、ちっちゃな雪まつりや川狩り、昔話ライブなどを継続し、子どもたちを相手に地域に根ざした活動を推進していた。

1993年(平成5年)に中士幌新東(第二期)団地25区画、2004年(平成16年)にみのり野団地56区画が造成、分譲され帯広の通勤圏ということで住宅建設が進んでいる。

○近年の地区での主な出来事

平成4年
8月　中士幌陶芸場新設
10月　第4回開拓まつり
(第10回まで続く)

平成5年
7月　美濃市との児童交流事業開始

平成7年
5月　中士幌の森パーク

ゴルフ場オープン
7月　中士幌共同墓地通路舗装整備
平成8年
1月　士幌消防署中士幌分遺所改築落成式典
2月　JA青年部中士幌支部結成35周年記念式挙行
平成9年
1月　JA女性部中士幌支部結成30周年記念式挙行
3月　音更町農協中士幌支所廃止撤退
7月　伝統農業保存伝承館オープン
10月　中士幌警察官駐在所改築落成
平成10年
1月　中士幌を楽しむ会発足
中士幌地区農地交換分合事業始まる
10月　地区開拓100周年記念式・記念碑建立除幕式挙行
中士幌新東団地防火水槽60㌧設置
11月　中士幌東団地第3次造成分譲開始
中士幌の森宅地分譲開始
平成11年
2月　開拓100周年記念誌発刊(中士幌のあゆみ)
5月　リサイクルセンター開設
12月　中士幌地域振興計画「構想案」提言「おひろめ会」
平成12年
4月　東団地入口の国道241号線に信号機設置
5月　中士幌小学校生徒会有珠山火山活動災害義援金募金活動
中士幌小学校、釧路法務局から人権の花600本と立看板寄贈
8月　子育て支援カー(カボチャバス)お目見え
平成13年
2月　中士幌小学校で親子そば打ち体験
5月　音更川に中士幌小学校児童によるサケの稚魚放流
6月　中士幌老人クラブ「お楽しみ会」実施、王龍からラーメン無料提供
10月　真徳寺仏教婦人会ボランティア活動で厚生労働大臣表彰
11月　中士幌児童ステーション完成
平成14年
1月　中士幌ひまわり婦人会敬老会開催
中士幌消防団員による除雪ボランティア
6月　中士幌小学校5年対象に札幌食糧事務所帯広支所の職員により「お米の出前教室」実施
平成15年
2月　中士幌婦人学級受講者リサイクルセンター見学
11月　中士幌ひまわり婦人会主催「地域ふれあい交流会」
中士幌小学校開校100年記念式典・祝賀会
平成16年
2月　中士幌小学校開校100年記念誌「柏」発行
平成18年
2月　中士幌小学校でソプラノコンサート開催(親子体験学習)
9月　中士幌児童ステーションで子育て講演会
平成20年
1月　中士幌小学校で思いやりの心を育てる人権教室
平成23年
6月　中士幌郵便局集配業務撤廃反対のため「中士幌をよくする会」設立し抗議運動を行う
平成26年
4月　平田建設より桜の苗木の寄贈があり公民館周辺に植樹
平成28年
4月　公民館活動の主体である「中士幌公民館活動推進委員会」をより会員が身近に感ぜられるよう「中士幌公民館活動推進会」に改称
平成30年
1月　「幻の寺町を語る」講演会　講師　小川光男(中士幌出身、駒澤大学講師)
8月　中士幌地区開拓120周年記念盆踊り大会記念タオル作成、全参加者に配布
令和元年
5月　「中士幌地域安全見守り隊」10名で結成(特に中士幌小学校児童の登下校に関する見守り)
令和2年
7月　全家庭にコロナ対策グッズとして「ハンドソープとタオル」を士幌商工会中士幌振興部の協力を得て配付

◎中士幌地区の人口(令和3年5月末現在)
市街地　329戸　652人(男　309人、女　343人)
農村部　70戸　169人(男　85人、女　84人)

2、佐倉地区

佐倉地区は士幌農村部の東側に続き道道本別士幌線から南側音更町界まで伸びている。道道上士幌音更線が中央南北に走りその両側で農家が点在している。

畑作農家と酪農家がほぼ半数ずつとなっており酪農は、新田地区と共に町内の主要な生産地となっている。

1997年(平成9年)に駐在区の再編を行いこれまでの8駐在区を2駐在区とした。地区中心地にある小学校を起点に南北に分け、旧駐在区の西堀田、共豊、東台、豊年をまとめて「佐

倉南区」とし北側に位置していた新盛、双葉、佐倉、新光の4部落を「佐倉北区」として統合した。

佐倉小学校は道道上士幌音更線の地区中心地東沿いにあるが、老朽化が進み1998年(平成10年)に改築されている。少子化で児童数も減少しているなか、PTAと連携を図りながら特色ある教育活動を進めるとともに同地区開拓とゆかりの深い千葉県佐倉市と交流が続けられ、児童の相互訪問による交流も続けられていた。

小学校の西側にあった「佐倉母と子の家」は長い間、季節保育所、へき地保育所、地区集会場として使われてきたが、1996年(平成8年)度に取り壊し新しい集会施設として「佐倉交流センター」が建設された。

佐倉交流センター

JAの佐倉事業所も1994年(平成6年)で改築され、地域の施設はすべて一新されている。

同地区では、町が進めている「快適環境づくり」に呼応し、1994年(平成6年)地区内に散在している不要農機具など大型ごみを一掃した。地区内には使われなくなった古い農機具や使用済の自動車などが敷地内や畑の角にそのまま放置され、農村景観を損ねていたが農閑期に地区内一斉に処分することとし集積所を設けて持ち寄り回収業者に引き渡した。

回収実績は使用済トラック2台、乗用車5台、農機具など40台、バッテリー100個で総重量26㌧に及んだ。廃品の一掃で地区内の景観が見違えるほどよくなった。

2015年(平成27年)12月に「佐倉地区開基100周年・佐倉小学校開校100周年・佐倉事業所開所50周年記念式典・祝賀会」が執り行われ約300名が出席した。式典会場には「祝100年さくら大好き、これまでもこれからも」と大きな文字で地域のみんなの気持ちが掲げられていた。

2020年(令和2年)3月、佐倉小学校は児童数の減少により閉校となった。

○近年の地区での主な出来事

平成5年
1月　佐倉麦作組合20周年を祝う会
7月　佐倉小学校池周辺環境整備作業完了

平成8年
12月　佐倉交流センター建設

平成10年
12月　佐倉小学校新校舎完成

平成11年
1月　新校舎での授業開始
12月　佐倉小学校校舎改築落成記念式典・祝賀会

平成17年
12月　山岸　勝　2枚の絵を町に寄贈

平成18年
4月　佐倉小学校で国際交流(ALTのグレゴリーと来日した姉の一家5人)
佐倉小学校で交通安全教室
6月　防犯協会佐倉支部が北海道警察釧路方面本部長と釧路方面防犯協会連合会長から連盟表彰

平成19年
12月　町内10番目の「ゆうゆうサロン」開所式

平成20年
3月　佐倉小学校に国際文庫から図書カードを寄贈
9月　佐倉小学校で暗きょ排水の学習会

平成21年
3月　佐倉へき地保育所が特定非営利活動法人佐倉へき地保育所に　開所記念式典

平成27年
12月　佐倉地区開基100周年・佐倉小学校開校100周年・佐倉事業所開所50周年記念式典・祝賀会

令和2年
2月　佐倉小学校閉校式

◎佐倉地区の人口(令和3年5月末現在)
69戸　225人(男　115人、女　110人)

3、上居辺地区

同地区は士幌町の東北部に位置し東は居辺川、北は上士幌町界まで広がっている。

平坦な畑作地帯で東部の一部に湿地帯を残すが土地改良等で改善が図られ、石礫の少ない条件に恵まれた農地が多く、長いも、人参など根系野菜も作られている。農家戸数、地区内経営面積も多くそれぞれ町全体

上居辺地区開拓記念碑

の20％強を占めている。
　１９９２年(平成４年)度で改築した上居辺小学校は翌93年(平成5年)グラウンド拡張、通路舗装、モニュメント、駐輪場等の環境整備を終え、同年７月２日関係者約３００人が出席して校舎落成式を行った。
　上居辺小学校は郡部校として中士幌小学校に次ぐ児童数を擁していたが、近年大きく減少している。
　１９９５年(平成７年)４月の町議会議員選挙で初当選した同地区北上居辺出身の佐藤国夫が病に倒れ翌年１月７日急逝した。葬儀は、士幌町議会議員会・上居辺地区公民館推進委員会の合同葬として１月８日通夜、９日告別式が士幌町コミュニティーセンターでしめやかに執り行われた。
　１９９９年(平成11年)４月の町議会議員選挙で初当選した同地区共成出身の成田吉信が２００５年(平成17年)病に倒れ急逝した。葬儀は、町関係機関・団体合同葬として4月7日通夜、８日告別式が士幌町農業会館でしめやかに執り行われた。
　活発な活動を続ける上居辺青年団が１９９７年(平成9年)創立50周年を迎えた。同年2月に記念式典・祝賀会を開き祝うと共に記念誌「朋友信有」を発行した。団員の減少が悩みとなっていたが、２０２０年(令和2年)３月休部となった。
　２０１５年(平成27年)11月28日に「上居辺地区開基１００周年・上居辺小学校開校１００周年・上居辺事業所開所65周年・上居辺保育所開所60周年記念式典・除幕式・祝賀会」が執り行われ約３００名が出席、式典終了後に開基・開校１００周年を記念して作られた記念碑の除幕式が行われた。

○近年の地区での主な出来事

平成６年
　１月　青年部上居辺支部創立35周年記念式典
平成９年
　２月　上居辺青年団創立50周年記念式典
平成13年
　９月　北海道知事杯第17回北海道ゲートボール大会で「上居辺フレンド」が優勝
　10月　上居辺小学校交通安全キャンペーン
　上居辺小学校でビニールハウスで育てた稲を刈り取り
　11月　樋口孝夫(柏)が日本ゲートボール連合会表彰を受ける
平成14年
　６月　上居辺小学校東側、佐倉川に「親水施設」完成
　７月　第１回上居辺祭り開催
平成15年
　７月　第２回上居辺祭り開催
　10月　上居辺小学校交通安全キャンペーン
平成16年
　２月　柏野常会の石水幸治と山田登美雄「ミニSL」を手造り
　４月　人命救助で石水幸治(柏野)に本別町より感謝状
　７月　第３回上居辺祭り開催
平成17年
　６月　上居辺保育所こぐまクラブ安全と防災を学ぶ
平成19年
　４月　上居辺いきいきサロン開始
　10月　上居辺小学校で「ふるさと士幌給食」
　上居辺小学校でそば打ち体験
　11月　上居辺地域資源保全隊設立
平成20年
　３月　町内初となるNPO法人誕生(上居辺へき地保育所)
　９月　ゲートボールで士幌上居辺チームが全国大会で優勝
平成22年
　１月　農協青年部上居辺支部創立50周年記念式典
平成24年
　１月　農協女性部上居辺支部創立50周年記念式典
　２月　上居辺「木と太陽の香るエコ交流館」落成式
平成27年
　６月　１００周年記念大運動会開催
　８月　小学校庭園に１００周年記念碑、70周年記念碑補修　27号に案内看板
　11月　上居辺地区開基１００周年・上居辺小学校開校１００周年・上居辺事業所開所65周年・上居辺保育所開所60周年記念式典・除幕式・祝賀会
令和２年
　１月　農協青年部上居辺支部創立60周年記念式典
　３月　楽友会、上居辺青年団休部となる
　９月　上居辺旧ゲートボール場に農協ソーラーパネル設置

◎上居辺地区の人口(令和３年５月末現在)
　１０７戸　４２２人(男２０５人、女　２１７人)

4、下居辺地区

　下居辺地区は士幌町の東部に位置し、居辺川に沿って南北に広がり農地が拓かれている。土地は傾斜地が多く気候は穏やかで冬期の積雪はさほど多くない。
　中心部で僅かの市街地を形成し、それを農地、森林

が取りまく環境となっている。

同地区は町内で最も早く開拓された地で、1894年(明治27年)、当時の川合村の南2線45号(現在の士幌町)は愛知県出身の佐野玉次郎が初めて鍬を下ろしたことに始まるといわれている。この時から数えて1994年(平成6年)で100年目に当たるが地区では2年前から協賛会を設立し記念事業の企画を行い、開拓100年記念公園の造成、記念碑建立、記念誌発行を進め、1994年(平成6年)12月4日に記念碑除幕式、記念式典、祝賀会を挙行し開拓100年を祝った。

下居辺市街地

同地区は、豊かな自然環境を活かした地域づくりが進められ、士幌高原ヌプカの里と共に士幌町の観光・体験・交流の拠点と位置付けし、町と地域が一体となって里づくりを展開している。

1996年(平成8年)度に「北海道中山間ふるさと水と土保全対策事業」の対象地区に指定され、「ふれあいの里づくり」計画を策定したが、この計画に基づいて下居辺交流施設(温泉宿泊施設)を建設することになり、町営温泉緑風荘に代わる施設として2001年(平成13年)10月しほろ温泉「プラザ緑風」がオープンした。

同地区は、自然・景観に関する資源として「朝陽自然の森」、1994年(平成6年)に整備した「創造の森」、町の開基70周年記念に造成した「イチイの森」があり、またレクリエーション・イベント等の資源として、士幌町競馬祭りを定着させた「飯島農場」、キャンプ場として整備活用している「ふる里体験広場」、「ヤマベ養殖場」、ホタルの里として知られる「朝陽公園」などがあり、「運動公園」、「開拓百年記念公園」も含め着々と里づくりが進められている。

近年では、2013年(平成25年)の移住体験住宅、2016年(平成28年)の農園付き移住住宅の建設など町の移住体験施設が建設されている。

1991年(平成3年)度で校舎を改築し、1997年(平成9年)開校100周年を迎え同年2月1日記念式典・祝賀会を挙行した下居辺小学校は、2019年(平成31年)3月で児童数減少により閉校となった。

同校出身の山影博明が、1998年(平成10年)2月に長野で開かれた冬季オリンピックにスピードスケート500㍍の日本代表として初出場している。

その他同地区では、2001年(平成13年)本州から家族で移住してきた三木正美はレストラン「カントリーロード」をオープン。同年最後となる第11回競馬まつり、2006年(平成18年)プラザ緑風が道の駅「しほろ温泉」となった。

100歳を超えて元気に外仕事と焼酎を欠かさなかった上屋敷孫吉(清澄)は、1900年(明治33年)生まれで1949年(昭和24年)現在地に定住、酪農を経営、今はお孫さんが引き継いで経営しており毎日のように子牛や妊娠牛の様子を見るのが日課となっていた。命の源である水分をしっかり補給し、昼寝を十分にとり、好き嫌いもなく、リンゴなどの堅いものでも自分で噛み、ゆっくり時間をかけて食事をしていた孫吉も、2005年(平成17年)7月満105歳の人生を終えた。

また、2007年(平成19年)4月の町議会議員選挙で初当選した同地区清澄出身の髙橋寿顕が同年不慮の事故により亡くなられた。葬儀は、士幌町議会議員会・清澄常会合同葬として9月13日終祭、14日告別式が士幌町コミュニティーセンターでしめやかに執り行われた。

さらに、1959年(昭和34年)4月の村議会議員選挙で初当選し、その後町長を務めた士幌町名誉町民、飯島和吉が2009年(平成21年)5月に逝去した。士幌町葬として偲ぶ会が5月30日士幌町コミュニティーセンターでしめやかに執り行われた。

○近年の地区での主な出来事

平成5年
1月　下居辺種子小麦生産組合20周年記念式典
7月　居辺郵便局集配業務を士幌郵便局に統合
12月　下居辺里づくり検討委員会発足

平成6年
3月　下居辺老人クラブ長寿会設立30周年記念式典
12月　下居辺地区開拓100年記念式典

平成7年
3月　下居辺地区開拓100年記念「拓魂ヲロベ」発行
5月　下居辺里づくり検討委員会、里づくり構想

案を発表し解散
6月　下居辺運動公園パークゴルフコース増設
平成8年
1月　下居辺地区里づくり推進委員会発足
7月　草競馬が士幌競馬まつりと改称し一年ぶりに開催
12月　JA士幌町下居辺事業所開設50年・改装落成　青年部下居辺支部創立35周年記念式典
平成9年
9月　市街に手動式交通信号機稼働
平成10年
9月　居辺橋通行止め(10月解除)
平成12年
6月　下居辺交流館工事着工
12月　下居辺小学校で六花亭製菓社員のボランティアグループがケーキ作り指導
平成13年
4月　レストラン「カントリーロード」オープン
5月　下居辺集落センターで消火器の安全点検と消火訓練
7月　士幌町競馬まつり開催(最後の開催)
10月　町民交流施設、しほろ温泉「プラザ緑風」オープン
朝陽ふるさと体験キャンプ場の一部施設建て替え
平成14年
6月　朝陽公園とふれあい広場の環境整備
9月　作家志茂田影樹氏が上屋敷孫吉氏を取材
平成15年
8月　台風10号による豪雨のため更生橋崩壊
平成16年
8月　下居辺運動公園パークゴルフ場、国際パークゴルフ協会公認コースに認定
平成17年
3月　下居辺種子用麦作組合、北海道麦作共励会において最優秀賞(集団の部)を受賞
7月　ハスカップ狩り(7月3日から2週間)
9月　良質堆肥製造現地研修会(酪農家のセミソリットふん尿とバーク堆肥を混合)
12月　雪中パークゴルフ場オープン
平成18年
6月　しほろ温泉プラザ緑風の温泉掘削工事始まる(11月成功)
8月　しほろ温泉が「道の駅」に認定登録
平成19年
1月　下居辺地区里づくり推進委員会　わが村美しくコンクールで銅賞受賞
2月　下居辺小学校開校100周年・保育所開所50周年記念式典
8月　下居辺のハスカップ果樹園でプラムを初めて収穫(30キロ(グラム))
下居辺小学校開校100周年・保育所開所50周年記念誌「響流」発行
11月　下居辺地区里づくり推進委員会が特産品開発(ハスカップジャム・リンゴジュース)
12月　篠原定義(清澄)が「十勝カラマツ優良林コンクール」で奨励賞受賞
平成20年
9月　しほろ温泉プラザ緑風で「食(農業)と観光フォーラム」開催
平成21年
10月　下居辺小学校で暗きょ排水の学習会
平成22年
5月　マイマイガ駆除
7月　下居辺小学校農業体験学習(農協青年部)
平成24年
2月　士幌農協下居辺支部創立50周年記念式典
8月　第55回全国新聞教育研究大会にて下居辺小PTAだより表彰される
平成25年
7月　移住体験住宅の説明会
10月　全日本女子バレーボールチーム応援(下居辺宿泊)
平成26年
1月　下居辺サロン・PTA共催講演会
藤内亨一氏褒章を祝う会
2月　移住体験住宅完成の説明会
3月　下居辺長寿会50周年記念式典
平成27年
3月　下居辺地区里づくり推進委員会解散「二十年のあゆみ」発行
平成28年
4月　開校110周年記念事業実行委員会設立
8月　農園付き移住体験住宅説明会
平成29年
3月　開校110周年記念事業実行委員会解散
11月　下居辺小学校閉校記念事業実行委員会設立
平成30年
3月　閉校記念事業記念看板設置
8月　勝毎花火大会小学生・教員・父母招待
平成31年
2月　閉校式・惜別の会

◎下居辺地区の人口(令和3年5月末現在)
67戸　165人(男　74人、女　91人)

5、中音更地区

中音更地区は音更川の西川沿いに1905年(明治38年)に開墾が始まっている。
道央に通じる国道274号と士幌高原に向かう道道士幌然別湖線を結ぶ東西南北の道路網は整備され酪農と畑作が混在する地域とな

北中音更小学校でオリンピック銀メダリスト
長島圭一郎さんの特別授業

っている。

地域のほぼ中心に小学校、へき地保育所、集会施設等があり地区の活動拠点としている。学校周辺を含め道道には近年歩道を設けまた、学校入口となる道道交差点には交通信号機をつけ幼児・児童の安全確保を図っていたが、地域の中心となっていた小学校が2016年(平成28年)3月で107年に亘る歴史に幕を閉じた。

同地区は1999年(平成11年)4月に、吉野、西吉野、共立の3駐在区が合併し、吉野駐在区とした。これで地区内駐在区は早くに合併している中音更、共益と合わせ3つに再編された。

1998年(平成10年)8月、吉野地区の国道274号線から北へ約500㍍入った樹木の中にログハウスの木工房「ブーオ」(スペイン語でフクロウの意味)がお目見えした。

小さい頃から北海道にあこがれをもっていたという岐阜県出身の吉田智彦が建てたもので、吉田は道立帯広高等技術専門学院で夫婦揃って手作り家具を勉強し、この地で本格的な家具の製作に取り組んでいる。2003年(平成15年)5月にはカフェも併設し「家具工房とカフェブーオ」としてオープンした。

そのほか近年における地区での出来事としては1993年(平成5年)に、地区老人クラブの30周年記念式典が行われた以外行事的なものは毎年行っている地区慰安会等しかなく、事業的なものとしても、農協自然公園の整備くらいのものである。

2004年(平成16年)と翌年の2年間で川西地区として農地集団化事業を行い実施面積1140㌶、移動率21・6%の農地移動を行った。

○近年の地区での主な出来事

平成5年
2月　北中老人クラブ30周年記念式典

平成10年
5月　ゲートボール場造成

平成11年
8月　7000人のまつり　北中地区あんどん優勝

平成13年
1月　中音更地区交流推進センター完成祝賀会

10月　北中音更小学校交通安全キャンペーン

平成14年
1月　農協女性部中音更支部35周年記念式典

平成18年
7月　北中寄席芸能公演会

11月　開校100周年看板設置

平成20年
4月　北中地域資源保全隊設立

6月　100周年記念大運動会

11月　北中音更小学校開校100周年記念式典

平成21年
5月　北中音更小学校開校100周年記念誌「教育開道」発行

10月　川西地区の3つのへき地保育所が統合となり、北中音更に川西へき地保育所「あおば」が開所

平成28年
1月　北中音更小学校閉校記念授業としてオリンピック銀メダリストの長島圭一郎が特別講師

2月　北中音更小学校閉校記念式典

3月　北中音更小学校最後の卒業式・修了式

◎中音更地区の人口(令和3年5月末現在)
76戸　167人(男　89人、女　78人)

6、新田地区

本町では最も遅くに開拓された同地区は、ヌプカウシ山麓の裾野まで広がり標高も高く、気象条件にも恵まれていないため不毛の地ともいわれてきた。

長い間、時折襲われる冷害凶作と悪戦苦闘を繰り返しながら営農が続けられてきたが、1958年(昭和33年)から始められた新田地区国営開拓事業による大がかりな開発と多くの入植者によって同地区は急速な変貌を遂げた。気象条件等から見て畑作に適さない同地区は開発によって町内の畜産基地を目指し、現在日本一といわれる肉牛生産の基礎をつくるとともに町内一の酪農地帯に押し上げた。

士幌高校の同地区への移転により農外人口の流入で地域活動も充実し、道道士幌然別湖線道路建設は残念

新田地区にある士幌高等学校

ながら実現出来なかったが高原開発は今後も進むものと見られ、町内最大の観光資源を有する同地区は、明るいものがある。

発展を続ける同地区は、２００１年(平成13年)に地区開基・新田小学校開校70周年を迎え、同年8月式典と祝賀会を開催した。２０１９年(平成31年)3月、児童数減少により新田小学校が閉校となった。

○近年の主な出来事

平成5年
1月　新栄、新田駐在区合併、新栄となる
2月　地区スケート大会、第20回記念大会
4月　ＪＡ新田事業所30周年記念事業として地区内全農家にカラマツ原木による統一門柱設置

平成6年
5月　北十勝ミニバレーボール大会１６０才の部優勝

平成9年
2月　ＪＡ士幌町青年部新田支部創立35周年記念式典
3月　町の保存樹コブ柏とのお別れ式
5月　保育所新築のため樹木伐採・移植
7月　学童保育所公民館に併設
12月　新田へき地保育所新築

平成10年
1月　農協女性部新田支部創立30周年記念式典

平成12年
5月　道の愛鳥モデル校となっている新田小学校で早朝探鳥会

平成13年
3月　士幌高校で初代トラクターを復元
8月　新田地区開基・新田小学校開校70周年記念式典
10月　新田小学校交通安全キャンペーン

平成14年
3月　雪中遠足レクレーション
9月　新田小学校にミニスクールミュージアム(博物館)

平成15年
9月　新田小学校「ふれあい参観日」
10月　14年ぶりに熊を駆除

平成17年
5月　新田地区地域活動で学校プールの塗装作業

平成19年
5月　新田小学校森林学習でシイタケ栽培
9月　新田小学校で「森の学校」開催

平成20年
7月　しほろ高原ヌプカの里で「シーニックカフェ」オープン
11月　新田小学校で複式校剣道少年団交流大会

平成21年
5月　新田小野生生物保護文部科学大臣奨励賞受賞

平成22年
2月　新田小管内教育実践表彰受賞

平成24年
11月　青年部新田支部創立50周年記念式典

平成28年
4月　愛鳥モデル校に再指定

平成29年
8月　新田地区公民館臨時総会(閉校の決定)
11月　新田小学校閉校事業協賛会設立

平成30年
4月　閉校協賛会看板設置
8月　かちまい花火大会招待

平成31年
2月　閉校式・思い出を語る会

◎新田地区の人口(令和3年5月末現在)
78戸　１８４人(男　１１０人、女　74人)

7、西上音更地区

西上音更地区は音更川から西へ山裾まで広がり、南は中音更、新田地区の境界から、北は上士幌町境界までの区域となっている。

西上サマーフェスティバル

かつては農家の経営規模も小さく、土地基盤、気象条件にも恵まれず、生産性の低い地域として苦難が続いた。しかし昭和40年代(１９６５年頃)に続いた離農現象で同地区の農家数は大幅に減少し、交換分合等を通じて地区に留まった農家の経営面積は拡大された。

更に山裾まで新規開発も進められ、一戸当たりの経営面積は町内的にも突出した規模となっている。

また規模拡大と併用して進められた国営土地改良事業や農業構造改善事業、酪農近代化事業などで基盤整備を図り生産力も大幅に引き上げた。

地区内農家の経営は畑作、酪農、肉牛経営の３つに分かれ、畑作では、本町主産の馬鈴しょの種子生産を受け持ち、町内馬鈴しょ生産農家へ供給している。

酪農、肉牛生産も町内の主要基地として経営されており特に肉牛は、町内一の

肉牛生産を誇っている。
　２００４年(平成16年)と翌年の２年間で川西地区として農地集団化事業を行い実施面積１１４０ヘクタール、移動率21・６％の農地移動を行った。
　地区の公共施設は西上音更小学校、へき地保育所、公民館(地区集落センター)とＪＡ事業所がほぼ中心に集まって機能しているが、へき地保育所を１９９４年(平成６年)に新築、小学校を１９９５年(平成７年)に改築している。
　小学校では翌年12月、外構工事等の完成を待って校舎落成記念式典・祝賀会を挙行、併せて新校門「こだまの像」の除幕式を行った。
　１９９３年(平成５年)10月８日西上地区に熊が出没した。２日前に足跡が見つけられ町の猟友会が捜索していたが８日に加納農場のデントコーン畑で見つかり、猟友会会員が射止めた。身長１７０センチメートル、体重１００キログラムで推定５歳ともいわれた。
　２００８年(平成20年)には、多くの関係各位の出席のもと盛大に西上音更地区開拓１００周年・西上音更小学校開校90周年・士幌町農協西上事業所開設45周年の記念事業が行われ、特別功労者の遠藤定雄氏と故加納一郎氏を始め73人に感謝状が贈られ、その後祝賀会が挙行された。
　１９７９年(昭和54年)４月の町議会議員選挙で初当選し、以来４期16年に亘り、士幌町議会議員として在職した、士幌町名誉町民、加納一郎が２０１０年(平成22年)５月に逝去した。公葬は士幌町葬「故加納一郎翁を偲んで」として５月29日士幌町コミュニティーセンターでしめやかに執り行われた。
　２０１８年(平成30年)12月に西上音更小学校の閉校式が児童、教職員や地域住民など約２００名が出席し開校から99年の歩みに別れを惜しんだ。
　２０１９年(令和元年)12月に西上地区運営協議会主催による西上音更小１００周年の集いが開催された。
　３月で閉校したが、１００周年を迎える年だったことと合わせ閉校した子どもたちや地区の交流する機会が少なくなることから開かれ親睦を深めていた。

○近年の地区での主な出来事

平成５年
　10月　熊を駆除
平成７年
　１月　西上へき地保育所新築
平成８年
　12月　西上音更小学校改築落成記念式典
平成10年
　２月　加納一郎氏「北海道農業貢献賞」受賞
平成13年
　１月　西上保育所でタイムカプセル・オープンセレモニー
平成14年
　１月　農協女性部西上支部設立35周年記念式典
　農協青年部西上支部設立40周年記念地区案内看板設置
平成18年
　３月　加納一郎氏名誉町民となる
平成17年
　３月　有限会社西上加納農場で国内最大級(50頭)のロータリーパーラーが搾乳開始
　７月　遠藤定雄が米寿を記念して士幌町に１０００万円寄付
平成20年
　３月　加納一郎が愛の町建設基金に１０００万円寄付
　12月　西上音更地区開拓１００周年・小学校開校90周年・西上事業所開設45周年記念式典
平成21年
　６月　西上音更地区開拓１００周年・小学校開校90周年・西上事業所開設45周年記念誌「続　流暉」～望郷夢百年　さらなる未来へ～発行
平成30年
　８月　西上音更小学校閉校事業西上サマーフェスティバル
　12月　西上音更小学校閉校式
平成31年
　３月　西上音更小学校最後の卒業式・修了式
令和元年
　12月　西上音更小学校開校１００周年の集い

◎西上地区の人口(令和３年５月末現在)
　85戸　２１４人(男　１１８人、女　96人)

8、士幌地区農村部

　同地区は士幌市街を取りまく士幌小学校下の農村部で市街地の南北に広がり畑作農業を主とした地域となっている。
　南北それぞれに公民館を置いて地域活動を行っている。
　ここ30年の主な出来事を見ると北地区では、１９９２年(平成４年)４月に北地

百戸開拓１００周年記念碑除幕式

区の駐在区が合併し、北一区(協進、相互、稔)と百戸(百戸、南百戸、北生、魁)にこれまでの平和を加えた3駐在区となった。同年6月に百戸地区戦没者慰霊碑を建立し除幕式を行った。

1993年(平成5年)には北地区全域で1000㌶に及ぶ農地交換分合を実施したほか、1998年(平成10年)には第八部落稲荷神社の80周年記念行事を行った。

2006年(平成18年)6月18日に、百戸が開拓されて100年を迎え盛大に記念事業が行われた。内容は、白山神社で開拓100周年を記念し、名誉町民の安村志朗が書いた「草創百年」の文字と地区全員(約150名)の名前を刻んだ記念碑の除幕式と、記念写真の撮影、式典と祝賀会が行われた。

2016年(平成28年)の台風により避難指示が発令された、結果として地区に被害は無かったが、音更川の堤防が一部損壊するなど、今後の防災活動の重要性が認識され、自主防災組織の結成につながった。

一方南地区では大きな動きはなかったが、1996年(平成8年)にJA青年部南支部が創立35周年を、また1997年(平成9年)にはJA女性部南支部が結成30周年を迎え、それぞれ記念式典を挙行したほか、1998年(平成10年)に士幌南と士幌西の両麦作組合が30周年記念行事を行っている。

2001年(平成13年)から3年間で士幌南地区として農地集団化事業を行い実施面積650㌶、移動率26・2%の農地移動を行った。2006年(平成18年)にJA青年部南支部が創立45周年を迎え記念式典を挙行したほか、2008年(平成20年)に士幌南麦作組合が40周年記念行事を行っている。

士幌南地区いきいきサロン開所式

1996年(平成8年)の敬老月間に行われた健康優良老人の選考で北地区の國井与平(当時86歳)が十勝の代表になったこと、1997年(平成9年)に同地区出身で百戸地区開拓の次の年に初めて同地で生まれた波多野銀市(当時90歳)が元気で長生きできている記念にと開拓当時から百戸地区にある白山神社に社標碑を寄贈したことのほか、同地区の在住で士幌農協名誉会長安村志朗が1994年(平成6年)に名誉町民の称号を受けたが2009年(平成21年)2月に逝去した。葬儀は、士幌町と士幌町農業協同組合の合同葬としてしめやかに執り行われた。

2015年(平成27年)6月に士幌町農業協同組合代表理事組合長に南地区の篠原末治氏が就任、2020年(令和2年)6月には、ホクレン会長に就任した。

○近年の地区での主な出来事

平成10年
9月　第八部落稲荷神社80周年記念祝賀会
平成11年
4月　第八部落稲荷神社80周年記念誌「北の礎」発行
平成12年
4月　町内南一区の畑にオオハクチョウ一時飛来
6月　百戸地区で見守り続けた最後の耕地防風林が切られた
8月　第25回農業機械士全国トラクタープラウ耕部で國井浩樹(北一区)全国3位
平成13年
12月　士幌北地区で一般救命講習会を開催
平成18年
6月　開拓100周年記念式典
平成19年
4月　百戸開拓100周年記念誌「百戸史」発行
平成20年
2月　士幌北地区で町内11番目のサロンを開所
平成22年
1月　士幌南地区で町内14番目のサロンを開所
平成28年
8月　度重なる台風により音更川の水位が上昇、北地区の住民は集落センターとコミセンに避難
JA青年部
南支部創立55周年
JA女性部
南支部創立60周年
平成30年
1月　北地区麦作組合創立50周年事業挙行
士幌南麦作
組合50周年
士幌西麦作
組合50周年
令和元年
1月　北地区防災会の結成・届出

◎士幌地区農村部の人口(令和3年5月現在)
士幌南　124戸　400人(男　210人、女　190人)
士幌北　97戸　282人(男　137人、女　145人)

9、士幌市街

国道274号、道道士幌

上空から見る士幌市街地

停車場線の拡幅整備事業と連動して進められた商店街近代化事業により町並みが一新され表通りで昔の面影を見るのは難しい。

同近代化事業で沿線の商店、住宅等はほとんど改築、移転等を行い新しい町並みの中で営業、生活が営まれている。商工業活動にも大きな変化が見られ、廃業した店、新しく開業した店、また業種転換した人など数多く見られる。

道路拡幅により移転改築したＪＡしほろ「アスポ」店には、大口薬局、松井時計店と光クリーニングの取次店がテナントとして新たに入居し北嶋家具店がアスポに併設して建てられ、複合店舗となっている。

宅地分譲による住宅の団地化が進み、１９９３年(平成5年)に常盤団地(31区画)、１９９７年(平成９年)には常盤第2団地(29区画)が造成されたが、住宅用地の要望が高まり２００４年(平成16年)からゆうすい1期(９区画)翌年ゆうすい2期(12区画)２００７年(平成19年)いこい2期(６区画)などが造成されマイホーム建設が促進されている。近年は、３区画から９区画など小規模な造成となっている。また公営住宅の改築が進み大通団地は近代的な団地に生まれ変わった。

１９９４年(平成６年)2月士幌南団地町内会が創跡10周年記念誌「知」(知は愛であり知は力である)を発行した。

１９８２年(昭和57年)に団地が造成され分譲を受けて一定の人が入居後町内会を設立したもので、その後の第2団地と南公住の入居世帯合わせて約１００戸のマンモス町内会となった。

町内会の10年の足跡や地域内の人々の活躍などが記されているが、町内会単位での記念誌発行はめずらしい。

士幌市街地区では東西南北を概ね４つに分けて地区公民館を設置し住民活動を行っているが、夏祭り、スポーツ大会、研修会、環境ボランティア等、それぞれ独自の地域活動を積極的に行っている。

士幌小学校と共に士幌市街地のシンボルでもあった同校校庭のしだれ柳が１９９８年(平成10年)９月の台風５号で損傷し、多くの町民に親しまれてきた名木であったがやむを得ず撤去、何とかこの木の子孫を残そうと、向井察光(高徳)が2本の枝を自宅に持ち帰り挿し木にして根を付け、そのうちの1本が、グランドの東側に根付き校舎を見守っている。

役場南側のスズラン畑の隣に、新たに大きな花壇が作成され、ボランティアによる整備が進められている。また、花壇周辺には北斗運輸の協力で木のチップが敷き詰められ、今までと違った雰囲気の花壇となった。

士幌町の公共施設の大きなものは大半が市街地に集中しているが近年建設された主なものをあげると、町立国保病院、総合福祉センター、特別養護老人ホーム、がある。

士幌市街地は、商店街、住宅団地、軽工業団地、農協工場群、文教ゾーンに、福祉ゾーンが加わり新たな町並みができつつある。

２０１９年(令和元年)に西町地域交通安全塔が老朽のため撤去された。この交通安全塔は、１９８６年(昭和61年)3月に旧公民館取り壊しに伴い、前庭にあった交通安全塔を西町地区に移設し約34年間町民の交通安全啓蒙に寄与してきたものであった。

◎士幌市街地の人口(令和3年5月末現在)

北町
５７２戸　１０５４人
(男５３４人、女５２０人)

中町
２９０戸　５５２人
(男２５４人、女２９８人)

南町
４５８戸　９００人
(男４３４人、女４６６人)

西町
２３０戸　４８１人
(男２３７人、女２４４人)

特老
97戸　97人
(男32人、女65人)

愛風苑
34戸　37人
(男10人、女27人)

第二章　町の話題・こぼれ話

この章は、開基(開町)70周年記念事業で発行した「続士幌のあゆみ」以降、広報しほろ、新聞等で取り上げられた町内の話題、こぼれ話などを取り上げた。(※掲載時の名称・呼称を使用している。)

花壇と庭木の珍現象・二題

１９９１年(平成３年)町内松室の神野清一(故人当時80歳)ひさお(当時70歳)夫妻の花畑でユリの茎１本に50以上の花が咲いた。

４年ほど前からショウブの花と一緒にユリも植えていたが例年なら１つの茎に咲く花は10から12個くらいということでこの現象にびっくりしていた。しかも多くの花を咲かせた茎が２茎あり、花を数えるとそれぞれ53個と数まで同じで２度びっくり、この夏の異常な天気のせいか？帯広市内の園芸業者によると、ユリの種類によっては、花の多いのはあるが50を超えるというのは珍しいケースとのこと。

一方士幌市街のお寺、聖教寺の庭では同年夏の始め、珍しい白色の下がり藤が開花、近所の話題となった。

この「下がり藤」の木は35年ほど前に壇家から寄贈されたもので４㍍ほどの高さに成長しているが、これまでに花をつけたことはなくこの年が初めてでしかも白い花というオマケつき。普通「下がり藤」といえば紫色が一般的で白い花をつけるのは珍しいという。満開時には多くの人が足を運び、目を楽しませていたという。

憲法副読本全戸配布

士幌町では１９４７年(昭和22年)に文部省が配布した中学生用副読本「あたらしい憲法の話」を町内全戸に配布した。１９９２年(平成４年)の憲法記念日(５月３日)を前に配布したもので平和団体による復刻版である。

士幌町は「平和宣言のマチ」であり以前から広報などを通して憲法の精神を広めてきたが、より分かりやすく書かれたものとし評価、「身近に読んで役立ててもらいたい」と全戸配布した。

この副読本は朝鮮戦争が始まり、日米安保条約が結ばれるなど時代の影響で2、3年後に姿を消した。

士幌町での全戸配布は新聞等で報道され反響を呼び道内をはじめ本州や九州からも多くの問い合わせがあった。

古くて新しい話

南団地在住の木谷隆彦が西南戦争以前に発行された明治４年鹿児島藩蔵版「鼈頭増補(ごうとうぞうほ)字林玉篇大全」という漢和辞書を所有していた。

明治時代にはこの他にいくつかの「字林玉篇」が発行され普及していたらしいが、この辞書を見た大谷短期大学の鈴木淳一学長の話によると、明治４年に鹿児島藩独自で発行し、主として造士館の学生が使う辞書であったと思われるとのこと。

発行には漢学者や武士が関与していたと考えられ、その目的は武術とともに難しい漢字の読み書きができ

る優秀な武士を養成するためにあったようだ。同じものが国立図書館には保管されているが、他にはあまり無いとみている。

造士館とは1773年(安永2年)藩主島津重豪が創設した鹿児島藩校で薩摩藩校ともいわれていた。幕府の和・漢書の他に洋学を鼓吹。1901年(明治34年)には第七高等学校造士館となり官立に移管されている。

漢字の読み方や意味を調べるには、漢字の画数や部首により辞書を引き出すが、古くからある複雑な漢字に増し加えをし、異体字、重複字など漢詩を作ったり解読したりする際の規定、そして音律上の調和を目的とした平字、仄字の配列、平仄(ひょうそく)など専門的規定に基づいて掲載されている。従って漢字の移り変わりや多様な意味を掘り起こして知るためには貴重な資料であり現在では珍しいものとされている。

木谷がこの辞書を入手したのは、1972年(昭和47年)頃、兵庫県三田市で骨董品などを並べた古道具店の店先に置いてあるのを見つけ、当時1000円で買い求めたとのことである。

長い間自宅の書架で眠っていたが1992年(平成4年)5月25日付けの十勝毎日新聞に帯広市内の住民阿部新三の自宅から明治16年発行の漢和辞典が見つかったという記事が載り、これを読んで家にもこの辞書に似たものがあるはずと探してみたところ帯広で見つかったものより古い辞書であることが判明した。物は古いが、新しい話である。

辞書の奥付の下部に、昔これを所持していた人と思われるサインが次のように記されており、木谷はこの書物の持主のルーツに探りを入れてみようと調査したところ京都府福知山市内または綾部市内の地名でないかというところまで調べ上げたがその子孫の存在は不明とのことである。(1992・8月広報)

・辞書奥付下部のサイン
「天田郡二区竹原村　大槻竹造　明治十年」

長寿全道一逝く

3年連続長寿全道一の記録を残し、纐纈きよのが1993年(平成5年)1月6日天寿を全うした享年109歳であった。

故人は1883年(明治16年)宮城県で生まれたが、生家は代々仙台藩士で父斉藤保は槍(やり)の使い手で農家になった頃雑穀の叺(かます)入りを高く積み上げるのに槍の先で投げ上げたという話が残っている。

明治維新で没落し、その後北海道開拓を志し、一家を挙げて音更の原野に入ったが1903年(明治39年)に纐纈泰治郎と結婚、中音更(現在の新橋の西)の最初の入植者の1人として開墾を始めた。

長寿全道一の纐纈きよのさん

厳しい開墾生活を続けながら四男四女を産み育てたが海軍に志願した二男富美男が1944年(昭和19年)に戦死、更に一家の柱となっていた長男静男が妻子を残して出征、留守中に夫泰治郎が死去、樺太抑留中の長男静男が軍務が因で発病、帰還後療養を続けてきたが1949年自宅で病戦死するという悲運が重なった。

その後は5人の遺児を抱えた静男の妻富子と老境に向かうきよのの女手だけの苦闘の生活を続けてきたが、長男の妻富子は1974年(昭和49年)に離農、1977年にはきよのが脳梗塞に倒れ、半年入院後に特別養護老人ホームに入った。全身不随の体ながら寮母達から「百バァちゃん」と大事にされ1990年(平成2年)に106才で長寿全道一となった。

一世紀余のきよのの波乱の生涯は、日本の時代の象徴であり士幌の開拓の歴史でもあった。

UFO出現

町で制作したPRビデオ「住んでよい町・訪ねてよい町・士幌町」の中にUFOらしい未確認飛行物体が写っているのを、制作を担当した北海道映像記録㈱がビデオの編集中に偶然発見、新聞やテレビで大反響となった。

このビデオは、町が企業誘致や都市間交流の活性化などを目的に制作を依頼したもので1992年(平成4年)8月23日に撮影した時にはこの物体に全然気付いていなかった。

この「UFO」らしき物体に気が付いたのは編集終了間際の10月初めで、その後、新聞やテレビで大反響となり、中でも日本テレビ朝の番組「ルックルックこんにちは」では約10分間にわたり放映され、士幌町が全国に紹介された。この反響に応えて町は、UFOの出現シーンをアップで再編集し「士幌高原にUFO?」のタイトルで限定50本用意し一般にあっせんしたが瞬く間に売り切れるという人気で

あった。町では更に追加注文して対応したが、全国のＵＦＯマニアなどからの引き合いも多く、思わぬＰＲ効果で所期の目的を達成した。町ではＰＲビデオでＵＦＯを撮影した士幌高原「ロッジ・ヌプカ」の前にＵＦＯ看板を設置した。（現在は撤去されている。）（１９９２・12月広報）

陸上競技強化合宿

１９９２年（平成４年）８月10日、室蘭大谷高校、札幌稲雲高校、青森県野辺地高校、名久井農業高校の陸上部が10月に帯広の森で開催される全道高校駅伝のコース下見を目的に、下居辺緑風荘で合同合宿を行った。

室蘭大谷高陸上部に下居辺の飯島勝の長男智人（同校３年生）が在籍しているのを縁に士幌町での合宿となったもので一行78人の選手団は当日の受入式で地区を挙げての歓迎を受けた。

特に室蘭大谷高はこの時点まで既に全国高校駅伝大会に７年連続出場を果たしている強豪で同校の工藤裕行監督は、受入式の謝辞で「全国で活躍できるようトレーニングに励みたい」と述べた。

強化合宿は下居辺地区を中心に一日30～40キロの走り込みをメインに５日間組まれ、この間に全道高校駅伝の会場となる帯広の森～八千代牧場のコース下見も行った。

また下居辺が毎年お盆の地区行事として行っている下居辺親子健康マラソン（８月14日）に室蘭大谷高、札幌の稲雲高の生徒40人も特別参加し同行事を盛り上げた。

ＪＩＣＡと交流

ＪＩＣＡ（国際協力事業団）の研修で十勝を訪れたマレーシアの訪問団が１９９３年（平成５年）９月３日、士幌高原「ロッジ・ヌプカ」で町民たちと交流を深めた。

この交流は今回で２度目。今回はマレーシアの行政や社会福祉関係などに携わる25人が来町し、町からは福祉関係、特別養護老人ホーム、保育所などから１００人が参加。マレーシア料理を食べたり、日本の歌や「ひょっとこ踊り」が披露されるなど、会場は大いに盛り上がり十勝滞在の大きな思い出になったようだ。

元職員の遺品

１９９３年（平成５年）９月、札幌市在住の湯沢正子が父親（故中川栄作）の遺品を手に士幌町を訪れた。

（故）中川栄作は１９３７年（昭和12年）～１９４１年（昭和16年）頃にかけて建築技師として十勝支庁から辞令を受け士幌村職員として勤務していた。（戦前二級町村だった士幌村の村長と現在の課長職に当たる職員は道の職員）

在職中は士幌神社、士幌村診療所などの設計をはじめ、上士幌神社の設計も手がけていた。その後一年間新得町で勤務し北竜町の収入役を勤めていた。

この度「父の遺品を整理していたら士幌在住当時の書類などが保管されていた」と主人とともに持参し寄贈された。

寄贈された遺品は、

▽写真集　つは（わ）ものの郷

出征兵士へ家族がどうなっているか知らせるため「安心して働いて下さい」と慰問袋の中に入れて戦地へ送られた貴重な写真集。１９３７年（昭和13年）頃から約１年余りかけて中川らが作成にあたり、出征兵士本人と各家族との写真（２１８家族）が収録されている。

▽士幌神社設計図　４点

▽士幌診療所設計図　３点

▽士幌村教員住宅設計図　１点

▽居辺川沿道路災害復旧工事設計図　１点

▽上士幌神社設計図　１点

▽（故）中川栄作の辞令書　10点

町では寄贈された遺品を総合研修センターの資料館で展示品として大事に保管し残すことにした。

５・３メートルののり巻き

特別養護老人ホームでは、毎年施設内行事を多くもち、単調になりがちな入所者の生活に変化を与え、生きる喜びと希望の湧くホーム生活となるような取り組みに力を入れているが、毎年10月は「お好み食堂」開店の月としている。10月20日前後の１日間だけ開店する同食堂は、施設の職員にボランティアが加わり特定のメニューによる料理を提供するもので、普段はあまり量を摂らないお年寄りたちもこの日ばかりは食欲旺盛で楽しい一時を過ごしている。

１９９３年（平成５年）の「お好み食堂」では、３・３㍍もある長い巻き寿司が作られお年寄りを驚かせたが、翌年は４・８㍍、更に次の年10月20日開店の「お好み食堂」では、前年の記録よりも50センチ㍍長い５・３㍍の「巻き寿司」が登場、会場のお年寄りから大きな拍手がわき起こった。

ラウンジに特設のカウンターを設け、のれんを掛け

てムードを演出、集まったお年寄りの前でスタッフが横一列となって一斉に巻き上げた「太巻き」。輪切りにして生寿司と盛り合わされお年寄りのもとへ運ばれた。味も良く、お年寄りたちは、美味しそうに食事を楽しんでいた。

森田健作元旦を走る

今は衆議院議員となっている森田健作、かつてはタレントとしてテレビ出演も多く若い人たちの人気の的であったが1995年(平成7年)1月1日テレビ生放送のため来町した。

正月番組として元旦早朝の全国各地の模様を伝える「列島一番まっしぐらワイド」の中で北海道からは、十勝の大地を走る耐寒マラソンとして紹介するもので、この日は森田健作がなまくら会と剣道少年団の子供たちと一緒に寒さの中を15キロ(グラム)の防具をつけて走る想定で撮影された。場所は吉野地区国道274号線の短い区間で行われ数分間ではあったが全国に生中継された。

中継終了後総合研修センターの武道館で剣道少年団の子供たちを勇気づけ、記念撮影やサイン会が開かれた。(1995・2月広報)

大正時代の十勝地図

今から80年以上も前に作られた十勝の地図が町内のお寺で発見された。

この地図は1915年(大正4年)に発行された縦180センチ、横120センチと大きなもので、上部に右から「十勝國全圖」と記され十勝全域の昔の地名や当時の市街地、河川などが克明に印されている。

地図が発見されたのは、大通りにある「實相寺」(住職仲島信正)で、1994年(平成6年)お寺の会館改築のため取り壊した旧事務所に保存されていたのを同事務所内整理中に見つけたものである。

縮尺十万分の一のこの地図は、折り畳んで保管してあったが傷みがひどかったため同寺では表具職人に手直しを依頼し、表装の上特製の額に入れて士幌町へ寄贈した。

町では、古い十勝の地名や川の流れなど当時の地理状況を多くの人に見てもらおうと総合研修センターロビーで公開のあと資料館に移して展示、子供たちの学習教材として活用することにした。(1995年12月27日勝毎)

5月の大雪

1996年(平成8年)5月、十勝一帯に大雪が降った。

5月の降雪量としては観測史上最高となった大雪は9日から10日にかけ降り続け、中札内で20センチの降雪、帯広では桜が開花直後で木の枝に雪が積もり、本町では移植したばかりのビートがすっぽり雪を被ってしまった。

街の中では既に物置にしまわれていた除雪用具を取り出しての雪かきが各地で見られた。

5月の雪は1回に終わらず、16日再び降雪に見舞われた。

今度は中士幌神社の桜が咲き始めた時で、桜の木も雪化粧・・・古くから住むお年寄りは、「こんなこと初めて」と驚いていた。

ちなみにこの年は、低温続きとその後の多雨、日照不足が重なり、各作物に異常な冷湿害をもたらす凶作年となった。

ケアハウス米国で紹介

アメリカのニューヨーク周辺に居住している日本人約10万人を対象に発行している情報誌「OCSNEWS」(1997年1月31日発行)の表紙に士幌町ケアハウスの入所者が掲載された。

表紙に使われた写真は、同誌発行日の2年ほど前に十勝毎日新聞が撮影したもので、高徳の東村達夫(当時農協職員)がアメリカで仕事をしている息子を訪ねた折に入手し持ち帰り、町広報係に提供した。

高原での結婚式

1998年(平成10年)5月3日、士幌高原で初の結婚式が行われた。

新郎新婦は2人とも道外生まれだが士幌町緑光に在住する森山龍児と北島亜希子。当日、天候はくもりだったが、前日から降り続いた雨も上がり、両親をはじめ百人が祝う心温まる結婚式となった。

士幌高原へは2人でよくバイクに乗って来るという新郎新婦、当日の花嫁は父親の運転するオートバイでの入場となった。

高原の景色がとても気に入っている2人、できれば長く士幌町に住みたいとのこと…。

アウトドアが好きで「屋外で挙式したい」という2人に町が会場、テント、テーブルなどを無償提供して実現した。(1998・6月広報)

ひょうたんで全道一

長い間ジャンボカボチャを育て各地のコンテストで優秀な成績を挙げてきた南旭区の大野憲光が「ひょうたん」作りに挑戦した。

独学で取り組んでから3年目の1996年(平成8年)10月上砂川町で行われ

た「第７回全道ひょうたんコンクール」に初出品。大型賞の部で見事最優秀賞を受賞した。

この入賞で種や苗を分けてほしいという人も続出、翌年はかつてジャンボカボチャ作りの仲間だった開運の波多野達夫に苗を贈り、それぞれ仕上がった作品を再度全道コンクールに出品したところ、大きさを競う部で大野が２年連続最優秀賞、波多野が優秀賞と全道１、２位を独占する快挙となった。

大野は沢山出来る「ひょうたん」に自ら字や絵模様を描いた置物を制作、文化祭などに出品するほか、町内の公共施設や各職場に陳列し多くの人の目を楽しませている。（１９９７年10月９日勝毎）

牛乳パックの棺桶

町内平原に住む塚原太が牛乳パックを使った棺桶を作り、新聞、テレビ、週刊誌などで話題となった。昔、大工の仕事にも携わったことのある塚原は、ベニヤ板で外枠を作り、これに約２０００個の牛乳パックを、柄を揃えて張り付け仕上げた本人等身大のものである。

牛乳パックは多くの人の協力を得て集め約１年がかりで作成した。

遊び心で作った棺桶だが、普段元気な本人が使うことは当分なさそうだ。（１９９８年７月15日道新）

冬虫夏草

長い間町の森林組合に勤め山林調査などの仕事をしていた平原在住の津田浩治は、退職後も山歩きを続け、山草の研究、特に「キノコ」の生態調査に力を入れ十勝管内を中心に活動を続け写真展など開いていたが、１９９７年(平成９年)に珍しいキノコ「冬虫夏草」の新種を相次いで発見した。

冬虫夏草とは、昆虫やクモ類などの虫、ツチダンゴといった菌に寄生してできるキノコで世界では４００種、日本で約３００種余りが記録されている。

津田が最初に発見した新種は、芽室町内の森の中でツチダンゴに生ずる菌生冬虫夏草であった。

かつて黒岳で発見された「エゾタンポダケ」に似ているが「どこか違う」と思い、冬虫夏草の世界的権威で日本冬虫夏草の会会長の清水大典(山形県米沢市在住)に標本を送ったところ新種であることが判明「トカチエゾタンポダケ」と命名された。津田はその後も、足寄町内オンネトー湖畔、鹿追町然別湖周辺でも新種を見つけ、この年だけで４つの新しい冬虫夏草を発見した。

また新種ではないが、これまで恵庭市が最北地といわれてきたセミの背に冬虫夏草が寄生する「エニワセミタケ」を町内の創造の森で見つけ役場に持参して見せた。

１９９８年(平成10年)11月ＮＨＫ(帯広)ギャラリーで津田が撮影した冬虫夏草の写真展が開かれ、写真約60点とアルコール漬けした標本30点が展示された。

２０００年問題

１９９９年から２０００年に移った瞬間コンピューターが誤作動し混乱が起こる可能性があると騒がれたのが「コンピューター西暦２０００年問題」である。

データの処理能力が高くなかった頃のコンピューターは、西暦の上二桁を省略し、下二桁だけで年数を扱い、例えば１９９９年なら99としていた。これはコンピューターのメモリーを少しでも節約するための措置で、技術的にその必要が無くなった今でも一部のコンピューターやソフトウェアにはこうしたプログラムが残っていた。

２桁で年を表示するコンピューターの場合、２０００年を迎えると「00」となり前年の「99」と逆転し「00」を１９００年と認識したり混乱してストップするなどさまざまなトラブルを起こす可能性があると問題視し、世界中がその対応に追われた。

国内では金融、エネルギー、情報通信、交通、医療など社会経済活動上重要な分野で、システム変更や、模擬テストの実施などの総点検が行われ、士幌町においても住民登録や住民税、財務会計などの業務をコンピューターで行っており、１９９９年(平成11年)３月までに政府の行動計画に準じて保有するシステムの修正および模擬テストを終了させた。更に万一不測の事態が生じた場合でも速やかに対応を講じ、住民生活に影響が生じないようにするため危機管理計画を策定し不測の事態に備えると共に、大晦日から元旦にかけては、関係職員を役場庁舎や関係部署、自宅に待機させ事態を見守ったが、何事もなく２０００年を迎えることができた。

全国的には、金融、医療関係などでトラブル発生があったが数は少なかった。（１９９９年・11月広報）

子ども模擬議会

士幌町では２０００年(平成12年)10月１日から情報公開をスタートさせたが、このことを記念し、合わせて広く町民の声を反映させ

る町民参加型まちづくり推進の1つとして将来の士幌町を担う児童の意見や要望などを開くとともに、郷土士幌町のまちづくりに対する児童の思いを高め、役場の仕組みや役割の理解を深めることを目的に子ども議会を開催した。

模擬議会は同年10月10日、町内各小学校(8校)から2人ずつ選出された16人の議員が出席し開かれ、議長は士幌小学校6年の安村陽子と早坂麻里が交替で努めた。

各議員の紹介と町長の挨拶の後9時30分にブザーとともに全員起立し、議長が開会の宣言をして一般質問を開始した。

質問は1人1問で前半8人休憩を挟んで後半8人が質問に立ち、「温水プールが欲しいが、作る計画はないか」「地区での子どもの遊び場を設置して欲しい」や「図書館の運営の充実や入館時間の延長」など子どもたちの身近な要望から、「町議会のしくみと町民の要望の受け方」「ゴミ問題」「悪臭問題」など本物の議会でも取り上げられるような意見、要望も多く将来の士幌町に明るい展望をもたらした。

質問には小林町長が1問1問丁寧に答え、午前11時30分に終了した。

傍聴席には各小学校の高学年の児童がいっぱいつめかけ、前半と後半に入れ替えての対応となった。

(2000年・11月広報)

考案・開発二題

2000年(平成12年)7月、町内軽工業団地で主に酪農用機械等の製作を行う北洋機販総業(村上英嗣社長)が、写真の現像液や定着液の使用済み廃液処理について太陽熱とおがくずを活用した処理施設を開発した。

これまでの処理方法は、薬品を使って廃液を中和、希釈し、ろ過により廃液を地下浸透させる方法がとられていたが、今回開発された処理施設は透明なプラスチックハウスで床はコンクリートプールとし、そこにおがくずを敷きつめ、中に廃液を流して太陽熱とモーターによるかくはんで水分を蒸発、液中の固形物はおがくずに付着させるシステムとなっている。

設計から完成まで3年かけた手作りのこの施設は、これまでのシステムに比べ、低コストで安全性も高く、関係者も注目している。(2000年7月26日新聞)

同じ年町内で営業する士幌鉄工㈱(曽我廣社長)は、日本ビート糖業協会、太平洋セメント、道工業大学、道立工業試験場と共同研究していた新たな舗装材を開発、実用試験を行った。

開発された舗装材は、ビートの精糖過程で出る廃棄物、ライムケーキ(石灰汚泥)を利用した農畜産用低強度コンクリートで砂利を使用せず短期間施行とコストも低く、更に年間大量に出るライムケーキの処分にも役立つことになる。

利用されるのは主に牛舎パドックや畑の土場で、これまでのコンクリートでは強度が高すぎ、ふん尿によって牛が足を滑らせてけがをすることもあったが、ライムケーキを利用することによって強度を調整することができる。

士幌鉄工など研究グループは、網走管内置戸町内の牧場で実用規模での試験施行を行い一般公開したが問題はなく利用できることが確認された。

道内各地でも高い関心が示され、士幌鉄工には各地から多くの受注があるという。(2000年11月3日新聞)

パソコンで士幌市街図

町内大通在住の平田可人(平田建設会長)が、昭和初期から現在に至る士幌市街地の変遷ぶりを表したマップを、コンピューターを使って作製した。

町内の友人等数人で長老たちのかすかな記憶と古い資料をもとに調べあげたもので古い時代を知っている人が年々減っていく中、中士幌の「寺町」鳥かん図とともに貴重なものとなる。

平田はパソコンの初心者講習を受け勉強中であったがキーボードの扱いにも慣れ、もっと機能を使えるようにと、町並み図の作製を思い立ったとのこと。

町並み図変遷の一部は文芸誌「ぬぷか」20号(平成12年発行)でこの調査に加わった町内高徳在住の山内敏によって紹介されている。(2000年4月12日新聞)

士幌4Hクラブの歌

士幌町出身で現在音更町木野に住む小椋民子(旧姓後藤)が34年前に28歳で亡くなった実兄後藤文雄が生前に作詞した「士幌町4Hクラブの歌」をテープに再現した。

当時、士幌町が農業青年団体の士幌4Hクラブの歌を作るため歌詞を募集していて、高校を出たばかりの後藤文雄の作品が選ばれ、曲も付けられて、農業青年の行事などでよく歌われていた。

小椋も自然と覚えていたが年数とともに歌詞は忘れていた。ある時兄の作った歌のあることを思い出し、何とか手に入れたいと長い間かけて兄の友人たちに当

たって5番までの歌詞すべてを見つけることはできたが、楽譜は探し出せなかった。(当時レコード等にはされていなかった。)

そのため自分流に覚えているメロディを譜面にするしかないと考え、音更町内にある音楽事務所の協力を得て譜面を作り、前奏、間奏も付けてもらい、同事務所でカラオケを習う人と小椋の2人で歌をテープに吹き込み、歌詞カードやテープを包む箱も作製して兄の友人や親戚に配った。

箱には兄の顔写真や士幌の農村風景の写真が印刷されている。

なお、この歌の作曲者は判っていない。(2000年4月3日新聞)

てん菜研究会40年で幕

今では士幌農業畑作の主要作目の1つとなっているてん菜(ビート)も昭和30年代は、耕作戸数こそ多かった(今の2・5倍)が作付面積は5分の1以下、単位当たりの収穫量も現在の半分以下のレベルであった。

1961年(昭和36年)ホクレンが十勝清水に製糖工場建設の認可を受け、翌年工場建設で総業開始とともにこれまで日甜帯広工場に出荷していた士幌のビートが、ホクレン清水工場に出荷することになり士幌にも原料事務所が設置された。

その頃から農業経営にも変化の兆しが現れはじめ、後の規模拡大、共同化へと進むが、町内でも先を見込んだ農村青年の有志が集まり、1961年(昭和36年)に「共同化研究会」を発足させ、また士幌農協にも青年部が誕生するなど新しい農業経営の研究が進められていた。

ホクレン製糖工場士幌原料所の初代所長に就任した(故)赤松静哉は、士幌でのてん菜の普及と栽培技術の向上を図るため農家の指導に当たっていたが、グループ組織「共同化研究会」と接触する機会に恵まれ、活発に話し合っているうちに、「てん菜研究会」を創ろうということになり当時の共同化研究会の名称を改名して所属していた会員22名全員で「士幌町てん菜研究会」を発足させた。

以降現在まで40年間、士幌原料所長が代わっても、事務局は引き継がれ今日まで、てん菜栽培に係るグループ研究が続けられてきた。この間研究成果を農業研究グループ発表会等で披露し試験結果を実栽培の中へ普及させるなど大きな役割を果たしてきた。

この活動成果が認められ、関係筋からの表彰等も数度に及ぶ。

本会への新たな会員は増やさず、会員の後継者年代層には別のグループ(みのり会など)をつくらせ、ともにてん菜栽培技術開発普及に励んできたが、会員も40年の間に死亡、離農等で減少し現会員は4人となった。

今回、会創立40周年を迎えるにあたり、1つの目的は達成した、後は2世代がつくるグループに託して会を閉じようということになり、2000年(平成12年)12月9日、十勝川温泉で創立40周年記念式典を挙行し、同時にこの会の幕をひくことになった。

式典には現会員が夫婦で揃って出席のほか、来賓として士幌町長、JA士幌町組合長、歴代の原料所長、事務局など40人程が集まり、40年間の思い出話に花を咲かせていた。グループ組織が40年も休まず活動を続けるのは極めて珍しいことである。

士幌町てん菜研究会の初代会長は、野曽原孟が務めていたが、その後2~3人に引き継がれ後半20年以上は今田鉄郎(前町議会議長)が会長の職にあった。(てん菜研究会創立40周年記念式典次第から)

女性模擬議会

広く町民皆さんの声を反映させる町民参加型の町づくりの一環として2002年(平成14年)7月15日、役場3階の議場において初の女性模擬議会が行われた。

議員は、本町の議員定数(16人)に基づき、町内8団体から16人が選出され、15問の一般質問が提出され、女性ならではの感性や鋭い再質問に町側もあわてる場面が見られるなど、本議会そのもののようであった。

質問は「行政組織の見直しについて」「士幌町の知名度について」「課外活動の環境整備について」「保育所・幼稚園の統廃合について」「男女平等参画について」「士幌マップの設置とイベント時のごみポスト無設置について」「通学路となる国道に信号機を設置することについて」「2年後のサッカー場建設について」「グループホームの開設について」「ホームヘルパーさんと活用について」「BSE問題に関わる馬鈴薯の消費低迷について」「通園・通学バスの運行について」「ゴミの収集について」「高齢者への給食事業のあり方について」「ゴミ問題について」と多岐にわたり、政策推進に役立つものであった。(2002・8月広報)

全日本女子柔道強化合宿

アテネ五輪に向けた全日

本女子柔道の強化合宿が5月31日から6月5日までの6日間、総合研修センターすこやか体育館を会場に開かれました。

5月31日、ヤワラちゃんこと谷亮子選手ら日本代表選手7人を含む総勢80人の方が、総合研修センターに到着。選手の皆さんは、移動の疲れも見せることなく、早速練習に汗を流していました。

午後7時からは、歓迎レセプションが行われ、実行委員会の小松繁雄氏から「全員がアテネ五輪で日の丸を上げられるよう精いっぱい頑張ってください。期待しています」と激励のあいさつがあり、谷亮子選手からは、「シドニーに続き金メダルを取りたい」と力強い決意が聞かれ、場内から拍手が起こってしました。

アトラクションでは、地元のＹＯＳＡＫＯＩチームが力強い踊りを披露し、会場を盛り上げていました。また、選手の皆さんは、しほろ牛のたたきや七面鳥のから揚げなど士幌の特産品も並ぶ食事に、舌鼓を打ち楽しいひとときを過ごされていました。

6月2日、全日本女子柔道強化合宿コーチの山口香さんの講演会が「生きる力を育む～アテネオリンピック強化の現場から～」と題して総合研修センターふれあいホールで行われました。

集まった約２００人の町民の方が、山口さんのユーモアあふれる話に聞き入り、会場は笑い声が絶えないなごやかな雰囲気。

山口さんは、6歳から柔道を始められ、１９７８年から全日本女子柔道選手権で連覇。１９８０年の第1回世界女子柔道選手権大会で銀メダル、１９８４年の世界女子柔道選手権で日本女子として初めて金メダルを獲得。１９８８年にはソウル五輪の銅メダリストとなりました。

これらの結果は、日々の努力や目標があってこそ。勝負の強さに重要なのは、プレッシャーではなく「やればできる」という気持ち。どんな状況におかれても、やる気を持ちプラス思考で望むことの大切さを、また、オリンピックに出たことだけではなく、自分の人生経験から自分の中に積み上げた自信は、誰にも奪われるものではないし、減るものでもないと強く話されました。

6月4日、午後5時30分から総研すこやか体育館で、全日本女子柔道強化合宿のメンバーが講師となり、柔道教室が行われました。士幌町柔道少年団35人をはじめ、上士幌町、音更町からも参加があり、約80人が一流の「技」にふれ真剣な表情。子供たちは、準備運動を行った後、大外刈り、背負い投げ、大内刈りのグループに別れて指導を受けていました。

オリンピック代表の谷亮子選手などの模範演技も披露され、子どもたちから技の速さに「ワォー」と歓声が上がっていました。

同日には、古賀稔彦、山口香両コーチが愛風苑を訪れ、入居されている皆さんとのふれあいの時間が持たれました。

両コーチから「今年はアテネオリンピックの年です。全日本女子柔道の選手達をぜひ応援してください」とあいさつがあり、皆さんと記念撮影。握手を求めて「感激です」とおっしゃる入居者の方に、「いつまでもお元気でいてくださいね」と言葉がかけられていました。（２００４年・7月広報）

苦労が実り「瑞宝単光章」統計調査に60年

高砂の河野富剛は永年国勢調査員として従事した功績が認められ「瑞宝単光章」を受章した。

きっかけは、父親が調査員として調査に携わっていたものを継続して担い、気が付けば実に60年に渡っての調査員生活になっていた。

士幌町に入植したきっかけは、父親が北海道未開地処分法が出た時に開拓を志し、１９２５年（大正14年）4月25日に千葉県成東町（旧緑海村）から現在の高砂に開拓移民として入植、入植の条件として5年後に7㌶（ヘクタール）の土地を畑に開墾することが義務づけられ、検査で認められると無償で与えられる制度で、現在のように機械も無く、人の手による開墾はとても厳しいものだった。

当時、高砂は池田町に属しており、下居辺小学校の児童が１００人以上いてにぎやかで、選挙の時は、高島まで1日がかりで歩いて投票にいった。

調査を始めた昭和20年ころは、道路もあまり整備されておらず、冬の獣道を1日10キロほど歩き地区内の調査を行った。そんな苦労の中、国勢調査11回、他の調査64回、計75回の統計調査に協力してきた。（２００５年・12月広報）

わずか1年で流鏑馬の日本一に

グレゴリー・スチュワートは平成17年に本町のＡＬＴとしてオーストラリアから来日、日本武道を勉強しようと音更弓道協会に所属、以前から興味のあった流鏑馬の大会が芽室町川原牧場

で行われ、練習を見に行ったところ、牧場主から誘われ、4週間後の大会に出場することとなった。結果は勿論良くなかったが「落馬しなかっただけでも幸せだった」と、しかし1年後の春、恵庭市で行われた全国大会で見事優勝。大会の衣装は、弓道着にオーストラリアの国旗をあしらったお母さん手作りのものを着用し、練習を始めてからわずか1年で外国人として初の栄冠という快挙を成し遂げた。（2009・12月広報）

平成22年7月、5年間ALTとしての任期を終え、士幌町の皆さんにメッセージを残した。

「士幌町の皆さんへ

士幌町のALTとして5年間がたち、士幌町を発つときがきました。JETプログラムは5年以上ALTとしていることを許してはくれません。もし可能ならば私はここを離れたくはありません。私は北海道や士幌町、今までに出会った全ての生徒たちが大好きです。士幌にいる皆さんは私にとても親切で、私は、みなさんから受けた親切心や思いやりは私が返せることより多かった。

この5年間、私は士幌高原太鼓に入ったり、弓道で四段を取得したり、流鏑馬の北海道や東北の各地大会に参加し、全国優勝することができました。オホーツク海の流氷の下でスキューバダイビングをしたり、厚内の岸壁からパラグライダーをしたり、更別のママチャリ12時間耐久レースに参加したり、十勝川でイカダ下りにも参加しました。色々なクロスカントリースキーマラソンに参加したり、北海道の最高のゲレンデでスキーやスノーボードをしたり、大雪山で北から南へ3日間にわたり縦走したり、私が覚えているものより多くの山に登りました。

今年、私は45歳になります。人生の9分の1の5年間を士幌で過ごして、最も幸せな時間でした。日本で経験できたすべてのことに感謝申し上げます。

これからはいろいろな国で英語を教えながら北海道の良さも伝えていきたいです。

士幌町の児童・生徒たちへ

世界は広くて、すばらしいです。恐れないで観に行きなさい。」（2010年・9月広報）

士幌の未来を考える中学生模擬議会

広く町民の皆さんの声を反映させる「町民参加型の町づくり」の一環として2012年(平成24年)11月26日、役場3階の議場において「士幌の未来を考える」をテーマに中学生模擬議会が開催された。

模擬議会は3年生を対象として行い、生徒の中から議員を選出、人数の関係から前半・後半に分け、議長も生徒が努め、議員からは、「農業」「観光」「教育」「医療」などに関係する一般質問がだされるなど、本議会そのものであった。

生徒たちは、町議会の模擬体験を通じて、自分たちの生活と行政との関わりや、士幌町が直面する様々な課題について考えるとともに、自らの言葉で町長らと質疑応答を行うことにより、議会制民主主義、地方自治の仕組みを学び、士幌町の未来に向けた町づくりに理解を深めた。

一般質問の表題

「商店街の利用について」「士幌町の農業について」「小学校の統廃合について」「士幌町の農業とTPPとのかかわりについて」「士幌町の観光の取り組みについて」「士幌町の財政について」「士幌町の災害に対する取り組みについて」「士幌町国民健康保険病院について」「士幌町の都市整備について」「しほろ7000人のまつりについて」「老人の孤独死について」「TPPの参加について」「ゴミのポイ捨てについて」（2013年・1月広報）

全日本女子バレーボールチーム士幌町合宿

10月6日から11日までの期間、2012年ロンドンオリンピックで28年ぶりの銅メダルを獲得した全日本女子バレーボールチーム「火の鳥NIPPON」の眞鍋政義監督や木村沙織主将、新鍋理沙選手など選手14人、スタッフ10人が来町し合宿を行いました。

全日本女子バレーボールチーム

合宿期間中は、公開練習や紅白試合も行われ、特に8日に行われた紅白試合には町内外より1200人を超える観客が訪れ、世界で活躍する選手たちの強烈なスパイクやブロック、レシーブ、ラリーの応酬に熱い声援を送っていました。

また、紅白試合の前には、町内の小中学生を対象としたバレーボール教室も行われ、眞鍋監督や木村選手をはじめとする選手たちは、子どもたちと一緒に、パスやレシーブなどの基本練習

や簡易ゲームで汗を流し、最後に子どもたち全員とハイタッチをして交流を深めていました。（２０１３年・11月広報）

サッカー一級審判員に

日本サッカー協会が認定する審判員の最高位資格「一級」に町内在住の原尾英祐が合格した。現役の一級審判員は道内では11人目となり、道東ではただ1人。「今はＪＦＬの副審段階」というが、実績を積めば国内リーグの頂点、Ｊリーグでの主審も可能だ。

小学3年生のときにサッカーを始め、中学3年生まで競技を続けた。大学進学後間もなく、Ｊリーグのベガルダ仙台のボランティアとして再びサッカーと関わり、興味のあった審判員を志すようになった。

大学2年で三級、4年で二級を取得。卒業後に。若手審判員養成を目的とした日本協会のレフリーカレッジに合格。働きながら、毎月2回、東京で走り方や栄養学、メンタルなどを学んだ。

2年間のカリキュラムを終え、一級を受験したものの不合格。２００７年に実家を継ぐため士幌に戻った。一級の受験には各サッカー協会の推薦が必要で、道協会の年間推薦枠は3、4人。1～3次の実技試験がある。２００９年に再度受験したものの、2次となった道大学一部リーグの試合で失敗した。モチベーションは下がったものの、仲間の励ましもあり、気持ちを切り替えた。一級を受験できるのは3回まで、２０１３年、ラストチャンスが訪れた。10月の3次では自分でも納得できる内容。合格の吉報は12月中旬に届き、年末に埼玉で行われた高校生の大会に参加。ＪリーグやＪＦＬなどの担当を決める大事な研修だったが、夏に肉離れを起こした右足ふくらはぎを再び痛めた。両足の筋力のバランスの悪さも指摘された。道内にはＪＦＬのチームがないため、実際の試合には参加できないが、半年ごとに担当の見直しがあり、別の大会での結果次第ではＪ３などへの昇格の可能性もある。（平成26年3月6日勝毎）

馬主は士幌出身

２０１５年（平成27年）12月27日、中央競馬の1年を締めくくる第60回有馬記念で優勝したゴールドアクター（牝4歳）は士幌町出身の居城要が馬主だ。士幌町に本社を置く競馬向けの飼料会社「居城飼料」の会長。同日のレースでは8番人気だったが、ゴール前の直線で3番手から一気に1番目に躍りだし、優勝した。同馬は２０１３年11月、2歳時にデビュー。成績は今回の競走で13戦7勝、重賞はＧⅡアルゼンチン共和国杯に続く2勝目となった。

馬主を始めて50年近くになるが、有馬記念のような大きなレースで優勝したのは初めて。（平成28年1月3日勝毎）

車で5万キロ超

町内緑光在住の鈴木敏が、全国１０６２か所ある道の駅のスタンプラリーを制覇した。全国で2人目の快挙で、3月末に全国「道の駅」連絡会（東京）から認定証が贈られた。4年間で２２２日かけて全国を回り、車の走行距離は5万キロを超えた。

２０１１年に67歳で退任後、妻と旅行の計画を立てたときに道の駅に興味を持ち、一か所ずつ回りながら、「日本一周の旅をしよう」と決意した。２０１３年にスタートし、この年に道内を制覇、２０１４年に東北、関東地方、２０１５年に北陸、中部地方、２０１６年に九州、四国、中国、近畿地方を訪れ、同年6月21日に島根県美郷町にある「グリーンロード大和」に到着し、全国制覇を達成。

旅では1日に平均7、8か所の道の駅を訪れるため、事前に効率よく回れるルートを調べて最短距離で移動。２０１５年は4月末から7月上旬まで最長で64日間の旅をし、基本的には車中泊で過ごした。また、旅の出発は青森県と決め、九州や四国に行くときも青森から自家用車で日本列島を縦断。旅のため購入した車の走行距離は5万３４７キロに達した。（平成29年4月6日勝毎）

ペッパーくん特命係長に

2月1日、新・道の駅「ピア21しほろ」へ導入される人型ロボットＰｅｐｐｅｒ（ペッパー）ｆｏｒＢｉｚの辞令交付式が行われました。ペッパーは産業振興課特命係長しほろコンシェルジュとして、4月23日にグランドオープンする新・道の駅ピア21しほろにて、観光案内アプリを用いて士幌町の案内係を務めます。

ペッパー特命係長は4つの言語に対応しており、観光客の町内への誘導を目的として、飲食店など16の町内主要スポットを会話しながら紹介する。（２０１７年・3月広報）

「世界一大きな絵」が完成

ＮＰＯ法人アース・アイ

デンティティー・プロジェクツ（東京都）が主催する「世界一大きな絵２０２０」事業に、町内複式小学校の上居辺・佐倉・下居辺・新田・西上音更小学校の５校が取り組んだ。

本事業は、世界の子どもたちが、国や宗教・人種を越えて１枚の「世界一大きな絵」を完成させることにより、共通の喜びを分かち合い、情操を育み、平和に対する意識を育てていくことを目的に実施され、道教育委員会は、東京オリンピック開催に向けた取組として、平成31年12月までに道内全市町村における事業実施を目指している。５校では、平成29年度に子どもたちが１㍍×５㍍の布にそれぞれ学校、自分たちの手形や思いを描き、それを一枚に繋ぎ合わせた５㍍×５㍍の絵が今年５月に完成し、東京へ送られた。

この絵は、世界各国、日本全国で描かれた「世界一大きな絵」をさらに一枚の「世界一大きな絵」に繋ぎ合わせ、完成した絵を東京オリンピックの開催される東京で披露される。（２０１８年・７月広報）

30年の時を越えて・・・タイムカプセル開缶式

８月14日、タイムカプセルの開缶式が役場庁舎南側で行われました。このタイムカプセルは、開町70周年記念事業の一環として平成３年11月に埋設され、当時の姿を託し30年後の士幌町へ贈られたものです。

新型コロナウイルス対策により、参加者を十勝管内在住者に限定して開催されましたが、埋設当時の（故）小川寅之助町長からのメッセージ「30年後の士幌町の皆さんへ」や当時の児童生徒の作品などさまざまなものが収納されており、参加された方々は収納品を眺めながら思い出話に花を咲かせていた。

カプセルの収納品は、開町１００周年記念式典にあわせ、総合研修センターロビーで展示されます。（２０２１年・９月広報）

第七編　資料

SHIHORO

100th Anniversary

主 要 名 簿

◇村長・町長

累代	氏　　名	在職・当選年月日	退職年月日	在職期間
1代	秋田　浅吉	大正１０年　４月　１日	大正１５年１０月２７日	５年　６月
2代	近藤　義郎	１５年１０月２７日	昭和　３年　４月３０日	１年　６月
3代	石原　重方	昭和　３年　４月３０日	５年　８月１０日	２年　４月
4代	野沢　文治	５年　８月１５日	１１年　４月　９日	５年　８月
5代	上達小二郎	１１年　４月　９日	１４年　４月　８日	３年　０月
6代	古山　佐作	１４年　４月　８日	１９年　５月１６日	５年　１月
7代	諸戸大三郎	１９年　５月１６日	２１年１１月　７日	２年　６月
8代	吉田市太郎	２２年　４月１０日	２７年　２月１２日	４年１０月
9代	古山　佐作	２７年　２月１３日	３９年　２月１２日	１２年　０月
10代	飯島　房芳	３９年　２月１３日	５０年１２月　４日	１１年１０月
11代	後藤　辰雄	５１年　１月２４日	５７年１１月３０日	６年１０月
12代	飯島　和吉	５７年１２月　５日	６１年１２月　４日	４年　０月
13代	小川寅之助	６１年１２月　５日	平成１０年１２月　４日	１２年　０月
14代	小林　康雄	平成１０年１２月　５日	令和　４年　１月２７日	２３年　１月
15代	髙木　康弘	令和　４年　３月２０日	現　　在	

◇助役（二級町村制当時は上席書記と呼称した）

氏　　名	就任年月日	退任年月日	在職期間	備　考
小野寺喜三郎	大正１０年　４月　１日	昭和　３年　９月	７年　６月	上席書記
畠山亀輔	昭和　３年１０月	８年１２月	５年　２月	〃
梶原幸次郎	８年１２月	１２年　７月	３年　７月	〃
前原義人	１２年　７月	１４年		〃
辻　景造	１４年	１７年　５月		〃
浅川　巌	１７年　５月	１９年　６月	２年　１月	〃
坂本睦雄	１９年　６月	２２年　７月	３年　１月	助　役
八巻国夫	２２年　７月　８日	３０年　７月１１日	８年　０月	〃
平山繁男	３０年　８月　１日	４２年　２月１８日	１１年　６月	〃
後藤辰雄	４２年　６月１８日	５１年　１月１１日	８年　５月	〃
小川寅之助	５１年　２月１６日	６１年１０月３１日	１０年　８月	〃
宮部　功	６１年１２月１８日	平成　２年　８月　３日	４年　８月	〃
浪内一洋	平成　３年　１月　１日	１０年１０月３１日	７年１０月	〃
安村順七	１０年１２月１８日	１４年１０月　２日	３年１０月	〃
高井秀美	１４年１２月１４日	１９年　３月３１日	４年　４月	〃

◇副町長

氏　名	就任年月日	退任年月日	在職期間	備　考
高井秀美	平成１９年　４月　１日	平成２２年１２月１３日	３年　８月	副町長
柴田敏之	２２年１２月１５日	令和　２年　３月３１日	９年　４月	〃
髙木康弘	令和　２年　４月　１日	令和　４年　２月１７日	１年１０月	〃

◇収入役

氏　名	就任年月日	退任年月日	在職期間	備　考
尾形英治	大正１１年　４月　１日	大正１４年　８月　６日	３年　４月	
船戸石一	１４年　８月　６日	昭和２０年１０月２９日	６年　２月	
中尾伊勢夫	昭和２０年１１月２４日	４０年１１月２３日	２０年　０月	
沓沢　清	４０年１１月２９日	５６年１１月２８日	１６年　０月	
後藤金蔵	６０年　４月　１日	平成　元年　３月３１日	４年　０月	
浪内一洋	平成　元年　４月　１日	２年１２月３１日	２年　８月	
安村順七	３年　１月　１日	１０年１２月１７日	７年１１月	
大場英機	１１年　４月　１日	１５年　３月３１日	４年　０月	

※平成以降の名簿

村・町議会議員

（昭和62年4月26日執行）
昭和62年5月1日～平成3年4月30日(定数16)
加納一郎、坂本為吉、中島正一、矢坂希一、小椋　卓、今田鉄郎、山田登美雄、和田善吾、清水秀雄、清野要之進、鈴木洋一、中島康夫、朝井　剛、山中芳美、鎌田貞次郎、吉田喬一

（平成3年4月21日執行）
平成3年5月1日～7年4月30日(定数16)
加納一郎、志村光一、寺町隆男、今田鉄郎、矢坂希一、大西米明、中島康夫、吉田喬一、鈴木洋一、鎌田貞次郎、山田登美雄、山中芳美、中島洋一、國井興治、新庄晴也、清水秀雄

（平成7年4月23日執行）
平成7年5月1日～11年4月30日(定数16)
井原力也、寺町隆男、佐古準一、大西米明、志村光一、山田登美雄、國井興治、富田忠雄、伊藤　博、鈴木洋一、今田鉄郎、清水秀雄、山中芳美、森本民夫、佐藤国夫、中島洋一

（平成11年4月25日執行）
平成11年5月1日～15年4月30日(定数16)
杉原憲司、會田淳一、成田吉信、森本民夫、大西米明、井原力也、富田忠雄、志村光一、佐古準一、鈴木洋一、伊藤　博、船戸修司、國井興治、清水秀雄、寺町隆男、増田みよ子

（平成15年4月27日執行）
平成15年5月1日～19年4月30日(定数14)
加納三司、成田吉信、杉原憲司、和田鶴三、鈴木洋一、増田みよ子、清水秀雄、富田忠雄、森本民夫、大西米明、服部悦朗、佐古準一、高橋俊夫、井原力也

（平成19年4月22日執行）
平成19年5月1日～23年4月30日(定数13)
佐古準一、加藤宏一、富田忠雄、加納三司、和田鶴三、秋間紘一、細井文次、服部悦朗、高橋寿顕、大西米明、杉原憲司、清水秀雄、出村　寛

（平成23年4月25日執行）
平成23年5月1日～27年4月30日(定数12)
森本真隆、和田鶴三、細井文次、加納三司、飯島　勝、出村　寛、大西米明、清水秀雄、加藤宏一、秋間紘一、中村　貢、服部悦朗

（平成27年4月26日執行）
平成27年5月1日～31年4月30日(定数12)
森本真隆、細井文次、秋間紘一、大西米明、河口和吉、清水秀雄、中村　貢、加納三司、和田鶴三、出村　寛、飯島　勝、加藤宏一

（平成31年4月21日執行）
令和元年5月1日～5年4月30日(定数12)
大野　明、大西米明、牧野圭司、加藤宏一、森本真隆、中村　貢、矢坂賢哉、河口和吉、伊藤健蔵、清水秀雄、秋間紘一、曽我弘美

農業委員

（昭和62年7月改選）
昭和62年7月20日～平成2年7月19日(定数17)
板垣邦宏、片山　實、鈴木廣三、森本賢次、遠藤長三、大友初男、河村敏明、服部高雄、長瀬知之、森本慶一、加藤英雄、矢野明信、加納一郎、吉田喬一、山田登美雄、中山竹千代、森本　勝

（平成2年7月改選）
平成2年7月20日～5年7月19日(定数17)
鈴木廣三、森本賢次、遠藤長三、大友初男、河村敏明、服部高雄、長瀬知之、森本慶一、大野准弐、大野一郎、吉川民義、佐藤利夫、千葉公雄、鈴木廣三、加納一郎、中島康夫、矢坂希一、森本　勝、後藤義孝、長瀬知之

（平成5年7月改選）
平成5年7月20日～8年7月19日(定数18)
二川政義、矢野明信、服部高雄、足立順司、加藤英雄、森本慶一、大野准弐、大野一郎、吉川民義、佐藤利夫、千葉公雄、鈴木廣三、加納一郎、中島康夫、矢坂希一、森本　勝、後藤義孝、長瀬知之

（平成8年7月改選）
平成8年7月20日～11年7月19日(定数17)
佐藤利夫、足立順司、河村博道、大野准弐、千葉公雄、鈴木廣三、大野一郎、二川政義、吉川民義、吉田　勲、鎌田弘美、大野克彦、國井興治、鈴木洋一、成田吉信、髙橋正道、森本慶一

（平成11年7月20日～14年7月19日(定数18)
平田定之、二川政義、河村博道、鎌田弘美、千葉公雄、大野克彦、佐藤利夫、加納康司、瀬戸敏美、来原一敏、大野一郎、吉田　勲、森本慶一、國井興治、伊藤　博、成田吉信、寺町隆男、髙橋正道

（平成14年7月改選）
平成14年7月20日～17年7月19日(定数18)
山田真人、千葉公雄、大野克彦、平田定之、二川政義、山田敏明、瀬戸敏美、来原一敏、河村博道、加納康司、堀江幸博、熊谷賢一、大野一郎、成田吉信、寺町隆男、井原力也、富田忠雄、髙橋正道

（平成17年7月改選）
平成17年7月20日～20年7月19日(定数17)
樋口豊司、来原一敏、堀江幸博、鈴木年秋、藤内和美、平田定之、鈴木博文、山田真人、吉田　寛、山田敏明、赤間敏博、清水章宏、佐古準一、井原力也、篠原一廣、加納康司、髙橋正道

（平成20年7月改選）

平成20年7月20日～23年7月19日(定数14)
加納康司、藤内和美、樋口豊司、清水章宏、鈴木年秋、平田定之、山田敏明、吉田寛、赤間敏博、長屋義孝、渡邊睦実、鈴木博文、山田真人、髙橋正道(平成21年10月退任)、早坂孝夫(平成21年11月就任)
(平成23年7月改選)
平成23年7月20日～26年7月19日(定数14)
早坂寿順、佐藤輝実、清水章宏、藤内和美、中田義弘、足立雅人、山田英寿、鈴木年秋、渡邊睦実、吉田　寛、長屋義孝、鈴木博文、赤間敏博、早坂孝夫
(平成26年7月改選)
平成26年7月20日～29年7月19日(定数14)
渡邊睦実、山内徳彦、長屋義孝、森本耕二、後藤範雄、佐藤輝実、山田英寿、中田義弘、早坂寿順、河野富彦、渡邉一元、足立雅人、早坂孝夫
(平成29年7月改選)(定数14)
渡邊睦実、森本耕二、佐藤輝実、足立雅人、渡邉一元、山内徳彦、香川国彦、上山　靖、中田義弘、小野寺保、後藤範雄、河村繁美、篠原末治(平成30年7月退任)、七條光寛(平成30年9月就任)、遠藤政雄
(令和2年7月改選)(現職は令和3年4月現在)(定数14)
森本耕二、足立雅人、山内徳彦、渡邉一元、香川国彦、河村繁美、後藤範雄、小野寺保、岡部真吾、河田浩美、上山　靖、鎌田尚吾、七條光寛、遠藤政雄

教育委員

(現職は令和3年4月現在)
大口静夫(昭51・7～平11・12)／小川辰廣(昭51・10～平10・10)／尾形文夫(昭62・4～平11・3)／鈴木俊道(昭62・6～平12・9)／篠原育子(平元・10～13・9)／力石憲二(平10・10～27・3)／佐藤正一(平11・4～15・3)／太田助(平12・2～16・9)／田辺一則(平12・10～16・9)／宮本勢津子(平13・10～25・9)／神野光男(平15・4～25・3)／谷本仁志(平16・10～20・9)／庄司光恵(平16・10～24・9)／末永秀雄(平20・10～令元・9)／浅野澄江(平22・4～令2・9)／時光早苗(平29・10～現在)／堀江博文(平25・4～令3・3)／山下詩子(平27・4～現在)／原尾英祐(令元・10～現在)／太田小枝子(令2・10～現在)／土屋仁志(令3・4～現在)

選挙管理委員

(現職は令和3年4月現在)
三井　勉(昭55・4～平16・12)／小沢作内(昭59・12～62・7)／樋口孝夫(昭61・5～平12・12)／澤腰松治(昭62・7～平4・12)／真柳元保(昭63・12～平4・12)／浅野一男(平6・12～平20・12)／今木勝徳(平6・12～平8・1)／山岸　馨(平8・1～平16・12)／佐藤秀勝(平12・12～平28・12)／河江信一(平16・12～現在)／野久里美(平16・12～20・12)／白木裕一(平20・12～令2・12)／山崖厚子(平20・12～28・12)／吉田均(平28・12～現在)／波多野弘幸(平28・12～現在)／嶋田和子(令2・12～現在)

監査委員

(現職は令和3年4月現在)
鈴木洋一(昭63・5～平3・4)／丹野正行(昭63・4～平8・3)／山田登美雄(平3・5～7・4)／寺町隆男(平7・5～11・4)／高橋冨男(平8・4～16・3)／井原力也(平11・5～15・4)／増田みよ子(平15・5～19・4)／大風昭次(平16・4～24・3)／服部悦朗(平19・5～23・4)／出村　寛(平23・5～27・4)／佐藤宣光(平24・4～現在)／、森本真隆(平27・5～31・4)／河口和吉(令元・5～現在)

公平委員

(現職は令和3年4月現在)
中島敏夫(昭53・10～平4・3)／中尾　保(昭60・9～平6・3)／大野憲光(昭63・3～平14・9)／野久一郎(平4・3～18・9)／中尾　有(平6・3～13・3)／中谷秀子(平13・3～26・3)／横山正弘(平14・10～30・9)／加藤弘子(平18・10～30・9)／小坂美幸(平26・3～現在)／井上恵一(平30・10～現在)／岡崎睦子(平30・10～現在)

固定資産評価審査委員会委員

(現職は令和3年4月現在)
石水幸治(昭50・5～平14・5)／小坂浅一(昭59・7～平14・7)／島田　淳(昭63・7～平12・7)／高橋俊夫(平12・7～15・4)／、大野勝義(平14・5～23・5)／大野　斎(平14・7～20・7)／、吉田孝章(平15・5～27・5)／杉山誠(平20・7～令2・7)／宗原徳雄(平23・5～令2・5)／土生明美(平27・5～現在)／山田英寿(令2・5～現在)／廣長悦治(令2・7～現在)

国民健康保険運営協議会委員

(現職は令和3年4月現在)
神山　翁(昭和―38・7～52・6、平8・2～12・12)平野春雄(昭31・3～平12・6)／大口静夫(昭42・7～現在)／加納一郎(昭

48・7～53・6、平1・7～2・4、平3・5～5・6）／森本辰蔵（昭50・7～平19・6）／高橋貞夫（昭52・7～平8・1）／朝井　剛（昭58・7～平1・6）／宮野　博（昭60・7～61・5、平2・4～4・4）／照山卓爾（昭61・6～平10・3）／中山竹千代（昭61・5～平1・6）／中島正一（昭62・7～平1・6）／清野要之進（平1・7～3・5）／鎌田貞次郎（平1・7～3・5）／鈴木洋一（平3・5～11・6）／朝井康子（平3・7～28・6）／後藤義孝（平4・4～6・4）／今田鉄郎（平5・7～7・6）／成田吉信（平6・4～11・6）／清水秀雄（平7・6）／山中芳美（平7・7～17・6）／奥山　敬（平10・4～13・3）／高橋正道（平11・7～21・6）／篠原一廣（平11・7～19・6）／山田登美雄（平12・6～21・6）／神山裕充（平13・2～現在）／三井　勉（平13・7～25・1）／末永秀雄（平17・7～20・7）／加納　昇（平19・7～21・6）／三本善則（平19・7～21・6）／中村　貢（平20・8～23・6）／早坂孝夫（平21・7～27・6）／高橋幸一（平21・7～23・6）／河村幸芳（平21・7～27・6）／長屋久子（平21・7～23・6）／宗像純子（平23・7～25・6）／谷本仁志（平23・7～現在）／鎌田弘美（平23・7～25・6）／村橋政洋（平25・1～現在）／藤内雅江（平25・7～27・6）／矢野美紀子（平25・7～29・6）／佐藤弘夫（平25・7～現在）／加藤　智（平27・7～28・5）／篠原末治（平27・7～30・5）／丹治登貴和（平27・7～29・6）／竹迫真樹（平28・6～令2・4）／及川真弓（平29・7～令1・6）／髙橋典代（平29・7～令1・5）／七條光寛（平30・6～現在）／冨山富子（令1・5～現在）／上山由美子（令1・7～3・3）／篠原貴幸（令2・4～現在）／中波小夜子（令3・3～現在）

民生児童委員

（現職は令和3年4月現在）

田辺　博（昭36・6～平1・11）／川上てい（昭49・12～平4・11）／谷本幸枝（昭49・12～平10・11）／川上　進（昭52・12～平1・1）／伊藤芳伊（昭52・12～平10・11）／三木悦子（昭58・12～平4・11）／大友初男（昭58・12～平4・11）／後藤宏司（昭61・12～平4・11）／平松茂子（昭61・12～平19・11）／三上昌博（昭61・12～平7・11）／浅野一男（昭61・12～平19・11）／小坂浅一（昭61・12～平7・11）／山岸利雄（昭61・12～平5・10）／土生富夫（昭61・12～平19・11）／澤越松治（昭61・12～平10・11）／本田光一（昭63・4～現在）／白木美恵子（昭63・4～平19・11）／山本孝司（平1・4～19・11）／井原力也（平1・12～7・3）／今木節子（平4・12～7・11）／河太利夫（平4・12～22・11）／菱沼美和子（平4・12～25・11）／富田忠雄（平4・12～7・3）／山岸　勝（平5・10～19・11）／伊藤マサコ（平6・1～19・11）／柴山幸夫（平7・12～13・11）／足立好弘（平7・12～19・11）／佐々木克枝（平7・12～11・1）／藤谷利子（平7・12～13・11）／富田実（平7・12～19・11）／木澤人武（平10・12～13・11）／房谷和夫（平10・12～25・11）／樋口正寛（平10・12～現在）／稲葉サチ子（平11・1～令1・11）／矢野政凱（平13・12～25・11）／田辺　豊（平13・12～22・11）／島　友江（平13・12～25・11）／吉田明美（平13・12～現在）／田中照子（平19・12～28・11）／金　季代（平19・12～24・9）／七條由美子（平19・12～25・11）／大野　明（平19・12～31・3）／鈴木佳子（平19・12～28・11）／中井義雄（平19・12～25・11）／河江依子（平19・12～現在）／増田秀則（平19・12～29・12）／和田晴男（平19・12～現在）／神屋信勇（平22・12～現在）／鷲見安子（平22・12～令1・11）／前田美智子（平24・10～現在）／松井紀子（平25・12～現在）／神田敏子（平25・12～現在）／柚原紀代美（平25・12～現在）／佐藤妙子（平25・12～現在）／及川正義（平25・12～現在）／横山陽子（平25・12～令1・11）／藤内明子（平28・12～現在）／前寺由美（平28・12～現在）／河村敏弘（平30・1～現在）／川口太一（令1・6～現在）／辻　千鶴子（令1・12～現在）／岡部厚子（令1・12～現在）／土橋美恵子（令1・12～現在）／角田富美幸（令1・12～現在）

人権擁護委員

（現職は令和3年4月現在）

平田淳司（昭61・12～平1・11）／松浪浩之（昭62・5～平2・8）／後藤金蔵（平2・2～8・5）／鈴木晃一（平2・8～15・3）／勝矢良平（平8・5～16・10）／嶋田美代子（平15・4～30・6）／波多野候憲（平17・4～23・3）／小林　宏（平23・4～令2・6）／赤根和美（平30・7～現在）／山中雅弘（令2・7～現在）

主 要 統 計

◇戸数と人口

年	戸数（世帯数）	人　口	男	女	備　考
大正 10	795	4,304	2,262	2,042	
14	1,191	6,748	3,600	3,148	国勢調査
昭和 5	2,074	11,863	6,233	5,630	〃
10	1,328	8,013	4,131	3,882	〃
15	1,333	7,772	3,872	3,900	〃
20	1,257	7,983	3,912	4,071	人口調査（国）
25	1,509	9,167	4,619	4,548	国勢調査
30	1,695	10,181	5,519	4,962	〃
35	1,789	9,617	4,942	4,675	〃
40	1,829	8,581	4,330	4,251	〃
45	1,794	7,567	3,843	3,724	〃
50	1,899	7,028	3,478	3,550	〃
55	2,107	6,979	3,485	3,494	〃
60	2,066	7,044	3,441	3,603	〃
平成 2	2,129	7,149	3,463	3,676	〃
7	2,191	7,010	3,374	3,636	〃
12	2,271	6,839	3,278	3,561	〃
17	2,409	6,755	3,223	3,532	〃
22	2,458	6,416	3,063	3,353	〃
27	2,479	6,132	2,939	3,193	〃
令和 2	2,524	5,848	2,891	2,957	〃

◇村・町一般会計決算額

（単位：千円）

年	歳　入	歳　出	歳入のうち村・町税
大正 11	38	37	26
15	96	93	50
昭和 5	107	106	53
10	156	156	36
15	74	64	32
20	209	159	92
25	23,854	20,013	16,829
30	72,697	70,146	23,662
35	97,195	88,874	32,685
40	342,165	327,593	40,555
45	712,682	689,427	65,506
50	2,305,495	2,263,433	141,617
55	5,417,756	5,496,583	374,328
60	6,032,680	5,943,229	528,539
平成 2	8,576,067	8,516,107	642,580
7	10,851,758	10,760,275	768,240
12	12,326,965	12,040,936	796,582
17	6,774,238	6,639,630	913,884
22	7,324,280	6,963,324	914,978
27	7,532,581	7,307,114	1,045,949
令和 2	8,511,700	7,939,650	1,218,832

◇農作物作付面積

（単位：ヘクタール）

区分／年	米	小豆	大豆	菜豆	えん豆	大麦	小麦	裸麦	えん麦	亜麻	いなきび	とうもろこし	馬鈴しょ	ビート
大正 10	13	985	1,289	737	177	56	29	87	679	73	635	74	63	
昭和元	175	1,317	1,280	1,909	1,188	29	31	148	874	194	446	83	54	85
昭和 5	556	2,058	2,141	4,117	726	42	52	272	1,345	99	539	92		
10	225	1,345	2,080	2,330	1,041	36	92	191	868	220	317	79	191	170
15	139	1,443	2,198	2,986	394	73	94	173	1,209	573	1,150	148	439	
20	88	154	1,752	603	7	309	292	110	1,132	804	277	425	961	434
25	50	305	2,311	1,832	60	866	289	8	586	422	192	135	849	206
30	38	537	1,500	1,835	164	531	176	4	649	182	141	104	807	39

（単位：ヘクタール）

区分／年	大麦	小麦	豆類				馬鈴しょ	ビート	牧草	デントコーン	スイートコーン
			大豆	小豆	菜豆	合計					
昭和 35	560	87	1,838	677	1,690	4,205	1,111	332	1,063	291	
40	126	54	1,595	843	1,967	4,405	1,473	569	1,473	248	
45	15	285	349	902	2,139	3,390	2,270	1,173	2,037	232	
50	4	1,156	650	434	839	1,923	3,011	1,384	2,739	498	
55		1,608	574	585	725	1,884	2,778	1,950	3,971	984	
60		2,243	223	602	421	1,246	3,200	2,283	4,200	1,336	146
平成 2		2,492	109	585	612	1,306	2,990	2,315	4,150	1,361	312
7		2,104	126	791	615	1,532	2,800	2,361	4,500	1,520	406
12		2,352	293	879	513	1,685	2,539	2,345	4,680	1,670	443
17		2,451	426	910	614	1,950	2,063	2,360	4,650	1,660	339
22		2,610	270	777	549	1,596	2,150	2,230	3,831	2,495	571
27		2,440	551	806	536	1,893	2,076	2,210	2,875	2,181	597
令和 2		2,272	631	931	370	1,932	2,104	2,090	2,750	2,309	623

第八編　年表

SHIHORO

100th Anniversary

年　表

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと（概略）
明治 2	1869	十勝国を創設、河東郡を定められる
31	1898	美濃開墾合資会社の移民が中士幌に43戸入地
35	1902	下居辺に入植始まる
38	1905	中音更下台に入植始まる
39	1906	幹西2線33号付近に6戸入地（百戸開拓始まる）
41	1908	士幌西2線24号付近に入地者増加
大正元年	1912	長島治吉らにより上居辺入植開墾始まる
2	1913	堀田正恒佐倉農場を創設
		中音更西7線26号付近に6戸入地
8	1919	松室農場入植始まる
10	1921	音更村から分村『川上村』と称す
14	1925	川上村と川合村との区域変更により居辺の一部編入、帯広～士幌鉄道開通
15	1926	川上村を『士幌村』に改称
昭和 6	1931	本村から上士幌村を分村、士幌産業組合設立（JA 士幌町の前身）
8	1933	池田町と区域変更により下居辺の一部編入
9	1934	中士幌消防組創立
16	1941	士幌村警防団結成
		大東亜戦争始まる
19	1944	士幌村農業会創立（産業組合・農会を統合）
20	1945	日本無条件降伏
22	1947	警防団を改組し士幌村消防団発足
23	1948	士幌村農業協同組合創立
25	1950	士幌商工会創立
27	1952	十勝沖地震
28	1953	役場庁舎焼失
33	1958	皇太子殿下（現上皇陛下）が士幌村農協合理化でん粉工場をご見学
37	1962	町制施行を議決『士幌町』となる
		開基40周年町制施行記念式典挙行、士幌村史発行
38	1963	診療所を改築し町国保病院となる（24床）
43	1968	十勝沖地震
46	1971	町民憲章制定、開町50周年記念式典挙行
48	1973	「しほろ役場だより」発刊
51	1976	「議会だより」発刊
52	1977	第1回収穫感謝のつどい開催
54	1979	第1回しほろ7000人のまつり開催
56	1981	現役場庁舎・コミセン落成
		開基60周年町制施行20年記念式典挙行
		町史「士幌のあゆみ」発行、「町民文芸誌ぬぷか」創刊
62	1987	国鉄士幌線廃止
平成元年	1989	「ピア21しほろ」オープン

1991年（平成3年）以降

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成３	1991	1. 1	浪内一洋助役就任、安村順七収入役就任	1.17	ペルシャ湾岸戦争勃発
		30	農協青年部設立30周年記念式典		
		2. 8	士幌高校園芸コースでバイオ技術による	2.23	皇太子殿下「立太子の礼」
			イチゴ栽培		
		27	士幌町のイメージキャラクター大地くんに	27	多国籍軍イラク軍を制圧勝利
		27	元農業委員会長　佐藤直枝町民葬		
		3.24	道東プレカット事業協同組合設立認可	3. 2	札幌ユニバシアード冬季大会開催
		31	士幌本町商店街協同組合発足	15	帯広北バイパス平原大橋開通
		4. 7	北海道知事選挙（投票率87.46%）・	4. 1	牛肉、オレンジの輸入自由化スタート
			道議会議員選挙（投票率87.43%）	7	横路知事３選
		21	士幌町議会議員選挙（投票率94.91%）	12	北電泊村原発２号機運転開始
				26	自衛隊発足以来初の海外派遣
					（ペルシャ湾機雷除去）
		5. 1	行政福祉相談員を設置	5. 8	暴力団新法成立、消費税改正案成立
		13	開基70周年記念　記録映画「士幌物語」		
			制作ロケ開始		
		14	開基70周年記念　イチイの森植樹		
		14	士幌高校に「北邦樹木園」整備		
		18	開基70周年記念　遊水公園完成通水式		
		28	士幌町消費者協会結成総会		
		6. 1	士幌町役場４週６休制度を実施	6. 3	雲仙普賢岳で大規模火砕流発生
		6	元教育委員　髙橋　寿町民葬	12	国内初の脳死肝移植（東京女子医大）
		6	士幌小学校全国文教施設協会賞受賞	15	ピナトウボ火山噴火（今世紀最大）
		23	第1回 MTB フェスティバル開催	27	特急「スーパーとかち」運行開始
		7.13	開基70周年記念・夜間照明完成記念		
			24時間町民ソフトボール大会～14日		
		17	開基70周年記念ふれあいロックフェスティバル		
		29	開基70周年記念十勝管内少年野球大会～8月2日		
		8. 9	中国残留婦人　長瀬きぬ一時帰国		
		13	ケアハウス建設工事着工		
		9.13	全道一の長寿者纐纈きよの107歳に知事祝い状		
		14	士幌神社新築落成遷座祭	9.19	国道274号線全線開通
		15	開基70周年記念	22	道立帯広美術館開館
			十勝オールドボーイズ野球大会～23日		
		29	開基70周年記念 かぼちゃらんど in しほろ		
		10.3	開基70周年記念		
			NHK「あなたの町で夢芝居」公開録画		
		11.3	上田一男・勲五等瑞宝章受章（叙勲）	11. 5	宮澤喜一内閣発足
		15	開基70周年記念式典挙行		
		19	士幌町農協創立60周年記念式典		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成３	1991	12. 8	8年ぶりに菓子店　ブルボン開店	12.17	本道初の肝臓移植（北大付属病院）
		12.17	社会福祉法人士幌愛風会設立	26	ゴルバチョフ大統領辞任ソ連邦消滅
		20	横山食品道東工場落成祝賀会	27	国家公務員完全週休２日制実施
		20	士幌高原水芭蕉観賞コース造成		
平成４	1992	1. 1	第1回「ご来光を迎える集い」実施	1.26	大相撲　貴花田史上最年少優勝
		16	下居辺小学校校舎落成式		
		18	佐倉小児童10名千葉県佐倉小学校初訪問		
		2.15	士幌町文化協会創立20周年記念式典		
		3.31	士幌農協貯金400億円、	3.14	北海道新幹線「のぞみ」運転開始
			長期共済保有高700億円達成		
		31	開基70周年記念誌「続士幌のあゆみ」発行		
		4. 1	軽費老人ホームしほろ愛風苑		
			町デイサービスセンター開設	4.20	永住外国人の指紋押捺を廃止する
		1	協進、相互、稔駐在区統合「北一区」発足		改正外国人登録法成立
		22	町づくり記録映画「士幌物語」町民公開	22	北方領土ビザなし渡航第１陣が根室
		30	「町民便利帳」全戸配布		花咲港に到着
		5. 1	士幌町自然環境保全条例制定	5.1	官公庁が完全週休２日制を導入
		3	憲法副読本「新しい憲法の話」全戸配布		
		30	総合研修施設工事着工	28	藤山一郎国民栄誉賞受賞
		6.14	百戸地区戦没者慰霊碑除幕式	6.15	国連平和維持活動（PKO）協力法成立
		20	士幌然別湖線早期完成決起集会（士幌高原）		
		7. 6	士幌郵便局士幌高原風景入り通信日付印使用開始	7. 1	新千歳空港ターミナル開業
		23	横路知事ふるさと訪問で来町（ケアハウス視察）	18	日本エアシステム帯広～大阪便
		23	ほたるネットワークinしほろ講演会、		（１往復）就航
			遊水公園でほたる観賞会		
		26	第16回参議院議員通常選挙（投票率75.34％）	28	（故）長谷川町子国民栄誉賞受賞
		26	士幌高校専攻科		
			第１回米国研修セミナー壮行会（27日出発）	31	清流日本一に札内川（建設省）
		8. 2	第25回十勝地区		
			身体障害者スポーツ大会（総合グランド）		
		13	町史「続士幌のあゆみ」　一般配布		
		21	朝日新聞社主催		
			「朝日野生キャンプ」開催（士幌高原）		
		22	士幌高原ミズナラ巨木、十勝名木特選に		
			輝き、みどりうむ`92で表彰	9.12	宇宙飛行士毛利衛、米スペースシャトル
		9. 3	マレーシア農業青年一行20名来町		日本で初搭乗
		12	学校週５日制スタート	17	自衛隊カンボジア PKO 海外派遣
		10. 2	士幌高校ポテトクラブ NHK で全国放映	10. 2	十勝自然保護協会分裂
		13	士幌高原道路測量開始		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成４	1992	10.14	黒河内駐道大使視察来町		
		23	士幌変電所送電能力増強工事完成（能力２倍）	10.23	天皇陛下初の中国訪問
		27	士幌農協新田事業所開設30周年記念式並びに新築落成		
		27	道東プレカット工場起工式		
		30	戦時中援農隊として入った長野県辰野町との交流から士幌辰野会発足		
		11. 5	士幌高校第１回米国文化交流団出発～16日		
		26	士幌高校講堂落成記念講演会（古葉竹識プロ野球評論家）		
		29	田名部農林水産大臣来町		
		12.14	士幌町農産物集出荷施設野菜恒温冷庫完成	12. 8	十勝河口大橋（国道336号線）完成
平成５	1993	1. 1	新田、新栄駐在区合併、新栄駐在区となる		
		6	道内最高齢者纐纈きよの死去（109歳）	1.15	釧路沖地震発生（M7.7）
		9	農畜産物自由化絶対阻止士幌町総決起大会	27	大相撲　曙、史上初の外国人横綱に昇進
		25	農業振興基金第21回海外農事研修（最終回）		
		2. 4	商工婦人部創立20周年記念式典	2.26	（故）服部良一国民栄誉賞受賞
		3.31	道道本別新得線拡幅整備事業竣工（マイウェイ・アワーロードふれあいの道）		
		4. 1	道道本別新得線、清水－士幌間が国道274号昇格		
		4	町リサイクルセンター受入開始	4.23	天皇皇后両陛下沖縄を初訪問
		5	士幌高原ミズナラの木、「北海道の巨樹名木」で全道一と紹介		
		5. 1	町、70歳以上町内バス料金無料化	5.15	プロサッカーＪリーグ開幕
		15	常盤・中士幌新東団地分譲開始		
		29	生乳出荷5万トン、肉用牛3万頭達成記念パーティー		
		6. 2	朝鮮民主主義人民共和国農業視察団来町	6. 9	皇太子、小和田雅子妃成婚
		10	駐日ポーランド大使館商務参事官視察来町	9	第５回ラムサール条約締結国釧路会議開催
		29	士幌高原対策室設置		
		7. 2	上居辺小学校校舎落成式	7. 7	東京サミット開催
		8	道道本別新得線拡幅整備事業竣工式		
		8	士幌市街発祥の地記念碑除幕式	12	北海道南西沖大地震（M7.8）
		18	第40回衆議院議員総選挙（投票率89.59%）	18	衆議院選挙自民党過半数割る
		8.16	町国保病院に CT スキャン導入	8. 7	衆議院議長女性初の土井たか子選出
				9	細川護熙内閣発足
		9.17	平成5年度士幌町冷害対策本部設置	9月	コメ不足によりタイ米が輸入される
		30	横路知事、士幌高原道路未開通区間をトンネルで結ぶ方針を道議会で表明		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成５	1993	10. 7	道東プレカット士幌工場創業記念式		
		8	西上で熊捕獲		
		10	㈱北海道フーズ創立20周年記念式典		
		29	士幌地区労解散、士幌地区連合発足	11. 1	ヨーロッパ連合（EU）が発足
		11. 3	飯島和吉・勲五等双光旭日章受章（叙勲）	4	冷害による農作物被害過去最高
		13	札幌士幌会設立		（1兆2千億円）
		20	チセ・フレップ開設15周年記念パーティー	18	政府緊急外国産米輸入
		12.13	町議会、美濃市と姉妹提携議決	12.14	政府、コメ市場輸入部分開放を決定
平成６	1994	1.11	土木現業所士幌然別湖線	1.13	郵便料金13年ぶりに改正、封書62円
			ボーリング調査着手		⇒80円、葉書41円⇒50円
		2. 2	士幌地区国営草地開発事業決定	2. 4	初の純国産ロケット「H-11」
		11	士幌町名誉町民、飯島和吉、安村志朗、		１号機打ち上げ
			称号贈呈式		
		15	町で移動式炭焼がま設置		
		23	出先おびひろ会、士幌町交流懇談会士幌高原で開催		
		28	道道本別士幌線整備促進期成会発足		
		3 月	帯広開発建設部士幌除雪ステーション完成	3. 1	音更町木野地区に大型店進出
		3 月	広報しほろ 400号 発刊	20	日本航空帯広－名古屋線開設
		4. 1	役場機構改革　商工労働観光課新設ほか	4. 4	函館－ユジノサハリンスク間に定期
		1	役場土曜日閉庁完全週休２日制実施		航空路開設　１番機就航
		1	総合研修センターオープニングセレモニー	5	高速増殖炉「もんじゅ」初臨界
		30	美濃市との姉妹都市提携調印式（於、美濃市）	27	松本サリン事件発生
		4 月	新生活運動冠婚葬祭実行細目改正発足	28	羽田　孜内閣発足
				5. 6	英仏海峡のユーロトンネル開通
		6. 5	下居辺小学校初代教員、津田万三郎、		
			孫田嶋ルイス来訪		
		7	農協記念館局地気象情報システム発足	6.10	石狩湾新港が貿易港に指定
		17	消防団員　船戸勝美殉職公葬		
		30	士幌ヨーロッパ友好都市訪問	30	村山富市内閣発足
			（ポーランド）～7月11日		
		7.11	農業振興基金第１回農業関係リーダー	7. 8	日本初の女性宇宙飛行士
			海外研修団出発		向井千秋宇宙へ
		14	士幌農協記念館落成式	8	北朝鮮の最高指導者金日成首席死亡
		19	最高気温35.7度　この夏猛暑		
		8.12	祈雨祭挙行		
		17	美濃市長および花みこし贈呈団来町～19日		
		30	総合研修センター落成式	9. 4	関西国際空港開港
				9.21	ルワンダ難民支援に自衛隊を派遣

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成６	1994				
		10.12	関係４町による道道士幌然別湖線促進期成会発足	10.13	国道273号線三国峠通年開通
				13	大江健三郎ノーベル文学賞受賞
		11.25	音更川清流日本一と発表される	11.10	国道241号線帯広北バイパス開通
		25	十勝地区身体障害者福祉協会士幌町分会創立40周年記念式	21	衆議院小選挙区制成立
		27	士幌町長に小川寅之助３期連続無投票当選		
		12. 4	下居辺地区開拓100年記念式典		
		7	農協佐倉支所落成式		
		13	士幌高校農業特別専攻科開設20周年記念式典		
		19	町議会、安村志朗、飯島和吉を名誉町民推載議決	12.20	日本テレビで郵便物の爆発事件
平成７	1995	1.18	士幌町中央中学校校舎改築完成	1.1	世界貿易機関発足
		21	西上へき地保育所新築落成式	17	阪神・淡路大震災（M7.3）
		2.11	士幌名誉町民、飯島和吉、安村志朗、称号贈呈式		
		12	元町長　後藤辰雄町民葬	2.22	ロッキード事件の裁判終結（全員有罪）
		16	総合研修センター落成記念事業NHK 公開番組「小朝がまいりました」録画		
				3.20	地下鉄サリン事件
		4. 1	ヌプカの里に国産材展示施設完成（ニイ・ピリカ・チセ）		
		1	町国保病院訪問看護事業開始		
		9	北海道知事選挙（投票率83.61%）・道議会議員選挙（投票率83.59%）		
		23	士幌町議会議員選挙（投票率94.99%）		
		25	士幌町酪友会設立30周年記念式		
		29	淡中輝愛・勲六等単光旭日章受章（叙勲）		
		5.30	士幌高原道路未開削部分トンネル案環境保全審議会決定	5.16	オウム真理教の教祖　麻原彰晃逮捕
		5月	脳ドック検診事業開始		
		6. 1	帯広～旭川間都市間バス、三国峠経由路線、町内経由運行開始	6.21	全日空857便ハイジャック事件（日本で初めて強行突入）
		7.11	友好都市ポーランド、ニェポウミツェ市長一行来町～13日	7.10	帯広－広尾（十勝港）の自動車専用道路着工
		27	大韓民国国会議員視察来町	22	日航、帯広－福島線就航（季節運航）
		8.28	町交通無事故800日達成	8.30	兵庫銀行・木更津信用組合経営破綻
		9.22	名誉町民（飯島、安村）胸像除幕式	9. 6	坂本弁護士一家3人の遺体、発見
		10. 5	士幌町簡易水道水源井戸施設移転使用開始	10.30	東京地裁、オウム真理教に解散命令を決定
		10月	士幌高原カラー写真入り、広告付き官製ハガキ発売		
		11月	初の町営単身者向け住宅完成	11. 1	新食糧法施行（食管法廃止）
				1	「とかちプラザ」オープン

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成７	1995			11.30	道東自動車道清水ー池田間開通
		12. 9	農協佐倉事業所開設30周年記念式典	12.19	経営破綻の住宅金融専門会社7社に
		29	(故)岩橋清海・勲五等瑞宝章受章伝達(叙勲)		
		12 月	音更川河川敷に町営パークゴルフ場完成		
		12 月	西上音更小学校校舎改築落成		
平成８	1996	1. 9	町議会議員佐藤国夫　議員会・地区合同葬	1.11	スペースシャトル「エンデバー」
		18	士幌消防署中士幌分遣所落成式典		若田光一、飛行士として搭乗
		18	士幌消防団創設70周年記念式典	11	新十勝大橋開通
		22	下居辺里づくり委員会発足	11	第１次橋本龍太郎内閣発足
		2. 3	士幌町ことばの教室、	2.10	国道229号線豊浜トンネル
			ことばを育てる親の会発足10周年記念式典		岩盤崩落事故
		23	士幌町中央中学校改築落成、開校30周年記念式典		
		3.15	町交通事故死ゼロ1,000日達成	3. 5	駒ヶ岳54年ぶりに噴火
		19	士幌町中央中学校生徒会「生徒憲章」を制定		
		26	帯広警察署士幌駐在所西3線160から		
			同163に新築移転		
		4. 1	士幌タウンプラザ(商工会館併用)オープン		
		1	士幌商店街で協同組合、		
			スタンプ事業に磁気カード導入		
		1	町国保病院看護婦のナースキャップを廃止		
		4 月	町内農地総合情報地図上		
			表示マッピングシステム稼働		
		5.11	士幌デイサービスセンター土曜日開設開始	5.10	観測史上最高春の大雪
		25	清流パークゴルフ場、		(帯広で18㌢の降雪)
			中士幌の森パークゴルフ場オープン		
		29	町医療、保健、福祉対策検討委員会発足		
		6.24	士幌愛馬クラブ発足	6.29	韓国で百貨店倒壊
		7.20	中国華西村農業友好団来町～22日	7. 1	日本航空が帯広ー仙台線開設
		20	全道青年大会開催～21日		(10月末まで)
		24	十勝消費者大会開催		
		25	北海道公立幼稚園研究士幌大会開催～26日		
		8. 6	NHK 夏季巡回ラジオ体操会開催		
		26	道道士幌然別湖線道路公費支出差止		
			請求住民訴訟(ナキウサギ裁判)	9. 1	「北広島」「石狩」が市制スタート
		9.27	士幌西2線27号～上士幌間道路、道道昇格		道内33.34番目の市誕生
				3	(故)渥美清国民栄誉賞受賞
				20	東京行き定期フェリー就航、十勝港に
		10.16	農協下居辺事業所改築オープン		第１便入港
		20	第41回衆議院議員総選挙	10.20	衆議院選挙初の小選挙区比例代表制、
			(投票率81.83%)		自民党復調

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成８	1996	11. 3	有澤武一・勲六等瑞宝章受章（叙勲）	11. 7	第２次橋本龍太郎内閣発足
		8	老人福祉バス更新	24	JR 根室本線帯広市立体交差事業
		14	士幌町老人クラブ連合会創立30周年記念式典		（鉄道高架橋）完成
		12. 7	西上音更小学校改築落成記念式典		
		10	交通事故死ゼロの日1,269日で止まる		
		19	佐倉交流センター落成	12.17	在ペルー日本大使館公邸占拠事件～
		12 月	朝陽ふるさとづくりホタルの里整備事業完了		4月22日
		12 月	下居辺旧刑務所跡地に「創造の森」整備完了		
平成９	1997	1.14	北十勝２町衛生処理組合新ごみ処理施設火入れ式		
		2. 2	下居辺小学校開校90周年記念式典		
		17	士幌町農業機械士設立		
		27	上居辺青年団創立50周年記念式典		
		3.13	町、ヌプカ山麓国有林２か所	3.11	東海村動力炉で爆発により
			98.3㌶購入、ヌプカの森として管理		放射能漏れ発生
		31	北海道電力士幌営業所廃止	22	JR 振り子式新型特急
		31	札幌食糧事務所士幌支所、帯広に統合され廃止		「スーパーおおぞら」運行開始
		4. 1	役場に総合福祉対策室設置	4. 1	容器包装リサイクル法本格的施行
		11	ピア21しほろが「道の駅」に登録	1	消費税率3%から5%に引き上げ
				14	諫早湾の干拓のため堤防完全閉鎖
		5.13	町社会福祉協議会、配食サービス開始	5.27	神戸の連続児童殺傷事件で
		27	士幌高校に乗馬導入		地元中学生逮捕（酒鬼薔薇聖斗事件）
		6.13	町、インターネットホームページ開設		
		7.15	道道士幌然別湖線が道の「時のアセスメント」	7. 1	香港、中国に返還
			対象事業、地元説明会	1	日本航空が帯広－羽田線就航
		30	士幌農協商業複合施設「アスポ」オープン		
		8. 1	経済団体連合会豊田章一郎会長、		
			士幌農協施設視察	8.31	ダイアナ元英国皇太子妃が交通事故
		18	中国華西村友好視察団来町～21日		により死亡
		25	士幌高原道路促進大要請団道庁へ（4町260人）	9. 5	マザーテレサが死亡
		9. 8	元町議会副議長　伊藤豊蔵町民葬	25	日高、南十勝間国道236号全面開通
		21	NHK 公開番組「少年野球教室」	26	道東自動車道「池田－本別－足寄間」
					建設着工
				10.14	道庁の官官接待支出は違法と
		10.19	中士幌地区に		札幌地裁が判決
			「伝統農業保存伝承館」オープン	11.11	芽室町議会事務局長ら贈収賄で逮捕
		11.21	ケアハウス増築（20戸）落成式	17	北海道拓殖銀行経営破綻
		25	町体育連盟50周年記念誌発行	18	コンサドーレ札幌、
					Ｊリーグに昇格決まる
				24	山一証券が経営破綻

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成９	1997	12. 6	士幌町農民協議会組織結成50周年記念式典		
		7	士幌町婦人団体連絡協議会創立40周年記念式典 婦人から女性へ名称変更		
		13	池田茂一・勲五等双光旭日章受章（叙勲）	12.18	東京湾海底トンネルアクアライン開通
平成 10	1998	1.16	町火葬場改装「士幌聖苑」落成式		
		20	新田へき地保育所移転新築落成式		
		2. 9	山影博明、長野オリンピック、 スピードスケート500m 出場	2. 7	長野で冬季オリンピック大会開催
		16	士幌郵便局に全国３番目の太陽光発電施設	16	金融システム安定化関連二法案成立、 都銀21行に公的資金投入
		3.13	（故）三上昌博・勲六等瑞宝章受章（叙勲）		
		17	士幌消防署に高規格救急自動車納車		
		17	士幌町赤十字奉仕団発足		
		31	町、自然ガイド「高原の花」発行		
		4.10	元選挙管理委員、村議、井尾一男町民葬		
		11	西上地区で林野火災発生、国有林含む16㌶焼く		
		5. 1	十勝管内農業共済組合広域合併について 士幌町は不参加を表明		
		3	士幌高原で初の結婚式	5.27	大相撲史上初の兄弟横綱 （若乃花、貴乃花）誕生
		30	士幌高原道路促進地域住民総決起集会 （1,400人集合）		
		6.24	（故）平井康也・勲六等瑞宝章受章（叙勲）	6.13	室蘭港の白鳥大橋開通
		7.12	第18回参議院議員通常選挙 （投票率78.55％）	7. 1	足寄動物科学博物館オープン
				7	陸別町銀河の森天文台開設
				7	（故）吉田正国民栄誉賞受賞
				17	パプアニューギニア地震（M7.0）
				25	和歌山毒物カレー事件
				30	小渕恵三内閣発足
		8. 6	（故）中島光男・勲六等単光旭日章受章（叙勲）		
		8	士幌小屋チセ・フレップ20周年記念式典		
		8	中士幌開拓100年記念、中士幌を楽しむ会 「キッズウォーク80キロ」～10日		
		23	中学校援農隊の生徒ら53年ぶりに来町		
		28	大雨、３日間で140.5ミリ～30日		
		9.15	士幌北地区第八部稲荷神社80周年記念式典	9. 1	北海タイムス社自己破産により廃刊
		16	士幌小学校保存樹しだれ柳台風により倒損	16	台風五号猛威振るう、 広尾町350ミリ、大樹町315ミリ
				25	駒ヶ岳噴火（水蒸気爆発）
				31	北朝鮮で発射した弾道ミサイルが 三陸沖に着弾

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 10	1998	10. 1	北十勝２町環境衛生処理組合、新ごみ処理埋立地使用開始	10.1	（故）黒澤明国民栄誉賞受賞
		1	町「投げ捨て防止に関する条例」施行	30	向井千秋宇宙飛行士がスペースシャトルディスカバーで再飛行
		18	中士幌地区開拓100周年記念式典		
		11.29	士幌町長選挙（投票率84.03％）小林康雄初当選	11.20	帯広ステーションビル「エスタ帯広」自己破産
		12.13	士幌町連合青年団40周年記念式典		
		21	佐倉小学校改築落成		
平成 11	1999			1. 1	欧州連合単一通貨『ユーロ』の統合
		2. 9	士幌町馬事振興会20周年記念式典		
		10	上居辺麦作組合設立30周年記念式典		
		18	町、産業クラスター検討委員会発足（バイオプラントの実用化）	2.28	プロレスのジャイアント馬場死去
		3. 4	小学校でパソコンを使ったテレビ交流会（士幌・帯広・音更・上士幌各小）		
		6	士幌高原道路促進地域住民総決起大会		
		11	道道士幌然別湖線道路整備に係る検討評価調書公表（道建設部）		
		15	地域振興券発行交付	3.19	やまりん無断伐採で森林官免職
		17	道道士幌然別湖線「時のアセスメント」で未開通区間の工事取り止めを決定	21	熱気球「ブライトリング・オービター三号」20日間で世界一周
		19	西村道副知事、「時のアセスメント」方針決定経過説明来町	24	北大西洋条約機構（NATO）ユーゴスラビアを空爆
		4. 1	十勝北部地区農業普及センター、音更町から士幌へ移転業務開始		
		1	介護支援センター開設		
		1	下居辺小、山村留学受入		
		1	家庭排出用ゴミ袋「透明・半透明」に統一		
		8	商店街近代化事業竣工式		
		11	北海道知事選挙（投票率83.66％）・道議会議員選挙（投票率83.66％）		
		11	道議会議員選挙で本町出身「池本柳次」初当選		
		11	知事選挙で本町の無効票700票（士幌高原道路工事中止抗議行動）	4.14	山梨県のリニアモーターカー有人走行実験で時速525㎞を記録
		25	士幌町議会議員選挙（投票率94.40％）、初の女性議員誕生		
		5. 1	資源ごみ収集開始	5. 6	帯広厚生病院救命救急センター運用開始
		1	中士幌リサイクルセンター開設		
		13	地域振興策検討プロジェクトチーム発足	21	人工ふ化でトキ２世誕生
				24	通信傍受法成立（犯罪捜査）

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 11	1999	6. 8	給食センターで不祥事件発生		
		30	道道士幌然別湖線促進期成会解散		
		7.17	中士幌市街地活性化へ「ワークショップ」導入	7.23	全日空機ハイジャックで機長刺殺
		26	北十勝４町地域振興連絡協議会発足		
		28	堀北海道知事と北十勝4町町長・議長との懇談（高原道路代替振興策）		
		8. 2	町国保病院・総合福祉センター建設工事着工	8. 9	国旗・国歌法成立
				9.21	台湾中部大地震（M7.6）
				30	東海村核燃料施設で臨界事故
		10. 1	介護保険の要介護認定申請受付		
		1	託老所「ふれあいの家アカシア」開所	10.12	「氷点」の三浦綾子死去
		12. 9	士幌町職員倫理条例制定		
		11	北嶋一榮・勲六等単光旭日章受章（叙勲）		
		14	新屋内ゲートボール場オープン		
		26	佐倉小学校校舎改築落成記念式典		
		29	士幌まつり・イベント見直し決定（４大まつり）		
平成 12	2000	1. 1	コンピューター西暦2000年問題無事クリア	1.28	新潟で不明少女9年ぶり保護
		3. 6	士幌町老人福祉計画・介護保険事業計画案答申		
		10	士幌町児童環境づくり行動計画（チャイルドプラン）案答申		
		17	士幌町の当初予算額初の100億円突破（112億円）	3.27	ロシア大統領にプーチン首相
		27	士幌郵便局で「電子郵便局」開設	31	有珠山が23年ぶりに噴火
		4. 1	学校給食会計、私会計から公会計に移行	4. 1	チャイルドシート着用義務化
		1	公的介護保険事業開始	5	第1次森　喜朗内閣発足
		1	新過疎法で士幌町が過疎地域指定から外れる		
		5.11	士幌町口蹄疫防疫対策本部設置、町内４か所に消毒ポイント設置	5.11	本別町押帯で牛の口蹄疫発生
		6. 9	口蹄疫終息宣言	6.16	皇太后97歳で崩御
		12	下居辺交流施設着工	16	三宅島の火山活動開始、8月25日から島民避難開始
		16	士幌町情報公開条例制定、10月1日スタート		
		25	第42回衆議院議員総選挙（投票率、小80.79%、比80.73%）	27	雪印乳業、大量食中毒事件（大樹工場の脱脂粉乳が主原因）
				7. 4	第2次森　喜朗内閣発足
				19	大手百貨店「そごう」倒産
				19	新紙幣二千円札発行
		8.26	公園マスタープラン策定のためのワークショップ	21	沖縄サミット開催

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 12	2000	9. 1	しほろ清流パークゴルフ場公認コースとなる	9.24	シドニーオリンピックマラソン
		12	敬老会町内４会場での開催となる～20日		日本女子陸上初の高橋尚子金メダル
		10.10	子ども模擬議会開催	10.10	白川英樹ノーベル化学賞受賞
				21	コンサドーレ札幌 J1昇格
				30	高橋尚子国民栄誉賞受賞
		11. 3	小川寅之助･勲五等双光旭日章受章（叙勲）		
		3	中島敏夫・勲五等瑞宝章受章（叙勲）		
		3	町民文芸誌「ぬぷか」第20号（記念号）		
			発行、全戸配布		
		16	交通事故防止緊急対策本部設置、	11. 8	日本赤軍最高幹部重森房子逮捕
			死亡交通事故4件発生（10.5～11.16）	18	イチロー米大リーグ入団
		22	JA 士幌町でん粉工場再編整備決定		
		25	士幌高等学校創立50周年記念式典		
		12. 1	町内公共施設で禁煙タイム設定		
		9	国勢調査､人口7,000人を割る（速報～6,839人）	12.13	道央道で多重衝突（事故車82台）
		18	町国保病院、総合福祉センター竣工	14	音更町の人口4万人を突破
平成 13	2001	1.12	中音更地区交流促進センター完成祝賀会	1. 1	21世紀が始まる
		25	士幌町農業協同組合青年部40周年記念式典	26	中央省庁再編に伴い、北海道開発庁は
					国土省北海道支局へ
		2.16	山口副知事が士幌高原を視察	2. 9	ハワイ沖で宇和島水産高の実習船と
		18	町国保病院・総合福祉センター落成式		米原潜が衝突し沈没
		3 月	沓澤　清・勲五等瑞宝章受章（叙勲）	3. 3	サッカーくじ「toto」の受付開始
		3.24	士幌町交通事故防止町民総決起大会	24	芸予地震（M6.7）
				31	ユニバーサル･スタジオ･ジャパンがオープン
				4.26	第1次小泉純一郎内閣発足
		5 月	平野春雄・勲六等単光旭日章受章（叙勲）		
		6.13	開町80周年記念	6. 8	大阪教育大付属池田小学校
			劇団現代座「虹の立つ海」公演		児童殺傷事件
		7. 8	第39回北海道障害者スポーツ大会		
			フライングディスク競技会		
		14	開町80周年記念　パークゴルフ大会		
		15	開町80周年記念　2001しほろ競馬まつり		
		15	開町80周年記念　12時間耐久ソフトボール大会		
		19	開町80周年記念　映画「郡上一揆」上映		
		29	第19回参議院議員通常選挙	7.21	兵庫県明石市花火大会歩道橋事故
			（投票率、選68.23%、比68.22%）		
		8.26	新田地区開基･新田小学校開校70周年記念式典	8.13	小泉首相靖国神社参拝
		29	新でん粉工場竣工祝賀会	29	種子島宇宙センターより
					H- Ⅱ A ロケット試験機1号機打上げ

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 13	2001	9.24	開町80周年記念	9. 1	新宿歌舞伎町雑居ビル火災
			ロシア民族アンサンブル公演	4	東京ディズニーシーオープン
		26	しほろ温泉「プラザ緑風」落成記念式典	10	日本で初めて狂牛病に感染した乳用牛を発見
				11	アメリカ同時多発テロ事件
				30	高橋尚子ベルリンマラソンで世界最高記録優勝
		10. 1	しほろ温泉「プラザ緑風」オープン	10. 7	アメリカ軍によるアフガニスタン侵攻開始
		17	開町80周年記念　老人クラブ連合会交歓会		
		31	児童総合施設	10	野依良治ノーベル化学賞受賞
			「中士幌児童ステーション」落成記念式典		
		11 月	高山俊一・勲五等双光旭日章受章（叙勲）		
		11. 5	中士幌児童ステーション運営開始		
		6	バイオガスサミット2001開催		
		15	士幌町開町80周年記念式典		
		19	JA 士幌町創立70周年記念式典		
		24	開町80周年記念　シホロおとのわ祭り		
		29	開町80周年記念　NHK　FM ラジオ「フレッシュサウンド北海道」公開録音		
		12. 9	しほろ牛美味しいぞフェスティバル	12. 1	皇太子妃雅子さまが第１子をご出産（愛子内親王誕生）
		17	開町80周年記念「エコーはがき」全道郵便局で発売開始	11	中国 WTO（世界貿易機構）加盟発効
平成 14	2002	1.10	しほろビーフ・フォーラム「求められる産地の肉牛づくり」		
		15	BSE 対策で肉骨粉の焼却始まる	1.23	雪印牛肉偽装事件
		27	士幌町文化協会創立30周年記念式典	30	釧路太平洋炭鉱閉山
		2.18	町と郵便局が高齢者問題・不法投棄などで業務提携		
		3.31	トレーニングセンター全館閉鎖		
				4. 1	完全学校週5日制､ゆとり教育がスタート
				5.31	2002FIFA ワールドカップ開催（日・韓共同開催）
				6.19	鈴木宗男衆議院議員、あっせん収賄容疑で逮捕
		7. 1	広報しほろ 500号 発刊		
		7	「上居辺まつり」上居辺地区入植90周年事業		
		15	女性模擬議会		
		21	「プラザ緑風」日帰り入浴客10万人突破		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 14	2002			8. 5	住民基本台帳ネットワーク稼働
				20	丸の内ビルディング（新丸ビル）竣工
				9.17	小泉首相、日本の首相として初めて北朝鮮を訪問
		10. 2	台風21号本道上陸、町内でも河川・道路・農業施設等に被害	10. 8	小柴昌俊ノーベル物理学賞を受賞
				9	田中耕一ノーベル化学賞を受賞
		2	安村助役公務出張中に置戸町で交通事故死	15	北朝鮮に拉致されていた5人が24年ぶりに帰国
		4	（故）安村助役行政機関合同葬～5日		
		11.24	士幌町長選挙、無投票当選		
		12. 4	（故）安村順七・勲五等瑞宝章受章（叙勲）		
		5	小林町政2期目スタート		
		10	特別養護老人ホーム「ほほえみ」落成式		
平成 15	2003	1 月	鈴木清孝・勲五等瑞宝章受章（叙勲）	1.10	北朝鮮が核拡散防止条約（NPT）脱退
		14	釧路地方法務局上士幌出張所を釧路地方法務局帯広支局に統合	29	モンゴル人として初めて朝青龍が横綱に昇進
				2. 1	米国スペースシャトルコロンビア号空中分解事故、乗員死亡
		3.19	（故）中島正一・勲六等単光旭日章受章（叙勲）	3. 6	札幌 JR タワーグランドオープン
				19	米国・英国によるイラク侵攻作戦開始（イラク戦争開戦）
				24	「千と千尋の神隠し」第75回アカデミー賞長編アニメ映画賞受賞
		4. 1	役場機構改革　2課を廃止し8課へ	4. 1	郵政事業庁が日本郵政公社に
		1	町国保病院 一般病床60床⇒一般40床・療養20床	4	SARS（重症急性呼吸器症候群）が新感染症に指定
		13	北海道知事選挙（投票率77.95%）・道議会議員選挙（投票率77.93%）	25	六本木ヒルズがグランドオープン
		27	士幌町議会議員選挙で初の無投票	5.23	個人情報保護法が参議院本会議で可決成立
		5.20	新しいお菓子屋さん「しほろん」オープン	26	宮城県沖地震（M7.1）
		6.30	北部ブロック首長・議長検討会議で北十勝4町による合併枠組みは白紙に	6.19	早稲田大学スーパーフリー事件14人が準強姦罪で実刑判決
		7. 2	上士幌町から広域行政の協議の申し入れ	20	福岡一家4人殺害事件
		27	山本副知事が食品加工研修センター建設現場視察	7.21	世界水泳選手権で北島康介が世界新で2冠～24日
				26	宮城県北部連続地震（M6.4）
		8. 9	台風10号、農作物、道路橋りょう被害60箇所	8 月	北海道日本ハムファイターズ誕生
		14	士幌町ジャガイモシストセンチュウ対策本部設置		
		25	住基ネットワークシステム第２次サービス開始		
		31	中士幌小学校30年前のタイムカプセル開封		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 15	2003	9.10	敬老会、満75･80･88･90歳･金婚者を対象に		
		22	士幌町・上士幌町任意合併協議会発足	9.26	十勝沖地震（M8.0）
		9 月	グループホーム士幌ひまわり館開所		
		10.22	14年ぶりに新田地区で熊を駆除	10.10	最後の日本産トキ「キン」死亡
		11. 2	中士幌小学校開校100年記念号		
		11 月	中島康夫・旭日双光章受章（叙勲）		
			吉田喬一・旭日双光章受章（叙勲）		
		11.9	第43回衆議院議員総選挙	11.19	第2次小泉純一郎内閣発足
			（投票率、小74.90%　比74.85%）		
		29	食農フォーラム in しほろ開催	29	イラク日本人外交官射殺事件
		12. 8	ゆうすい団地分譲開始	12. 1	地上デジタルテレビ放送が東京、
		27	食品加工研修センター完成、		大阪、名古屋で開始
			住民見学会を開催		
平成 16	2004			1.12	山口県の養鶏場で国内79年ぶりとなる
					鳥インフルエンザ発生
				19	自衛隊イラク派遣
		2. 4	JA 女性部創立50周年記念式典	2 月	北海道警裏金事件
		7	中央中学校女子スケート部全国制覇		
		3.31	託老所廃止	3. 1	製造業への人材派遣が解禁
		4. 1	パークゴルフ場・屋内ゲートボール場	24	中国人活動家尖閣諸島に上陸
			有料化開始	4. 1	営団地下鉄と成田空港が民営化
		1	プラスチックゴミ分別収集開始	1	市町村合併により7府県で11市が誕生
		17	士幌町食品加工研修センター落成式		
				7	イラク日本人人質事件発生
		5.10	上士幌町一法定合併協議会設置を申し入れ	5.22	小泉首相が北朝鮮を再訪問
		31	全日本女子柔道強化合宿～6月5日まで		日朝首脳会談
				27	イラクで取材中の日本人ジャーナリスト
					2名殺害
		6.30	士幌町・上士幌町任意合併協議会解散	6. 1	佐世保小6女児同級生殺害事件
		7. 4	十勝女性大会士幌で開催		
		7	自主・自立検討会議を設置		
		11	第20回参議院議員通常選挙		
			（投票率、選74.10%、比74.07%）		
		20	道の駅ピア21しほろに	7.30	扇千景が女性初の参議院議長に就任
			オストメイト対応トイレ設置		
		8.10	下居辺運動公園パークゴルフ場		
			公認コースに認定	8.13	沖縄国際大学に米軍ヘリコプター墜落炎上
		13	障がい者支援の場検討		
			「すずらん親子交流会」開催	22	駒大苫小牧、北海道勢初の甲子園制覇

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 16	2004	9.23	本町で生産、奈良県で飼養されていた牛が BSE と認定。牛の移動制限	9. 3	WRC（世界ラリー選手権）日本初開催
		10. 1	町国保病院「医薬分業」に移行	10.20	台風23号西日本・東日本縦断
		8	本町における BSE 疑似患畜２頭		
		10	姉妹都市提携10周年記念、美濃子どもミュージカル士幌公演	23	新潟県中越地震（M6.8）最大震度7を記録
		13	BSE 疑似患畜の病性鑑定の結果陰性、移動制限解除		
		11 月	重森善之助・瑞宝単光章受章（叙勲）	11. 1	新紙幣発行
		14	NHK「にっぽん愉快家族」公開録画	2	プロ野球、東北楽天ゴールデンイーグルス50年ぶり新規参入決定
		26	身体障害者士幌町分会創立50周年記念式典	12. 1	東京国際空港第2旅客ターミナルビル開館
				26	スマトラ島沖地震（M9.1）インド洋大津波
平成 17	2005			1.3	第81回箱根駅伝、駒澤大学が平成初の4連覇達成
				2.16	京都議定書発効
		3. 1	士幌町自主・自立プランが検討会議でまとまる	3.16	島根県議会で「竹島の日」条例が成立
		3	西上加納農場で国内最大級50頭用ロータリーパーラー搾乳開始	20	福岡県西方沖地震（M7.0）震度6弱玄界島島外避難
		3 月	和田善吾・旭日双光章受章（叙勲）	25	愛知万博開幕
		4. 1	パートナーシップ事業地区担当管理職配置	4. 1	個人情報保護法全面施行
		7	（故）成田吉信関係機関・団体合同葬～8日	25	JR 福知山線脱線事故
				5. 1	北朝鮮が日本海に向けて短距離弾道ミサイルを発射
				6	日本プロ野球初のセ・パ交流戦開幕
				22	北海道新幹線工事着工
		6.26	士幌消防団創設80周年記念式典		
		7. 1	士幌町個人情報保護条例施行	7. 7	ロンドン同時爆破事件
		1	士幌町環境マネジメントシステム運用開始（LAS － E）	17	知床世界遺産登録
		3	芸術鑑賞「よしもとお笑いライブ in shihoro」	26	野口聡一スペースシャトル「ディスカバリー」で宇宙へ
		8.15	死亡事故死ゼロ500日達成	8.20	駒大苫小牧、夏の甲子園2連覇
		9. 1	役場に布回収ボックス設置		
		8	台風14号による大雨で士幌町初の避難勧告		
		11	第44回衆議院議員総選挙（投票率、小78.16%、比78.07%）	9.21	第3次小泉純一郎内閣発足
		10. 1	ゴミ有料化スタート		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 17	2005	11. 9	河野富剛・瑞宝単光章受章（叙勲）	11.15	紀宮内親王殿下ご結婚
				28	大相撲、横綱朝青龍史上初の7連覇
		12. 8	士幌ライオンズクラブ	12.22	1899年以来初めて死亡数が出生数を
			結成40周年記念で町へ福祉車両寄贈		上回る
		18	士幌町剣道連盟創立50周年記念大会	25	JR 羽越本線脱線事故
平成 18	2006			1.23	日本郵政株式会社発足
		2. 8	士幌町老人クラブ連合会		
			創立40周年記念ゲートボール大会		
		3. 3	交通事故死ゼロ700日達成	3.21	第1回 WBC
		19	町民のつどいで小川寅之助・		（ワールド・ベースボール・クラッシック）
			加納一郎に名誉町民の称号授与		日本優勝
		26	名誉町民レリーフ除幕式		
		4. 1	役場の機構にグループ制導入		
		1	在宅介護支援センターから	4.20	北海道ちほく
			地域包括支援センターに移行		高原鉄道ふるさと銀河線廃止
		3	士幌消防災害支援隊発足		
		5 月	町内3施設に除細動器導入	5.27	ジャワ島中部地震（M6.3）
		5.28	士幌ライオンズクラブ	5.31	自治体の収入役を廃止し、
			結成40周年記念式典		助役を副町長とする改正自治法成立
		6.18	百戸開拓100年記念式典	6.20	イラク派遣自衛隊に撤退命令
				30	日本の老齢人口率が世界最高、
		7. 2	第1回士幌町軟式野球連盟杯		年少人口率が世界最低
			少年野球大会開催	7. 5	北朝鮮がテポドン2号など7発の
		12	国道241号線中士幌15号で死亡事故、		弾道ミサイル発射実験
			死亡事故ゼロ830日でストップ	7月	梅雨前線豪雨災害
					（15～24日、九州、山陰、近畿、北陸）
		8.28	第1回新エネルギービジョン策定	8.25	福岡市海の中道大橋飲酒運転事故
			委員会開催		
		29	道の駅「しほろ温泉」登録伝達	9. 6	秋篠宮文仁親王に男児が誕生、悠仁様
					と命名
				26	第1次安倍晋三内閣発足
		10. 7	台風並みの低気圧の影響で被害～8日	10. 9	北朝鮮が地下核実験
		23	西上地域資源保全隊発足	26	プロ野球日本シリーズ、
					日本ハムが中日を破り日本一に
		11. 7	しほろ温泉プラザ緑風の新泉源	11. 7	佐呂間町竜巻災害
			掘削成功、湯温52度、湯量毎分300ℓ		
		21	士幌町長選挙告示、 無投票で小林町長当選		
		28	士幌町酪農振興協議会設立50周年記念式典	12.1	民法全局が地上波デジタル放送開始
		12. 5	小林町政3期目スタート		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 19	2007	1.28	「せわやき玉子」が第1回「食彩 in しほろ」を開催	1. 7	JR 石勝線トマム駅－新得駅間で17両編成の貨物列車が脱線
				9	防衛庁が防衛省に昇格
				19	北見市都市ガス漏れ事故3人死亡
				21	宮崎県知事選そのまんま東が初当選
		2.11	下居辺小学校開校100周年・下居辺保育所開所50周年記念式典		
				3. 6	夕張市、財政再建団体に指定
				25	能登半島地震（M6.9）
		4. 1	役場グループ制に係る機構改革で総務課、企画課が「総務企画課」へ		
		7	日中一時支援事業「すずらんの家」開所式		
		8	「子育て祝い金」制度スタート		
		8	北海道知事選挙（投票率71.79%）・道議会議員選挙（無投票当選）		
		17	士幌町議会議員選挙告示、無投票で13人の議員誕生		
		22	道の駅「しほろ温泉」に足湯がオープン		
		6.12	（故）朝井　剛・旭日単光章受章（叙勲）	6. 9	自衛隊鹿追駐屯地創立50周年記念式典
		25	東京士幌会伊東会長が東京士幌会20周年を記念ししだれ柳を総研前庭に植樹	24	苫小牧市で第58回全国植樹祭が両陛下を迎え開催
		7. 1	士幌高原ヌプカの里で「シ―ニックカフェ」オープン	7.16	新潟県中越沖地震（M6.8）最大震度6強
		29	第21回参議院議員通常選挙（投票率、選72.63%、比72.63%）		
		8.19	7000人のまつりで「YOSAKOIソーランキャラバン07」を開催		
		9.13	高橋寿顕､町議会と清澄常会の合同葬～14日	9.12	スマトラ島沖地震（M8.2）
		26	遠藤定雄・旭日単光章受章（叙勲）	26	福田康夫内閣発足
		10. 1	士幌、音更、上士幌の森林組合が合併、「十勝大雪森林組合」としてスタート	10. 1	郵政民営化スタート
				1	緊急地震速報スタート
		12. 2	士幌町女性団体連絡協議会50周年記念式典		
平成 20	2008	1.20	全十勝ミニスプリント選手権大会開催	1.11	新テロ対策特別措置法案が国会で再議決により成立
		26	上居辺地域資源保全隊発足		
		2.22	国道274号別線ルート整備促進期成会発足	2.19	イージス艦と漁船が衝突、漁船の乗組員親子が不明

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 20	2008	3.25	士幌幼稚園最後の卒園式	3.14	中国、チベット自治区ラサで暴動
		26	特定非営利活動法人（NPO 法人）上居辺地区へき地保育所開所記念式典	23	茨城県土浦連続殺傷事件
		4. 4	地域運営下居辺へき地保育所開所式	4. 1	後期高齢者医療制度スタート
		4	NPO 上居辺地域へき地保育所開所式		
		7	十勝管内初の認定こども園「なかよし」開園式		
		9	士幌南地域資源保全隊発足		
		10	下居辺地域資源保全隊発足		
		14	士幌北地域資源保全隊発足		
		15	中士幌地域資源保全隊発足		
		16	佐倉地域および北中地域資源保全隊発足		
		30	国道274号の調査設計に着手	5.12	中国・四川大地震（M8.0）
				6. 8	秋葉原通り魔事件
		7.14	道道本別士幌線橋梁中央連結式典		
		31	士幌高校と酪農学園との高大連携に関する協定書締結式	8.8	豪雨災害（北陸・近畿中心）
		9. 7	第22回発祥の地全国ゲートボール大会で士幌上居辺チームが優勝		
		8	士幌小屋チセ・フレップ30周年記念式典		
		14	「食（農業）と観光フォーラム」開催	9.15	リーマンショック
		30	農地・水・環境保全向上対策事業の全道研修会開催	24	麻生太郎内閣発足
		10. 7	高橋はるみ知事、認定こども園と食品加工研修センターを視察	10. 1	大阪個室ビデオ店放火事件
				7	南部陽一郎・小林　誠・益川敏英、ノーベル物理学賞受賞
				8	下村　脩、ノーベル化学賞受賞
				14	北洋銀行と札幌銀行の合併を認可
		11.23	北中音更小学校開校100周年記念式典		
		30	士幌小学校開校100周年記念式典		
		12. 7	西上音更地区開拓100周年・小学校開校90周年・事業所開設45周年記念式典		
		21	士幌町連合青年団創立50周年記念式典		
平成 21	2009			1.20	第44代米国大統領にバラク・オバマ就任
				23	遠藤　実国民栄誉賞受賞
				29	丸井今井百貨店が民事再生法の適用

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 21	2009	2. 1	しほろの冬まつりを作る会が「第1回しほろの冬まつり」を開催		
		6	名誉町民（故）安村志朗士幌町・士幌町農業協同組合合同葬～7日	2.22	映画「おくりびと」第81回アカデミー賞最優秀外国語映画賞受賞
		3.19	国の経済対策、定額給付金の受付を開始	3.13	海上自衛隊ソマリア沖へ派遣、海上警備行動発令
		26	特定非営利活動法人（NPO 法人）佐倉へき地保育所開所記念式典		
		4. 1	環境宣言の町を提唱		
		7	NPO 佐倉へき地保育所開所式		
		10	川西地区3へき地保育所が統合、川西へき地保育所「あおば」開所		
		5.12	マイマイガ駆除作業始まる		
		13	士幌建設業協会と災害協定締結	5.16	新型インフルエンザ国内発生確認
		18	新型インフルエンザ対策本部設置		
		30	名誉町民（故）飯島和吉町葬	21	裁判員制度スタート
				7. 1	森　光子国民栄誉賞受賞
		7.14	（故）飯島和吉に特旨叙位「正六位」を伝達	16	トムラウシ山遭難事故
				19	中国・九州北部豪雨～26日
		8 月	マイマイガが全町的に異常発生（2年目）		
		30	第45回衆議院議員総選挙（投票率、小80.21%、比80.19%）	8.30	総選挙で民主党が308議席を獲得し衆議院第一党となる
				9.16	鳩山由紀夫内閣発足
		10.23	医療従事者への新型インフルエンザの予防接種始まる	10. 1	道の14支庁を9総合振興局、5振興局に再編条例施行
		11. 2	士幌町初の「いじめを考えるこども会議」を開催		
		12. 5	士幌高等学校特別専攻科閉科記念式典	12.22	森繁久彌国民栄誉賞受賞
平成 22	2010	1.23	JA 士幌町青年部上居辺支部創立50周年記念式典	1. 1	日本年金機構がスタート
				12	ハイチ地震（M7.0）
				19	日本航空が経営破綻
		2.17	町内5つの青年団体が参加し第1回士幌町青年サミットを開催		
		3. 1	士幌高校農業特別専攻科が閉科		
		19	士幌消防署に高規格救急車導入	3.26	天安沈没事件
		30	道道本別士幌線の新ルート山景大橋が開通		
		4. 7	士幌町農業士会設立		
		15	士幌町地域活動支援センター「しほろほのぼのホーム」開所式		
		5.21	ホクレンくみあい飼料の新工場地鎮祭	5.18	宮崎県で東国原知事が家畜伝染病口蹄疫問題で非常事態を宣言
		29	名誉町民（故）加納一郎町葬		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 22	2010	6.18	町民プールが加温式になって リニューアルオープン	6. 8	菅　直人内閣発足
				13	小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還、 カプセル回収
		21	日ハムマスコット「B・B」が 「212物語」の撮影で士幌町を訪問		
		28	町内17か所目となる北中ふれあいサロンが開所、町内全域での開所となる	28	高速道路無料化社会実験の開始
		7. 2	子育てを考える集い士幌で初の開催		
		11	第22回参議院議員通常選挙 （投票率、選69.75%、比69.77%）	7.11	参議院選挙で民主党が惨敗、 3年ぶりのねじれ国会へ
		29	（故）加納一郎・旭日単光章受章（叙勲）		
		8. 1	第1回町民サッカー大会開催	8.22	チリ鉱山従業員33人奇跡の生還
		9.13	電算戸籍証明書交付開始	9. 7	尖閣諸島中国漁船衝突事件
		24	公営住宅における暴力団排除協定を 帯広警察署と調印		
		10 月	士幌小学校と中央中学校で 太陽光発電システムの運用開始	10. 6	根岸英一・鈴木　章ノーベル化学賞受賞
		10.29	広報しほろ 600号 発刊	10.15	音更町開町110年記念式典
		11. 3	佐藤東吾・瑞宝双光章受章（叙勲）	11.23	延坪島砲撃事件
		11 月	星屋好男・瑞宝単光章受章（叙勲）	28	米国外交公電ウィキリークス流失事件
		11 月	高田信悦・瑞宝単光章受章（叙勲）		
		11.23	士幌町長選挙告示、 無投票で小林町長当選		
		12. 5	小林町政4期目スタート		
平成 23	2011	1.12	士幌町商工会法制化50周年記念式典	1.23	宮崎県で高病原性鳥インフルエンザの 感染確認
		17	町国保病院にオストメイト対応トイレを整備		
		23	士幌町農業協同組合青年部50周年記念式典	25	第22回参院選で高松高裁が 最大5倍の「一票の格差」を違憲判断
				26	鹿児島県で 高病原性鳥インフルエンザの感染確認
				27	愛知県で 高病原性鳥インフルエンザの感染確認
				28	第22回参院選で一票の 格差をめぐる訴訟で福岡高裁が違憲判断
		2.11	JA士幌町青年部佐倉支部創立50周年記念式典	2. 6	大相撲八百長問題で春場所が中止
		3.16	町と道コカ・コーラ(株)「災害対応型自動販売機による協働事業協力」手交式	3.11	東北地方太平洋沖地震（東日本大震災） M9.0、最大震度7を観測
		20	第1回町民フットサル大会開催		高さ10m以上の大津波により 東日本太平洋沿岸に甚大な被害
				11	福島第一原発に地震・津波により炉心 溶融を伴う原子力事故

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 23	2011			3.12	長野県北部地震（M6.7）最大震度6強
				12	福島第一原発1号機建屋が爆発（水素爆発）放射性物質拡散
				14	東京電力の輪番停電（計画停電）開始
				15	静岡県東部地震（M6.4）最大震度6強
		4.10	北海道知事選挙（投票率67.79%）・道議会議員選挙（無投票当選）	4. 1	上野動物園でジャイアントパンダ「リーリー・シンシン」公開
		24	士幌町議会議員選挙、12年ぶりの選挙戦となる (投票率83.60%)	7	宮城県沖地震（M7.4）最大震度6強
				11	福島県浜通り地震（M7.0）最大震度6弱
		30	開町90周年記念 北海道日本ハムファイターズ野球教室		
		5.30	東日本大震災被災地支援に子育て支援カー「パンプキン号」東北地方へ	5.27	石勝線で特急おおぞら14号が脱線、トンネル内火災
		31	ホクレンくみあい飼料十勝工場竣工式		
		6. 5	町東日本大震災支援協議会被災地支援訪問(岩手県大槌町、山田町、宮古市)～9日	6. 1	「教育テレビ」から「NHK Eテレ」に名称変更
		10	士幌町福祉フォーラム2011開催		
		24	山中芳美・旭日単光章受章（叙勲）		
		29	開町90周年記念 全十勝少年柔道大会兼女子柔道選手権大会		
		7. 7	十勝全町村と帯広市「定住自立圏形成協定」を締結		
		9	開町90周年記念第31回しほろ夏祭り・花火大会	7.17	FIFA ワールドカップ女子ドイツ大会でなでしこジャパンが初優勝
		18	宮城県岩沼市へ被災地支援として4名の町職員を派遣～8月13日まで		
		24	下河原と仲良くする会40周年記念式典		
		8. 6	名誉町民（故）小川寅之助町葬		
		20	開町90周年記念 しほろ7000人のまつり（自衛隊音楽隊演奏会）	8.18	なでしこジャパン（女子サッカーチーム）国民栄誉賞受賞
		9.22	（故）小川寅之助・特旨叙位「従六位」伝達	9. 2	野田佳彦内閣発足
				15	本別町開町110周年記念式典
		10. 3	パスポート交付事務開始		
		10	開町90周年記念 体育の日タイムトライアル 2011 走り方教室		
		16	開町90周年記念・JA士幌町創立80周年記念 第12回しほろ収穫祭	10.29	道東自動車道の夕張 IC －占冠 IC 間が開通
		24	TPP 参加反対　全道統一キャラバン行動		
		11. 1	開町90周年記念　第54回士幌町文化祭～3日		
		15	士幌町開町90周年記念式典	11.11	野田首相が TPP 交渉参加を表明
		19	士幌町農業協同組合創立80周年記念式典		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 23	2011	12. 4	開町90周年記念　女性まつり		
		14	開町90周年記念		
			屋内コート開設 20周年記念 ゲートボール大会		
		17	開町90周年記念	12.17	北朝鮮の最高指導者、
			第36回北十勝剣道大会・町民剣道大会		金正日労働党総書記が死去
平成 24	2012	1. 9	開町90周年記念		
			第28回全十勝スピードスケート士幌大会		
		28	開町90周年記念　第35回町民スケート大会		
		29	開町90周年記念　第25回町民卓球大会		
		2. 3	開町90周年記念　記念コンサート		
			（ワンダードラムパフォーマンス）		
		8	「かみおりべ木と太陽の香るエコ交流館」落成式		
		11	JA士幌町青年部下居辺支部50周年記念式典	2.10	パナソニック、
		26	開町90周年記念		VHS ビデオ機の生産を終了
			士幌町文化協会創立40周年記念芸能発表会	2.29	東京スカイツリー完成
		3.11	開町90周年記念 みんなで教育を考える集い		
		17	士幌愛風会創立20周年記念式典・		
			小規模多機能施設「なごみ」落成式	31	携帯電話サービス mova 終了
		18	（故）清野要之進・旭日単光章受章（叙勲）	31	地上アナログ放送終了、
					全国で完全デジタル化が完了
		4. 5	士幌町生活安全推進協議会発足		
			（交通安全協議会と防犯協会の統合）	4.22	佐渡市で放鳥したトキからひなが誕生、
		29	三井　勉・旭日単光章受章（叙勲）		自然界では36年ぶり
		5.27	開町100周年に向けた森づくり事業	5. 5	日本のすべての原子力発電所が
			「遊水公園植樹祭」		稼働停止となる
		27	耐久馬術競技エンデュランス	22	東京スカイツリータウン開業
			「メイフラワーカップ」士幌・鹿追で開催		
		7 月	学校給食食材放射線モニタリング検査開始	7. 5	全面停止の原子力発電所が
		8	十勝シ―ニックバイウェイ連携フォーラム2012		2か月ぶりに稼働
		11	パラグアイ・ブラジル訪問～21日		
		31	第45回十勝地区		
			身体障がい者スポーツ大会開催	8.12	ロンドンオリンピック閉幕、
					日本は史上最多の38個のメダル獲得
				25	北海道新幹線新函館北斗－札幌間起工式
				9.11	尖閣諸島の魚釣島・南小島・
					北小島を国有化
				25	レスリングの吉田沙保里、
					世界選手権で優勝、世界大会13連覇

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 24	2012			10. 4	オスプレイ運用開始
				8	山中伸弥ノーベル生理学・医学賞受賞
				21	吉田育美ミス・インターナショナル世界大会でグランプリ
		11.12	野々村勝子・瑞宝単光章受章（叙勲）	11. 1	帯広市開拓130年・市制施行80周年記念式典
		26	中学生模擬議会	7	吉田沙保里国民栄誉賞受賞
				15	中国で習近平新体制発足
		12.15	一般国道274号士幌道路開通式		
		16	第46回衆議院議員総選挙（投票率、小70.49%　比70.49%）	12.16	総選挙で自公圧勝、政権奪還
				26	第2次安倍晋三内閣発足
平成 25	2013			1. 1	復興特別所得税導入（令和19年まで）
				16	アルジェリア人質事件
		2. 2	全国中学校スケート大会学校対抗女子で9年ぶり全国制覇	2.25	（故）納谷幸喜（元横綱大鵬）国民栄誉賞受賞
		4	パラグアイイグアス市訪問団来町、覚書協定		
		3.27	町と佐藤塗装工業との間で災害協定調印	3.25	広島高裁、第46回総選挙で一票の格差に広島1・2区無効判決
		4.18	（故）森本民夫・旭日単光章受章（叙勲）	4. 1	障がい者雇用率を2%に引き上げ
				13	淡路島地震（M6.3）最大震度6弱
				5. 1	ひがし大雪自然館開館式
				5	長嶋茂雄・松井秀喜国民栄誉賞受賞
		6.12	家畜伝染病防疫で町と建設業協会で協定調印	6.19	十勝ワイン50周年記念式典
		7. 7	第62回十勝女性大会開催		
		21	第23回参議院議員通常選挙（投票率、選63.71%、比63.71%）	7.25	TPP 交渉参加に抗議し TPP から北海道を守り抜く総決起大会
		8.10	第29回 道新杯十勝少年野球交流大会開催	8.12	高知県四万十市で日本国内観測史上最高気温41.0度を観測
		30	TPP 講演会「TPP 交渉の動向と私たちの生活」	16	田中将大、日本プロ野球新記録、21連続勝利投手
				17	JR 函館本線で JR 貨物の貨物列車が脱線
				9.19	大沼駅構内で貨物列車が脱線
		10. 1	コミュニティバス試験運行開始～31日まで		
		6	全日本女子バレーボールチーム「火の鳥NIPPON」士幌町合宿～11日まで		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 25	2013	10.26	北海道フーズ設立40周年記念式典		
		11. 9	姉妹都市の美濃市と町が災害時相互応援協定を締結	11.20	最高裁大法廷、第46回総選挙、選挙無効の請求棄却
		16	士幌小屋チセ・フレップ設立35周年記念式	28	広島高裁岡山支部、第23回参議院選挙、違憲かつ無効との判決
		28	士幌町発祥の地中士幌太陽光発電所竣工式	30	日本傷痍軍人会解散
		12. 1	士幌町防災メールシステム運用開始	12. 4	ユネスコ、「和食」無形文化遺産に登録
平成 26	2014	1.30	JA 士幌町女性部創立60周年記念式典		
		2. 3	コミュニティバス試験運行～28日まで	2.10	JR 北海道レール検査データ改ざん問題で刑事告発
		3.20	下居辺長寿会創立50周年記念式典	3. 5	31番目の国立公園「慶良間諸島国立公園」誕生
				9	若田光一、日本人初の国際宇宙ステーションの船長に就任
				27	袴田事件再審開始決定
				31	「笑っていいとも」放送終了
		4. 1	コミュニティバス通年試験運行開始	4. 1	消費税が5%から8%に増税
				1	防衛装備移転三原則制定
				6	三陸鉄道全線運行再開
				12	JR 江差線（木古内駅－江差駅間）廃止
				13	熊本県多良木町の農場で鳥インフルエンザ（H5亜型）検出
				30	内閣官房に内閣人事局が設置
		5. 1	TPP から地域（しほろ）を守る緊急集会	5. 3	美濃市市制施行60周年記念式典
		13	佐藤末子・瑞宝単光章受章（叙勲）		
		25	第1回100年の森づくり植樹祭開催		
		6.23	町国保病院長を懲戒免職処分（後日和解）	6.11	電力の小売りを自由化する改正電気事業法成立
		7.10	高橋はるみ知事町内視察	7. 1	集団的自衛権の行使を認める憲法解釈の変更を閣議決定
		25	移住体験住宅（オリベ）初入居セレモニー		
		31	戸川よし乃「士幌町食と観光大使」に任命		
		8.17	美濃市との姉妹提携20周年記念事業「あかりのオブジェ作成教室」開催	8.20	広島市土砂災害
		9.22	町とコープさっぽろとの間で「高齢者見守り協定」調印	9. 8	テニスの全米オープンで錦織圭が準優勝
				27	御嶽山が噴火
		10. 8	士幌水防拠点現地説明会	10. 7	赤﨑　勇・天野　浩・中村修二ノーベル物理学賞受賞

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 26	2014	11. 7	姉妹都市提携20周年記念事業	11.22	長野県北部地震（M6.7）最大震度6弱
			「美濃市訪問ツアー」～9日	27	ユネスコの無形文化遺産に
		25	士幌町長選挙告示、 無投票で小林町長当選		「和紙日本の手漉和紙技術」が登録
		12. 1	下居辺小さな図書館開館（プラザ緑風内）		
		5	小林町政5期目スタート		
		14	第47回衆議院議員総選挙	12.24	第３次安倍晋三内閣発足
			（投票率、小70.11%　比70.11%）		
平成 27	2015	1.20	（故）佐古準一・旭日単光章受章（叙勲）	1.15	日本・オーストラリア経済連携協定発効
				23	大相撲、横綱白鵬が史上最多の33回
					目幕内優勝、歴代最多記録
		2. 5	死亡事故「0」1000日達成	2. 2	自衛隊、猛風雪により羅臼町へ災害派遣
				20	「とかち広域消防事務組合」
					協議書調印式
		3.25	下居辺保育所閉所式	3.13	「トワイライトエクスプレス」運行終了
				14	寝台特急「北斗星」定期運行終了
		4.10	士幌町障がい者総合施設開所式	4. 1	介護保険改正により
		12	北海道知事選挙（投票率70.89%）・		特養ホーム入所基準が要介護3以上に
			道議会議員選挙（投票率70.53%）		
		21	士幌町議会議員選挙告示、		
			無投票で12人の議員誕生		
				5.29	口永良部島新岳で爆発的噴火、
					噴火警戒レベル5
		6. 1	ふるさと寄附感謝特典事業開始	6.17	公職選挙法改正案が成立、
					選挙権年齢18歳以上へ
		7.27	士幌町公式フェイスブック運用開始		
				28	TPP 交渉から十勝を守り抜く
					7.28緊急集会
		8.27	（故）森本辰藏・旭日単光章受章（叙勲）	8.23	臨時寝台特急「北斗星」運行終了、
					ブルートレインの歴史に幕
				9.19	安全保障関連法案が可決成立
		10. 1	士幌消防団初の女性消防団員	10. 5	大村　智ノーベル生理学・医学賞受賞
			（甲山理恵子・加納さやか）	6	梶田隆章ノーベル物理学賞受賞
		1	戸川よし乃「とかち観光大使」に任命		
		11.22	士幌町中央中学校開校50周年記念式典		
		28	上居辺地区開基100周年・事業所開所		
			65周年・保育所開所60周年記念式典		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 27	2015	12. 5	佐倉地区開基100周年・佐倉小学校開校100周年・佐倉事業所開所50周年記念式典	12.20	札幌市の路面電車ループ運転の開通
平成 28	2016	1. 6	地域おこし協力隊、３名採用	1.15	軽井沢スキーバス転落事故
		27	新「道の駅」が国土交通省による重点「道の駅」に選定		
		2.15	町と十勝地区トラック協会、緊急時における輸送業務で協定調印	2.4	日米など12か国、環太平洋連携協定（TPP）に署名
		28	北中音更小学校閉校記念式典	5	幕別町合併10周年記念式典
				7	北朝鮮が長距離弾道ミサイルを発射
		3.24	北中音更小学校最後の卒業式・修了式	3.26	北海道新幹線、新青森駅ー新函館北斗駅間開業
		28	子ども交流センター「こもれび」落成式		
		30	とかち広域消防局開所式		
				4.14	16日の2回熊本地震（14日 M6.5、16日 M7.3）何れも最大震度7
		5. 9	総合研修センターに「トレーニング室」オープン	5.22	帯広信用金庫100周年記念式典
				27	オバマ米国大統領、現職として初めて広島を訪問し献花
		6.12	北海道日本ハムファイターズオフィシャル後援会認定証授与式	6.8	113番目となる新元素（ニホニウム）と命名発表
		20	士幌高校と町商工会が共同開発した「シーベリーサイダー」の完成を報告		
		23	士幌高校生模擬議会		
		28	（故）高山俊一・叙位「正六位」伝達		
		7.10	第24回参議院議員通常選挙（投票率、選66.84%　比66.84%）		
				26	相模原障害者施設殺傷事件
		8. 2	「新道の駅」士幌町地域創造発信拠点施設新築工事安全祈願祭	8. 3	北朝鮮が「ノドン」と見られる中距離弾道ミサイルを発射
		31	台風10号により士幌町災害対策本部設置、町内一部地域に避難勧告を発令、西上橋の落橋、音更川堤防浸食など被害多数	21	リオ五輪閉幕、過去最多41個のメダル獲得
		9. 1	全国農業協同組合連合会畜産生産部ET 研究所開所式（北中音更小後）	9. 3	藤井聡太史上最年少四段（中学生プロ棋士誕生）
		22	馬鈴しょ収穫支援緊急対策実施～25日まで		
		10. 6	（故）鎌田貞次郎・旭日単光章受章（叙勲）	10. 3	大隅良典ノーベル生理学・医学賞受賞
		6	重点道の駅選定授与式	20	伊調　馨国民栄誉賞受賞
				21	鳥取県中部地震（M6.6）最大震度6弱
		11.28	老人クラブ連合会創立50周年記念、戸川よし乃コンサート	11. 4	地球温暖化対策の「パリ協定」発効
				8	米大統領選トランプ氏が勝利

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 28	2016	12. 9	コンサドーレ札幌サッカー教室	12.21	政府、高速増殖炉原型炉「もんじゅ」
		15	金森史公・瑞宝双光章受章（叙勲）		の廃炉を正式決定
		18	士幌ソーランの会	22	新潟県糸魚川市大規模火災
			しほろジャガイモ√7000ターボ解散式	31	男性アイドルグループ「SMAP」解散
平成 29	2017	1.27	十勝管内農業共済組合組織	1.25	大相撲、稀勢の里が横綱に昇進、
			再編確認調印式		日本出身力士19年ぶり
		2. 1	ペッパーくん特命係長辞令交付式		
		5	士幌町商工会青年部50周年記念式典		
		14	十勝地方道新地域見守り活動協定締結式		
		3.21	町と㈱ゼンリン、災害時における地図	3.10	韓国の朴槿恵大統領、弾劾により罷免
			製品等の供給等に関する協定調印	27	那須湯元スキー場の雪崩、生徒・教師
		27	農業共済事業町営43年を振り返る会		全員が巻き込まれる
		31	士幌町農業共済事業の廃止		
		4. 1	一般国道274号（中音更基線219－士幌		
			東1線243）を道道本別士幌線に変更		
		11	（故）森本　勝・特旨叙位「従六位」伝達	4.10	帯広信金東支店、
		11	新道の駅「ピア21しほろ」プレオープン		重さ2トンの看板が歩道に落下
		23	新道の駅「ピア21しほろ」グランドオープン		
		5.10	町と㈱セブンイレブン、地域見守りおよび		
			災害時の物資供給等に関する協定締結		
		25	第25回環境自治体会議		
			しほろ会議～26日	6. 1	札幌市 LGBT の
					「パートナーシップ制度」導入
				15	共謀罪法成立
				26	将棋の最年少プロ棋士、藤井聡太
					四段、新記録となる29連勝達成
				7. 5	九州北部豪雨
				9. 9	桐生祥秀が100m で日本人初となる
					9秒98をマーク
		10.12	（故）寺町隆男・旭日単光章受章（叙勲）		
		22	第48回衆議院議員総選挙		
			（投票率　小70.49%　比70.51%）		
		11. 5	「中士幌『幻の寺町』を語る会」中士幌	11. 1	第4次安倍晋三内閣発足
			公民館にて開催		
		27	町と町商工会・町と信金士幌支店、		
			地域見守り活動に関する協定締結		
		12. 3	士幌町女性団体連絡協議会	12. 5	将棋棋士の羽生善治が史上初の
			60周年記念「士幌女性まつり」開催		永世七冠を達成
		22	町と日本郵政㈱との間で		
			「包括的連携に関する協定」締結		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 30	2018				
				2. 1	中学生棋士、藤井聡太四段が中学生初の五段に昇段
				13	羽生善治・井山裕太国民栄誉賞受賞
				17	藤井聡太五段、中学生初の六段に昇段
				25	平昌冬季五輪メダル15個、冬季最多
		3.10	北斗産業㈱70周年記念式典	3. 4	辻　一弘アカデミー賞で最優秀メイクアップ＆ヘアスタイル賞
		28	西上橋開通	17	JR 北海道根室本線羽帯駅廃止
		4. 1	株式会社 CheerS 設立	4. 1	小学校で道徳を教科化
		1	農園付住宅居住開始		
				5.18	藤井聡太六段、史上最年少で七段に
		6.22	観光案内所	6.12	米朝が史上初の首脳会談
			「いいとこしほろ」オープンセレモニー	18	大阪府北部地震（M6.1）最大震度6弱
		26	NHK 連続テレビ小説「なつぞら」	28	平成30年7月豪雨～7月8日まで
			町内で撮影、下居辺小の児童が見学	29	働き方改革関連法案が可決成立
		7. 1	町国保病院、療養病床を廃止し、一般病床50床へ		
				7. 2	羽生結弦国民栄誉賞受賞
		6	大口靜夫・瑞宝双光章受章（叙勲）	6	オウム真理教事件、死刑囚13人のうち7人に死刑執行
				23	埼玉県熊谷市で日本の気象観測史上最高気温41.1度を記録
				26	オウム真理教事件、残りの死刑囚6人に死刑執行
		8.16	士幌町開拓120周年記念平昌オリンピックメダリスト、高木美帆トークショー	8. 5	北海道150年記念式典
		9. 6	胆振東部地震により対規模停電（ブラックアウト）発生　町内震度3　災害対策本部設置、避難所開設	9. 6	北海道胆振東部地震（M6.7）最大震度7
		15	胆振東部地震で厚真町に職員派遣～19日	6	苫東厚真発電所が停止、道内全域で停電が発生
		16	士幌小屋チセ・フレップ40周年記念式典	8	大阪なおみ、テニス全米オープンで日本人初優勝
				9	岐阜県内養豚場で豚コレラウイルス検出、熊本県以来26年ぶり
				16	歌手の安室奈美恵が引退
		10.21	中村仁美「士幌町食と観光大使」に再任	10. 1	本庶　佑ノーベル生理学・医学賞受賞
		11. 5	鈴木洋一・旭日双光章受章（叙勲）		
		8	W 杯スピードスケート初選出、小野寺優奈、町を表敬訪問		
		13	士幌町長選挙告示、 無投票で小林町長当選		

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
平成 30	2018	11.21	町、町商工会、JA 士幌町、帯広信金、士幌町結婚支援事業連携協定締結	11.19	ゴーン日産自動車会長を有価証券報告虚偽記載容疑で逮捕
		12. 5	小林町長6期目スタート		
		9	西上音更小学校閉校式	12.26	日本、国際捕鯨委員会（IWC）からの脱退を正式発表
		16	吉川農林水産大臣、農協記念館・馬鈴薯集出荷貯蔵施設を視察	30	TPP11が発効
		22	士幌町連合青年団創立60周年記念式典	1.3	熊本地方地震（M5.1）震度６弱
平成 31	2019	1月	防犯カメラ運用スタート（町内10か所）	16	大相撲、横綱稀勢の里引退を発表
		2. 5	中士幌麦作組合設立50周年記念式典	2. 1	日本・EU 経済連携協定が発効
		10	下居辺小学校閉校式	21	北海道胆振地方中東部地震（M5.8）最大震度6弱
		24	新田小学校閉校式		
		28	広報しほろ 700号 発刊	22	小惑星探査機「はやぶさ2」が「リュウグウ」への着陸成功
		3.22	新田・西上音更小学校最後の卒業式・修了式、下居辺小学校最後の修了式	3.16	JR 北海道、直別・尺別・初田牛駅の3駅を廃止
		23	佐倉へき地保育所最後の卒園式・修了式	23	JR 東日本山田線宮古－釜石間、三陸鉄道リアス線として運行再開
		4. 7	北海道知事選挙（投票率72.26%）・道議会議員選挙（無投票当選）		
		21	士幌町議会議員選挙、8年ぶりの選挙となる（投票率78.80%）		
				4.30	第125代明仁天皇が退位（譲位）
令和元				5. 1	皇太子宣仁親王が第126代天皇に即位、「令和」に改元
		5.27	「柏樹学級」スタート（柏樹大学・大学院を統一）	4	大樹町の民間ロケット「MOMO3号機」宇宙空間への発射成功
		6.17	農畜産物加工研修施設「しほろキッチン」オープン	6.13	ホルムズ海峡タンカー攻撃事件
				18	山形県沖地震（M6.7）最大震度6強
				30	日本が国際捕鯨委員会（IWC）を正式に脱退
		7.21	第25回参議院議員通常選挙（投票率　選64.47%　比64.47%）	7. 1	日本の商業捕鯨が31年ぶりに再開
				18	京都アニメーション放火殺人事件
		8. 1	道の駅ピア21しほろ来場者100万人突破	8. 4	全英女子オープンで渋野日向子が初優勝
				9.30	51年間続いたポケベルのサービスが終了
		10. 1	総合運動公園パークゴルフ場「れいわパーク」仮オープン	10. 1	消費税率が8%から10%に引き上げ（軽減税率を導入）
		8	十勝士幌ふる里会10周年記念祝賀会	9	吉野　章ノーベル化学賞受賞

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
令和元	2019	10.31	W杯スピードスケートメンバー、士幌出身、森本拓也・小野寺優奈、町を表敬訪問	10.12	令和元年東日本台風（台風19号）により甚大な被害
				13	ラグビーW 杯日本代表史上初の8強
				31	首里城で火災、主要な建物が全焼
		12.21	西上音更小学校100周年の集い ～地区運営協議会主催～		
令和 2	2020			1. 9	中国、武漢市原因不明の肺炎患者新種のコロナウイルスと発表
		1.15	（故）矢坂希一・旭日単光章受章（叙勲）	15	道内7空港民営化スタート
				16	国内初の新型コロナ感染者確認
				20	米国大統領にバイデン氏就任
				28	北海道で初の新型コロナ感染者確認
				28	道が北海道新型コロナウイルス感染症対策本部を設置
				30	WHO、国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態に該当と発表
				30	政府が新型コロナウイルス感染症対策本部を設置
				31	英国が EU（欧州連合）を離脱
		2. 1	第40回全国中学校スケート大会 学校対抗女子7年ぶり3度目の優勝 ～4日	2. 1	新型コロナウイルスを「指定感染症」「検疫感染症」に指定
				11	WHO、新型コロナウイルスを「COVID －19」と命名
		18	士幌町麦作連絡協議会創立50周年記念式典		
		23	佐倉小学校閉校式、佐倉保育所閉所式	26	政府、イベント中止等要請
		27	新型コロナウイルスにより町内小中学校一斉臨時休校	27	政府、学校臨時休業要請、十勝で初の感染者を確認
		28	新型コロナウイルスにより士幌高校臨時休校	28	北海道独自の「新型コロナウイルス緊急事態宣言」
		29	町内施設等の利用中止		
		3. 2	第1回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	3.11	WHO、感染拡大についてパンデミック（世界的流行）と表明
		19	第2回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	14	改正新型インフルエンザ等対策特別措置法施行
				24	新型コロナにより、東京五輪、パラの１年程度の延期決定
				29	志村けん新型コロナ感染により死去 国内での新型コロナ感染者は2,178名、死亡者57名
				31	WHO、世界全体の感染者数80万人、
		4. 1	第3回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	4. 1	死者4万人を超えたと発表

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
令和 2	2020			4. 7	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言（1都1府5県）
		4.15	第4回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	13	日本ハム新本拠地、北広島ボールパーク起工式
				16	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言（全都道府県）
		17	第5回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	17	JR 札沼線（学園都市線）道医療大駅－新十津川駅間運行終了
				17	政府、全世帯に布製マスク2枚配布開始
				4.30	国内での新型コロナ感染者は14,281名、死亡者432名
		5. 1	第6回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	5. 4	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言延長
		15	新型コロナウイルスに関する町内イベント検討会議（年内の中止・延期を決定）	14	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言区域変更（1都2府1道4県）
		15	第7回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	20	夏の全国高校野球選手権大会中止を発表
		18	特養家族会がオンライン面会用タブレットを町に寄贈	21	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言区域変更（1都1道3県）
		26	第8回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	25	新型コロナウイルス感染症緊急事態解除宣言
		30	町内施設利用を順次再開		
		6. 1	学校再開		
				6.29	WHO、世界全体の感染者数1千万人を超えたと発表
				7. 1	レジ袋の有料化がスタート
				3	九州豪雨～8日　死者不明者77人
				12	民族共生象徴空間「ウポポイ」開業
		7.15	認知症になりにくいまちづくり宣言	16	藤井聡太七段、最年少タイトル獲得（棋聖）
		8. 3	第9回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	8.11	WHO、世界全体の感染者数2千万人を超えたと発表
				28	安倍内閣総理大臣持病の再発により辞任の意向を表明
		9.25	子育て世代包括支援センター「マミールーム Yosugaーよすがー」オープン	9.16	菅　義偉内閣発足
				21	WHO、世界全体の感染者数3千万人を超えたと発表
		28	第 1 回開町100周年記念事業検討委員会		
		10. 1	第10回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	10. 9	北海道寿都町核ごみ調査応募書提出・神恵内村応募表明

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
令和２	2020			10.20	WHO、世界全体の感染者数4千万人、死者110万人を超えたと発表
				30	国内での新型コロナ感染者は100,392名、死亡者1,755名
		11. 2	第11回新型コロナウイルス感染症対策本部会議		
		9	第12回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	11.15	東アジア地域包括的連携（RCEP）協定に署名
		11	JA士幌町青年部設立60周年記念で道の駅にオブジェ「ペコポちゃん」設置		
		17	大野准弋・旭日単光章受章（叙勲）	12. 8	WHO、世界全体の感染者数6,500万人、死者150万人を超えたと発表
		24	第13回新型コロナウイルス感染症対策本部会議		
		12.25	第14回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	30	国内での新型コロナ感染者は230,304名、死亡者3,414名
令和３	2021			1. 7	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言（1都3県）8日～
		1.24	JA士幌町青年部設立60周年記念感謝状贈呈式		
				13	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言区域変更（1都2府8県）
				30	国内での新型コロナ感染者は386,742名、死亡者5,654名
		2月	町、防災ラジオを各家庭に設置	2. 2	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長
				2	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言区域変更（1都2府7県）
				13	福島県沖地震（M7.3）最大震度６強
				17	新型コロナウイルス感染症ワクチン接種開始
				26	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言区域変更（1都3県）
		3. 1	第15回新型コロナウイルス感染症対策本部会議		
		4	第2回開町100周年記念事業検討委員会	3. 5	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長
		18	町、ヤマト運輸と包括連携協定締結（災害時物資輸送、見守り）	18	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言終了、21日まで
				31	国内での新型コロナ感染者は474,773名、死亡者9,162名
		4. 1	下水終末処理場稼働開始		
		30	第16回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	4.23	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言（1都2府1県）25日～
				5. 7	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長および区域変更（１都２府３県）
		5.17	第17回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	14	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言区域変更（1都２府１道5県）

年　号	西　暦	士幌を中心としたできごと		社会のできごと	
令和３	2021			5.21	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長および区域変更（1都2府1道6県）
				28	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長
		5.30	第18回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	6.17	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長および区域変更21日～（1県）
				31	国内での新型コロナ感染者は744,487名、死亡者12,967名
		6.29	第３回開町100周年記念事業検討委員会		
		7. 2	（故）今田鉄郎・旭日単光章受章（叙勲）	7.8	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長および区域変更12日～（1都1県）
				23	東京2020オリンピック開会式
				27	北海道･北東北の縄文遺跡群世界遺産に登録決定
		8. 2	第19回新型コロナウイルス感染症対策本部会議	30	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長および区域変更8月2日～（1都1府4県）
		9	開町100周年記念パークゴルフ大会		
		14	士幌町開町70周年記念タイムカプセル開缶式	8. 8	東京2020オリンピック閉会式
		22	音で楽しむ～しほろ7000人のまつり～	17	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長および区域変更20日～（1都2府10県）
				24	東京2020パラリンピック開会式
				25	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言区域変更（1都2府1道17県）
				9. 5	東京2020パラリンピック閉会式
				9	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言期間延長および区域変更13日～（1都2府１道15県）
		9.30	第４回開町100周年記念事業検討委員会	28	新型コロナウイルス感染症緊急事態の終了～9月30日
		10.17	100年の森づくり看板除幕式	10. 4	岸田文雄内閣発足
		31	第49回衆議院議員総選挙（投票率小72.84%比72.84%）	15	音更町開町120周年記念式典
		11.21	士幌町農業協同組合創立90周年、事務所新築落成記念式典		
		30	士幌町開町100周年記念式典	11. 1	新500円硬貨発行

編　集　後　記

令和３年、士幌町は大正10年に音更村から分村して開町100周年の節目を迎えました。

新型コロナウイルスの影響で催しなどの開催方法が制限される中ではありましたが、様々な記念事業に取り組んでまいりました。その記念事業の一環として「士幌のあゆみ 開町100年」の記念誌を発刊できますことを心よりうれしく思うところであります。

今回の記念誌作成にあたり「士幌のあゆみ」「続 士幌のあゆみ」を参考にしながら、継続性を持たせるように刊行の準備をし、主に開町70周年からの30年間の出来事を掲載しております。この記念誌が100周年の歴史を振り返り、開町２世紀に向けての一歩となれば幸いです。

結びに記念誌発刊に当たって、記念誌作成に終始ご尽力いただいた編集委員および御協力いただいたすべての方々に心より厚く御礼申し上げます。

委員長　髙木康弘

士幌のあゆみ 開町100年

発　行　日　2022年(令和４年)３月31日
編　集　物　「士幌のあゆみ 開町100年」編集部
発　行　者　士　幌　町
発　行　所　士幌町役場　総務企画課
〒080-1292 北海道河東郡士幌町士幌225
TEL 01564-5-2211　FAX 01564-5-4304
編　　集　十勝毎日新聞社
〒080-8688　北海道帯広市東1条南8丁目2
TEL（代表）0155-22-2121　FAX 0155-25-2700
印　刷　所　東洋株式会社
帯広市西10条南９丁目７　TEL 23－1321

編集スタッフ

委員長　髙木　康弘
専従編集員　山中　雅弘
編集委員　吉田　静二
編集委員　土生　明美
編集委員　神田　敏子
事務局　亀野　倫生（総務企画課長）
小野寺　務（教育課長）
坂井　現（総務企画課主幹）
長岡　直美（広報広聴担当主査）
戸水　祐也（広報広聴担当）